

ステインの弟子は多重☒刃☒格で雄英生

岡の夢部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーロー殺し「ステイン」の弟子である「乱刀 刃羅」はステインの指示で雄英高校に入学することには!?

雄英高校に入学した刃羅は、ステインの志を持ちながらもヒーローを目指して日々を過ごしていく。

クラスメイトの緑谷達と。

目次

# 1	刃は旅立つ	1
# 2	実技試験	10
# 3	入学	18
# 4	戦闘訓練	27
# 5	襲撃	42
# 6	襲撃その2	51
# 7	体育祭に向けて	69
# 8	体育祭その1	78
# 9	体育祭その2	89
# 10	体育祭その3	101
# 11	体育祭その4	113
# 12	体育祭その5	128
# 13	名前	147
# 14	職場体験	157
# 15	師と友の狭間で	167
# 16	貫く信念	186
# 17	不穏な気配?	201
# 18	期末に向けて	221
# 19	期末試験その1	233
# 20	期末試験その2	251
# 21	夏休みに向けて	265
# 22	プール	282
# 23	林間合宿の始まり	302
# 24	飯、風呂、おやすみ!	334

# 2 5	『個性』を鍛えろ！	350
# 2 6	女子会！	375
# 2 7	そして世界は動き出す	394
# 2 8	ぶつかり合う意志と敗北	415
# 2 9	掴み損ねた人を探して	437
# 3 0	邂逅と真実	452
# 3 1	様々な『おわり』	470
# 3 2	刃を探して	485
# 3 3	絶対に諦めない	503
# 3 4	それでも傍にいて欲しい	516
# 3 5	居場所	534
# 3 6	入寮	543
# 3 7	必殺技を編め	557
# 3 8	ごめんなさい！	576
# 3 9	俺と戦えや！	592
# 4 0	夜中に響く音……？	603
# 4 1	ナイトパニック	617
# 4 2	その頃……	632
# 4 3	芯なる硬さ	645
# 4 4	仮免試験開始！	657
# 4 5	それは助けられない理由にならない	672
# 4 6	二次試験『雄英にいる！』	685
# 4 7	試験終了！	700
# 4 8	高みの見物	718
# 4 9	3年生	735

#54	突撃	825
#53	会合	805
#52	初日	788
#51	面談	770
#50	戦ってみようよ!	753

#1 刃は旅立つ

森の中で2つの影が飛び交う。

キーン！キキーン！

1人は目元を包帯で隠し、赤のマフラーを巻いている男。背中に刀を携え、数本のサバイバルナイフを全身に装備している。

「ふん……大分動きは良くなったな」

「そいつはどうもだぜえ！」

相手は銀色の長髪を後ろで纏めた和服の女性。帯にはナイフや刀、剣、鎌、槍などを模したバッジが大量に付いている。

女性とは思えない口調で笑みを浮かべながら、男に飛び掛かる。

男はサバイバルナイフを抜き、女性を向かい討つ。

「だが……ハア……まだまだ荒い」

「うおい!？」

女性の顔に向かってナイフを投げつける男。

それをギリギリ顔を傾けて躲す女性。

「っ！女性の顔にナイフを向けるとは！傷が付いたら責任取れるのですか!?!結婚してください!！」

「やかましい」

「ぬお!?!ちえい！容赦ありまへんなあ。もう少し手加減せえっちゅうねん。死んでまうわ!！」

「死ねばその程度だったということだろうが……」

「うわっち!?!もう！少しはうら若き少女の未来を考えて頂けませんの!?!」

声を出すたびに話し方が変わる女性。しかし、それだけでなく動きや顔つきも変わっているように見える。

それを男はメンドくさいとばかりにため息を吐きながらナイフを振るう。

女性はそれをギリギリで避けながら、殴る蹴るを繰り返すが、全て男に躲されるか受け流される。

「むうく！なんだよお!！」

「ハア……んこまでだなあ」

プクくと頬を膨らませ目尻に涙を浮かばせる女性を見て、男は構えを解きナイフを仕舞う。

そして背を向けて歩き出す。それを女性は慌てて追いかける。

2人は寂れたマンションの中で向かい合って座っていた。

ズゾゾゾくとカップラーメンを食べながら。

「ズズズ……ハア……おまえこれからどうするつもりだ？」

「ズズ……ンマンマ……ん？どうするって……お師匠と一緒にいるつもりだけど？」

「ズズズ……ハア……このまま俺と居ても、おまえの成長には繋がらん。もつと様々なものを見て、俺の教えが正しいかどうか知らねばな。俺は盲信するだけの奴は好かん」

「ズズ……ンマンマ……と言ってもさあ……ヴィランのどこ行ったって変わらなくない？学校も行っていないし」

女性はとある理由で中学校から学校に通っていない。

男が代わりに勉強を教えていたのだ。

「ズズズ……ハア……俺に考えがある」

「ズズ……ンマンマ……考え？」

「ズズズ……ハア……お前を雄英高校に入れる」

「ズズ……ンマンマ……頭壊れたの？お師匠」

中学校すら出てない女性が高校に進学できるわけがない。

女性はジト目で男を見る。

「ズズズ……ハア……考えがあるとやっているだろう」

「ズズ……ンマンマ……どんな？」

「ズズズ……ハア……俺に攫われ、監禁されていたことにする。洗脳されそうになったとでも言えればいいだろう」

「舐めてんのか刺し殺すぞゴラア！」

「やってみろ馬鹿弟子」

カップラーメンを投げ捨て、目を吊り立てて男に詰め寄る女性。

男もカップラーメンを投げ捨てて、女性を睨み返す。

「……本気で言っておるのか？」

「ああ。ヴィランについては十分知った。ならば次は英雄を知れ」

男の眼差しに本気で言っていることを悟る女性。

男はそれに頷いて話を続ける。

「じゃが……英雄を名乗るのは嫌いなんじやろ？ 儂はまだお師匠に殺されとうはない」

「俺が嫌いなのは私利私欲に走りながらヒーローを名乗る偽物だ。身勝手に英雄を名乗る気はないだろう？ お前は」

「ないよ！ 学校行ってヒーロー名乗れるならオールマイトが有名になる理由ないもんね！」

「その通りだ。お前はそれを理解している。だからこそお前を送り出す」

「あん？」

コロコロと話し方が変わる女性。

それを男は無視する。

「俺の思いを知っているお前は『本物』になれる可能性がある。だから行け」

「……」

男の真剣な目を、女性は真顔で見つめ返す。

そして翌日、運命は動き出した。

夜。街中にて。

「助けて〜おくんままし〜!!」

「……ハア……下手か……本気で殺しに行くか」

「うおおおお!? ちよっ! ひええええ!? お助けー!!」

街中で刀を振り回す男に追われる女性が目撃される。

涙や鼻水を流して、男から全力で逃げるその姿は真に迫っており、疑う者はいなかった（本気で泣きながら逃げていた）。

「待てー!」

「……来たか」

「きゃあ!? 掠った!? 掠ったわ!」

「ヒーロー殺し!? 何故少女を!?!」

現れたヒーロー達は男を見て目を見開く。

「たしゆけてー！殺されるー！連れ戻されるー！」

「ちい！ヒーロー共か……。止まれ！さっさと帰るぞ！」

「やだあく！もう戻りたくない！おうち帰りたい！」

「ヒーロー殺しが誘拐!?少女の保護を優先するぞ！」

「「おう！」」

ヒーロー達は個性を発動して、男を牽制する。

男はそれに怯んだふりをする。

その間に少女は英雄に保護される。

「ちっ！……ハア……せつかくここまで育ててやったのに」

「育てた!?お前が!」

「その娘を大事に扱え。近いうちに取り戻させてもらう」

「ま、待て！」

男は捨て台詞を吐くと、闇に姿を消す。

「くそ！」

「追うなよ。俺達じゃやられかねん」

「分かってるさ」

ヒーロー達は保護した少女に声を掛ける。

「君！大丈夫かい？もう大丈夫だからね！」

「は……はい……」

「申し訳ないけど一度警察で話を聞くことになる。大丈夫かい？」

「はい……あの人は……また来るんですか？」

少女は不安な表情を浮かべて、ヒーロー達に声を掛ける。

それにヒーロー達は安心させるように声を掛けながら、警察署に移

動させる。

それを建物の屋上から見守る男。

「……ハア……これで身軽になるな。それにしても、この俺が誘拐犯か」

ため息を吐いて、少女の背中を見つめる。

「まあ、弟子のために悪を被るも一興か。お前がどのような道を歩むのか、少しだけ……楽しみにしていてやろう」

そして男は再び街の闇に消えていった。

少女は警察署で話をしていた。

「ということは君は3年近くもステインの元で教えを受けていたと？」

「は、はい。……毎日、刀を振り上げられて追いかけられました……ぐすん」

「大変だったね。おうちはどこだね？」

年配の男性警察官が微笑みながら、少女に1つ1つ質問していく。

少女はオドオドしながらも質問に答えていく。

「家は……ありません。両親が死んで、施設に入れられたので」

「……そうか。……ふむ」

男性警察官が顎を擦りながら考え込んでいると、1人の女性警察官が近寄ってくる。

（部長。確認取れました。名前は乱刀らぎなたな 刃羅じんら。15歳。10歳のころに両親は殉職して施設に引き取られています）

（ふむ。彼女の言葉通りだな。他に親戚は？）

（残念ながら確認出来ませんでした。個性登録はされています。中学校1年になった直後に行方不明になっています）

女性警察官の言葉に男性警察官は腕を組んで顔を顰める。

ステインは少女を取り返しに来ると言っていた。警察署でずっと預かるわけにもいかないし、また施設に入れても護りきれる可能性は低い。

誰かに後見人になってもらおうにもステインを退けられる者でなければならぬ。

「乱刀さん。君はこれからどうしたい？」

「え？……あ、あのお……」

「構わないよ。言っただららん？」

「ヒ、ヒーローになりたいなっと思って……雄英高校に通うのが夢でしたので……それが出来るようになればいいかなって」「ほう！雄英か！」

男性警察官と女性警察官はその話を聞いて、顔をほころばせる。

「ただ……中学校に通ってないから……」

「ふむ。そうだな。それに君の後見人も決めねばならん」

「……一度雄英高校に連絡を入れてみますか？」

女性警察官の言葉に男性警察官は頷いた。

学園の教師ならば後見人には相応しいと考える。

雄英高校に聞かなければならないので、今は何とも言えないが。

「しばらくはここで部屋を用意するよ」

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げる刃羅。

とりあえず第一関門は突破したようだ刃羅はホツとした。

2日後。

刃羅を訪ねてきた者達がいた。

「あなたが乱刀刃羅ちゃんね！」

現れたのはSMを思わせる服装をした眼鏡をかけた女性。

その後ろには2本脚で立つ小さなネズミ。

最後に和服を着た女性。

「やあやあ！初めまして！僕が雄英高校校長の根津さ！」

「……あなたが校長？」

「そうさ。今回は君の処遇について話に来たよ」

「!!」

根津の言葉に背筋を伸ばす刃羅。ここが正念場だからだ。

「部長さんから話は聞いたよ。君は雄英に来たいけど、中学校は出ていないらしいね」

「……はい」

「でも、だからと言って中学校を初めからやり直すのも大変さ。そこで君にはまず試験を受けてもらうことになったのさ」

「試験？」

「簡単な筆記試験さ。でも、中学校卒業レベルさ。それを受けて十分な結果を出せれば受験資格をあげるって話になったのさ！」

それに刃羅は頷く。それは予想していたことだ。

「それとね、こちらの女性ヒーロー『流女将』ながれおかみさんに後見人になつても
らえることになったのさ」

「よろしく」

流女将は水色の髪を後ろで纏めた美女。水色と白の波模様が描かれた小袖を着ている。

刃羅もペコリと頭を下げる。

「そしてこつちが雄英高校教師の『ミッドナイト』さ」

「よろしくね」

「……教師？」

「見た目は18禁だけどね」

ウインクしてくるミッドナイトに刃羅は首を傾げるが、根津がいるから今更かと思ひ、受け入れることにした。

(本当に英雄を育てる学校なのかなあ?)

と内心疑問が湧いてきているが。

その後、刃羅は試験を受けた後に流女将が用意してくれた家に向かう。何故かミッドナイトも付いてきたが。

家は流女将の事務所の上のワンルームマンションだった。流女将はその上の階に住んでいるらしい。

すでに家具は揃えてくれており、必要な物は少しずつ揃えてくれるようだ。

と言つても刃羅は物欲があまりなく、必要最低限の服と下着があればよかった。

「そう言えば、あなたの『個性』を見ていませんでしたね」

「そうね。見せてもらえるかしら」

「は、はい」

2人の言葉に頷く刃羅。

すると右手の指をナイフを思わせる刃に変える。

それに2人は目を見開く。

「俺つちの『個性』は《刃体》! 体の一部を刃に変えたり、刃が付いた武器を作り出せんだぜ!

「……性格も変わるのね」

「けどねえん。武器を生み出すのは1種類だけなのよお」

「それぞれの武器を使い分け、使いこなせないといけないというわけですか」

「そういうことかな！」

「……武器ごとに性格変わるのね」

指の刃を蛇腹剣風に変え、次は指の付け根から鉤爪を生み出す。

その度に言葉遣いが変わることにミッドナイトは苦笑する。

「しかし、応用範囲はかなりのものですね」

「そうね」

刃羅の個性の汎用性に期待感が高まる2人だった。

そして翌日、文句なしの合格を告げられた刃羅は3か月後の入学試験を受けることになった。

・乱刀らがつたな 刃羅じんら

誕生日：1月1日。身長：174cm。AB型。

好きなもの：ステイン、時代劇、麺類

銀髪の長髪をスパイキーに逆立てて、後ろで纏めている。

目つきは性格により変わるが、基本鋭め。Eカップ。

ステイン唯一の弟子。しかし誘拐されたわけではなく、自分から売り込んだ。最初は無視されていたが個性で斬りかかり続けて、なし崩しの弟子になった。中学には行っていないが、ステインに勉強を教えてもらい独自で勉強していたため、そこそこできる。

個性：刃体

体を刃に変えることが出来る。さらにナイフや剣、刀など刃が付いている武器にも変えることが出来る。

武器に変える際は実物を見て、実際に振って動きを理解する必要があるため、武器収集に金がかかる。また同時に変えられるのは1種類だけ。

苦無やチャクラムなど飛び道具は生み出せないが、扱う事は出来る。

使えば使うほど筋肉痛になる。

また『多重刃格』で武器ごとに性格が変わる。思考も変わるため戦闘スタイルも変わる。

バッジなど武器に模した物を身に着けるだけでも性格を変える事は出来る。記憶は共有している。

#2 実技試験

実技試験に向かつて、鍛練を続ける刃羅。

流女将は基本昼間はパトロールに出ている。夜も食事時以外はあまり干渉してこなかったので、あまり窮屈ではなかった。

走り込みや外出は流女将やサイドキックと一緒に出来ないが、道や店も分らないのでありがたかった。

走り込み中にモジャ毛の少年が海岸のごみを片付けていたのを一度見かけた。体より大きい冷蔵庫やタイヤを運んでいて、何やってるんだろう?と思ったが、他の者達は気づかずには走っていたので、声までかけられなかったが妙に記憶に残っていた。

そして試験当日。

「おおー！すっげえ人！」

刃羅はキョロキョロと周囲を見渡す。

そんな刃羅をジロジロと見る受験者達。

刃羅の服装は和服袴姿だった。帯にナイフ、剣、刀、槍を模したキーホルダーが4つぶら下がっている。

完全に浮いているが、制服がないので仕方がない。

会場に向かおうとすると、海岸でゴミ掃除をしていたモジャ毛の少年がいた。

(おーあいつはーってことは、あれは訓練してやがったのか?)

話しかけようとしたが、物凄く足がガクガクしていて、歩き出そうとして転びそうになって女子に助けられていたのを見て、今はやめておこうと決めた。

入学したらクラスはともかく同じ学校だ。いつでも話す機会はあるだろうと判断した。

「まずは入学せねばな。お師匠に斬り殺されてしまう」

刃羅は気合を入れ直して、会場に入る。

行動の中にはかなりの人がいた。流石に競争率ナンバー1の学校である。

席についてのんびりしていると、

「今日は俺のライブにようこそー!!!エヴィバデイセイヘイ!!!」

サングラスをかけた髪を逆立てたチョビ髭男が壇上に立って、いきなりハイテンションで叫び始めた。

その男の声に返答する者は誰もいなかった。

「こいつあしヴィー!!!受験生のリスナーー!実技試験の概要をサクツとプレゼンするぜ!!アークーレディ!」

YEAR!!と叫ぶが、それにも誰も反応はしない。

(……あんなのがヒーローなのかのう?本当に大丈夫なのかの?この学校。お師匠の不満も分かる気がしてきたのじゃ)

ジト目で男、プレゼント・マイクを見つめる刃羅。

その後試験の説明をしていく。途中で真面目そうな眼鏡男が声を上げるが、刃羅は特に興味がなかった。

刃羅はずっとモジャ毛の少年を見ていた。ついでにその隣の少年も。

(あれは確かヘドロ・ヴィランに捕らわれていた少年ですね。知り合
い……制服が同じなので同級生のようですね)

妙に場違い感が強い少年と、事件で取り上げられた少年。

その2人に興味を持つ刃羅だった。

(試験会場も一緒だったら最高だぜ)

ニイ〜と笑みを浮かべて、ワクワクする刃羅。

突然笑みを浮かべた刃羅に両隣の受験者はビクツ!としていたが刃羅は気づかなかった。

「Plus Ultra!!それでは受験生は良い受験を」

プレゼント・マイクを終えて、刃羅は振り分けられた演習会場に向かった。

会場に着いた刃羅は周りを見るが、残念ながら目当ての2人はいなかった。

「残念だな。……それにしても広い」

目の前の会場はもはや街だった。ビルまで建っている。

それがいくつも建っている。

「金がかかっているな」

その時。

『ハイスタートー!』

「ん?」

声が響いた。

周りの受験者もポカンとしていた。

『どうしたあ!? 実践じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 賽は投げられてんぞお!』

その声に全員慌てて会場に向かって走り出す。

しかしスタートダッシュしている者がいた。

刃羅である。

「ああん? 随分のんびりとしてやがん? こりやあ……!」

走っていると目の前にロボットが現れる。

刃羅は両手の指をナイフにする。

「俺っちの独壇場じゃん!!」

ロボットの腕を斬り飛ばして、今度は右足を刀に変えて、胴体を斬る。

ロボットは機能を停止して崩れ落ちる。

刃羅はそれを見届けることなく、次に向かって走り出す。

「弱いもう! もつと楽しませえい!」

両腕を刀に変えて、舞を踊る様にロボットを斬り捨てていく刃羅。

それに他の受験者も慌てて追隨する。

「出遅れた!」

「急げ!」

「ポイント高いやつう!」

刃羅はロボットを斬りながら、周囲を見渡す。

「……ふむ。実技にしては……単調じゃのう。それにただ倒すだけかの?」

妙にこの試験に違和感を感じる刃羅。これではどちらかと言えばヴィランの試験に感じる。

考えながら戦っていると、ロボットに押し負けて倒れる受験者が現れた。

ロボットは倒れた受験者に腕を振り上げる。

「うわああ!」

「しい!!」

刃羅は袖からチャクラムを3枚取り出して、ロボットに向かって飛ばす。

チャクラムはロボットの腕を斬り飛ばして、脚や胴体も斬りつける。

ロボットが立て直そうとしているその隙に刃羅はロボットに近づき、右腕をコルセスカ風の槍に変えて、ロボットを突き貫く。

「大丈夫ですか?」

「お、おう……」

「無理してはいけませんわ。倒れては守るべき人達が守れませんわ」
そう言つて受験者の前を去る刃羅。

その後、怪我人を担ぎ上げたり、先ほどと同じ様にロボットに負けた受験者を助けたりして撃破数を稼いでいた。

(怪我人が出てきやがってロボットに集中出来ねえ!くそが!)

チャクラムはそろそろ刃こぼれが酷くなってきた。

今度は袖から鎖鎌を取り出して、怪我人達を鎖で搦めて引っ張って回収する。

それをまだ無事な受験生達は鼻で笑い、ロボットに向かっていく。

「てめえら!それでもヒーローになる気がゴラア!!」

刃羅は目を吊り上げて怒鳴る。

そこにピンク色の鞭のような物が伸びてきて、怪我人を回収し始めた。

「ああん?」

「手伝うわ」

現れたのはビルの壁に貼り付きながら舌を伸ばしている蛙のような少女。

唯一人だけだったが、それでもいないよりはマシだった。

「よっしやあ!とつとと釣り上げつぞ蛙女あ!」

「蛙吹梅雨よ。随分荒っぽいのね、あなた。ケロ」

梅雨とその後も続々と怪我人を運び出す刃羅。

時間切れが近くなってきたその時、

ドドオオオン！

『は？』

ビルの向こう側から巨大ロボットが現れた。

それに受験者達は啞然と見上げる。

巨大ロボットが受験者に向かって歩き始めた瞬間、一斉に逃げ始める一同。

「今度は逃げんのかよ!? うおおい！ 巨大化出来る奴とかいねえのか！」

「いないみたいね。それにあればポイントにはならないみたいだし」

梅雨の言葉に顔を顰める刃羅。

誰もロボットに向かおうとしないのを見て、1人駆け出す。

「!!ちよつと!?!」

梅雨が呼び止めるが、刃羅は止まらなかった。

足の裏に刃を生み出し、スケートのように滑る。

「あんたの言う通りだな。期待した俺っちが馬鹿だったぜ。ステイン」

巨大ロボットの足元に滑り込むと、両手を重ね合わせてクレイモアを思わせる巨大な大剣を作り出す。

そして巨大ロボットの右脚に向かって飛び掛かる。

「……斬」

無表情で眩き、両腕を振り抜く刃羅。

大剣は巨大ロボットの右脚半分を斬るが、まだ停止までは持っていない。いけない。

「……再」

振り抜いた勢いを利用して回転し、再び大剣を右脚に斬りつける。今度こそ右脚が斬り飛ばされ、巨大ロボットがバランスを崩す。

「……退」

腕を戻し、再びスケートのように滑って離れる刃羅。

ロボットはそのまま横倒しになる。

それを見届けた刃羅は息を大きく吐き出す。

「はあー……上手く行ったか。ビルは崩れてねえな」

刃羅はロボットがビルに倒れ込まないように、倒れ方を計算していた。

そして少し崩れはしたが、大通りに倒れて倒壊したビルは1棟もない。

そこで試験終了の声が響く。

「……まあ、入学は出来るだろうがよお」

刃羅は全く喜ぶこともなく、出口に向かって歩く。

「こんな連中と一緒にじゃあ期待できねえなあ」

ポリポリと後頭部を掻いて、周囲に不機嫌なオーラを振りまいて歩く刃羅。

不機嫌オーラの刃羅に梅雨も他の者も声を掛ける事は出来なかった。

そして、不機嫌そのままに帰宅した。

「どうでしたか?」

「余裕に決まってるだろ。むしろあれで落ちたらヒーロー終わりじゃね?」

流女将の質問に刃羅は不機嫌なままに答える。

それに苦笑して食事の準備をする流女将。

そして1週間後。

雄英高校から通知が届いた。

「合格」

「よかったですね」

「どうかなあ」

「何位だったのですか?」

「2位だつて」

間延びした話し方で報告する刃羅。

性格の変化にもう慣れた流女将は特に気にすることなく喜ぶ。

「そう言えば受かったらここ出ていった方がいいの?」

「ん？いえ？このまま住んでいて構いませんよ。寮はまだ完備されていませんからね」

「ありがと〜」

「ふふふ。どういたしまして。ああ、そうでした。受かったなら学校にコスチュームの要望書を出す用意してくださいね？」

「もう終わってるよ〜」

紙を取り出してピラピラする刃羅。

それを流女将は微笑んだまま見せてもらうが、見た瞬間笑顔が固まる。

「じ、刃羅さん？」

「なくに〜？」

「これは……本気ですか？ステインを思わせるのですが」

刃羅が書いた要望書は和服をイメージさせるが、腰にナイフ、背中に刀を携えている。どう見てもステインを意識している。

それに刃羅はにへらと笑う。

「うん〜。あんまり嬉しくはないけど〜やつぱり鍛えられてたせい
か〜どうも戦いやすいのが〜それになっちゃうの〜」

「……そうですか」

要望書を見て、顔を顰める流女将。

思っていた以上に刃羅への影響は大きかったようだ。

だからと言って無理に変えさせると、それこそ戦いでは命に係わる。

今後変わっていくことを祈るしかない流女将だった。

部屋のベッドに横になる刃羅。

「お師匠の言う通り、本当にあの学校が英雄を育ててるのか怪しいか
んじだなあ」

少なくとも試験でまともに感じたのはあの蛙のような少女だけ。

他の連中は弱く、自己利益しか考えていない『偽物』だった。

「……そっかあ。学生の選別を私がやればいいのかあ」

寝ころんだままニヤアと笑う刃羅。

「私が英雄に相応しい子を選別すればいいよねえ。そうすればお師匠の仕事も楽になるかなあ」

ステインの信念を一番知っているのは自分だ。だからプロになる前に選別すれば『偽物』は減るはずだ。

「お師匠は怒りそうだけどお……それも楽しそうだよねえ」

ニマニマと笑みが止まらない刃羅。

少しだけ高校生活が楽しくなりそうだと思ったのだった。

刃羅の刃格一覧！

ナイフ：やくぎのような乱暴な言葉遣い。一人称は「俺っち」

ロングソード：騎士を思わせる厳格な言葉遣い。一人称は「私」

打刀：のじや口調で古風な性格。一人称は「儂」

コルセスカ：お嬢様言葉で歩き方もモデル歩きになる。一人称は「わたくし」

トウハンドソード・無口、無表情で一言だけで話す。一人称は「わ
大鎌」だなあ」と少しだけ間延びして、いやらし気な笑みを浮かべ
ている。一人称は「私」

圏：快活な子供っぽい言動になる。一人称は「あたし」

鉤爪：関西弁。一人称は「うち」

蛇腹剣：お色気たっぷりのお姉さん。一人称は「私」

ダガー：「だね〜」と完璧な間延び口調になり、常に微笑んでいる。
一人称は「私」

今後出てきたら記載していきます。

#3 入学

入学当日。

「じゃ！行ってくる！」

「行つてらっしゃい。頑張つてね」

「うん！」

ニパツ！と笑顔を見せて流女将に挨拶する刃羅。

それに流女将も笑顔で手を振って見送る。

手を振りながら走り出す刃羅。

「いつよいよだあ♪いつよいよだあ♪どっんな子達がいつるのっかなあ♪」

変な歌を歌いながらスキップしているかのように小走りで学校に向かう刃羅。

ブレザーの制服、スカートの腰にはたくさんの武器バッジを付けているがブレザーで見えにくい。

学園に到着した刃羅は「1-A」を目指す。

そして巨大な扉の前で足を止めて扉を一気に開ける。

「おっはよう！」

中にはすでに半数近いクラスメイトが席に座っていた。

元気よく入ってきた刃羅に微妙な視線を送ってくる。

「ん〜？なんか暗いねえ？学校ってこんなところだったっけえ？」

刃羅はクラスメイト達の反応に首を傾げる。

それにクラスメイトの数人は訝し気な目を向ける。

「……なんか変な奴だなあ」

「うぜえ」

「騒がしそうな奴だ」

肘が妙な形をしている黒髪の男、試験の時に見ていた逆立ったベージュ髪に目つきの悪い男、そしてカラスみたいな鳥頭の男が呟く。

刃羅にもそれは届いていたが、その前に見知った顔を見つけた。

「あ！蛙の子！」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

「梅雨ちゃんだね！あたし、乱刀刃羅！刃羅でいいよ！」

「よろしく刃羅ちゃん。いきなりだけど質問いいかしら？」

「なに!？」

「試験の時と随分印象が違うのだけど、それがあなたの『個性』なの？」

「うくとねえ……そうでもあるけど違うかな！試験の時って、俺たちのことかあ？ああん！」

『!？』

「それよ」

いきなり話し方や雰囲気が変わった刃羅に教室にいた全員が目を見開く。

梅雨も少し驚きながらもなんとか普通に返す。

「不思議な子なのね。刃羅ちゃんは」

「うっせえな！『個性』溢れる今の世の中で不思議もくそもあるかってんだ！ああん！」

「それもそうね」

今にも殴りかかりそうな雰囲気醸し出す刃羅に、梅雨は特にビビることもなく答える。

そこに眼鏡をかけた男が近づいてくる。

「君！なんだその粗暴な態度は！ヒーロー科志望の者がそんな態度ではいけないぞ！」

刃羅は眼鏡の男に向く。優雅な笑みを浮かべながら。

「それは申し訳ありませんでしたわ。ご不快な思いをさせてしまったようで申し訳ありません」

「……はい？」

腰の前で手を重ねて、90度に頭を下げて謝罪する刃羅。

言葉遣いや所作に優雅さが溢れており、注意した眼鏡男や周囲の者はまたポカンとする。

刃羅は頭を上げる。

「わたくし、ナイフになるとどうも粗忽者になってしまいました……」
「……ナイフになる、だど？」

刃羅の言葉に腕を組んで訝しむ眼鏡男。

それに刃羅は答えず、優雅に微笑んでいるだけだった。

眼鏡男はさらに言葉を続けようとしたが、その時にドアが開いて誰かが入ってくる。

あのモジャ毛の少年だった。

「君はー」

「デク……」

眼鏡男はモジャ毛少年に向かって歩いていく。

刃羅も話しかけたかったが、時間も近づいていたので席に着くことにする。

同じクラスであることが分かったのだ。いつでも時間はある。

「では、梅雨様。また後で」

「梅雨ちゃんでいいわよ」

刃羅は優雅に梅雨に頭を下げて、自分の席に向かう。

刃羅は窓側の最後列だった。

席に座った刃羅は目の前の女子に声を掛ける。

「おはようございますわ。わたくし、乱刀刃羅と申しますわ」

「おはようございます。私は八百万百と申しますわ」

ペコリとお互いに頭を下げ合う巨乳淑女の2人。

モジャ毛少年の方に目を向けると、茶髪の少女も加わっており楽しそうだった。

そしてチャイムが鳴る。

すると、寝袋に入った男が現れた。

「ハイ。静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君達は合理性に欠くね」

寝袋を脱いだ男は黒髪に髭を生やした草臥れた男だった。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

自己紹介をした相澤は寝袋から何かを取り出す。

「早速だが、体操服に着替えてグラウンドに出ろ」

それにクラスメイト達は混乱するが、言われた通りに体操服を受け取り、着替えに行く。

刃羅も服を受け取って、更衣室に向かう。

「……『イレイザー・ヘッド』とは。これは厄介なことだな」
ポツリと刃羅は呟く。

ステインから聞いていた情報と一致していた。

「さてさて、何人残るのやら」

刃羅は楽しそうに笑う。

刃羅はズボンの腰回りにバッジが付いたベルトを着けて、グラウンドに出る。

「個性把握テストオ……!?」

相澤の言葉にクラスメイト達は唾然とする。

入学式やらを無視してのいきなりテストだ。

「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。これを『個性』ありで行ってもらおう。爆豪」

相澤はベージュ髪の男、爆豪を呼んだ。

「『個性』使って思いつきり投げてみる。早よ」

爆豪にボールを渡し、円の中に立たせる。

「んじやまあ」

爆豪は思いつきり腕を振り上げて、投げる。

「死ねえ!!!」

思いつきり物騒な言葉を吐きながら、爆音を響かせて投げる。

ボールはかなりの距離を飛ぶ。

それを相澤の手元にある機械が計測して爆豪に見せる。

700mを超えていた。

「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

それにクラスメイト達は楽しそうに盛り上がる。

それを刃羅は笑顔を浮かべてはいるが、内心では冷めた目で見ていた。

(自分の限界を知るのに「面白そう」ってかあ?のんびりしてんなあ。卵様は)

ふとモジャ毛の少年に目をやると、何やら冷や汗を掻いていた。それを訝しげに見ていると、相澤の雰囲気が変わった。

「面白そう……か。ヒーローになるための3年間。そんな腹づもりで過ぐす気にいるのかい？」

相澤の言葉に一瞬で押し黙るクラスメイト達。

「よし。トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分しよう」

『はあああああ!?!』

「生徒の如何は先生の自由。ようこそ。これが……雄英高校ヒーロー科だ」

相澤の言葉にクラスメイト達様々な反応を見せる。

「これから3年間雄英は全力で君達に苦難を与え続ける。Plus Ultraさ。全力で乗り越えてこい」

そしてテストが始まった。
50m走。

『個性』ありならよお！全力で行くぞゴラァ！」

「また荒くなった……。どういう方ですか？」

刃羅は大声で叫びながら靴を脱いで裸足になる。

そしてスタートした瞬間、足の裏に刃を生み出して、スケートの如く滑る。

「おらおらおらおらあ!!」

どンドンスピードを上げてゴールする。

タイムは4秒33。

「まあ、こんなもんか」

続いて握力。

記録は72Kg。

もちろんこれには『個性』は使っていない。

「高いのか?これは」

『個性』使っていないのでしょ?なら、高いわ刃羅ちゃん

「そうか」

「……(あいつか。ヒーロー殺しに攫われてたって奴は)」

中学に通っていない刃羅は成長具合が分からなかった。なので梅雨に聞いたりしていた。それを相澤が見ているのには気づいたが、特に問題はないだろうと無視した。立ち幅跳び。

飛ぶ瞬間に足から剣を伸ばして、距離を伸ばす。

記録は23m。

反復横跳び。

これは『個性』使わず。

記録は81点。

ソフトボール投げ。

記録は『個性』なしで、78m。

「……良いのか悪いのかさっぱり分からない！」

「かなり良いかと思えますわ」

「そうね。ケロ」

プウ！と頬膨らませる刃羅に百と梅雨は凄いと教える。

それに首を傾げる刃羅。逆に何故分からないのか首を傾げる2人。

その時、刃羅は指を押さえて痛みに耐えているモジャ毛の少年が目に入った。

「ねえ！梅雨ちゃん！」

「なにかしら？」

「あの子名前なんだっけ？」

「あの子？ああ。緑谷出久君だったかしら」

「ふくん……」

「どうしたの？」

「いやあ、痛そうだなあって！」

随分と体を酷使する『個性』のようだ。

正直、何故ヒーロー科に来たのか分からない。

その後もテストは続く。

上体起こし。

記録は58回。

長座体前屈。

記録は57cm。

持久走。

『個性』ありで記録2分10秒。

これで全種目終了した。

「ふむう。あまりパツとせんとう」

「十分だと思うわ。刃羅ちゃん」

「そうじゃろうか？」

「それよりもお前の話し方の変わり方が気になって仕方ねえよ」

「そうそう！」

梅雨と話していると、赤髪を逆立てて歯が鋭い男とピンクの肌に触角を生やした女が声を掛けてきた。

「こればかりはのう。儂には直す気がない」

「ないんかい！まあ、いいけどよ。つて、俺は切島鋭児郎だ！」

「私は芦戸三奈！よろしくねー！」

「乱刀刃羅じゃ」

切島と芦戸は人懐っこい笑みを浮かべる。

刃羅も自己紹介をして、4人で駄弁る。

そこに相澤が声を掛ける。

「んじゃ、パパッと結果発表」

それに一部のクラスメイト達で緊張感が高まる。

「ちなみに除籍は嘘な」

『……!?!』

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

乾いた目で笑う相澤。

「はぁー！ー!?!」

それに一部の者が叫び声を上げる。

「あんなの嘘に決まってるじゃない……。ちよつと考えれば分かりますわ……」

叫んだ者達に百が呆れた顔で突っ込んでいる。

「よかつた〜！」

「全く驚かせんなよなあ」

「それはどうかのう」

芦戸と切島もホツと息を吐く。

そこに刃羅がボソツと呟く。

聞こえた梅雨達3人は刃羅に目を向ける。

「結果的に嘘になっただけじゃろうな。恐らく緑谷はソフトボールで腕を壊しておいたら、除籍されたじゃろうなあ」

「マジで!？」

「儂ならそうするの。使うたびに骨折する個性なぞヒーローとして何が出来るといふんじゃ? むしろ、ここで除籍にした方があ奴は長生きするじゃろうな」

「……そういう考え方も出来んのか」

『合理的』。担任はその言葉が好きなようじゃな。つまり、ヒーローとしての合理から外れば容赦はせんじゃろうな」

「……」

切島と芦戸はゴクリと唾を飲む。

梅雨も納得した様に頷いている。

「ヒーローは夢だけで追えるものではない、ということじゃな」

そう言う刃羅は結果を確認する。

「ふむう。4位か。まだまだ精進せねばの」

「十分だろ」

「十分だよ」

「十分だわ」

刃羅の呟きに突っ込む3人。

それは刃羅の耳に届くことはなかった。

カリキュラムなどを確認した刃羅は自宅に向かって歩いていった。

ふと、足を止めて路地裏に入る。

しばらく中を進むと、

「お久! お師匠!」

「……ハア……静かにしゃべれ」

路地裏のごみ箱の上にステインがいた。

ステインの反応に刃羅は腕を組んで拗ねたように唇を尖らせる。

「冷たいではないか。久しぶりに会ったというのに。結婚してください」

「ふん。……無事に入学出来たようだな」

「当たり前だ。あの程度、簡単に入学できる。それに周りもまさしく『偽物』の卵ばかり」

「……やはり変わらんか」

「ただ……」

「ん？」

「今年から教師にオールマイトがいるらしい」
「!!」

刃羅の言葉にステインは目を見開く。

流石にそこまで情報は入っていないらしい。

「それに担任にはイレイザー・ヘッドだ。他のクラスはともかく、私のクラスは当たりかもしれないな」

「……そうか。オールマイトが教師に……」

「ああ。だからこそ、お師匠。今の内に外の掃除を済ませてしまえ。中は私が見る。そして結婚しよう」

最後の言葉を華麗に無視するステイン。

1人で少し考え込むと、刃羅に背を向ける。

「……帰るのか？」

「ああ。お前の言う通り、今の内に肅正を進めようと思ってな。しばらくは会えんだろう。達者でな」

一方的に別れを告げて、去っていくステイン。

その背中を見送る刃羅はため息を吐く。

「……少しくらい反応せいや」

いじけながら路地裏から出る刃羅。

帰ってからしばらくは不機嫌で何を聞かれても答えない刃羅に、流女将は首を傾げながら晩御飯の準備をするのだった。

#4 戦闘訓練

入学2日目。

午前中は普通の授業で退屈だった。

「……眠い〜」

刃羅は大きくあくびをしながら、英語の授業を聞いていた。

ここはずっと前に自分で勉強していたので、今更感があった。

「……分かんない!」

しかし数学や社会などは思ったより進んでおり、ついていけなかった。

それに百は呆れた顔をする。

「昨日も思いましたが……乱刀さんは変にちぐはぐですわね」

「ぶう〜!」

「今日は子供っぽい性格ですね」

刃羅は頬を膨らませて不満を表出する。

昼は大食堂で芦戸や梅雨達と食事を摂る。

「ズズ〜……ンマンマ……このラーメンうめえな!」

「麺類好きなんだね!」

「6杯も食べるなんて大食いなだね。刃羅ちゃん」

「ズズ〜……ンマンマ……まだ食えっぞ!でも金がねえ!」

「刃羅ちゃんって食費半端なさそうだね」

「この食堂はヒーローが料理長をしているため、一流の料理が安価で食べられる。」

刃羅にとっては初めてレベルの食事ばかりだったので、ハイテンションで食べ過ぎてしまった。

「……このままでは今週で小遣いがなくなる」

「どれだけ食べる気なの!?!」

財布を見て肩を落とす刃羅に、芦戸が突っ込んだ。

午後の授業はヒーロー基礎学。

教室にいる全員がどこかソワソワしている。

「わーたーしーがー!!」

廊下から大きな声が聞こえた。

「普通にドアから来た!!!」

入ってきたのは濃い顔の巨漢の男。

生きた伝説言われたNo. 1ヒーロー、オールマイト。

オールマイトの登場にクラスメイト達もテンションが上がっている。

「ふくん……実物初めて見たけどお……なんかなあ」

刃羅はオールマイトを見て、首を傾げる。

確かに圧は凄いが、ステインから聞いていたほどとは思えなかった。

「……教師始めたことにい……関係あるのかなあ？」

何か裏がある気がすると感じた刃羅。

と言っても、すぐに何が出来るわけではないのでしばらくはアクションを起こす気はない。

「早速だが、今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

それに全員がざわつく。

刃羅もニマアと笑みを浮かべる。

「そしてそいつに伴って……こちら!!!」

教室前方の壁から何かがせり出してくる。

「入学前に送ってもらった「個性届」と「要望」に沿ってあつらえた……
戦闘服!!!」

『おおお!!!』

全員が興奮する。

立ち上がる者もいる。

「さてえ……私の要望は通ったかなあ」

刃羅も少し楽しみにしている。

「着替えた順次グラウンド・βに集まるんだ!!!」

『はーい!!!』

クラスメイト達はコスチュームを受け取って、更衣室に行く。

刃羅も受け取って、更衣室でトランクを開ける。

「おぉー！」

「凄いね！」

「……要望した案より生地が多いですわね？ん？……『あなたの要望は露出が過ぎるため却下されました』」

「ええ!?百ちゃんのコスチュームそれでも生地多いの!?レオタードじゃん!!」

他の皆もお互いのコスチュームを見て、盛り上がっている。

刃羅も着替えて、装備を付けていく。

上は藍色の和服。深紅の帯には『いつもの武器バッジが大量に付いている。右腰には『ウルミ』と呼ばれる鋼鞭剣が吊り下げられており、左腰には鎖鎌。右背中には刃を潰した鉄刀が携えられている。

下は黒のパラッツオパンツで両太ももにはベルトが巻かれており、2本ずつナイフが装備されている。赤のブーツサンダルの足裏は縦に隙間が空いており、そこから刃を伸ばせるようになっていいる。

そして顔上半分には赤い髑髏マスク。髪を縛っているリボンも赤い。

「まあ、こんなもんじやの」

「なんか悪役!」

「芦戸嬢も人の事言えぬじやろうに」

「ううく……なんかパツツンパツツンになってしもた」

「なんか麗日エロイ」

「やめてえー!」

「ほら!皆さん!遅れますわよ!」

百の促しの声に移動を開始する一同。

グラウンドには男子達も集まっていた。

「さあ!始めようか有精卵ども!!」

その後、授業内容を告げられる。

今回は屋内対人戦闘訓練だった。2人1組でチームを組み、「ヒーロー」と「ヴィラン」に分かれてクラスメイト同士で戦う訓練だ。

「ふむ。お互いの『個性』やコスチュームの機能を理解し、作戦を決めなければならんのか」

「そうね。確かにいつも決まったメンバーと組むわけではないものね」

刃羅の呟きに梅雨も頷いて同意する。

「コンビ及び対戦相手はくじだー!」

「適当なのですか!?!」

オールマイトの言葉にゴツイアーマーを着た飯田が声を上げる。

そこに緑谷が補足説明し、飯田が納得する様子が見られた。

その後、くじを引いた刃羅は葉隠透という透明人間の女性と組むことになった。

「よろしくね! 刃羅ちゃん!」

「よろしくねえん。ところでえ、それがコスチュームなおん?」

「凄い色気!?! そうだよ!」

葉隠は手袋と靴しか見えない。服は透明に出来ない制服などから考えると、今彼女は全裸のはずだ。

「大丈夫なおん? 墨とかあ水を浴びたらあ体見えるんじゃないのおん?」

「そうだけどね! どうせ本気になったら脱ぐし!」

「……大胆ねえん」

「ケロ。普通は装備を固めるものだけど、真逆だものね」

刃羅すらも呆れる『個性』の使い方だ。

どうやって戦うのか逆に知りたくなる。

そして最初は緑谷・麗日VS爆豪・飯田のバトルが決まった。

刃羅達は地下のモニタリングルームに移動して、観戦することになった。

「へえ〜。いきなりあの2人かく。どうなるかな〜」

周りから少し下がったところで観戦する刃羅。

他のクラスメイト達はオールマイトの近くでモニターに注目している。

開始して建物に侵入する緑谷達。

少し進んで、すぐに通路の影から爆豪が飛び出してきた。

それを緑谷は麗日を庇う様にして回避する。

「いきなり奇襲!!」

「爆豪ズツケエ! 奇襲なんて男らしくねえ!!」

「奇襲も戦略! 彼らは今 実戦の最中なんだぜ!」

緑谷は覆面の左側が破れるがほぼ無傷。

刃羅は腕を組んで、それを見ていた。

「今の動作……爆豪氏を見て、すぐに動いたでござるな。緑谷氏は爆豪氏の行動を読んでいたということになるでござる」

「忍者になった!?!」

刃羅の声が聞こえていた葉隠は新しい話し方に驚く。

それを刃羅は特に反応せず、モニターに集中していた。

爆豪が右腕を振ろうとした時、緑谷が素早く動いて爆豪の右腕を抱える。

そして、そのまま背負い投げして爆豪を背中から叩きつける。

それに刃羅も含めた全員が目を見開く。

その後、緑谷が爆豪に向かって何かを叫ぶ。

映像だけで声が聞こえないので会話は分からない。

それに爆豪は盛大に顔を顰め、怒りに顔を染めて叫んでいる。

他のモニターでは飯田が耳を押さえている。

それに爆豪が何やら呟いている。

「あいつ何話してんだ? 定点カメラで音声ないと分かんねえな」

「小型無線でコンビと話しているのさー!」

どうやら飯田は爆豪が1人で飛び出して、慌てているようだ。

それを無視して爆豪は緑谷に攻撃を仕掛ける。

その隙に麗日が走って移動を開始する。

爆豪は麗日を全く意識していないようだった。

「……ふむ。把握テストの時から思っていたが、爆豪は妙に緑谷に突っかかるな」

「だよね」

刃羅の言葉に頷く葉隠。

2人は昔からの知り合いのようだが、詳しくは関係が知らなかった。

ただの同級生と言うわけではないようだ。

その後も緑谷は爆豪の攻撃を見事に対応する。

それにクラスメイト達も緑谷の評価を上げる。

「すげえな あいつ!! 『個性』使わずに渡り合ってるぞ! 入試1位と!!」

その言葉に刃羅も内心で同意する。

(普段のオドオドしてる様子からは考えられねえほど判断と実行速度が速ええ。確保テープの使い方も初めてとは思えねえほどの確だぜ)

それに爆豪も焦ったような表情をしている。

緑谷は不利と悟ったのか一度離れる。

爆豪は両手で爆破しながら何かを叫んでいる。

「私情全開だね。ある意味ヴィランらしいかも」

「確かに! すっごい怖い!」

「だね」

緑谷は通路の角に隠れながら息を整えている。

その目は普段とは考えられないほど力が宿っている。

(……一度覚悟が決まれば戸惑いが小さくなるタイプか)

緑谷を見て、性格を理解しようとする刃羅。

その間に麗日も飯田がいる階に到着した。

入り口近くの陰に隠れる麗日に飯田は気づいておらず、何かブツブ

ツと呟いているように見える。

「ここからだな!」

「どう飯田君を倒すのかな?」

「飯田の奴は何を考えているんだ?」

すると、麗日が急に吹き出す。

その音で飯田も麗日の存在に気づいた。

「何 噴き出してんだよ」

「面白い事でもあったのかな?」

「飯田の呟きじゃね?」

麗日は諦めて姿を現すが、飯田は両手を広げて周囲を示す。

「何をしていたのかと思えば、浮かすものを無くしていたのね」

「これで麗日はかなり制限されたな。緑谷と合流したいが……」

「それは爆豪さん呼び込むということですね」

「む！爆豪が緑谷を見つけたぞ！」

爆豪は右腕を前に突き出して、緑谷を睨む。

「ふむ？あやつ爆破は遠距離は無理じゃったはずじゃが……」

刃羅の呟きに周囲も頷く。

爆豪は手甲の取っ手を引っ張り、そこから飛び出たピンに指を掛ける。

それを見たオールマイトは慌ててマイクに向かって声を上げる。

「爆豪少年ストップだ！殺す気か！」

しかし、爆豪は狂気が宿った笑みを浮かべてピンを引く。

その瞬間、巨大な爆発が緑谷とビルを吹き飛ばす。

爆発の衝撃で刃羅達がいる地下も揺れる。

緑谷は何とか無事だった。

「というよりは、外したのか？」

「え!？」

「被害が大きい割には緑谷にはほとんどダメージがない。あくまで牽制

……もしくは挑発のつもりだな」

「だとしても、もう授業の範囲超えてんだろ！」

刃羅の言葉に切島が慌てる。

その間に麗日が動いていたが、飯田に躲される。

オールマイトが爆豪に注意する。

それを聞いた爆豪はすぐに切り替えたのか、近接戦を仕掛ける。

『個性』を使いこなした猛攻に緑谷は一方的にやられていく。

「爆豪君はあ『個性』と合わせた身のこなしを感覚で分かってるんだねえ。対してえ緑谷君はあ爆弾持ちの『個性』だし。戦闘では勝ち目ないねえ」

「うう〜!!でもでもお！ちよつとやりすぎじゃない!？」

「そうだねえ。爆豪君はどうやらあ目的に対してはあ変に冷静だけどおそれ以外は目が行かなくなるみたいだねえ」

お互い感情をむき出しにする。

しかし、どうにも爆豪の方が追い込まれている感じに見える。

「……確か爆豪はんって緑谷はんのこと『デク』って呼んどったなあ。それにみよくに馬鹿にしとったし、緑谷はんのことを無個性みたいなこと言うもった」

「確かに言ってたわね」

「もしかして爆豪はん、今まで馬鹿にしとった奴が強くなってきた焦っとるんちゃうか？それに、誰かに追いつかれたり、自分より強い奴を見るんも初めてなんちゃうか？」

「どういふこと？」

「負けるつちゆうことがなかったんやろ。『個性』も強おて、才能もある。小学校中学校レベルなら、学校でもぶつちぎりで一番やったんちゃうか？それが雄英で初めて揺さぶられたつちゆう感じやな」

刃羅の言葉に周囲も納得した様に頷いて、モニターを見る。

緑谷と爆豪が拳を握って、ぶつかり合おうとする。

それにクラスメイト達は慌て、オールマイトも止めようとする。

その時、飯田と向き合っていた麗日が動く。

柱に抱き着いて、何かを待つように待機する。

それに刃羅は目を細めて、緑谷とを見る。

(……っ！踏み込みが浅い!?狙いは爆豪やない!?)

ぶつかり合うと思われたその時、緑谷は腕を爆豪ではなく、真上に向かって振り上げる。

爆豪は右腕で緑谷を殴り、爆破する。

緑谷の攻撃は麗日の目の前の床を吹き飛ばし、瓦礫が舞い上がり、麗日が掴んでいる柱も砕けてバットのよう持ち上げる。

すると、柱を振り回して瓦礫を飯田に向かって打ち飛ばす麗日。

飯田はそれに慌てて対処しようとするが、瓦礫に合わせて麗日がターゲットに向かって飛び、貼り付いた。

「……なんとー！」

刃羅は決着に目を見開く。

攻撃を受けたように見えた緑谷は左腕でガードしていた。爆破までは完全に防げなかったのか、フラフラでゆっくりと倒れていく。

(あの状況で！自分が傷つき倒れることよりも、パートナーのアシストに終始した！しかも打ち上げる位置も正確に把握して！)

刃羅は緑谷の行動に笑みを抑えられなかった。声を上げて爆笑するほどではないが、興奮を抑えられず歯を見せて笑みを浮かべる。

(この結末をあの状況で考えつくだど!? 一体どんな思考回路をしているんだ!?)

自爆確定の策。今のヒーローの何人が実行できるのだろうか。

刃羅は狂気ともいえる笑みを浮かべて、倒れ伏す緑谷を見つめ続けていた。

(面白い！こいつ面白い！)

ステインを初めて知った時に近いほどの興奮だった。

その後緑谷は保健室に運ばれた。

残りの3人はモニタールームで講評されていた。

百が飯田以外を酷評していたが、爆豪は訓練終了から心ここにあらずという様子だった。

刃羅は興奮冷めやらぬ状態だったが、そこに更なる興奮材が投下される。

「それでは場所を変えて、第2戦だ！次はこの2組だ！」

選ばれたのは轟・障子と刃羅・葉隠だった。

刃羅達はヴィラン側となった。

「うおー！刃羅ちゃん私ちよつと本気出すわ。手袋もブーツも脱ぐわって、ひい!?!」

葉隠は気合を入れて、素っ裸になって刃羅を見る。

しかし刃羅の顔を見て、引きつった声を上げる。

「……そうだなあ。ちよつと、本気でやろうかあ。私もお火照ってきちやったあ」

ニマア！と狂気が滲む笑みを浮かべている刃羅。

それに葉隠は恐怖を感じて、震える。

「ど、どどどど、どうどう刃羅ちゃん！殺しそう！ホントに人殺しそうだよ!?!ヴィランになり切り過ぎだよ!?!」

「大丈夫う。ちゃんと加減はするからあ」

「ホントだよ?!お願いだからね?!」

スタートして、葉隠が裸で移動を始める。

刃羅は核の前で待機していたが、突如ビルが凍り始める。

そのビルの廊下を歩く1人の男。

轟 焦凍である。

「そっちは防衛戦のつもりだろうがな。こうなったら関係ない」

涼しい顔で目標に向かう轟。

目標の核まで後1階と言うところで、

「随分と余裕そうだなあ!!クソイケメンよお!!」

「!!」

「オラア!」

柱の陰から刃羅が飛び出てきた。

轟は目を見開いて構えるが、その前に刃羅は背中の鉄刀を振り下ろす。

轟は転がってギリギリで躲す。

「くっ!あの氷を避けたか」

「この程度で俺っちの脚が止まるかってんだ!」

刃羅はもう一度刀を振るう。

轟はそれもまたギリギリで回避する。

「なら、さっきよりきつめで行くぞ」

刃羅の膝下まで厚めの氷が覆う。

「ああん!?!」

「悪いな。これで終わりだ」

轟は喜びもせず、当たり前と言った顔で刃羅に告げる。
すると刃羅は笑顔を浮かべて叫ぶ。

「ホワッツ?!何を勝手にジ・エンド!にしているデース!」

「!!」

キュイイイイイン!!

刃羅の両脚からズボン突き破って、スパイラルカッターのように回転する刃が出現し、氷を削り割る。

それに轟は目を見開く。

「この程度のジ・アイス！ミリーのジ・スパイラル！の前には効かないデース！」

回転を止めて鉄刀を振る刃羅。

それを轟は躲すが、すぐに切り返されて右脇腹に鉄刀がめり込む。

「があ?」

「ヒーット!!」

轟は脇腹を押さえながら、氷を生み出して壁を作って距離を取る。

刃羅は氷の壁に構わず、左手で貫手を放つ。

その左手が槍に変化して氷の壁を貫いて、轟の右肩をかすめる。

「!!」

「言っているでしょう。この程度の氷では止められませんわ」

刃羅は左手を戻し、鉄刀をレイピアのように構えて轟を見つめる。

轟は左手で右肩を押さえながら、右手を離握手して調子を確認する。

「残念。鞆帯までは届きませんでしたか」

「……槍まで作れんのか」

「刃が付いている近接武器ならばなんでも。殺さないように注意しなければいけないので、厄介ではありませんが」

そのため、刃を潰した鉄刀を作ってもらったのだ。

非殺生が絶対のヒーローでは、刃羅の『個性』は使いどころが難しい。

加減をしようにもどうやっても刃が生まれる以上、斬り所で失血死してしまうからだ。

「それにしても……コスチュームは作り直しですわねえ。何か考えないと裸になりそうですわ。百様のようなコスチュームは流石に恥ずかしいですし」

刃羅のズボンホットパンツのように短くなっており、美脚が露わになっていた。

サンダルも壊れており、裸足である。

「まあ、今はいいでしょう。……そろそろ続きを始めても?」

「……ああ」

刃羅が独り言を話している間に、轟は傷口に氷を張って止血していた。

「……なんでわざわざ待ってやがった？」

「決まっているではありませんか。もつと戦いたいからですわあ！」

ドン！と突きを放つ刃羅。

轟は再び氷の壁を作りながら、後ろに滑って距離を取る。

「戦闘狂かよ」

「強敵との戦いは次への糧ですわ！」

氷を避けながら、轟に詰め寄る刃羅。

近づいた瞬間ヒュヒュヒュン！と高速で連続突きを放つ。

すぐに氷の壁を作り出し、そのまま氷を伸ばして刃羅を拘束しようとする。

刃羅も足裏に刃を生やして、滑って回避する。

（八百万と同じで刃を生やす場所は全身か！けど、こいつは身体能力と武器捌きは八百万より上！飛び道具がないことが救いだな）

「今、飛び道具を有せぬことが幸運とでも思ったでござるか？」

「!!」

「別に『個性』だけで決まるわけではないでござるぞ！」

刃羅は左手を振ると指の間に手裏剣が現れる。

「!!」

「しっー！」

手裏剣を放つ刃羅。

数枚の手裏剣が放物線を描いて轟の左右から迫る。

轟は左右にも氷の壁を生み出して防ぐ。

「ちいー！」

「……隙」

「!!」

真上から両腕を大剣にした刃羅が斬りかかってくる。

轟は足元に氷を張って滑りながら急いで下がる。

「……砕」

刃羅は床に大剣を叩きつける。

床が砕けて、2人の足元に大穴を空ける。

「くっ!」

「……隙」

「!!」

轟は足元に注意を向けて、刃羅から意識がそれる。

その隙を刃羅は逃さずに大剣を振った勢いで詰め寄る。そして大剣を重りにして、体を捻り轟の体に蹴りを打ち込む。

「ぐうあ!」

「……終」

「っ!!」

下の階の床に叩きつけられた轟に、刃羅は両腕を戻して追撃する。それに轟は目を見開く。

『そこまで!ヒーローチームWIN!!』

すると訓練終了の放送が流れる。

刃羅は攻撃を止めて、轟のすぐ横に下り立つ。

「……謎」

「……俺達が勝った?」

「轟!」

上の階から現れたのは障子だった。

「お前……」

「お前が戦っている間に壁をよじ登って上の階に潜り込んだんだ」

「マッジかよお!?!透明露出狂はどうしたあ!?!」

「見えんから分かん」

「あの露出狂!無線まで外して、行きやがったのに!!どこいやがんだあ!!」

「……すまん。俺の氷で足止めされているのかもしれない」

すると、轟が左手から炎を生み出して氷を溶かし始める。

それに刃羅は目を見開く。

「ああん!?!てめえ!炎も使えんのかよお!?!」

「……ああ」

「どクソイケメンが!!なんで使わねえ!」

氷だけでも厄介なのに炎まで加われれば間違いない刃羅はもつと早く負けていた。

それに轟は刃羅から目を逸らす。

「すまない。だが、俺は戦いで左を使う気はない」

「……ふん。くだらん信念だな。人を馬鹿にしたいなら戦いではなく、普段の生活でも徹底して使うな」

轟の言葉に刃羅は冷めた目で見て、吐き捨てる。

そこにペタペタと音が響いてくる。

「ごめーん!刃羅ちゃん!」

「……どこにおったのじゃ?」

「上!裸足だったから氷漬けにされちゃって動けなかった!」

「……そうか」

「つていうか!刃羅ちゃん、脚がエロイことになってるよ!」

「全裸のお主に言われとうない」

刃羅は右手で顔を押さえながら、ため息を吐く。

そして地下のモニタールームに戻る。

「おかえり!!では!講評の時間だ!!」

「その前に轟君を保健室にいお願いしたいですう」

「む!そうだね!轟少年!はいこれ!」

「……どうも」

保健室利用書を手渡すオールマイト。

受け取った轟は軽く頭を下げて、保健室に向かう。

「さて!では講評だ!今回のベストは障子少年だな!」

「……轟では?」

「確かに轟少年も素晴らしかったが、接敵後の戦闘が減点だ。障子少年は轟少年に頼ってはいたが、途中で戦闘に気が付いて、すぐさま動いた」

「……私が何も出来なかったな」

「そうだな!葉隠少女は確かに透明であることは有利ではあるが、今回はそれが足を引っ張ってしまった!しかも無線まで外したから、自

分の状態を伝えられなくなってしまったのが一番の敗因だ！」

「はい……」

「そして最後は乱刀少女だ！戦闘は見事だったが、それに集中しすぎたな！葉隠少女がどうなっているのか確認出来たならば、もう少し対処が出来ただろう！」

「ええくん。轟ちゃん相手にい他の事に意識逸らすなんてえ無茶言わないでよおん。オールマイトおん」

妙に体をクネクネして色気を醸し出す刃羅に、オールマイトも顔を少し赤くして目を逸らして咳払いする。

「お、おほん！と、とりあえず！これで2組目も終了だ！で、ここも穴が開いたから、次のビルに行くぞ！」

「お色気も意外と効くのねえん。……DT？」

「だまらっしやい！」

「ぶべん!？」

「刃羅ちゃん……。今のは叩かれても仕方ないわ」

ドゴン!!と音を立てて頭にチョップを叩きつけられ、倒れ伏す刃羅。

ピクピクとする刃羅に梅雨が呆れたように声を掛ける。

その後、障子に背負われて運ばれ、モニタールームの端っこに転がされる刃羅だった。

刃羅の新しい刃格！

脇差：忍者しゃべりになる。一人称は「某」

スパイラルカッター：英語交じりのハイテンションガール。一人称は「ミー」。使用時イメージは『ワンピースのMr. 1【スパイラルホロウ】』

*ちなみに生み出した武器でなければ性格は変わらない。なので装備している刀やナイフでは性格は変化しない。

#5 襲撃

初めての戦闘訓練翌日。

校門前にマスコミがわんさかと待ち構えていた。

もちろん目的はオールマイト。

「邪魔だよねえ。斬っていいかなあ？」

「駄目に決まっているだろう！乱刀さん！」

イラつとしたので不穏なことを呟いたら、いつの間にもいたのか飯田が注意してきた。

それに顔を顰めた刃羅は、

「だったらあ飯田君さあ、君にマスコミのお対応お願いしてもいい？私いああいうのお苦手なお」

「ふむ……仕方ないな！いいだろう！」

「ありがとう」

面倒事をさらつと飯田に押し付けて、ユラリと校舎に入る刃羅。

そして教室に入り、席に座る。

「んあ〜」

「どうしたの？刃羅ちゃん」

背もたれに体を預けてダラけると、梅雨が声を掛けてきた。

「ん〜？ちよつとね〜体が筋肉痛〜」

「筋トレでもしたの？」

『個性』の使い過ぎがなく。使い過ぎると〜筋肉痛になるの〜。轟君とやり過ぎたのと〜帰って鍛練したら〜ビキつときちやつた〜」

「なるほどね」

発動型は容量超過すると何かしらの反動がある場合が多い。

刃羅も例に違わず、反動が襲い掛かっていた。

「ダルい〜」

「大変ね。刃羅ちゃん」

そして予鈴が鳴り、相澤が教室に入ってくる。

戦闘訓練の話をして、すぐに本題に入る相澤。

「さて…HRの本題だ……急で悪いが今日は君らに……」

ゴクリと息を飲むクラスメイト達。

「学級委員長を決めてもらう」

『学校つぼいの来たー!!』

その瞬間、ほぼ全員が手を上げる。

刃羅は興味がないので上げなかった。

(???)なんで皆やりたいの???)

内心90度近く首を傾げていたが。

そこに飯田が投票で決めることを提案したので、投票となった。

(うくん……誰がよいじゃろうか?)

悩んでいると、ふと緑谷が視界に入る。

(ふむ。あ奴で良いか!)

こうして刃羅は緑谷に投票し、委員長が緑谷と副委員長が百に決定した。

昼食時食堂で梅雨や芦戸、葉隠とご飯を食べていた。

「ズズ……ンマンマ……やっぱ美味いわ。食べてまうわ」

「お金大丈夫なの?」

「ズズ……ンマンマ……あと……1000円やなって1000円!?

誰や!うちの金盗んだんは!?うちか!昨日カップ麺めっさ買ったわ!どないしょ!これで今月乗り切れっちゃうんか!?あ。カップ麺持ってくればええんか!?ってアホ!!お湯はどこにあんねん!」

「待って!?ポケとツツコミが追いつきません!」

「未だに刃羅ちゃんの性格が分からないわ」

1人でポケとツツコミをしていく刃羅に葉隠がストップをかける。

そして梅雨が冷静に突っ込む。

「実際のとこさあ、刃羅ちゃんって何で性格変わるの?」

「これだよ!」

刃羅はスカートのバッジを見せる。

「バッジ?」

「正確には武器だよ!武器によって変わるの!最近はこんな風にバッジでも変わるようになったの!えっへん!」

「どこに威張る要素があったのか分からないよ」

「ちなみに今はどの武器なのかしら？」

「今は【圏】だよ！さっきのは【鉤爪】！」

「じゃあ爆豪君みたいなやつは？」

「【ナイフ】！」

法則性があることは理解した梅雨達。

なんで性格が変わるのかという質問の答えにはなっていないが。

「で？なんで？」

「知るかってんだ！気づいたら変わってたんだよ！」

「切り替わるスイッチは？」

「んなもん気分に決まってんだろ！」

「気分なんだ!？」

「バトルだったら作った武器で変わるがな！」

「なるほど」

分かったようで分からない。そういうものだと思ふことにした梅雨達だった。

その時、サイレンが鳴り響く。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください』

すると、周囲の生徒達が慌てて走り出した。

「なに!?なに!？」

「セキュリティってことは、侵入者か？」

「そのようね」

慌てる芦戸。それに刃羅と梅雨が冷静に話している。

出口には人が殺到していた。

「これでは逆に危険だな」

「そうね。誰が侵入してきたのかしら？」

「冷静過ぎるよ2人とも!？」

席から立ち上がることもなく刃羅と梅雨は話している。

それに芦戸が突っ込む。

「しかしな。あの中に突っ込みたくもないだろう？」

「そうだけどき」

「あんな人ごみの中に入ってみる。斬りたくなる」

「ヴィラン的思考!？」

「爆豪に同じこと言ってみろ」

「すいませんでした!」

ガバツ!と頭を下げる芦戸。

すると人ごみの中から誰かが宙に舞い、入り口の上に変な格好でへばり付く。

「大丈夫!!」

飯田だった。

「なにしてんの!？」

「何か分かったのかしら?」

「ただのマスコミです!!何もパニックになることはありません!!大丈夫!!」

飯田は大声で説明して騒ぎを収めようとする。

「マスコミだあ?なあんであのクソカメラ共が入って来てんだあ?」

「確か入り口で止められるはずだよね?」

「あの扉を破ったの?」

「それってもう犯罪じゃないのかしら?」

「よっしゃあ!斬る!!」

「ノオーウ!!」

「うおおお!」

芦戸と葉隠が刃羅に飛び掛かって抑え込む。

そして抑え込まれたまま教室に運ばれる刃羅だった。

その後、緑谷から飯田に委員長交代が提案され、飯田が委員長になった。

その時刃羅は百によって作られた縄で席に縛られていた。

最初は暴れていたが、途中で悟りを開いたかのような表情になり、最後には。

「ああ……♡もつとお……♡」

「ぎだーい!!隣で何かに目覚めた人はどうすればいいですかー」

!？」

「ほつとけ。本題を進めろ」

「そうよお……♡ほつといてえ……♡この幸せをもつとお……♡」

「エロイぞおー!!ぎゅあ!？」

「席に座ってる峰田」

目を蕩けさせて瞳が潤ませながら熱がこもった息をする刃羅に、隣の葉隠が立ち上がって報告する。

しかし相澤が無視を促す。それにさらに蕩ける刃羅に、2つ前の席の峰田が反応するが、それには相澤は反応し席に縛り付ける。

その後も刃羅は放置され、話し合いが終わったころには爆睡していたのであった。

日も変わって水曜日。

「今日のヒーロー基礎学だが……災害水難なんでもござれ人命救助訓練だ！」

相澤の言葉に一同は盛り上がるが、相澤に睨まれてピタつと収まる。

救助はヒーローにとって最も素質が試される活動だ。

ただヴィランを倒すだけでは、ヒーローとは言えない。

「……救助訓練のう。儂に出来るじやろうか？」

刃羅は救助に関しては、イメージすらしたことがない。

刃羅のヒーロー像はステインだ。悪を斬るイメージしかない。

服を着替えるために更衣室に移動する一同。

「あれ？刃羅ちゃん、コスチューム変えたの？」

「そうよおん。まあ、ただズボンと袖を短くしたただけなんだけどねえん」

刃羅は前回の戦闘訓練でズボンが破けたので、サポート会社に修繕と改良を依頼している。それに合わせて上も袖を半袖にした。ナイフを装着していたベルトもズボンの上から身に着けている。

「なんかお色気忍者みたい」

「……なん……ですってえん……!!」

耳郎の言葉に崩れ落ちる刃羅。

「……百っちの方がお色気じゃん！なんで私が言われなさいいけないの!?麗っちだってピチピチでエロイじゃん！それに葉隠っちなんてもう全裸じゃん！なんで私だけ辱められるの!?うわあ〜くん!!」

「え!?ちよつ!うち、そんなつもりじゃ!」

「さりげなく私達もダメージを受けた……」

「乱刀さんの性格変化にまだついていけませんわ」

「私達だってまだついていけてないよ」

大泣きし始める刃羅に慌てる耳郎。

刃羅の言葉に麗日は顔を真っ赤にして、百がジト目で刃羅を見ながら呟くが、それに芦戸が否定の声を上げる。

「そろそろ行かないと相澤先生に怒られてしまうわ」

「あ!いけませんわ!ほら乱刀さん!行きますわよ!」

「びゃ〜くん!!」

「この性格は初めてじゃない?」

「そうね。響香ちゃん、責任を取っておぶつてちょうだいね」

「……仕方ないか」

「びえ〜くん!!」

耳郎が大泣きしている刃羅を背負う。

「ええい!胸も背もデカい……!」

「うっせえな!好きででかくなつたぐえ!」

「泣き止んだなら自分で歩け!」

泣き止んだ瞬間投げ落とされた刃羅。

それに葉隠が手を差し伸べて刃羅を手助けする。

バスに乗り込んで向かった先は、巨大な施設だった。

「すっげー!!!USJかよ!」

「本当に金があるよねえ」

そこはあらゆる災害や事故を想定した救助活動が出来る施設だった。

担当はスペースヒーローの13号。そして相澤だった。

「この授業では心機一転!人命のために『個性』をどう活用するかを学

んでいきましよう」

13号の言葉に全員が拍手する。

そして授業が始まろうとした時、

刃羅はゾワリと背中に寒気が走った。

「!!」

「どうしたの？刃羅ちゃん」

梅雨が刃羅の様子に気づき、声を掛けると、

「一塊になって動くな!!13号!!生徒を守れ!!」

相澤が突然大声で指示を出し始めた。

すると施設の真ん中で黒い渦のような物が現れ、そこから大量の人が出てくる。

「奴らは……!」

「何だアリヤ!?また入試の時みたいなもう始まってんぞパターン?」

「動くな!!あれはヴィランだ!!」

相澤の言葉に一気に緊張が高まる生徒達。

相澤はゴーグルを身に着け、戦闘の準備をする。

刃羅はヴィランを見つめる。

(移動手段はあの黒靄の男。首謀者はあの手みたいな仮面の男か?)

……統率性はない。なのになんだ?この気持ち悪さは)

相澤は避難の指示を出す、1人でヴィランに飛び掛かる。

(プロヒーローは2人。13号は戦闘には向いていない。イレイザー・ヘッドだけでは全て防げん。出るか?)

他の生徒達が避難を開始しようとする、出口に黒靄の男が現れる。

「初めまして。我々はヴィラン連合。せんえつながら……この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは、平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事でして」

それに目を見開く生徒達。

(ここにはオールマイトもいる予定だった。内通者がいるってことか!)

刃羅は齒軋りをする。

すると、黒靄が動き出す。

そこに爆豪と切島は飛び出す。

2人の攻撃は黒い靄で防がれる。

「しい!!」

「!!」

刃羅も斬りかかるが、防がれる。

「ちい!!」

「危ない危ない……そう……生徒とはいえ優秀な金の卵。散らして、
捌り、殺す」

そう呟いた瞬間、ボアっ!と黒い靄が全員を飲み込む。

刃羅も離れようとしたが、飲み込まれてしまう。

「!!」

靄をくぐる様に飛ばされたのは火に囲まれた場所だった。

「……火災ゾーン?遠くに飛ばされたわけではないのか」

周囲を見渡して場所を把握する。

「!!」

「なんだあ?1人かよ」

「つまんねえなあ」

囲むように現れたのはヴィラン達。

ニタニタと笑いながら、刃羅を見る。

(なるほど。バラバラにして殺すつもりでござるか。……1人と、
言っていたでござるな)

刃羅はニタアと笑みを浮かべる。

「二!!」

「な、なんだあ?何笑ってやがる?」

「怖くて壊れたかあ?」

「いや?そつちが殺しに来るなら、私が殺しても不満はないな?屑ど
も」

「……あ?」

両手をロングソードに変える刃羅。

「徒に力を振りまく屑ども……粛清対象だ」

「「ひい!?!」」

刃羅の雰囲気ガラリと変わって、悲鳴を上げて後退りするヴィラン達。

「全ては正しき社会のために……血を流せ!!屑ども!」

新!刃格!

ククリ刀:超M。一人称は「この雌犬」

フランベルジュ:超被害妄想で泣き虫。一人称は「私」

#6 襲撃その2

刃羅はヴィラン達を鋭く睨みつける。

「い、言うじやねえか……！ガキが！」

「強がったって結果は変わんねえぞ？」

ヴィラン達は冷や汗を流しながら強がり言う。

嫌な予感がするが、数では間違いなくヴィラン達の上。

焦ることはないと落ち着かせる。

「ふむ。流石に殺すのは問題があるか。まだここを追い出されるわけにはいかん」

「あ？」

「しかし……そうだな」

独り言をつぶやく刃羅を訝しげに見るヴィラン達。

すると、フツと刃羅の姿が掻き消える。

「は？」

「ぎゃあああ!？」

「あぎい!？」

「ひゃああああ!？」

「「なあ!？」」

「手足の1本くらい斬り飛ばすくらいで十分だろう」

刃羅の一番近くにいたヴィランがポカンとする。

すると、後ろから悲鳴が上がる。振り向くと3人のヴィランが手や足が1本ずつ傍に転がせて、痛みに悶えていた。

それに他のヴィラン達は目を見開く。

刃羅は涼しい顔で次の標的を決めていく。

今度は右手を刀に変える。

「ほれ、呆けておる場合か」

「ひい!?!ぎゃあ!？」

「む?すまぬ。両腕を斬り落としてしもうた。まあ、肘から先じゃ。許してたもれ」

一瞬ですぐ近くのヴィランに近づき、両肘から先を斬り落とす。

刃羅は軽く謝罪して、次の相手に向かう。
次々とヴィラン達を斬り倒して行く刃羅。

「おらあ!! 気合入れて来いやあ!!」

「な、なんだよ!!? こいつは!?!」

「話がちげえ!?!」

指をナイフに変えて斬り刻む刃羅。

狂気染みた笑みを浮かべながら戦う姿にヴィラン達は完全に及び腰になっている。

「……斬」

「いぎやああ!? 足い!? 足があ!!」

「きひひひい!! 斬るよお!!」

「ぎやあー!」

大剣を生み出して両膝から下を斬り飛ばし、足を鎌にして蹴り上げるように腕を斬り落とす刃羅。

刃羅が腕や脚を振るたびに、悲鳴と血と手足が飛び回る異常な光景。

他にクラスメイトやヒーローがいたら、間違いなく刃羅を攻撃するだろう。

10分もしないうちにヴィラン達は床に倒れて、手足を押さえて悶えている。

「これでここは終わりやな。さして、どないしょ? まあ、これなら他の場所の連中もそない問題やないやろなあ」

仮にもヒーロー志望者。戦闘訓練を見ている限り、ある程度は戦闘に心得もありそうだった。

「ほな、イレイザー・ヘッドのところに加勢するべきやな。その途中で誰かおつたら助けたればええか」

刃羅は火災エリアから出ると、隣の山岳エリアで放電を確認した。
「かなりの放電でござるな。上鳴氏か? 行ってみるべきでござるか!」

ダン!と山岳エリアに向かって走り出す刃羅。

周囲に注意しながら鎖鎌を引っ掛けて、山肌を登る。

登り切って、中を確認する。

「……3人、って人質取られてるじゃないのおん。周り倒して油断したのかしらあん？でも捕まってるの上鳴ちゃんじゃなあい。なんで放電しないのおん？……さっきの放電で使い切ったあん？」

他には百と耳郎。完全に手が出せなくなっている。

「……2人では『個性』を使う前に上鳴君殺されちゃうか。仕方ないなく」

刃羅は右手の親指を握り込む。小指側から脇差程度の小刀が生えてくる。

目を鋭く細める刃羅。

「……参る」

脚に力を込めて、ギリギリまで身を低くしながら足音を消しながら一気に駆けだす刃羅。

そして、上鳴を捕まえているヴィランの右斜め後ろに移動すると、一気に飛び上がる。

「しい!!」

「!?ぐうあ!」

「!!」

「ウェイ?」

百達が気づく直前にヴィランの右腕を肘から斬り落とす。

痛みで上鳴を離れた瞬間、刃羅は上鳴を思いっきり蹴り飛ばす。

「ウェイ!」

「ふう!!」

「ぎゃああ!」

蹴り飛ばした勢いで、左足を斬りつける。斬り飛ばすまではいかなかった。

ヴィランは後ろに倒れて、痛みに悶える。

「乱刀さん!」

「助かったよー!」

「構わぬ。ところで……」

「ああ、うん。電気の使い過ぎでこうなるみたい」

「知りませんでしたわ。油断もしてしまいました」

「ならば急いでこやつを連れて離れるでござる。どうやら各ゾーンに振り分けられているようでござる。中央広場を避けて通路に隠れるでござる」

「刃羅は？」

「某はこのまま中央広場に向かうでござる」

そう言っつてすぐさま移動を開始する刃羅。

百の呼び止めるような声が聞こえたが、それを無視する。

中央広場が視界に入ると、刃羅は違和感を覚える。

「戦いが止んでいる？……まさか！」

刃羅は走る速度を上げる。

すると、脳が露出しているような巨漢が相澤を抑え込んでいた。

その横には首謀者と思われる男もいた。

「ちい!!」

「あ？」

「ひゃあ!!」

刃羅は首謀者を無視して左足を大鎌にし、相澤を抑え込んでいる巨漢の両肘を斬り落とす。

すぐに足を戻して、相澤を掴んで飛び下がる。

「なんだ？お前」

「てめえが敵連合の頭か？……随分と馬鹿みてえな行動に出るじゃねえか」

「ああん？」

「死柄木弔」

相澤を抱えて首謀者を睨む刃羅。

首謀者は首元をガリガリと掻きむしりながら、刃羅を睨み返す。

そこに黒い霧が現れる。

「黒霧。13号はやったのか？」

「行動不能には出来たものの散らし損ねた生徒がおりまして……一名逃げられました」

「……は？」

死柄木と黒霧の言葉に刃羅は助けが近いことを悟る。

その時、さつき腕を斬り落とした巨漢の腕が再生していくのを目撃する。

(マジかよ!?あの怪力のくせして再生!?くそが!後ろにもまだ雑魚がいやがる!)

「脳無。あれを殺せ」

すると死柄木が刃羅を指差す。

それに脳無と呼ばれた巨漢は刃羅に顔を向ける。

「ちい!先公!ちよつくら投げつぞ!」

ポイツ!と少し離れた場所に相澤を投げ捨てると、大剣を作り出して斬りかかる。

「……突!」

しかし、その大剣を両腕で掴まれて止められる。

「!!ぐう!」

掴まれたまま振り回される刃羅。叩きつけられそうになった瞬間、大剣を解除して回避する。

体勢を整えようとした瞬間、脳無が殴りかかってくる。

空中だったが、脚を槍に変えて無理矢理回避する。

「身体能力も高いですわねえ!!鬱陶しいですわ!」

脚を戻して着地する刃羅。

すぐさま脳無が右腕を振り上げ、刃羅の頭を目掛けてパンチを繰り出す。

(っ!武器は間に合わない!)

「乱刀さん!!」

遠くで緑谷の声が聞こえたが、それに答えることなく、刃羅は体を捻りながら拳をギリギリで躲す。

そのまま後回し蹴りの如く脚を真上に蹴り上げて、脳無の喉元に蹴りを放つ。

それに目を見開く緑谷達に死柄木。

「っ!っ!いっ!」

刃羅は手応えの無さに目を見開く。

ギロリと何事もなかったように刃羅を睨む脳無。
そして刃羅の脇腹に脳無の左拳が突き刺さった。

「ッおー」

ガァン！と殴り飛ばされる刃羅。

数回地面でバウンドする。

「終わらせろ。脳無」

死柄木の命令をすぐさま実行に移す脳無。

刃羅に向けて走り出す。

「くそっ！」

「緑谷ちゃん！」

「おい!? やめろ緑谷!!」

池に隠れていた緑谷は飛び出そうとしたが、梅雨達に止められる。
その間にも倒れ伏している刃羅に脳無が迫る。

「やめろお!!」

緑谷が叫ぶが、脳無は止まらない。

死柄木はこれから起こることを想像してにやける。

脳無が刃羅を踏みつぶそうとした瞬間、

「……淘汰」

ゾワア!!と緑谷達や死柄木達に寒気が襲い掛かる。

フツと刃羅の姿が消えたと思ったら、いつの間にか脳無の後ろに立っている。

直後、ズバン！と脳無の手足が斬り飛ばされる。

目を見開いて固まる死柄木達に刃羅は顔を向ける。

その顔は無表情だったが、眼が恐ろしく鋭く、冷たい光が宿っていた。

「ら、乱刀……さん？」

「な、な、なんだよあいつう……」

「刃羅ちゃん？」

すると死柄木が再び首元をガリガリと掻きむしり始める。

「は……はあー。ゲームオーバーだ。今回はゲームオーバーだ。
帰ろっか」

死柄木は上を見上げながら話す。
それに緑谷達は訝しげに見つめる。

「何を考えているんだ？……こいつら」

緑谷は死柄木達の行動が理解できなかった。

その時、刃羅が死柄木に向けて走り始める。

「!!」

「とつとと起きろ。脳無」

刃羅の後ろに脳無が腕を振り被って現れる。

刃羅は後ろに目を向ける。

脳無の拳が刃羅の背中に叩き込まれ、刃羅は地面に叩きつけられて倒れ伏す。

「っ!!」

「はぁー……帰る前に平和の象徴の矜持を少しでも……」

死柄木が一瞬で緑谷達の前に現れる。

「へし折って帰ろうー!」

そして梅雨に手を伸ばす。緑谷は全く反応出来ずに梅雨の顔が触られる。

しかし、何も起きなかった。

「……本っ当かっこいいぜ。イレイザー・ヘッド」

相澤は顔だけを動かして死柄木を睨んでいた。

そこに脳無が近づき、相澤の頭を踏む。

その隙を突いて緑谷が死柄木に殴りかかる。

「脳無」

思いつき腕を振り抜いた緑谷。

手ごたえを感じたが、そこには無傷の脳無が立っていた。

「え……」

呆ける緑谷の腕を脳無が掴む。それを助けようと梅雨が舌を伸ばす。

その時、施設のドアが突き破られる。

「もう大丈夫」

声の主を全員が見る。

「私が来た！」

『オールマイトお!!』

「あー……コンティニューだ。待ったよヒーロー。社会のゴミめ」
オールマイトは全く笑っていなかった。

オールマイトは飛び出した瞬間、近くにいたヴィラン達を一瞬で倒し、相澤と刃羅を回収する。

「相澤君、乱刀少女。すまない」

その時、刃羅がピクリと動く。

「あ……ああ……くっつそがあ。降ろせやあ先公。1人で立てる」

先ほど地面に叩きつけられた際に頭を打ったのか、額から血を流しながらオールマイトの手を振り払って立つ刃羅。

「無理をするんじゃない」

「2人抱えて、あそこの3人を助け出すよりは無理じゃねえよ」

刃羅は額の血を腕で拭いながら、緑谷達を見る。

それに気づいたオールマイトは何も言わず、相澤を担ぎ上げる。

そして、一瞬だけ強く死柄木達を睨みつけると、次の瞬間死柄木を殴りながら緑谷達を回収し、元の場所に戻るオールマイト。

「皆、入口へ！相澤君を頼んだ。意識がない。早く！」

死柄木は顔から飛んだ手の仮面を回収しながらボソボソと何かを呟いている。

「オールマイト！駄目です！あの脳みそヴィラン！僕の腕が折れないほどの力だけどビクともしなかった！それにあいつきつと……！」

「緑谷少年」

緑谷がオールマイトに声を掛けるが、それを遮ってニカツと笑う。

「大丈夫」

そして死柄木達に向かって飛び出す。

やや意識が朦朧としていた刃羅は、オールマイトに再生能力について話す余裕がなかった。

「くっ！」

「刃羅ちゃん！大丈夫？歩けるかしら？」

「ああ。問題ない」

「じゃあ離れましょう」

相澤を緑谷と峰田が担ぎ、移動を開始する。

オールマイトの攻撃に脳無はやはりビクともしていなかった。

「……やっぱりあいつう打撃も効かないい」

「うん。……でも、それだけでオールマイトに勝つには。何かあるんだ他にも……」

ドオン!!と脳無をバックドロップして、爆発のような衝撃が走る。それを見ていた刃羅は、

(……? 黒霧って奴はどこ行つた?)

先ほどまでいたはずの黒霧がいなかった。

それに嫌な予感を覚える刃羅。

すると地面に叩きつけられたはずの脳無の上半身が、バックドロップの姿勢になっているオールマイトの真下から腕を伸ばしてオールマイトの脇を挟み込んでいる。

よく見ると、叩きつけられた地面に靄が掛かっている。

「!!ワープゲート!!」

それを見た瞬間、緑谷は梅雨に相澤を担ぐのを交代すると、飛び出した。

「っ?! 馬鹿者が!」

「刃羅ちゃん!」

「オールマイトお!!!」

刃羅も慌てて飛び出す。

緑谷の目の前に黒霧が立ち塞がる。

刃羅は足のナイフを抜いて、投擲しようとする。

「どっ! け邪魔だあ!! デクウ!!」

真横から爆豪が現れ、黒霧を殴りつける。

そして、そのまま実体部分を掴んで抑え込む。

さらに脳無の半身が凍り付き、死柄木に切島が攻撃するが躲される。

脳無が凍り付いた隙にオールマイトは脳無の手から逃れる。

「かつちゃん! 皆!」

「平和の象徴はてめえら如きに殺せねえよ」

轟が死柄木に告げる。

形勢は一気に逆転した。

「攻略された上に全員ほぼ無傷……凄いなあ最近の子供は……恥ずかしくなってくるぜ敵連合」

(……余裕じゃの。しかしオールマイト……やはり弱っておるのか？あの手からも逃れられず、ダメージが多すぎるように見える)

刃羅は油断せずに戦況を確認していく。

死柄木の能力は知らず、脳無はあの程度の氷では止まらない。恐らく命令待ちなだけ。

黒霧は爆豪が見てはいるが、自爆覚悟でワープゲートを使えば危険。

まだまだ油断できない状況である。

「脳無。爆発小僧をやっつけろ。出入り口の奪還だ」

「!!」

死柄木の命令で脳無が動き出す。

それに刃羅は刀を作り出して、飛び出す。

「乱刀!?!」

「奴は再生持ちじゃ!!逃がすな!!」

「!!!!」

脳無は氷漬けになった体を割りながら立ち上がる。

「あの状態で動いてる……!?!」

「いかん!乱刀少女下がれ!なんだ!?!ショック吸収の『個性』じゃないのか!?!」

刃羅はオールマイトの制止を無視して斬りかかる。

再生中の腕を斬り飛ばすが、すぐにまた再生する。

「つ!!再生が速過ぎるじゃろ!リスクなしか!?!ぐぐ!」

「乱刀さん!」

刃羅は脳無の再生速度に目を見開いて愚痴る。

脳無が左腕を振り、刃羅を弾き飛ばす。

そして、爆豪に向けて走り出す。

「超再生だからな。おまえの100%にも耐えられるよう改造された超高性能サンドバック人間さ」

高速で爆豪に向かって走り寄る脳無。

爆豪は全く反応出来なかった。

ゴオウ!!

周囲に爆風を起こして腕を振り抜く脳無。

「かっちゃん!!」

緑谷が爆豪の名を呼ぶが、その爆豪がいつの間にか緑谷の隣に咄然と尻餅を着いていた。

殴り飛ばされたと思われた先にはオールマイトが腕でガードをしているポーズで立っていた。

「……加減を知らんのか……」

「仲間を助けるためさ。仕方ないだろ？ さっきだってその地味な奴が俺に思い切り殴りかかろうとしたぜ？ 他が為に振るう暴力は美談になるんだろう？ そうだろう？ ヒーロー？ 俺はなオールマイト！ 怒ってるんだ！ 同じ暴力がヒーローとヴィランでカテゴリーズされ善し悪しが決まるこの世の中に!!」

両腕を広げて演説する死柄木。

「何が平和の象徴!! 所詮抑圧のための暴力装置だおまえは！ 暴力は暴力しか生まないのだと。おまえを殺すことで世に知らしめるのさ！」「めちやくちやだな。そう言う思想犯の眼は静かに燃ゆるもの。自分が楽しみたいだけだろ。嘘つきめ！」

「バレルの早……」

そこに轟達も改めて参戦の意思を示す。

そこにオールマイトがストップをかける。

「プロの本気を見ていなさい!!」

「脳無、黒霧やれ。俺は子供をあしらう」

「やってみればあ？」

「!!」

「ひょう!!」

「お、おい！ 乱刀!!」

刃羅が前腕に鎌状の刃を生み出して、黒霧に後ろから斬りかかる。黒霧はワープゲートで回避する。刃羅はそれを無視して、死柄木に斬りかかる。

死柄木は紙一重で躲し、後ろに下がろうとする。

「まだまだあー！」

「ちつ。うぜえ」

今度は逆立ちして開脚しながら体を回す刃羅。その両足を大鎌に変えて斬りかかる。

それに死柄木は舌打ちをしながらも避ける。

「ひよろい見た目のくせにいい動きするねえ」

「……」

「けんども!!これはどうだべか!?!」

「ああ?」

「うおんりゃあ!!」

急に方言全開になった刃羅に訝しむ死柄木。両腕を振り上げた刃羅の両前腕から刃が生まれ、斧のようになる。

両腕を思いつき振り下ろす。

死柄木は目を見開きながら横に飛んで躲す。

追撃しようとした際、オールマイトから恐ろしい気迫が放たれて2人は一瞬動きを止める。

そしてオールマイトは脳無と拳を合わせる。

「うおおい!?!策無しに正面からだべか!?!」

「シヨック吸収って、さつき自分で言ってたじゃんか」

「そうだな!」

次の瞬間、脳無と拳の連打を打ち合うオールマイト。

その衝撃に周囲の者達は吹き飛ばされそうになる。

「無効ではなく、吸収ならば!!限度があるんじゃないか!?!私対策!?!私の100%を耐えるなら!!さらに上からねじふせよう!!」

よく見ると血を吐きながら殴り続けるオールマイト。

しかしその拳打はさらに勢いを増す。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの!?!ヴィランよ!?!こん

な言葉を知ってるか!？」

ついに脳無がオールマイトについていけなくなった。

そこにオールマイトが大振りの拳を脳無に放つ。

「Plus Ultra!!!」

ショックを吸収する脳無が、思いつきり吹き飛んで施設の天井に穴を開ける。

「さてとヴィラン。お互い早めに決着をつけたいね」

「チートがあ……!」

死柄木は悔し気にオールマイトを睨む。

その背中に黒霧が現れる。

(……衰えたとしても、元がデカかったから多少でこずったってレベルで収まんのか。しかし……)

刃羅は先ほどの殴り合い中の吐血を思い出す。

今の様子を見ると、吐血するまでのダメージがあるようには見えなかった。

(つまり吐血した理由こそが、オールマイトの衰えの原因と考えるべきか。それをどう探るか……それは此処を乗り切ってからだな)

「衰えた?嘘だろ……完全に気圧されたよ。よくも俺の脳無を……。チートがあ……!」

ガリガリと体を掻きむしりながらブツブツと呟く死柄木。

「全っ然弱ってないじゃないか!!あいつ……俺に嘘を教えたのか!」「どうした!?来ないのかな!?クリアとか何とか言っていたが……出来るものならしてみろよ!!」

ギロンと死柄木達を睨むオールマイト。

それに気圧される死柄木達。

それを見た轟達は下がり始める。

刃羅もジリジリと下がりながら死柄木達の死角に周り、死柄木達から目を離さない。

(……オールマイトは何故終わらせぬのじゃ?このままでは逆に追いかけて何をするか分からぬ)

実際に死柄木はまた苛立ったように首筋をガリガリとし始めた。

(先ほどのあやつの言葉からすると、気分や快樂が前に出る性格じゃ。状況やセオリーでは退かぬ可能性があるので！黒霧もまだ撤退を進言せぬし、強行もせん。つまり、まだ勝機を見定めておるといふこと！)すると死柄木の雰囲気が変わる。

それを見た瞬間、刃羅は飛び出す。

轟達が目を見開くが、声は出さなかった。緑谷はブツブツと何か考え事をしているようだった。

オールマイトも目を見開いているようだが、動かない。

刃羅はフウーと息を吐き、右手を貫手にして構える。

「何より……脳無の仇だ」

すると死柄木と黒霧も飛び出す。

そこに、

「信念無き社会の屑……」

「!!」

「死ね」

刃羅が死柄木の胸に向けて貫手を放ちながら、腕をパルチザン風の槍に変えて伸ばす。

さらにそこに反対側から緑谷が高速で飛んできた。

「オールマイトから離れろ」

目を見開いて拳を握る緑谷。

死柄木は体を捻り、刃羅の槍を脇腹に掠めながら、黒霧に腕を突っ込んで緑谷に伸ばす。

それにオールマイトと刃羅も目を見開いて動こうとしたその時、死柄木の手銃弾が撃ち込まれた。

『!!』

「ごめんよ皆。遅くなったね。すぐ動けるものを集めてきた」

声が響く。

緑谷は勢いそのまま飛んでいき、地面に落ちる。

「I-Aクラス委員長 飯田天哉!!ただいま戻りました!!」

飯田の後ろにはプロヒーローの教師達がズラリと並んでいる。

「帰って出直すか。黒霧……」

逃げようとする死柄木達に銃弾が浴びせられる。

それでも黒霧に潜り込んで逃げようとするが、黒霧が突如何かに引き寄せられ始める。

13号だ。

しかし、それでも徐々に霧に体を埋めていく死柄木。

「今回は失敗だったけど……今度は殺すぞ。平和の象徴オールマイト」

「何を逃げ切る気にいる」

『!?』

死柄木の目の前にパルチザンの腕を構えた刃羅がいた。

目を見開く死柄木に、刃羅は冷え切った眼を向ける。

「粛清対象だ。逃がさん」

腕を振り抜こうとした刃羅。

その槍に銃弾が撃ち込まれて弾かれる。

「があ!? な!?」

「それはヒーローの行動ではないぞ」

「ちいー!」

「な!?!」

刃羅は帯から苦無4本取り出し、ワープゲートに向かって投げる。

それに驚いた教師は再び銃撃する。

2本撃ち落とされたが、2本はワープゲートに入る。

しかし、すぐさまワープゲートが閉じて結果は分からなかった。

「ちい………!?!?ごほっ!」

歯軋りをして苛立つ刃羅。直後、口から血を吐いて崩れ落ちる。

「ゴホッゴホッ!……ギリギリ………だったか。化け物………め………!」

脳無の攻撃で刃羅の体は限界だった。それをただ気迫で耐えていた。

粛清すべき犯罪者がいたから。

「緑谷あー!乱刀あー!大丈夫か!?!」

そこに切島が近づいてくる。

「切島くん………! まっ!」

何やら慌てる緑谷。

そこに緑谷とオールマイトを隠すように地面から壁がせり上がる。
「生徒の安否を確認したいからゲート前に集合してくれ。けが人はこちらで対処するよ」

セメントスと言う教師が切島に声を掛ける。

「そりやそうだ！ラジャツす!!」

納得した切島は離れていく。

「ええ〜……私くらい運んでくれても〜いいんでないか〜」

口から血を流しながら仰向けに倒れてグデェつとしていた刃羅は、目の前まで来ていたのに引き返していく切島に抗議する。

その声は届かなかったが。

痛みもヤバいが、『個性』の使い過ぎで筋肉痛もヤバかった。

「酷いなく……先生〜助けて〜コフツ！」

「血い!?あんたもボロボロじゃない!」

「……俺の銃弾が当たったか?」

ミッドナイトとガンマンハットを被ったヒーロー『スナイプ』が走って近づいて来た。

「銃弾は手だけえ。でもおデツカイ奴に体をボツコボコにいされたあ。骨イツてるかもお?コフツ！」

「血い!?あんたも病院行くわよ!無茶して!」

「それに最後の行動についても帰ってきたら反省文だからな」
「うええ」

担架に乗せられて運ばれる刃羅。

それを梅雨達が見つけて駆け寄ってくる。

「ケロ……大丈夫なの?刃羅ちゃん」

「あたぼうよ!この程度で死ぬ俺っちじゃゴフウ!」

「いやー!!刃羅ちゃん!」

「じぬうく!!私はもうダメだあく!びいえくん!!コフ!」

「もうしゃべらないで。刃羅ちゃん」

「性格が変わるせいで、いまいち心配出来ないですわ」

「でも、血い吐いてるしね」

そのまま刃羅は病院に連れて行かれた。

その頃、調査をしていた警察や教師達は、火災ゾーンの惨劇に顔を顰めていた。

「状況的に乱刀刃羅だろうな」

「見事なほど動脈や急所は避けてますね。命の危険がある者はいませ
ん」

「……そこは守ったことを褒めるべきなのかどうか」

「聞イタ話デハ、ココニ飛バサレタノハ彼女ダケダソウダ」

「命の危機があつたと言えればそれまでだが……」

「最後の行動を見ている限りでは、それまでとは言えんな」

「ステインに攫われていたことが原因……の可能性がありますね」

戦いで完全に無傷で五体満足で捕えろと言うのは無茶であることは承知しているが、ここまであからさまだと逆に問題とされそうである。

しかも最後の明らかに殺意を持った攻撃はかなり問題だった。

状況によつては殺す事を厭わないと言うことだからだ。

「彼女の『個性』も強力なようだしな」

「これはここで話してもしょうがない。校長や相澤先生も含めて話してみないと」

「そうですね」

こうして刃羅は良くも悪くも注目を集め始めたのであった。

その後、病院の検査で右手の骨折、肋骨5本の骨折が確認された。その内の1本が肺に刺さっており、地味に危なかったそうで駆けつけた流女将を泣かせて地味に焦った刃羅だった。

翌日、リカバリーガールに治療してもらい、すぐに退院出来たのでホッとした刃羅であった。

退院した夜。マンションの屋上にて。

「怪我したそうだな」

「うるさい。あんな化け物がいることがおかしいんだ。責任を取れお
師匠。結婚してください」

「元気そうだな。で？どうだった？」

「ちえ〜。……なんかね〜オールマイトのために〜改造した人間を連
れて来てたく。複数の『個性』持ってたく結構ヤバイ奴が〜バツク
にいるかも〜」

「……なるほどな」

「お師匠とは合わんじやろうなあ。俺も殺したくなつたしのう」

「ならば粛清するのみよ。お前はそのまま好きにしている」

そう言って去っていくステイン。

「……来てくれただけえ良しとしようかなあ。連絡先も挟み込んだ
しい。他の子達とも連絡とらないとなあ」

刃羅も部屋へと戻っていく。

こうして敵連合との因縁が始まったのであった。

新！刃格！

バトルアックス：「だべ」口調マックスの樵。一人称は「おいら」
パルチザン：必殺をポリシーにしている。一人称は「我」

#7 体育祭に向けて

刃羅は元気よく教室に入る。

「おっはよう！」

「あ！刃羅ちゃん！」

「もう大丈夫なの？」

「もちろん！骨が肺に刺さったくらいだった！」

「全然大丈夫じゃないよ!？」

「元気になったなら良かったわ」

葉隠と梅雨が声を掛けてきた。

腕をグルグルと回して、元気一杯をアピールする刃羅に、2人や周りはホッとする。

「ん？あれえ？緑谷君もう治ったのお？私より大怪我だったのにい」

「うん。リカバリーガールのおかげだよ」

「あれ凄いよねえ。凄く疲れるけどお」

「僕はずっとお世話になってるからね。また怒られたけど」

緑谷は苦笑いする。

確かに訓練の度に保健室に運び込まれている。

「それにしてもさ！乱刀さんって凄く強いね！あのヴィランにも立ち向かってたし」

「結局は負けたがな。奴らも逃がしてしまった」

緑谷が興奮したように刃羅の活躍を語る。

それに刃羅は顔を顰めて腕を組む。

そこに切島や耳郎達も加わる。

「いやいや！十分だっただろ！」

「だよね。うちらも助けられたし」

「私や峰田ちゃんは動けなかったものね」

「次は斬ってやらあ！」

「それはダメだろ！」

「爆発や氷は良くて斬るのはダメなの!?!差別だあ!?!びやくん！」

「あくあ。泣かしたく」

「ぐっ！」

「相変わらずせわしない性格な奴だ」

コロコロ性格が変わる刃羅に振り回される切島達。

「皆ー！！朝のHRが始める。席に着けー！！」

『へい』

飯田の号令に従って席に着く一同。

そこに入ってきたのは、

「お早う」

「相澤先生復帰早えええ！！」

包帯ぐるぐる巻きの相澤が入ってきた。

全員が目を見開いて驚く。

流石に刃羅も目を見開いていた。

「俺の安否はどうでもいい。っと、そうだな。乱刀」

「ぬ？」

「無理させた。すまん。助かった」

「構わぬ構わぬ。俺もあ奴にぶん殴られたしの。オールマイトが来ねば助けた意味はなかったかもしれない」

「それでもだ。お前がいなかったらオールマイトが来る前に死んでただろうしな」

相澤が刃羅に頭を下げる。

それに刃羅は顔を顰めながらピラピラと右手を振る。

その様子を爆豪や轟が見ていたが、刃羅は特に反応しなかった。

「ただな……」

「ほえ？」

「殺意を込めた攻撃を仕掛けたと言うことで反省文の提出だ」

「嘘やあーん!？」

「明日までだぞ」

「シィーット!!ボンバーマンは!?!エブリデイ殺すって言ってるそのボンバーマンはあ!?!」

「ああ!?!んだテメエ!喧嘩売ってんのか殺すぞ!イカレ女!!」

「ほれ!今も言ったべ!あれは良いんだべか!?!」

「おお!?!新しい!?!」

「爆豪も問題ではあるが、行動までは起こしてないからな」

「アイヤァー!?!」

「おお!?!また新しい!?!」

頭を抱えて崩れ落ちる刃羅。

隣の葉隠は初めて聞く話し方に驚く。

前の席の百も頭を抱えている。

「それは置いといてだ。まだ戦いは終わってねえ」

『!?!』

「戦い?」

「まさか……」

「まだヴィランがー!?!」

相澤の言葉に刃羅を除く全員が訝しむ。

「雄英体育祭が迫ってる!?!」

『クソ学校っぽいの来たああ!!』

全員がホツとする。

刃羅はまだ机に突っ伏している。

「待って待って!?!ヴィランに侵入されたばっかなのに大丈夫なんですか!?!」

「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す……って考えらしい。警備は例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は……最大のチャンス。ヴィランごときで中止していい催しじゃねえ」

雄英体育祭は日本のビッグイベントの1つだ。

『個性』が生まれ、人口が減少した現在では、オリンピックに代わるものとなっている。

テレビ中継もされ、全国のヒーローが注目している。

将来のヒーローのスカウトのために。

「ふくん。要はオーディションみたいな感じい?」

「え!?!刃羅ちゃん知らないの!?!」

「あるのは知ってたけどお中身は見たことないねえ」

「なんてこった！」

「卒業後はプロ事務所にサイドキック入りか定石だもんな」

「当然、名のあるヒーロー事務所にいった方が経験値も話題性も高くなる。時間は有限。プロに見込まれればその場で将来が拓けるわけだ。年に一回……計三回だけのチャンス。ヒーローを志すなら絶対に外せないイベントだ」

相澤の言葉にクラスメイト達が気合を入れる。

（スカウトか。私は目指したいヒーロー像がない。どこかの事務所に入るのはイメージ出来んな）

というか、いつかここに居る者達と敵対する可能性の方が高い。

（あれかな？ 目指す理由とかなんかでっち上げとかないといけなかな）

まだステインに攫われていたという情報は伝わっていないらしい。それについてももう少し矛盾が生じないようにしとかないといけない。

体育祭もどう過ごそうかと考える刃羅だった。

昼休み。

体育祭に燃えている面々を横目に、刃羅はマイペースだった。

というより、落ち込んでいた。

「ズズ……ンマンマ……ああ……もう終わっちゃう」

「今日は一杯だけなん？」

「ズズ……ンマンマ……お金がないのお」

「そう言えば言ってたね」

「ズズ……ンマンマ……ああ……終わっちゃったあ」

刃羅は空っぽになった器を眺めて、肩を落とす。

ジィ〜つと器を眺め、今にも舐めだしそうなほど顔を器に近づけている。

「それにしても体育祭かあ〜」

「楽しみだね！」

「そうね」

「何を準備すればいいべか？」

「いつも通りね。『個性』を伸ばしておくことだと思おうわ」

「センキューー！」

「もう新しいのかどうか分からん」

「だね！」

芦戸と葉隠が刃羅の性格変化に遂に匙を投げた瞬間だった。

その放課後、ヴィラン騒動の余波の大きさを知ったA組だった。

教室の前に物凄い人が集まっていた。

「うおおお……何事だあ!？」

「何しに来たんだよ」

「敵情視察だろ。ザコ。ヴィランの襲撃を耐え抜いた連中だもんな。体育祭の前に見ときてえんだろ」

峰田の言葉に爆豪が貶しながら説明する。

爆豪は邪魔だと告げると、1人の男が前に出て、宣戦布告する。

それにB組だと名乗る男も声を上げて、A組に対して喧嘩を売る。

「盛り上がつとんなあ。うちに勝つたらなんかあるん？」

「周囲の評価は上がるでしょうね。ヴィラン襲撃を乗り越えた生徒を倒したとあれば、スカウトも増えると思いますわ」

「ほえ〜」

「他人事ですわね。乱刀さん」

「勝つことよりさあ目立てばいいんでしょお？」

「その目立つ場所を確保するのが大切なのですわ。勝ち上がればそれだけアピールする時間が増えますから」

「そんなもんだべか」

刃羅は机で筆を走らせながら、百の話に頷く。

「ところで刃羅ちゃんは何してるの？」

「反省文デース！シイット!!」

「明日までですものね」

「納得いかないアル！あそこの爆破男何も言われないアル！」

「まあ、爆豪さんも問題ですが」

少しだけ同情する百達。しかし教師達の言い分も分かるため、何と

も言えない表情をする。

死柄木に迫る刃羅は確かに怖かった。

普段の言動からは想像出来ないくらいに。

「頑張ってください」

「どチクシヨウ！」

「乱刀」

「相澤先生」

ガリガリ！と書いていると相澤がやって来た。

「まだ出来てないよ！」

「少し話すだけだ。その分、少なくしてやる」

「何を話すのだ？」

「あの戦いについてだ」

「めんどいのう」

「体育祭の前に終わらしときたい」

「はあい」

相澤に付いていく刃羅。

その後ろ姿を少し心配そうに見送る葉隠達だった。

連れて行かれた部屋にはオールマイトもいた。

「で？何を話しゃいいんだ？」

「何故最後に殺す事に拘ったのかと思ってね」

「……あいつはステインより危険だ。オールマイトも言っていただろ

う？あいつには信念もないし、気分屋の悪党だ」

「……そうだね」

「黒霧という奴と組まれたままでは、何を起こすか分からん」

「かもしれないが、すぐには動けねえだろ」

「それでもなからう？あ奴は言っておったぞ？『あいつは嘘を付いたのか？』とな。それにあの化け物をあ奴が1人で用意できたとも思
うておるのか？あ奴の後ろにはすでに何者かがおる。あんな化け物
をあんな作戦で使わせるくらいにのう」

「……」

刃羅の言葉に考え込むように黙るオールマイルトと相澤。

「イレイザー・ヘッドはすでに敗れた。オールマイルトも追い込まれるほど。捕獲が難しいならば……殺すことが最善と判断した。それだけのこと」

「……それはヒーローのやり方ではないよ」

「それで悪を逃して被害者を増やすう？それならヒーローも悪だよねえ？被害者からすればあ」

「っ！」

「俺たちはよお、弱ええ奴が殺されるくらいなら悪を殺す。同じ命が失われるなら、その時最も屑な奴を殺す。ステインに攫われて、扱かれて、そう思った」

刃羅は2人の目をまっすぐに見つめて断言する。

それにオールマイルトと相澤は子供と思つて対応すべきことではないと悟る。

それほどまでに信念が込められた覚悟を決めている者の目つきだった。

「……お前。本当にヒーロー殺しから逃げて来たのか？」

「だからここに居るの。あいつは嫌いだけど教えること全てが間違つてたわけじゃないし。私の『個性』をく見極めてみたいだし」

「……そうか」

「……」

「もういいだべか？」

「最後だ。体育祭では殺すな。それに極力殺さねえように捕らえらるような手段を考えろ」

「分かつてるわよおん。殺すに足る理由がなかったらあん、殺さないわあん。血に飢えてはないわよおん」

そう言つて部屋を出ていく刃羅。

オールマイルトと相澤は、今の話を考え込んでいる。

「洗脳というほどではないみたいですが……」

「影響はバツチリ受けているみたいだね」

「……彼女の父親とは何度か会った事がありますが……」

「縮尺ヒーロー『マイスタード』さんだね。私も何度かご一緒したことがあるよ」

縮尺ヒーロー『マイスタード』。

物体を小さくして持ち運ぶことが出来る《縮小》の『個性』の使い手で、瓦礫を小さくしたり、武器やアイテムを小さくして大量に持ち運び、使いこなしていたベテランヒーローだった。5年ほど前にヴィランに殺されてしまった。

「娘さんがいたなんて知らなかったよ」

「俺の知り合いも誰も知りませんでした」

「……もつと彼女の事を知らないかね」

「……そうですね。他の教員にも注意してもらう様に伝えておきます」

「頼むよ」

今、下手に刃羅の考え方を否定すれば、間違いなくヴィランとなってしまう。

それは防がなければならなかった。

刃羅は家に帰って『個性』の鍛練をしていた。

「どうしたもんかのう。武器を増やしても使えるのは1種だけじゃないのう」

同時に使える数を増やせる鍛練はずっとしているが、まだ形になる感じはない。

しかも武器を増やすには実物を手に入れれないといけない。

流石に流女将に武器を手に入れてもらうのは無理だろう。笑顔で凄まれることは確実だ。

「流石にそれは無理だよねえ。今あ、使った事である奴でえまだ作ったことがない奴はあ……鎖鎌かなあ？出来るかなあ？」

体から引き離す事は出来ない。鎖を繋げればいけると考えるが、問題もある。

もし鎖が千切られた場合、体も欠損してしまう。

「……痛いのは嫌！今回は武器形成を速めることに集中！」
と言うことで、方針を決めた刃羅。

その他にも格闘術の練習を流女将やサイドキックに頼んで相手をしてもらうことにした。

その結果……。

「刃羅さん……これでは活動に支障しかないのですが……」

「……アイヤー」

サイドキック全員をボッコボコにしてしまい、翌日のヒーロー活動が休みにさせられた流女将が頭を抱えていたのであった。

新！刃格！

偃月刀：中国娘。一人称は「アタシ」

#8 体育祭その1

大会当日。

校内は出店やマスコミ、観客で大賑わいだった。さらにプロヒーロー達も警備に当たっている。

1-Aは与えられた控室で待機していた。

「コスチュームは無しか」

「普通科やサポート科は持ってないからだって」

「皆！準備は出来てるか!?もうじき入場だ！」

公平を期すために全員体操服での参加となった。

「緑谷。乱刀」

「む？」

「轟君……何？」

轟が話しかけてきた。

「客観的に見ても俺の方が実力は上だと思う」

「へ!?うっ、うん……」

「なんや?いきなり?」

轟の言葉に緑谷はビクツとし、刃羅は顔を顰める。

「緑谷、オールマイトに目え掛けられてるよな。別にそこ詮索するつもりはねえ。乱刀も前の戦いじゃあ決着付いてねえ。だから……お前らには勝つぞ」

いきなりの宣戦布告に緑谷は固まり、刃羅はめんどくさそうに顔を顰めている。

「おお!?クラス最強が宣戦布告!!」

「急にケンカ腰でどうした!?直前にやめろって……」

「仲良しごっこじゃねえんだ。何だって良いだろ」

切島の制止を振り払う轟。

それに緑谷は少しだけ顔を俯かせる。

「轟君が何を思って僕に勝つって言ったんのかは分かんないけど……そりゃ君の方が上だよ……実力じゃあ乱刀さんはもちろん大半の人に適わないと思う……客観的に見ても……」

「緑谷もそーゆーネガティブな事言わねえ方が……」

「でも……!!皆…他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕だって…後れを取るわけにはいかないんだ!僕も本気で獲りに行く!」

緑谷は決意を秘めた目で轟に宣戦布告する。

「……おお」

轟は静かにそれに頷く。

刃羅は特に何も答えずドアに歩いていき、ピラピラと右手を振る。

「……っ!」

それに轟は目を細めて睨みつける。

そして入場口に向かう1ーAの面々。

全員が気合を入れた顔で会場へと進んでいく。

『雄英体育祭!!ヒーローの卵達が我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!どうせてめーらあれだろ!?こいつらだろ!?ヴィランの襲撃を受けたにも拘らず!鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!』

プレゼント・マイクの声が響く。

観客席にいる観客やマスコミも熱気を帯びてくる。

『ヒーロー科!!1年!!A組だろおお!!』

アナウンスと同時に会場に入るA組一同。

刃羅達に会場中の注目が集まる。

「わあああ……人がすんごい……」

「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを發揮できるか……!」

「これもまたヒーローとしての素養を身に着ける一環なんだな」

「めっちゃ持ち上げられてんな……!なんか緊張すんな……!なあ爆豪」

「しねえよ。ただただアガるわ」

「……なんかムカつくう」

「どうどう!!刃羅ちゃん!」

「こればかりは仕方ありませんわ」

その後も他のクラス達も入場してくる。

他のクラスもA組に注目している。

「……なんかムカついてる」

「どうどうどう!? 刃羅ちゃん!」

葉隠が一生懸命刃羅を宥めている。

「選手宣誓!!」

ピシヤン!とミッドナイトが壇上に立ち、鞭を振って進行する。

どうやら彼女が1年生の担当らしい。

「選手代表!! 1ーA爆豪勝己!!」

「ホワッツ!? ボンバーマン!? ホワイ!? ボンバーマンが宣誓して、ミーが反省文! この扱いのディフェレンス!」

「根に持つてるわね。刃羅ちゃん」

爆豪はポケットに手をつ突っ込んだまま壇上上がる。

「せんせー」

嫌な予感がするA組面子。

「俺が1位になる」

「絶対やると思った!!」

他のクラスどころかA組からもブーイングが飛ぶ。

それに爆豪は更に煽る行動をする。

「まあ、どっちにしる私達は嫌われているからな。今更だろう」

「そこは許すんだ」

「この大会中に手足のどれかをもらう」

「許してなかった!」

少し狂気が宿った笑みを浮かべる刃羅。

それに葉隠や芦戸は巻き込まれないように刃羅から離れる。

「さーてそれじゃあ! 早速第一種目行きましよう! いわゆる予選よ! 毎年ここで多くの者がティアドリンク!!」

スクリーンが展開され、ドラムスクロールが鳴り響く。

「さて運命の第一種目!! 今年は……コレ!!」

スクリーンに表示されたのは「障害物競争」。

「計1ークラスでの総当たりレースよ! コースはこのスタジアムの外周約4km!」

すると、スタート地点と思われるゲートが開いていく。

その前に生徒達が我先にと集まっていく。

「我が校は自由さが売り文句！コースさえ守れば何をしたって構えわないわ！」

そしてゲートの上についている3つのランプの1つが消える。

刃羅は周囲の人とゲートの先の通路を確認する。

すると、刃羅は突如靴を脱ぎ捨てた。

2つ目のランプが消える。

「刃羅ちゃん？」

「スタートが要じゃの」

「へ？」

梅雨と葉隠が首を傾げる。

そして3つ目が消える。

「スターーーーート!!」

一斉に駆け出す生徒達。

しかし、ゲートが狭すぎてギチギチになり詰まってしまう。

「おらあ!!どきやがれえ!!」

「っ?!乱刀さん?!壁を!」

「ず、ずりいぞ!」

刃羅は壁を指して走り出し、足の裏にスパイクのように刃を生み出して、一気に壁を走って抜き去る。

しかし、それより先に進むものがいた。

轟である。

轟は通路の出口付近に氷を張り、足止めを凶っていた。

「はっ!!やっぱクソイケメンが仕掛けやがったなあ!!」

「甘いわ。轟さん!」

「そう上手く行かせねえよ半分野郎!!」

A組の面々も読んでいたようで『個性』を使って躲す。

『さーて実況していくぜ!解説アユーレディ!!ミイラマン!!』

『無理矢理呼んだんだろが』

刃羅は壁から飛び出すと、今度はスケート型に刃を生み出して地面を滑走する。

轟を追いかけようと、クラスメイト達や他クラスの生徒達も猛然と走る。

その先は広場だったが、

『ぎゃあーいきなり障害物だ!!まずは手始め……第一関門口ボ・インフェルノ!!』

現れたのは入試で現れた巨大ロボの軍団だった。

「多すぎて通れねえ!!」

(確かに多いが……あれは動きは鈍い!一気に足元に入り込む!!)

刃羅は躊躇せず滑り出す。

しかし、その前に轟がしゃがんで冷気を生み出した。

「!!」

そして一気に冷気を放ち、ロボ達を凍らせる。

凍り付いたロボの足元を走り抜ける轟。

それに続こうとする他の生徒達。

「……ほんまに、いやらしいなあ。轟坊っちゃんは」

刃羅は両手を太刀に変える。

すると、凍ったロボット達のバランスが崩れて倒れていく。

『1-A轟!!攻略と妨害を一度に!!こいつあシヴィー!!』

倒れたロボットはバリケードのように後続の道を塞ぐ。

『すげえな!!一抜けだ!!アレだな。もうなんか……ズリイな!!って、

おおおお!!もう1人飛び出したぜクレバー!!』

「!!」

轟が顔だけで後ろを振り返ると、すぐ後ろにいたのは。

「ちよいと舐めすぎやよつて。轟坊っちゃん」

「乱刀……!」

『1-A乱刀!!いつの間にかどうやりやがったあ!?その腕イカしてるじゃねえかー!!』

『……腕の刀と足の刃で倒れてきてたロボの破片を足場にしやがったな』

『マジで!?どんな神経してやがるんだブレイドガール!?!』

刃羅は太刀で破片を斬り飛ばしたり、足場に来るように細かく斬

り分けながら、移動していた。

1つでも行動を間違えば破片に埋もれてしまう。そうなれば無事では済まなかっただろう。

それを刃羅は顔色1つ変えず、当然と言う表情でやり遂げたのだ。腕と足を戻して着地する刃羅。

「ほれ、どないしはったん？轟坊っちゃん。わっちを凍らせんでよろしおすか？」

「……（まだ先が分からねえ。消耗は出来ねえか）」

不敵に笑いながら挑発する刃羅。

轟はそれを無視して、足を速める。

刃羅はチラツと後ろを見ると、他の面々も続々とロボットを躲していた。

『一足先に行く連中。A組が多いなやつぱ!!』

「おくおく。爆豪坊っちゃん飛び越えてきてはるやん。これはすぐ追いつかれてまうなあ」

刃羅は爆発させながら飛んでくる爆豪を見て、すぐに追いつかれることを悟る。

しかし、特に妨害や速度を上げることなく走り続ける。

すると、後ろで更にデカイ爆発音が響き、続いて轟音が轟く。

見ると巨大ロボットが尻餅を着いて倒れていた。

「ワアオウ!!派手デースー!」

「……（相変わらず性格が掴めねえ。後ろ見る余裕もあって、汗1つ掻いてねえ）」

轟は刃羅がまだまだ余力を残しながら、自分から付かず離れずの距離を保って走っていることに警戒を強める。

読めないのは話し方が変わるたびに走り方も変わっていることだ。

それでもスピードは変わらないし、バランスを崩すこともない。

得体のしれない女。それが轟の刃羅に対する評価だった。

次の障害は綱渡りだった。

底は見えず、落ちたら間違はなく脱落扱いだろう。

『落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!ザ・フォーニール!!』

轟は立ち止まることなく、綱を渡り始める。

(流石に同じ綱は渡れねえな!!)

刃羅は轟とは異なる綱を選び渡り始める。

綱はしっかりと固定されていた。

「これなら思いきり走れるアル!」

「っ!」

刃羅はほぼスピードを落とすことなく、走り抜けていく。

それに轟もスピードを上げていく。

そこに爆発音が近づいてくる。

「アイヤ〜。爆豪には綱なんて関係ないアルか!ここは仕方ないアルか」

爆豪が空を飛びながら渡ってくる。

刃羅には空を飛ぶ手段はない。

後ろを見ると、どんどんと差を詰めてきている後続。

「むうー!身体強化タイプに有利!」

『とか言いながら渡った綱斬り落としてるじゃねえか!!』

『まあ、常套手段だな』

刃羅は渡り切った瞬間、自分が使った綱を斬り落としていく。

それにより遠回りすることになる後続組。

刃羅は轟達より少し遅れて第二関門を突破する。

「スピードアップでござるー!」

ドン!と速度を上げる刃羅。

すでに轟の後ろ姿が小さくなっている。

『先頭は一足抜けて、下は団子状態!そして早くも最終関門!!かくしてその実態は……一面地雷原!!怒りのアフガンだ!!地雷の位置は良く見りや分かる仕様になってんぞ!!目と脚酷使しろ!!』

「もう少し私に優しくしてよお!びいえくん!!」

『おお!?どうした乱刀!?さっきの不敵さドコに失くした!?』

『ほっとけ。すぐにまた変わる』

『変わるの!?クレバーだな!!』

刃羅は泣きながらも的確に地雷を躲していく。

『大泣きしながら軽やかに躲しやがんな!!逆に怖ええぞ!!』

前や後ろで爆発が起こりながらも刃羅はピョンピョン!と地雷を躲していく。

「はっはぁー!俺は関係ねえー!!」

ここで爆豪が轟に追いついた。

『ここで先頭が変わったー!!喜ベマスメディア!!おまえら好みの展開だああ!!って、また来たああ!!』

「!!」

「おんどりやああ!!」

『ホントに元気になってやがんな!若い子分かんねー!』

刃羅が一気に間を詰める。

刃羅は轟と爆豪が足を着けた場所を踏んで走っているので、地雷を踏む心配はしていない。

そして2人に後3mも無くなった時、

ボボオオオオオオン!!!

「!!!」

『後方で大爆発!!?何だあの威力!!A組緑谷、爆風で猛追!!?っつか!!』

刃羅の真上を何かが通り過ぎ、轟達をも超えていく。

それは鉄の板に乗った緑谷だった。

『抜いたああ!!』

「なんじゃそりゃあ!」

刃羅も目を見開いて緑谷を見る。

「デクア!!俺の前に行くんじゃねえ!!」

「後ろ気にしてる場合じゃねえ……!」

爆豪が手で爆破を起こして、飛び出す。

それに轟が地面を凍らせて道を作って追いかける。

「ラツキ〜!」

轟が作った氷の道を刃羅は足の裏に刃を生み出して滑り出す。

失速した緑谷に追いついた爆豪達だが、そこに緑谷が紐で縛っていた板を振り回して爆豪と轟の間の地面に叩きつける。

カチカチカチつと何かを踏んだ音がする。

「うえ!?!」

ボオオン!

板が叩きつけられた地面が爆発する。

3人の真後ろにいた刃羅はモロに爆発を浴びる。

『緑谷!・間髪入れずに後続妨害!・なんと地雷原即クリア!!イレイザー・ヘッド!お前のクラスすげえな!!どういう教育してんだ!』

『俺は何もしてねえよ。奴らが勝手に火イ付け合ってたんだろう』

「ブホオア!?!あのモジャ毛え!!」

刃羅は爆煙で体を黒くして走る。

『さあさあ序盤の展開から誰が予想できた?!今一番にスタジアムに還ってきたその男……緑谷出久の存在を!!』

歓声上がるスタジアムに刃羅もゴールする。

観客席の方を見てながら何か感極まっている緑谷を見つけると、

「緑谷あ!!」

「え!?!」

「あなた!!よくも乙女の顔に爆風と煙に土を被せてくれましたわね!!
どう責任取って頂けるんですの!?!」

「ええ!?!ごめん!?!……ち、近い」

刃羅は目を吊り上げて緑谷に詰め寄る。

緑谷は謝りながら顔を真っ赤にする。

そこに麗日や飯田も近づいてくる。

刃羅は5位だった。

爆発に巻き込まれている間に1人抜かれたのだ。

「むう〜!」

「これも勝負よ。刃羅ちゃん」

「でも、確かに髪の毛煤だらけだね。ってか髪硬!?!」

「毎日頑張って手入れしてるのに〜!」

「そつちに怒ってたんだ」

「刃羅ちゃんも女の子だものね」

頬を膨らませていた刃羅を梅雨、葉隠、麗日が宥めている。

顔を煤は拭いたが、髪はまだ汚れていた。

刃羅の髪はかなり硬めで毎日朝早くから手入れをして、柔らかくして纏めている。

時間が経つと硬くなるので、今は手入れしたくても出来ないのだ。

「次、絶対ボコボコにしたる！」

「これはデク君が悪い」

「そうね」

「そうだね」

女の髪は命である。

それを穢した罪は重いのだ。

「予選通過は上位42名!!次からいよいよ本選よ!!」

ミッドナイトが進行する。

「さーて第二種目よ!!私はもう知ってるけどくく何かしら!?言ってる傍から！」

そしてスクリーンに表示されたのは、【騎馬戦】だった。

「騎馬戦？」

「個人競技じゃないけどどうやるのかしら？」

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ！」

基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど1つ違うのが、先ほどの結果に従い各自にポイントが振り当てられること！」

その説明に腕を組み、意味を考える一同。

「つまり組み合わせによって騎馬のポイントが違ってくると！」

「あんたら私が喋ってんのにすぐ言うね!!!ええそうよ!!下から与えられるポイントは5ずつ!そして1位に与えられるポイントは1000万!!!」

ポイントが告げられた瞬間、全員が緑谷を見る。

刃羅に至っては舌なめずりすらしている。先ほどの恨みもあり、完全にハンターになっている。

それを察知しているのか緑谷はダラダラと冷や汗を掻いている。

「上位の奴ほど狙われちゃう!!下剋上サバイバルよ!!」

「きひひい!いいねえ!斬っていいよねえ!」

「それは駄目よ。刃羅ちゃん」

新！刃格！

太刀：京都弁。一人称は「わっち」

#9 体育祭その2

第二種目【騎馬戦】。

1位の緑谷1000万ポイントに全員が目の色を変える。

それに緑谷は気圧され、プレッシャーを感じているようだった。

「制限時間は15分。振り当てられたポイントの合計が持ち点となり、騎手はそのポイント数が表示されたハチマキを装着！終了までにハチマキを奪い合い、保持ポイントを奪い合うのよ。取ったハチマキは首から上に巻くこと。そして重要なのは、ハチマキを取られても、また騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ！」

その内容に腕を組む刃羅。

「うむう。終了まではチャンスがあるということでござるか」

「いったんポイント取られて身軽になるのもありだね」

「それは全体のポイントの分かれ方を見ないと判断しかねるわ。三奈ちゃん」

『個性』発動アリの残虐ファイト！でも……あくまで騎馬戦!!悪質な崩し目的の攻撃などはレッドカード！一発退場とします！それじゃこれより15分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

制限時間を聞いて一斉に動き出す出場者達。

「んだなあ……おいらの『個性』はあまり使えねえだな。ポイントは190P。おいらより上位陣と組むのは下策だべ」

緑谷は論外。絶対に狙われるからだ。

轟は宣戦布告してきた相手と組むとは思えない。

爆豪も行動が読めないし、上位陣で固まると、ターゲットになるだけ。

4位もまたしかり。

すると、そこに近づいてくる者がいた。

紫の髪に目の下に隈がある男。前に爆豪に宣戦布告していた男だ。

「ちよつといいか？」

「なんじゃ？……」

「はい決まり」

男、心操の声掛けに応えると、意識が遠のく刃羅。
それに心操はニヤリと笑う。

「じゃあ、俺とチーム組んでもらおうか」

「お断りしますえ」

「!？」

「なるほどなく。呼びかけに答えるとき意識を奪うのか。いい『個性』だね」

「な……なんで？」

「俺たちの人格全部に影響しなかったんは残念だったなあ」

心操の『個性』は強力だが、刃羅の人格1つだけしか影響させられなかった。

刃羅の人格は記憶や目的などは一致しているが、思考や判断は異なる。

そこまでは操れなかったようだ。

心操は悔しそうに歯軋りする。

それに刃羅はピラピラと手を振って去っていく。

「下手なチームはデンジャラス!! チームは2人でもオツケーデース!

だったら……Ms. 梅雨!」

「ケロ。刃羅ちゃん」

刃羅は梅雨に声を掛ける。

梅雨はまだチームを組んでいないようだった。

「俺たちと組もう!」

「根拠を聞かせてもらえないかしら」

「もっちゃで! 梅雨さんの『個性』は壁にくつつく力もあるやんな?」

「そうね」

「更に舌も伸ばせる。梅雨ちゃんには騎手になってもらいたいのだ。

そして私はスケートして戦場を滑りまわる」

「ケロ。ということは騎馬は刃羅ちゃんだけ?」

「如何にも。某の『個性』では攻撃を仕掛けられぬでござる。しかし、その代わり防御や機動力は下手に組むよりは高いと考えるでござる」
「……」

梅雨は刃羅の提案を聞いて、イメージしているようだ。

「騎馬を組むことで戦略は増えるが、機動力は確実に犠牲にすることになるはずじゃ。『個性』で補っても15分ずつとはあり得んじやろ？」

「そうね」

「私1人ならくアクロバティックな動きがく出来るからくそんな動きしてもへばり付けてく舌で遠くのハチマキを狙える梅雨ちゃんならく勝算は高いと思うんだく」

「……分かったわ。よろしくね刃羅ちゃん」

「こちらこそおんよろしくねえん」

梅雨のポイントと合わせて340ポイント。

チームを決めた刃羅と梅雨は他のチームの分析に入った。

「クソイケメンは委員長に副委員長、ビリビリ野郎か」

「爆豪ちゃんは切島ちゃん、三奈ちゃん、瀬呂ちゃんみたいね」

「ふむ。何だかんだでしたっかりと考えたチームだな」

「手強いわね」

「緑谷、爆豪、轟の3組は最初は無視すんべ。他チームのハチマキ奪つてから、行ければ狙うべ」

「そうね」

そして15分が経過した。

『さあ上げてけ鬨の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!!狼煙を上げる!!!』

梅雨を肩車して、仁王立ちする刃羅。

「さあ斬り刻むぞお」

「駄目よ刃羅ちゃん」

『START!!!』

開始と同時に駆け出す全チーム。

刃羅は直ぐに足を止めて、戦場の動きを見る。

やはり緑谷、轟、爆豪をターゲットにしている組がチームが多い。

「A組は面倒な組み方アルね」

「そうね。他のチームから行くべきね」

「よっしゃー！行くぞゴラァー！」

足裏に刃を生やして滑り出す刃羅。

猛スピードで滑り、頭から角を生やしている女子のチームに迫る。出来る限り蛇行するように滑り、相手がバランスを崩した瞬間、一気に後ろに回り込む。

その瞬間を狙って梅雨が舌を伸ばしてハチマキを奪う。

さらに両脚を槍に変えて飛び上がり、体を捻りながら手を巨大化している女子チームの真上に飛ぶ。

下を向いた瞬間、梅雨がまたも舌を伸ばしてハチマキを奪う。

「あ!?しまった!？」

「2つ！次でござるー！」

「アクロバティックね刃羅ちゃん」

『スケーティング！アーンドアクロバティック!!蛙吹チーム！』

縦横無尽な動きでハチマキを奪う!!騎馬ってなんだっけ!？」

地面に下りた瞬間に再び滑り出す刃羅。

周囲を見て他チームの状況を確認する。

「んく?なんかくB組連中のくハチマキ多いねく」

「本当ね」

『7分経過した現在のランクを見てみよう!』

そしてモニターに表示された点数に観客席がどよめく。

『……あら!?ちよつと待てよコレ……!A組緑谷以外パツとしてねえ……つてか爆豪あれ……!?!』

刃羅と梅雨はモニターを見ると、爆豪のポイントが0だった。

「うちらは6位やな。つちゅーか爆豪はん獲られたんかい!？」

「B組みたいね」

「ほなー！狙いはこのままB組やー！」

「分かったわ」

刃羅は続いて轟に向かっていている2人組のチームに迫る。

一気に後ろから迫り、抜きざまに梅雨が奪う。

「げ!？」

「イヤッファー!!Ms. 梅雨パーフェクト!」

「サンキューよ刃羅ちゃん」

「ぬ?っ?!いかん!?飛ぶぞ!梅雨嬢!!」

「え?」

いきなり飛び上がった刃羅。

直後、電撃が襲い掛かった。

「びばばばばば!?!」

刃羅と梅雨は空中で痺れる。

今度は地面が凍り始めるのが目に入る。

「シィーット!バット!ノープロブレーム!!」

両足先をスパイラルカッターに変えて、回転させて着地して氷を砕く。

その周囲のチームは騎馬達の足が凍り、固定されてしまう。

刃羅は急いで飛び出し、氷の範囲から脱出する。

「梅雨ちゃん!大丈夫!?!」

「痺れたわ。でも大丈夫。刃羅ちゃんは?」

「まだまだ行けますえ。せやけど……」

「そうね。もうハチマキ持つてるチームがほとんどないわ」

現在、ハチマキを持っているのは緑谷、轟、B組のキザ男、B組の切島みたいな男、さつきハチマキを奪った巨大な手になる女、そして刃羅達。

緑谷と轟チームが向かい合い、キザ男は爆豪とやり合っている。

切島みたいな男のチームも他のチームに囲まれている。

「選択としてさつきの女だね」

「でも彼女もこつちを警戒してるわね」

「そうよねえん」

刃羅達は現在5位。

「……緑谷と轟の所は避けたいな。あの影に氷に雷は厄介だ」

「爆豪ちゃんの所も荒れてるわね」

そのまま状況を見ながら残り1分になる。

その時、

『逆転!!轟が1000万!!』

『さらに爆豪チーム2本奪還で3位に!!』

「でかい手の女に行くぞー!」

「了解よ」

まだ5位のまま、一番可能性があるのは動けない者。

刃羅は一気に滑り出す。

『ここで蛙吹チームも動いたあ!狙いは……拳藤か!』

後ろから迫るが、手を巨大化させて振り回す拳藤。

動き回り、舌を伸ばすが払われてしまう。

「だあ!クソイケメンの氷が邪魔だゴラァ!!」

「ちよつと厳しいわ」

「これは奪わせないよ!」

『爆豪容赦なしー!!物間チームのポイント全奪取ー!!』

それを聞いた刃羅と梅雨。

「これで4位か?」

「そうね」

「残り時間は?」

「30秒もないと思うわ」

すると爆豪チームが轟と緑谷達の所に迫る。

「厳しいのう!」

「このまま狙うべきだわ」

「んだな!」

「くっ!」

脚を槍に変えたりと縦横無尽に動く刃羅。

拳藤も取られまいと両手を振り回して、舌や接近するのを防ぐ。

そして、時間が過ぎていく。

『TIME UP!!』

その声と同時に足を止める刃羅。

「お疲れ様ね刃羅ちゃん」

「梅雨ちゃんもね」

梅雨を下ろして互いを労う。

『早速上位4チーム見てみよか!!1位轟チーム!!』

「だよね！」

『2位爆豪チーム!!』

「やっぱり強いわね爆豪ちゃん」

『3位鉄で……アレエ!?おい!!!心操チーム!』

「あれえ？」

『そして4位は緑谷チーム!!』

「ホワツツ!」

「やられたわね。どうやら轟ちゃんのハチマキを取ったみたい」

『以上4組が最終種目へ進出だあぁー!!』

ギリギリで逆転された刃羅達は5位。

順位が低いチームを狙ったことと、元々の持ち点が低い事が勝敗を分けたのだった。

そして1時間の昼休憩となった。

刃羅は観戦に来ている流女将の元に向かうことにした。

その途中で、

「ん?緑谷に轟?」

2人が連れ立って離れていく。

興味を惹かれた刃羅は隠れて付いていくことにした。

そして陰に隠れて2人の会話に耳を澄ませる。

「……親父は極めて上昇志向の強い奴だ。ヒーローとして破竹の勢いで名を馳せたが……それだけに生ける伝説オールマイトが目障りで仕方がなかったらしい。自分ではオールマイトを超えられねえ親父は次の策に出た」

何やら思いつめたように話す轟。

刃羅は関係者入り口の陰で隠れて聞いている。

「個性婚、知ってるよな。自身の個性をより強化して継がせるために配偶者を選ぶ。実績と金だけはある男だ。親父は母の親族を丸め込み、母の『個性』を手に入れた。記憶の中の母はいつも泣いている……「お前の左側が醜い」と母は俺に煮え湯を浴びせた」

轟の話に緑谷は息を飲む。

「ざっと話したが俺がお前につつかかんのは見返すためだ。クソ親父

の『個性』なんざなくたって……使わずに一番になることで奴を完全否定する」

轟の誓いに緑谷は何も言えなかった。

刃羅もそれを腕を組んで聞いている。

轟は話を終えたように刃羅がいる入り口側に歩き始めて外に出る。

「言えねえなら別にいい。お前がオールマイトの何だろうと俺は右だけでお前の上に行く」

その言葉に緑谷も続いて入り口から出てくる。

「僕は……ずうつと助けられてきた。さつきだつてそうだ……僕は、誰かに助けられてここにいます。だから僕だつて負けらんない。僕を

助けてくれた人達に応えるためにも！だから……僕も君に勝つ！」

改めて宣戦布告する緑谷。

それを刃羅は入り口真上の建物の屋根にしゃがんで座っており、2人の様子を見ていた。

「青春つてやつだねえ。それにしてもお……微妙な信念だねえ。轟はあ」

刃羅は轟を冷めた目で見つめる。

「まあ同情するに値するかもだけどそこで親父さんに張り合つたらしく同じじゃんね。結局親子は親子か」

刃羅は立ち上がり、移動を始める。

「轟は実力があるが信念が足りず、爆豪は才能があるが資質が足りず、緑谷は信念があるが実力が足りない。見事に三角関係だな。故にいがみ合う……か」

歩きながら3人のことを考える。

似ているようで似ていない。

「実力は時間をかければいい。されど信念と資質は？難しい。それ故に2人には緑谷を忌み嫌う。眩しいだろうな。あの信念は」

間違いなくオールマイトに似ているのは緑谷だ。

今いる全ての英雄も、英雄を目指す者もオールマイトを意識せざるを得ない。

だからこそオールマイトに似ている緑谷の行動は、自分達に思い知

らせる。

自分達はオールマイトのようにはなれないのではないかと。

それは1番に拘っている轟と爆豪には認めがたいものだろう。

「……不適合」

刃羅はゆつくりと歩き続ける。

「偽物は……粛清する」

刃羅は流女将と合流し、食事を共にする。

「ズズ……ンマンマ……おかわり！」

「……本当によく食べますねえ」

「ズズ……ンマンマ……だって動いたもん！」

「そうですね。頑張っていましたね。惜しかったです」

「ズズ……ンマンマ……悔しかった！」

「ふふふ。それは大事な感情ですよ」

流女将も本日は警備に来ていた。

刃羅の後見人として知られているので、学校側が休憩時間を配慮してくれたのだ。

「ズズ……ンマンマ……なんかあ轟君に宣戦布告されちゃったんだよねえ」

「轟？エンデヴァアの息子さんですね。何かしたんですか？」

「前にい訓練で戦ってえ決着ついてないからかなあ？」

「なるほど。白黒付けたがる子なのですか」

「ズズ……ンマンマ……そうみたい」

「エンデヴァア自体も上昇志向の塊ですからねえ。彼の消火を何度したんことか」

ため息を吐く流女将。

流女将の『個性』は『水流操作』。水の流れを操る能力だ。水そのものを操るわけではないため、流れている水がないといけない。

故に彼女のサイドキックには水を生み出す者が多い。

「彼ももう少し落ち着けばいいのですが……」

「無理じゃね？家庭荒れてるみてえだしよ」

「……知ってるのですか？」

「さっきな。緑谷に話してんのを盗み聞きした」

「……そうですか」

再びため息を吐く流女将。

どうやら流女将もエンデヴァー親子の問題を知っているようだ。

刃羅は特にそれ以上追及せずラーメンに舌鼓を打つ。

結果7杯のラーメンを食べて、流女将や周囲を呆れさせた刃羅だった。

時間になり、スタジアムに戻ると、

「……なんでチア服着とるんや？」

「峰田さん！上鳴さん！騙しましたわね!!」

刃羅以外の女子全員がチア服を着て、死んだ顔をしていた。

百の言葉からどうやら峰田達の策略であるようだ。

「ってゆーか!!なんで乱刀は着てないんだよ!!」

「ああん!?誰が着るか！斬るぞゴラァ！」

「ぎゃああああ!!」

「落ち着いて刃羅ちゃん」

「どうどう！刃羅ちゃん！」

騙したことを棚に上げて、峰田が刃羅を指差して抗議してくる。

それに刃羅はキレて、指をナイフにして追いかける。

峰田が悲鳴を上げながら逃げる。

もう少しでナイフが届きそうになると、梅雨の舌が刃羅の胴体に巻き付き回収される。

「何故こうも峰田さんの策略にハマってしまったの私……」

「アホだろアイツら……」

「まあ本選まで時間空くし、張り詰めててもしんどいしさ……いいんじゃない!?やっつたる!!」

「透ちゃん好きね」

「離せ梅雨！あの屑葡萄を斬らせろ！」

「駄目よ」

刃羅はバタバタと暴れているが、梅雨の舌を振り解くことはなかった。

なんだかんだで無理矢理振り解くことはしないことを知っている梅雨は、刃羅の後ろでニコニコと刃羅を見ている。

『さあさあ皆で楽しく競えよレクリエーション!!それが終われば最終種目!進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式!!1対1のガチバトルだ!』

「トーナメントか!」

「楽しそうじゃのう……」

「そうね」

「それじゃあ組み合わせのくじ引きしちゃうわよ。組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります!」

ミッドナイトがくじの箱を取り出す。

すると、進出が決定していた内の2人が辞退を訴える。

尻尾が生えた男と少しポツチャリした男だった。

それをミッドナイトが認める。

「ということは5位の蛙吹チームの繰り上がりね!丁度2人だし」

「どうしましょうか刃羅ちゃん」

「せつかくでござる。出させていただくでござる」

「じゃあ私もあるわ」

「おっけい!!これで16名よ!」

「あれ?ヒーロー科A組しかいなくね?」

「しかたねえだろ。結果だし」

そしてくじを引き、組み合わせが決まる。

刃羅の1回戦の相手は、

「上鳴はんか」

「乱刀とかよ!?!」

「さっきの電気の仕返ししたる!」

「手足は斬り落とさないでね!?!」

「レクに関しては進出者16名は参加するのしなないも個人の判断に委ねるわ!」

『よしそれじゃあとーナメントはひとまず置いてイツ東の間
!!楽しく遊ぶぞレクリエーション!』

刃羅はレクリエーションに参加せず、人がいないところでのんびり
することにした。

「上鳴君か。あの電気は厄介だよね」

林の木の根元に腕と座禅を組んで考える。

「どうやっても私では触れなければならない。相性は最悪だ」

放電も帯電も刃羅には防ぐ手段がない。

顔を顰めて悩む刃羅。

しかし解決策は思い浮かぶことはなかった。

「……仕方ないの。やれるだけやるかとするかのう」

そして刃羅は目を閉じて瞑想に入る。

掴んだチャンスを活かすために、戦いに向けて集中するのだった。

#10 体育祭その3

レクリエーションも終了し、いよいよ最終種目が始まる。

『ハイガイズ・アアユウレディ!?色々やってきましたが!!結局これだぜガチンコ勝負!!』

プレゼントマイクの進行に観客達が盛り上がる。

『頼れるのは己のみ!ヒーローでなくともそんな場面ばかりだ!分かるよな!!心・技・体に知恵知識!!総動員して駆け上がれ!!』

A組も観客席で観戦している。

刃羅も観客席に移動していたが、

「……………くか……………くか」

「……………緊張感の欠片もありませんわね」

「ある意味刃羅ちゃんらしいけどね!」

「乱刀が緊張してる方が逆に怖いよな」

刃羅は爆睡していた。

寝ぼけ眼で現れ、座った瞬間に寝息が聞こえてきたのだ。

その姿に百、葉隠、砂籐は呆れていたり感心していた。

「あれじゃん上鳴。あんた眼中に入れられてないんじゃない?」

「ぐう!?見てろよお……………ぜってえ勝つてやる!」

耳郎の言葉に上鳴は悔しそうに顔を顰めて気合を入れる。

そして1回戦が始まる。

『一回戦!!成績のわりに何だその顔!ヒーロー科緑谷出久!!バーサス!!ごめん!!まだ目立った活躍なし!普通科心操人使!!』

ステージで向かい合う緑谷と心操。

互いに気合を入れている様子にA組の面々も妙に緊張してくる。

『レディイイイイイイ……………START!!』

開始の合図直後、緑谷が何やら怒ったように歩き出す。

しかし直後、歩みを止めてしまい唾然と固まる。

『緑谷完全停止!?アホ面でピクリともしねえ!!心操の『個性』か!』

「デク君……………!?!」

「どうしたんだ!?!」

「何やら開始直前から会話してたようですが……」
『全つつつつ然目立ってなかったけど！ひよつとしてヤベエ奴なのか！』

緑谷の様子に観客やA組の面々も騒めき出す。

「……《洗脳》だな」

「え？」

「うおお!?起きてたの!?!」

「どういうことだよ?・乱刀」

いきなり声を上げた刃羅に葉隠は驚き、その内容に切島が尋ねる。

刃羅は腕を組んで静かにステージを睨んだまま話を続ける。

「騎馬戦の時、奴に話しかけられた直後に一瞬意識が飛んだ。恐らく奴の問いかけに応えることで発動するのだろう」

「乱刀はどうやって解除したの?」

「人格を変えることで逃れた」

「全く解決策になってねえ!?!」

耳郎の言葉に刃羅が答えると砂籐が突っ込む。

それを刃羅は無視して話を続ける。

「辞退者の様子から考えれば、恐らく刺激によって解除されるのだろうが……1対1の場外アリでは最悪の『個性』だ」

刃羅の言葉に全員が緑谷に注目する。

すると、心操が命令を出す。

それに緑谷は従い、心操に背を向けて歩き出す。

「いかん!・場外になってしまっぞー!」

「起きろおおお!!!緑谷!!!」

「……あのような『個性』の使い手が普通科にいたなんて」

「当然だ。あの試験であの『個性』は全く活かせん。操って倒したところで洗脳したことが分かってもええなければ一切ポイントが入らん」
「それもそうだな」

「だからこそ……奴はこの体育祭に賭けているのだろう。爆豪に宣戦布告したのは、それだけの覚悟を示すためだったというわけだ」

刃羅の言葉に推薦入学以外のクラスメイト達は息を飲む。

今の自分達の位置が試験の形式のおかげでもあると理解したからだ。

そして場外まで後1歩と迫った緑谷。

その時、バギ！と言う音がして緑谷の左指から衝撃が放たれる。

「！！？」

『これは……緑谷!!とどまったああ!!』

(どうやった？完全に支配されていたはず……指だけ解除された？そんな中途半端な掛かり方で今まで勝ち残れるわけではない)

刃羅は訝しげに目を細める。

例え指だけ解けたとしても意識まで解除はされていないはず。

(他の奴らは記憶はなかったように見える。なのになぜ緑谷だけ意識が残っている?)

刃羅が考えている間に緑谷は動き出す。

指を押さえながらも、心操に向かっていく。

心操は慌てたように再び洗脳しようと緑谷に話しかけている。

もちろん緑谷は答えない。

それを見た刃羅は席から立ち上がる。

「刃羅ちゃん？」

「決着はついた。もう見る価値はない」

「……刃羅ちゃん？」

刃羅は眠たげな顔のまま、観客席から離れていく。

それを梅雨は首を傾げて、見送る。

「どうしたのかしら？」

「新しい人格の子なんじゃない？」

「だったら良いのだけど……」

それにしても随分長い間同じままだったと梅雨は思っていた。

今まであんなに長く同じ人格だったことは梅雨達の前ではなかった。

「試合の前ですから……集中しているのでは？」

「……そうね」

百の言葉に梅雨は頷くもどこか納得し辛かった。

しかし、それを否定出来るだけの根拠もなく、梅雨は心配そうに刃羅が去った通路を見つめるしか出来なかった。

控室に入ると、中には轟が出てくるところだった。

「……」

「……」

「……正直良かったぜ。あんな形で決着付けたくなかったからな」

轟の言葉に刃羅は特に答えることもなく、椅子に向かう。

それに轟は歯軋りをして、刃羅を睨む。

椅子に座った刃羅は腕と足を組んで、目を閉じる。

「……てめえ……!」

「くか〜……くか〜……」

「くっ!」

轟は刃羅に詰め寄ろうとしたが、寝息が聞こえて足を止める。

それに苛立ちを隠せずに顔を顰めて、扉から出ていく。

刃羅はそれにも反応せずに寝続ける。

『乱刀刃羅さん。準備をしたらステージまで出てきてください』

呼び出しの放送が入り、目を開ける刃羅。

ゆっくりと立ち上がり、扉から出てステージに向かう。

その途中で轟とすれ違う。

轟は刃羅を睨むが、刃羅は目を合わせることもしなかった。

今回は轟も詰め寄ることもせず、その背中を見送った。

『それじゃあ!!次の対決!!』

そしてステージ上に刃羅と上鳴が向かい合う。

『不思議エッジガール!!乱刀刃羅!!バーサス!!スパークキングキリング
ボーイ!上鳴電気!!』

上鳴は刃羅を見据える。

(接近されたら帯電があっても勝ち目はねえと思うべきだ。なんだか
んだで轟の氷も突破しやがった奴だしな)

上鳴は刃羅を過小評価せず、戦略を決める。

しかし、その刃羅の様子が少しおかしい。

「……なんか静かじゃねえか？」

刃羅は全く話さず、少し顔を俯かせて立っている。

上鳴は妙な胸騒ぎがしてきた。

『START!!』

「……わりいけどよお!!一瞬で終わらせっぞ!!」

バヂイ!と体に電気を走らせる。

放電しようとした瞬間、

「……殺す」

ゾワア!!と上鳴を始め、観客全員の背中に怖気が走った。

それにスタジアムや近くにいたプロヒーローの一部が反射的に立ち上がり、構える。

一瞬呼吸が止まり、思考が止まった上鳴。

気づくと、刃羅が目の前まで腰横に右腕を構えて迫っていた。

「!!」

目を見開く上鳴。

刃羅と目があつた瞬間、その冷たさと鋭さに体が硬直する。

そして刃羅は腰を捻り、がら空きの上鳴の鳩尾に右拳を鋭く叩き込む。

あまり鋭さに拳が上鳴の体を貫くイメージが頭を過ぎった観客達。

上鳴は体をくの字に曲げて、後ろに吹き飛んでいく。

「つつつつ!!?」

上鳴は声を上げることも出来ず、場外に飛び出し、壁に叩きつけられる。

「がっ!!……あ……!!」

受け身も取れずに倒れ伏す上鳴。

ダメージが大きく立ち上がることが出来なかった。

それどころか今どうなっているかも分からないほど、意識が朦朧としていた。

「フウー……」

刃羅は息を吐きながら、構えを解く。

それと同時に恐ろしかった雰囲気が霧散する。

未だに観客達は息を飲んでおり、スタジアムがシーンと静まり返っている。

『……な、何が起こったんだ……？というか上鳴生きてんのか……？』

それに慌てて控えていたセメントスが上鳴に近寄る。

状態を確かめて、ミッドナイトに問題ないと合図を送る。

ミッドナイトは腕のタイツを破って、刃羅のすぐ横まで近づいていた。

あの怖気が走った瞬間、咄嗟に刃羅を止めようと動いていたのだ。

「んお……！」

刃羅はグイグイと両腕を上げて伸びをする。

そしてダラン！と腕を下ろすと、ドテンと尻餅を着く。

「ちよ、ちよつと!?大丈夫なの？」

「うい……あれね……疲れる……眠い……」

「……差がありすぎるでしょ」

「んあ……上鳴君は……無事……」

「はあ。無事みたいよ」

「んあ……よかつた……」

「全くビビらせないですよ……」

「うい……だつて……近接メインの……あたし……一撃で……」

「……決めないとか……負けっぱ……思つた……」

物凄く眠そうで、間延びした話し方をする刃羅。

それを聞いていたミッドナイトは若干イライラしてきていたが、内容を聞いて納得は出来た。

「だからって……あんなに怖い雰囲気させなくてもいいじゃないの！」

「んあ……あたし達……一気……あれだけ……」

「……あの速さで一気に決められるのは、あの怖いだけ？」

「ういゝ……」

「……あつそ。で？もう立てる？」

「んあゝ……」

なんとか刃羅の話を理解出来たミッドナイトは、頭を抱えながら刃羅を促す。

それにゆつくり頷いた刃羅は、一度後ろに倒れて逆立ちするように体を持ち上げて、飛び起きる。

「いよっしゃあ!!二回戦だぞゴリア!!」

「さつさと戻りなさい」

「はいな」

いつも通りの雰囲気に戻った刃羅。

ミッドナイトの言葉にテクテク歩いてステージを去っていく。

『本当によくわかんねえ奴だなオイ!!とりあえず乱刀刃羅!超怖ええ瞬殺で二回戦進出!』

一切歓声が上がらない勝利宣言だった。

刃羅は眠たげな顔で観客席に戻る。

「ただいま…………あれ？」

誰も答えてくれないことに首を傾げる。

A組の面々は複雑な表情を刃羅に向けている。

「あれがなく怖がらせたく？」

「怖かったわ刃羅ちゃん。……本当に怖かったわ」

「っ、梅雨ちゃん？」

「刃羅ちゃんがいなくなったかと思ったの」

ポロポロと涙を流し始める梅雨。

それに刃羅もアワアワと慌て始める。

他のクラスメイト達も梅雨の言葉に同意するように頷く。

「だ、大丈夫だよ!あたしはあたしだからね!」

「刃羅さん」

「ほえ？」

両腕をブンブンして梅雨を慰める刃羅に、後ろから声を掛ける者が

いた。

後ろを振り向くと、そこに立っていたのは流女将だった。

笑顔だが、明らかにこめかみをピクピクと痙攣させており、背中に不穏な気配を纏っている。

「ひいえ!? な、流女将さん……ど、どうしたのお? し、仕事中止じゃないのお?」

「そうですがね……すう……あんなことしてかして仕事に集中出来ると思っっているのですか!!」

「す、すみませぬう!?」

引きつかせた笑みを浮かべながら、流女将に質問する。

それに簡単に頷いた流女将は、息を軽く吸った直後、刃羅を怒鳴りつける。

刃羅は椅子に座り込んで、頭を抱えて謝罪する。

いきなり現れ、刃羅を怒鳴りつける流女将の登場に梅雨やクラスメイト達はポカンとする。

「あなたはヒーローを目指している自覚があるのですか!? あんな殺気を出して!!」

「だ、だつてえ! 上鳴君に勝つにはあそれくらいしないとお厳しかったのお! あのスピードとお一撃出せるのはああの人格だけなのお!!」

「だからつて殺すとか言う必要がありますか!」

「それはわたくしに言われても困りますわ!? 表に出た人格までコントロールなんて出来ませんもの!」

「それをどうにかするために入学したのでしよう!! 技や『個性』ばかり鍛える場所ではないですよ!!」

「うう………むう〜!」

完全に言い包められて、目尻に涙を溜めて頬を膨らませる刃羅。

流女将は両手を腰に当てて、刃羅をまつすぐ見つめる。

「この方は……」

「お流れヒーロー『流女将』だよ! 火災や水害で活躍するベテランヒーロー! 多くの女性ヒーロー達の先導者としても有名だね!」

「流石ヒーローオタク緑谷」

「でも、何でそんなヒーローが乱刀に？」

2人の様子を緑谷達が眺めていた。

それに気づいた流女将がクラスメイト達に向かって頭を下げる。

「お見苦しいところを見せて申し訳ありません。刃羅さんがお世話になつております」

「い、いえいえ！私達だつて助けられていますし！」

「一緒に居て楽しいですから！」

「そう言っていただけで助かります。でも大変でしょう？コロコロと変わつて」

「「はい。まだ分らないです」」

「即答!？」

「ふふふ。そうでしょうね。私もまだまだ知らない子がいるようですからね。さつきの子だつて初めてですから」

「……流女将は乱刀さんの親族なんですか？」

「……まだ話してないのですか？」

「別によくね？」

「まあ、そればかりはあなたが決めることかもしれませんが……」

「知りたいわ。刃羅ちゃん」

流女将は少し顔を曇らせるが、そこに梅雨が声を上げる。

まっすぐに刃羅と目を合わせる梅雨。

それに刃羅は腕を組んで顔を顰める。

「……今は……まだ駄目だ」

「刃羅さん……」

「話すなら全員にだ。こんなところで話せるものじゃない」

「その時はちゃんと話してくれるかしら？」

「約束しますえ」

「なら、待つわ」

「おおきに」

頭を下げる刃羅。

流女将はそれを微笑んで見守る。

その間に飯田が勝利していたのは、誰も気づかなかつた。

流女将が仕事に戻り、刃羅は少し拗ねたように椅子の上で膝を抱えている。

梅雨は試合に備えて控室に行っている。

「うえ〜い」

「お。上鳴！無事だったか」

「何があつたのか全く覚えてねえ」

「まあ、一瞬だったしな」

「ちきしょ〜」

上鳴は肩を落として、椅子に座る。

それを砂籐や瀬呂が慰める。

そしていよいよ梅雨の出番となった。

梅雨の相手は切島だった。

「相性的には蛙吹が有利か？」

「そうでもないね〜」

「そうなの？」

「梅雨はんの強みは遮蔽物や高低差があつてこそ活かされんねん。真っ正面からやと、活かせるのは舌だけ。やけど、切島はんの《硬化》には叩きつけても効果はあらへん。巻きつけた所でや、振り回す前に舌に攻撃されたら終わりや。梅雨はんの舌は諸刃の剣や」

刃羅の説明に頷くクラスメイト達。

「ならば梅雨ちゃんは持久戦狙い？」

「が、ベストでござるな」

試合が始まった。

梅雨は間合いを見計らっている。

切島が硬化して飛び出す。

梅雨は回り込むように動きながら、舌で牽制するように伸ばしている。

「でも、切島もそれは分かつてるよな？」

「当然だべ」

「どうするんだろうな？」

「切島様は見た通り短期決戦狙いですわね。しかしだからこそ、綻びも出やすいですわ。梅雨様がそれを気づいていないわけではない」

「綻び?」

「全身を硬化し続けるのはねえん、かなりの集中力がいるわあん。だからこそおん、攻めることと硬化を続けることを同時にやり続けるだけのおん集中力が無いといけないわあん」

梅雨は舌を高速で動かして、切島の足や胴体を叩く。巻きつけることまではしていないようだ。

切島は焦ったように飛び出していく。

それを梅雨は高く飛び跳ねて躲す。

「やっぱり梅雨は良く見てるデース」

「切島はかなり焦ってきてるな」

「でも梅雨ちゃんは巻きつけに行かないね。叩いても効果はないのに」

「いや、かなり有効打アル」

「え?」

「ダメージつちゆう意味やありまへんえ。舌で叩くことで切島坊っちゃんに全身の硬化を意識させとるんですわ。いつでも巻きつけますえってなあ」

「なるほど。それで切島は全身硬化を続けざるを得ず、煽られてることで早く倒さなければと焦って、集中が出来なくなってきたということか」

刃羅の説明を障子がまとめる。

それに全員が戦況を理解する。

「ぐっ!」

すると切島が左足を叩かれて顔を顰める。

それを見逃がさなかった梅雨は、すぐさま舌を伸ばして右足に巻き付ける。

「やべっ!」

切島は慌てて手刀で舌を叩こうとする。

梅雨は舌を離して、一気に駆けよる。

切島は手刀を地面に叩きつけて、しゃがむ形になってしまい、梅雨の突撃に気づくのが遅れた。

「げっ!?!があ!!」

「ケロ。一気に行くわ。切島ちゃん」

「うわあ!?!」

梅雨は切島の顔にドロップキックを浴びせる。

吹き飛ばされて後ろに倒れる切島。

すかさず梅雨は舌を伸ばし、切島の右足に舌を巻きつけて振り回す。

硬化も解けてしまい、勢いに乗ってしまったために舌を振り払えない切島。

そして梅雨は切島を場外に投げ飛ばした。

「切島くん場外!!蛙吹さん二回戦進出!!」

ワアアアアアアア!!

「くっそー!」

「ごめんなさいね。切島ちゃん」

「やっぱり良く見てやがるなあ!蛙吹は」

「ケロケロ」

こうして梅雨も二回戦進出を決めたのだった。

新!刃格!

クレイモア:眠たげで間延びと途切れ途切れな喋り方が特徴。一人称は「あたし」

殺意マックスの刃羅さんはもう少し後で!

#11 体育祭その4

1 回戦最終試合の爆豪VS麗日は、麗日の健闘及ばず爆豪が勝利を収める。

試合が終わった爆豪は観客席に戻って来た。

「おう、なんか大変だったな悪人面」

「組み合わせの妙とは言え、とんでもないヒールっぷりだったわ爆豪ちゃん」

「うるっせえつつんだよ黙れ!! そのコロコロ女よりはマシだろが!!」

「ホワイ!? ボンバーマン!! ミーは飛ばしたりしてないデース!」

「どっちもヒールだったよ」

「まあーしかし、か弱い女の子によくあんな思い切りのいい爆破出来るな。俺はもーつい遠慮しちゃって……」

「何もしてなかったわ上鳴ちゃん」

「……」

爆豪は不貞腐れたように椅子に座る。

続いては、轟と緑谷の試合。

「轟と緑谷か……。緑谷が厳しいよな」

「あの氷は本当に卑怯だぜ」

1 回戦で轟に一瞬で凍らされた瀬呂がブルリと震える。

「緑谷ちゃんは完全な接近タイプだものね」

「勝機はある。轟が舐めている限りはな」

「舐めてる? 轟ちゃんが?」

「氷しか使わぬ時点で某達を舐めてるでござろう?」

刃羅の言葉に悩ましそうに顔を顰めるクラスメイト達。

「確かに氷も強いけどお、炎の方が緑谷君にはあ厄介だろうねえ。砕くとかは出来ないしい」

「言われればそうだな」

「個性を使いこなせてへん緑谷はんと、頑なに個性を制限しとる轟はん。意地をどう通すかやな。勝敗を分けるんは」

「緑谷ちゃんはまたボロボロになりそうね」

「なるに決まっていますわ。それだけ本来2人の間には差があるのですから」

「ケロオ」

梅雨は不安そうにステージ上に立つ2人を見つめる。

『今回の体育祭！両者トップクラスの成績!!まさしく両雄並び立ち今!!緑谷バーサス轟!!START!!』

開始と同時に氷を生み出す轟。

それに緑谷は右腕を突き出すと、指を弾いて衝撃を放って氷を砕いた。

『おオオオ!!破ったああ!!』

「一回戦で見せた指での衝撃波!!」

「いよっしや!防いだぞ!!」

「……これで3本」

「3本?何がだ?乱刀」

「緑谷氏が壊した指でござる。1回の氷結に1本ずつ指を壊さねば氷結は防げぬということござる。それも瀬呂氏に使ったものより弱い氷に対して」

クラスメイト達は目を見開いて緑谷を見る。

緑谷は今度は人差し指で弾いて、氷を砕く。

「さらに言えば、これで両手の指を壊しやがった。これで緑谷は全力で拳が握れねえ。ただでさえ全力を出せねえ緑谷の一番の武器がこれで更に弱体化しちまった」

「あ!?!マジか!」

「でも、指でもかなりの衝撃じゃない?」

「轟様は攻撃と同時に背後にも氷作っていますわ。これは間違いなく飛ばされないようにとの備えですわ」

「対策まで出来てんのかよ……!?!最強すぎんだろ」

すぐさま氷を放つ轟。それに緑谷はまた指を犠牲にして、また氷を砕く。

しかし、轟は冷静な顔でさらに氷を放つ。

「これで右手は使い切っただ」

それを見た轟は走り出して、氷を生み出しながら緑谷に向かう。今度は左手指で弾くが、轟は氷を足場に飛び上がり緑谷に迫る。緑谷のすぐ横に飛び降りた轟はすぐさま氷を放つ。

それに緑谷は左腕を振り抜いて、今までより大きな衝撃波を放つ。

轟はすぐさま背後に氷を張り、飛ぶのを防ぐ。

「無茶をする。これで左腕は使えん。右手指も全滅。手詰まりだな」

「緑谷ちゃん……」

「轟の判断力もすげえな。あんな威力出されたら、中々詰めれねえよ」
「緑谷氏の『個性』が分かっているからでござるよ。使えば体を壊すのが分かっているから、対策さえ出来れば危険は低いと考えたのでござるうな」

「なるほどな」

緑谷は満身創痍。

轟は涼し気に立っている。その時、轟が緑谷から視線を外し、観客席に視線を向けた。

しかし、すぐさま視線を戻し、トドメの氷を放つ。

「どこを見ているんだ……!」

緑谷は再び衝撃波を放ち、氷を砕く。

油断していた轟は場外ギリギリまで飛ばされるが、氷を張って場外負けを防ぐ。

それに刃羅やクラスメイト達は目を見開く。

「ただでさえ壊れている指で、さらに弾いた!」

「なんて無茶すんだよ!」

(……何でそこまでえ?……ん?なんか轟君震えてるっていうか霜?)

よく見ると轟の左半身に霜が降り始めている。

「『個性』だって身体機能の1つだ。君自身冷気に耐えられる限度があるんだろう……!」

緑谷の言葉に刃羅は自分の推測が正しかったと理解する。

「でもそれって、左側の熱を使えば解決出来るんじゃないのか?……」

皆、本気でやってる！勝って……目標に近づくために……一番になるために！半分の力で勝つ!?僕はまだ君に傷1つつけられちゃいないぞ！全力でかかって来い!!」

壊れた右手を握って轟に怒鳴る緑谷。

それに息を飲む一同。

「緑谷ちゃん……」

「……」

今の緑谷の気迫に刃羅は表現する言葉が見つからない。

轟はなにやらイラついている様で、再び飛び出す。

「……遅い……い……」

緑谷が轟以上の速さで懐に潜り込む。

(ここで攻めるか……!しかも、轟の右足が浮いたところを狙ってじゃと!?)

緑谷は壊れた右手を握って、轟の腹に拳を叩き込む。

しかし満足に殴れなかったのか、場外までは吹き飛ばせなかった。

轟は氷を生み出すが、最初の勢いはなかった。

「……体が冷えすぎるとお氷も弱くなるんだねえ」

緑谷は轟の氷を親指を口で弾いて砕く。

それに轟はバランスを崩す。

「なんでそこまで……」

「期待に応えたいんだ……!笑って答えられるような……かつこいいヒーローに……なりたいたいんだ!!」

緑谷の気迫に轟は気圧される。

「だから全力で!やってんだ皆!君の境遇も君の決心も僕なんかには計り知れるもんじゃない……!でも……全力も出さないうで一番になって完全否定なんて、フザけるなって思ってる!」

轟は氷を生み出そうとしたがうまく出せず、緑谷の拳が再び突き刺さる。

なんとか起き上がる轟。

「君の!力じゃないか!!」

緑谷が叫ぶ。

それに刃羅は轟が話した家庭事情を思い出す。

(……そこまで腕を壊して、轟の力を引き出すか。……いや、そこまで考えてはいないか。ただ納得出来ないだけか……)

そこまで才能があるのに、そこまで実力があるのに、ただ一つに固執して中途半端でいる轟を。

常に一杯一杯な緑谷には、誰よりもヒーローを馬鹿にしてるように見えたのだろう。

その時、轟の左半身から巨大な炎が噴き出した。

「うアツチイ!？」

「なんて熱量だよー!」

刃羅は目を細めて2人を見据える。

(笑っておるわ……信念を破ったのに……相手が本気になったのにのう……)

2人は笑って互いを見ている。

刃羅はその姿がとてつもなく眩しく見えた。

(……さて、この勝負……どれだけの者が価値に気づけるのだろうか) 実力はなくとも間違はなくヒーローの本質を見せた緑谷。

その本質に揺さぶられ、歪んだ信念で固められた殻を破った轟。

そして、2人はこれで最後とばかりに力を籠める。

轟は炎によって霜が溶けている。

緑谷も足に力を籠めて、飛び出そうとする。

「っ!!」

「刃羅ちゃん!？」

それを見た瞬間、刃羅は席を飛び出した。

梅雨が呼び止めるが、それを無視する。

それにセメントスとミッドナイトも動き出す。

轟は巨大な氷を放ち、緑谷は右手を構えて勢いよく飛び出す。

2人の間に壁がせり上がる。

しかしその前に轟が左腕の炎を放つ。

バツコオオオオオン!!!

大爆発が起こる。

観客席にも衝撃が襲い掛かる。

ステージ上には粉塵が立ち上がる。

『何今の……おまえのクラス何なの……』

『散々冷やされた空気が瞬間的に冷やされ膨張したんだ』

『それでこの爆風つてどんだけ高熱だよ！つたく何も見えねー！オイ
これどうなって……！』

煙が晴れていく。

そこで見られたのは、

「っ!!刃羅ちゃん!」

「何してんだよ!」

刃羅がステージ脇に立っていた。

左上半身の上着が破れており、下着も破れるギリギリだった。

その右脇には緑谷が抱えられていた。

「……乱刀」

「はあく……全く加減を知らぬのか。お主らは」

緑谷は意識がないのか動かなかった。

「もう少しで頭から壁に叩きつけられとったで……」

「乱刀さん!あなた何して……!」

「あんな壁と眠り香程度で止められるわけないべ。ほれ、場外で意識もねえだ。リカバリーガールの所に連れて行くだよ。いいだべな?」

「っ……!緑谷くん場外!轟くん3回戦進出!!」

ミッドナイトの宣言に轟は未だ啞然としている。

乱刀はそんな轟を一瞥する。

「轟」

「っ……なんだ?」

「次は某でござる。その左腕を使う覚悟を決めておけ」
「……」

刃羅は答えを聞かずに緑谷を抱えて、歩き去る。

それに轟は左手を眺めて、立ち尽くす。

「これ治りますのん？」

「右手の粉碎骨折。もうコレ、キレイに元通りとはいかないよ」

「アイヤ〜」

「あんたは大丈夫かい？」

「服が破けた位だし〜大丈夫〜」

リカバリーガールが待機している保健室にいる刃羅。

ベッドの横に骸骨のような男が立っている。

(…………この気配…………まさか?)

刃羅はこの男の気配に覚えがあつた。

質問しようとした時、扉が開かれる。

『デ緑ク谷くくん!!!』

「に、刃羅ちゃん」

「ついでかいな!!」

飯田、麗日、梅雨、峰田が押し掛けてきた。

「あ。試合大丈夫う？」

「ステージ大崩壊のための補修タイムと、乱刀さんの状態確認だそう
だ」

「元気です！」

「うひょー!!」

「上着を着て!? 刃羅ちゃん！貰ってきたから！」

「サンキュー！」

胸が零れ落ちそんな刃羅に峰田が興奮し、梅雨の舌に顔を叩かれ
る。

麗日が慌てて上着を渡す。それを受け取って、羽織る刃羅。

「怖かったぜえ緑谷。あれじゃあプロも欲しがんねえよ。乱刀もだけ
ど」

「塩塗り込んでいくスタイル感心しないわ」

「でも、そうじゃなか」

「はん！俺っちはともかく、緑谷で怖がってたらヒーローなんてなれ
ねえよ」

「…………乱刀さん」

「轟君がくほつとけなかつたんでしょ？勿体無かつたもんね。固執し続けるのは」

「……」

「では、私は行く。委員長との試合もあるし、着替えもしたいしな」

「……ありが……とう」

緑谷の礼に刃羅は右手を上げるだけで答える。

そして部屋から出る。

他の面々もリカバリーガールに追い出された。

梅雨が刃羅の元に駆け寄る。

「刃羅ちゃんも本当に大丈夫なの？」

「もちろんですわ」

「乱刀さん!!」

梅雨の質問に笑顔で頷くと、飯田が声を掛けてくる。

「次は僕とだ。……正直、君に勝てる気がしない」

「飯田君……!?!」

「上鳴君との戦いや先ほど緑谷君を助けた行動……僕では無理だ。さつきなんて全く動けなかった」

「それは私達もよ飯田ちゃん」

「しかし!!!」

飯田は思い詰めたように俯いて両手を握り締める。

それに麗日や梅雨が声を掛ける。

それには答えずに飯田は声を上げて顔を上げる。

「それでも僕だつて上を指すのを止めるわけにはいかない。だから……僕は君に勝つ!!」

まっすぐに刃羅を見て宣言する飯田。

それを刃羅もまっすぐに見つめ返す。

ニイ〜と笑う刃羅。

「ひい?」

刃羅の笑みに峰田がビビる。

「いいねえいいねえ！斬りがいがあるねえ！好きだよお！そういうのおー」

「斬つちや駄目よ刃羅ちゃん」

「わあつてるよ！それだけ楽しみなんだよ！」

「ならいいけど」

「本気で来なはれ飯田坊っちゃん。わっちはその上に行きますよつて」

「ああ！挑ませてもらうー！」

そして刃羅は控室に向かう。

飯田も刃羅に背を向けて歩いていく。

麗日は飯田を、梅雨は刃羅を追いかける。

峰田は忘れ去られたように放置されていた。

刃羅は更衣室で下着も着替え直す。

「飯田ちゃんはかなり速いわよ」

「けんども駆け出しは遅いべ」

「そこを狙うの？」

「否。それは向こうも考えているはずでござるよ」

着替えを終えた刃羅はストレッチを始める。

「梅雨ちゃんは大丈夫なのお？爆豪君でしょお？」

「そうね。でも出来ることなんてないもの。だったら刃羅ちゃんの心配するわ」

「嬉し〜」

にへらと笑う刃羅。

それを見た梅雨は、上鳴との戦いで見せた殺気が嘘のように感じてしまう。

流女将の言う通り、梅雨は刃羅の事をほとんど知らない。

彼女がどのように生きて来たのか、何も知らない。

知っているのは不思議な性格と確かな実力だけ。

刃羅の待つてほしいという言葉を、梅雨は今はまだ信じて待つだけだった。

「では、行ってくる」

「頑張つてね」

「おうよー」

梅雨に見送られて控室を出る刃羅。

それを笑顔で梅雨は送り出し、駆け足気味で観客席に戻るのだった。

『ステージも直ったのでさっそく行くぜえええ!!もう壊さないでくれよ!』

『轟と爆豪が残ってる時点で諦めろ』

『うつせえ!それじゃあ選手入場だ!まずは特急真面目ボーイ!飯田!!』

飯田がステージに上がる。

『1回戦といい、さつきといい、俺はもう分かんねえ!!ミステリークレイジーガール!乱刀!!』

呼ばれた瞬間、刃羅が飛び出して体操の床競技のように前転したり捻り宙返りしながら、ステージに飛び上がる。

着地して両腕を掲げて、両手の人差し指と小指を立てる。

「YEAHHHHHHH!!」

『今度はパリピかよ!?!ホントになんなのコイツ!』

『多重人格なんだよ』

『あ。そうなの?つて、ハアア!?!』

『だから1回戦のもその中の1個ってだけだ』

刃羅はハイテンションで右足左足交互にステップを踏んでいる。

『もう訳わかんねえ!じゃ、START!!』

合図と同時に飯田が猛ダッシュする。

刃羅はそれを変わらずステップをして見つめている。

飯田は訝しげに眉間に皺を寄せるが、構わずスピードを上げてエンジン音を吹かして蹴りを放つ。

「レシピロバーストー!」

飯田の左脚が刃羅の顔に迫る。

刃羅は体を捻って回転しながら紙一重で蹴りを躲し、脚を振り抜いた飯田の背中に右回し蹴りを放つ。

「ハイー!!」

「ぐう!?!」

飯田はバランスを崩すも、逆に前に出て刃羅から距離を取る。

そして滑りながら止まり、刃羅に向き直る。

「アイヤー!!」

「な!」

ドン!と音を立てて地面を強く蹴って猛スピードで飯田に迫る刃羅。

八極拳をイメージさせる動きで右肘を飯田の胸に叩きつける。

「ぐほー!」

「つえー!?!」

『ありやあ中国拳法か?』

飯田が更に後ろに下がる。

それを刃羅は詰め寄らず、その場で中国拳法の型を連続で披露する。

「ハイ!ホオアチャ!アイヤー!」

『カンフー娘だったのか!?!様になってるじゃねえか!』

「ほらほら!飯田君!止まってたら駄目だぞ!」

「つ!?!ごお!」

今度はボクシングの構えを取り、飯田の顔にワンツーパンチを浴びせる。

『今度はボクシング!?!ほんとに訳わかんねえな!』

「YEAR!ブレイキング!!」

「なっ!んだ!?!一体っ!」

『ほんとに何なんだ!?!今度はブレイクダンスの動きで逆立ち蹴り!?!』

『本当に動きが変わりやがるな』

ブレイクダンスのように地面で回りながら逆立ちして、蹴りを放つ刃羅。

飯田は動きが変わる刃羅に混乱し、防戦一方になる。

「つう!はあ!!」

「うおっち!?!」

飯田は無理矢理右足のエンジンを吹かして、下段蹴りを放つ。

刃羅はそれを捻り宙返りで躲し、バク転して飯田から距離を取る。

「ふうー！あつぷねえなあー！そんないきなり片足だけエンジン回せんのかよ!?クソ委員長!」

「く、くそ!?口が悪いぞ乱刀さん!」

「うつせえ!こつちもギア上げてくぞゴリア!」

「っ!!ならばこちらも!」

刃羅は足裏から刃を生み出して滑り出す。

それに飯田もドルン!と猛スピードで走り出す。

近づいて飯田が左脚で蹴りを放つ動作を見せた瞬間、刃羅は身を屈めて右脚だけ槍に変えて無理矢理方向転換する。

飯田の蹴りが刃羅の真上を通り過ぎる。

刃羅は両足共戻しながら右脚を振り抜いて、飯田の右足を蹴り払う。

「しまっ!?」

飯田はバランスを崩して、うつ伏せに倒れる。

その隙に刃羅は両腕をロングソードに変えて、飯田の背中を踏みつけて剣を交差して飯田の首に添える。

「っ!!」

「ここまでだ。少しでも首を浮かせば斬れるぞ」

「……降参です」

「飯田くん降参!!乱刀さんの勝利!!」

ミッドナイトの宣言に刃羅は腕を戻して、背中から足を除ける。

飯田は悔しさに顔を歪める。

『サーカスみてえな戦い方しやがんな!ワンダーランドの乱刀が3回戦進出!!』

「アーユーオツケイ?飯田ボーイ!」

「……ああ、見事だった乱刀さん。完敗だった」

「あはは〜」

そして観客席に戻って、梅雨の隣に座る刃羅。

「楽しかった!」

「よかったわ」

「刃羅ちゃんって格闘戦も凄いなだね！かつこよかった！」

「ってゆーか、中国拳法にボクシング、ブレイクダンスっぽいカポエラ？とかよく組み合わせさせて使いこなせんか？」

「使いこなすとはくちよつと違うかな」

「どういうこと？」

「俺たちはボクシングなんて出来ねえ！中国拳法もな！」

「はあ？さつきやってたじゃん」

「俺たちは、って言ってるんだろ？ボクシングは【圏】、中国拳法は【偃月刀】の分野だ」

「なに言ってるんだイカレ女」

刃羅の言葉に首を傾げるクラスメイト達。

爆豪も顔を顰めて声を上げる。

「ああ……全員には言っていなかったな」

「どういうことですか？」

「梅雨様、透様。わたくしの人格の変わり方を話したことを覚えてますか？」

「えくつと……確か武器によって変わるんだっけ？」

「その通りでござる」

「それが？」

「分からねえだべか？おいら……おいら達は人格それぞれで戦い方が違うべ」

『!!?』

「当然でしょおん。武器が違えばあん戦い方も違うわあん。格闘術においてはある人格の好みでえんそれぞれ修めてるわあん」

刃羅の説明に目を見開いて絶句する一同。

「じゃ、じゃあさつきの……」

「状況に合わせてく人格変えただけ」

「そ、そんなの卑怯じゃねえか!？」

「そうかのう？結局体は1つじゃ。注意して慣れれば対応出来ると思
うがの」

「言うのは簡単だけだよ」

「わっちだつてどの人格がええんか瞬時に判断せえへんといけまへん。わっちより頭の回転早ければええことですよ」

「……なるほどな。自動で変わるわけじゃないもんな」

「そういうこと！」

納得するように頷く切島。

刃羅は常にどの武器がいいか、どの人格の体捌きがベストか瞬時に判断を迫られている。

それが遅ければ体の動きが鈍くなり、倒されてしまう。

どんなに武器や人格があつても、この体が動かなければ意味はないのだ。

「……だから、てめえは『個性』を使い過ぎると筋肉痛になんのか」

「あや？バレてもうたか」

「どういうことだよ爆豪」

「人格が変わることに戦い方も変わんなら、使う筋肉も変わんだろーがボケ。イカレ女は戦えば戦うほど、必要以上に全身の筋肉を隅々まで使つてんだよ」

「あくなるほどなー」

「お見事じゃの」

「あんだだけ話せば普通に分かるわザコ」

爆豪の言葉に肩を竦める刃羅。

クラスメイト達は爆豪の言い方に呆れているが、爆豪は考え込むように黙る。

（……つてことは、このイカレ女。あれだけの動きをそれぞれの人格で身に着けたつてことか？今だけでも最低5人は入れ替わりやがった。そんだけの人数を1つの体で、それぞれ修行してるだあ？）

今の刃羅の話を総合すると、そう言うことになる。

これまでの身のこなしから考えると、間違いなくどれも一級品クラスだった。

（ふざけてんのか？一体、他の連中の何十倍の量鍛えりやいいんだ？ありえねえだろ）

爆豪は顔を更に顰めて、横目で刃羅を睨みつける。
得体が知れない気持ち悪い女。

それが爆豪が抱く刃羅の印象だった。

まだ何かある。

そう思わずにはいられなかった。

#12 体育祭その5

梅雨と爆豪の試合となった。

刃羅は観客席から移動して、控室に向かう通路前まで向かう。すると、そこに緑谷が通路から現れた。

「もう歩けるようになったのか」

「あっ……乱刀さん。うん、何とかね。ありがとう」

「これからはもう少し方法を考えることじやの。毎回毎回あれでは、お主をヒーローとして呼ぶものはいなくなるのう」

「うん……そうだね。リカバリーガールにも怒られたよ」

「ほな、うちがあんまり言うことちやうな。ただ……」

「？」

「私はその時、お前の背中に英雄を見た。気づいているのは一握りだろうがな」

「!？」

刃羅はまっすぐに緑谷を見る。

緑谷は目を見開いて、刃羅を見返す。

「実力はこれから鍛えりやあいい。けどよ、あのお節介が出来る奴は滅多にいねえ。自分を犠牲にしてもって奴はこのご時世だと特にな。轟に炎を使わせて、あの顔をさせた価値はデケエだろうな」

「……」

「反省はするべきだろう。だが、後悔はするな。お前は確かに轟を救おうとしたのだから。眼に見える活躍だけがヒーローではない」

「……うん」

刃羅はそう言って歩いていく。

緑谷は俯いて涙を流していた。

ステージの上で爆豪と梅雨が向かい合っていた。

「怖い顔してるわね爆豪ちゃん」

「うっせえぞ蛙女。麗日みてえになりたくなけりや退けや」

「お断りするわ」

「そうかよ」

そして試合が開始される。

刃羅は入場口の壁に寄りかかり、試合を見ていた。

(……梅雨ちゃんが勝つためには麗日ちゃんと同じく速攻！爆発の威力が上げれば上がるほど舌が伸ばしにくくなっちゃう！)

すると、

「おらああああ!!」

ボロボロボロボボオオン!!!

「!!」

突如、爆豪が地面に両手をかざし、爆破を連射した。

煙幕が巻き上がり、梅雨は近づけずに離れる。

(無理矢理地面に連射して、煙幕ついでに爆破の威力を上げよった！)

煙幕の中から爆豪が爆破でブーストして飛び出してくる。

梅雨は舌で牽制しようとするが、爆豪は左手を前に向けて爆破を起

こして逆に牽制する。

そして右手の爆破で再びスピードを上げる。

(足元に舌を伸ばそうにも左手で対応されてまう。近づこうにも離れようにも爆破が来よる。梅雨はんの速さと反射が爆豪はんを超えん限り、このステージでは不利や！)

そして、梅雨はそのまま爆破で吹き飛ばされて、場外に吹き飛ばされてしまった。

「蛙吹さん場外！爆豪くん3回戦進出！」

梅雨は起き上がって、刃羅がいる通路に向かってくる。

「！。刃羅ちゃん」

「残念だったね！」

「そうね。強かったわ」

「次は勝てばいいんだよお」

「そうね。刃羅ちゃん」

「ん？」

「頑張つてね」

「おうよ！」

ニコ！つと笑って去っていく梅雨。

それを見送った刃羅はステージの修復が終わるまで、観客席を眺めていた。

「ん？あの男は……」

先ほど緑谷の見舞いに来ていたヒヨロガリの男。

「……教師？見たことありまへんなあ」

男は13号やスナイプと一緒に座っている。

他にも周りには教師がいることから、あそこが教師陣の席だと窺える。

「……そういえばオールマイトの姿が全く見えぬのう。他の会場に行っている様子もない。……ふむ」

緑谷を見に来ていたことと言い、感じた覚えのある気配と言い、気になる男である。

オールマイトに何か関係がある。

刃羅はそう確信した。

『準決!!サクサク行くぜー!』

そして轟と刃羅の試合。

『轟 焦凍バーサス乱刀 刃羅!!』

「覚悟は決めたかの？轟」

「……」

轟は刃羅の言葉に応えない。

轟の雰囲気刃羅は訝しげに眉を顰める。

『START!!』

そして、試合が始まった。

その瞬間、轟が巨大な氷を生み出て刃羅を埋め尽くす。

『いきなりかましたあ!!やはり乱刀の接近戦は嫌だよな!つてか、決まったかあ!?!』

『……ぐや』

「!!」

氷が振るえ始め、ギャギャギャギャ！という音が響いてきた。そして、氷の上部から何かが飛び出してくる。

「YEAH！言ったはずデース！轟ボーイ！この程度のジ・アイス！ミーには効きませーん!!」

ドリルのように回転している刃羅。

回転を止めて、体を広げると、轟や観客は目を見開いた。

『うわぁおお!!マイツチングー!!』

刃羅は体操服が破れており、スポーツブラとパンツのみになっていた。

「「うおおおおおー」」

「うるさいわ男子」

「ってゆーか、刃羅も発育の暴力パネエ〜」

刃羅は下着など気にせず、氷の上に下り立つ。

すると、両腕と両脚を広げて歌舞伎者のポーズをする。

「あ！絶景かな絶景かなあ！鉄と人に囲まれた歪な氷なれど、天から見下ろしや恐悦至極！」

『下着で歌舞伎されてもカッコよくねー！ってか、ほんとになんなのアイツ!』

「あ！随分とお舐めた御挨拶じゃねえか轟屋。効かねえこたあ……あ！分かってんだろお〜!」

「……」

歌舞く刃羅に轟は何も答えない。

「だんまりかよ！はっ！余裕だなあ！クソイケメンが！」

スケートで滑り始める刃羅。

それに腰を落として構える轟。

「言つとくがよ!!接近戦だけじゃあ!!ないのよおん!」

近づきながら右腕を思いっきり突き出す刃羅。

すると、右手が刃になって鎖のように伸びてくる。

轟は目を見開いて、顔を傾ける。

轟の頬をわずかに斬って通り過ぎる蛇腹剣。

刃羅はすぐさま引き戻す。

『うわお!? 伸びたー!!』

その隙に猛スピードで滑り迫る刃羅。

轟は氷を壁のように作り出す。

「また、それですか?」

「っ!」

「ふ!」

刃羅の声に反応して、すぐさま転がる様に飛び出す轟。

刃羅は左腕をコルセルカにして、氷の壁を貫く。

『あの轟の氷を易々と砕いて、貫いてやがんな! びっくりじゃん!』

「まだ……左側は使わないのですか?」

「……」

「……はあく……貴様は人を馬鹿にするためにそこに立っているのか?」

「!!ぐう!」

刃羅は両腕をロングソードに変えて、轟に斬りかかる。

轟は躲そうとしたが、刃羅の腕が霞んで、気が付くと両前腕が少し斬られて血が噴き出す。

『うおい!? 大丈夫かあ!? 人斬りは退場だぜ!』

『今のは手加減してる。大丈夫だろ』

『マジで!? めっちゃ速かったぞ!』

刃羅は腕を戻すと、今度は右脚を蹴り出しながら大鎌に変える。

轟はしゃがみながら氷を生み出すが、豆腐のように斬り裂けられる。

「ちい!!」

「よよい!!」

今度は両腕を薙刀に変えて、回転斬りを放つ。

それを転がって避けられると、手を圏に変えて殴りかかる。

轟は氷を次々と作り出すが、バトルアックス、太刀、トウハンドソードと武器を変えて壊される。

『轟の氷結が効かねえ! 物理系なのに効かねえ!』

刃羅は足を止めて、轟を見つめる。

轟は肩で息をしている。

「……貴様は一体何がしたいのだ？緑谷のあの言葉を聞いて、行動を見て、あの怪我をさせて、その体たらくか」

「……うるせえ」

「気づいてるう？轟君さあお父さんを超えたいからあここに来たんだよねえ？」

「……」

「それってさくオールマイトを超えたいって思ってるくお父さんと何が違うの？」

「!!」

轟は刃羅の言葉に目を見開いて固まる。

すると刃羅はくるりと轟に背を向ける。

「はいはくいい!!ミッドナイトお！それに上の騒がしい人お！」

「な、なによ？」

『騒がしくて悪かったな！で?!なんだよ!』

「あたしの『個性』ってどう思う!？」

刃羅の突然の質問に眉を顰めるミッドナイトとプレゼントマイク。

「どう思うって……強いとは思わよ？」

『ヒーローとしては扱い辛いだろうけどな』

「その通りであります!!」

『ああ?』

「つまり!!俺たちの『個性』はヴィランっぽいってことだよなあ!？」

刃羅の言葉にミッドナイトは顔を顰める。

「轟君もそう思うよね!？」

「……それがなんだよ」

『個性』は親の者を遺伝することが多いのう。そうじゃろ?轟殿「だから……それがなんだ!」

轟は苛立ちを隠せなくなった。

『個性』の遺伝は轟にとって最も触れられない話題である。

それに刃羅はニク〜!と笑う。

「私はねえ……ヒーローとヴィランの間に生まれたんだよお」

刃羅の言葉に轟を始め、観客の全員が目を見開いて固まる。

「驚いた!? ねえねえ! 驚いた!?!」

刃羅はお道化したように声を上げる。

クルンと側転する刃羅。

「僕の父がヒーロー。そして母がヴィランじゃった。どうして結婚したかは知らん。知る気もない。知りようもない。……2人とも死んでおるからのう」

「!!」

刃羅の言葉が会場に響く。

「イレイザーヘッド! 貴官は小官の父を知っているでありますか!?!」

「……縮尺ヒーロー『マイスタード』だな」

「パーフェクト!! では、マイマザーはドウユーノウ!? ヴィランネームは『スライシス』!」

「スライシス!?!」

「!!」

『マジで!?!』

刃羅が挙げた名前に多くのプロヒーローは目を見開く。

それに学生や一般人はそれがどうしたと騒めく。

『……本当なのか?』

「嘘言う理由ねえだろゴラア!! でも、やっぱり知ってやがったなあ。そりゃそうだよなあ!! 忘れちゃいけないえよなあ!!」

刃羅の言葉に轟が眉を顰める。

それに気づいた刃羅。

「某の母は父と出会って、ヴィランを引退したのでござる。某が生まれ、普通の母親になろうとしていたのでござろうな」

「……」

「けど、それは出来なかったアル。アタシの『個性』を知った瞬間から」

「ヨ」

「!!」

「そう。我は母に首を絞められて殺されかけた。『私の悪の血を世に出すわけにはいかない』……とな」

その言葉に轟は自分の母親と重ねる。

左手で自分の左目に触る。

「死にかけたけどな、ギリギリでお父さんが助けてくれてなあ。けど、お母んは罪悪感で壊れて家を飛び出しよった」

観客席では緑谷や梅雨達が心配そうに刃羅を見ている。

しかし、次の言葉で更に衝撃が襲い掛かる。

「その夜だ。母は暴走して……ヒーローに殺された!!」

「!!」

轟はもはや声も上げられない。

ミッドナイトや他のプロヒーロー達は悔し気に顔を歪める。

「そのヒーローはあんもちろん捕えられたわあん。資格も剥奪だよおん。……続きは知ってるわよねえん。ミッドナイト」

「……」

「そう……その2日後や。父様がヴィランに殺されたんは」

「!!」

「私はねえ轟君。ヒーローとヴィランの子供でえ、ヒーローとヴィランにい家族を奪われたんだよお。分かるう？この気持ちい」

「……」

轟は答えられない。

誰も答える事は出来ない。

「そこで乱刀刃羅は壊れた」

「……壊れた？」

「俺っち達の誕生さ!!多重刃格のなあ!!」

「……!!」

両腕を広げる刃羅。

「誰も知らないだろう？私達の誰が元々の乱刀刃羅なのか。当然だ。両親が死んだことを知った直後から、表に出たことはないのだから。それどころか……もう私達でさえ、本来の人格が残っているのかが分

からん」

寂しように目を伏せる刃羅。

しかし、すぐさま目を開ける。

「けんども、それだけで終わらねえだ。中学に入つてすぐ、おいらはヴィランに攫われただ」

「!!」

「それからく3年近くくずうくと鍛えられたのさく。毎日刃物で追いかけてられてく斬り刻まれてねく。逃げられたのはく雄英の入試の3か月ほど前さく」

「……そ……んな」

「だからよお……俺っちはなあ!!ヒーローもヴィランも大つつっ嫌いだ!!!」

目を血走らせて大声で叫ぶ刃羅。

「何がヒーロー!!何が英雄!!私を、乱刀刃羅を助けず!!名声と報酬ばかりを求める目立ちたがりの偽善者共!!一体どれだけの者が唯弱きものを救うためだけに戦っている!?!私が知る限り唯一人!!オールマイトだけだ!!」

ヒーローになるための学校でヒーローを否定する刃羅。

しかし、それを咎める者は誰もいない。その資格がある者はいない。

「そしてヴィラン!!信念もなく!!ただ己が欲求のためだけに徒に力を振りまく屑!!奴らがいる限り、第2の乱刀刃羅は必ず生まれる!!それは許せない!!私はそれだけは許すことは出来ない!!」

刃羅の気迫に轟は一步後退る。

「だからあ私はここに来たのお。母が『悪』と呼んだあこの『個性』でえ『ヒーロー』になってえ『悪』を斬るのお。そしてえ私と同じ子を二度と生まれない世界を作るんだあ」

そして右腕をロングソードに変えて、切っ先を轟に向ける。

「炎を使え。お前が本当にヒーローになりたいのであれば。力を抑えてヴィランと戦い続ける気か?それで本当に弱き者を助けるヒーローになれる自信があるならば、別だがな」

「……」

轟は刃羅の力強い眼に耐えられず、視線を外す。

顔を俯かせて動かない轟に、刃羅は目を伏せて腕を戻す。

そして、背を向けて歩き出し、場外に出る。

『え……ちよ?!?』

「乱刀さん……!?!」

「我はヒーローを目指す者と争うためにここに来た。ヒーローを目指す気がない者と戦う気はない」

そうして、そのまま会場を去る刃羅。

それを止める者は誰もいなかった。

刃羅は観客席にも戻らず、着替えてからスタジアムの上で寝転んで空を眺めていた。

「……やっぱりヒーローなんてく空想の産物かな」

ステインに連絡を取ろうとしたが、『保須で仕事だ』とだけメールが返って来てから繋がらない。

「ここに来た意味があったのだろうか……?」

ステージで話した言葉に嘘はない。攫われた事と逃げ出した事以外は。

刃羅は本気でヒーローとヴィランを肅正するステインの行動に賛同しているのだ。

「ここにいたのか……乱刀少女」

「……オールマイトかいな」

現れたのはオールマイトだった。

いつの間にか寝転がっている刃羅の横で体育座りをしている。

「なんか用だべか?」

「……何を話せばいいかは分からない。ただ……ほっとけなかつただけだよ」

「……ヒーローじゃのお」

「……今の私には君のその言葉が物凄く重いよ」

いつもの笑みを浮かべてはいるが、雰囲気は真逆だった。

「マイスタードさんとは何回かお会いしたこともある。奥さんの話なんて聞いたことがなかったよ」

「言えるわけねえだろ？ ヴィランと結婚しました、なんてよお」

「……そうだね。……言えない世界になってしまっているんだね」

「そうねえん。そうして生まれたのがあん私よおん」

マイスタードは間違いなく妻と刃羅を守りたかっただけ。

しかし、それが悲劇に繋がった。

だからと言って、マイスタードとスライシスが悪いと言うのも違う。

間違いなくその時の社会の風潮が引き起こした悲劇だった。

「おいらが訴えかけた程度で変わるわけはねえべ。分かっているだよ。そんなこと」

「……そうとは限らない……なんて言うのは軽はずみだね。けど……出来ないとも言いたくないさ」

「……1つ聞いてもよろしおすか？」

「いいとも」

「……保健室で緑谷の横にいたのはオールマイトだよね？」

「?! な、なんのことかなあ?!」

「バレバレやで」

刃羅の質問にあからさまに体を跳ねさせて、ダラダラと冷や汗を流す。

それにジト目で突っ込む刃羅。

「……なるほど。緑谷はオールマイトの後継者的存在か」

「……な、内緒にしてくれるかな!？」

「構わぬよ。今、オールマイトという象徴が壊れるという危険性は理解しておるつもりじゃ」

「ありがとう」

「……緑谷はあのままではオールマイトよりも悲惨な最期を迎えるぞ？ 分かっているのだろうか？」

「……」

「象徴は必要だろう。しかしそれが1つだけに絞られてしまった今では、ただ引き継がせるだけでは象徴の代わりにはなれん。素質と信念は認めるがな」

オールマイトは刃羅の言葉に両手を握り締める。

刃羅は起き上がって、立ち上がる。

「その体と同じか……それ以上にボロボロにしたくないならば、間違えるな。いい所だけを見せるな。嫌な所も辛い所も汚い所も全て教えろ。緑谷に同じ道を……その体にさせたくはないのだろうか?」

そして刃羅は歩き出す。

その背中をオールマイトは見送る。

「……励ますつもりが……逆になってしまったな。だが……いう通りだ。この道は歩かせてはいけない」

刃羅は下に下りて、今度は樹の根元で寝転んでいた。

「……皆の所にもく戻り辛いなく」

流石にあのタイミングで話すつもりはなかった。

しかし、我慢できなかった。

「んあく……人の……こと……言えなく……」

顔を擧めて寝返りを打つ。

直後、後頭部にスパアン!と衝撃が走る。

「アイヤ!?だ、誰アルか!?って、わあああ!?!」

「ひっ付けたぞ!障子!掴んで回せ!」

「任せろ!」

「なにになになに!?!」

起き上がった瞬間、後ろに引つ張り上げられて誰かに掴まれてグルグル回されて簀巻きにされる。

「うえく……ぎぼぢわゝるゝう」

「……すまん。回し過ぎたか」

「いいだろ。このくらいじゃねえと斬られちまう」

「瀬呂氏？障子氏？な、なにおぶう!?むうく!」

瀬呂と障子が目の前にいた。

顔を真つ青にして首を傾げていると、口元に何かが巻き付く。

「行くわよ刃羅ちゃん」

「むう!?むむみゃん!?」

「皆、持ち上げて」

「「おっけー!」」

「むお!?」

巻き付いたのは梅雨の舌だった。

刃羅は目を見開いていると、今度は耳郎、葉隠、芦戸、麗日に持ち上げられて、移動を開始する。

刃羅は声を上げるが無視された。

「むおく……むおく……」

「寝たふりしても無駄よ刃羅ちゃん。逃がさないわ」

「……」

「なんか梅雨ちゃん怖くね?」

「まあ、一番仲が良いからな」

連れて行かれたのはクラスの控室だった。

部屋に入った瞬間、鎖で雁字搦めにされて、峰田のボールで椅子に固定される。

中には流女将もいて、ほとんどのクラスメイトがいた。

「これから爆豪と轟の決勝だからね」

「何人かは観客席にいる」

すると、ガシイ!と黒い手に体を掴まれる。

顔だけで振り返ると常闇の影だった。

そして、口に巻き付いていた舌が外される。

「プツハア!!」

「刃羅ちゃん。何か言うことはある?」

「あんな形で話してしまい、面目次第もない」

静かだが、妙に圧力がある梅雨の言葉に、すぐさま素直に謝罪する刃羅。

頭だけペコリと下げる。

「分かっているならいいの」

「ってゆうかさあ、あの話マジ？」

「マジでござるな。両親に関しては流女将も知っているのでござろう？」

「……そうですね。間違っはいません」

「……マジなのか」

「じゃあ、流女将は……」

「この子の後見人です」

梅雨は刃羅の謝罪に領き、耳郎が話の真偽を聞いてくる。

刃羅は流女将に目を向けると、流女将は目を伏せて頷く。

それに芦戸が悩ましそうに腕を組む。

「だから攫われたんだらうね。当時は滅茶苦茶陰湿で荒れてたし、ヒーロー嫌いもヴィラン嫌いも隠してなかったし」

「そういうことですか……」

「そういえば飯田殿はどうしたんじゃ？」

「早退だっ」

「おやまあ」

「話を逸らさないで」

「ごめんなさい!?!」

「つ、梅雨ちゃん怖い……!?!」

刃羅の目の前に立って、無表情で咎める梅雨。

梅雨の雰囲気葉隠や他のクラスメイトも気圧されている。

「……本来の刃羅ちゃんは、本当に分からないのかしら？」

「……分からねえ。答えねえんだ。見つからねえんだ。けど記憶は共有してるから、生きてはいるはずだぜ」

「そう」

梅雨の質問に真剣に答える刃羅。

「攫われたことで問題はないのかしら？」

「……上鳴の時に出したのは、奴に鍛えられて生まれた刃格だべえ!?!」
舌でビンタされる刃羅。

「おおう!?梅雨ちゃん!」

「そんなもの出さないで」

「つ、梅雨ちゃん?」

「それを出しちゃうとそれこそ刃羅ちゃんがヴィランになってしまい
そうだから。あの時の刃羅ちゃんは、本当に怖くて、悲しかったわ。
あんな刃羅ちゃんは嫌なの」

ポロポロと涙を流し始める梅雨。

再びガタガタと慌てる刃羅。しかし全く動けなかった。

「他にはあるの?」

「無いであります!」

「今日だけで何個の新しい人格出たんだらうな?」

「……分かん」

「だよな」

ビシ!と背筋を伸ばして答える刃羅。

その後ろで瀬呂、障子、砂籐がひそひそと話している。

「刃羅ちゃん」

「はい!」

「次はちゃんと話してほしいわ。あんな形で聞くのは嫌なの」

「イエス!」

「それと今度ちゃんと人格の自己紹介もして欲しいわ。皆とお友達に
なりたいの」

「わかった」

「なら、今回は許すわ」

「ありがとう」

ニヘラと笑う刃羅。

それに梅雨も笑う。

流女将もそれを後ろで見て、微笑む。

そこに切島が入ってくる。

「おう、どうだ?」

「仲直りできたよ。喧嘩してたわけじゃないけど」

「まあ、しょうがねえだろ。あれは。で、決勝も終わったぞ。この後、

表彰式だ」

「どっちが勝ったの？」

「爆豪だな。轟はやっぱり調子崩しちまった」

「緑谷君と刃羅ちゃんのだブルパンチだもんね」

「……轟君に会いにくいなあ」

「この後表彰式で会うんだから諦めろ。お前、常闇と同じ3位だし」

「……辞退！」

「駄目よ。反省としてそのまま出てもらうわ」

「許されてない!？」

「反省することと許すのは別よ。刃羅ちゃん」

梅雨の厳しい言葉に顔を引きつらせる刃羅だった。

その後、刃羅は障子に運ばれて表彰式に向かう。

そして表彰式。

表彰台は混沌の極みだった。

「半分が縛られてるってどんな表彰式だよ」

「つてゆくか……うわあ……何あれ」

「起きてからずっと暴れてんだと」

表彰台では、

「んんんんんん!!」

爆豪が手錠され、口を猿ぐつわをされて、柱に固定されながら暴れ

て轟を睨んでいる。

「もはや悪鬼羅刹」

「……ううう！私の存在が霞むう！こんな辱め受けてるのに、それ以

上の拘束のされ方で暴れてるって何?!びやくん！」

3位の台上で刃羅が拘束されたまま、泣き始める。

「これは乱刀がマジで哀れだな……」

「爆豪が目立つせいで、滑稽になってるよね」

「ある意味、罰にはなってるな」

クラスメイト達も刃羅に憐みの視線を送る。

「メダル授与よ!!今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

「私が!!メダルを持ってき『我がヒーロー!オールマイイトオ!!』」

スタジオムの上からオールマイトが飛び下りてきたが、ミッドナイトの紹介とセリフが被る。

一瞬羞恥に震えるが、すぐさま表彰に移った。

オールマイトは最初に刃羅の前に来た。

「なんか凄いことになってるな。乱刀少女」

「うるさい。反省だそうだ」

「なるほどな！良かったじゃないか！いい友達がいて！」

「……うっせえ」

オールマイトの言葉に恥ずかしそうに顔を背ける刃羅。

オールマイトはそれに笑う。しかし、すぐに顔を引き締めると、刃羅に向かって深く頭を下げた。

それには刃羅や周囲は目を見開く。

「な、なにしている!?!」

「済まなかった」

「……はあ?」

「我々ヒーローが君のお母さんを奪い、同じヒーローであるお父さんも護れなかった。その上、君の事を探し出せず、助け出せず、絶望させ、辛い思いをさせてしまった!一人のヒーローとして、ヒーローを代表として!謝罪しなければならぬ!本当に申し訳なかった!!」

「……」

オールマイトの言葉と謝罪に、刃羅は黙ってオールマイトの後頭部を見つめる。

後ろにいたミッドナイトもオールマイトに倣って頭を下げる。

ガバア!と頭を上げて、まっすぐに刃羅の目を見るオールマイト。

「もう二度と君のような子を生まないために!全身全霊を尽くすと誓おう!!だから……お願いだ。もう少しだけ……ヒーロー達を見ていてくれないだろうか。ヒーローに希望を持っていてくれないだろうか」

オールマイトの言葉に刃羅はしばし黙って、ジッとオールマイトを見つめる。

「……今いるヒーローがそんなにすぐ変われるわけがない」

「……」

「けどお……これからヒーローになるかもしれない子達にはあ期待してもいいかもねえ」

「……ありがとう」

刃羅の言葉にもう一度頭を下げるオールマイト。

「では！改めてメダル授与だ！」

「断りたいな！」

「それを断る！おめでどう！」

ニカツ！と笑って、刃羅の首にメダルを掛けるオールマイト。

その後に常闇、轟、爆豪に声を掛けながらメダルを掛けていく。

こうして体育祭は幕を閉じたのだった。

教室に戻った一同。

「おつかれつつうことで、明日明後日は休校だ。プロからの指名などをこつちで纏めて発表する。ドキドキしながらゆつくり休んでおけ」
解散になり、帰り支度をする一同。

刃羅が携帯を見ると『保須市でヒーロー殺し出現！』との見出しのニュースが流れていた。

「……動いたのか」

「あ……ヒーロー殺し？……インゲニウム!?これって飯田君の……！」

緑谷も同じニュースを見たようで、目を見開いている。

「インゲニウムと委員長は関係あるのか？」

「乱刀さん……インゲニウムは飯田君のお兄さんなんだよ」

「……そうか」

刃羅は顔を顰める。

緑谷それを飯田を思つての事だと捉えた。

(よりによって……これは余計にバレるわけにはいかんな)

実際は面倒になりそうだと思つての事だった。

そして、この事件がきっかけで運命は大きく動き始めるのだった。

新！刃格！

薙刀：歌舞伎者。一人称は「あつし」。

サーベル：軍人氣質。一人称は「小官」。

#13 名前

休暇最終日。

明日から学校だ。

刃羅は部屋でだらけていた。

「んあ〜……やつと〜……筋肉痛〜……治った〜……」

刃羅は轟との試合での筋肉痛が思ったより長引いていた。

それで昨日一日も痛みに耐えながら、生活していた。

「んあ〜……もう少しく〜……動かさなく〜……ダメ〜……」

まだまだ鍛えないとダメだと思い知った刃羅。

携帯をチェックしているが、あれから返事もなければニュースもない。

恐らく携帯を拠点に放置しているのだろう。

仕事時は余計なものを持たないのが、ステインの流儀だ。

「んあ〜……問題〜……飯田く〜……どっしよ〜……」

問題は飯田との関わり方だ。

学校側はステインに攫われていることを知っている。

刃羅の言動もステインに影響されていることも考えているだろう。

そこで飯田にそのことが下手に伝われば、ギクシヤクレベルではない気がする。

「んあ〜……」

眉間に皺を寄せて横になっていると、ドアがノックされる。

「はいな」

「流女将です。いいですか?」

「どうぞ〜」

「失礼します」

本日の流女将は私服だった。と言っても和服なのは変わらないが。

「まだ痛むのですか?」

「もう治ったよ!それで!」

「ご飯が出来たので呼びに来たのですよ」

「行く〜」

本日の昼は鍋焼きうどんだった。

「ズズ〜……ンマンマ……もう学校だなあ」

「そうですね。そろそろ職場体験ではないでしょうか」

「ズズ〜……ンマンマ……職場体験でありますか？」

「ええ。体育祭の指名などを利用して行われるものです。プロはスカウトを、学生は現場を知るものです」

「ふくん。ズズ〜……ンマンマ……指名なんて来るんかいな」

「どうでしょうね？駄目だったら私が引き取ることはなってます」

「ズズ〜……ンマンマ……ってことは、指名はしとらんのかの？」

「ええ。あなたには他のヒーローも見ろべきかと思ひまして、今回は誰にも指名を出してはけません。蛙吹さんは気になりますかね」

「ズズ〜……ンマンマ……梅雨ちゃんはいいい子だよ！」

水系『個性』が在籍する流女将の事務所なら活躍できるのではと刃羅は考える。

しかし、まだ流女将は他にもインターン生がいるらしいので、今回は見送るらしい。

「私を指名する物好きなどいるのだろうか？」

「実力は確かですから、似た『個性』のヒーローからは声がかかるのでは？」

「そうかあ？あれだけヒーロー嫌い公言したんだぜ？」

「それはあなたの境遇とオールマイトの謝罪で大分同情的に受け入れられていますよ。それにそんな境遇でヴィランにならず、ヒーローを目指していることも意外と好評化されています」

「マジでか!？」

目を見開く刃羅。

あの試合展開と話し方で好評って頭大丈夫かと、自分の事を棚に上げて考える刃羅だった。

翌日。雨。

教室に入ると、盛り上がっているクラスメイト達がいた。

「超声掛けられたよ。来る途中!!」

「私もジロジロ見られてなんか恥ずかしかった!!」

「お、乱刀。ってなんだあ?その荷物」

切島が刃羅に気づく。

刃羅は両腕にお菓子やら果物やら大量に抱えていた。

「……歩けば歩くほど通りがかった人から泣きながら渡された」

「あく……両親の事とかで結構同情されてたもんな」

「うちの両親も泣いてたよ!」

「ありがたいけどお学校行く途中でえ貫つてもなあ……。あつ、メロ

ン食べるう?」

「「食う!」」

「ちよつと待ってて。あ、百ちゃん、お皿出せる?」

「……はあ……構いませんが」

荷物を席に置いて、メロンを取り出す。

百はため息を吐きながら、腕から大皿を作り出す。

刃羅はポイツ!とメロンを放り投げる。

シャキーン!

両手の指を刃に変えて、高速で振るう。

ドン!と皿にメロンが落ちると、バラっ!とメロンが切り分けられる。

「どうぞおん」

「便利!」

「種までキレイに切り取られてる!」

「いただきまーす!」

「百はんも食べやあ。お皿出させてもうたし」

「はい。ありがとうございます」

「よい!轟屋もどうだあい?」

「……小さいのくれ」

「舐めんなゴラア!同じ大きさに決まってるだろうが!」

「……すまん」

「ほれ。味わって食べるんじゃぞ」

「うめー!」

サラリと轟に声を掛ける刃羅。

轟も以前のようなピリピリした雰囲気はなく、戸惑いながらもメロンを受け取る。

そこに緑谷と飯田が入ってきた。

「おっはー！緑谷君に飯田君！メロンどうぞ！」

「お、おはよう。い、頂きます」

「おはよう！しかし、どこからメロンを持ってきたんだ!?教室で果物なんて！」

「登校途中でえおばあちゃんがくれたのお。体育祭お疲れさまつてえ」

「それならば仕方がない！ありがたく頂こう！」

「どうぞ〜」

刃羅はいつも通りの雰囲気を出して飯田にも声を掛ける。

それに飯田もいつも通りの雰囲気で応える。少しぎこちないが。

周りもそれに無理に突っ込むことなく、飯田に挨拶する。

そして、残ったメロンを教卓に置く刃羅。

「それは？」

「相澤教官であります!!」

「先生が食べるかなあ？」

「そこは『残すのは非合理的!』とでも言ってみる！」

「なるほどな」

そして相澤が入ってきた。

ピタと静まり返る教室。

「おはよう。って、なんだこのメロン」

「イエイ！登校途中でおばあちゃんにプレゼンツされたのデース！」

「そうか……うめえな」

「ほんとに食った!?!」

「もらったもん食べねえ方が非合理的だろうが」

（(ホントに言った!!)）

相澤のセリフに数名が笑いを耐えるように震える。

「それで今日のヒーロー情報学、ちよつと特別だぞ」

その言葉にゴクリと息を飲み、緊張するクラスメイト。

『コードネーム』ヒーロー名の考案だ』

『胸膨らむヤツきたああああ!!』

一気に爆発するクラスメイト達。

直後に相澤からオーラが発せられて、静かになるが。

「というのも先日話した『プロからのドリフト指名』に関係してくる。指名が本格化するのには経験を積み、即戦力として判断される2, 3年から……。つまり今回来た指名は将来性に対する興味に近い」

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルになるんですね！」

「そ。で、その指名の集計結果がこうだ」

後ろのブラックボードを示す相澤。

「例年のもっとバラけるんだが、今回は2人に注目が偏った」

轟が4000以上。爆豪が3000以上の指名が集まっていた。

「1位2位逆転してんじゃん」

「表彰台で拘束された奴とかビビるもんな……」

「ビビってんじゃねーよ！プロが!!」

「同じく拘束されてた刃羅ちゃんがかわいそうじゃないか！」

「シィーット!!」

「透ちゃん。それはトドメだわ」

刃羅は53件だった。

「まあ、あの試合からしたらあくれた方でないかなあ」

「そうか？話の内容はともかく実力はかなり見せれたと思うけどな」

「無いな！怖かったんだ、やっぱ」

「んん……」

緑谷には指名が来ていなかった。

（やっぱ自爆技の印象がデカかったか。判断力や観察力はかなりもんだと思うけどな）

パワーに目が行きがちだが、緑谷の本領は観察力だと刃羅は思っている。

「これを踏まえ……指名の有無関係なく、いわゆる職場体験に行ってもらおう。お前らは一足先に経験してしまったが、プロの活動を実際に

体験して、より実りのある訓練をしようってことだ」

「それでヒーロー名か！」

「俄然楽しみになってきた！」

盛り上がるクラスメイト達。

「まあ飯ではあるが、適当なもんは」

「付けたら地獄を見ちやうよ!!」

相澤の言葉を遮ってミッドナイトが入ってきた。

「この時の名が！世に認知され、そのままプロ名になってる人は多いからね!!」

「まあ、そういうことだ。その辺をセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう」

そうして15分後、発表会が始まった。

青山、芦戸で大喜利になったが、梅雨が正統派を出して空気が戻る。

その後も続々と発表していくクラスメイト達。

刃羅は腕を組んで唸っていた。

「ヒーロー名とか考えたことないぞ……」

「とりあえずなんか書いてみれば？」

「……むう」

葉隠の言う通り、とりあえず書いて発表する。

「荒破刃鬼！」
アラハバキ

「ヴァイラン!!」

「びいえくん!!」

却下された。

「ジラン・ザ・リツパー！」

「ヴァイラン!!」

「びやあくん!!」

却下された。

「シャツフル・ソード！」

「……やっぱりヴァイランっぽい」

「ふえくん！」

却下された。

「頑張つて！」

「……ヒーロー嫌い！」

「ここで嫌われても困るわ」

不貞腐れて頬を膨れさせる刃羅。

残ったのは刃羅、飯田、緑谷、爆豪の4人。

腕を組んで唸っていると、轟が声を掛けてくる。

「逆転の発想してみればいい」

「逆転ん？」

「漢字で書くと角が立つが、カタカナで書くと受け入れられるもんもある。常闇のツクヨミだったり、シンリンカムイだったり」

「ん〜……なるほど〜」

轟の助言を受けて、考える刃羅。

そして、思いついた言葉を書いてみる。

「どうや！アラジン!!」

「オツケイ！意味はあれだけど、カタカナだからいいでしょう！」
認められた。

刃羅はハア〜と息を吐いて、緊張を解く。

席に戻る途中で轟に礼を言う。

「おおきに！」

「……気にすんな」

「なんか雰囲気変わったか？轟の奴」

刃羅の礼に目を逸らす轟。

それに他のクラスメイトも首を傾げる。

そして授業後。

「職場体験は一週間。肝心の職場だが、指名のあった者は個別にリストを渡すから、その中から自分で選択しろ。指名のなかったものは予めこちらからオフアールした全国の受け入れ可の事務所40件。この中から選んでもらう。よく考えて選んで、今週末までに提出しろよ」

休み時間。

「見事なほど武闘派系だけどすなあ。まあ、わっちに救助とか言われ

ても困るけどなあ。ほい、リンゴお食べやす」

「ありがとう刃羅ちゃん。私は水難に係わる所ね」

「指名はどうだったでありますか？」

「ありがたいことに水難救助系が多いわ」

「いいなあ。私トーナメント残ったのに来なかったしなあ」

「緑谷君もだけどね」

「轟氏と爆豪氏が目立ちすぎたでござるな。桃でござる」

「ありがとう！」

もらった名簿を見ながら、体験先を考える刃羅達。

朝に頂いたリンゴや桃を切って食べながら、話している。

「おいらはどこでもいいだべなあ」

「ちゃんと考えないとダメよ刃羅ちゃん」

「流女将と相談する」

「そういえば流女将は指名してないね」

「今回は誰も受け入れないそうさ。私に指名がなければ受け入れると
言っていたがな」

「なるほどね」

「流女将は救助系だもんね」

「イエア！」

とりあえず先送りにした刃羅だった。

夜。

「どの人がいいの!?!」

「おや。結構来ていたんですね」

「後、帰ってくるときにまた色々渡されたので差し入れであります!!」

「……凄い量ですねえ」

「これでも学校で先生やクラスの皆に配ったのだが……」

「これで？」

「イエア！」

45Lサイズの袋が6つ。

その全てに果物やお菓子、食材などが詰められている。

「困ってるべ」

「これはそうですねえ」

「サイドキックの連中にでも分けてやってくれや」

「そうですね」

「でじや、職場体験のお勧めはどこかの？」

名簿を確認する流女将。

ペンを取り出して、数字を記載していく。

「刃羅さんの『個性』や向こうの活動やヒーローの性格を考えれば、こんな感じでしよう」

「1が一番ええのん？」

「ええ」

「光閃ヒーロー『エクレーヌ』……聞いたことはあるなあ」

「私の所でインターンもしていましたし、プロになってからも連絡は取っています。彼女は近接系のサイドキックを欲しがっていますし、その他のサイドキックも優秀なので研修やインターンにはいい所ですよ」

「じゃあ、ここにいいー！」

流女将のお墨付きならば問題はないだろうと考える刃羅。

実際に会うまでは。

今更人物事典!!

ながれおかみ みななぐれ あおみ
・流女将 / 水流 青美

誕生日：7月16日。身長：165cm。A型。

好きなもの：和食、流しそうめん

水色の髪をハーフアップに纏めている。常に微笑んでいるおっとり美女。Cカット。

コスチュームは白の波模様が描かれた水色の小袖に、青の帯とシンブルなデザイン。

お流れヒーロー。ヒーロービルボードチャートJP：22位

大ベテランヒーローと言われるほどの経歴の持ち主。夫は死別。息子が1人おり、息子もヒーローをしている。

ランキング上位の女性ヒーローの多くが、彼女の元で一度は研修を受けている。

昔は戦闘にも参加していたが、近年は水難、火災などの災害救助を重きに置いている。また後進育成にも力を入れている。

雄英高校教師赴任の打診も毎年来ているが、現場で教えることに力を入れたいと言うことで固辞している。その代わり、職場体験やインターンは全国から受け入れている。

個性：水流操作

水の流れを操る。操るには半径5 m以内まで近づく必要がある。

それに水を操るわけではないので、操るためには手でかき回したりする必要はある。そのため、サイドキックには水を放つ『個性』持ちが多い。

一度操れば、操っている水が混ざっている川や海でも大規模で操れるため、洪水、津波で最も力を発揮する。

#14 職場体験

職場体験初日。

A組は駅に集まっていた。

コスチュームが入ったトランクを持っている雄英生はかなり目立っていた。

「コスチューム持ったな。本来は公共の場では着られない身だ。落とすなよ」

相澤が最後の注意をしている。

「くれぐれも注意の無いようにな。じゃあ行け」

そして、それぞれの受け入れ先の事務所へと向かい始める。

「梅雨ちゃん！またね！」

「刃羅ちゃんも頑張ってるね」

「おうよ！」

ブンブン！と梅雨に手を振りながら別れる。

「飯田氏。途中までは一緒にござる」

「そうなのか。分かった。一緒にいこう」

飯田と電車に乗り、移動を始める刃羅。

妙に飯田が思い詰めた顔をしている。

その理由に刃羅は心当たりがあった。

「……ヒーロー殺しかの？」

「!!? ……なんのことだ？」

「嘘がお下手どすなあ」

「……」

「言っておくが、私は別にそれを止める気はない」

「……え？」

「ヒーローとしちゃあ最低の行動だけだな」

刃羅の言葉に俯いてしまう飯田。

「どうやらそれは理解はしているようだ。」

（憧れであり、家族である兄が再起不能にされれば、感情をコントロール出来るものではない。本来なら、この職場体験でも兄の事務所に行

けていただろうしな)

今の飯田を論せるものなどいない。

飯田自身が己の行動を顧みる余裕がなければ無駄でしかない。

「間違えるでないぞ。飯田天哉。ヒーローとしての最低限の矜持だけはのう」

「……分かっている」

「……なら、ええわ。ほな、頑張ろな」

「……ああ」

刃羅は先に電車を降りる。

飯田は最後まで刃羅と目を合わせることはなかった。

刃羅は駅を出て、事務所を目指す。

「まさか保須市とはねえ。お師匠とはあ鉢合わせしたくないなあ」

ステインが標的に定めている街だと知った時は、盛大に顔を顰めた。

連絡しようにも、未だ携帯を持っていないようだった。

出会わないことを祈るばかりの刃羅だった。

「……ここか。思ったより大きく」

事務所は4階建てのビルだった。

一棟全てが事務所のようだった。

1分程、ホケっとビルを見上げてから、中に入る。

「失礼するであります！雄英高校1年A組！乱刀刃羅であります！」

「うわあ!?!びっくりしたあ!げ、元気な子だね……!」

ビシィ!と入ってすぐに気を付けをして、大声であいさつする刃羅。

それに一番近くにいたヒーローと思われる女性が、地面から両足が離れる程驚いて、胸を押さえて深呼吸する。

「君が職場体験の子だね」

「よろしく〜お願いします〜」

「……本当に話し方が変わるんだね」

「少ししたら慣れると思いますわ。堪忍ですわ」

「あははは……頑張るよ。って、ごめん。私はサイドキックの『ミラミラ』だよ」

ミラミラは茶髪ショートボブの女性。

頭の左右に手鏡が付いたカチューシャを身に付けており、平べったい胸や肩、両前腕、腰のベルト、ふくらはぎの両側、両脛に丸い鏡を装備している。

「エクレーヌさんは上にいるから、付いてきて」

「イエア！」

ミラミラに付いて行き、3階に上がる刃羅。

案内された部屋は執務室のようで、本やパソコンが置かれていた。

「エクレーヌさん。英雄生来ましたよ」

「おや、すまないな」

机で書類作業をしていた白金のショートウルフカットの女性。

ミラミラの声に手を止めて立ち上がり、刃羅を見る。

「初めましてだね。私がエクレーヌだ」

エクレーヌのコスチュームは赤のシャツに黒の革ジャン、黒のレザーパンツに赤のブーツという私服に近いものだった。

男装麗人と言う言葉が当てはまりそうだ。

「乱刀刃羅でござる。お世話になるでござる」

「ほお……本当に色々な性格に変わるんだね」

「めんどくさくてすみまへんなあ」

「構わんさ。大事なのは行動だからね。一度部屋に荷物を置いて、コスチュームに着替えておいで」

「了解だべ」

ミラミラに案内されたのは、ベッドとテーブル、トイレだけの質素な部屋だった。

仮眠室の1室とのことだ。

刃羅はベッドがあるだけでも十分なので、一切不満はなかった。

そして、コスチュームトランクを開ける。

修正と改良を頼んでいたが、どうなったのだろうかと刃羅は首を傾

げると、メモが挟まっているのに気づいた。

『乱刀様へ。コスチュームですが、乱刀様の髪や血液を組み込ませた生地で作られています。それと仮面のデザインも変更させて頂きました。こっちの方がいいと思うんですよ！はい！』

「……せめて一言〜」

サポート会社に文句を言いたかったが、すでに遅いので諦めて着ることにする。

上着は藍色の筒袖和服。帯は赤でバッジがたくさん。下は黒のパンツオパンツに赤のブーツサンダル。

装備は背中の鉄刀と脚のナイフはそのままだが、鎖鎌などは排除した。

試しにと右前腕から鎌を生やすも、服が破れることはなかった。

「おおーこれはいいのうー！さて、後は仮面じゃが……マスク？」

前は顔上半分を覆う髑髏面だったが、今回は顔下半分を覆う赤のマスクだった。後ろで縛ると、余った布が尻尾のように靡くようになってる。

「……ステインっぽいな。まあ、いいか」

着替えを終えると、エクレーヌの元に戻る。

「ほおー！忍者のようだね」

「かっこいいね」

「どうも」

「では、案内ついでにパトロールといこうか」

エクレーヌはスポーツサンングラスを掛ける。

そして3人で街に出向く。

「今日は他のサイドキックが応援に出ているからね。また明日紹介するよ」

「了解じゃ」

「私達は基本ヴィランや犯罪の取り締まりをメインとしている。もちろん要請があれば災害救助にも出向くけどね」

「救助系をメインとしているヒーローは副業をしていることが多いわね。給料は歩合制だから」

「だから、私のサイドキックは他のヒーローの応援要請があれば参加させているのさ」

「ほ〜」

ヒーローは公務員の枠組みではあるが、特殊過ぎるため貢献度で歩合を決める。

それが現在のヒーローの多くが報酬や名声を求める理由にもなっている。

「犯罪者を迅速に、かつ被害を抑えて捕らえることは意外と難しい。被害には犯罪者の怪我也含まれるからね。あまり重傷にすると、問題になるよ」

「わっちにはそれが難点ですわあ」

「それを補うためのサイドキックであり、チームさ」

しばらく街を見て回り、事務所に戻る。

「と、いうことでちょっと君の力を見せてもらおうかな」

地下にある訓練場のような部屋でエクレーヌと向かい合う刃羅。

「どこまでえありですかあ？」

「私をヴィランと覚えてくれればいいよ」

「了解であります！」

「じゃあ、おいで！」

背中の鉄刀を抜いて、飛び掛かる刃羅。

エクレーヌは右手を開くと、そこに手の平大の光る玉が現れる。

そして、それを刃羅に向かって放つ。

「！」

刃羅は鉄刀で払う。

エクレーヌは両腕を振って、連続で光弾を放つ。

刃羅は弾いたり、躲しながら、エクレーヌに迫る。

ある程度近づき、光弾が途切れた瞬間に滑り出してスピードを上げる刃羅。

「ふー！」

「っ!?!」

エクレーヌは右手を突き出し、今度は光弾ではなく光線を放ち、刃

羅の進路を塞ぐ。

刃羅は慌てて方向転換するが、それを狙っていたエクレーヌは左手にバスケツトボール大の光弾を生み出して放つ。

すると光弾が弾けて、散弾のように刃羅に迫る。

「げ!?!」

刃羅は顔を引きつかせて、左腕と左脚をロングソードに変えて、右手の鉄刀と一緒に振り回して、バレエを踊る様に光弾を弾く。

それにエクレーヌは少し目を見開く。

再び刃羅が駆け出そうとすると、背中から避けたはずの光線が飛んできた。

刃羅は足を槍に変えて、横に飛んで躲す。

「何だあ!?! って、2対1かよ!?!」

飛んできた方向を見ると、そこには両腕の鏡を構えているミラミラが立っていた。

「よくある事さ」

「学生相手に大人げないんだあ!」

「サイドキックとの連携も見せてあげないとね」

「こんなのイジメだよお!びいえくん!!」

「な、泣いた!?!」

「ミラミラくん。あれもそういう性格だそうだ。気にしなくていいよ」

「そ、そうなんですか……」

「ほら、行くよ」

「はい!」

再びエクレーヌが光線を放つ。

刃羅が躲すと、光線の先にミラミラが立つ。

ミラミラは右腕の鏡を光線に向け、左腕の鏡を刃羅に向ける。

光線が右腕の鏡に当たると、吸い込まれたように消えていき、左腕の鏡から光線が放たれる。

「っ!反射!?!いや、ちゃうな!ゲートの類かいな!」

「!!。お見事。私の『個性』は《ミラーゲート》。鏡と鏡を繋げること

が出来るの」

「反射も出来るからね。相性抜群さ♪」

「そ、そうですね」

刃羅が『個性』を見抜いたことに目を見開くミラミラ。

それにエクレーヌが得意げに語り、ミラミラにパチン！とウインクする。

ミラミラは頷くが、少し顔が引きつっている。

(……鏡女はともかく、光女は両手から放つ定番タイプ！許容超過が分かんねえ！)

刃羅はエクレーヌに向かって滑り出す。

ただし蛇行するように滑り、照準を合わせられないようにする。

「よく考えているね。でも、それだけでは」

「はあん！」

「!!」

右手を蛇腹剣に変えて、鞭のように飛ばす。

それにエクレーヌは目を見開いて、横に飛んで躲す。

続いて左手も蛇腹剣に変える。

「うおっとお!!?やるな！」

「ミラミラちゃんはあるん、自分からあん攻撃は難しいわよえん！」

「そこまで理解しているか！」

蛇腹剣を躲しながら、光弾を放つエクレーヌ。

刃羅は無理に弾かずに躲す。ただし蛇腹剣をミラミラに向かって

振る。

「っ！」

「鏡を浮かせられるうん訳ではないわよえん」

「そこまで対応出来ちゃうの!?!」

「本当にすごいね!!でも、ここまでにしようか。これ以上は怪我では済まなさそうだ」

エクレーヌの言葉に腕を戻す刃羅。

エクレーヌはニコニコと上機嫌に笑いながら、刃羅に近づく。

「素晴らしいね。すぐさまサイドキックで欲しいくらいだ」

「どうもお」

「ふふ♪それに本当にかわいい子だ」

「!？」

舌なめずりしながら、両手を刃羅の頬に添える。

それに刃羅はゾワァー!と背筋に悪寒が走る。

「どうだい?一晩、私と楽しまないか?」

「やめてください!未成年ですよ!?!雄英に訴えられてしまいます!流女将さんも黙ってないですよ!?!」

「おや。それは楽しくないね。残念だよ」

「……」

ミラミラが慌てて刃羅をエクレーヌから離す。

ミラミラの言葉に肩を竦めるエクレーヌ。

刃羅は未だにシヨックと悪寒から抜け出せない。

「では、今日はゆっくりと休みたまえ♪」

エクレーヌは言った後に投げキッスをして、訓練場を後にする。

「はあく……全く」

「……」

「ああ……ごめんね。エクレーヌさんってさあ、バイセクシャルなんだよね。だから、気に入った子がいたら男女関係なくイけるのよ」

「……」

ミラミラの暴露に固まったままの刃羅。

そのような話は流女将からは聞いていなかった。

「流石に未成年には手を出さないはずだから。日中はちよつとしたスキンシップは我慢してほしい……かなあ」

「……努力しますだ」

「ありがとうね!本当にごめんなさい!」

ミラミラは本当に申し訳なさそうに謝罪する。

それに刃羅は引きつった笑みを浮かべる。

とりあえず帰ったら流女将に聞いてみよう!と心に決めた刃羅だった。

人物紹介！

・エクレーヌ／閃乃 （せんのみつる） 光

誕生日：9月22日。身長：181cm。AB型。

好きなもの：可愛い子、演劇

白金のショートウルフカット。男装麗人系。Aカップ。

コスチュームは赤のシャツに黒の革ジャン、黒のレザーパンツに赤のブーツにスポーツサングラス。

光閃ヒーロー。ヒーロービルボードチャートJP：26位

中堅クラスのヒーロー。実力は認められているが、言動で扱い辛いと思われる。

バイセクシャル全開。もちろん嫌がられたら身を引くし、誘ったりもしない。冗談的に言うことはあるが。

災害救助では明かり程度しか役に立たないため、戦闘メインにしている。しかし応急処置技術や避難誘導技術はトップクラス。

個性：《光波》

両手の手の平から光線を放つ。弾状にもできる。要は気功波。かめは○波や気○砲、魔○光殺法なども撃てる。

使い過ぎると瞳孔の光調節が出来なくなり、眩しすぎて眼が開けられなくなる。

・ミラミラ

誕生日：10月10日。身長：161cm。O型。

好きなもの：リンゴ飴

茶髪ショートボブ。Aカップ。

コスチュームは白と黒のフィットしたタイツで、頭の左右に手鏡が付いたカチキューシヤを身に付けており、平べったい胸や肩、両前腕、腰のベルト、ふくらはぎの両側、両脛に丸い鏡を装備している。

エクレーヌのサイドキック。

駆け出しヒーロー。エクレーヌのバイセクシャルには困っているが、ヒーローとしては尊敬している。

事務職や偵察、避難で活躍する。

個性：《ミラーゲート》

鏡と鏡を繋げる。発動条件は『一度触れていること』と『繋げる鏡の位置を明確にイメージ出来ること』。

出口は同時に2つまで設定できる。

そのため災害時の避難や物資・人材の運搬でも大活躍できる。大きい鏡があれば、であるが。

#15 師と友の狭間で

職場体験3日目。

刃羅は、寝不足だった。

「……普通に夜這いにくるじゃねえかよ鏡女ゴラア。カギ閉めても入ってくつぞお」

「……ごめんなさい」

目を血走らせて歯軋りをしながら、ミラミラにメンチを切る刃羅。顔と顔が触れ合いそうになるほどの距離で全く瞬きもせずに見続ける。

それにミラミラは冷や汗をダラダラと流し、顔を背けて謝罪する。エクレーヌは毎晩刃羅の部屋に忍び込んできた。素っ裸で。

1日目は斬りかかり、その後ずっと座って監視していた。エクレーヌはベッドで爆睡していたが。

2日目は鍵を閉めて、窓も封をして寝ていたがいつの間にか真横にエクレーヌが立っていた。再び斬りかかるが避けられ、その後も座って監視していた。エクレーヌは爆睡していたが。

そのため刃羅はほとんど寝ていない。

「なんだ……この事務所は寝不足の訓練でもさせる伝統でもあるのか……?」

「……ない……はず……多分……」

「どうしたんだ?」

「眠そうね」

「……コーヒー飲むか?」

現れたのは初日にいなかった残りのサイドキック達。

『モリアガ』。

緑の短髪に目元を覆うマスク。腹部を曝け出すプロテクターを身に着け、黒のボンタンドカンを履いている大柄の男ヒーロー。

『ローテリア』。

金髪をワンサイド縦ロールに纏め、赤いバイザーに足のサイドに

ローラーが付いたコスチュームを着た女性ヒーロー。
『フィクスマン』。

黒髪ショートストレートで丸眼鏡をかけている中性的な男性ヒーロー。コスチュームは魔法使いのような黒いローブを羽織っている。
「頂くでござる」

「……ブラックだよ」

「大好き！」

「……なら良かった」

フィクスマンからコーヒーを受け取る刃羅。フィクスマンはあまり表情が動かず、座っていると人形のように見える。

刃羅はコーヒーを一気飲みをする。

「ふは〜。おいしく」

「エクレーヌさんに夜這いされまくってるらしいです」

「ああ〜……なるほどなあ。あの人ついに未成年に手を出したのかよ」

「今日は私の家に来る？」

「いいのおん!？」

「流石にこれ以上夜這いされたら庇いようないもの」

目をウルウルさせながら両手を組む刃羅に、ローテリアは苦笑しながら刃羅の頭を撫でる。

サイドキック達は近くのマンションに住んでいるらしい。理由はもちろん夜這いされるから。

そこにエクレーヌが現れる。

「おはよう皆。おや、随分と仲良くなったね。よかったよかった」

「相談受けてるんですよ。エクレーヌさんから夜這いされてるって」

「仕方ないじゃないか。夜は人肌が恋しいのさ」

「だからって未成年に手を出さないで下さい！」

「出してないよ？ただ抱き枕になってほしかっただけさ」

「十分怖いですからね？」

「そーだ！そーだ！」

「おや、それは残念」

サイドキックと刃羅の抗議に肩を竦めるエクレーヌ。
それに全員がため息を吐く。

「今日はどうするんですか?」

「午前中は待機だね。ヒーロー殺しの情報を集めて纏めるよ」

「了解。アラジンは少し横になってていいよ」

「いいのですか?」

「俺も寝るから構わねえよ」

ということとで、刃羅は仮眠を取ることにした。

夕方からはパトロールに出る。

「ヒーロー殺しは1件目以降まだ出てない。そろそろ動きがあってもおかしくない。1人で行動するのは控えるようにね」

「了解」

エクレーヌの言葉に頷く一同。

しばらくパトロールしていると、近くで爆発が起こった。

「爆発!」

「行くよ!」

「了解!」

走り出す一同。

現場に付いた先にいたのは、脳みそが露出したような頭部をした肥満の大男がいた。

「なんだ!?!あいつは!?!」

「普通のヴィランではなさそうだね」

「……似ておる」

「アラジン?」

「雄英を襲ったヴィランの中にいた脳無という化け物に似ている。あれは危険だ」

「雄英襲撃だと?どれくらい化け物なんだ?」

「オールマイトの攻撃をほとんど吸収して、腕を斬り落としてもすぐさま再生しただよ」

「「はあ!?!」」

刃羅の言葉にサイドキック達が目を見開いて驚く。

エクレーヌも一瞬目を見開き、すぐに目を鋭くして脳無を睨む。刃羅も顔を顰めて脳無を見つめる。

「ちゆうことは、近くに敵連合も来とるんかいな?」

「おいおい!?!マジかよ!」

「まずは奴を止めるよ。行くよ。皆」

「俺たちは?」

「モリアガに従って避難誘導してくれ」

指示を出して、脳無に向かって飛び出すエクレーヌ。

それにモリアガ以外の全員が駆け出す。

「いよっしやあああ!!頑張れええ!!気張れえええ!!」

モリアガがエクレーヌ達に声を掛ける。

モリアガの『個性』は《声援》。対象を意識して応援の声を掛けることで、掛けられた者の身体機能や『個性』をパワーアップさせる。

「……頂戴」

「はい!」

フィクスマンがミラミラに声を掛けると、ミラミラがフィクスマンに両腕以外の鏡を鏡を手渡す。

受け取ったフィクスマンはそれを抱えて、走り出す。

「そこまでだよ!」

「止まちなさい!」

エクレーヌとローテリアが脳無に呼び止めるが、脳無はそれを無視する。

腕を振るい、ビルの壁を砕き、瓦礫を持ち上げて反対側のビルの投げ飛ばす。

「無視は酷いな!」

エクレーヌが瓦礫に向かって、光弾を放つ。

瓦礫に直撃すると、その瓦礫が爆発した。

「爆弾でも仕掛けられていたのか?」

「そんな!?!だって、砕いてすぐに投げましたよ!?!」

「だよ。ね。ということは、あれが彼の『個性』ということだ」

「爆弾に変える『個性』……!」

「危険だね。彼の触った物に注意するんだよ!」

「了解!」

エクレーヌは連続で光弾を放ち、脳無の注意を引く。

脳無はそれを無視して、瓦礫を掴んでビルに向かって投げる。

「させないわよ!」

ローテリアは体の周囲に旋回している瓦礫を飛ばして、脳無が投げた瓦礫にぶつけてビルにぶつかる前に爆発させる。

ローテリアの『個性』は《回転》。両手から2 m以内の移動しているものをその場で回転させたり、自身の周囲で回転させて飛ばすことが出来る。注意がいるのは動いていないものは回転させられないし、手の平を向けたものでないと発動出来ない。

「ローテリア!」

そこにエクレーヌが巨大な光弾を生み出して、ローテリアに向かって放つ。

ローテリアは光弾に手を向けると、光弾はローテリアの周囲で高速で旋回し、それを勢いよく脳無の背中に飛ばす。

脳無は前のめりに倒れるが、バイン!とゴム弾のように飛び跳ねて起き上がる。

「なに今の!」

「本当に化け物染みているな」

脳無の動きにローテリアが目を見開く。

エクレーヌも顔を顰める。

それを後方で避難誘導をしていた刃羅達も目撃していた。

「やっぱり複数の『個性』を持つてるのかなあ?」

「ありえねえだろ……!」

すると、他の場所でも爆発が起こる。

「他にもいやがるのか!」

「まずいでござるな。これではこここの応援も来れないかもしれないで

「ぎぐる」

「ちくしょう！」

歯軋りをして、避難経路を考え直すモリアガ。

刃羅も瓦礫が飛んで来ないように注意しながら避難誘導をする。

(しかし、何故このタイミングなのかのう？……嫌な予感がするのじゃ)

何故かステインが頭に浮かぶ刃羅。

その時、エクレーヌ達の動きが変わる。

「準備OKです！」

ミラミラが声を上げる。

刃羅が目を向けると、脳無の周囲の空中に鏡が浮かんでいた。

「あれは？」

「フィクスマンの『個性』《固定》だ。手足で触れた空間を固定して、壁にしたり、物を設置することが出来る。10か所までだけどな」
「強っ!？」

「ただ生き物には効かねえし、空間だけだと2m四方だけだ」

「……びみよ〜」

「だから俺らと組んでるんだろ?」

「言われればそうやな」

その鏡に向けてエクレーヌが光線を放つ。光線が鏡に吸い込まれると他の鏡から光線が飛び出し、脳無の脚に後ろから直撃する。

「……見事に近接系がおりまへんなあ」

「だからお前さんに声掛けたんだよ」

「でも、今は参加出来ないですわ」

「仕方ねえし、ここでお前を参加させたらプロの意味がねえだろ?」

「そうだけど〜」

そこで刃羅の携帯が鳴る。

確認すると、緑谷からだった。

内容は位置情報だけだった。

「……保須市やな。……さっきの爆発の場所でもないし、路地裏や。……お師匠か?」

顔を顰めて推測する刃羅。

(なんで緑谷がここにいるのかはともかく、近くにいるのは私くらいだろうな)

画面を眺めて数秒考え込む刃羅。

刃羅はエクレーヌ達やモリアガを見る。モリアガは住民の避難に集中していて、刃羅を見ていない。エクレーヌ達はもちろん脳無に集中している。

それを見て、刃羅は人ごみに紛れて走り始める。

「くそ！数が増えるばかりだな！ん？アラジン？おい!?アラジン!?」

「どうしたの!?!」

「アラジンがいねえ!!」

「え!?!」

「……上からは見当たらん!」

「マジかよ!?!」

「今は脳無と一般人が先だよ!」

「くっ！了解です」

「チキシヨウが!」

刃羅がいなくなったことに気づいたモリアガ達だが、エクレーヌは脳無の捕縛と一般人の避難を優先するように指示を出す。

それにモリアガは顔を顰めながらも従う。

エクレーヌも表情を鋭くして、脳無に攻撃を仕掛ける。

刃羅はビルの屋上に駆け上り、位置情報の場所を目指して移動する。

(……クラス全員に一斉送信してやがる。お師匠が相手なら細かく書く暇はねえよな。問題は……飯田や犠牲者がすでにいやがる場合)

ステインの『個性』を知っている刃羅は、スピードを上げて走る。

緑谷や飯田はもちろん、プロヒーローですらステインと戦って無傷で勝てるわけではない。逆にお荷物が増えるだけだ。

「あそこー！」

ビルの上から現場を見ると、4人の人影が確認できた。

（お師匠と緑谷。倒れているのは飯田と……プロか？2人は《凝血》にやられているな）

緑谷がステインに殴りかかる。

刃羅はその動きに目を見張る。

（なんやあの動き!?!数日で何があったんや!?!）

なんとステインの攻撃を躲し、一撃を加えた。

しかし掠っていたのか、ステインがナイフを舐めると緑谷の動きが止まる。

そしてステインは緑谷を無視して、飯田に向かう。

「緑谷君はあ気に入ったのかあ。って、あれはあ!?!」

ステインが飯田に近づくと、ステインに向かって炎と氷が放たれる。ステインはそれを飛び下がって避ける。

「轟屋!?!」

現れたのは轟だった。

「緑谷。こういうのはもつと詳しく書くべきだ。遅くなっちゃった」

「次から次へと……ハア……」

「何で君が……!?!それに左……!!」

緑谷と飯田は現れた轟に目を見開く。

轟は炎を纏いながら、ステインを睨んでいる。

「何でって……こつちのセリフだ。数秒意味を考えたよ。一括送信で位置情報だけ送ってきたから。意味無くそう言うことする奴じゃねえからな、お前は」

続いて氷を放ってプロヒーローや緑谷を凍らせる。

それと同時に炎を放ち、プロと緑谷を飯田の近くに滑らせる。

「応援を呼べってことだろ？大丈夫だ。数分もすりゃプロも現着する」

そしてステインを見据える。

「情報通りのナリだな。こいつらは殺させねえぞ。ヒーロー殺し」
ステインは轟を見極めようと見つめる。

「そういうことじゃの」

『!!』

そこに声が響く。

轟がステインの上を見て、目を見開く。

それを見たステインは刀を横にして頭上に掲げる。

直後、その刀に衝撃が走る。

「貴様は……!」

「乱刀……!!」

刃羅が上空から飛び降りてきて、両腕を刀に変えてステインに振り下ろした。

しかし、それは防がれて、弾かれる。

弾かれた刃羅は、壁を跳ねて、轟達の前に着地する。

「乱刀さん!?君までどうして……!」

「儂は元々この近くで職場体験じゃ。むしろお主らの方が何故ここにおる?」

「それは……」

「駄目だ!3人とも逃げるんだ!君達には関係ないだろ!」

「まだそんなことを……!」

「残念じゃが儂には関係大有りじゃ」

「え?」

飯田の言葉に刃羅はステインを見据えたまま、反論する。

それに轟達が訝しむと、刃羅は腕を戻して前に歩み出る。

「おい乱刀……!」

「駄目だ!乱刀さん!そいつに血を見せると……!」

「摂取されると体の自由を奪われる……か?」

「!?どうして!」

「何度もお味わったからねえ」

「……え?」

「《凝血》。血を舐めることで体の自由を最大で8分間奪う『個性』だ。

ただ……血液型で効果時間が変わる」

刃羅はスラスラとステインの『個性』の内容を語る。

それに目を見開く緑谷達と、顔を顰めるステイン。

「……なんでそんなことテメエが知ってんだ？」

「言ったでござろう。何度も味わったと。3年間ほぼ毎日味わえば理解出来るでござる」

「……3年間？毎日？……まさか……乱刀さんを攫ってたヴィランって……！」

「……!!」

「……久しぶりだな。お師匠。私を取り戻しに来ずに、こんなところで何をしている？」

刃羅の言葉に目を見開いて、固まる轟達。

「……刃羅あ。貴様こそ、こんなところで何をしている……？」

「雄英でえ職場体験ですう」

「……俺の信念を知っているのか？」

目を鋭く細めて、刃羅を睨むステイン。

それに少し冷や汗を流して睨み返す刃羅。

「知っているね。それでもく今はヒーロー志望だからね」

「……私怨で戦うことは」

「失格でござろう。分かっているでござる」

「……」

「やけどなあ……今、ここであんたの力一番わかつとるんはうちや。

後ろの連中だけで戦わせられるかいな。……それであんたに殺されてもなあ」

「……少しはマシになったか」

刃羅は両腕をロングソードに変える。

「轟。そいつらを守れ。恐らく隙を突いて狙ってくる」

「お前1人でやる気か……!?!」

「無茶だよ……!?!」

「役割分担だ。貴様の氷と炎が適任なだけだ。頼むぞ」

そして走り出す刃羅。

それにステインも構える。

「お前が俺に勝ったことがあったか……?」

「ないな!だが、それは退く理由になるまい!」

腕を振り、斬りかかる。

刀で防がれ、ステインが蹴りを放つと、刃羅も右脚をロングソードに変えて防ぐ。

弾かれて後ろに下がると、今度は左前腕に鎌を生み出して斬りかかる。

それを再び刀で防ごうとするステインを見て、左足を鎌に変えて振り上げる。

刀が上に弾かれると、ステインは左手のナイフで斬りかかってくるが、刃羅は鉄刀を抜いて防ぐがへし折られてしまう。刃羅はすぐさま腕をサーベルに変えて斬りかかる。

「……ハア……それで全力か?」

「そんなわけではないであります!」

全身を動かし続け、ステインと斬り合い続ける。

それを轟達は目を見開いて、見届けていた。

「すごい……あのヒーロー殺しと渡り合ってる……!」

「体育祭の時よりもキレがありやがる」

「……何でだ……!もう……やめてくれ……!」

刃羅は内心では焦っていた。

(やっぱり……まだ手加減されているでありますな!いつでも斬れるという気配が飛んでくるであります!)

刃羅は鎌を生やして斬りかかる。

「ひょう!」

「ハア……少しは動きが良くなったか」

「しい!」

「だが、まだ遅い!」

「くう!」

「乱刀さん!」

ステインは落ちてくる刀を目も向けずに、掴み取りナイフと共に高

速で振り、刃羅を弾き飛ばす。

緑谷が叫び、轟が氷を放つ。

氷で邪魔をし、ステインの足止めする。

刃羅は轟達の傍に飛び下がってくる。

「乱刀さん！大丈夫!？」

「血は取られてねえよ。ギリギリだったがあ……」

刃羅は斬られる寸前で刃を生み出して、ステインの刃で防いだ。

刃は欠けたが、血を取られることはなかった。

「が、これからが本番だがな」

「っ！血が！」

「私の刃はあ脂肪と筋肉でえ出来てるからねえ。刃が砕かれたらあ体が削られたのとお一緒なのさあ」

刃羅の右腕と左脚から血が流れていた。

「緑谷は何型？」

「え？……あ……O型だよ」

「なら、もうすぐだね！」

「けど、僕が加わったところで……！」

「もう逃げてくれ！これ以上、僕の個人的なことで！僕がやらなきゃ……！」

飯田が倒れたまま涙を流しながら叫ぶ。

「わっちはお断りやよって」

刃羅はステインを睨んだまま、飯田の言葉をぶった切る。

「それに逃げる余裕もなさそうだしな。氷や炎も避けられる程の反応速度だ」

「逃げるためには誰かが残らないといけない……！そんなことは出来ない！」

「でも……！」

「轟屋あ！氷と炎は出し過ぎるなよ！あ！奴はその隙を見逃さあねえよい！」

「そこまでまだ出来ねえ」

「緑谷も真正面から攻めるな！」

「分かった……！」

その言葉と同時に飛び出す刃羅。

「いくわよおん！」

両手と左脚を蛇腹剣に変えて斬りかかる刃羅。

ステインは冷静に躲しながら、ナイフと刀を振るう。

刃羅は常に全身を動かして、振り続ける。

「すごい……！踊ってるみたいだ！」

「けど、あれだと俺は援護できねえ」

今度は刀に変えて、斬りかかる。

しかし、ステインに腹を蹴り飛ばされて、壁に叩きつけられる。

ステインの靴先の棘が突き刺さり、腹部から出血する。

「ごおー！」

「結局使えるのは1種……ハア……慣れれば隙を突くのは容易い」

「乱刀さんー！」

轟が氷を放ち、ステインが上に飛んで避ける。

そこに緑谷が飛び出し、ステインの首元を掴んで投げる。

ステインは体勢を立て直して、着地する。

そこに刃羅が斬りかかる。

ステインが刃羅の相手をした瞬間、緑谷が後ろに回って飛び掛かる。

すると、ステインの雰囲気と動きが変わり、刃羅は蹴り飛ばされ、緑谷が足を斬られる。

ステインは刀に付いた緑谷の血を舐めながら、轟に迫る。

轟は氷を壁にするが、斬られて砕かれてしまう。

「やめてくれ……僕は……もう……」

「やめて欲しけりゃ立て!!」

轟が氷を張り続けながら飯田に叫ぶ。

「なりてえもんちゃんに見ろ!!!」

炎を放つ轟。

それをステインは紙一重で躲し、轟に迫る。

「氷に炎。言われたことはないか? 『個性』にかまけ拳動が大雑把だ

と」

「化け物が……!」

轟の懐に潜りこむように刀で斬りかかる。

刃羅が後ろから追いかけるが、間に合いそうにない。

「おのれ……!」

すると、飯田の拘束が解除されたのか飯田が飛び起きて走り出す。

「飯田!」

「レシプロ!!バースト!!」

高速で走り出し、ステインの刀を蹴り上げてへし折る。

そのまま回転して、再びステインに蹴りかかる飯田。

ステインは防ぐが、勢いは殺せずに戻りに下がる。

「轟君も緑谷君も乱刀さんも関係ないことで……申し訳ない……」

「まだ……そんなことを……!」

「だからもう、3人にこれ以上血を流させるわけにはいかない」

飯田は覚悟を決めた顔をステインに向ける。

「感化され取り繕おうとも無駄だ。人間の本质はそう簡単に変わらない。お前は私欲を優先する偽物にしかならない!ヒーローを歪ませる社会のガンだ。誰かが正さねばならんのだ」

「時代錯誤の原理主義だ。飯田、人殺しの理屈に耳を貸すな」

(耳に痛い!そして、もう耳を貸してるのあたし!)

刃羅は轟の言葉に地味にダメージを受ける。

「言う通りさ。僕にヒーローを名乗る資格は……ない。それでも折れるわけにはいかない」

飯田は肩から血を流しながら両手を握る。

「俺が折れればインゲニウムが死んでしまう」

「論外」

「果たしてそうか?」

「!!」

飯田を鋭く睨むステインに、刃羅が右脚を蹴り出しながらパルチザンに変える。

それをステインは仰け反って躲すが、刃羅は突き出した脚を無理矢

理横に振る。

折れた刀で防ぐが、後ろに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

刃羅は脚を戻しながら、轟達の傍に移動する。

「確かに私欲。ヒーローとしては最低だ。せつかく忠告したのだがな」

「……すまない」

「……ハア……」

「されど元々誰かを救うという行動が私欲。それが憧れから来るものでも、恨みから来るものであっても、論外と決めるのは早計ではないか？ 師匠殿」

「……」

「偽物が本物に変わる所を見るのも一興とは思わないか？」

「……戯言だな。刃羅……貴様はそれを良く知っているだろうが」

「知っているさ。だからこそ……一興だと思った。……すまんな師匠殿。我はこの者達を殺させたくない。だから……貴様を倒す」

刃羅は『友』を選ぶことを決めた。

それにステインは一瞬笑みを浮かべるが、すぐに顔を鋭くして刃羅を睨む。

「気を引き締めろ!! 奴にはもう時間がない!! プロがこれ以上来たら勝機はないからな!!」

刃羅が怒鳴りながら、ステインに飛び掛かる。

「ハアー!」

「覚悟してもらおう、お師匠!!」

ロングソードに変化させて、高速で斬りかかる刃羅。

折れた刀とナイフでそれを捌くステイン。

「無駄だ。お前の戦い方は熟知している」

「だろぅな!! それでもねえ!!」

「!!」

刃羅は両腕がロングソードのまま、右足を大鎌に変えて蹴り上げる。ステインは目を見開いて、顔を傾げるだけで避けるが、左頬から血

が嘔き出す。

「2種……!?!」

「ぐぎいいいい!?!」

「乱刀さん!?!」

刃羅は『個性』が解除されて、歯を食いしばりながら叫びながら後ろに倒れる。

(筋肉痛ってレベルじゃないいいいい!?!やはりいい!無茶過ぎたかあああ!!)

「……ハア……未熟者が」

ステインは小声で呟いて、刃羅を無視して轟に向かって走り出す。

「くそっ!!」

轟の氷にステインは上に飛んで躲す。

「轟君!俺の脚を凍らせてくれ!排気筒は塞がずにな!」

「!!」

「邪魔だ」

ステインが轟にナイフを投擲するが、それを飯田が庇う。

そこに更にステインがナイフを投擲し、飯田の腕を地面に縫い付ける。

ステインはそのまま折れた刀で轟達に斬りかかる。

飯田は口でナイフを抜き、一気にエンジンを吹かして飛び出してステインに迫る。

ステインは飯田を斬り払おうとしたが、その横から緑谷が飛び出してきて一瞬固まる。

そして飯田の左脚がステインの脇腹に、緑谷の拳がステインの顔に突き刺さる。

ステインはそれでも刀を振り、飯田に迫る。

「お前を倒そう!今度は犯罪者として……!ヒーローとして!」

再び飯田がエンジンを吹かしてステインを蹴る。

更に轟の炎がステインの顔を焼く。

「がつ……!?!」

轟が氷を生み出して緑谷や飯田を受け止める。

「立て!!まだ奴は……」

「もう気絶している」

ステインは氷の途中で引っかかり、気絶していた。

刃羅が足を引きずりながら轟達に歩み寄る。

「オールマイトじゃねえんだ。頑丈さまでは真似できねえよ。ステインでもな。あれだけボコボコにされりやあ気絶するだろ」

「じゃあ、拘束して通りに出よう。何か縛れるもんはねえか?」

「武器も全部外しておこう」

轟と緑谷はステインの拘束を開始する。

プロヒーローも効果が切れて動けるようになった。

「はあ……しんどお……でえ?飯田君はあ落ち着いたあ?」

「あ……ああ……すまない。迷惑をかけてしまって……」

「それはあつちの2人に言うべ。おいらも私欲優先だっただ」

「……そうだな」

刃羅は飯田の背中をバンバン!と叩いて、ステインの武器を外すのを手伝いに行く。

「さてえ……これからあどうするべきかなあ……。とりあえずうあの子達にい連絡入れとこお」

刃羅は倒れているステインを見つめながら小さく呟き、ステインの対応を考えるのだった。

人物紹介!

・モリアガ

誕生日：7月22日。身長188cm。A型。

好きなもの：スポーツ観戦

緑の短髪に目元を覆うマスク。腹部を曝け出すプロテクターを身に着け、黒のボンタンドカンを履いている大柄の男ヒーロー。

エクレーヌのサイドキックで最古参。

面倒見がよい男気気質。

個性：《声援》

応援することで意識した対象をパワーアップさせる。

声が聞こえる範囲であれば、何人でもパワーアップさせられる。重ね掛けは出来ず、連続でパワーアップさせると、効果が下がっていく。災害救助でも大声で声を掛けて、被災者をパワーアップさせて救助までの体力を保たせる事も出来るので、地味に重要な役割を担う。使い過ぎると、モリアガ本人が無気力になる。

・ローテリア

誕生日：11月2日。身長：167cm。A型。

好きなもの：子猫、アボカド

金髪をワンサイド縦ロールに纏め、赤いバイザーに足のサイドにローラーが付いたコスチュームを着た女性。Bカップ。

エクレーヌのサイドキック。

彼氏募集中。

個性：《回転》

両手から2m以内の移動しているものをその場で回転させたり、自身の周囲で回転させて飛ばすことが出来る。注意がいるのは動いていないものは回転させられないし、手の平を向けたものでないと発動出来ない。風なども回転させることも出来る。

使い過ぎると麗日同様、酔う。

・フィクスマン

誕生日：1月23日。身長：160cm。B型。

好きなもの：コーヒー、眼鏡

黒髪ショートストレートで丸眼鏡をかけている中性的な男性。

コスチュームは魔法使いのような黒いローブを羽織っている。

エクレーヌのサイドキック。

無表情で人形のような美形のため、女性陣に化粧や女装などの玩具にされている。

個性：《固定》

手足で触れた空間を固定して、壁にしたり、物を設置することが出

来る。固定できるのは10か所まで。

生き物には使用できず、空間でも2m四方までしか固定できない。ミラミラの鏡を空中で固定して、エクレーヌの光閃を様々な角度から放てるようにする。標的の四方を固定して、捕縛することも可能。

災害救助では、瓦礫を固定して崩れないようにすることが出来るため、これまた地味に重要視されている。

使い過ぎると、手足が震えてくる。

#16 貫く信念

その後、縄を見つけてステインを拘束する。

轟が引つ張り、緑谷はプロに背負われて大通路に出る。

「すまない……プロの俺が一番足手まといだった」

「いえ……1対1でヒーロー殺しの『個性』だともう仕方がないと思います……強すぎる……」

「ステインにとつて『個性』はあくまで手段の1つじや。ステインの本領はあの戦闘技術と反射神経にあるからのう」

「実際、今回だって多対1の上にかいつ自身のミスがあつてギリギリ勝てた。焦ったせいで引き際と緑谷を忘れてたんだらうな」

「そういうことですわね。結局……最後まで勝てませんでしたわ」

刃羅は複雑な表情でステインを見下ろす。

それを轟達が心配そうに見つめる。

「それで？体は大丈夫なのか？」

「んなわけねえだろ！さつきからギリギリと痛てえよ！腹も!!その眼鏡とモジャ毛よかマシだがな！」

「そう言えば乱刀さんって出せる武器は1種だけだったんじや……」

「やから、あの激痛やつたんやろ。今は筋肉痛レベルやけどな」

「む!?!んなつ……何故お前がここに!!」

そこに黄色のマントを羽織った小さい老人のヒーローが小路から出てきた。

「何故お前がここに!!!」

「グラントリノ!!!」

「座ってろつつつたる!!」

「どなたどすか？」

「僕の職場体験先のヒーローだよ」

「まあ……よう分からんが、とりあえず無事でよかった」

「ごめんなさい」

緑谷はグラントリノに謝罪する。

それを見ながら刃羅はガードレールにもたれ掛かる。

「あゝ……うちのヒーローも怒ってるかな……」
「僕のところもだ」

何も言わずに来てしまった。
しかも脳無との戦闘中に。

「……私の純潔が危ないよお！びいえくん!!」

「どんな事務所に行ってるの!?!」

するとそこに他のヒーロー達もやってきた。

「エンデヴァーさんから応援要請承った……んだが……」

「子どもばかりじゃないか……!?!」

「酷いケガだ！救急車を呼べ!!」

「おい!?!こいつヒーロー殺し!?!」

刃羅も立ち上がって、ヒーロー達に受け答えをする。

緑谷も自分の脚で立ち、対応する。

そこに飯田が近づいて来た。

「3人とも……僕のせいで傷を負わせた。本当に済まなかった」

飯田が頭を下げる。

「何も……見えなく……なってしまっていた……!」

飯田は涙を流して震える。

「……僕もごめんね。君があそこまで思いつめてたのに全然見えてなかったんだ……。友達なのに……」

「しっかりしてくれよ。委員長だろ」

「……うん……」

緑谷と轟の言葉に頷く飯田。

「……なあ飯田、覚えてるか？私が体育祭で轟に叫んだ言葉。それに電車内で伝えた言葉」

「……ああ」

「正直に言えば、我はステインの言葉に少なからず賛同している」
『!!』

刃羅の言葉に3人は目を見開く。

「誘拐されて、扱かれたことは憎んでいるがな。しかし当然だろう？
我はヒーローに母親を奪われたし、ヒーローであった父親も失った。

今のヒーローの多くはあまりにも醜く見えてしまうのだ」

「俺っちが表彰式でオールマイトに言った言葉を覚えてつか？ 緑谷、轟」

「……確か……」

『今いるヒーローがすぐに変われるわけではない。でも、これからヒーローになるかもしれない奴らは期待してもいい』……だな」

「そうじゃの」

「……!!」

刃羅の言葉に飯田を更に涙が溢れてくる。

轟が言った言葉の意味に気づいたからだ。

「分かったかえ？ そう。わっちが期待してはるのはA組の皆の事や。その長たるおんしが、このまま廃れてしまたら……わっちはもうヒーローを信じる事が出来へん」

「……すまない……すまない……!!」

「まだ取り返せるべ。頼むだよ委員長。おいらは……皆と戦いたくねえべ」

刃羅は今にも泣きそうな顔をしていた。

それを見た飯田は両手を握り締めて俯く。

緑谷と轟も改めて刃羅が抱える葛藤の大きさを理解する。

「ちゆうことでやー」

「え？ ぐう!？」

「ら、乱刀さん!？」

突然刃羅が俯いている飯田の後頭部に拳骨を叩き込む。

轟は目を見開いて、緑谷は慌てる。

「人の忠告をく無駄にしたのはくこれで許したげるく」

「……ありがとう」

「いいわよおん」

ゴシゴシと目を拭って礼を言う飯田。

それに微笑み返す刃羅に轟達はホツとする。

その時、

「伏せろ!!」

「え?」

グラントリノが上を見て叫ぶ。

上空から翼を生やした脳無がこっちに向かって飛んできていた。

「ヴィラン!! エンデヴァーさんは何を……!!」

ヒーローの1人が声を上げる。

脳無は高速で降下し、突っ込んでくる。

なんと脳無は緑谷を足で掴んで、上昇を始めた。

「緑谷くん!!」

「なんでよりによってそいつなんだ?」

飯田が叫び、刃羅は脚のナイフを抜いて投擲しようとする。

脳無から血が振り落ち、ヒーロー達に振りかかる。

「わああ!!」

「くっそがあ!!」

刃羅はナイフを投擲する。

すると、後ろで何かが動く気配がして、刃羅の横を高速で抜けていく影があった。

刃羅はその正体を察知して、目を見開く。

脳無がガクンと固まったように落ちてくる。

飛び出した影は刃羅が投げたナイフを掴み、脳無の頭に突き刺す。

「偽物が蔓延るこの社会も……徒に力を振りまく犯罪者も……肅清対象だ……ハア……ハア……」

影、ステインは緑谷を抱えて地面に下ろす。

「全ては正しき社会のために」

そして、脳無の頭を切り裂くステイン。

「助けた!？」

「バカ、人質を取ったんだ」

「躊躇なく人殺しやがったぜ」

「いいから戦闘態勢を取れ! とりあえず!」

(タイミングよくう出たからあ手を組んだのかとお思ったけどお……違うみたいだねえ。……利用されたかなあ?)

ステインと敵連合の繋がりを疑っていたが、今の殺し方を見て、関係は薄いと判断する刃羅。

「何故一塊で突っ立っている!?!」

そこに炎を纏った巨漢の男が現れる。

「そつちに1人逃げたはずだが!?!」

「エンデヴァーさん!!」

現れたのはNO. 2ヒーローのエンデヴァーだった。

「あちらはもう!?!」

「多少手荒になっちゃったがな……して、あの男はまさかの……」

エンデヴァーは緑谷を抑え込むステインに目を向ける。

ステインはゆっくりと立ち上がっている。

「エンデヴァー……」

「ヒーロー殺し!!」

エンデヴァーは笑みを浮かべて構える。

それにステインは緑谷から手を放して振り返る。

妙な気配にグラントリノが気づき、エンデヴァーを制止する。

「待て!!轟!!」

そしてステインが顔を上げる。

「贖物……」

ステインのマスクが外れて素顔が晒される。

鼻が削がれ、異常な気迫を纏うステインの姿に、その場にいる全員
の背に悪寒が走り、気圧される。

唯一人、刃羅だけはその姿を、悲しそうに見つめていた。

「正さねば……誰かが……血に染まらねば……!」

ステインは1歩ずつ足を前に出す。

その気迫にエンデヴァーさえも後退らせる。

「……!!」

「ヒーローを取り戻さねば!!」

ザン!と力強く踏み出すステインに、誰も詰め寄れなかった。

「来い……来てみる贖物ども……!俺を殺していいのはオールマイ
ただだあ!!」

その瞬間更に膨大な殺気が襲い掛かる。

誰かが尻餅を着いたと同時に、刃羅が右腕を刀に変えて飛び出した。

『!!』

「お前かあ……刃羅あ!!」

「覚悟!!」

刃羅を見据えて叫ぶステイン。

腕を振り上げて、斬りかかる刃羅。

「……!」

しかし、刀が肉に触れる直前で腕を止める刃羅。

「……え?」

誰もが刃羅の人斬りの瞬間を想像していたため、呆けた声が漏れる。

刃羅はステインの肩に刀を添えたまま、ステインを睨んでいた。

「……お見事」

刃羅は目を伏せて、腕を戻す。

それに今度はステインに殺される刃羅を想像したヒーロー達だが、ステインは全く動くことはなかった。

「……! 気を……失ってる……」

それを理解した瞬間、轟や飯田も腰が抜けて座り込み、他の誰も動くことが出来なかった。

「……あんたを殺せんのはオールマイトだけ……か。そうだな。その通りだよ」

刃羅は気絶したステインの顔をまっすぐに見つめながら呟く。

その呟きと、その時の表情を見れたのはステインの背後にいた緑谷だけだった。

「……乱刀……さん……? 泣い……てる?」

刃羅は一筋の涙を流し、寂しそうな顔をしていた。

その顔には今まで話していたような怒りや憎しみの感情など一切ないように見えた緑谷だった。

刃羅はステインの目を右手で閉じさせて、ゆつくりと抱きかかえて

横にさせる。

その行動はまるで恋人を寝かしつけるような優しさだったと、見ていた者達は後に語る。

刃羅はそのまま立ち上がり、緑谷の元に向かう。

「無事アルか？」

「あ……うん……」

「……脳無はあん流石に死んでるわねえん」

刃羅は脳無の状態を確認する。

緑谷は刃羅の顔を見つめる。

すでに刃羅の涙は痕も残っていないなかった。

「んお？どうかしたんかいな？」

「い、いや!?なんでも……ない……です……」

「??……変なお」

緑谷は慌ててブンブン!と首を横に振る。

それに刃羅は首を傾げて不思議がりながら、ヒョイツと緑谷を脇に担ぎ上げる。

「うええ!?ら、乱刀さん!」

「暴れんなゴラア!!腹に響くだろが!!」

「すいません!!」

緑谷は顔を真っ赤にして慌てるが、刃羅に怒鳴られてピシイ!と固まる。

刃羅は担いだまま、ステインの横を通り過ぎて轟達の元に戻る。

「警察ついていつ来るの!」

「え!?あ、ああ……もうすぐ来るはずだ……と思うが」

ポイ!つと緑谷を轟達の前に落とした刃羅は、近くにいたヒーローに声を掛ける。

それにビク!と飛び跳ねたヒーローは刃羅の質問にしどろもどろに答える。

「じゃあくステインはくどうしたらいい?縄とかくはないの?」

「そ、そうだな!だ、誰か縄か何かを探してこい!」

刃羅の言葉に慌てて頷いて、周りに指示を出すヒーロー。

それに周囲も慌ただしく動き出す。

「ふい〜……コフツ！」

「うわああ!? 乱刀さん血い吐いた!？」

「ら、乱刀さん!? しつかりするんだ!!」

「……そういえば腹に穴空いてんだったな。こいつ」

「なんだって!? 君! 今すぐ横になって! 救急車来るまで大人しくしていなさい!!」

「うい〜……」

突如、吐血した刃羅に緑谷達が慌てだす。

ヒーローに無理矢理横にされて、グデエ〜とする刃羅に、緑谷や飯田が心配そうに声を掛けていた。

その後、刃羅達は救急車で病院に運ばれて入院することになった。

その晩、病室にて。

刃羅は個室の病室に入院していた。同じ階には轟達もいるらしい。「とりあえずう、これで夜這いはあ無くなったなあ」

違う意味でホツとしている刃羅。

その時、刃羅の携帯に着信があった。

「ん? おお〜……ナイスタイミング!」

表示されてる名前を見て、通話ボタンを押して耳元に当てる。

「もしも『刃羅あああ!!! 刃羅!! 貴様あああ!! 貴様!!』うぐうお!？」

鼓膜が破れるかと思うほどの大声がスピーカー越しに届く。

キーン!! と耳鳴りがした刃羅は電話を遠ざける。

『聞いたぞ!! たぞ! ステイン様が捕らられたって!! 捕らえられたって!! しかも貴様が現場にいたとな!! いたとな!!』

「相変わらず声がデケエよ。『ランバン』。今、病院なんだ。誰かに聞かれたらどうすんだよ」

『斬り殺せばいいだろう!! いいだろう!!』

「いいわけないでしょう。わたくしは今、雄英生ですよ」

『そんなものどうでもいいだろう!! いいだろう!! ステイン様をお救い

するのが最優先だ!!最優先だ!!」

「分かっておるわ。お師匠は現在治療中じゃ。その隙をお主らで狙え」

『……お前はどする気だ?気だ?』

「もうしばらくは雄英生を続ける。だから、私が下手に動くとは厄介なことになる」

『ヴィラン連合との繋がりはどする?どする?』

「わっちの予想では、お師匠はヴィラン連合と組んだりしてまへん。やから無視でよろしおす」

独特の喋り方をする声の主の質問に、刃羅は答える。

「あんまり〜派手にやっちゃだめだよ〜」

『分かっている!!いる!!しかし、こっちの好きにやらせてもらうぞ!!もらうぞ!!』

「我との繋がりがバレなければな」

『任せておけ!!おけ!!』

ブツツ!と通話が一方的に切られる。

それにため息を吐く刃羅。

「はあく……不安だなあ。まあ、他の皆もおいるから大丈夫だと思うけどお」

通話記録を消して、横になる刃羅。

寝不足と暴れた疲れもあり、久々に爆睡することが出来たのだっ
た。

翌日。

大部屋に緑谷達は入院していた。

「冷静に考えると……凄いことしちゃったね」

「そうだな」

「あんな最後見せられたら、生きてるのが奇跡だって……思っちゃうね」

「僕の脚……これ多分殺そうと思ったたら殺せてたと思うんだ」

「ああ、俺達はあからさまに生かされた。あんだけ殺意向けられて尚、

立ち向かったお前はすげえよ」

「いや……俺は……」

「ちはー!!」

3人の病室に刃羅がパーンと扉を開けて入ってきた。

「ら、乱刀さん!? って、乱刀さん服!? 前が開けて来てるよ!」

「乱刀さん!! しつかりと服を着たまえ! 公共の場でもあるんだぞ!」

刃羅は病衣を緩めに着ており、今にも胸が開けてそうだった。

しかも髪も結んでいないため、普段と印象が変わり妙に色っぽい。

緑谷と飯田が顔を真っ赤にする。

「ああん? 何今さら恥ずかしかってんだあ? 体育祭で俺つちの下着姿見てんじやねえか」

「それとこれとは別問題だ!」

「というか、元気そうだな」

「あの程度で寝たきりになどなるものか」

空いているベッドにドスンと胡坐を組んで座る刃羅。

ズボンタイプなので下着は見えない。

「お主達同様、明日には退院出来るじやろ」

「そうか」

「……」

「どないしたんや? 飯田はん」

飯田が思い詰めたように刃羅を見ているのに気づいた。

「……僕のせいで君には辛い思いをさせてしまった」

「気にせんでよろしおす。ある意味、清算出来たような気にもなつて
りますよって」

「……そうか」

「今、貴様に必要なのは我への謝罪ではなく、『インゲニウム』の名を
継ぐ覚悟ではないのか? それに一番謝罪すべきなのは兄だろう」

「!!……そうだな」

「おお、起きてるな怪我人共!! それに小娘もいたか。丁度いい」

入ってきたのはグラントリノ、飯田の体験先のマニュアル、そして
エクレーヌだった。

そしてその後ろに犬顔にスーツを着た長身の男性が入ってきた。

「保須警察署署長の面構犬嗣さんだ」

「しよ、署長!？」

「掛けたままで結構だワン」

(ワン!?)

面構の語尾に衝撃を受ける緑谷と刃羅。

「ヒーロー殺しだが……火傷に骨折となかなかの重傷で現在治療中だワン」

「だよね」

「超常黎明期……警察は統率と規格を重要視し、『個性』を武に用いない事とした。そしてヒーローはその穴を埋める形で台頭してきた職だワン。個人の武力行使……容易に人を殺める力。本来なら糾弾されて然るべきこれらが公に認められているのは、先人たちがモラルやルールをしっかりと遵守していたからだワン。資格未取得者が保護管理者の指示なく『個性』で危害を加えられたこと。例えばヒーロー殺し相手でもこれは立派な規則違反だワン。グラントリノ、エンデヴァー、エクレーヌ、マニュアル、そして君達4人には厳正な処分が下されなければならない」

面構がはつきりと口にする。

そこに轟が抗議するが、面構の返答に詰め寄ろうとする。

「でも、処分を言い署長がわざわざ来るのは、いささか物々しいではないのか?」

「アラジン……!」

「まあ……話は最後まで聞け」

「そう。以上が警察としての意見。で、処分云々はあくまで公表すればの話だワン」

面構の言葉に緑谷達は目を見開く。

面構は公表しない代わりにエンデヴァーが捕えたことにするとう。

「だが、君達の英断と功績も誰にも知られることはない。どっちがい!? 1人の人間としては……前途ある若者の偉大なる過ちにケチを

付けさせたくはないワン」

その言葉に緑谷達は顔を見合わせる。

刃羅は肩を竦める。

「儂は公表すれば処分だけでなく、復讐のレッテルが張られるからの。マスコミが厄介そうじゃ」

「だったら、もう少し考えたまえよ」

「あの状況では無理だったべき。脳無も放っておけねえべ？」

「それはそうだがね」

ペチン！とエクレーヌに頭を叩かれる刃羅。

それに緑谷達は苦笑して、面構に頭を下げる。

「大人のズルで君達が受けていたであろう称賛の声は無くなってしま
うが……せめて、共に平和を守る人間としては……ありがとう」

そう言って面構が頭を下げる。

こうして刃羅達の戦いは人知れず終わりを迎えたのであった。

職場体験最終日。

退院した刃羅はエクレーヌの事務所に顔を出していた。

「フン!!」

「ほぎゃ!?!」

「ふん!!」

「むぎゃ!?!」

「……ふん」

「……ほえ?」

「えい!!」

「ほげ!?!」

正座をさせられ、サイドキック全員から拳骨を食らった刃羅。フィクスマンは頭に拳を置いただけで、ミラミラは拳骨よりも鏡の縁が当たって痛かったが。

「全く!!いきなりいなくなったと思ったら、ヒーロー殺しと戦ってたなんて!!心配させるんじゃないわよ!!」

「いやあ申し訳ない」

「反省しろや!!」

「ごぶう!？」

ローテリアの叱責にへらと笑って謝るが、モリアガに再び拳骨を浴びせられて崩れ去る。

それをエクレーヌは後ろで苦笑して見ていた。

「まあ、それくらいにしときなよ。私達だってアラジンを見失ったのは失態なんだから」

「う……………」

「一声掛けてくれなかったのは問題だけど、声を掛けられても現場に向かえたかは怪しかったしね。そのおかげでヒーロー殺し相手に犠牲者無しだ」

「そうですけど……………」

「それに……………この子にとってはヒーロー殺しは因縁がありすぎる相手だ。私達がもっと注意していなければいけなかったんだよ。保身に現れるのは分かったのだからね」

「……………反省」

「そうだね」

エクレーヌの言葉に、顔を顰めながらも怒りを収めるサイドキック達。

それに頷きながら、刃羅を見るエクレーヌ。

「ヒーロー殺しへの恨みは少しは消えたかい？」

「そうでんなあ。まあ、少しはスカッと思いましたわ」

「それは良かった」

「しかし、ヒーロー殺しが敵連合と繋がっているのは意外というか……………驚きましたね」

「そうだな」

ミラミラの言葉にモリアガも腕を組んで同意する。

「それは微妙じゃのう」

「どういうこと?」

刃羅の言葉にローテリアや他の者も注目する。

「繋がっていたにしては、最後には脳無を殺した。あのような無差別な行為はステインが最も毛嫌いしているタイプのはずだ」

「……じゃあ、あいつらとヒーロー殺しは偶然重なったと言うこと？」

「それも違うと思うべ」

「矛盾してない？」

「……なるほど。敵連合が一方的にヒーロー殺しの行動に合わせただけ、というわけだね？」

「イエア！」

刃羅の推察をエクレーヌが読み取り、言葉にする。

それにサイドキック達は目を見開く。

「そ、それじゃあ、今の報道ってまずくないですか？」

「そうだね。間違いなく、ヒーロー殺しに当てられた連中は敵連合に注目するだろうね」

「急いで止めないと!？」

「いや、しばらくはこのままにしよう」

「……何故？」

「アラジンは分かるかい？」

「ん？んく……確かに脅威かもしれないアルが、逆に言えば一網打尽の機会にもなるネ」

「パーフェクトだ♪」

刃羅の言葉にエクレーヌが笑顔で頷く。

それにサイドキック達は納得した様に頷くが、同時に不安にもなる。

ハイリスクハイリターンの作戦はヒーローにとっては、失敗すれば最悪の事態になることが多いからだ。

「まあ、嫌な話はここまでにしよう」

エクレーヌはパンパンと手を叩いて話題を変える。

「今日でアラジンとはお別れ。それに半年はインターンも受けられないから、気合を入れないとね」

「……そうか。監督不行き届きで」

「モリアガ。あんたも減給じゃない？」

「……」

「流石にそこまではしないよ」

「とりあえず、今日は報告書と被害補填の請求の纏めですね」

「そういうことさ。アラジンはそのまま正座だよ」

「ホワイ!？」

「反省はしてもらわないとね。まあ、帰ったら流女将さんの説教も待ってるだろうけど」

「あんまりだあく!!びゃあくん!!」

こうして翌日の朝にエクレーヌの事務所を去って、帰宅する刃羅だった。

「聞きましたよ!何故危険な真似をしたのですか!」

「だ、だからあ!仕方なかったのお!」

「だからと言って、応援も呼ばずに戦う人がいますか!話を聞いた時、心臓が止まるかと思いましたがよ!連れ去られていたらどうするつもりだったのですか!」

「……………泣き叫ぶ!」

「おバカ!」

「ふぺえ!」

「おバカ!」

「あべえ!?!ぐうお!?!」

まさかの3連撃だった。

頭頂部にたんこぶ、両頬を真っ赤に腫らして倒れる刃羅。

更にお小遣い抜きと麺類禁止令を出され、備蓄していたカップ麺も回収されて、ガチ泣きすることになる刃羅だった。

#17 不穏な気配？

説教も終わり、カップ麺も没収されて一通り泣き終わった刃羅。

「いぎいぎいぎ!?!」

晩御飯を食べながら流女将に事情を改めて説明した刃羅は、2種類の武器に変える訓練を始めていた。

全く上手く行っていないが。

「……やはりそう簡単には無理ではないですか？」

心配して見学していた流女将が、眉尻を下げて声を掛ける。

「が……頑張るう……!みぎやああああ!?!」

「……通報されそうですね」

ドバドバ涙を流しながら右腕で刀を、左腕で鎌を作っていた。2秒程維持できるが、直後に激痛が走り、悲鳴を上げながら強制的に解除されてしまう。

それを流女将はため息を吐きながら、見守っていた。

「ぬうううう!!ここ、これし……きい……!もぎやあああああ!?!」

「先は長そうですね」

開始して30分もせずに大量の汗と涙を流して、訓練所の床にピクピクと痙攣して倒れる刃羅。

「ここまでですね。これ以上は明日に響きますよ」

「……むう。2秒が限界か」

「そう簡単に伸びたら苦労しないでしょう。特に刃羅さんの『個性』は筋肉まで変化させてますからね」

「でも1種だとくに制限ないからなく。出来るはずなんだけどな
〜」

1種類ならば四肢だけでなく、腹や背中でも何本でも生やせることが出来る。なのに2種類に増やした途端に、1本同士が精一杯になる。

「本来、刃羅さんの『個性』は《体を刃に変える》と言うもの。武器はあくまで応用なのでしよう?」

「そうだがな。ただ変えるだけではあまり役に立たん」

普通に変えるだけでは、間合いは格闘戦とあまり変わらない。

「まずは1種の武器を使いながら、普通の刃を生やして戦うことに専念してはどうですか？あのスケートのように。正直、刃羅さんは武器に変えると、そののみを使う戦闘スタイルになってしまっているようですし」

「……確かにのう」

腕を組んで唸る刃羅。

ステインにもそこを突かれてボツコボコにされた。

とりあえず、戦闘スタイルを変えていくことから始めることとした刃羅であった。

翌日。

1週間ぶりに教室に集まるクラスメイト。

「へえー！ヴィラン退治までやったんだ！うらやましいなあ！」

「避難誘導とか後方支援で実際交戦しなかったけどね」

「私もトレーニングとパトロールばかりだったわ。一度、隣国からの密航者を捕らえたくらい」

「それすごくくない!?!」

お互いの活動で盛り上がるクラスメイト達。

「おはよう」

「あ！刃羅ちゃん！おはよう！」

「どうかしたか？」

「どうかしたか？じゃないよ！大丈夫だった!?!」

「やから、ここにおるんやないかい」

「そりやそうだ！」

ぬう〜つと入ってきた刃羅に葉隠達が近寄ってくる。

「入院したって聞いたわ」

「リカバリーガールがいねえんだ。そりや少なからずはするわな」

「元気になったならいいわ」

「ありがとねえ」

「ケロ」

席に荷物を置いた刃羅は、轟の席に集まっていた飯田と緑谷に目を向ける。

「腕と足はもう大丈夫なのか？」

「ああ。もう大丈夫だ！」

「僕も大丈夫だよ」

「それよりお前は腹の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫よおん」

「ビシー！と腕を伸ばす飯田。

「命あって何よりだぜ」

「……心配しましたわ」

「ホントホント！ニユース見たときは心臓止まると思った！」

「あれだろ？ヒーロー殺してて敵連合と繋がってたんだろ？」

「そうそれ！USJの時いなくてよかったよな！」

切島と瀬呂の言葉に葉隠や障子が頷いている。

その言葉に緑谷や飯田、轟が刃羅に目を向ける。

その視線を受けたからか刃羅が腕を組んで口を開く。

「それはありえん」

「え？」

「ステインがあんな連中と手を組むことがじゃよ。間違いなくステインが毛嫌いするタイプの連中じゃ」

「なんでそんなこと分かんだよ？」

「だから3年間も一緒に居りゃあ分かるつってんだろゴラア!!」

『はっ。』

刃羅の発言に緑谷達3人以外が目を見開く。

その反応に刃羅は怒りを引っ込めて首を傾げる。

「……ん？」

「乱刀さん。その話……僕達しか聞いてないと思う」

「……おお。ふいお!？」

「梅雨ちゃん!？」

「どういうことかしら？刃羅ちゃん」

緑谷の言葉にポン！と手を打って納得する刃羅。

その瞬間、刃羅の口元に梅雨の舌が巻き付いて驚く。

麗日が驚くが、梅雨は怒りのオーラを発して刃羅を問い詰める。

それに刃羅は冷や汗をダラダラと流し始める。

「ふがー！ふふがはがほがー！」

「何を言っているの分からないわ。刃羅ちゃん」

「梅雨ちゃんの舌で塞がってるからじゃない？」

「じゃあ、正座してちょうだい」

言われた瞬間、ズダン！と正座をする刃羅。

舌を外し、刃羅の目の前に立って見下ろす梅雨。

「体育祭ではそんな話聞いてないわ」

「……申し訳ありませんわ。会うことはないだろうと思ひまして……」

「じゃあ、今話してちょうだい」

「そんなに話すことはないぞ？言った通り、我を攫い、3年間も扱ってきたのがヒーロー殺しだったと言うだけだ。その時に奴の信念や思想は嫌と言うほど聞かされた。だから敵連合と手を組むことがないと思っただけのことだ。実際、脳無を殺したしな」

「……確かにな」

刃羅の言葉に現場にいた轟が頷く。

それに梅雨はジーンつと刃羅を見つめ続ける。

「……刃羅ちゃんはヒーロー殺しのことをどう思っているの？」

「……恨み憎しみはある。しかし……少なからずあの思想に賛同している自分もいる」

「確かに一本気つつうか、執念つつうか、かつこよくね？って思っちまっ
たな」

「上鳴君……！」

「え？あつ……ワリ」

刃羅の言葉を聞いて上鳴が呟くと、緑谷が飯田と刃羅を見て慌てて止める。

それに気づいた上鳴は口を塞いで、謝罪する。

「いや……いいさ。確かに信念の男ではあった……。クールだと思う人がいるのも分かる。ただ奴は信念の果てに肅清と言う手段を選んだ。どんな考えを持とうともそれだけは間違いないんだ」

「刃羅ちゃんは？」

「言ったとおりいいいつのお信念にはあ賛同している部分もあるよお？でもお、それで本物以外はあ殺していいなんてはあ思つてないよお。言ったでしょお？これからおヒーローになるかもしれない子達にはあ期待してるつてねえ。だからあ、私があいつみたいにならなことはないよお。今はねえ」

「……そう」

「大丈夫でござる。奴は倒れて、捕まったでござる。某の中では、もう決着はついでいるでござるよ」

刃羅の言葉を聞いて、梅雨は小さく頷く。

納得しきれてはいないが、今は刃羅の言葉を信じることにする梅雨。

「そう!!俺や乱刀さんのような者をこれ以上出さぬためにも!!改めてヒーローの道を俺は歩む!!」

「イエア!!」

「正座を止めていいなんて言っていないわよ。刃羅ちゃん」

「うそん!」

「……騒がしい」

「なんか……ゴメン」

「上鳴も正座」

飯田がビシイイ!と腕を伸ばし、それに刃羅が同調するが、梅雨に怒られて崩れ落ちる。

いつも通りの雰囲気に戻り、ワイワイとする一同だった。

その後、久々の訓練授業で汗をかいた一同。

「刃羅、なんか今日動き硬かったね？」

「イエア!筋・肉・痛!マックス!」

「まだ騒動のが響いてんの？」

「違うわあん。昨日も特訓したらあん、こうなったのおん」

「無茶しちや駄目だよ！」

「そうよ。刃羅ちゃん」

「大丈夫ですわ！ただこうやってピギヤアアアア！」

「「うわああああああ！」」

更衣室に帰る途中で、2種類生み出そうとして激痛に叫ぶ刃羅。

それに刃羅に声を掛けていた芦戸、葉隠、耳郎が驚く。

梅雨も目を見開く。

「乱刀さん!?大丈夫ですか!？」

「つて、感じてえ……頑張ってたのお……」

「実演やったん!？」

「やっぱ痛い〜!びやあくん!」

「そして泣くんかい」

その後麗日に浮かばされて、梅雨の舌に引っ張られながら更衣室に入る刃羅。

着替えを始めてすぐに、どこから声が聞こえてきた。

『見ろよ、この穴ショーシャンク!きつと諸先輩方が頑張ったんだろ
う!!』

「ん?」

「これって峰田の声じゃね?」

「随分とはつきり聞こえるでござるな」

『隣はそうさ!分かるだろう!!女子更衣室!!』

「ええ!？」

「どこ!？」

「あれじゃないかしら?」

峰田の声から穴の場所を見つける女子陣。

「……駄目だ……」

「刃羅ちゃんどうしたの!？」

「あの大ききさではわたくしでは目を刺せませんわ!」

「そんな!？」

「うちのイヤホンならいけるかも」

「ナイス！」

刃羅が悔しがっていると、耳郎がイヤホンの片方を壁に挿して、もう片方を穴の前に準備する。

『八百万のヤオロツパイ!!乱刀の暴れ乳!!芦戸の腰つき!!葉隠の浮かぶ下着!!麗日のうららかボディに蛙吹の意外おっぱアアア!!』

その瞬間、耳郎がイヤホンを穴に突き刺す。

直後、

『ああああ!!』

悲鳴が聞こえてきた。

どうやら撃退したようだ。

「ありがと響香ちゃん」

「なんて卑劣……!!すぐに塞いでしましましょう!!」

「そして後で斬る」

「斬るのは髪だけにしといてね。刃羅ちゃん」

(うちだけ何も言われてなかったな)

耳郎がその後妙に静かだったのは、誰も気づかなかった。

その後、相澤から林間合宿の話が出て盛り上がり、期末試験に向けて気合を入れていくクラスメイト達だった。

事件後5日後の保須市。警察病院。

ある程度の怪我の治療も終わったステインは、翌朝には特殊監獄に移送させられることになっていた。

もちろん治療中とはいえ、全身拘束され、窓がなく監視カメラがある病室でステインはベッドに寝ていた。

病室の外では警察官やヒーロー数名が待機していた。

敵連合がステインを助けに来ることを警戒してのことだ。

「……ハア……あのような子供に負けるとはな」

「失礼します」

その時、看護師と思われる黒髪ショート女性が入ってきた。

その後ろには警察官も同行している。

包帯などが乗っているカートを押して、ベッドの横に来る看護師。

「お体をお取替えしますね」

「……貴様」

「少々我慢してくださいませ」

ギロリと看護師を睨むステイン。

ステインの視線に怯えることなく、看護師はニコリと笑ってステインと後ろに立っている警察官の体に触れる。

すると、ステインが寝ていたベッドに警察官だった男が、警察官が立っている所にステインが現れる。服装も入れ替わっていた。

「さて、続いては……」

「……何の真似だ？……ハア……」

「刃羅さんからの依頼ですよ。それとも、このまま監獄に入りたいのですか？」

「……ふん。……随分と大胆な真似をする。ここは監視カメラもあるんだぞ？」

「ご安心を。すでにハッキング済みです」

看護師は靴に仕込んであった小さな箱を1つ取り出して、地面に転がす。

すると、箱がパカッと開いた瞬間、病室に2人の人影が現れる。

「ふう〜……上手く行ってるようね」

「早く済ませっぞ。馬鹿が暴れかねん」

現れたのは黒髪ショートパーマに目元を覆うマスクに、黒の羽根つきチロリアンハットを被った女性。そして、茶髪ロングを後ろで束ね、顔に髑髏模様が描かれたマスクを被っている男。

男がステインに歩み寄り、ステインの肩に右手を置く。すると、ボヤアつとステインの姿が男の手の中に浮かび上がる。その後、今度は左手でベッドに寝ている男に触り、同じくボヤけた男の姿が手の中に浮かび上がる。

そして、左手をステインに当て、右手を男に当てる。

「よし。上手く出来たぜ」

「……何をした？」

「安心しな。見た目を移しただけだ」

「じゃあ、撤退するわよ」

今度は女性が男に触れる。すると、男が女性の手の平に吸い込まれていく。

それに目を見開く警察官に化けたステイン。

次に女性は出てきた小さな箱に手を触れると、今度は女性が箱の中に吸い込まれていった。

そして、その箱を再び靴に仕込む看護師。

「では、行きましょう。下手にしゃべらず、敬礼だけしてください」

「……」

看護師は適当に切った包帯や薬を医療品破棄のゴミ箱に捨てる。

そしてカートを押して、扉へと向かう。

それにステインは黙って付いて行く。

「終わりました」

「ご苦労様です！何か変わったところはありませんか？」

「いえ、特に変わりはありません。今も薬で良く寝ているようです」

「分かりました」

「失礼します」

看護師は扉の前にいた警察官に頭下げ、ステインは声を発せず敬礼をする。

相手の警察官達も特に訝しむことなく、敬礼を返す。

そして2人は病室から離れていく。

その後ろ姿を警備に付いていた警察官達が見送る。

「かわいい看護師さんだったなあ」

「そうだなあ。それにしても、あいつつてあんなに無口だったか？」

「かわいい子に緊張してんだろ。あいつ、彼女いないらしいぜ？」

「初心かよ」

「全くだなあ！」

こうして、警察官達は異常に気づくことは出来なかった。

看護師とステインは、そのまま裏口を目指して歩く。

「どうやって逃げるつもりだ？」

「そろそろ次の段階です」

空き部屋に入って、再び靴裏から箱を取り出す看護師。

箱の中から女性が現れる。

「フェイズ2開始？」

「はい。お願いします」

「ステインさん。お体失礼するわよ」

「……先に貴様らが誰か話せ」

ステインの言葉に顔を見合わせる2人。

「そうですねえ……。先ほども言った通り、私達は刃羅さんに頼まれてここに来ました」

「……そうか。貴様らがあいつが言っていた変人共か」

「私達は彼女同様あなたの信念に敬服している者です。あなたをここで失うのが惜しいをいうことで集まりました。別にあなたに見返りを求める気はありませんよ。刃羅さんに求める気です」

「……」

「まずはここを離れましょう。詳しい話はその後で」

「……いいだろう」

「では、失礼」

今度はステインは抵抗する事なく、女性に体を触れさせる。

ステインは女性の手の中に吸い込まれる。

「じゃ、後はよろしく」

「はい」

女性はポケットから携帯を取り出して看護師に渡し、すぐに箱の中に戻る。

今度はその箱をポケットにしまう看護師。

そして携帯を操作して、電話を掛ける。

『ビヨン！』

「お待たせしました。お願いします」

『ビョビヨン!!』

一言だけ伝えて、すぐに電話を切る看護師。
そして、空き部屋から出る。

その直後、

ドオオオオオン!!!

轟音が響き、病院が揺れる。

「きゃああああ!!」

「なに!」

「爆発か!」

「患者さんの避難準備を始めて!」

悲鳴が響き、職員や患者達がバタバタと走り回る。

「では、程々でお願いしますね」

看護師は微笑みながら、走り出して階段を目指していく。

階段を上がり降りする他の職員の中に紛れ込んで姿を消した。

「な、なんだ!」

「ヴィラン襲撃だ!!」

「くそ!!ヒーロー殺しか!」

「それしかねえだろ!!」

「「うわああ!」」

慌ただしく走り回る警察官達。

そこに他の警察官達が吹き飛ばされてきた。

「なんだ!」

「はーはっはっはっ!弱すぎる!!すぎる!!ヒーロー殺しはどこだ!!どこだ!!」

真っ白なロングパーマの髪を靡かせ、濃緑の軍服コートと帽子にサングラスを身に着けた長身の女性が高笑いをしながら歩いていた。
「やはり敵連合か!これ以上進ませるな!」

「それを断る!!断る!!我が歩みを止めれる者はいない!!いない!!」

女性が腕を振るうと風が巻き上がり、警察官達を吹き飛ばす。

「おいおい……派手にやり過ぎじゃないかい?『カンパネロ』」

その女性の後ろから無精髭を生やした灰色のコートにスーツ、ハットを身に着けた中年男性が現れた。

「これくらい問題ない!!ない!!『マガクモ』!!貴様も働け!!働け!!」

「やれやれ……仕方ないねえ」

「くそ!止まれ!」

駆けつけた警察官数名が拳銃を構える。

それを見たマガクモは右腕を突き出すと、腕から糸が放たれて拳銃に巻き付く。

マガクモが腕を引くと、警察官達の手から拳銃が奪われる。

「しまっ!」

「おいおい……危ないじゃないか。病院で発砲する気かい?」

「ぐああああ!」

拳銃を奪われた警察官にカンパネロが放った風が襲い掛かり、吹き飛ばされる。

「そろそろヒーローが来るか!?来るか!」

「うんうん……そうだねえ。仕事は十分じゃないかい?」

「逃がさないよ」

「!!」

2人に向かって光弾が飛んでくる。2人は飛び下がって回避する。

現れたのはエクレーヌとサイドキック達だった。

「こいつらは誰だ!?誰だ!」

「おいおい……確か……エクレーヌって名前だったかねえ」

「君達は敵連合かい?それとも……他の組織かな?」

「決まっているだろう!!だろう!!」

「いやいや……そこはお察しで」

「そうか……では、捕えて聞くとしよう!」

光弾を連続で放つエクレーヌ。

それを2人はコート翻しながら、躲す。

「これは厄介だね」

「そろそろ……タイムアップだねえ」

「見事だな!!だな!!では逃げよう!!逃げよう!!」

「そう上手くはいかないわよ！」

カンパネロ達を挟み込むように入り口にローテリアとフィクスマンが現れる。

カンパネロがすかさず風を放つが、ローテリア達の目の前で何かにぶつかって霧散する。

「!!」

「おいおい……塞がれたかい？」

「そのようだな!! だな!!」

「……全部、塞いだ」

「通路も入り口も塞いでるわ! 大人しくなさい!」

「では上だな!! だな!!」

ローテリアの言葉を聞いてすぐにカンパネロは躊躇なく真上に風を放ち、天井に穴を開ける。

その穴にマガクモが飛び上がり、糸でカンパネロを回収する。

「戸惑いもなしとはね!」

「フィクスマン!! 外!!」

「……行く」

『個性』を解除して、エクレーヌ達が外に出る。

バリン!!

それと同時に2階の窓からカンパネロ達が飛び出してくる。

「逃がさない!!」

「ブンブーン!!」

「!!」

ローテリアが風を巻き起こそうとした瞬間、上空から声が響いてくる。

上を見上げると、背中と両足から炎を噴射しているロケットみたいな服装の人物が空を高速で飛んできていた。

「仲間か!」

「ブーン! 行つくぞー!」

「はいはい……お迎えありがとさん」

空を旋回するロケット人間に向かって、糸を伸ばしてロケット人間

の腕にからめるマガクモ。

そのまま引つ張られて空を舞うカンパネロとマガクモ。

「待ちなさいー!」

「駄目だよー!」

「エクレーヌさん!?!」

「他にもいるかもしれない!まずはヒーロー殺しの確認だよ!」

「っ!了解です!」

エクレーヌ達は深追いせずステインの確認に向かう。

ステインの病室には敵は現れず、特に異常がない事を確認したエクレーヌや他のヒーロー達は気を抜かずに病室周辺の警備を続けた。

その後は特に何もなく、一安心したエクレーヌ達だったが、騒動が落ち着いた直後の医師の診断で偽物であることが判明し、顔を真っ青にするのであった。

保須市から離れた森小屋の中にステイン達の姿があった。

「大成功だな!!だな!!」

カンパネロが腕を組んで高笑いする。

「……そろそろちゃんと言明してもらおうぞ」

警察制服から普通の服に着替えたステインはギロリと一同を睨みつける。

それに看護師として潜入していた女が微笑みを浮かべて頷く。

女は現在、赤のライダーズジャケットを羽織り、黒のデニムホットパンツの下に赤のガーターベルトスパッツを身に着けている。

「もちろんです。私は『シャフル』。まあ、簡単に言えば怪盗です」

「俺は『朧寺』。同じく怪盗、または逃がし屋だ」

「あたしは『ストレイ』。運び屋よ」

「私達3人が逃走実行班です」

続いて前に出たのはカンパネロ達。

「次は私だな!!だな!!カンパネロと名乗っている!!いる!!」

「やれやれ……俺はマガクモだ。まあ、フリーランスの傭兵つてやつ

だねえ」

「ビヨン!!あちしは『フライハイ』!」

「我々が陽動班だな!!だな!!」

フライハイはピンク色ツインテールで見た目が少女にしか見えな
い女性。

「最後は私ですね。私は医藤^{いとう} 治博^{ちひろ}と申します。人からは『ドクトラ』
と呼ばれています。いわゆる闇医者です。この度、刃羅さんの依頼で
あなた様の治療とサポートを承っています」

小屋に到着してすぐにステインの包帯を交換した黒白メツシユス
トレートロングの女性。医者と言いながら、執事服を着ている。

「……聞いたことある名前ばかりだな。刃羅め。俺が仕事中に何をし
ていたのかと思えば……」

「1つ言っておくが刃羅の知り合いは私、シャフルとドクトラだけだ
ぞ!!だぞ!!」

「カンパネロさんの言う通りです。他の方々は私達の独断で誘っただ
けです」

「他の者達もあなたの賛同者ですよ。まあ、活動は関係ありませんが
ね」

カンパネロ、ドクトラ、シャフルが補足する。

それにステインは黙って考え込んでいるようだ。

「今回の報酬は刃羅さんから頂きますのでご安心ください。私に関し
ましては、先ほども言いましたが治療と装備などのサポートも依頼内
容に入っております」

「私に関しても治療が終わるまでの護衛を頼まれている!!いる!!」

「……護衛はいらん」

「無理はいけませんよ。ステイン様。私の見立てですと、まだ肋骨と
肺がまだ完治していません。そのまま1人で動くのは危険と考えま
す」

「……」

「何度も言うようですが、治療が終わるまでです。今は有象無象の
ヒーロー達も騒いでいます。それに……」

ドクトラは新聞を取り出して、ステインに渡す。
ステインは訝しみながらも、新聞を受け取り目を通す。
読むにつれて目が鋭くなっていき、最後には新聞をグシヤリと握り潰す。

「俺が……敵連合の広告塔扱いとはなあ……!」

ゾワア!とステインから殺気が溢れる。

その殺気にカンパネ口達は息を飲んで固まる。

(おいおい……これで怪我人かい……!?)

(やはり……恐ろしいですね。そして、それ以上に素晴らしい)

「ということです。これから敵連合にはあなたに同調しているのた
まう連中が集まるでしょう。刃羅さんや私達はそれを許す気はあり
ません」

「……ハア……どれくらいで治せるっ?」

「遅くとも2週間。私が抱えている治療系『個性』持ちの者を呼び寄せ
ます。武器や服などに關しても、こちらでご用意しましょう」

「……あの馬鹿弟子に倒されて、その馬鹿弟子に世話をされるか……
ハア……落ちぶれたものだ」

ステインは顔を手で覆い、ため息を吐く。

「……分かった。世話になる」

「ありがとうございます」

「そして犯罪者共を肅正する。馬鹿弟子にも日和っているようなら斬
りに行くと伝えておけ」

「分かりました」

ヒーロー殺しは復活を目指して動き出したのだった。

翌日の夜。刃羅の部屋。

『ということで、達成報酬、治療費、装備費等込みで1500万円にな
ります』

「……………マジでか」

『これでも80万ほどオマケしてますよ』

「……………マジでか？」

『どうされますか？』

「……………私のさあ……………隠し部屋知ってるう？」

『覚えていますよ』

「そこにの……………お主らの仕事を手伝った報酬を隠しておる。足りない分は……………敵連合の情報とかでもいいかの？」

『一度確認します。ああ、それとステイン様からですが……………』

「……………なんや？」

『日和っているようなら斬りに行く、とのこと。頑張ってくださいまし』

「まあ……………やらかしたことを考えれば、仕方ないか」

『では、明日にでもまたご連絡します』

「了解だべ」

通話を終えて、履歴を消す刃羅。

そして、そのままベッドに横たわる。

「……………わっちの貯金……………多分、消えてまう……………ヒーローに追われてもうた時用の金やったのに……………まさか御師様に吸われて消えてまうとは……………」

刃羅はその夜は涙が止まらなかった。

翌朝、刃羅の涙の痕を見た流女将は勘違いしたのか、お小遣い復活にカップ麺も返してくれた。

そして、その夜に改めて電話があり、

『合計1670万円確認出来ました。なのでオマケは止めた1580万円と治療費のツケ80万円を回収させていただきました。そして残金10万円ですが、ステイン様にお渡ししましたので、ご了承ください』

「血も涙もないとか言うレベルでは表現できんほどの鬼畜ぶりだな!?」

『この世界はお金が第1の信頼関係です。では』

「私の3年間の努力がく!!びやあくく!!ん!!」

この日も涙が止まらず、翌日にはお小遣いアップとなったが、失っ

た額が大きすぎて全然嬉しくなれない刃羅であった。

人物紹介！（一部）

・カンパネロ／嵐蛮らんぼん イタチ

誕生日：9月28日。身長：182cm。A型。

好きなもの：ステイン、米料理、時代劇

真っ白なロングパーマの髪を靡かせ、濃緑の軍服コートと帽子にサングラスを身に着けている。

普段はサーベルやナイフも常備している。Cカップ。
20代後半。

ステインに心酔しており、弟子と認められている刃羅に嫉妬しているが、何だかんだで仲が良い。

語尾の言葉を繰り返すメンドクサイ話し方が特徴。

普段は海外から来た犯罪者をメインに『癌の切除』と称して皆殺しにして、潰した組織の財産を孤児院に寄付して回っている義賊的存在。

ヒーローの事は『犯罪者を倒しても、孤児などの弱者の救済をしない半端者の偽善者』と思っている。

個性：《鎌鼬》

両手足から風の刃を放つことが出来る。同時に重ね合わせること
で竜巻を生み出せるが、一度放出するとコントロールは出来ない。

使い過ぎると自分の体も斬り刻まれる。

・シャフル／入替いれかえ 美換みかん

誕生日：2月12日。身長：162cm。A型。

好きなもの：手品、美術品

赤のライダースジャケットを羽織り、黒のデニムホットパンツの下に赤のガーターベルトスパッツを身に着けている。Bカップ。

30代前半。

美術品専門の怪盗。普段はマジック・バーで不定期でショーをして

いる。

刃羅とはドクトラの紹介で出会い、仕事を手伝ってもらったのがきっかけで仲良くなる。

臈寺、ストレディとはよくチームを組んでいる。

怪盗ではあるが、多くは美術館から盗まれたものだったり、偽物を売りつけた者から盗む。盗んだものは美術館に返したり、寄付している。

『真の芸術は万人の目に映るからこそ価値がある。独り占めにするものではない』が信条。

ヒーローのことは『粗暴者ばかりしか捕らえない芸術を見下す粗忽者』と考えている。

個性：《チエンジ》

右手と左手で触れたものを入れ替える。小物であれば触り続けなくても最後に触れていれば、交換できる。人は触れ続ける必要がある。その代わり、体だけ入れ替えるか、服も全て入れ替えるかを選択できる。

・ドクトラ／いとう医藤 ちひろ 治博

誕生日：12月25日。身長：166cm。O型。

好きなもの：金、紅茶、クラシック

黒白メツシユのロングストレート。執事服を着ており、白の手袋を身に着けている。Aカップ。

30代前半。

闇医者であり、裏社会でのサポートアイテムやコスチュームの開発・販売も行っている組合の長。

しょぼいヴィランに襲われている所を刃羅に救われた。それ以降、恩返しとして治療やアイテムの販売、依頼の斡旋をしている。

普段はツケなど許さないが、刃羅には許しているので信頼はしている。

法外な治療費を請求するが、それは社会的地位から換算しているため。そのためホームレス、孤児などには無料で治療、支援を行っている。

る。

『真に信頼出来るのは金と命』が信条。戦闘力は低い。

ヒーローの事は『見る価値もない偽善者』と思っている。

個性：《スキヤン》

見た人の健康状態、治療法、『個性』の内容、容量、戦闘スタイル、そして記憶までも解析することが出来る。

これを用いて、治療方針を決めたり、最適なサポートアイテムやコスチュームを提案する。

《サーチ》ほど大人数は見れないし、居場所までは分からないが、見れる内容が深いため一概に上下は決められない。

#18 期末に向けて

期末まで後2週間。

期末は筆記と実技の2つがある。

実技に関しては当日に内容を知らされることになっている。

「実技がなあ……あんまり『個性』鍛えられてねえしなあ」

「職場体験も大変だったものね」

昼食を終えて、教室に戻る途中で腕を組みながら歩く刃羅。

その横で梅雨も指を顎に当てている。

「流女将の訓練場ばかり使うのもなあ」

「学校の施設は使えないのかしら？」

「……聞いてみるか」

HR終了後に相澤に声を掛ける刃羅。

「休日ならば構わんど。『個性』の鍛練か？」

「うむ。少し使える武器を増やしたくてのう。出来ればロボか人形で

も使えればいいのじゃが」

「……どんな鍛練をする気だ？」

「それはサポート科次第ですわ」

「……使用許可は取っておく。ロボに関しては他の教師と相談する。

駄目でも文句言うなよ」

「もちろんだぜ！」

「何々!? 刃羅、特訓すんの？」

芦戸が声を掛けてきた。

後ろには梅雨、麗日、緑谷、飯田、切島、耳郎もいた。

「週末にでござるがな」

「相澤先生！ 私達もいいですか!?!」

「構わんが……程々にしとけよ」

「は〜い」

あつという間に増えた人数。

その後、刃羅は梅雨を伴ってサポート科に顔を出す。

「ちわ〜」

「お邪魔するわ」

「なんだね？」

サポート科教師のパワーローダーが奥から現れる。

「用意してほしいものがある」

刃羅はメモを取り出して渡す。

メモを受け取り、中身を見るパワーローダー。

「こんなもので何をする気なんだ？」

『個性』を鍛えるためにいんだよ。ちゃんと終わったら返すからよ」

「……流石に1人では決められないね。君の担任と相談するよ」

「了解でござる。週末にここで鍛練する予定でござる。出来ればそれに間に合わせてほしいでござる」

「許可が出ればね」

パワーローダーはため息を吐きながら頷く。

部屋を出た2人。

梅雨は刃羅に先ほどの事を質問する。

「一体何を頼んだの？刃羅ちゃん」

「まあ、大したもんじゃねえよ。お助けアイテムみてえなものだ」

「それにしてもパワーローダー先生の反応が悪かったのだけど」

「数も多いですから。仕方ありませんわ」

肩を疎める刃羅に、梅雨は首を傾げる。

妙に明言を避ける刃羅だった。

本当にどうでもいいものなのか。少しだけ嫌な予感がする梅雨だった。

そして週末。

刃羅以外のメンバーはすでに体操服に着替えてストレッチなどをしていた。

そこに相澤とエクトプラズムが現れる。

相澤は大きなトランクを抱えている。

「相澤先生にエクトプラズム先生……？」

「どうしたんすか?」

芦戸と切島が声を掛ける。

「試験前に大怪我されたら困るといふことだな。2人で監督することになった」

「ツイデニ助言デモシテヤロウ」

「あざます!!」

「ところで乱刀はどこだ?」

「まだ来てないです」

「……合理的時間の使い方がなつてないな」

そこに刃羅が現れる。

「ふわあく……ねむく……」

「じ、刃羅ちゃん!?!」

「乱刀くん!!何という格好をしているんだ!!」

「ああん?なんか問題あんのかよ?」

刃羅はスポーツブラにホットパンツに裸足だった。

腰に上着は巻いているが。

麗日が目を見開き、飯田が腕をブンブン!と振りながら怒るが、刃羅はめんどくさそうに顔を顰める。

「乱刀……」

「おや。相澤殿にエクトプラズム殿ではないか。どうかしたのかの?」

「……はあ……パワーローダーから頼まれたものだ。それとロボはやはり承認されなかった。それでエクトプラズムに来てもらった」

「ほう。それはありがたい!」

刃羅はパツチリと目を開けて、相澤から荷物を受け取ろうと手を伸ばすが、相澤は荷物を動かして刃羅に渡さなかった。

「む?」

「先に説明しろ。これで何をする気だ?」

相澤はトランクを開けて、中を見せる。

「な、なんだこれは!?!」

「す、すげえ数の武器じゃねえか……!?!」

「これが刃羅ちゃんが頼んでいたもの？」

トランクの中にはレイピア、鎖鎌、ハルバード、短刀など様々な刃物が入っていた。

それに目を見開く飯田や切島達。

「こ、これ……本物ですか……？」

「答えろ」

「別に大したことではない。私の体を武器に変えるために、本物がい
るのだ」

「……八百万と似たようなものか？」

「そうやな。百はんとちやうんは、武器の扱い方も理解せんといかん
ねん。振った時の慣性や重さ、それに対する身のこなし方をな」

刃羅の言葉に納得の表情を見せる相澤達。

「けどさく本物なんてく手に入らないでしよく？だからく学校内だけ
ならくいけるかなくって」

「ダカラ、訓練時ノミノ貸出ト言ウ訳カ」

「そういうことねえん。これでいいかしらあん？」

「……ああ。ただし」

「ん？」

「流石に真剣は危険なんぞな。刃は潰してある」

「……潰されると調整が面倒なんだが、仕方ないか」

ため息を吐いて、肩を竦める刃羅。

そしてレイピアを手取る。

剣身に触り、軽く振って重さやバランスを確認する刃羅。

「じゃ、始めるアル。エクトプラズム師に頼めばいいアルか？」

「ソウダナ。何体出セバイイ？」

「んく……4体出してくれや」

「分カツタ」

エクトプラズムの口からモヤモヤと吐き出され、分身が生まれる。

刃羅はレイピアを携えて、広い所に出る。

「悪いが常に4体出しておいてほしい。それと隙があれば容赦なく攻
めてくれ」

「分カッタ」

「では、始める」

「!!」

ドン！とレイピアを突き出し、エクトプラズムの首に突き刺す刃羅。

分身が消滅し、そのまま次の分身に飛び掛かる刃羅。

容赦ない攻撃に全員が目を見開く。

エクトプラズムはすぐさま新しい分身を生み出して、刃羅を囲む。

刃羅は連続で突きを放つが、分身に躲される。

続いて攻撃しようとする、後ろから他の分身が迫り、背中に蹴りを叩き込む。

「ぐう!?左後ろ……2刀ならば?いや、それでは甘い」

「ン?」

「続きだ!」

再び飛び掛かる刃羅。

それに合わせて再び分身が後ろから蹴りかかるが、今度はそれを紙一重で躲し、回転しながら横振りする。

分身はそれを躲すが、刃羅はすぐさま腕を引いて突きを放ち、肩を突き刺す。

そこに他の分身が2体同時に蹴りを放つ。

それを刃羅は下がって躲すが、残った1体の分身が後ろから蹴り飛ばす。

「ちいーふっ!」

刃羅は蹴り飛ばされた勢いを利用して、そのまま前に出ながらしやがみ、突きを放つ。

分身の右膝を貫くが、左脚で顎を蹴り上げられる。

「ぐおっ!」

「刃羅ちゃん!」

「乱刀くん!」

「激しすぎんだろ!?!」

刃羅は後ろに吹き飛ばされる。

それに梅雨と飯田が叫び、切島達も目を見開く。

刃羅はすぐさま飛び起きる。

「プッー」

口から血混じりの唾を吐き出す。

「ちっ……横振りはやはり躊躇するな。それに力が上手く乗らんか。腕の引きと直線的な剣線が見極めやすいか」

「……マダ、コノママ続ケルカ？」

「当たり前だ」

再びドン！と飛び出し、分身の目を狙う刃羅。

「!!ソコヲ狙ウノカ!」

分身は顔を傾けて躲すが、刃羅はそのまま詰めて腹に膝蹴りを叩き込む。

横から分身が攻めかかる。それを下がって避ける刃羅の後ろからもう1体の分身が飛び掛かる。

すると刃羅はレイピアを逆手に持ち直し、脇に抱えるように後ろに突き出して背後の分身に突き刺す。

「ヌウ!」

「ふうー!」

「アマイ!」

「づあ!」

刃羅はすぐさま逆手のまま柄頭を目の前の分身の顔に叩きつけようとしますが、刃羅の左側から新しい分身が飛び蹴りを浴びせる。

2、3回転がった刃羅はすぐさま起き上がり、再び斬りかかる。

それを何度も繰り返す刃羅。

その様子を緑谷達は心配そうに見て、自分の訓練に集中出来ていない。

「他人の心配してる場合か。お前ら」

「相澤先生……」

「しかし!あれは少しやり過ぎでは!」

「だからここでしかやらないって言ってるんだろ。それにあれくらいしないと仕方ねえならするしかねえだろうが」

「そうだけど……」

「エクトプラズムが見てくれている。お前達だって集中しろ。更に置いて行かれるぞ」

「!!。はい!!」

相澤の言葉に緑谷達は頷いて、集中する。

「ダガ……随分ト過激、ト言ウカ危険ナ戦イ方ヲスル。容赦ナク急所モ狙ツテキテイルゾ」

「そうだな。……やはりヒーロー殺しの影響はデカイか」

「ヒーロー殺シト言エバ……聞イテイルカ？」

「……脱走のことか？」

「敵連合ノ事モアリ公表サレテイナイヨウダガ、イズレハ彼女達ニモ届クゾ」

「はあく……緑谷や飯田はともかく、乱刀は要注意だな」

「……復讐ニ来ルカ？」

「どうだろうな。奴の信念からすれば微妙なところだ」

その後、1時間ほどぶつ通しで続ける刃羅。

大量の汗を流して動き続ける。

しかし、その動きは明らかに最初と比べて別人のようになっていた。

「すごいね……刃羅……もうほとんど攻撃もくらわなくなつたし、完璧に使いこなしてる」

「ああ……それに肉弾戦も織り交せてやがる」

その動きに耳郎や切島は汗を拭いて、水分補給をしながら観察していた。

すると、刃羅を取り囲んでいた分身が消える。

「ん？」

「休憩ダ。ソノママデハ倒レルゾ」

「……」

エクトプラズムの言葉に刃羅は黙り込み、体を確かめる。

そして、目を閉じて何やら瞑想を始める。

「……刃羅ちゃん？」

その様子に麗日が首を傾げる。

すると、刃羅はレイピアを地面に放り投げる。

「……エクトプラズム講師」

「ン？」

刃羅の呼びかけに顔を向けるエクトプラズム。

「最後の一組。お願いするのである」

その言葉と同時に両手の人差し指と中指を合わせて、その2本をレイピアに変える。

そして右手を顔の前に掲げ、左手を腰の後ろに回す。

「「!!」」

「吾輩の仕上げである。いざー!」

「新しい話し方だ!?!」

「あれがレイピアの子ってこと?」

「英国紳士!あれ?女だから淑女?でも淑女はレイピアなんて使わないよね?」

刃羅の変化に目を見開く一同。

新しい話し方に耳郎や麗日、芦戸が驚いたり、考察している。

「イイダロウ」

エクトプラズムが刃羅の言葉に領き、分身を3体生み出す。

そして、すぐさま刃羅に向かって飛び掛かる。

刃羅も両手のレイピアを構えて、飛び出す。

正面の分身が蹴りを放つ。半身にして躲す刃羅は左手を背中から回して突きを放ち、右手のレイピアは刃羅の左手から迫っていた分身に突き刺す。

「ヌウー!」

右手のレイピアで刺された分身は消滅したが、蹴りを放っていた分身はまだ耐えていた。

「マダ甘イー!」

「どうであるかな?」

「ナニ!?!」

刃羅は両手指を戻して、左手をそのまま体の前に、右手を背中に回

して背後に向かつて親指を立てる。

そして再び左手指2本と右手の親指をレイピアに変える。

左手のレイピアで蹴りを放っていた分身を再び突き、右親指のレイピアで背後から迫っていた分身を刺すまではいかなくても牽制することに成功する。

また両手を戻して、今度は後ろ回し蹴りを放つ。

レイピアを警戒していた分身は蹴りを避けられず、吹き飛ばされて消滅する。

「ふ〜……こんなものであるな」

「それで完成なの？乱刀さん」

「基礎は、であるがな」

緑谷の問いに答える刃羅。

放り投げたレイピアを拾い、トランクにレイピアを戻す。

「はい。刃羅ちゃん」

「おおきに」

そこに梅雨がタオルと飲み物を渡してくれる。

汗を適当に拭いて、飲み物を一気に飲みする刃羅。

「ぶっはー！あ〜、しんどー！」

「乱刀」

「ん？」

座り込む刃羅に相澤が声を掛ける。

「なんだよ？」

「喉や目などの急所を狙った理由はなんだ？」

「そうだぞ！乱刀くん！あれは人殺しの技じゃないか！」

「だからではないか」

「どういふことかしら？」

「技以前に人殺しの武器だぞ？どう振ったら人を殺してしまうかを把握しなければ逆に手加減の仕方が分からん」

「……そういうことか」

ジト目を向ける刃羅の言葉に相澤とエクトプラズムはようやく納得したように頷く。

刃羅の『個性』は常に命を奪うリスクを背負っている。そのため、逆に切れ味や本来の用途で使い方を把握しなければ、それを避けることが出来ない。

急所を狙って、どこまで斬れるのか、傷跡はどのようになるのかまでを想像出来ない、どこを斬りつければ致命傷にならないかを戦闘中に判断できないのだ。

「なるほどな。だから、あれだけ戦わねえといけねえのか」

「そういうことじゃな。殺さぬように武器を振りながら、自分も怪我せぬように立ち回れるイメージを作っておかねばのう。じゃからエクトプラズム殿が来てくれて助かったのう」

切島の言葉に頷きながら、汗を拭いていく刃羅。

それに傍で座っていた梅雨が顔を曇らせながら声を掛けてくる。

「そこまでして武器を増やす必要はあるのかしらっ？」

梅雨の言葉に、その横にいる麗日もコクコクと頷いている。

「無い方がよいであるな。しかし、選択肢は多い方がいいのも事実である。必要になった際に『あの時にやっておけば』などと思うくらいならば、使えるように出来るときにしておくべき、というのが吾輩の考えである」

刃羅の言葉に悩まし気に考え込むクラスメイト達。

それを刃羅は無視して、相澤とエクトプラズムに目を向ける。

「あのやり方がステインの影響のせいであると思っただけでござるな？」

「……そうだな」

「否定はしないわあん。でもおん、結局は知らないといけないでしょん？」

「そうだな」

その後は鎖鎌、短刀、ハルバードを会得していく刃羅。

そして終了時間になるころには、

「うお〜……！か、体中が痛い〜……！」

「だ、大丈夫……!?乱刀さん」

「いや、駄目だろ。あんだけ動いてボコボコにされたんだしよ」

「必要なことかもしれないけど、ちょっとやり過ぎじゃない?」

「さ、されど拙者はこの先に進まねば……!」

「こ、これ以上を目指すの!? 無茶過ぎるて!」

「確かに武器は増えたです……でも1種類しか出せないのです。このままではダメなのです!」

「……それってヒーロー殺しに言われてたことだよね?」

「そうなのだよ! ムカつくことこの上ないがね!」

座り込んで筋肉痛と打撲痛をギリギリと涙目で耐える刃羅。

緑谷が慌てて心配そうに声を掛け、切島や耳郎は呆れた様子で見ている。

その後の刃羅の言葉に、麗日はタオルで汗を拭きながら目を見開き、緑谷はステインとの戦いで言われていた言葉を思い出す。

それに刃羅が頷くと、飯田も腕を組んで顔を顰める。

「それにしてもさあ……刃羅ってさあ、武器を覚えるたびに性格も増えるんでしょ?」

「まあ、そういう感じでごさるな」

「それってさあ、同時に2つ武器を出すと性格が混乱したりしないの?」

「そーいやそーうだな。緑谷の体に俺の意識が憑りつくみたいなものってことだろ?」

「……」

「確かにそーうね」

「しかも戦い方も違うんだもんね」

「……そーうだな。……その通りだ! 芦戸!」

「おお!」

芦戸の言葉に刃羅は目を見開いて固まる。それに切島や梅雨、緑谷が同意するように頷いていると、刃羅が立ち上がり、芦戸の両手を握って礼を言う。

それに芦戸は驚くも、刃羅はすでに自分の世界に入り込んでいた。「そーうだ。確かにいつも通りに2種類を出そうとしていた。それでは2つの性格がぶつかり合うに決まっている! だから、体が混乱してい

「たのだ!!」

「……なるほどな。あの激痛は拒絶反応のようなものか」

「これで糸口が見えたで!!おおきにな!」

「何か分かんないけど、役に立ったなら良かったよ!」

「解決したなら、とつとと帰れ」

「二「は、はい!!ありがとうございます!!」三」

「乱刀はりカバリーガールの所に顔を出しておけよ」

「イエア!」

思いがけない所からの助言で一気に解決策が見えた刃羅。

こうして期末に向けて、更に準備を進めていくのであった。

新!刃格!

レイピア:「である」が口癖。一人称は「吾輩」

短刀:侍風の口調。一人称は「拙者」

鎖鎌:「です」を語尾に付ける。一人称は「私」

ハルバード:偉そうな教授風の口調。一人称は「自分」

#19 期末試験その1

期末まで後1週間。

「全く勉強してねー!!体育祭や職場体験やらで全く勉強してねー!!」

「確かに」

上鳴が頭を抱えて、常闇が腕を組んで唸っている。

それに砂籐や口田も頷く。

「まー、中間は入学したてで範囲狭いし、特に苦労なかったんだけどなー。行事が重なったのもあるけど、やっぱり中間と違って期末は……」

「演習試験もあるのが辛れえところだよな」

峰田が席で足を組み、肘をつけて余裕そうに語る。

峰田は中間で9/20位だったそうだ。

それに19/20位の芦戸や20/20位の上鳴は裏切られた気持ちになつて、峰田を指差して理不尽さを訴える。

「あんたは同族だと思つてた!」

「お前みたいなのはバカではじめて愛嬌が出るんだろが……!どこに需要があるんだよ……!!」

「世界かな」

2人の抗議に峰田は余裕ぶる。

「まあ、筆記が出来た所で演習で赤点になったら終わりであるがね」
「……」

刃羅の言葉で峰田は黙り込んで震える。

ちなみに刃羅は10/20位である。

「乱刀は大丈夫なのかよ!?!」

「習ったところなら、もう覚えたのでね。普通科目はもう問題ないのだよ」

「マジかよ!?!」

刃羅の言葉に目を見開く上鳴と芦戸。

刃羅は中学校に通っていないだけで、決してバカではない。それど

ころかステインとドクタラの教えと自力の独学だけで中学卒業レベルの学力を修めているのだから、そこそこ頭は良い。

「皆さん。座学なら私お力添え出来るかもしれませぬ」

「ヤオモモロー!!!」

百が上鳴や芦戸達に声を掛ける。

それに他のクラスメイト達も教えてほしいと声を掛けて、何やらテンションが上がる百。

刃羅と轟はその様子に少し首を傾げるも、特に追及はしなかった。

その後、食堂で食事を摂る刃羅達。

「普通科目は授業範囲内からで、まだなんとかなるけど……演習試験が内容不透明で怖いね……」

「突飛なことはしないとと思うがなあ」

「普通科目はまだなんとかなるんやな……」

「そないに焦るもんかいな？」

「人それぞれだと思おうわ」

「刃羅ちゃんはなんでそんなに落ち着いてるの？」

「普段からしておけば問題ないでござろう？」

「……刃羅ちゃんってちゃんとしてたんだ……」

麗日の言葉に刃羅は持っていた箸を落とす。

そしてボロボロと涙を流し始める。

「……あたしって……ひつぐ……そんなに馬鹿に……ぐすつ……思われてたんだ……うう……うわあ〜ん!!」

「え!? ちや、ちやう!? そんな意味で言ったんやなくて!?!」

「お茶子ちゃん。今の言い方はそうにしか聞こえなかったわ」

「うぐ……!?!」

大泣きを始める刃羅を見て、慌てて弁解する麗日だが、梅雨に突っ込まれて胸を押さえる。

それに緑谷や飯田は苦笑いしながら見つめ、轟は我関せずとそばを食べ続ける。

「乱刀さんは人格変化が良くも悪くも目立つから……」

「そうだな」

「ズズ……あんまフォローになつてねえぞ。緑谷」
「う……」

「ごめん！刃羅ちゃん〜！」

「ぐずつ……ラーメン2杯……ひつぐ」

「……え？」

「ラーメン2杯い……おごつてえ……うう〜……」

「うぐ……わ、分かったよ……」

ガクつ！と項垂れてラーメンを注文に行く麗日。

その姿に憐みの目を向ける緑谷達。

「そういえば……」

「ん？何だい？轟君」

「……聞いたか？保須のこと」

「STEIN脱走のことかの？」

「「？」」

刃羅の言葉に目を見開く緑谷、飯田、梅雨。

それに轟は頷く。

「そんな……!?どうやって……!?」

「監獄移送前日の夜に病院に襲撃があったそうさ。その際かどうかは
はつきりしてねえらしいが、ベッドに拘束されていたはずのヒーロー
殺しが瀕死の警察官と入れ替わってたらしい。親父が荒れてやがっ
たからな。確かだと思う」

「……なんてことだ……!?」

「一体誰が……まさか……敵連合？」

「それはないと思うがな」

「刃羅ちゃん……」

「敵連合ならわざわざ入れ替える必要はねえだろ。あの黒い鬮の奴使
やぁいいいな」

「確かに……」

刃羅の言葉に考え込む緑谷達。

飯田は両手を握り締め、思い詰めた顔をする。

「じゃあ、乱刀は誰だと思っただ？」

「恐らくは敵連合にも属する気は無い連中。ステインの信念は良くも悪くも影響する。それに感化された奴らがいたんだろう」

「ケロオ……なんで公表しないのかしら？」

「敵連合との繋がりを疑ってるからでござろうな。ステインは敵連合の広告塔になっていてるのでござる。それに感化された奴らが更に集まるのを防ぐためでござろう」

「ケロオ」

「じゃあ、あいつはまた飯田君や乱刀さんを狙うんじゃ？」

「それはくしばらくはく大丈夫だと思う」

「なんでだ？」

「ステインならあ間違はなく敵連合の方に怒りを向けるなあ。広告塔扱いされてるのはあ知ったはずだからあ。同類扱いはあされたくないはず」

不安そうに飯田を見る緑谷の言葉を否定する刃羅。

それに轟が根拠を尋ね、はっきりと答える刃羅。

その内容に少なからず納得するように頷く轟。

「飯田」

「なんだ？乱刀くん」

「焦るでない。奴がどのように動こうと、まずは拙者達が強くなるこ
とが最優先」

「……そうだな。もう、間違えてはいけないんだ」

「その通り！だから、今は期末に集中！」

「その通りだ!!」

フシュー！と鼻息を吐き、気合を入れる飯田。

それに安心した様に笑う緑谷達。

そこに麗日がトボトボとラーメンを持ってきた。

「……はい。刃羅ちゃん」

「いやったー!!ありがと！ズズー……ンマンマ……おいしー!」

「……はあく」

「ドンマイよ。お茶子ちゃん」

その時、緑谷の頭に誰かの肘が当たる。

「あイター！」

「ああ、ごめん。頭大きいから当たってしまった」

「B組の！……えっと……物間くん！よくも！」

現れたのはB組の物間だった。

「君らヒーロー殺しに遭遇したんだってね」

「！」

「体育祭に続いて注目を浴びる要素ばかり増えていくよね。A組って。ただその注目って決して期待値とかじゃなくてトラブルを引き寄せる的なものだね」

「!?」

「あー怖い！いつか君達が呼ぶトラブルに巻き込まれて僕らにまで被害が及うかもしれないなあ！ああ怖かふっ！」

「シャレにならない。飯田と乱刀の件知らないの？」

物間は一気に話す。

言っていることは間違っていないため、緑谷達は大人しく聞いていたが、突如物間の首筋に手刀が叩きつけられて崩れ落ちる。

現れたのは、B組の拳藤だった。

ちなみに轟と刃羅は物間に目を向けることもなく、蕎麦とラーメンに集中していた。

「ごめんなA組。こいつちよつと心がアレなんだよ」

「拳藤くん！」

「ズズ……ンマンマ……」

「ズズ……」

「そつちの2人は気にしてないようだね……」

「刃羅ちゃん達のこととはほつといていいわ」

拳藤は申し訳なさそうな顔をして謝罪する。そして刃羅達に目を向けるが、我関せずの食事に呆れる。

それに梅雨が無視を勧める。

「あんたらさ、さつき演習試験が不透明とか言ってたね。入試ん時みたいなの対ロボットの実践演習らしいよ？」

「え!? 本当!? なんて知ってるの!?!」

「私、先輩に知り合いいるからさ。聞いた」

拳藤の言葉に目を見開いて尋ねる緑谷。

その言葉に刃羅が反応する。

「ズズ……ンマンマ……ロボットであるか。それは怪しいものである」

「「「え?」」」

刃羅の言葉に轟以外が反応する。

「先輩からの情報だよ?」

「ズズ……ンマンマ……されど、それは1年前の話。今年はすでに2回もロボットを使用したのだよ?この短期間に2回だ。USJ襲撃の事を考えれば……変更される可能性が高いだろうさ」

「……結局それじゃあどんな試験か分からないわ」

「ズズ……ンマンマ……元々、それが試験じやろうに。外に出れば知らされることの方が少ないのじゃ」

「それもそうだな」

「ズズ……ンマンマ……何が来たってえ全力で斬りかかればあいのさあ」

「斬ったらだめよ。刃羅ちゃん」

「自信家だねえ」

拳藤が物間をぶら下げたまま苦笑いする。そして拳藤はそのまま物間を引きずって去っていった。

その後、得た情報をクラスメイト達に伝える緑谷達。

「んだよロボならラクチンだぜ!!」

それに上鳴や芦戸が気を抜いて笑う。

そこに爆豪が苛立ったように声を上げて、緑谷に声を掛ける。

『個性』の使い方……ちよつとわかってきたのか知らねえけどよ。テメエはつくづく俺の神経を逆なでするな」

「あれか……!前のデク君、爆豪君みたいな動きになった」

「あー、確かに……!」

「体育祭みてえなハンパな結果はいらねえ……!次の期末なら個人成

績で否が応にも優劣が付く……!」

緑谷を指差して睨む爆豪。

「完膚なきまでに差あつけて、てめえぶち殺してやる!」

そして爆豪は次に轟を睨む。

「轟い……! テメエもなあ!!」

そして荒々しく教室を出ていく爆豪。

「……久々にガチなバクゴード」

「焦燥……? あるいは……憎悪か……」

「あそこまで敵視して疲れへんのやろか?」

「疲れて、もう壊れてるんじゃないの?」

「峰田さん。それは言い過ぎですわ」

「なんか自分で突っ込んで勝手に追い込まれてる感じ?」

「ケロ。それもありそうね」

爆豪について話す刃羅達。

(保須事件に、前回の授業の動きを見たら仕方ないかもしれぬが……あそこまで行くと危う過ぎるな)

爆豪は体育祭で1位になったが、決勝で轟が調子を崩しており納得出来ていない。さらにUSJでの緑谷の行動、保須事件に轟と緑谷がいたことも拍車を掛けているのだろう。

爆豪は確かに才能もあり、実力もあるが、未だにそれを完全に発揮出来た場がないのだ。

「まあ、俺たちには関係ねえからいいか! 帰ろ!」

「ねえ、刃羅ちゃん。図書室で少し勉強して帰らない?」

「構いまへんえ」

「ありがとう」

「私もいい!」

梅雨の提案に頷く刃羅。それに葉隠も参加して3人で勉強して帰ることにするのであった。

そして筆記試験。

これは全員問題なく突破したようで、上鳴や芦戸は百と勉強したと

ころが当たったようで飛び跳ねていた。

問題の演習試験当日。

コスチュームに着替えて、集合場所を目指す。

「あら？ 刃羅ちゃん。背中の鉄刀や脚のナイフはどうしたのかしら？」

「……没収されたあ」

「なんで？」

「研ぎつて鋭くしたからである」

「あぶな!？」

「当然じゃん!？」

刃羅の言葉に芦戸と耳郎が目を見張る。

『個性』で殺さないために用意された武器であるのに何故か殺傷力を高めた刃羅。

没収は当然である。

「切れへん刃を見るとムズムズすんねん！」

「それでも駄目よ。刃羅ちゃん」

腕を組んで顔を顰める刃羅に梅雨が突っ込む。

ブスツと拗ねたように顔を顰める刃羅。

そこで梅雨がもう1つの変化に気づく。

「刃羅ちゃん、コスチュームの靴もやめたの？」

「うむ。結局壊れるのでう」

刃羅はサンダルを止めて、裸足になっていた。

サンダルも服と同じ様に出来ないかと言ったが、サポート会社からは難しいとの返答があり、諦めたのだ。

「一気に身軽になったよね、刃羅」

「そうねえん」

肩を竦める刃羅。

そして集合場所に到着すると、教師達が複数人待機していた。

「揃ったな？ それじゃあ、演習試験を始めていく。この試験でももちろん赤点はある。林間合宿に行きたきやみつともねえへマはするな

よ」

「なんか……先生多いな……?」

「諸君なら事前に情報を仕入れて、何するか薄々分かっているとは思いますが……」

「入試みてえなロボ無双だろ!!」

「花火!!カレー!!肝試ー!!」

相澤の言葉に上鳴と芦戸がテンションを上げる。

すると、相澤の首元がモゾモゾと動き出して何かが飛び出してくる。

「残念!!諸事情あって今回から内容を変更しちゃうのさ!!」

飛び出てきたのは根津校長だった。

校長の言葉に上鳴と芦戸が固まる。

「これからは対人戦闘・活動を見据えたより実践に近い教えを重視するのさー!」

「やっぱりじやのう」

「刃羅ちゃんの言う通りになったわね」

「というわけで……これから諸君らにはこれから二人一組で、ここにいる教師1人と戦闘を行ってもらおう!」

「先……生方と……!?!」

麗日が顔を強張らせる。

「尚、ペアの組と対戦する教師は既に決定済み。動きの傾向や成績、親密度……諸々を踏まえて独断で組ませてもらったから発表していくぞ」

轟・百ペアの相手は相澤。

芦戸・上鳴の相手は校長。

青山・麗日の相手は13号。

耳郎・口田の相手はプレゼント・マイク。

梅雨・常闇の相手はエクトプラズム。

峰田・瀬呂の相手はミッドナイト。

砂籐・切島の相手はセメントス。

飯田・葉隠の相手はパワーローダー。

そして刃羅は障子とペアとなり、相手はスナイプとなった。

「ま、その中だど〜スナイプ先生だよ〜。障子君〜よろしく〜」
「ああ」

最後のペアはなんと緑谷と爆豪が組んで、オールマイトとの試合。
(まさかのそこかあ。いや……状況を考えたらあ当然……かなあ)

刃羅は緑谷達の事を考える。

確かにこの演習試験において、この組み合わせほど最適で最悪はないだろう。

「それぞれステージを用意してある。順番に1組ずつスタートだ。自分の順番が来るまではペアと話し合ったり、観戦するなり好きにしろ」

「制限時間は30分さ！君達の目的はハンドカフスを先生にかけるか、どちらか1人がステージから脱出！」

教師をヴィランと見立てて、行動する。

教師はハンデとして、体重の半分の重りを身に着けることになっている。

「ペアとステージを考察して倒すか逃げるか、ということか」
「だねえ」

障子と刃羅は控室に移動して、説明された内容を整理し直している。

「共に近接戦メインの戦い方じゃ。逃げるにしても、あの拳銃を奪わねば話にならぬの」

「ということは捕獲を狙うか？」

「ステージを見ないと何とも言えないのである」

「……そうだな。とりあえず俺が索敵、戦闘は乱刀でいいか？」

「もちろんよおん」

というか、戦闘しか刃羅は出来ない。

「面倒なのはあの命中率でござるな」

「気づかれる前に接近する必要があるな」

「しかもお前ではあの弾丸を防げない」

「そうだな。そういう乱刀はどうなんだ？」

「ずっと連射されなければ、躲すか斬るは出来ると思いますがわ」
「……」

なんでそれが出来るのかを確信しているように話せるのか、という疑問は口にしなかった障子。

ステインのことを聞いていたので、そこに理由があるのだろうと察したのだ。

「障子坊っちゃんはその腕はどこまで複製出来はるん？」

「坊っちゃん……俺の複製腕は複製した腕からも複製出来る。だからかなりの距離までは伸ばせる」

「……うちの勝敗は障子はんにかかるとる。スナイプはんの居場所を先に見つけることが重要や」

「分かった」

「頼んだぜえ！」

「ああ！」

ガシツ！と握手する刃羅と障子。

『砂籐・切島チーム。気絶によりリタイア』

「いきなり負けんなやゴラア!!」

「それだけ教師達も本気で挑んでくると言うことか」

刃羅達の試合は8試合目。

それまではお互い自由行動にした。

今は梅雨達が試験を受けているはず。

梅雨なら問題ないだろうと観戦には行かなかった。

「あ……乱刀さん」

「む？百殿」

控室の椅子に座っていた百が刃羅に声を掛けてくる。

妙に沈んでいる百に刃羅は首を傾げる。

「随分とここ最近は落ち込んでることが多いではないか。八百万女史」

「……私では轟さんの足を引っ張ってしまいそうで……」

随分と弱気な発言をする百。

それを訝しげに見る刃羅。

「それを轟には伝えたか？」

「……いえ、ご迷惑をおかけするわけには……」

「……そんな状態でえ戦うなんてえヒーローとしてはあ駄目じゃないかなあ」

「……それは」

刃羅の言葉に百は顔を俯かせる。

(体育祭後から妙に調子を崩している様に見えたが、こういうことか)

刃羅は百の弱気になった理由に気づいた。

「……完璧なヒーローなんているのだろうか？」

「……え？」

「一度も失敗せず、誰も被害者を出さなかったヒーローなんているのだろうか？」

「……それは……」

いるわけではない。

オールマイトだって、ここの教師だって、今も現場で戦っているヒーローにだって。

「何年……何十年と戦ってきた者達でさえ、失敗も敗北もある。それでも助けを求める人のために立ち上がり、何か出来ないかと模索するのがヒーローだ」

「……」

「たかが体育祭で上手く行かなかったくらいで、自分が負けたくらいで、心が折れるようでは人を救うなんて絵空事でしかない。お前は……それでいいのか？」

「……」

「ヒーローになれば、そうやって迷っている間に誰かに涙を流させることになるぞ。それでいいのか？」

「……嫌です」

「ならば迷う前に声を上げろ。動け。寡黙に人を助けるヒーローなど我は知らん」

刃羅の言葉に両手を握り締める百。

そして勢いよく立ち上がる。

「轟さんと話してきます!」

「よし!行くであります!」

「ありがとうございますわ。乱刀さん!」

「これで無様晒したら斬り刻むかなあ!!」

「ええ!?!」

刃羅は物騒な言葉を吐いて、歩き去っていく。

その後ろ姿を見て、百は胸の前で両手を組んで目尻に涙を浮かべる。

「……ありがとうございます……!」

そして轟を探しに行く百。

その顔から不安は消え去っていた。

刃羅はモニタリングルームに顔を出した。

中には緑谷、麗日、リカバリーガールがいた。

「あ。刃羅ちゃん!」

「乱刀さんも観戦に来たの?」

「暇だかな」

モニターには梅雨と常闇がエクトプラズムと戦っている様子が映されていた。

「なんや。まだ終わつとらんかったんか」

「うん。やっぱりエクトプラズム先生の分身を相手するのは一筋縄ではいかないみたいだ」

常闇がダークシャドウを操ってエクトプラズムを倒して行く様子が見られる。

梅雨はそれをサポートするように戦っている。

「梅雨嬢はともかく、常闇殿は少しばかりダークシャドウに頼り過ぎるきらいがありますな。せつかく意思があるダークシャドウの主体性を活かし、自身の戦闘技術も磨けば、まさに敵無しとなろうに」
「リカバリーガールもさつき言ってたよ。間合いに入られると脆いのが課題だつて」

「確かに強くはあるがのう。一度攻略されればあまりにも脆いから

の。そこが課題とされたんじゃない」

腕を組んで常闇の考察を語る刃羅。

それに緑谷と麗日は頷く。

「そして梅雨はんは『個性』の特性故に弱点は少ない。よく周りも見とる」

「それもリカバリーガールが言ってたよ」

「けども、それは弱点にもなりうるもんだべ」

「えっ？」

「梅雨ちゃんの『個性』は常時発動型であります。それは言い換えれば常に一定の実力しか発揮できないということでもあります。もちろん水場は別であります」

「あー！」

「だからよお、梅雨ちゃんは常に舌の使いどころを見極めねえといけねえ。舌を封じられた瞬間、梅雨ちゃんは強みが活かせなくなっちゃう」

「そうだね。だから、それを踏まえながら常闇影踏のサポートが出来るかがあの子の課題だね」

刃羅の言葉にリカバリーガールが頷きながら、試験の趣旨を語る。

「というか緑谷、麗日。お前達はこんな所においていいのか？お前達のチームこそ、最も話し合いがいる気がするのだが……」

「あはは……そうなんだけどね。かつちゃんは僕が話しかけると、どうにも反発されちゃって」

「私も青山君に声を掛けても、きちんとした返事が返ってこなくて……」

「……前途多難やねえ。コミュニケーションと連携も評価の対象や思いますよって。そのままやと厳しいんじゃないの？緑谷ぼっちゃんの相手はあのオールマイイトやで？」

「そうなんだよなあ……」

「相澤先生が2人を組ませたのも、そこが課題と思われたからだろうね。君達は互いが関わりと途端に周りが見えなくなるようだ」

「……」

刃羅の言葉に緑谷は顔を俯かせる。

その直後、梅雨達はエクソプラズムにカフスを嵌めることに成功し、条件達成する。

次は飯田と葉隠チーム。

相手はパワーローダーで、荒野フィールドでの試験だった。

「飯田のエンジン対策がメインじゃの。透は裸になったとしても、地面を歩く以上パワーローダーには伝わるじやろう。どう乗り越えるか」

すると飯田の背中に葉隠が飛び乗る。

「まさか背負って走り抜ける気なんじゃ……!?!」

「つていうかああれつて下手したらあセクハラじゃないのお?」

「飯田君なら触らんようにするんじゃないかなあ?」

「しかし、流石に走り抜けるものではないだろう? 出口前に落とし穴でも仕掛けられていたら終わりだぞ」

飯田は全速力で走る。

地面が崩れる前に走り抜けているが、パワーローダーが先回りをして地面を崩す。

飯田は崩れる瞬間に飛び上がり、走り幅跳びの要領で飛び越える。

「すげっ!?!」

「このままー」

「そこまで甘くはないわよねえん」

飯田はそのまま走ろうとしたが、地面が完全に崩れ落ちて、道が無くなる。

更にパワーローダーが飛び出してきて、飯田に襲いかかる。

飯田は方向転換して躲すが、ゴールからは遠のいてしまった。

「おっしいい!!」

「でも、このままじゃマズイよ」

「それでもくかないかな」

「「え?」」

『飯田・葉隠チーム。条件達成』

「ええ!?!」

「手袋と靴は困だったみたいだね！」

よく見ると、飯田の肩にくっついた手袋が靡いている。

つまり葉隠は飯田の背中に乗ったように見せかけて、全裸で他のルートから出口を出たようだ。

「とうか、どうやって？」

「……瀬呂君からテープ借りたのかな？」

「ありなのか？それは」

「まあ、あんまりよくはないけどね。準備も試験の一環と言われれば、一概にダメとは言えんさね」

リカバリーガールが問題なしと判断したので、オツケーのようだ。続いては轟と百チームの試験。

試験会場は住宅街。

「住宅街アルか。轟の氷と炎対策アルね」

「しかも相手は相澤先生……。『個性』を消されたら、勝機はない」
固唾を飲んで見守る緑谷達。

「勝敗を左右するのは百殿じやの。『個性』で何を作るか……。そこにかかっておるの。そして轟がその作戦に従うかどうか……」

「今の轟君なら大丈夫だと思うけど……」

「百がその作戦をちゃんと伝えられていればな。まあ……。もう大丈夫のようだ」

「え？」

刃羅は百の様子を見て、頬笑みを浮かべる。

それに麗日は首を傾げるが、刃羅はそれに答えなかった。

轟達は開始直後に動きを見せた。

百が大量に創造を始めたのである。

「轟さんは常に氷と炎を出して、相澤先生の接近に警戒してください」
「分かった」

百の指示に素直に頷く轟。

百はマントや紐状のものなど様々な道具を作っていく。

「……私も乱刀さんに怒られてしまいました」

「あ？」

「私、体育祭では良いところ無しでした。騎馬戦はあなたの指示に付いただけ、本選では常闇さんになすすべもありませんでした。随分と差がついてしまったと、思ってしまった」

「……」

「先ほど乱刀さんに言われてしまいました。『私自身の事で負けたくらいで、心が折れるなら人を助けるなんて絵空事。それでいいのか』と」

「……確かにな」

「はい。『そうやって悩んでいる間に、誰かが涙を流すことになる。それでいいのか』とも、言われました」

轟に背中を向けながら話す百。

その言葉は轟にも重く押し掛かった。

轟もエンデヴアーに固執していたからだ。今も振り切ってはいいが、緑谷達と関わって他にも目が行くようになった。

「本当に……みつともない。だから……下手に考える前に出来ることを試す。そう決めましたの」

「……そうだな」

「準備出来ましたわ！轟さん！さあ、オペレーションを始めましょう！」

「ああー！」

その様子と話を刃羅達はモニタールームで見聞きしていた。

「……それでよろしおす」

「おやまあ。あの子の試験での課題をあんたが解決させちまったのかい」

「試験前にあんなに沈まれてたら、こっちの士気に影響すると思っただけでござる」

「そうかね」

刃羅とリカバリーガールは互いに肩を竦める。

そして、轟と百は見事なコンビネーションで相澤を完封して条件を

達成したのであった。

#20 期末試験その2

第5試合、麗日・青山チーム対13号。

モニタールームには梅雨がやってきた。

「お疲れ！梅雨ちゃん！かつこよかった！」

「ありがとう刃羅ちゃん。お茶子ちゃん達はどうかしら？」

「あんな感じだな」

チラツとモニターに目を向ける刃羅。

梅雨もモニターに目を向けると、出口直前の柵に捕まって13号に吸い込まれかけている麗日達がいた。

「惜しい所まで行ったんやけどな。捕まってしもたな」

「ケロ。お茶子ちゃん……頑張つて」

「あの状況からは厳しいじゃろうなあ」

青山が膝からレーザーを放つが、見事に吸い込まれる。

「一度、あの吸引に捕らわれるとどんな攻撃も効かんからな」

「……どうすればいいんだろう？」

「ああなっちゃう前に封じるか足止めする必要があったべな。13号がどこまで一度に吸い込めつか分かんねえ以上、2人一緒に行動したのが裏目に出た感じだべ」

刃羅も悩まし気に顔を顰めながら考察する。

それに緑谷と梅雨も顔を曇らせる。

その時、青山が何か麗日に呟くと、不意に麗日が柵から手を放す。

「何してん」

「麗日さん!？」

13号も焦つて『個性』を解除する。

その隙に麗日は体術で13号を抑え込んでハンドカフスを取り付ける。

「やった！条件達成だ！」

「……リカバリーガール。あれは偶然だと思っただが……」

「私もそう見えたけどね。まあ、条件達成は確かだからね。後は13号の採点次第さね」

リカバリーガールも悩まし気に顔を顰めながら話す。

梅雨も首を傾げていた。

そこに飯田と百が現れた。

「飯田君！やったね！」

「ありがとう緑谷くん！」

「八百万さんも凄かったよ！あの相澤先生を完封だなんて！」

「轟さんの力があったからですわ。それに……乱刀さんのおかげもあります」

百は緑谷の言葉に首を振り、刃羅に体を向けて頭を下げる。

それに刃羅は腕を組んで顔を背ける。

「ふん」

「ケロケロ」

「ふふ」

刃羅の頬が少し赤らんでいるように見え、梅雨と百は照れているのだと理解して微笑む。

続いては芦戸・上鳴対校長。

フィールドは工場地帯。

「校長先生が戦うのって想像出来ないな」

「そうだな」

上鳴と芦戸は余裕そうに笑いながら走っていたが、突如建物が崩れ始めて2人の行く先を塞ぐ。

2人は慌てふためくが、さらに建物が崩れ始めて2人は逃げるのに手一杯になる。

その時、校長はハンマーが付いたクレーン車に乗っており、それを操作していた。

「あんな所からどうやって!？」

「……恐らく予測ですわ」

「予測？」

「どの建物を壊せば、どう連鎖していくかを瞬時に計算しているでござるな」

「そんなことが……!」

「しかも邪魔をするついでにゴールまでの道も塞いでいるのである。……これはあの2人には厳しいであるな」

モニターでは校長が紅茶を飲みながら高笑いをしている。それに少し引き気味の緑谷達。

「根津は昔、人間に色々弄ばれてるからね。こういう時は素が出るね」
「あれが素なのねえん」

そのまま芦戸と上鳴は何も出来ずにタイムアップとなった。

続いては耳郎・口田チーム対プレゼントマイク。

「さて、わっちも行きますよって」

「頑張つてね刃羅ちゃん」

「頑張つてくださいましー!」

「君達なら行けるぞー!」

「頑張つてね!」

刃羅は梅雨達の応援にピラピラと右手を振るだけで答える。

刃羅は歩きながら、これまでの試験を見ての傾向を考える。

(間違いなく生徒にとって天敵となる教師を当ててきている。それを連携でどうやって躲すかが評価の基準とされるか)

刃羅の相手はスナイプ。

間違いなく狙撃による攻撃。

そうなると会場は死角が多いはずと考える。

障子と合流して、試験会場に向かう。

先ほど話した役割を確かめ合う。

「どんな会場だと思う?」

「そうだねく……死角は多く多いとは思うけどく」

「向こうにも有利な場所ではあるか」

「だろうな」

会場の入り口で待機していると、

『耳郎・口田チーム。条件達成!』

どうやら突破したようだ。

すると、入り口が開いていく。

中に入ると、そこは地下空間を思わせる石の柱が乱立した場所だっ

た。

「暗がりも多い。高さも制限されている密閉空間。音も反響しやすい。狙撃に適している環境ばかりだな」

「ああ。やはり先に見つけないと厳しいか」

「ん〜……」

刃羅は柱を調べて、上を見上げる。

それに障子は首を傾げる。

「どうした？」

「いや、そう簡単に崩れそうにはないかと確かめておった」

「なるほどな」

『障子・乱刀チーム。演習試験スタート！』

開始の合図が響く。

「まずは試してみるか」

「分かった」

障子が腕を複製して両脇に伸ばしていく。

ある程度伸ばすと、複製腕の先を耳に変える。

今度は刃羅が腕をロングソードに変える。

「行くぞ」

「ああ」

刃羅はロングソードをぶつけ合わせる。

キィィィィン!!

甲高い金属音が会場に響く。

腕を戻して左側の柱の陰に隠れる刃羅。

少しして障子も腕を戻して、刃羅の元に静かに駆け寄る。

「どうや？」

「駄目だな。向こうも柱の陰に隠れているようだ」

「やはりか。仕方がない」

反響で居場所が分かれば御の字と思ったが、そう上手くはいかなかった。

刃羅達もこれが上手く行くわけではないと思っていたので、落胆はしなかった。

その後、障子の腕を地面に這わせて一本一本先の柱周辺を探って進んでいく。

2 / 3 ほどまで進んだ所で一度歩みを止める。

「ゴールは見えてきたが……」

「流石にこれ以上はどう移動しても見つかるじやろうな」

「どうする？」

「……まずは位置を探りたいのであるな。ここにいて欲しいのである」

「分かった」

刃羅は障子を残して、2本分ほど戻る。

そして足の裏から刃を生やして、反対側を目指して一気に滑り出す。

反対側に滑り込むと、

「ゴール右手前の柱にいる！」

障子の声が響いた。

その瞬間、スナイプが刃羅の前に飛び出して発砲する。

刃羅は慌てて、右奥の柱の陰に飛び込む。

「ちい！あつぶねえなあ！あの瞬間で2発も撃つのかよ!？」

刃羅の踵のすぐ後ろに2発の弾丸が着弾した。

それに冷や汗を流し、対応を考える。

(今飛び出しても狙われるか？スナイプが拳銃を2つ持っていたらきついな)

すると、発砲音が響く。

どうやら障子が狙われたようだ。

(仕方がないね！)

刃羅は背中を預けている柱を見上げた。

モニタールームでは梅雨達が心配そうに観戦していた。

「やはりあの射撃は厳しいですわね」

「刃羅ちゃんにはまさに天敵だわ」

「障子くんも索敵は素晴らしいが、戦闘は接近タイプだ。あの拳銃を無力化しなければ……」

「あれ？刃羅ちゃんは？」

刃羅の姿が柱の陰から消えた。

他のモニター画面を見るが、刃羅の姿は見つけられなかった。首を傾げた梅雨達だったが、その直後の光景に目を見開いた。

スナイプは左右の警戒を怠ることなく、構えている。

「撃たれる危険を犯しても、俺の居場所を把握しに来たか。そして二手に分かれて、俺の隙を作るつもりだな？」

スナイプは二丁の拳銃を構えている。

「障子目蔵は索敵能力は高いが、逆に場所が割れると戦闘においては一步劣る。対して乱刀刃羅は戦闘能力は高いが、遠距離持ち相手にはほぼ無力。さあ、どうする？」

「こうするんだよ!!」

「!!」

聞こえた声に銃を構えるが、そこに刃羅の姿はなかった。

「?…っ！上か!?!」

上を見上げると、刃羅が天井を走っていた。

「天井を!?!忍者かあいつは!?!だが、それじゃあな!」

「Y E A H H H H H H H H H H!!」

「なんだと!?!」

銃を刃羅に向けたスナイプ。

その瞬間、刃羅は体を捻って天井を蹴り出して、両手を突き出しドリルのように高速回転をしながらスナイプに迫る。

それに驚愕したスナイプだが、すぐさま発砲する。

しかし、その弾丸はキィキィン!と弾かれてしまった。

「っ!?!馬鹿な!」

「ジ・スパイラール!!」

スナイプが隠れていた柱を砕きながら、刃羅はスナイプの目の前に突き刺さる。

スナイプは距離を取ろうとするが、刃羅は脚を開いて回転蹴りを放つ。

「ぐう！」

「こうなれば、こつちに分があるぞ！」

「舐めるなよお！」

スナイプは左手を背中に回して、銃口を刃羅に向けて発砲する。

刃羅は腕を交差して顔を守る。刃羅の右腕と右脇腹に弾丸が突き刺さる。

モニタールームでは悲鳴が上がる。

「乱刀さん!？」

「刃羅ちゃん！」

「乱刀くん!!」

「スナイプ……それはやり過ぎないじゃかね？」

流石のリカバリャーガールも顔を顰めさせる。

スナイプも撃った瞬間に仮面の下で顔を顰めた。

(しまった!?)

キキイン!

しかし、刃羅から響いたのは金属音だった。

「なに!？」

「私の《刃体》が何時、手足だけだと言った？」

「!？」

「わたくしの刃は全身ですわ！」

左腕をコルセルカに変えて、左手の拳銃を弾く。

スナイプは動揺を抑えきれずに拳動が遅れる。

「くう!？」

「逃がさないのです！」

すぐさま両手を鎖鎌に変えて、スナイプの体に巻き付けていく刃羅。

スナイプは逃げきれずに両腕を拘束される。

「く、鎖鎌まで！」

「です！」

「ごお！」

刃羅はスナイプの顎に右脚を蹴り上げて叩き込み、後ろに仰け反ったスナイプをそのまま右足で胸元を踏みながら押し倒す。

そこに障子も駆けつける。

「カフスなのです！」

「おう！」

すぐさま障子がスナイプの左腕にハンドカフスを掛ける。

『障子・乱刀チーム。条件達成！』

「やったのです！」

「ああ！」

「……参った。完敗だ」

鎖鎌から解放されたスナイプは、座り込んだまま改めて両手を上げて降参する。

「乱刀。本当に腹は大丈夫か？」

「問題ねえよ。武器は作れねえが、刃で埋め尽くす位は出来つかんな」

刃羅はスナイプの質問に頷きながら、手の甲に刃を細かく生やして、刃の鱗のようにする。

それにスナイプは納得した様に頷き、障子は目を見開く。

「それにしても……まさか天井を走ってくるとはな。恐れ入った」

「ギリギリであるがね。もう少し遠ければ、完璧に対処されていただろう」

刃羅は肩を竦める。

控え会場に戻った刃羅はモニタールームに顔を出した。

「刃羅ちゃん。凄かったわ！」

「本当に！それにしても、お腹や腕は大丈夫ですか？」

「ちゃんと防いだ。棒で突かれたようなものだ」

「なら、よかったですわ」

「それにしても忍者みたいだったよ！刃羅ちゃん」

「天井を走ることまで出来るとは……驚いたぞ！」

「あんなもん荒業だ。完全に張り付いてるわけじゃねえしな」

首をコキコキと鳴らしながら、飯田達と並ぶ。

リカバリーガールが声を掛けてきた。

「無茶したもんだね。本当に問題ないのかい？」

「痣になったくらいだべ。おいらの刃は武器を作るだけじゃないベ
さ」

スナイプにも見せたように手の甲に刃の鱗を生やす。

それに飯田達は目を見開いて、リカバリーガールは納得した様に頷く。

「器用な子だねえ。お前さんは」

「元々こつちが本家だ。武器の方が応用というか裏技だ」

「なるほどね」

手を戻して、腕を組む刃羅。

モニターには最後の組の緑谷と爆豪がスタートした所が映されて
いた。

「それにしても……相澤先生は的確で荒っぽい組み合わせを選んだも
のであるな。この2人とオールマイトを戦わせるとは」

「そうね。緑谷ちゃん、大丈夫かしら」

「大丈夫なわけないじゃろ」

刃羅の断言に全員が心配そうにモニターを見つめる。

するとさつそく言い合いが始まっていた。

「2人の唯一の共通点はオールマイトを絶対視しとることやな。ただ
し、爆豪は超える壁として、緑谷は辿り着く極致としてやけどな」

その言葉に頷く飯田達。

「だからこそ2人の意見は平行線でござろうな。特に爆豪氏にとって
は、今の状況は何よりも受け入れがたいはずでござる。……追いか
けている者と追いかけられている者に挟まれているでござるのだから」
すると、オールマイトが拳を振るうだけで街が吹き飛んでいく。

その光景に目を見開く刃羅達。

モニター越しでもオールマイトの威圧感が届いてきそうだった。

「……あれがNo.1に立つ男。……バケモンやねえ。スナイプはん
よりも絶望してまいりますわ。わっちでは傷つけるのも無理でつしや

ろなあ」

あのパワーでは刃なんて通らないだろうし、通る前に砕かれそう
だ。

爆豪は単身でオールマイトに攻撃を仕掛けるが、もちろん圧倒され
る。

緑谷は完全に逃げ腰で周りが見えておらず、爆豪と接触してしま
う。

「このままでは勝ち目なんてないぞ……！緑谷くん……！」

「しかし……今のお2人ではとても連携なんて……」

「ケロオ」

「デクくん……」

飯田達も絶望的な差を感じている。

「爆豪……焦り過ぎじやのう」

「そうだね。素晴らしい才能を持っているのは間違いないのにねえ」

「……憧れるが故に曲げられないか。自分が決めたことを」

それは尊いものだろう。大切にすべきことだろう。誰も間違っ
ているなんて言えないだろう。

しかし、間違っているのだ。どうしようもなく。

『No. 1』を指すのならば、それでもいいでしょう。しかし……

『No. 1ヒーロー』を指すならば、それではダメですわよ」

緑谷がガードレールで体を封じ込まれ、爆豪は腹を殴られて嘔吐し
ながら悶絶する。

爆豪はそれでも立ち上がる。

『あのクソの力あ借りるくらいなら……負けた方がまだ……マシだ』

その言葉に刃羅は爆豪への期待を捨てる。

（あれだけ勝ちに拘りながら、己の好き嫌い如きで敗北を『マシ』とほ
ざくか。……信念と固執を取り違えている）

その時、なんと緑谷が爆豪を殴り飛ばす。

『負けた方がマシなんて……君が言うなよ!!』

そして爆豪を担ぎ上げて、路地裏に入り込む。

「デクくん……！」

「なんとかオールマイトから離れられたが……!」

「すでに2人ともボロボロですわ。しかも仲違いしたまま」

(でもあの緑谷君の言葉をく爆豪君はく無視できるかなく?)

意識している男からの言葉は、爆豪の意識を変える可能性がある。

特に緑谷から言われれば効果は抜群だろう。

少しするとゴールに戻ろうとするオールマイトの後ろに爆豪が現れる。

オールマイトが対応しようと振り向いた直後、緑谷が路地裏からオールマイトの背後に現れる。

緑谷の腕には爆豪の籠手が嵌められていた。

そして迷わずピンを引き、爆破を放ちオールマイトを吹き飛ばす。

「やった!」

飯田達が盛り上がる。

刃羅も声には出さなかったが、その顔には笑みが浮かんでいた。

緑谷と爆豪はすぐさまゴールに向けて走り出す。

「……爆破もオールマイトが破壊した街に重ねてるアル」

「これで被害は最小限ね」

「問題はここからよねえん」

「ですわね」

緑谷と爆豪はゴールを目掛けて走っていく。

するとオールマイトが一瞬で2人の間に現れる。

爆豪が籠手を向けるが、すぐさまオールマイトに碎かれる。

今度は緑谷の籠手が破壊されて、緑谷は腕を掴まれ持ち上げられ、

爆豪は倒されて腰を踏みつけられる。

「緑谷くん!爆豪くん!くそお!」

「速すぎる……!」

「あれで重り付けとんのかいな……」

「No. 1ヒーローは伊達ではないってことね」

すると爆豪が寝ころんだまま、オールマイトに向けて巨大な爆発を放つ。

オールマイトが再び吹き飛ばされ、その間に爆豪が緑谷を担ぎ上げ

て、爆破しながらぶん投げる。

浮いていればオールマイトでも追えないと考えたようだ。

しかし、オールマイトは拳を振り抜いて、衝撃波で無理矢理方向を変えて緑谷の腰に突撃する。

緑谷は地面に叩きつけられる。

「今の腰イッたね！」

「デクくん……い！」

爆豪は連続で最大火力で爆発を放つ。

緑谷はまだ立ち上がれない。

それでも爆豪は最大火力で放ち、オールマイトを足止めする。

「あんな連続で使えんのか？あれって」

「流石に無茶じゃないかしら？」

「緑谷くーん!!立っんだー!!」

「デクくん!!」

飯田がギコギコとロボットののように腕を振り回しながら叫び、麗日も両手を握り込んでいる。

緑谷が立ち上がって走り出す。

オールマイトが迫るが、そこに爆豪が飛び掛かる。しかし、オールマイトはそれを読んでいたようで爆豪の頭を抑え込んで地面に叩きつける。

それでも爆豪はオールマイトの腕を掴んで爆発を放つ。

オールマイトは緑谷を追おうとする。

そこに、

「え!?デクくん!?!」

「……!!」

緑谷が反転してオールマイトの顔に拳を振るう。

オールマイトがよろけた隙に、緑谷は爆豪を抱えてゴールに向かう。

爆豪はすでに気絶しているようだった。

オールマイトは顎にでも入ったのか、まだ立ち上がれないようだった。

「……オールマイトのような2人であるな」

「刃羅ちゃん？」

刃羅の呟きを梅雨だけが捉えた。

刃羅はモニターを見つめたまま、独り言のように続ける。

「真逆の2人じゃがの。あの2人が揃うと、まるでオールマイトのよ
うな動きになると思うてな。実力はともかくの」

「……ケロ」

「本人達は認めんだろがな」

「ケロ」

「さて、これで終わりやな」

「そうだな！皆、よく頑張っていたぞー！」

こうして期末試験は終了した。

様々な思いを胸に、林間合宿に向けて準備を始めていくことになる
刃羅達だった。

ドクトラの拠点にて。

「さて……ステイン様も旅立たれましたし。しばらくは普段通りの活
動に戻りましょうか」

「ドクトラ」

ステインを囲んでいた部屋の撤収を始めていたドクトラ。

そこに真っ黒のメイド服を着た女性が声を掛ける。

「どうしました？」

「敵連合に動きがありそうです。裏のブローカーの者が接触する予定
です。ステイン様の思想に心酔した者達を連れて」

「……動き出しましたか。ステイン様の脱走については、まだ広まっ
ていないようですね」

「はい。警察と一部のヒーローだけで留まっています。ドクトラのご
指示通り、噂を潰しているのもあるとは思いますが」

「それは重畳。しかし……そうですねえ。『アーマー』をそのブロー

カーと接触させてください。スパイにでもなってもらいましょう」
「分かりました」

ドクトラの指示にメイドは礼をして、姿を消す。
それを見送ったドクトラは片づけを再開しながら、刃羅の事を考える。

「刃羅さんにも伝えた方がいいですかねえ。恐らく敵連合は雄英を狙うでしょうし」

オールマイトと関わっているし、USJとステイン騒動に係わった刃羅やそのクラスが狙われる可能性は高いと考える。

「……いいですかね。大丈夫でしょう」

しかしドクトラは問題ないだろうと判断する。

理由は別に雄英が襲われたところでドクトラには影響がないからである。

この判断が後日、活動に大きく影響を与えることになるとは、もちろん思いもなかったドクトラであった。

#21 夏休みに向けて

期末試験明け。

教室では演習試験で条件達成出来なかった芦戸、上鳴、砂藤、切島が絶望の表情を浮かべていた。

「皆……土産話っひぐ……楽しみに……うう……してっ……がら……！」

芦戸が涙を流してしゃくりながら話す。

「今までの流れで楽しい林間学校になるのであろうか？」

「そこは気にするのは今更だと思っわよ。刃羅ちゃん」

「まっ、まだ分かんないよ。どんでん返しがあるかもしれないよ……！」

「緑谷。それ口にしたら、無くなるパターン」

「もしくは更なる地獄を見せられるパターンだね！」

『……ありえる』

刃羅の言葉にむしろそっちの可能性の方が高いと思った一回だが、赤点組の耳には届かなかったようだ。

「試験で赤点取ったら林間合宿に行けず補習地獄！そして俺らは実技クリアならず！これでまだ分かんのなら、貴様らの偏差値は猿以下だ！」

「落ち着けよ。長げえ」

上鳴が発狂しながら叫ぶ。

それに瀬呂が突っ込むが、上鳴は収まらなかつた。

「同情するなら、なんかもう色々くれ！」

それを梅雨や百達と遠巻きに見ていた刃羅は、

「なんや地獄パターンな気いしてきたわ」

『うんうん』

梅雨達も刃羅の言葉に頷いた。

そして相澤が教室にやって来た。

「おはよう。今回の期末試験だが……残念ながら赤点が出た。した

がって……林間合宿には全員行きます」

『どんでん返しだあ!』

「もしくはあ地獄への入り口だねえ」

「……そんな気がしてきましたわ」

相澤の言葉に芦戸、切島、砂藤、上鳴が叫ぶ。

その様子に刃羅がボソツと呟き、百は少し寒気がした。

「筆記の方はゼロ。実技は芦戸、上鳴、切島、砂藤、瀬呂が赤点だ」

相澤の言葉に瀬呂が崩れ去る。

「林間合宿は元々強化合宿だ。むしろ赤点の奴らこそ、ここで力を付けてもらわなきゃならん」

「なるほど」

「合理的虚偽って奴さ」

『ゴーリテキキョギイー!!』

赤点メンバーが歓喜に叫ぶ。

「またもしてやられた……!流石雄英……!しかし!二度も虚偽を重ねると信頼に揺らぎが生じるかと!」

「わあ、水差す飯田君」

「確かに。省みるよ」

「なんかゴメンなのです!」

「まだ何かあるのかしら?刃羅ちゃん」

「何もありません!梅雨教官!」

「しつけられたね!?!」

飯田の言葉に相澤と、何故か刃羅も謝る。

それに梅雨が離れた席から無表情で刃羅を見ると、刃羅は冷や汗を流しながらすぐさま立ち上がり敬礼する。

その様子に葉隠が突っ込む。

「ただ全部が嘘ってわけじゃない。赤点は赤点だ。お前らには別途に補習時間を設けてる。ぶっちゃけ学校に残ったの補修よりキツイからな」

「……!!」

「じゃあ、合宿のしおりを配るから後ろに回して行け」

「地獄へくようこそ」

「お前も行くか？乱刀」

「断るのである！」

こうして全員で林間合宿に行くことになった1—Aであった。

放課後、しおりを開いて持っていく物を確認する刃羅達。

「……ほとんど持ってないのだよ」

「私も買い揃えないといけないものが多いわ」

「水着までいるのか」

「一週間の強化合宿か！」

「結構な大荷物になるね」

刃羅は買い揃える金額を考えて項垂れる。

梅雨や芦戸も買い揃える物を考えて唸っている。

そこに葉隠が声を上げる。

「あ、じゃあさ！明日休みだし、テスト明けだしってことで！A組皆で
買い物行こうよ！」

「おおい！何気にそういうの初じゃね？」

「爆豪！お前も来い！」

「行ってたまるか。かったりい」

「轟君も行かない？」

「休日は見舞いだ」

「ノリが悪いよ！空気読めやKY男共お！」

「じゃあ！木塚区ショッピングモールに13時に集合ね！」

というこで、買い物に行くことになったようだ。

「……そこってどこや？どうやって行ったらええのん？」

「私が迎えに行つてあげるわ。刃羅ちゃん」

「いいのです？」

「もちろんよ。一緒に行きましょう」

「サンキュー！」

「ケロ」

刃羅はまだ地理に詳しくなく、ショッピングモールなどに興味もな

かったので場所を知らなかった。

それに梅雨が同行を申し出る。

刃羅が礼を言くと、梅雨はニコリを笑う。

そこに葉隠と百も同行を申し出て、昼前に刃羅の部屋に迎えに行くことになった。

「つてえことで……金が足りねえ！」

「……確かにほとんど買い揃えないといけませんね。はあく……私としたことが」

夜、流女将にしおりを見せて、買い揃えるだけのお金がないことを伝える。

それに流女将は顔を覆う。

刃羅は全く服やら物やら欲しがらないので、余り気にしていなかった。しかし、考えてみれば早くに両親を亡くし、3年も攫われていた（ことになっている）刃羅が、服などに興味が出るわけがないことに気づいた。

普段の生活でもほとんどタンクトップにスウェットズボン。良くて甚平だった。それどころか買い物自体、流女将や女子のサイドキックが誘わないと買いに行かない。他では買い物に行ったなど聞いたことも見たこともなかった。

「明日、梅雨ちゃん達が迎えに来てくれるって！」

「ありがたいことですね。お金は今回は私が出します。ついでに服や下着も見えておいでなさい」

「ありがたいのです！」

流女将は刃羅がちゃんと学生生活を送れていることに安心した。

ワクワクが抑え切れていない刃羅を微笑んで見つめるのだった。

翌日。

まだ10時前だが、梅雨、葉隠、百は流女将の事務所に顔を出して、刃羅の部屋に案内してもらった。

「……ごめんなさいね。刃羅さん、楽しみで遅くまで起きてたみたい

で……。さつき起きたばかりみたいなんです」

「ケロ」

「大丈夫ですわ。まだ時間は十分ありますので」

「どんなお部屋なのかな!?ちよつと楽しみ!」

流女将が申し訳なさげに3人を部屋まで案内する。

そして刃羅の部屋について、チャイムを鳴らす。

「刃羅さん!皆さんが来ましたよ!」

「うい〜……ちよ〜……待って〜……」

少しするとガチャリとドアが開く。

出てきた刃羅は下着姿で、髪もボサボサだった。

「おはよ〜」

「おはよう。刃羅ちゃん」

「おはようございませわ」

「おっはよう!眠そうだね!」

「はあ〜……なんて恰好してるんですか!」

「んあ〜……眠いの〜……」

ニヘラアと笑う刃羅にため息を吐く流女将。

それに百は苦笑し、梅雨はニコニコしている。葉隠は透明なので分からない。

「何にもないけどお良かったらあ中で待っててえ」

「お邪魔します!」

「お邪魔するわ」

「失礼します」

「では、私はここで。刃羅さん、楽しんでらっしゃいね」

「うん〜」

「二〇〇〇〇ありがとうございました」

流女将は事務所に戻っていく。

梅雨達3人は頭を下げ、部屋に入っていく。

それを気配で感じ取っていた流女将は、ため息を吐いて眉尻を下げる。

「はあく……あの子の部屋を……お友達はどう思うでしょうか。これをきつかけに変わればいいのですが……」

自分にも責任はあるが、あまり踏み込むのも違うだろうと思っっている流女将。

親代わりになりたい気持ちもあるが、刃羅の今までを考えれば容易く踏み込めることではないと考えている。

実際、刃羅はここに住み始めてから今まで、流女将が呼ばない限り一緒に食事をすることはない。刃羅からご飯を催促してきたことはないのだ。買い物もまた然り。

あまりにも他に興味を示さない刃羅。

今回の同年代との買い物で少しでも好転することを願う流女将だった。

部屋に入った梅雨達は、刃羅の部屋を見て言葉を失っていた。

「……これが刃羅ちゃんの部屋？他の部屋に荷物があるとかじゃないの？」

「ないのです。ここにあるのが全部なのです」

部屋にはベッド、教科書類が入れられている小さい本棚くらいしかなかった。机もカーペットもない。

クローゼットの中にもほとんど物はなく、制服や体操服が一番目立っている。カラーボックスにも下着類や甚平などでおしゃれとは無縁な物ばかりだった。

洗面台にもドライヤーや歯磨きなど最低限の日用品しかなく、キットンにもほとんど物がなかった。

「本当に最低限の物しかありませんわね……」

「服も寝間着みたいなのしかないよ……」

「ケロオ」

本当に過ごしているのかどうかすら怪しく感じてしまう3人だった。

髪をポニーテールに纏めた刃羅は3人の戸惑いに気づかずに着替える。

赤のショート丈キャミソールタンクトップでヘソを出し、カラーボックスの奥の方に仕舞っていた白のホットパンツを履く。もちろんベルトには武器を模したバツジがたくさん付いている。

百と同等以上の巨乳に括れた腰、鍛えられた健康的な太ももがかなりの色気を醸し出している。

「じゃあ、行こうかの」

「色気の暴力!」

「それで行くと峰田ちゃんが暴れそうだわ」

「そう言われても外出に適しているのはこれぐらいしかないのだが……」

「……これは林間合宿の買い物以前に乱刀さんの衣服を揃える方が先ではないでしょうか?」

「そうね」

「今から行って、先に服とか見に行こうよ!響香ちゃん、三奈ちゃんやお茶子ちゃんにも連絡入れとく!」

「それはいいですわね!」

「……どういうことになるんや?」

「皆のお着替え人形ね」

「うえ〜……」

刃羅はややうんざりと顔を顰めるが、問答無用で連れ出される。

梅雨達は流女将に事情を説明する。

それに流女将は微笑みながら、カードを取り出す。

「買い物にはこれを使ってください。金額は気にしないでいいのですよ。せつかなので気に入ったものを買ってきなさい」

「ありがと〜」

「財布と鞆は?」

「あ。忘れた!」

「はあ……早く取ってきなさい」

「おうよ!」

刃羅はドタドタと部屋に戻る。

それを見送った流女将は梅雨達に顔を向ける。

「何もなかったでしょう？あの子の部屋」

それに頷く梅雨達。

「あの子が自分から欲しいといったのはバッジと甚平とカップ麺くらい。それ以外は何を勧めても、適当に頷くだけ。衣服に関しては、あのような服だけです。本当に何も興味を示しません。買い物だって、今日のあなた達みたいに私達が無理矢理連れ出さないと、休日中に出かけることもありません。家具に関しては、いつの間にか事務所に置かれてたりします」

流女将の言葉に悩ましそうに眉間に皺を寄せる梅雨達。

「だから、あなた達で好き勝手にして頂いて構いませんよ。友人であるあなた達と買ったものならば、与えられた物とは違うでしょうから。連れ回してあげてください」

流女将の微笑みながらの言葉に梅雨達は力強く頷き返す。

そこに刃羅が戻ってきた。

黒の中着型バッグを背負って、サンダルで降りてくる。

「行ってくるべ」

「行つてらっしゃい」

「「お邪魔しました」」

「またいつでも来てください」

そして4人で駅に向かう。

途中で耳郎達も合流して、刃羅にどんな格好をさせるかで盛り上がる梅雨達に、刃羅はこの後の重労働を想像して顔が引きつるのだった。

「つてな、感じでやってきました！県内最多店舗数を誇るナウでヤングな最先端！木榔区ショッピングモール！」

「いえーいー！」

芦戸と葉隠がハイテンションでハイタッチする。

刃羅はキョロキョロを周りを見る。

「ぎょうさんの店と人どすなあ。圧倒されてまうわあ」

「じゃあ、どこから行く!?!どのジャンルから行く!?!」

「ジャンルってなんじゃ?」

「刃羅ちゃんは黙って付いてきて!」

「我の意見は無視か!」

『もちろん!!』

刃羅の抗議に力強く頷く梅雨達。

刃羅はそれにつくりと肩を落とし、梅雨に腕を引かれて店に連れ込まれる。

「まずはパンク系!!」

「刃羅って背も高いし、体つきもいいから、なんでも似合いそうだなね」

「顔も細いしね」

耳郎主体で始まった刃羅ファッションショー・パンク部門。

まずは今の服の上から黒の薄手のジャケットを着させて、サンダルをニーハイブーツに変える。

「おお!もうカッコいい!」

「髪も銀色だから映えますわね!」

「じゃあドンドンいこー!!」

「このジャケットとシャツはどうかしら?刃羅ちゃん」

「もう……好きにしてくれ……」

「じゃあ、これとこれと、これにこれ。着てみてくれないかしら?」

「おお!梅雨ちゃんセンスいい!」

「……」

その後もその店だけで1時間近く試着をさせられ、途中からは店員も加わっていた。

「ここはこんなもんじゃない?」

「よし!じゃあ次に行こう!」

『おー!』

「まだやるんか!」

「ありがとうございます!ございました!またのお越しを心の底からお待ちしております!」

現在刃羅は赤のショートTシャツの上に黒の薄手のジャケットに黒のネクタイを緩めに着けている。下は紺のスラックスの上に黒のメンズスカート、そしてアングルストラップのヒールを履いている。もちろん会計済み。

その他にも革ジャン、Gジャン、シャツにズボンと買い込んだ。もう十分だろうと刃羅は思っていたが、まだまだ梅雨達は気合を入れていた。

その後もギャル路線、アクティブ路線、ファンシー路線、綺麗め路線、クール路線とジャンル別に周り、そこからさらに買ったものを組み合わせていくという強行軍となった。

もはやどれだけ買ったのか分からず、気づけば百が買ったものを刃羅の部屋に速達で送るということまでしていた。

そして男子との集合時間まで30分前となって、ようやく終了となった。

「……」

「お〜い、刃羅〜。生きてる〜?」

「ん〜!楽しかった!」

「刃羅ちゃん、やっぱり何でも似合うから迷うねえ!」

「流石にゴスロリは無理だったけどね」

「でも、森ガールでも行けるのは意外やったわ〜」

「可愛かったわ。刃羅ちゃん」

「張り切ってしまいましたわ!」

カフェで休憩する一同。

刃羅は白目を剥いて椅子にもたれていた。

周りは何故か顔をつやつやさせて、笑顔で話している。

「一週間の合宿ってどんなことするんだろうね?」

『個性』も伸ばすって言ってたし、きつそうだよね」

「今年はヴィラン襲撃もありましたからね」

「相澤先生だものね。厳しいものであるのは間違いないと思うわ」

「……私はそれに補習あるしな〜」

「あははは……」

「……」

話題は林間合宿になる。

刃羅は未だに復活しないが。

「それに聞いた？夏休み、遠出は控えるようになって話」

「マジで!？」

「ヴィラン襲撃があったからでしょ？ヒーロー殺しの件もあって、A組は特に注意しろだって」

「残念ですわ。両親とベネチアに行く予定でしたのに」

「金持ちやないかい」

「大丈夫？お茶子ちゃん。刃羅ちゃんも、そろそろお茶飲まないとダメよ」

「ういゝ……」

梅雨に言われて刃羅はストローを口にして、ズズズと飲み物を飲む。

「せっかく新しい水着買ったのにい！」

「じゃあさ！学校のプール使おうよ！」

「お！それいいね！」

「では、私が申請を出しておきますわ」

「ありがとヤオモモ！」

「刃羅ちゃんも来るのよ」

「……マジでか」

「プール嫌なん？」

プールで盛り上がる芦戸達。

梅雨に誘われた刃羅は少し顔を顰める。

それに麗日が首を傾げる。

刃羅はズズズとお茶を飲みながら、さらに顔を顰めて顔を背ける。

その様子に芦戸があることに思い至る。

「まさか刃羅……泳げないの?..」

「」「え?」「」

「……悪いでござるか?..」

身体能力抜群の刃羅が泳げないという事実を目を見開く耳郎達。

刃羅は拗ねたようにズズズと氷だけになったコップをストロ
ーで吸い続ける。

その様子に全員が嘔き出して笑い始める。

「ぶくくく……刃羅ちゃんでも苦手なものがあるんだね」

「苦手やない」

「でも、泳げないんでしょ？」

「……ふんだ！」

「大丈夫よ。私が教えてあげるわ」

「……そりやどうも……」

「ケロ」

刃羅は頬を赤くして顔を背ける。

それに梅雨は微笑んで頷く。

「あ。そろそろ男子来るんじゃない？」

「そうだね。行こうか」

「……もう帰りたいのである」

「まだ林間合宿の買い物全くしてないわ」

「ホントだよね」

ぞろぞろと集合場所に向かう刃羅達。

男子達もすでに集合していた。

「ごめーん。待たしたあ？」

「さっき揃ったばっかだから気にすんな。って、女子は先に集まっ
たのか？」

「刃羅ちゃんの服を買って、コーディネートしてたの！」

「乱刀の？って、イカすじゃん乱刀！」

「でっしょー！」

刃羅はさらに服が変わっており、黒の深めVネックシャツの上に濃
赤のミニGジャン。首に黒のチョーカー、左手首にはシンプルな
チェーンを巻いている。下は赤のホットパンツにブーツを履いてい
る。髪もポニーテールではなく、ハーフアップにしている。

上鳴が服を褒めて、それに芦戸達が胸を張る。

地味に峰田が刃羅の胸元と太ももを見てニヤニヤしていたが、そこに梅雨が舌ビンタを浴びせて黙らせる。

「やっぱ服が変わると、雰囲気も変わったな」

「刃羅、着こなせる幅が広がってきー盛り上がったわー」

切島が腕を組んで何やら納得したように頷いていた。

それに芦戸も同じように頷いていた。

「着せ替え人形の気持ちがよく分かったのです……」

「大変だったんだな」

「3時間近く着せ替えさせられてみる。100回は着替えたぞ」

「……大変だったな」

刃羅はうんざりとしており、そこに障子が労いの言葉をかける。

そして目的別に分かれて買い物に向かう一同。

刃羅は梅雨、百、耳郎と行動する。

「ん〜……デッカイバッグにく靴にくタオルにく……」

「水着は学校のももいいのかしら？」

「一応無難なの買つとく？1着だけだと怖くない？」

「そうですね」

鞆や水着、靴などを購入していく刃羅達。

そして再び百の手配で荷物を家に送り届ける。

「これである程度は買い終えたね」

「少しお茶しませんか？」

「ちよつと休みたいのう」

その時、ふと刃羅は下の吹き抜け部のベンチに目を向ける。

そこには緑谷がフードの男と肩を組んでいた。

「緑谷……？知り合いか……？」

「緑谷ちゃん？」

刃羅の眩きに梅雨達も下を覗き込む。

しかし刃羅は妙に違和感を感じた。

「随分と親しそうですね」

「……あいつ……どこかで……？」

「どうかしたの？刃羅ちゃん」

「梅雨ちゃん……あいつ、どっかで見たことねえか？」

刃羅の様子に梅雨は首を傾げる。

そして刃羅の言葉を聞いて、男を注視する梅雨。

しかし、フードのせいによく分からなかった。

「ここからだと言顔が分からないわ」

「場所変えてみるべ」

「どうしたの？2人とも」

「あの男がどうにも気になるのだよ。それに……緑谷君の様子も少しおかしい。爆豪君よりも緊張しているように見える」

刃羅の言葉に改めて緑谷達に注目する梅雨や耳郎達。

「確かに……」

「……っていうか……あの男の手……妙に緑谷の首に添えられてない？」

「言われてみれば……」

耳郎達も違和感を感じた。

その時、刃羅は男の雰囲気が変わり、背中に怖気が走る。

それにより刃羅は男の正体を思い出す。

「梅雨!!警察に通報しろ!!」

「え?」

「じ、刃羅!」

「ヴィランである!!USJに来ていたのである!」

「!?!」

目を見開いて固まる耳郎達。

それを刃羅は無視して、柵を乗り越えて飛び出す。

刃羅はまっすぐ2人の元を目指す。

すると、男が刃羅に気づいて飛び下がる。

刃羅は男が座っていた場所に下り立つ。

「ゲェッホー!ゲホゲホ!」

緑谷は男が離れると思いつきり咳き込む。

「デクくん!」

そこに麗日が走って近づいて来た。

周囲も刃羅達の様子に気づき、注目し始めた。

「お前は……。連れがいたのか……」

「白昼堂々とは恐れ入るアルよ。ヴィラン連合、死柄木弔!!」

「え？死柄木……って……」

「ちっ……つとお!!近づくなよお。周りを殺すぞ」

刃羅は飛び掛かろうとするが、死柄木の言葉に足を止める。

近くにいた買い物客は顔を真っ青にして、慌てて死柄木達から逃げていく。

「追ってくんないよ。どうなるか分かるよな?」

死柄木は両手をピラピラさせて、下がっていく。

「ま、待て……死柄木……」

そこに緑谷が喉を押さえながら、声を上げる。

それに死柄木は足を止める。

『オール・フォー・ワン』は何が目的なんだ……?」

「……オール・フォー・ワン……?」

「……知らないな」

緑谷の言葉に刃羅は訝しむ。

死柄木はそれにまともに答えなかった。

そして刃羅に目を向ける。

「よお、お前。ヒーロー殺しに誘拐されて鍛えられたって……本当か?」

「……だったら、どうした?」

「親もヒーローに殺されたんだってなあ。お前は今の世の中をどう思う? オールマイトをどう思う?」

「てめえ……何が言いてえんだゴラア」

「そこにいるのは窮屈そうだと思ってるなあ」

ニヤアと笑みを浮かべる死柄木に、刃羅はゾクウとして一步後退する。

(……なんや……こいつ。雰囲気……前とちやう……!? 目つきも……力強くなつとる……!)

刃羅は冷や汗が流れ始める。

前に敵対した時と雰囲気が変わるで違っていた。

ブレブレだった気配が、今は静かな水面のように落ち着いている。

「……悪いが貴様というよりは気楽でいられる」

「それは嫌われたもんだな。まあ、今はいいか」

死柄木は肩を竦めて刃羅達に背中を向けて、歩き始める。

それを刃羅達は見送るしか出来なかった。

死柄木の姿が見えなくなると、刃羅は深く息を吐いて緑谷に振り返る。

「ふうく……大丈夫かえ？緑谷坊っちゃん」

「……うん。ありがとう。乱刀さん」

「いや。ちよつと慌てて飛び出してしまったのです。前のあいっだったら、ちよつと危なかったのです」

麗日が携帯を取り出して、警察に通報している。

そこに梅雨達が駆けつける。

「大丈夫？緑谷ちゃん、刃羅ちゃん」

「無茶し過ぎですわ！」

「すまぬ」

緑谷の横にドカッと座り込む刃羅に、百達は心配そうな顔を向ける。

麗日と百が警察に、耳郎がヒーローに通報したとことから、すぐに駆け付けるはずだ。

しかし、捕まえられるかは微妙と考える刃羅だった。

「厄介なことになったようですわね」

「……うん」

「我も人の事は言えぬが……緑谷」

「なに？乱刀さん」

「オール・フォー・ワン」

「!!」

刃羅が呟いた言葉に緑谷は目を見開いて固まる。

それを見た刃羅はため息を吐く。

「お主は少し不用心じやの。間違いなく、その言葉はここで出すもの

ではないじやろうに」

「……乱刀さんは、知ってるの?」

「知らへん。やからこそ、死柄木がおったとて軽々しく言うなっちゆうてんねん。それが向こうにとって絶対の秘密やったら、どうなっとなつたか」

「……ゴメン」

その後、警察が到着しショッピングモールは一時封鎖となった。

死柄木はやはり見つけることは出来なかつたそうだ。

緑谷と刃羅は事情聴取で警察署に連れて行かれた。

と言つても、刃羅は直ぐに解放された。

『いきなり飛び掛かるんじゃない!』とお叱りは受けたが、緑谷の状況を考えれば仕方がないとも言われ、流女将は迎えに来て解放された。

「無茶ばかりして。通報を指示出来るなら、飛び掛かったらどうなるか分かるでしょう」

「……いやあちよつとお嫌な予感がしてえ」

「だったら余計に状況を見極めなさい!!」

「ういゝ……」

「全くもう。それにしても随分と買い込みましたね」

「着せ替え人形にされたのでな。私の意見など聞いてもらえなかつた」

「でしょうね。まあ、せっかく選んでもらつたのです。大事になさい」

「へいへい」

部屋に帰ると、部屋を埋め尽くすほどの買い物袋が並んでいた。

それを見て、改めて本日の苦行を思い出し、顔を引きつかせる刃羅だった。

こうして刃羅の初めての友人との買い物は、楽しくもほろ苦い思い出となつたのであった。

#22 プール

死柄木遭遇の翌日。

HRでも事情説明が行われた。

「……とまあ、そんなことがあってヴィランの動きを警戒し、例年使わせて頂いている合宿先を急遽キャンセル。行き先は当日まで明かさなない運びとなった」

『えー!』

相澤の言葉にクラスメイトの何人かが声を上げる。

「もう親に言っちゃってるよ」

「故にですわね……。話が誰にどう伝わっているのか、学校が把握できませんもの」

「合宿自体をキャンセルしねえの英断過ぎるだろ!」

すると爆豪が声を上げる。

「てめえ、骨折してでも殺しとけよ」

『!!』

「それは無茶じゃない? 爆豪。緑谷もギリギリだったんだし、あんなところで『個性』なんて使えないでしょ」

「知るか。とりあえず骨が折れろ」

「奴と戦っておれば緑谷は崩れ去って、更に何十人が死んだじやろろがお」

「刃羅ちゃん……!?!」

「あ?」

爆豪を耳郎が咎めるが、爆豪は更に捲し立てる。

そこに刃羅が口を挟む。

「まあ、我も奴を見逃したからなあ。骨を折るなら我もだな」

「そうかよ。じゃあ、折れろや」

「分かったのです」

「ああ?」

「ふっ!」

『!?!』

刃羅は右手首を左手で押さえ、右前腕に膝蹴りを叩き込んだ。
ボギイ!と鈍い音が響き渡り、それに全員が目を見開く。

「じ、刃羅ちゃん!」

「マジかよ!」

「これでええか?」

「……頭イカれてんのか?」

「おやおや。自分でやれと言っておきながら、実際にやったらビビるのかね?随分と小物臭いことだね」

刃羅は爆豪を鼻で笑う。

爆豪は盛大に顔を顰めて、刃羅を睨む。

「自分でも出来ないことを強がって言うのは、基本的に怖がり者が威嚇する時である。おや?そうなるかと爆豪は怖がり者と言うことになつてしまうのであるな?」

「っ!?てんめえ!!」

「そこまでにしとけ。馬鹿共が」

相澤が髪を逆立てて、刃羅達を睨む。

それに刃羅は肩を竦める。

爆豪は齒軋りをして刃羅を睨む。

「全く……乱刀はすぐに保健室に行け。他の奴らは終業式に行け。爆豪は後日反省文提出だ」

「ああ!?なんで俺が……!?!」

「お前の言動が問題だったからだ。いい加減ヒーローを目指す者としての言動を自覚しろ。乱刀も反省文ものだが、その骨折で相殺だ」

「くっそがあ!!」

「ほな、行つてきますわあ」

爆豪は怒りが抑えられず、椅子を蹴り飛ばす。

刃羅は涼しい顔で教室を出て、保健室に向かう。

その姿を梅雨が無表情で見つめていることには気づかなかった。

保健室にて。

「あんたねえ……自分で折るなんて馬鹿なことしてくるんじゃない

よ」

「だってムカついたんだもん！」

「まあ綺麗に折れてるから、すぐに治るだろうよ」

「は〜い」

「ところで後ろの子は付き添いかい？」

「後ろお？」

リカバリーガールの言葉に後ろを振り返る刃羅。

そこには無表情で舌をブラブラと揺らしながら立っている梅雨がいた。

それを見た刃羅は、死柄木と向き合った時よりも冷や汗がドバア！と流れる。

そしてプルプルと震え始める。

「つ……梅雨ちゃん……」

刃羅の呼びかけに一切答えず、ジい〜と見つめ続ける梅雨。

「ほい。これで終わりだよ。あんま無茶すんじゃないよ」

「りよ、了解であります。ほぶう!？」

「……」

リカバリーガールが包帯を巻いて終わりを告げた瞬間、刃羅の口元から上半身にかけて舌が巻き付く。

そして、そのまま梅雨は無言で踵を返して、歩き始める。

刃羅は抵抗も出来ずに引きずられる。

行きついた先は教室だった。

「あ。帰ってきた」

「も、も〜もふもはは」

「ごめん。何言ってるのか分かんないや」

すでに終業式は終わったようで、帰り支度をした者達がいた。

芦戸達女子陣は梅雨と刃羅を待っていたようで、特にその光景に驚くことなく刃羅達に目をやる。

その後ろには緑谷や飯田、切島などもいた。

「とりあえず、正座して！刃羅ちゃん！」

葉隠の言葉にシュバ！と正座する刃羅。

ちなみに刃羅の顔はすでに血の気が引いて真っ青になり、涙目になっっていた。

その間も梅雨は無言でジい〜と刃羅を見つめている。

刃羅の周囲を葉隠や百も怒りのオーラを纏って仁王立ちする。

芦戸達はそこまでではないが、刃羅の状況は当然だと思っっているようだ。

緑谷はアワアワしており、飯田も腕を組んで仁王立ちしている。

「言うことは分かっていますわね？乱刀さん」

「くだらないことをして申し訳ありませんなのです!!」

舌から解放されて、百から声を掛けられると、刃羅はズガン！と額を床に打ち付けて土下座する。

それでも梅雨達は怒りのオーラを消さずに見下ろしている。

「み、みみみ、み、皆……そ、それくらいで……いいんじゃない……かなあって、思うんですけどお」

「緑谷は黙ってて」

「ごめんなさい!!」

「緑谷……今は口出したら危険だぜ」

「で、でも……僕のせいで乱刀さんはあんなことしたんだし……」

緑谷は責任を感じてしまっており、どうにか穏便に終わらせたかった。

「デクくん」

「う、麗日さん」

「多分……梅雨ちゃん達が怒つとるんはそれだけやないと思うよ？」

「え？」

「その通りですわ」

麗日が緑谷に声を掛ける。

麗日の言葉に首を傾げる緑谷だが、それを百が肯定する。

「確かに腕を折ったのも怒ってるけど!」

「それ以上に昨日の行動にまだ納得いってないんだよね。うちら」

「昨日って……死柄木の？」

「そうですね。警察やヒーローに連絡するように指示しておきなが

ら、1人で飛び掛かったことですね」

「うーそ、それは……」

「先ほど爆豪さんに言っていた通り、緑谷さんと買い物客の方々を死なせてしまう危険がありました。なのに、乱刀さんは1人で飛び出して行きました。結果、誰も被害はありませんでしたけど、十分に危険はありましたわ」

「は、反省しとります」

プルプルと震えながら土下座を続ける刃羅。

未だに梅雨が言葉を発さないのが怖すぎる刃羅だった。

「……昨日の事を見て、私達はあることを思ったのよ」

「あること？」

「刃羅ちゃんが私達の前からいなくなるつもりでいるように見えたの」

『!!』

「……」

ようやく口を開いた梅雨の言葉に緑谷達男子陣は目を見開く。

刃羅は黙り込んで、顔を上げる。

「USJの時も、昨日も、まるで自分が傷ついても死んでも悲しむ人はいないって思っているように見えたわ」

「……そうかも？？ばう!!」

思い起こすように首を傾げて呟いた刃羅に、高速で梅雨の口から何かが飛び出してドバン!!と刃羅の頬を叩く。

もちろん舌である。

「い、今のは効いたべ」

「何でそんな風に思うようになったのかしら？」

「……なんでじゃろうなあ？……ステインかろう？」

梅雨の質問に正座したまま腕を組んで眉を顰める刃羅。

刃羅自身、深く考えたことはないの、はつきりとした理由が思いつかない。

「なら刃羅ちゃん」

「なんだ？」

「今日からは私達がいるってことを憶えといてちょうだい」
梅雨の言葉に百達も頷く。

それに顔を顰めた刃羅は、

「……善処すルバウ!」

再び梅雨の高速舌ビンタを叩き込まれる。

それに百達はため息を吐く。

「なんでそこで分かったと言ってくれないのですか……」

「守れる自信がないでありまぶごお!?!ぽぺえ!?!」

「2連撃……!?!」

「まあ、今のはぶつちやけすぎだよな」

刃羅はぶつちやけた瞬間、更に高速で舌往復ビンタされる。

それに緑谷が慄き、切島は刃羅の言動に百達同様呆れている。

刃羅は崩れ落ちそうになるが、すぐさま梅雨が舌を巻きつけて正座を保たせる。

「ちゃんと座ってちょうだい」

「ひゃ……ひゃい……」

少し頬が腫れ始めている涙目の刃羅。

「なんで自信がないのかしら?」

「……今まで考えたことないものを、急に考えろなんて器用な真似が自分に出来ると思ってるのかね!?!」

「性格と戦い方から考えれば出来ると思いますわ」

「……」

「速攻で反論されてんじゃねーか」

「……びいえくん!びえご!?!」

刃羅は泣いて誤魔化そうとしたが、直後に梅雨の舌に体を締め付けられる。

ギリギリと締められ続ける刃羅。

「ちよ……ちよつと……ぐ……ぐる……じい……!?!」

「だめよ」

「う……うで……腕はゆるじで……!」

「そこまでにしとけ。お前ら」

相澤が現れて梅雨を制止する。

「相澤先生……！」

相澤の登場と言葉に梅雨は大人しく舌を外す。

解放された刃羅はドサツと床に倒れる。

「どうしたんですか？」

「乱刀の様子を見に来た。今まさに悪化したようだがな」

「……センキュー……ティーチャー……」

「しかし、話を少し聞いてたがあんまり反省は出来てない様だな」

「ふえ？」

「反省文5枚提出しろ」

「なんでやねん!？」

ガバー!つと起き上がり、抗議する刃羅。

「冗談だ。今回は流石に爆豪の言葉が問題だったからな」

「焦りましたわ〜」

「ただ蛙吹達の言っていることも大切なことだ。そこは林間合宿でも課題とさせてもらう」

「……え〜」

「ちなみに骨折の事は流女将さんにも伝えてあるからな」

「え〜」

「きつちり絞られとけ」

その言葉で百達も怒りを引っ込める。

梅雨はまだ納得出来ていない様子だったが、百達が声を掛けると何やら納得したようで怒りを鎮めた。

それに首を傾げる刃羅だったが、その後は特に怒られることはなかった。

帰ってから流女将から再び正座で説教されて泣きじやくることになる刃羅だった。

その夜。

マンションの屋上。

「いきなり電話とは驚かせてくれるな。お師匠。結婚してくれるのか

？」

「……ハア……ヴィラン連合の死柄木とやらに、また遭遇したらしいな」

「その話かよ……。会ったぜ。正直、別人に見えたけどな」

「別人だと？」

「雄英を襲った時とは雰囲気違ったのである。お師匠にも通じるものがあつたのである」

「……あの子供が？」

「お師匠が脳無から助けた少年が何やらきつかけのようじやの」

ステインは考え込むように黙る。

「活動は再開したのかね？」

刃羅は話題を変える。

それにステインも顔を上げる。

「……忌々しいが、今下手に動いても敵連合の手柄になるだけだからな。ヴィランを中心に粛清をしている」

「なるほど。負けたツケはでかかったアルか」

「誰のせいだ」

「負けた奴のせいなのです」

「……ハア……」

黙つたステインに、刃羅は内心で「勝った！」とガッツポーズをする。

「俺が抜け出したことは、まだ広まってない様だな」

「そうですね。敵連合が勢い付くのを防ぎたいのでしよう。敵連合にも知られるのも時間の問題ですわね」

「……ちっ」

「大金叩いて助け出したのだ。下手な手は打たんでくれ。流石にそろそろ私の嘘もバレる」

「……確かにな」

「次、やらかしやがったら雄英飛び出してやっかんな！」

「……ハア……やはり馴染めんか」

「馴染めるわけないべ。まあ、確かに面白い奴もいるけども。変に

まどろっこしいべ」

「だろうな。だからこそ……被害者も、贖物も、屑も減らん」

刃羅の言葉にステインはため息を吐き、項垂れる。

刃羅は肩を竦めて、目を鋭くしてステインを睨む。

「いい加減飽きてきたのも事実。師匠がどう思おうが、私の判断で雄英を去らせてもらう」

「……いいだろう。好きにしろ。ただし……」

「なんや？」

「そいつらを殺す覚悟を持てるようにしておっ!？」

ステインは忠告しようとする、背筋に怖気が走り、刀とナイフを抜きながら飛び下がる。

直後、ステインのいる場所に刃羅が両腕を広げて立っていた。

ステインは貯水タンクの上に下り立つ。

右頬と左首筋に赤い筋が走る。

「……」

「舐めないで。あの程度の連中に情が湧いたとでも?……殺すわよ?」

「……ならばいい……ハア……」

まさに刃のように冷え切った鋭い瞳でステインを見据える刃羅。

その言葉と様子にステインは刀とナイフを納める。

そして刃羅に背を向ける。

「死柄木もそうだが、他にも敵連合に有象無象が合流しようとする動きがあるようだ。お前の前に現れたら、お前の信念の元に肅清しろ」

「……分かった」

そのまま姿を消すステイン。

その背中を見送った刃羅は、フウーと息を吐く。

「……なんかあイライラするう」

苛立った表情で腕を組む刃羅。

「殺せるさ。たかが数か月過ぎただけの連中」

右手を見つめて言い聞かせるように呟く刃羅。

部屋に戻ろうと階段への扉に体を向けた時、

「……どないな顔……しはるんやろおなあ……」

こんな自分の事で泣いて、怒ってビンタをして、一緒に居て笑ってくれる蛙の少女の顔を、何故か思い浮かべたのだった。

夏休みに入って数日。

刃羅は、

「んあ〜……あつつ〜……」

ベッドの上でダラけていた。

修行も続けてはいるが、基本的には部屋で寝転んでいた。

ピンポーン。

「んあ〜？」

ピンポーン。

「誰え？この暑い中あ」

うんざりした顔でドアを開ける。

その瞬間、刃羅は全身を縛り付けられる。

さらに口元にも何かが巻き付く。

「おお!?むむ!?」

「はい！オッケーー！」

現れたのは耳郎と梅雨だった。

「むお!?もむ!?」

「じゃあ、行くわよ。刃羅ちゃん」

「??？」

梅雨の言葉に首を傾げて、頭の上に？を浮かべる刃羅。引きずられて下に下りると、そこには百が待っていた。

その横には豪華な車が待機していた。

「連れてきたよ」

「お疲れ様ですわ。荷物は預かっています」

「じゃあ、行きましょう」

「むごーー!!」

「大人しくしてちょうだい。刃羅ちゃん」

刃羅を車に押し込み、百達も乗り込んで走り始める。
そしてようやく口元を解放される。

「ぶっはあ!!どこ行くねん?うち、なんも持ってきてへんで?」

「流女将からお預かりしてます。衣服やお財布なども」

「なんでですの!?!」

「昨日の内に連絡しておいたのよ」

そう言えば昨日、流女将がいきなり部屋にやってきて衣服を『洗濯しときますね』と持って行ったのを思い出した刃羅。

まさか財布や鞆すらも持って行っていたとは、全く疑問にも持たず、気づきもしなかった。

「なんで財布持ってたか覚えてんのに気づかないのさ……」

「財布なんか滅多に使わねえんだよ。ってゆうか、いい加減目的地話せやゴラァ!」

耳郎が刃羅の鈍さに呆れる。

それに刃羅は答えながら、腕を組んで怒鳴る。

「学校よ」

「……学校う?今夏休みじゃないのお?」

梅雨の言葉に首を傾げる。

それに百や耳郎は呆れたように、刃羅を見る。

「はあ……やはり忘れてましたのね?」

「刃羅らしいけどね」

「だから何のだ……」

「プールよ」

「……プール」

刃羅は盛大に顔を顰める。

シヨッピングモールでの会話を思い出したからだ。

その様子に耳郎と百は吹き出して笑い始める。

「他の皆も来るわ」

「お、泳ぎ方教えてあげるよ?」

「ふん!」

刃羅は腕を組んで顔を背ける。

それを梅雨達はニコニコ、ニヤニヤと見つめるのだった。

更衣室。

スクール水着に着替える刃羅達。

「流石にビキニとかはアウトだよね」

「でもさ！プール使えるだけありがたいよね！」

「そうだね」

「……やっぱり着心地よくない」

「仕方ないわよ。刃羅ちゃん」

「……やっぱり身体つき凄いな。刃羅」

プールに出て、準備運動を始める。

そこに何故か飯田を始めとする男子陣も現れ始めた。

「あれ？飯田達もプール？」

「芦戸くん達じゃないか！ああ！緑谷くんから連絡があつてね！体力強化だそうだし！」

「おお！さすがだねえ！」

飯田の言葉に頷く女性陣。

「わっちらは何て申請してはるのん？」

「日光浴ですわ」

「……そんなので通るのであるか」

「夏休みの遠出を控えさせたことによるものと相澤先生に伝えましたのわ」

百の言葉に納得の表情を浮かべる刃羅や梅雨達。

そして、男子もほぼ全員揃って泳ぎ始める。

百達も簡単に泳ぎ始めたのだが、刃羅は未だにプールサイドに蹲って水面を覗んでいた。

「むむむ……！」

「どうしたん？刃羅ちゃん」

「……もしかして泳ぐ以前に水が苦手？」

麗日と耳郎が刃羅の様子に首を傾げる。

「……こんなデカイ水に入ったことも泳いだこともねえんだよ。わ

りいか」

刃羅は水面を睨んだまま呟く。

それに女性陣達は刃羅の境遇を思い出し、どう声を掛けたものかと戸惑う。

最近の小学校ではプールの授業を行わない。『個性』による人体機能などの問題であったり、それによるイジメなどの発生例が昔多く上げられたからである。

さらに刃羅は中学校に通ってはいない。

「じゃあ、まずは水に慣れることから始めましょ。大丈夫よ。私が一緒にいるわ」

「……むう」

そこに梅雨が声を掛けて、手を差し出す。

刃羅は顔を顰めながらも、梅雨の手を握る。

「ケロオ」

それに梅雨は笑みを浮かべる。

刃羅は水に浸かることから始めた。

そして1時間もすると、

トビウオのようにバタフライやクロールで泳ぐ刃羅の姿があった。

「ぶっはあー！」

「上手くなり過ぎでしょ!?!」

「私より速いじゃん!」

「人魚みたい!」

「流石の身体能力ですわね……」

「どうやら、初めてで不安だっただけみたいね。教えたらすぐに出来ちゃったわ」

「水に慣れたらあつという間やったね」

「体の動かし方と息の止め方が分ければ、なんてことないでござるな!」

飛び込みやターンも1発で覚えた。

泳げば泳ぐほどにフォームもスピードも良くなっていった。

25 m潜水も出来るようになった。

「まあ『個性』に関しては使い辛いがね」

「それは仕方ないよ」

「うちらだって使い様ないしね」

「ていうか刃羅も十分使えてるじゃん。何あのスクリューと足ヒレみたいなの?」

葉隠、耳郎が肩を竦め、芦戸がジト目で刃羅を見る。

刃羅は両脚をスパイラル・カッターに変えて、スクリューのように回転させて泳いだり、足先をイルカの尾びれのような刃に変えて泳いだりしていた。

「あれだけしか使えぬがのう」

「使えるだけいいじゃん!」

プールサイドに上がって、駄弁る刃羅達。

刃羅は髪紐を解いていており、水を滴らせている姿が妙に色っぽい。

「ヤオモモも体つきはエロイのになあ。刃羅ってやっぱり妙にエロさが前に出るよね?」

「うんうん!女でもドキツとする時あるよね!」

「やかましいわい」

刃羅は腰に右手を当てて、ジト目で耳郎と葉隠を見る。

その時、ねちっこい視線を感じ、刃羅は視線の元へと目を向ける。

「グへへへ……」

「やっぱりエロいよなあ」

反対側のプールサイドにて峰田と上鳴が鼻を伸ばして、刃羅達をガン見していた。

どうやら向こうは休憩中のようなだった。

刃羅はため息を吐く。

「もう少し隠す努力をして欲しいものだ、な!!」
「ひいひいひい!?!」

刃羅は右腕を鎖鎌に変えて伸ばし、上鳴と峰田の目の前に突き刺す。

峰田と上鳴は飛んできた鎖鎌に驚き、悲鳴を上げて飛び退さる。

刃羅は腕を戻して、フン！と吐き捨てる。

「あ、あぶねえだろ!？」

「刺さなかっただけありがたく思うのです」

「はい、刃羅ちゃん。お水よ」

「どうもなのである」

梅雨からペットボトルを受け取る刃羅。

「まあ、さつきも言ったけど刃羅確かにエロイもん。仕方ないんじゃない?」

「そうそう」

「なら貴様ら脱げ」

「すいませんでした!!」

耳郎と芦戸の上鳴達を庇う様な発言に、刃羅がギロリと睨んで呟く。

2人はすぐさま頭を下げ謝る。

それに百達は苦笑する。

「けどプールって体鍛えられるの?」

「そうね。全身の筋肉を鍛えられるわ」

「水の抵抗もあって、エネルギーも使いますしね」

「ならあ私も頑張つてえ泳ごお」

「筋トレ好きやね」

『個性』で筋肉使うからね!」

そう言つて、プールに飛び込む刃羅。

見事なバタフライで高速で泳いでいく。綺麗なターンを決めて、次はクロール、平泳ぎ、背泳ぎ、潜水と続けて泳いでいく。

「すげえ泳げてんな」

「本当に今日が初めてなのか?」

「それは間違いないわ。顔を水につけるとときに、顔色悪かったもの。それにバタ足だってまともに出来てなかったわ」

「うんうん」

砂藤が腕を組んで感心しており、障子が本当に泳げなかったのか梅雨達に質問する。

それに教えた梅雨が頷き、麗日や葉隠も頷く。

「刃羅ってダンスも踊れるし、格闘技とかも出来るからね。体の動かし方はA組で一番上手いんじゃない？」

芦戸は耳郎とボールで遊びながら話す。

ドバアアアン!!

刃羅の泳いでいたレーンから水柱が立ち、そこから刃羅が飛び出してくる。

新体操のように体を捻りながら梅雨達の近くに降り立つ。

直後、雨のように水が降ってくる。

「ふう」

「ふう、じゃないよ!?凄くなり過ぎ!!」

「水中から思いきり飛び上がると、体に良い負荷がかかるのだよ」

葉隠の苦情に、刃羅は髪を掻き上げながら涼し気に語る。

「ふむ。重りでも付けて泳ぐか?」

「それは止めてほしいわ」

刃羅は思いついたように口にするが、それに梅雨がストップを掛ける。

それに刃羅は肩を竦める。

「残念や。ほな、コースレーンでバランス練習でもしよか」

「いや、無理でしょ」

「そうでもないじゃろ。ふっ!」

耳郎が突っ込むが、刃羅は飛び出してコースレーンに飛び乗る。

コースレーンが沈む瞬間に、さらに飛び上がり隣のコースレーンに乗る。

交互にコースレーンを飛び移りながら、反対側に移動する。

「おお!?忍者!?」

「マジでか!?!」

芦戸と切島が驚きの声を上げる。

他の者達も目を見開いている。

「やっぱ、飛び移るだけなら楽勝だべなあ。同じコースレーンで移動してえべな」

刃羅はクルリと反転して、再びコースレーンに飛び乗る。
今度はそのまま前方に走る。

出来る限り、脚をスライドさせるように出して、真下に体重と力をかけないように意識する。

「おお!? さらに忍者!?!」

「凄すぎんだろ!?!」

ブツブツ…体重や力を前後に移動させるように…どうやって?
…かなりの筋力があるんじゃない? ブツブツ

「怖ええからやめろ、緑谷」

再び芦戸と切島が驚愕し、緑谷がブツブツと観察し、その緑谷に轟
が突っ込む。

後、数mで反対側に着くというところで、ズルツと前に出した足を
滑らせた。

「あ!?!」

「ふ!?!」

葉隠が声を上げると、刃羅はコースレーンに両手について無理矢理
逆立ちする。

そこからはバク転、側転と新体操のように柔らかくも高速で回り、
最後に一気に飛び上がってプールサイドに下り立つ。

「惜しかった!」

「十分だろ」

「すごいよ! 乱刀さん!」

頬を膨らませて不満を示す刃羅に、上鳴が突っ込み、緑谷が両手を
握り締めて興奮する。

「緑谷やあ飯田ならあ出来るんじゃないい?」

「僕にはとてもまだ…!」

「俺は重過ぎるし、体が乱刀くんほど柔らかくはないからな。難しい
と言わざるを得ないな」

緑谷は顔をブンブン!と横に振り、飯田は腕を組んで唸る。

刃羅は梅雨からタオルとペットボトルを受け取る。

「しっかし、すげえ動きするよなあ。乱刀は」

「拙者は動けなかったら『個性』が活かせんのだ。当然であろう」
「それでもかなりのものですね。……私も格闘術を覚えるべきでしょうか……?」

切島が感心するように話す。

それに刃羅は水を飲みながら応え、その言葉に百が悩まし気に首を傾げる。

「ヤオモモも結局は武器の扱いに長けないといけないもんね」

「そうですね。帰ったらお母様に頼んでみましょう!」

百は両手を握ってプリプリと気合を入れる。

それを耳郎がホンワカと見つめている。

その後は男子陣で水泳競争(『個性』あり)が始まり、刃羅は梅雨と並んで座りながら眺めていた。

決勝戦が始まった瞬間、相澤が時間を告げに来て、刃羅の初めてのプールは終了した。

その後、梅雨と刃羅は2人で帰路についていた。

刃羅はTシャツにダメージジーンズ、サンダルにリュックという服装だった。

「今日は〜弟君達は〜いいの〜?」

「弟達も学校の友達の家泊まりに行ってるから大丈夫よ。ねえ、刃羅ちゃん」

「ん?」

「ちよつと寄り道してもいいかしら?」

梅雨の言葉に首を傾げる刃羅。

梅雨は刃羅の手を握って、先導し始める。

向かった先は、海岸だった。

夕陽が沈んでいく水平線を眺めながら、梅雨と刃羅は波打ち際に歩み寄る。

「風が心地ええどすなあ」

「そうね。気持ちいいわ」

心地よい海風に目を細める2人。

「刃羅ちゃんは楽しい?」

「む?」

「学校の皆と過ぐして、楽しいと思えてるかしら?」

梅雨は海を眺めながら、刃羅に質問する。

刃羅は梅雨の顔を横目で見つめながら、質問の意図を考える。

「楽しいで?初めての事ばっかやからな」

「……」

「でも、同じくらい不安もある」

「不安?」

「うむ。この程度でヒーローになれるのか、ととう」

今度は梅雨が刃羅の顔を見る。

「ステインの思想は知っていますな?そして、それに小官は少なからず賛同しているとも」

「聞いたわ」

「そのせいでもあるのだろうがね……自分のヒーロー像はその思想に基づいているのだよ。見返りを求めず、名誉を求めず、ただ助けを呼ぶ声に応えるという思想に」

「それは素晴らしいことだと思っわ」

「だからこそ、闇の面も引きずっているのです。誰かを助けるためには、殺す事もやむを得ないという考え方も……」

「ケロ……」

刃羅は目を伏せながら話す。

梅雨は心配そうに刃羅を見つめる。

「……だから俺たちは、いつヴィランになってもおかしくねえと思ってる」

「そんなことはないわ!刃羅ちゃんは立派なヒーローになれるわ!」

刃羅の言葉を梅雨は強く否定する。

それに刃羅は苦笑する。

「もちろん易々と傾く気はない。その時は自分でケリをつける」

「……刃羅ちゃん」

「それでも駄目じゃった時は……梅雨嬢、お主が止めとくれ」

刃羅は梅雨としつかりと目を合わせて、語りかける。

その言葉に梅雨は何故か上手く言葉が出なかった。

「ケロオ……」

「冗談だよおん。帰りましようかあん」

「……ええ」

梅雨は少し不安そうな顔をしていたが、刃羅は気づかないふりをして歩き始める。

その後2人は別れて家路に着いたが、梅雨はどうにもこの時の刃羅の表情と言葉が忘れられなかった。

それを後悔することになる日は、そう遠くはなかった。

#23 林間合宿の始まり

いよいよ林間合宿当日がやってきた。

A組面々は校門前に集合していた。

「現在夏休みだが、ヒーローを目指す諸君らに安息の日々は訪れない。この林間合宿で更なる高みへ、Plus Ultraの精神で臨んでもらいたい」

『はいー!』

相澤の言葉に頷くA組の面々。

「いよいよ林間合宿だねーデクくん!」

「そ、そうだね!」

麗日が笑顔で緑谷に顔を近づけ、緑谷は顔を真っ赤にして妙な動きをする。

「刃羅ちゃんは昨日寝られたの?」

「流石にな。それに昨日も体動かしたしな」

「でも、どこか元気がないように見えるわ」

梅雨は後ろの方で何やらどんよりとしている刃羅に声を掛ける。

刃羅は拗ねたように頬を膨らませる。

「カップ麺持って行こうと準備してたの!でも、流女将に没収された!酷いよね?」

「いや乱刀。どこでカップ麺食べる気だったんだよ……」

「寝る前に決まっておるじやろう」

「体によくないんじゃないかしら?」

「だから普段から動くようにしてるのである」
「なるほどな」

刃羅の言葉に砂藤や梅雨が突っ込む。

「ミーはすでにアンハッピー。どうにでもなれスピリット!!」

「すでにやけくそなのか」

「……不幸常駐」

「やめてあげて常闇ちゃん」

両腕を振り上げて叫ぶ刃羅に、障子と常闇が呆れる。

すると、離れた所で麗日、芦戸、上鳴が「合宿！合宿！」と踊り始める。

「なんや？お茶子はんテンション高いやん？」

「お茶子ちゃんも妙にやけくそ感出てるわね。どうしたのかしら？」

「分かるわけないのだよ」

刃羅と梅雨は首を傾げて麗日を見る。

すると、今回合同で合宿を行うB組が近づいて来た。

「え？A組補習いるの？つまり赤点取った人がいるってこと!?!ええ!?!
おかしくない!?!おかしくない!?!A組はB組よりずっと優秀なはずなの
にいい!?!あれれれれれえ!?!」

物間が開口一番、何やら喧嘩を売ってくる。

「ホアチャー！」

「ゴブウ!?!」

「うわあ!?!」

いつも通り拳藤が手刀を叩きつけようとした瞬間、刃羅が物間の腹に飛び蹴りを食らわせる。

物間は全く避けることも出来ず、くの字に3mほど吹っ飛び、手刀を入れようとしていた拳藤は驚きの声を上げる。

刃羅は両指をジャキンとナイフに変えて、物間に詰め寄る。

「朝からやかましいんだよゴリアー！喧嘩なら喜んで斬り殺してやんよ
!?!」

「どうどう！乱刀！うちの奴が悪かった！だから、そこまでにして!?!」

ギヤリギヤリと両指ナイフ同士を擦り合わせて研ぐ刃羅に、拳藤が慌てて肩を掴んで抑える。

その時、刃羅の胴体に梅雨の舌が巻き付き、引っ張られる。

「おお!?!」

「ホイ！キャッチー！」

「よくやった。黒影」

「ケロ。刃羅ちゃん、爆豪ちゃんになってるわ。それに相澤先生が睨んでるわ」

指を戻して、常闇の黒影にキャッチされる刃羅。

その様子を相澤が髪を逆立てて、目を光らせて睨んでいる。
ビシ！と固まり大人しくなる刃羅。

その間に拳藤が物間を回収する。
それを見ていたB組陣。

「物間と乱刀、怖」

「まあ、慣れてるうちらでもイラツとすることあるしね」
「ん」

「綺麗な飛び蹴りだったな」

B組女子陣を見て、峰田がジユルリと涎を流す。

「より取り見取りかよ！」

「お前駄目だぞ、そろそろ」

峰田に切島が真顔で突っ込む。

刃羅は黒影に抱えられたまま、大人しくぶら下げられていた。
そこに飯田がバスの横で声を上げる。

「皆！A組のバスはこっちだ！席順に並びたまえ！」

「えー！自由に座ろうよー！」

飯田の言葉に芦戸が抗議する。

その声の上鳴や他の者も同意し、飯田が解決策を出そうとすると、
「邪魔だ。さっさと乗れ」

「はいー！」

相澤の鶴の一声で、無造作に乗り込むA組。

「どうするー？女子って7人だし、誰か男子と一緒になっちゃうけど」

「峰田が隣じゃなかったら、別に誰でもいいよ」

「ふざけんな！俺の隣に座れや女子い！」

「刃羅ちゃん、隣いいかしら？」

「ええでえ」

「ケロ」

耳郎が女子陣に声を掛け、芦戸が答える。

それに峰田が叫ぶが、女子達は無視して席を決めていく。

刃羅は適当に窓際に座ると、梅雨が隣に座る。

その反対側にお茶子が座り、その隣は空席となった。

「……寂しいわ」

「お茶子ちゃん、交代する？私、別に補助イスでも大丈夫よ」

「ううん！そんな悪いよ！別に梅雨ちゃん達の声が聞こえないわけじゃないし！」

「ブンブン！と首を横に振る麗日。」

刃羅達の前が芦戸、葉隠。麗日の後ろが百、耳郎となった。

バスが走り始め、スピードが上がってくると、バスの中はすぐに盛り上がり始めた。

「音楽聞こうぜ！夏っぽいの！」

「夏と言えばキャロルの夏の終わりだろ」

「終わるのかよ」

「そしたらさー！」

「ええー！すっごいねー！」

「皆！席が立つべからず！べからずなんだ！」

「飯田君……！危ないから座った方がいいよ」

「む！俺としたことが！」

相澤は注意しようとするが、諦めて眠ることにした。

その後もバスの中はワイワイと賑やかだった。

梅雨は1人で座っている麗日にお菓子を差し出す。

「お茶子ちゃん、ポッキー食べる？」

「食べるー！ありがとー！って、刃羅ちゃんは？」

「ケロケロ」

笑顔で梅雨からお菓子を受け取る麗日は、首を傾げて梅雨の隣にいる刃羅を見る。

それに梅雨は笑いながら、刃羅を振り返る。

刃羅は靴を脱ぎ、席の上で膝を抱えて眠っていた。顔を膝に埋めているので、寝顔は分からない。

「走り始めてすぐに寝ちゃったわ。やっぱり昨日眠れなかったみたいね」

「あはは。ショッピングモールに行くときも寝れなかったんだっけ

？」

「らしいわ。ケロケロ」

「なにになにー？刃羅寝てんのってよくそれで寝れるね!」

「でもなんか猫？みたいだね」

「確かに!」

「かわいいな」

梅雨は微笑ましく刃羅を見つめる。

それに麗日も笑い、話が聞こえた芦戸や葉隠達が覗き込んでくる。

芦戸は目を見開き、葉隠の例えに芦戸と麗日が噴き出して笑う。

葉隠が刃羅の髪を撫でようと手を伸ばした瞬間、

ジャキン!!

「うわああ!」

突如、刃羅が顔を埋めたまま、右腕を刀に変えて葉隠に突きつける。

葉隠と隣にいた芦戸は悲鳴を上げながら後ろに倒れ込み、相澤が寝

ている前の座席に体をぶつける。

それに他の男子達も顔を向ける。

「どうしたって、大丈夫か？芦戸、葉隠」

「びび、びびくりした……」

「おいおい。どうしたんだよ乱刀?」

「乱刀くん!!バスの中で何をしているんだ!」

「ちよつと待って、飯田ちゃん」

「梅雨ちゃんくん?」

「……刃羅ちゃん?」

「……何を騒いでやがる」

「相澤先生……!」

「……乱刀。なにしてる?」

隣の列にいた上鳴が芦戸と葉隠に声を掛ける。

芦戸達は頭を抱えて唸る。

飯田が刃羅に詰め寄ろうとするが、隣にいた梅雨が止める。

梅雨は刃羅に声を掛けるが、反応を示さない刃羅。

それに飯田は訝しむが、そこに相澤が苛立ちを顔に浮かべて立ち上

がる。

相澤も乱刀の刀を見て、目を鋭くする。

しかし、乱刀は全く周囲の声に反応しない。

「乱刀くん！」

「……寝てるわ」

「「え？」」

飯田が改めて声を荒げて、刃羅を呼ぶ。

刃羅を観察してた梅雨は刃羅が寝ていることに気づく。

それに全員が目を見開く。

「いやいやいや!!寝てるのに刀出すとか怖すぎるだろ!」

切島が声を上げ、それに周囲も頷いていると、相澤が梅雨に声を掛ける。

「蛙吹。経緯を教えろ」

「ケロ。寝ている刃羅ちゃんの頭を、透ちゃんが撫でようとしたらこうなったわ」

「……無意識の防衛反応ってことか」

「防衛反応……ですか？」

梅雨の言葉を聞いた相澤が推測を呟くと、それに芦戸が質問する。

「……特殊な環境にいたことによる名残……つてえとこだな。寝てるときも油断出来ない状況で長い事過ごしていたんだろう」

「……ヒーロー殺し……」

「だろうな……」

「ケロオ」

「恐らく体に触れられることがトリガーだろう」

相澤の言葉に緑谷がステインの名前を上げて、相澤も頷く。

それに梅雨が悲し気な視線を、刃羅に向ける。

刃羅は周囲の視線に起きることもなく、腕を戻していく。

「じゃあ……この寝方も……」

「すぐに動けるようにするためだろう。今起きないのは殺気がないから……かな」

相澤の言葉に改めて刃羅が抱えているステインの呪縛の強さを理

解する梅雨達。

実際は呪縛ではないのだが。

「到着したら俺の『個性』を使って起こす。しばらくはそのままにしとけ」

「……分かったわ」

梅雨達は心配そうに眠り続ける刃羅を見つめながら頷く。

相澤も頭を掻きながら、ドカッと座席に座る。

（思ったより厄介だな。いや……まだ1年も経ってないんだ。当然か）

相澤は自分の認識が甘かったと考える。

考えれば刃羅の性格は未だ不安定であり、戦闘スタイルはステインによって培われたものだ。

更にステインの事が無くても、両親の件でヒーローと言う存在に対して歪んだ見方をしてしまったている。本人はそれを自覚しているからこそ、雄英に入ったのであろうが。

USJや保須、シヨップピングモールでの行動はある程度目撃したヒーローや緑谷達からも聞いている。

やはり所要所でステインに近い言動が見え隠れしている事実を、相澤は重く考えていかなければならないと再認識するのだった。

それから約1時間後。

バスは休憩と言うことで停車する。

「よし、休憩だ。各自降りろ」

相澤の言葉で動き出す一同。

相澤や梅雨は刃羅を起こそうとすると、刃羅がモゾモゾと動き出し、顔を上げる。

眠そうな半目でキョロキョロと周囲を見渡す。

「んあ〜……う〜もう〜……着いた〜……う〜……んん〜!!」

グイーー!と伸びをする刃羅を相澤や梅雨達はポカンと見る。

目を擦り、脚を降ろす刃羅。

「はあ〜……ん?どうしたんじや?」

「普通に起きるんかい！」

「ああん？何だよ……？」

身構えていた芦戸の突っ込みに刃羅は訳が分からず顔を顰める。そこに梅雨が刃羅の左手に自身の右手を重ねる。

梅雨の行動に刃羅はキョトンと首を傾げる。

「梅雨ちゃん？」

「刃羅ちゃん、さつき透ちゃんを刺しそうになったのよ」

「はあ？……あゝ……そういうことか」

刃羅は梅雨の言葉に何が起こったのか理解する。

後頭部をボリボリと掻き、顔を顰める。

周りを見ると女子達や緑谷に飯田も心配そうに刃羅を見ている。

「癖になつてもうてるんよ。寝とる時はどうしよくもないねん。こればっかりは」

「……辛かったのね」

「辛い、というか、これが出来ねば生き残れなかったのだよ。自分を襲うのはステインだけではなかった。ステインを狙うヴィランとかもいたのだよ」

何でもないように話す刃羅の言葉に、梅雨は目尻に涙を溜め始める。

刃羅は慌てるが、見れば百なども涙を浮かべ始めていることに気づく。

「いいから、そろそろ降りろ」

そこに相澤が口を挟み、緑谷達は慌てて外に出る。

刃羅も靴を履いて、バスを降りる。

停車した場所は広大な山々と森を見渡せる高台のようなところだった。

地面は舗装されておらず、周囲に休憩出来る店や建物も目に入らない。

さらにはB組のバスも見当たらなかった。

刃羅と梅雨は空気を吸いながらも、違和感全開な状況に首を傾げる。

それは他のクラスメイト達も同様だった。

「B組は？」

「ここ何？」

「トトト、トイレは？」

全員が訝しみながら周囲を見渡している。

「なにやら変なところじゃの」

「そうね」

刃羅と梅雨はバスの傍で突っ立っていた。

ふと、バスの近くに停まっている乗用車に目が留まる刃羅。

(……このタイミングで、こんな場所に……嫌な予感がするでござるなあ)

刃羅がさりげなく姿勢を整える。

「何の目的もなくでは意味が薄いからな」

その相澤の言葉と同時に停まっていた車のドアが開き、誰かが降りてくる。

「ようー！イレイザー!!」

「ご無沙汰してます」

降りてきた人物が相澤に声を掛け、相澤は頭を下げる。

すると、降りてきた人物は突如ポーズを取り始める。

「煌めく眼でえロツクオオン！」

「キュートに！キャットに！ステインガー！」

「ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ!!」

猫をイメージしたコスチュームを着た女性2人が何やら決めポーズをしながら名乗る。

その横には帽子を被った少年が懨然として立っている。

その姿に緑谷は何やら目を輝かせ、他の者達は啞然と2人を見る。

「今回お世話になるプロヒーロー『プツシーキャッツ』の皆さんだ」

「連盟事務所を構える4名1チームのヒーロー集団!!山岳救助などを得意とするベテランチームだよ!!」

相澤の紹介と共に興奮した緑谷が説明を始める。

ヒーローオタクの緑谷を、全員が生暖かい目で見ると。

刃羅は頭の中で『プッシーキャッツ』の登場について、頭をフル回転させていた。

(確かにベテラン。ステインやドクトラの情報にもあった。……確かこいつらの『個性』は……)

必死に一度見たはずの情報を思い出そうとする刃羅だったが、中々思い出せなかった。

「お前ら挨拶しろ」

『よろしくお願ひします!!』

相澤の言葉に挨拶する一同。

梅雨は話が聞こえるようにか、お茶子達に近づいていった。

「ここら一带は私らの所有地なんだけどね」

赤のコスチュームを着た『マンダレイ』が、森を見渡しながら話す。

そして、その森の一角を指差す。

「あんたらの宿泊施設はあの山の麓ね」

「「遠っ!」」

今いる場所からでも5km近くはあり、建物も見えない。

それを聞いて騒めく一同。

「え……う？じゃあ、なんでこんな半端なところに……う？」

「これってもしかして……」

「いやいや……」

「ハハ……バス、戻ろうか……早く……な？……」

嫌な予感がした一同は苦笑いをしながら、バスに戻ろうとする。

するとニヤアとマンダレイが笑みを浮かべる。

「今は午前9時30分。早ければあ12時前後ってどこかしら？」

「駄目だ……おい……」

「戻ろう！」

「バスに戻れ！早く！」

「12時半までに施設に着かなかったキティはお昼抜きね」

マンダレイの言葉に、走ってバスに戻り始めるA組一同。

すると目の前に水色のコスチュームを着た『ピクシーボブ』が現れる。

ピクシーボブは地面に両手を着ける。

「悪いね、諸君」

緑谷達が立っている地面が蠢き始める。

「合宿はもう、始まっている」

地面は盛り上がって波のようにうねり、緑谷達を飲み込んで高台から下に落としていく。

「「うわああああ!?!」」

緑谷達は土砂がクツションとなり、怪我無く地面に不時着する。

起き上がり、土を払ったり、吐き出していると上から声が掛けられる。

「おーい!!私有地につき、『個性』の使用は自由だよお!今から3時間!自分の足で施設までおいでませ!!」

その言葉に緑谷達は目の前に広がる森に目を向ける。

「この……魔獣の森を抜けて!!」

マンダレイの呼称に緑谷達は目を見開く。

「魔獣の森!?!」

「なんだよ……!?!そのドラクエめいた名称は!」

「雄英こういうの多すぎだろ……!」

「文句言ってもしやあねえよ。行くっきやねえ」

うんざりと言った顔をしながらも、立ち上がるA組面々。

峰田が股間を押さえながら、森に駆け込む。

すると、その先から巨大な獣がドスン!と現れた。

「「ま、マジユウだー!?!」」

全員が目を見開いて叫ぶ。

魔獣が動き出そうとした時、口田が『個性』を使って止めようとするが、止まることはなかった。

「口田の『個性』が通じない!?!」

「あ、あれ……動物じゃない!土で出来てるぞ!」

そこに緑谷、飯田、轟、爆豪が飛び込んで魔獣を吹き飛ばす。

「やったな!爆豪!」

「まだだ!!」

切島が近づき声を掛けると、爆豪は奥を睨みながら声を上げる。すると、周囲からドスンドスン！と足音や羽ばたく音が聞こえてくる。

「何匹いるんだよ!？」

「どうする!?!逃げる?」

「冗談!12時までに着かないと、昼飯抜きだぜ!」

「なら、最短ルートで突っ走るしかありませんわ!」

芦戸が逃走を質問し、砂藤がそれを否定する。

その言葉に百が方針を提案し、それに全員が頷く。

「よし!!行くぞ!A組!」

『おうー!』

飯田の号令に応える一同。

走り出そうとした瞬間、梅雨があることに気づいて周囲を見渡す。

「ケロ!?!皆!ちよつと待ってちようだい!」

「つとお!?!な、なんだよ!?!梅雨ちゃん!」

「どうしたの!?!」

梅雨の呼び声に飛び出しかけていた切島が慌てて足を止める。

麗日が梅雨に声を掛けると、梅雨は周囲を見渡しながら、

「……刃羅ちゃんはどこ?」

『え?』

梅雨の言葉に、全員が周囲を見渡して刃羅の姿を探す。

しかし、それだけ見渡しても刃羅の姿を見つけない事は出来なかった。

相澤はバスに乗り込み、マンダレイ達の車先導で施設に向かっていった。

「さて……晩飯までには着くかね……」

昼飯には間に合うとは思っていない相澤。

ひと眠りしようとした時、頭に声が響いてきた。

マンダレイの《テレビバス》だ。

『ちよ、ちよつとイレイザー!?! バスの上に生徒らしき姿が見えるわよ!?!』

「はあ!?!」

テレパスの内容に相澤は目を見開く。

運転手に路側帯で止まる様に伝えながら、窓を開けてバスの外に飛び出して上に上がる。

「乱刀……!?!」

「げ!?! 見つかった!?!」

上にいたのは刃羅だった。

刃羅は慌てて周囲を見渡して逃げ道を探すが、バスの上に逃げ道なんてあるわけではない。

相澤は『個性』を発動させ、首元の捕縛武器をうねらせて刃羅を拘束する。

「アイヤ!?!」

「全く……上手く逃れやがって……」

その後、路側帯にバスと車を止めた相澤達は、ため息を吐いて縛り付けられた刃羅を見下ろす。

「まさか……あの《土流》を躲してたなんて」

「この子が例の……?」

「ええ。乱刀です」

「いやあん♡……もつとお♡……きつくしてえ♡……縛り付けてえ♡」

刃羅は目を潤ませて、頬を赤らめている。

それを聞いたマンダレイ達は、更にジト目になる。

「……この歳で目覚めてるの?」

「いえ……そういう性格で誤魔化す気なだけでしよう」

「ああ、そういえば多重人格だったね。洗汰は車に乗せといてよかったよ」

「では、ここらでも始めますか」

「なんでやねん!?! ここは危機回避したことを褒めるところやろ!?!」

相澤の言葉に目を見開いて、抗議する刃羅。

変わり身の早さにマンダレイとピクシーボブは目を見開いて唾然とする。

慣れている相澤はギロリと刃羅を睨む。

「確かに見事だが、お前一人だけ助かつても意味がない。他の連中が必死になつてるときにお前だけ許すわけにはいかん」

「差別だあ！拷問だあ！びやくくん!!」

「文句は……施設に着いたら聞いてやるよ!!」

「ノオー……ウ!!ファツキュー……!!ティーチャー……!!」

相澤は砲丸投げの如く、刃羅を振り回して森に向かって放り投げる。

刃羅は罵倒を叫びながら、宙を舞って森に落ちていく。

「本当に大丈夫なのかい？縛ったままだし」

「まあ、奴ならいけるでしょう」

「さて！私は魔獣を作つてやるにやん！」

「お願いします」

投げ飛ばされた刃羅を見送つて、再び車とバスに乗り込む相澤達だった。

刃羅は縛られたまま、森に向かって墜落していく。

「あのクソ教師い!!ぜつてえぶつ殺す!!」

ズバン！と拘束を斬り飛ばして、体勢を整える。

森に突っ込んだ瞬間、両腕を鎌に変えて木々を斬りつけながら勢いを削ぐ。

ある程度、速度が落ちた所で腕を戻し、今度は鎖鎌に変えて木の幹に絡ませて振り子のように動かして落下を止める。

腕を戻して、地面に着地する。

「ふう……さて……施設はまっすぐでいいのかのう」

ネクタイを完全に外して、靴も脱いで裸足になる。

「森かあ……久しぶりだなあ。とりあえずうまっすぐ行ってえ果物や木の実や鳥でも集めよお」

方針を決めて走り始める刃羅。

ステインとの修行でよく森に来ていたので、移動は特に苦にならない。

トン！トン！と軽やかに進む刃羅。

そこに何か近づいてくる気配を感じた。

「……獣臭さはしないでござるな」

速度を緩めると、現れたのは四本脚の土くれ獣だった。

「ピクシーボブの《土流》で造ったもんだべか。思ったより使い勝手良いんだべなあ。……まあ、生き物でねえなら」

刃羅は正体に気づいた瞬間、右腕をバトルアックスに変えて土魔獣の頭に叩きつけて砕き割る。

「遠慮なく殺すだけだべ」

腕を戻して、再び駆け出す。

そこに更に複数の足音が近づいてくる。

「……なるほど。障害を排除しながら目的地に如何に早く着けるかを見ているのか。……梅雨達との連携を視野に入れていたのだろうか」

目の前に牛顔で2本脚の土魔獣と犬みtainな土魔獣が現れる。

「まあ……どうでもよいか」

スウと目を細める刃羅。

ドン！と地面を強く蹴り出し、スピードを上げて犬土魔獣の懐に潜り込む。

「よよいー！」

左脚を薙刀に変えて、飛び上がりながら振り抜いて首を一閃する。振り抜いた勢いを利用して、もう1体の顔に迫る。

左脚を戻し、今度は右脚を大鎌に変えて後ろ回し蹴りの要領で土魔獣の顔を横に一閃する。

「きひひいー快感だねえー！思いつきりい斬れるのはいいねえー！」

狂気的笑みを浮かべながら、右脚を戻して地面に下り立ち、走り出す。

その後も襲い掛かる土魔獣を一刀の元に首を斬り落としていく。

「ふはははは!!もつと来い!!鈍っていた我が刃を研ぐにはちょうどいい!!」

刃羅は高笑いをしながら、進み続ける。

もし梅雨達がその姿を見ていたならば、全力で殴りかかって止めたことだろう。

相澤達は施設に到着していた。

時間は13時半。

昼食を食べ終えて、外で待機する。

「……ねえ、イレイザー」

「なんですか?ピクシーボブ」

ピクシーボブが複雑な顔をして、相澤を見る。

その様子に相澤やマンダレイは首を傾げる。

「あの乱刀って子さあ……」

「乱刀……何か問題でも?」

「私の土魔獣を全部、首か顔を一撃で斬り落として、猛スピードで来るんだけど……」

「!?!」

ピクシーボブの言葉に相澤達は目を見開く。

「まあ、土魔獣だって分かってるんだろうけど。あまりに迷いが無いよ」

「……やはり影響は大きい、か」

相澤は腕を組んで顔を顰める。

マンダレイやピクシーボブも顔を顰めていると、

「みゞゞゞゞげゞだゞ!!」

「!!!!」

森から声が響き、相澤達は声が出た方向を向いて構える。

飛び出してきたのは、何かを口に啞えながら鬼のような形相で相澤達を睨む刃羅だった。

刃羅は相澤に向かって殴りかかる。

相澤達は飛び下がるが、刃羅は相澤だけを標的にして身を低くして迫る。

「獣か、お前は……!」

「グルルル!!」

相澤のツツコミに応えるように刃羅は唸りながら拳に蹴りを放つ。

相澤は『個性』を発動しているが、刃羅は始めから『個性』を使つてはいなかった。

「こいつ……!」

「グルグラー!!」

「本当に獣になってない!」

「どうするのイレイザー!」

マンダレイとピクシーボブはどう手を出せばいいのか判断出来ず、刃羅の周りを囲むように動いている。

相澤は捕縛武器を使い、刃羅を拘束しようとする。しかし、その前に『個性』が切れてしまう。

その瞬間、両腕を太刀に変えて捕縛武器を斬り散らす。

「ふあんほもふはひふえへんへ!」

「啞えてるの鳥じゃない!」

「本当に獣みたいな子だね!」

「いい加減満足したか?」

「むう……グルルル!」

「満足しないんだね!」

相澤を睨んで唸る刃羅だが、構えを解いて鳥を口から放す。

口周りと制服の胸元は血だらけだった。さらに足は裸足で泥だらけだった。

「調理場どこ!?お腹すいた!鳥捌きたい!」

「この子……どうなったらしいの?」

「……今分かんなくなつたところですよ」

ニパツ!と笑いながら鳥を掲げる刃羅に、マンダレイ達はガクッと肩を落とす。

刃羅はそんな相澤達にお構いなく動き回り、炊事場を見つけて鳥を

捌き始める。

「薪つてどこや？焼きたいねんけど」

「……ああ、そこだよ。火はいるかい？」

「用意してるべ」

スカートのポケットから取り出したのは、木の棒と板。

原始的な火おこし道具にマンダレイ達は唾然とする。

薪を持ってきた刃羅は指をナイフに変えて、1本の薪を細かく切り分ける。

さらに切り分けた薪をスパイラルカッターで削り、木くずや繊維状にする。

そして火を起こしていく。

「……最後は原始的だけど、ちゃんと『個性』使えてんだね」

「まあ、焼くのは鳥の丸焼きだけどね」

「……こんな生活よくしてたのか？乱刀」

「ん？まあな。ステインはあっちこっちどっか行くし、金なんかねえんだ。こういうことも出来なきや死んじまつかな」

木の棒に鳥を刺して、炙り始める刃羅。

胡坐を組んで火の前に座り込む刃羅の姿に、本当に自分達の想像が甘かったことを叩きつけられる相澤だった。

「それにしても、この森ちよつと動物や木の実が少なすぎませんこと？これだけ広さなのに猪や兎もいた形跡がありませんわ」

「……ああ〜土魔獣とかの訓練のせいかも」

「おかげで鳥1匹だけじゃのう。むう……まだ他の連中も来ぬようだし、狩りにでも行こうかのう」

「やめて頂戴」

「……仕方ないアルねえ」

鳥から目を離さずに考え込む刃羅にマンダレイ達が突っ込む。

相澤は手で目を覆い、言葉も出なかった。

鳥が焼けたのか、火から遠ざける刃羅。

それを見たマンダレイ。

「ああ。ちよつと待つてな。調味料を今……」

「ハグ……ング……ンマンマ……」

刃羅は焼き立ての鳥に齧り付き、目を閉じて味わう。

「……美味しい？何も味付けしてないわよ？」

「んぐ？肉の甘味で十分美味いでござるぞ？新鮮で脂ものっているでござるしな」

「……（プロよりもたくましいんじゃない？）」「」

刃羅の齧り付く姿に相澤達はもう言葉もなかった。

鳥を食べ終わった刃羅は腕で口元をぬぐって、火の始末をする。

「小官はどうすればいいでありますか？」

「……そうだな。施設で休んでいいぞ。他の奴らが来るまで着替えて待ってろ」

「どれくらいで来そうのおん？」

「まだ2、3時間はかかるだろうな」

「じゃあ、迎えに行ってくる！暇！」

「……別に構わんが……奴らが来たら飯は出るからな。鳥なんて捕まえるなよ？」

刃羅は相澤の言葉にシユバッと立ち上がり、森に向かって歩く。

呆れた目で刃羅を見送りながら、声を掛ける相澤。

その言葉に刃羅はしゃがみ込んで、指で地面をグリグリする。

「ぐずつ……なんだよお……危険回避したら放り込まれるしさあ……ぐずつ……自分で食糧調達したら引かれるしさあ……ぐずつ……食事抜きにしたのそっちじゃん……うう……」

「……捕まえる気だったのね」

「まあ、間違ってるわけでもないしねえ」

「はあ……」

マンダレイはその様子に刃羅がそれが目的だと悟り、相澤はため息を吐く。

「……分かった。ただ『イヤツフー……!!』し、生では食う……な……よ……」

相澤が渋々許可した瞬間、ハイテンションで森に飛び込み消えていく刃羅。

続けて話していた相澤の言葉は尻すぼみになっていく。

相澤の肩をマンダレイとピクシーボブが「ドンマイ」とばかりにポンポンと叩くのであった。

「そういえば……口元も服も血だらけのままで行ったけど……大丈夫？」

「……恐らくは」

緑谷達はすでにボロボロだった。

数は減ったが、土魔獣は時折出現していた。

「……腹減った」

「うつぶ……」

「お茶子ちゃん大丈夫？」

「ぐう……」

『個性』の使用し過ぎで体調を崩している者が多発していた。今も1体倒して、休憩していた。

「後どれくらいで着くの？」

「半分は来たはずですが……」

「まだ半分!」

「もう5時間経ったぞ……どこが3時間だよ……」

芦戸の言葉に百が悩まし気に応える。

それに瀬呂が目を見開き、切島がスマホを見て顔を顰める。

空腹と体力、気力の限界を迎えていたA組面々であった。

「!!足音だ!」

その時、障子が複製した耳で音を拾う。

「マジかよ!」

「無限ポップにも程があんだろうがあ!!」

その事実には瀬呂と峰田が叫ぶ。

「数は!」

「近づいてくるのは1体だけだ!」

「その周りに数体いる……けど……」

「どうしたの？響香ちゃん」

「足音が減ってる？」

飯田が立ち上がりながら、障子に数を確認する。

障子がそれに応え、耳郎がプラグを地面に挿して音を確認しているが、首を傾げる。

梅雨が質問すると、耳郎が訝しみながら口にする。

しかし、確かめる前に土魔獣が姿を現す。

「来るぞ!!」

「くっ！まずは目の前の事に集中しよう！」

飯田の号令に動こうとする面々。

飯田、緑谷、爆豪が飛び出そうとした瞬間、

「っ!?待て！何かが高速で接近中！」

「増援かよ!?!」

「いや、足音が違うよ！」

「はあ!?!なんだよそれ!?!」

「切島君！来るよ！」

「っ!?!」

障子と耳郎の報告に切島が混乱する。

しかし緑谷の声に、土魔獣に意識を戻す。

土魔獣が駆け出して、緑谷達に攻めかかろうとする。

その土魔獣の首元に、真横から何かがもの凄い勢いで突き刺さる。

「!?!」

接近戦を仕掛けようとしていた緑谷、飯田、爆豪は目を見開いて足を止める。

土魔獣の首元に突っ込んだのは、銀色の髪をした人だった。

「乱刀!?!」

「!?!ええ!?!」

複製した眼で姿を捉えた障子が声を上げる。

それに全員が目を見開く。

土魔獣は首と胴体が分かれて崩れ落ちる。

飛び掛かった刃羅は飛び上がって、木の枝に飛び移る。

その背中と口元には何やら茶色いものが見える。

「刃羅ちゃん！無事だったのね！」

「良かったですわ！」

「けど……あいつ、何背負ってんだ？」

梅雨と百が安堵の表情を浮かべる。

瀬呂や切島は刃羅の背中のものに目が行く。

刃羅が枝から地面へと飛び降りる。

全員がそこに近づくと、鳥を啜えて口元と胸元を真っ赤にした刃羅がいた。

「二「ぎゃあああああああ!?」」

その姿に芦戸、葉隠、耳郎、麗日、口田が悲鳴を上げる。

飯田や緑谷、轟達も刃羅の姿に後退る。

百は悲鳴こそは上げなかったが、口元を押さえて顔を真っ青にする。

「ら、乱刀さん!?だ、大丈夫!？」

「ぶは。それはこっちのセリフじゃわい。まだこんなところにおったのか?日が暮れてしまうぞ?」

緑谷が慌てて安否を尋ねると、刃羅は鳥を口から放してジト目で緑谷達を見る。

「まだって……」

「乱刀くん!!君こそ一体どこに行っていたのだ!!心配したんだぞ!!」

「どこって施設に決まっとるやないか」

「二「え!?」」

刃羅の言葉に全員が目を見開く。

「刃羅ちゃん。施設に辿り着いてたの?」

「13時半くれえにな。で、待つの暇だったし、腹減ったからよ。狩りのついでに、探しに来てやったぜ」

「13時半!？」

「しかも狩りって……」

梅雨の言葉に刃羅は胸を張って語る。

その言葉に緑谷が驚き、他の者達も目を見開く。

「まあ、いい。おい、轟」

「……なんだ？」

「ちようどいいのである。火を貸すのである」
「なんでだ？」

「こいつらを捌いて食うからに決まっています！」

轟の言葉に刃羅は手に持っている鳥と背中に蔦で縛った猪を下ろす。

その言葉と死体、刃羅の血まみれ姿に顔を真っ青にするA組面々。

その様子に首を傾げる刃羅。

「どうしたでござるか？」

「マジでここで食べんの？」

「狩ったばかりで、血抜きも終えてる新鮮な肉だぞ？いらんのか？腹は空いていないのか？」

「減ってるけど……」

「お前達のペースでは後2時間はかかるわよおん？保つのおん？それにいん焼鳥、焼豚は美味しいわよおん？」

『う……ゴクリ……』

刃羅の言葉に唾を飲み込む一同。

「別に貴官達が捌け、などと言うつもりはありません！小官は唯、火が欲しいだけです！分けて欲しいかどうかは出来てからでも聞くのであります！」

そう言うと、刃羅は薪になる枝や焚火のための石を拾い始める。

それに緑谷達は顔を見合わせる。

すると、梅雨も石や枝を集め始める。

「刃羅ちゃん。枝や石はこれでいいかしら？」

「ん？えつとねえ、枝はあそれでいいよお。石はあ出来れば平坦な面があればいいなあ」

「分かったわ。他には何かあるかしら？」

「大丈夫。あく、集めたのくそこに置いといてく」

「ケロ」

石や枝を集めた刃羅と梅雨は、石を積み重ねてその中に枝を敷く。

2人でちらりと轟を見る。

目が合った轟はゆつくりと歩み寄る。

「ここでもいいのか？」

「うむ。助かるのじゃ。いちいち擦って火をつけるのは面倒でう」

「まあな」

「ねえ！刃羅ちゃん！私は!?出来ることある!？」

「俺も!」

「俺も俺も！肉食いてえ!」

梅雨と轟の行動に他の者も手伝いを申し出る。

梅雨はニコニコと微笑んでいる。

「水って見いひんかった？流石に血塗れの肉は嫌やろ？」

「見なかったなあ。障子い、耳郎う。水って近くにあるか分かるか？」

「ここからは見えないな」

「うん。水の音もしない」

「俺の氷を使えばいいんだが……」

「でしたら私が鍋を出しますわ。それに氷を入れて水にしましょう」

「ヤオモモと轟サイキョー!刃羅もサイキョー!」

百が鍋を創造して、そこに轟が氷を生み出す。

炎を出して、氷を一気に溶かしていく。

「よし。では、先に猪を捌く。グロいから見たくない奴は離れてろ」

「」「了解!」「」

ドピュン!と梅雨と刃羅を除いた女子がダツシユで離れて木の陰

に隠れる。

それに口田や青山、緑谷も付いて行く。

「梅雨様はよろしいのですの?他の皆様も」

「ケロ。大丈夫よ。それにちよつと興味もあるの」

「俺も俺も!」

「滅多にそのまま解体なんて見られねえもんな」

「吐くなら離れるべよ」

刃羅の言葉に頷く見学人達。

刃羅は右腕を刀に変えて迷いなく捌き始める。

グジュ！ブチュグチュ！プシュ！ゴリゴリ！
生々しい音が森に響く。

離れている面々は音だけでも顔を真っ青にする。

「うっわ……内臓グロお」

「結構食べられるのって少ねえんだな」

「弱肉強食」

「ほい、これ洗って！」

「あいよ！」

「ボアはジ・エンド!!ネクストはバード！」

「おおく！すっげえ！」

「猪は百が作ったクシで焼き始めるアル。味付けはないアルよ」

「二十分！」

「あいつら呼んでくる！」

上鳴が避難したメンバーを呼びに行き、ワイワイと焼き肉を始める

A組。

鳥も捌き終え、焼き始める刃羅。

鳥は全員は無理なので轟、百、刃羅で分けることになった。

「んめえ!!」

「調味料使ってねえのにな！」

「おいしく！」

「これで頑張れるぞ〜！」

「マジ助かったー！」

笑顔で食べる面々。

爆豪だけ終始しかめっ面でいたが、さりげなく解体を見学していた。

刃羅は梅雨と一緒にハグハグと肉を頬張る。

梅雨や百は刃羅がどうしていたのか質問していた。

話を聞いて呆れていたが。

「バスの上に逃げるって……」

「アリなの？」

「ナシだったから、捕まって放り投げられたんじゃないの？」

「それで1人で森を移動して、昼過ぎに着いたんだから凄いやね」
「しかも鳥を食べた後に、猪と鳥を捕まえて、ここまで来るなんて……」

「私達は何て情けない……」

「19倍なのにね」

刃羅はハグハグと頬張りながら、百達に首を傾げる。

「でも、この中で森で過ごしたことがある人なんているのか？」

「いなさそうだよね」

「経験があるかないかは大きいのです。森を移動するのは」

「しかも土魔獣もいるもんね」

肉を食べ終わり、後片付けをする。

鍋とクシは百に風呂敷を出してもらい、刃羅が担ぐ。

「乱刀くん！やはり鍋は俺達が持つべきだ！」

「あ！構やしねえ！」

「しかし！」

「てめえらはまず施設に着くことに集中しろや！道案内はしてやるが……」

飯田の言葉に頷く男子陣だが、刃羅はそれを歌舞伎ながら拒絶する。

それでも粘る飯田だが、突如刃羅が飛び上がり、木の枝に上がる。

それを飯田達は唾然と見送る。

「気合を入れねば、置いて行くぞ！」

「マジかよ!?!」

「行くぞ！皆！置いてかれるぞ！」

どん！と移動を開始する刃羅。

それに急いで追いかける飯田達。

「肉食わせてもらった分は取り戻さねえとな！」

「頑張るぞー！」

「「おおー!!」」

ピョンピョン！と枝を飛び移る刃羅。

緑谷達はかなりの速度で走っているが、刃羅は緑谷達の様子を見な

がら余裕を見して移動している。

「凄い……！あんな身軽に……！」

「俺達だって本気で走っているのに！」

「森の中をく！走るコツはく！常に次の足場をく！確認することく！」

「次の足場を……」

「確認……」

「姿勢は出来れば前傾!!太ももを上げるのではなく、前に出す!足は開くな!進む方向にまっすぐ出せ!!」

「ぜ、前傾！」

「前に、まっすぐ……」

刃羅のアドバイスを復唱しながら走る。

「足場を探すのが難しいならば、列を組むのだよ!前の者が走ったところを走るといい!」

「なるほど」

「ちよ、ちよつと上鳴!あんた先に行つて！」

「分かったよ！」

「大丈夫?お茶子ちゃん」

「う、うん!大丈夫！」

慣れてきたようで少しずつ速度が上がる緑谷達。

しかし、そこに水を差す者が現れる。

土魔獣である。

「ほれ。お気張りやすく」

刃羅は眺めるだけのようだ。

「くっそがあ!!」

「行くぞ!!」

爆豪と飯田が飛び出して撃退する。

その後も追い打ちとばかりに土魔獣が連続で襲い掛かる。

それに再び容量限界を迎え始めるA組。

刃羅はそれを木の上から見守っていた。

「気張れやゴリアー！」

「刃羅ちゃん手伝って〜!」

「うっぷ……」

「お茶子ちゃん!頑張って!」

葉隠が叫び、麗日が口を押さえて顔を青くする。

「あ!仕方ねえくなあ〜!」

刃羅が飛び下りて、葉隠と麗日を抱える。

「うわあ!」

「わっちが運んだるよって。回復したら走りや。ほな行きまっせ。梅雨嬢ちゃん」

「ケロ」

ドピュン!と走り始める刃羅。

それに梅雨が付いて行く。

「あ。スカート押さえとくのです」

「きゃあ!」

「んお?梅雨ちゃん。背中に乗るべ。おいらまだ行けるべよ」

「ありがとう。刃羅ちゃん」

どんどんと抜き去っていく刃羅。

梅雨も刃羅の背中に張り付いている。

「はあ!はあ!3人抱えてんの!はあ!はあ!なんであんなに速ええんだよ!」

「まさに野生児」

「……いや、違うよ」

「緑谷?」

「凄く繊細な走り方してる。さっき言ってたアドバイスを実践してくれてるんだ。実際、麗日さん達にほとんど衝撃が行ってない」

「ケロ。緑谷ちゃんの言う通りよ。走ってるとは思えないほどよ」

砂藤が息を荒げながら驚き、それに常闇も頷く。

しかし緑谷がそれを否定し、隣で走る轟や飯田が目を向ける。

緑谷の推測に梅雨が頷き、実体験を話す。

それに抱えられている麗日も右手で口元を、左手でスカートを押さえながら頷く。

その後も30分程走る。

途中で葉隠、麗日は下ろされ、芦戸、耳郎が抱えられた。

梅雨も麗日と一緒に下りて、並走している。

「そろそろ自らの足で走るのである。吾輩、先に行っているのである」

「え？わあ!?!」

ポイツ！と上に投げられて、慌てる耳郎と芦戸。

直後、刃羅はドピュン！とスピードを上げて走り去っていく。

それを唾然と顔を引きつらせて見送る緑谷達。

「はは……バケモンかよ……」

「俺達も負けてられないぞ！」

「うん！頑張ろう！」

気合を入れ直す飯田達だが、土魔獣が現れて悲鳴を上げることになるまで後8秒。

16時半過ぎ。

相澤達は施設前で待機していた。

「B組もまだのようだな」

「そうだね。まあ、こんなものじゃない？1年生だし」

「1人規格外だったけどねって、帰ってきた！」

目の前の森から人影が飛び出し、相澤達の前で着地する。

刃羅である。

「ただいま！楽しかったし、美味しかった！」

「おかえり……」

「後1時間くらいで着くじやろ。『個性』使い過ぎなければじゃがの」

ニパツ！と笑顔で報告する刃羅に、苦笑して答えるピクシーボブ。

相澤に顔を向けて、肩を竦めて報告する刃羅。

「……ご苦労さん。で？美味しかったって何喰ったんだ？」

「猪と鳥でござる」

「……」

刃羅の血に汚れた服を見て、少し顔を青くするマンダレイとピク

シーボブ。

「……生か？」

「轟君を見つけたのでね。彼にご協力を申し出たのだよ」

「なるほどね。途中、動きが止まったのはそのせいか」

「イエア！」

刃羅の言葉に納得は出来た相澤達。

その後、余りにも汚れている刃羅は着替えるように言われ、ジャージに着替える。

そして17時20分。

空もオレンジ色に染まって、カラスの音が響く。

刃羅は近くの椅子で寝転がり、相澤達は立って森を見ている。

「おーやあつと来たにゃくん」

ピクシーボブの声に目を開けて、起き上がる刃羅。

森に目を向けると、ノソノソと歩いてくる人影が見えた。

「疲れとりますなあ」

ボロボロの飯田や梅雨達、森からゆつくりと歩いてくる。

「手助けがあつたわりには、随分とへロへロだねえ」

マンダレイは苦笑して、A組の面々を見る。

施設前に着いて、数人が座り込む。

「何が3時間ですかあ」

「悪いね。私達ならって意味。あれ」

「実力差自慢のためか……やらしいな……」

「もう腹減った。死ぬう」

「1人おかしな子もいたけどね」

「乱刀さんですわね……」

「暇だったアル」

「……なんでそこまで元気なんだよ」

梅雨に近寄りながら頭の後ろで手を組む刃羅に、呆れる百達。

「まあ、これで森での活動もある程度は理解出来ただろ。いい見本もいたようだしな」

「見習えるかは分からないですけどね……」

「とりあえずバスから荷物降ろせ。部屋に荷物運んだら食堂にて夕食。その後入浴で、就寝だ。本格的なスタートは明日からだ。早くしろ」

相澤の言葉にノロノロと動き出す一同。

「お腹減ったあ。足痛い」

「うう……」

「お茶子ちゃん。荷物運べそう？」

「……荷物少なくてよければよかったなあ」

「うちが運んだるわ。荷物どれやねん」

「マジで!？」

「でも、お肉まで頂いたのに……これ以上助けられてばかりでは……」
刃羅の提案に喜ぶ芦戸。しかし百は顔を顰めて申し訳なさそうにする。

刃羅はそれを無視して、ヒョイヒョイと女性陣の荷物を抱えていく。最後まで渋っていた百だったが、自身事抱えられそうになり、荷物を渡すことになるのだった。

A組女子に与えられた部屋はシンプルな和室で、七人分布団が敷かれていた。

寝るだけの部屋のためか、布団でほぼ部屋を占領されている。

「ほれ。後は自分達で整理するんじゃない」

「「ありがとー!」」

「ありがとね、刃羅ちゃん」

「いいよ」

「思ったより狭いのですね」

「合宿だし、相澤先生だし、こんなもんじゃない?」

「そうなのですか」

「寝るところあんだだけ十分だべさ。野宿させられたっておかしくねえべ、この森」

百が部屋の狭さに驚いていたが、耳郎の言葉に納得する。

そして刃羅の言葉にありえそうだと顔を青くする女性陣。

「あ。ご飯だっけー」

「そうだ！行こう行こう！お腹減ったあ〜！」

「刃羅のお肉なかったら、もつとヤバかったよね」

「本当ですわね。そうですね。乱刀さん、夜にでも森での活動方法について教えてもらえないでしょうか？」

「かまへんよ」

「ケロ」

ワイワイと話しながら食堂に向かう刃羅達。

こうして初日の苦行を突破したA組なのであった。

・新！刃格！

マムベリ（湾刀）：獣。お肉大好き。

#24 飯、風呂、おやすみ!

食堂にも山盛りの料理が並べられていた。

空腹の面々はゴクリと唾を飲み、急いで席に座る。

「美味そー!」

「もう我慢できねえ!いただきます!」

「いただきます!!!」

座つてすぐさま、両手を合わせて食べ始める切島。

それに釣られて他の者達も食べ始める。

「へえ、女子部屋は普通の広さなんだな」

「男子は大部屋なん?」

「ハグング……ンマンマ……麺モノねえか?中華ばつかなのに」

「見たい!ねえねえ、見に行つてもいい?後で!」

「おお。来い来い」

「ハグング……ンマンマ……麺モノは出ないのであるか?中華ばかりであるのに」

「魚も肉も野菜も……贅沢だぜえ!」

「ハグング……ンマンマ……麺モノなんででえへんの!?麺も中華やん!?!」

「おかわり!」

「ハグング……ンマンマ……麺モノ食べたい!中華は麺!」

「乱刀さん、この人数で麺類は無理ですわ。我慢してください」

「……びやあくん!!私のカップラーメン!」

「どしたん?刃羅ちゃん」

「刃羅ちゃん、カップ麺持つてこようとして流女将さんに没収されたみたいなの」

「ああ……」

ワイワイと食べるA組と、いつの間にかいるB組。

1人端っここで泣きながら食べている者がいるが、いつものことと周囲の者達からは相手にされなかった。

「色々世話焼くのは今日だけだし。食べれるだけ食べな」

『はいーい!』

ピクシーボブの言葉に笑顔で答える生徒達。

刃羅達のテーブルの空皿を回収して、追加を持ってきたピクシーボブが泣いている刃羅に気づく。

「はい、追加だよって何で泣いてんだい?この子」

「麺類が異常に好きでして……カップ麺持ってこようとしたんですけど、没収されたみたいで」

「なるほどね」

「ぐずつ……麺……うぐつ……猫おばちゃんぶぎゅ!?!」

「お、ね、え、き、ん!!心は18!!」

刃羅が泣きながらピクシーボブの裾を掴むが、「おばちゃん」呼びした瞬間に猫の手グロブで顔を掴まれる。

ピクシーボブは凄みながら強調するが、刃羅は逆に裾を強く握り返す。

「めゝん!!めゝん!!めゝん!!」

「ちよ、ちよつと!?!」

「刃羅ちゃん!どうどう!」

「なんという執念……」

「乱刀くん!!迷惑を掛けるのは止めるんだ!」

「めゝんゝゝゝ!!」

掴まれた顔を逆に押し返しながら叫ぶ刃羅。

流石にピクシーボブも慌てて離そうとするが、逆に腰を掴まれる。

それに反対側にいた麗日が制止し、刃羅の隣にいた百が呆れる。

麗日の隣にいた飯田が注意するが、刃羅はさらに腰を強く掴む。

騒動に気づいた相澤がユラリと近づく。

「乱刀……実は流女将からカップ麺を預かっているんだが……」

「麺!!」

相澤が呟いた瞬間、刃羅はピクシーボブから腕を話して相澤の前に跪く。

大きく開いた目に、妙にキラキラとした瞳が見えて、相澤達は刃羅の尻に大きく振られた尻尾が見えた。

その姿に相澤はため息を吐き、刃羅の頭を右手で掴む。

「ぬ？」

「……ただし……迷惑を掛けるなら俺達で食べてくれて構わないとのことだ」

「ノオーウ!!」

「なら、大人しくしてろ」

「了解であります!!」

ビシイ!と敬礼して席に戻る刃羅。

再びため息を吐き、自分の席に戻る相澤にマンダレイが声を掛けてくる。

「お疲れさん。大変だねえ」

「……マンダレイ」

「なんだい？」

「車、貸してもらえませんか？」

「はあ? どうして?」

相澤の要望にマンダレイは首を傾げる。

生徒を放り出してまでどこに行くなど相澤の性格からしては考えられない。

相澤は盛大に顔を顰めて、

「カップ麺……買いに行かないといけないんで……」

「……私らが行くよ」

「流女将にも連絡しないとイケないんで」

「それも私がやるよ。あの人とは私らもお世話になってるから、電話越しだけど挨拶とあの子の事聞いときたいし」

「……すみません」

相澤はマンダレイに頭を下げる。

それにマンダレイは苦笑して、ポンポンと肩を叩き、配膳に戻る。食事を再開した相澤に、反対側に座っていたB組担任のブラドキングが労し気に声を掛ける。

「大変だな」

「はあ……奴は暴れさせると何が飛び出るか分からん」

『個性』抜きにしても体術、格闘術はプロ並みのような」

「ああ」

うんざりとした顔で食事を続ける相澤。

その後、流女将から電話があり『……本当にごめんなさい』と謝られて、愚痴とばかりにバスの中でのことや森の事も報告し、今後の方針を話し合うことになるのだった。

その後、入浴となり風呂場に向かう刃羅達。

「凄いねー！……温泉まであるなんて！」

「最高だねえー！」

笑顔で服を脱ぎ始める女子達。

服を脱いで洗い場に向かおうとすると、芦戸や耳郎が百と刃羅を交互に見て、自分の体を見下ろす。

その様子に麗日や梅雨が首を傾げる。

「どうしたん？」

「いや……やっぱりヤオモモと刃羅の身体つきエロイなって」

「……まだ言うてるんかい」

「改めて裸で並ばられるとき」

「妙に対照的な感じだしね。比べちゃうんだよ」

銀の髪に、筋肉質ながらも胸も大きく女性のしなやかさも維持している女豹を思わせる刃羅。

対して黒の髪に、柔らかそうな肌に大きな胸とスタイルをしている百。

雰囲気も生き方もほぼ真逆の2人が裸で並ぶと、互いに際立たせて存在感が物凄かった。

背も高いこともあり、発育の理不尽さを感じるのであった。

その後、体を洗い泥などをしっかりと落とし、湯船に浸かる。

「はあく……生き返るく」

「気持ちいいねえ」

「んあく……」

「寝ちや駄目よ、刃羅ちゃん。それに髪がお湯に着いちやうわ」
「ういゝ……」

「今日は良く寝れそうやねえ」

「あれだけ森の中を歩きましたものね」

「気持ち良さそうに目を閉じて、体を蕩けさせる刃羅達。」

刃羅は髪を結わずに湯船に浸かり、梅雨が刃羅の後ろに回り髪を結いてあげている。

「刃羅の髪って本当に硬そうだね」

「硬そうじゃなくて硬いわ。刃羅ちゃん、トリートメントしたの？」

「なにそれえ？」

胡坐を組んで猫背になっている刃羅の背中越しに梅雨が問いかけるが、それに刃羅は首を傾げる。

その答えに衝撃を受けた梅雨達はザバア！と刃羅を総出で抱え上げて洗い場に連れて行く。

「おおおお!?!」

「駄目だよ！刃羅ちゃん！この髪を雑に扱っちゃあ！」

「体育祭の時はデクくんにめっちゃ怒ったやん！」

「ええゝ……別にゝいいよゝ」

「じつとしてちようだい」

「……分かったのです」

「私のを使いますか？」

「ヤオモモの高そうだから止めてあげて」

「……そうですか」

「ケロケロ。今回は百ちゃんの使いましょ。明日は私のを使うわ」

「はいー!」

「明日もあんのん!?!」

百が持参した明らかに高級感溢れるボトルを受け取り、刃羅の髪に使用する梅雨。

刃羅はブスツと不貞腐れたように大人しく座って、されるがままになる。

その様子に梅雨達はクスクスと笑う。

そしてトリートメントを使用した結果、刃羅の髪はツヤツヤのキラキラになった。硬さも幾分かマシになり、簡単に纏められるようになった。

「おお……柔らかい！」

「綺麗ですわ！」

「いつもどうやって手入れしてたの？」

「水」

「それは駄目よ。刃羅ちゃん」

再び湯船に戻り、のんびりする一同。

その時、

『峰田くん止めたまえ!!君のしていることは己も女性陣も貶める恥ずべき行為だ!!』

男風呂の方から声が響いた。

「飯田の声?」

「峰田って言ってたよね?」

「ということは……」

「覗く気なのね」

「任せるのです!」

「鎖鎌!?!」

呆れたように顔を見合わせる梅雨達。

刃羅は右腕を鎖鎌に変えて、頭の上で振り回す。

『壁とは超えるためにあるんだよお!!Plus Ultra!!!』

峰田の声が響く。

刃羅が鎌を投げようとした時、梅雨が舌を伸ばして刃羅の顔を覆って妨害する。

「むぼお!?!」

「ケロ。流石に駄目よ」

刃羅は腕を戻して、湯船に倒れ込む。

すると、壁の上に帽子を被った少年、冼汰が現れる。

「あの子って……」

冼汰は男風呂側に向かって手を振り、何かを叩く。

「ヒーロー以前に人のあれこれから学び直せ」

『くそおガキイイイ!!?』

どうやら女の敵は撃退されたようだ。

「やっぱり峰田ちゃんサイテーね」

「ありがと！洗汰くん！」

芦戸が洗汰に礼を言うのと、洗汰は振り返り女風呂を見る。

「わっ………あ………」

洗汰は顔を真っ赤にして仰け反り、後ろに倒れていく。

「え!?わっ!?洗汰くん!!」

「ぬう！」

「刃羅ちゃん!？」

芦戸が慌てるが、その横を刃羅が飛び出し、壁に飛び掛かる。

両腕を鎖鎌に変え、男風呂側に頭から落ちかけた洗汰に鎖を絡みつける。

そして足先を刃に変えて壁に突き刺し、体を固定する。

「セーフ!…:…:なのですか?」

「乱刀さん!…:うん!大丈夫!」

緑谷の声が下から聞こえて、覗き込む刃羅。

下では緑谷が洗汰の頭の下に腕を伸ばして待ち構えており、洗汰はその手のすぐ上でぶら下がっていた。

緑谷は顔を覗き込んだ刃羅を見た瞬間、顔を真っ赤にして顔を背ける。

「おお!間一髪なのです!」

「ら、らら、乱刀さん!?ちよ、ちよつとその姿勢は……:!!?」

「??」

緑谷の言葉に不思議そうに首を傾げる刃羅。

刃羅は完全に男風呂側に両腕を投げ出している。胸は洗汰が潜んでいた隙間に隠れて見えていないが、明らかに裸だと予想出来る刃羅の姿に、緑谷を始め男性陣は顔を真っ赤にしてガン見するか、目を背けるかに反応が分かれる。

「鎖を解くのです。ちゃんと掴むのです」

「は、ははは、はいい!!」

「放せ飯田ああ!! タオルを除けろおお!! 乱刀の裸ああああ!!!」

「だ、駄目に決まってるだろう!! 大人しくしないか! み、緑谷くん! 早く従甥くんを!!」

「う、うん!」

素っ裸で暴れる峰田の顔にタオルを押し付けて抑え込み、顔を真っ赤にして目を閉じたまま緑谷に声を掛ける飯田。

それに緑谷も大急ぎで洗汰の体を支える。

それを見た刃羅は両腕を元に戻す。

「後は任せっぞ?」

「は、はい!!」

「は、早く戻り給え! 乱刀くん!!」

「ほいほい」

「ま、ままま待て待て!?! 乱刀!! そのままだと見える! 胸が見えそう!!」
飯田の言葉に頷いて戻ろうと体を起こそうとした刃羅に、切島が顔を背けながら叫ぶ。

「見なければよいだけじゃろうに。まあ、数名凝視しとるがの」

切島の言葉や刃羅をガン見している上鳴、瀬呂などの姿に呆れる刃羅。

その時、刃羅の背中にタオルが掛けられ、その上から梅雨の舌が巻き付き、刃羅の胸元を隠して思いつきり引っ張られる。

「ワーーーーオウ!?!」

刃羅は悲鳴を上げながら湯船に落ちる。

姿が見えなくなった刃羅に男子陣は緊張を解いてため息を吐く。

「はあく……ヤバかったあ……ん? あれ? これって俺らが乱刀に覗かれてねえか?」

「は!! な、なんと言うことだ! 乱刀くん!! 覗きは駄目だぞ!!」

「いい加減離せえ!! あいつが覗いたんだから、俺も覗き返すのが礼儀ってもんじゃねえか!! 行かせろおお!!」

「……」

「どうしたのだ？障子」

「……少し見えたかもしれん」

「「なにい!?!」」

障子の言葉にガバア!!と障子に振り向く男子陣。

障子は身長が高く、立っていたため、刃羅が覗き込んだ時に一瞬ピンク色の何かが見えた気がしたのだ。

黙り込んで湯船に浸かる障子に、峰田が血涙を流しながらゾンビのように近寄っていく。

「その記憶を……寄越せえ……」

「無茶を言うな。それに気のせいの可能性もある」

「うるっせええええ!!見えたかもしれんだけどでも許せるかああああ!!」

「落ち着けて峰田」

「てめえらは乱刀の素肌見てんだろうがあああ!!俺は見てねえんだよおおお!!」

あまりの峰田の叫びに若干気の毒な気がしないでもない男子陣。

そのせいか目撃した男子陣の頭に、先ほどの刃羅の姿を思い出して顔を赤くする。

「プールとかでも濡れた姿見てんのかな。湯気のせいかな?妙にエロかったよな」

「それな!」

「……煩惱滅却」

「それにしても乱刀は全く恥ずかしがらなかったな」

「それな」

「俺達って魅力ねえのかな?」

その後も悶々と語る男子陣だった。

一方、湯船に落とされた刃羅は梅雨の舌が首に巻きつけられたまま湯船に浸かっていた。

「……そろそろ外して頂けませんの?」

「駄目よ」

「まあまあ梅雨ちゃん。洗汰くんを助けるためだったんだしさ」

芦戸が梅雨を宥める。

それに梅雨は悩まし気に眉を顰めて、舌を外す。

「それにしても、思いつきり男風呂覗いたよね。刃羅」

耳郎の言葉に刃羅以外の全員が頷く。

刃羅は腕を組んで、顔を顰める。

「男の裸を見た程度で騒ぎ過ぎなんだよ」

「「いやいやいや!!」」

耳郎、葉隠、芦戸が顔の前で手を振る。

百と麗日は顔を真っ赤にして、俯いている。

「そろそろお出よお。次はあB組でしょお?」

「そ、そうですわね!行きますよう!」

ここぞとばかりに百が立ち上がり、脱衣所に向かう。

それにゾロゾロと続いていく刃羅達。

体を拭きながら、芦戸が刃羅に声を掛ける。

「ねえ刃羅」

「なんや?」

「……見た?男子の……」

「何をじゃ?」

「な、何って……!?!」

キョトンと首を傾げる刃羅に芦戸が顔を赤くしてウジウジする。

刃羅以外の女子は芦戸が何を聞きたいのか気づき、顔を赤くする。

それに遅れて漸く刃羅も気づく。

「ああ……チン『わーわーわー!!』もぐー!」

耳郎が顔を真っ赤にして叫びながら、刃羅の口を押さえる。

すぐに放されたが。

「別に気にしてなかったのね。誰が湯船にいたのかも覚えてないのだよ」

「そ、そうだよね!」

「た、助けるので一杯一杯だったよね!」

顔を真っ赤にして刃羅の言葉に相槌を打つ芦戸達。

着替え終えて、外に出ると丁度男子達も脱衣所から出てきた。

ちなみにジャージではなく、各々の身軽な私服である。

『……』

何故か黙り込む一同。

そこに遅れて刃羅と梅雨も脱衣所から出てきた。

「どしたアルか？」

「何かあったの？」

「な、なにもないよー！」

「お、おお！何も無いぜー！」

首を傾げる刃羅と梅雨。

それに芦戸と切島が引きつかせた笑みで否定し、他のクラスメイト達も頷く。

そこに上鳴がスツと手を上げる。

「あ、あのさあ乱刀……」

「あんだよ？」

「だ、誰かのさあ……見た？」

「「「!?」」」

上鳴の言葉に男女関係なく緊張が走る。

それに刃羅は呆れた顔をして、

「見たかもしれんが……興味もない奴の裸など覚えてるわけないだろうが」

『ぐべら!?』

刃羅の言葉に胸を押さえて崩れ去る上鳴を始めとする男子数名。

それを見下ろす刃羅は、

「どうでもええ男の裸程度で恥ずかしがるわけありませんよって」

『もうやめてええ!?!俺達が悪かったですうう!!』

「哀れ……」

更に止めを刺したのであった。

常闇が腕を組んで無念そうに呟き、口田が頷く。

自分達も同じ様に盛り上がっていたこともあり、崩れ去った男子達に同情する芦戸達。

そこに障子が前に出る。

「どうしたでござるか？」

「……いや、確信があるわけではないが、もしかしたらお前の胸を見たかもしれない。すまん」

複製した口で話し、頭を下げる障子。

それに刃羅は首を傾げる。

「別にい謝ることじゃないよお？ 偶々あ見たくらいでえ」

「それでもな」

「では、これで許すのである」

「感謝する」

刃羅はポンポンと障子の腕を叩く。

障子はそれに軽く頭を下げて、去っていく。

「吾輩達も部屋に戻るのである」

「そうね」

「どんまい上鳴」

「どんまい！」

刃羅はもはや崩れ去る男子に見向きもしなかった。

それを梅雨、麗日、百が憐れむように見つめながら付いて行き、芦

戸、葉隠、耳郎が上鳴の背中をポンと叩いて去っていく。

「ちくしょー！！」

上鳴の叫びは合宿所に悲しく響き渡るのであった。

部屋に戻った女性陣は布団を決めて、体を投げ出すのであった。

「ふわ〜！ 布団サイコー！」

「皆と一緒に寝れるなんて楽しいよね」

「トランプ持ってきたよ！」

「流石！」

葉隠がトランプを取り出して、盛り上がる芦戸達。

刃羅は窓側の布団を陣取り、今は窓を開けて窓辺で涼んでいる。

コンコン！

そこにノックが響く。

「はーい！」

『マンダレイだけど、入っていいかしら?』

「は、はい!どうぞ!」

突然のプロヒーローの来訪に驚く芦戸達。

麗日が扉を開けて、入ってきたマンダレイはヘッドセットを外していた。

「悪いね、突然」

「いえいえ!」

「それで、どのような……」

「刃羅ちゃんだっけ? 洗汰を助けてくれたお礼とコレ」

首を傾げて用事を尋ねる百。

マンダレイは刃羅に顔を向けて、理由を話しながら手に持っているものを掲げる。

それを見た瞬間、刃羅は目を見開いて、マンダレイの目の前に飛び出す。

「ラーメン!!」

マンダレイが持っていたのはカップ麺だった。

刃羅はキラキラと目を輝かせながら、マンダレイを見上げる。

それにマンダレイは苦笑しながらカップ麺を渡す。

「お湯!お湯!」

刃羅は部屋に備え付けられたポットに駆け寄る。

しかし、顔に梅雨の舌が巻き付けられて後ろに倒れる。

「へぶ?!」

「まだマンダレイさんのお話が終わってないわよ。刃羅ちゃん」

「ああ、いいよ」

「洗汰くんは大丈夫なんですか?」

「うん。落下の恐怖で失神しただけ。すぐに目を覚ますよ」

「よかった〜」

「悪いね。心配かけちゃって」

「いえ!?元はと言えば峰田さんが悪いので!むしろ、こちらが謝りませんと!」

『うんうん』

芦戸が心配そうに洗汰の事を尋ね、マンダレイの説明にホツとする。

苦笑してマンダレイが謝罪するが、それに百が慌てて否定し、麗日達が同意して頷く。

その間、刃羅はカップ麺の包装を外し、お湯を入れる準備をしていた。

「それじゃあね。明日も早いから、早く寝なよ」

『ありがとうございませす！』

「お湯〜！」

マンダレイが去っていき、刃羅以外の女子は頭を下げる。

刃羅はお湯を注ぎ、割り箸を割って、出来上がりを待っている。

その様子を百達は呆れたようにため息を吐く。

「マイペースにも程がありますわね」

「プロヒーローの前でよくあんな態度取れるなあ」

「爆豪よりも大物になりそうだよね」

刃羅はカップラーメンを持って、先ほどまでいた窓際に戻る。

そしてしゃがんだ姿勢でカップ麺を食べ始める。

「ふ〜、ふ〜……ズズズ……ンマンマ……んふ〜♪」

カップ麺を幸せそうに食べる刃羅の姿に、梅雨達は顔を見合わせて笑う。

その後はランプをして盛り上がる梅雨達。

刃羅はカップ麺を食べながら、その様子を眺めていた。

21時を過ぎて、明日は5時過ぎに起床・集合であることや疲れから眠気が襲ってきたため、早めに就寝することにした。

そして電気を消し、布団に潜り込む一同。

1時間もせぬ間に全員が寝息を立て始める。

刃羅唯一人を除いて。

施設全体が寝静まった深夜。

「ん……ケロオ……」

梅雨はふと目を開ける。目を擦りながら、起き上がる。どうやらトイレのようだ。

梅雨は暗闇に目が慣れてきたので周囲を見渡すと、

「ケロ？・刃羅ちゃん？」

自分の向かい側に寝ていた刃羅の姿が布団になかった。

キョロキョロと部屋の中を見渡す。

すると、部屋の角に掛け布団が盛り上がっているのが見えた。

掛け布団に近づいて中を覗くと、その中には刃羅がいた。

足を抱えている状態で座っており、その上から掛け布団を被って体を隠すように寝ていた。

「……ケロオ……」

その姿に梅雨はバスの中での話を思い出した。

刃羅の前に座り込んでしまい、ポロポロと涙が流し始める梅雨。

先ほど布団で横になっていたのは、梅雨達を心配させないようにするためだった。

だから皆が寝るまで我慢していたのだ。恐らく、それまでは気が気でなかっただろうと梅雨は思う。

「……私は刃羅ちゃんに何をしてあげられる？どうすれば刃羅ちゃんを助けてあげられる？」

寝ることすら、寝ている時でさえ気を抜けない刃羅。

安心して寝れるにはどうすればいい？自分には何が出来る？

考える梅雨だが、何も解決策は浮かばない。

「ケロオ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

無力な自分が情けなく、無意識に謝罪の言葉が出る梅雨。

その後も泣き続け、泣き疲れたのかいつの間にか寝てしまっていた。

しかも布団に戻った記憶がないのに、なぜか布団で横になっていた。

それに首を傾げるが、百達に聞いても誰も知らなかった。

ということは刃羅しかいないのだが、梅雨は聞くことが出来なかつ

た。

梅雨は色々悶々と抱えたまま、2日目を迎えるのであった。

#25 『個性』を鍛えろ！

合宿2日目。朝5時30分。

A組一同はジャージに着替えて、寝ぼけ眼で外に集まっていた。

「お早う諸君」

相澤は変わらぬテンションで挨拶する。

「本日から本格的に強化合宿を始める。今合宿の目的は、全員の強化及びそれによる仮免の取得。具体的になりつつある敵意に立ち向かうための準備だ。心して臨むように」

相澤の言葉にゴクリと息を飲む緑谷達。

「というわけで爆豪。こいつを投げてみる」

相澤がボール状のものを爆豪に手渡す。それは体力テストの時のソフトボール投げに使ったものだった。

「前回の入学直後の記録は705・2m……どれだけ伸びてるかな？」

「おお！成長具合か！」

「この3か月色々濃かったからな！1kmとか行くんじゃねえの!?」
「いったれバクゴー！」

爆豪は前に出て、肩を回してほぐす。

「んじゃ、よっこら……くたばれ!!!」

物騒な言葉を叫びながら爆発と同時にボールを投げる。

ボールは空高く飛んでいく。

そして相澤の持つ端末に結果が表示される。

「709・6m」

「!!?」

「あれ？思ったより……」

結果に爆豪はもちろん全員がほとんど結果が変わらないことに騒めく。

「約3か月間。様々な経験を経て、確かに君らは成長している。しかし、それはあくまでも精神面や技術面、後は多少の体力的な成長がメインで『個性』そのものはそこまで成長していない」

相澤の言葉に目を見開く一同。

「だから、今日から君らの『個性』を伸ばす。死ぬほどきついが……くれぐれも死なないように」

ニヤッと笑いながら相澤が告げる言葉に、緑谷達は息を飲んで顔を青くする。

「それでは特訓場所に移動する。ついてこい」

相澤が背を向けて歩き出し、それに全員もオドオドと付いて行く。

「死ぬほどきついって……!」

「な、何するんだよ……!?!」

「ふわあく」

「余裕そうだね!?!刃羅」

「んあく……ねむく……」

刃羅はあくびをしながらフラフラと歩く。

その呑気な姿に耳郎や上鳴は苦笑する。

移動した先は開けた岩場だった。

「それにしても……こんなにバラバラの『個性』をどうやって鍛えるんですか?」

「そうだよな?体を鍛えて強くなる『個性』だけじゃねえし」

切島と瀬呂の言葉に全員が頷く。

「だからここで、彼女達だ」

「そうなの!!あちきら四身一体!!」

相澤の後ろに4つの人影が現れる。

「輝く瞳でロックオン!」

「猫の手助けやってくる!」

「どこからともなくくやってくる!」

「キュートに!キヤットに!ステインガー!」

「ニ「ワイルド・ワイルド・プッシューキヤッツ!!」「ニ」

ビシイ!とポーズを決めるマンダレイ達。

再びポカンとするA組面々。

「あちき『ラグドール』の『個性』《サーチ》!見た人の情報100人まで丸わかり!居場所も弱点も!」

「そして私『ピクシーボブ』の《土流》で各々の鍛練に見合った場を形成！」

「私『マンダレイ』の《テレパス》で一度に複数の人間にアドバイス！」
「そこを我『虎』が殴る蹴るの暴行よ！」

「最後『個性』関係ないやんけ」

虎の言葉に刃羅が突っ込む。それに他の者も同意するように頷く。
最後の一言で一気に凄さが無くなった気がする一同だった。

「この広範囲をカバーできる4名と俺達担任で短期の底上げを行う。
では、これより俺達が考えた特訓内容を伝える」

相澤がリストを取り出す。

「青山。お前は連続でレーザーを発射し続ける。トイレは用意してある。腹の痛みに慣れるのと射出時間を伸ばす」

「地獄☆」

「芦戸。溶解液を長時間使用して皮膚の耐久度を強化」

「は、はい……！」

「蛙吹は壁を登って舌の筋力と跳躍力を鍛える」

「ケロ」

「飯田は走り込みだ」

「はい！」

「麗日はゴムのボールに入って、身体を浮かしたまま転がり三半規管を鍛え、酔いにも慣れてもらう」

「は、はい！」

鍛練内容に顔を真っ青にする芦戸と麗日。

その後も一人一人に指示を出していく相澤。それに一喜一憂するA組面々。

「八百万。お前は砂藤同様甘いものを食べながら、並列して創造し、クオリティと種類の拡大を目指してもらう」

「わ、分かりました」

「最後に乱刀。お前は走り込みと同時に刃を形成する速度と範囲の拡大だ」

相澤の言葉に首を傾げる刃羅。

「同時にけ？」

「そうだ。途中でピクシーボブが作った土人形がお前に襲い掛かる。それを武器を作らずに倒せ」

「……筋力、体力も鍛えながらってことか」

「そういうことだな。流石に武器を増やすわけにもいかん。武器を2種類出すにしても、まずは基礎を重点にすることにした」

「……まあ、ええか。微妙な氣いしよるけど」

刃羅は効果があるのか訝しむが、指示に従うことにする。

(……やはり自分の『個性』の鍛え方は熟知しているか)

昨晚、マンダレイや流女将と電話で鍛練法について話し合っていた相澤。学校でも刃羅の『個性』の方向性について話題になっていた。

刃羅の『個性』は体育祭で刃羅本人も話していたが、殺傷力しかないヴィラン向きである。武器を増やすのはあまり意味はない。2種類出させるにしても、今回の趣旨とは違うように思えたのだ。

なので、あくまで本来の『個性』の使い方に注目し、そこを強化することに決めたのだった。

「では、それぞれの場所に移動して開始だ。手を抜かず、全力で取り組み」

『はいー』

相澤の言葉に気合を入れて頷くA組一同。

刃羅はピクシーボブと相澤に声を掛けられていた。

「土人形の出現はランダムだし、土人形だけが出るとは限らん。それを対処しながら外周を走り続けろ」

「出来る限り必要な箇所だけを変化させるようにね！」

「了解じゃ」

「それとこれだ」

「む？重いか？って重い!?!」

「それぞれ8Kg。それを手足に着けろ」

相澤から渡されたのはリストアングルウェイト4つ。

昨日の森での移動を考えて、ただ走らすだけでは効果はないと考えた相澤はとりあえず重さを着けてみることにした。もちろん走らせ

るコースも起伏を多く作り、そこに土人形との戦闘も加える。かなり実戦を意識させる鍛練となってしまうた。

刃羅の手足にガチン！と鍵付きで固定される。

「裸足でもよろしおすか？」

「構わんが、滑るなよ」

「……分かったのである」

見透かされて顔を顰める刃羅は、大人しく走り出す。

飯田とは違うコースのようだ。

「ちっ！重りのせいでバランスがズレやすい。これで戦って振り回されない様にしろってことか」

刃羅は走りながらバランスを調整していく。

すると目の前の地面が盛り上がり、のっぺらぼうの人型が2体ほど出現する。

刃羅は速度を緩めずに迫り、前に出てきた土人形の1体の顔面に右拳を叩きつける。顔を崩しながら後ろに倒れる土人形。刃羅はそのまま右脚を前に出して、2体目に向かって左脚を振り抜く。胴体に当たる直前に、脛に刃を生やす。ズバン！と胴体を真っ二つになる土人形。

そのまま一回転して前を向き、再び走り出す刃羅。

すると今度はほぼ直立の3 m程の壁が現れる。

「走り込みじゃないのです!？」

「ああ。手は使うなよ」

「ファツキュー!!」

刃羅は脚裏に刃を生やして、壁に突き刺して駆け上がっていく。

「ぐう!?!重りが邪魔で……!」

一気に駆け上がりたくても手足の重りで後ろに体が倒れ、脚が持ち上がらない。手が使えないので腹筋に力を込めて体を起こす。

そして上まで登りきり、降りようとすると。

「降りるときは腕だけで降りろ」

「イジメであろう！もはや!」

「お前はそれくらいが丁度いいんだ。ああ、滑るなよ」

「どチクシヨウが!!」

吐き捨てながら指から刃を生やし、壁に突き刺して腕だけで降りていく刃羅。降りるのはすぐさま終わるが、この壁を越えただけで、体の疲労が溜まる。

その後も走り続け、壁や坂を上り下りし、土人形を倒して行く。

1周走り終わるだけで2時間もかかった。

スタート地点に戻ると、いつの間にかB組も参加していた。

「ふう〜」

「ふう〜じゃねえ。さつさと2周目行け。勝手に休むな」

足を止めた瞬間、相澤の捕縛武器でビシン!と尻を叩かれる刃羅。

「つだい!?!びいえくん!!」

再び走り始める刃羅。

その後、再び壁を掛け上げるときに足が滑って、地面に叩きつけられて後頭部を押さえて痛みに悶えることになり、周りで見ていた生徒達に同情される刃羅だった。

そして、また2時間かけて1周する。

「……………なんか……………我だけ……………おかしくないか……………? 緑谷や飯田にも……………同じことさせないのか……………?」

「奴らとお前では元々の身体能力が違うんだから当然だろ」

「納得がいかん……………!」

「とりあえず、これはここまでだ。切島と組み手だ。刃は出さずにな……………」

「ああ、それと手にはグローブ、脛にはプロテクターを着けてもらう。重さは5Kgだ」

「鬼畜過ぎるでござろう!?!」

流石に本気で叫んだ刃羅。

しかし相澤は取り合わずにグローブとプロテクターを投げつけて、切島の元に向かう。

刃羅は顔を顰めて睨むが、ため息を吐いて大人しくグローブとプロテクターを身に着ける。

切島は土人形3体にフルボッコにされていた。

「組み手しとるやん」

「あれはただ攻撃に耐えているだけだ」

そして相澤は切島に声を掛ける。近くで見ていたピクシーボブが土人形を止める。

「切島」

「はあ……はあ……うす！」

「次は乱刀と組み手だ」

「押忍！頼むぜ！乱刀！」

「ちなみに乱刀は両手足に重りを付けて『個性』なしだ。お前は重り無しで『個性』ありだ。思いつき殴りかかれ」

相澤の言葉に切島は目を見開いて、刃羅の手足を見る。そして顔を顰める。

「……それは流石に……」

「文句は1本取ってから言え。乱刀も本気でやっていい」

「いいのかね？」

「構わん」

刃羅の言葉に相澤は頷く。

刃羅は切島の前に立ち、ボクシングスタイルで構える。

「行くぞ！しっかり硬化しといてね！」

「こおー！」

切島も切り替えて構える。しかし、次の瞬間刃羅の右拳がブレ、気づいた時には目の前にグローブがあった。

「パン！」

「ぶう!？」

鼻頭に衝撃を受けて、顔を仰け反る。

「せいー！」

続いて刃羅はがら空きになった切島の腹に左正拳突きが突き刺さる。

「いお!?!(っ)、硬化してんのに……!?!(っ)」

切島は腹を押さえて後退る。顔を顰めて痛みに耐えている。

刃羅は追撃せずに、拳を構えたまま切島を見つける。

「柔い。その程度の硬さでは、衝撃は止められん。結局、痛みの半分近くは受けていることになる」

「っ!!」

「人間である以上、体の大半は水分であり、血液も流れておるから
のう。格闘術は衝撃を如何に通すか、じゃ」

「なるほどな」

「貴官は小官を攻めながら、動き回りながら、常に最硬度を保てなければならぬであります!」

「よっしやあ!やったるぜ!こおい!」

切島は刃羅の言葉に納得し、再び硬化する。

その瞬間、刃羅が殴りかかる。今度はワン・ツージャブ。

切島は顔を腕でガードする。

「足を止めない!硬いからこそ攻める!」

「お、おう!」

「おらあ!どんどん行くぞおゴリア!」

今度は無茶苦茶な軌道で連続で拳を放つ刃羅。

切島は前に出ようとするも、顔、肩、腹、脇腹を殴られる。切島も攻めようとするが、腕を構えた瞬間に刃羅が素早く移動して攻撃範囲からいなくなってしまう。

「っ!!う、動かせてもらえねえ!こっちが動いた瞬間、攻撃したい範囲からいなくなる!」

正面に向き合っても、殴ろうと構えた腕を先に殴られてしまう。殴られても無理矢理に拳を振っても、全く力が乗らず簡単に避けられてしまった。

「攻撃が大振りばかりだべ!硬いその拳ならジャブレベルでんも十分な威力が出るべさ!」

「くっ!」

「ホアチャー!」

「いおっ!」

切島が右ストレートを放った瞬間、刃羅は左腕で円を描くように切

島の拳をいなし、その動きに合わせて右拳を腹に叩き込む。

殴られた衝撃に体をくの字に曲げる切島。直後、刃羅が腰を捻り、左拳を切島の右顔面に叩き込む。

「ぶえ!？」

切島は堪えられずうつ伏せに倒れる。

「あく……顎にも入ったかね？」

「ぐ……うう……」

「これはあきませんなあ」

刃羅が声を掛けるが、切島は答える余裕もなく、立ち上がることも出来なかった。

それに刃羅はため息を吐いて、ピクシーボブを呼ぶ。

「ピクシーボブ!!切島氏を休ませてほしいでござる!」

「りよーかい。もうすぐ昼だし、あんたも休みな」

「分かったのです」

重りを外して、地面に座り込む刃羅。

切島は土人形で運ばれて、地面に敷かれた大きな布の上に寝転がされる。そこにピクシーボブが布を濡らして額に置く。

そこに他の者達も草臥れた様子で歩いてくる。

麗日は今にも吐きそうな程に顔を青くして、フラフラしながら近づいてくる。その隣を飯田が心配そうに肩を支えている。

「よし!全員、1時間の昼休憩だ!しっかり休んで午後に備えろよ!」

『は〜い』

「アハハハ!!ボロボロ!!お昼はおにぎりだよ!!たくさんあるからね!」

ラグドールが笑いながら、おにぎりが並んだ皿を並べていく。

刃羅は3つほどおにぎりとお茶のペットボトルを受け取り、木陰に移動して木を背に座る。

そこに梅雨や葉隠、麗日、百がやってきた。

「お疲れ様。刃羅ちゃん」

「お疲れ〜」

「お茶子ちゃん、ヤオモモ。大丈夫?」

「う、うん。うっぷ」

「あまり食欲はありませんが……」

「百ちゃん食べ続けてたものね」

手を拭いて、おにぎりを頬張る刃羅と梅雨。

すると、そこに切島、芦戸、耳郎、緑谷、飯田がおにぎりとお茶を持ってやってくる。

「すまねえ乱刀！手合わせしてもらったのに！」

「構いませんわよ。あの結果も講師方は予想していたようですし」

「ぐっ……それはそれで悔しいぜ……！どこを直せばいいか教えてくれ！」

「ボツコボコにされてたもんね。切島」

切島は座っていきなりガバツ！と頭を下げる。

それに芦戸が苦笑する。

「というか刃羅はなんであれだけ走りこんだ後に、あんなに殴り合い出来るのさ？」

「しかも重りつけてたんだよね？」

「重りなんてつけてたの!？」

「アングルが8Kg、グローブとプロテクターで5Kgだそうだ」

「……それでも俺は何もさせてもらえなかったのか……」

芦戸の横で見ていた耳郎が呆れたように話し、さらに我ーズブーツキャンプをしていた緑谷が重りについて話し、その事実切島がさらに落ち込む。

その事実梅雨や飯田は考え込むように唸る。

「私も重りをつけたほうがいいかしら？」

「俺もそうだな。それに乱刀くんのコースも使わせてもらいたい！」

「僕もやってみたいなあ」

梅雨達の呟きに緑谷も腕を組んで考え込む。

しかし、それに刃羅が口を挟む。

「緑谷はもっと力の扱い方に慣れてからのほうがよいじゃろ」

「……そうかな？」

「完全に緑谷坊っちゃんの『個性』を知つとるわけやありまへんけど。

まだ全身なら安定させられても、一部だけやと0か100やないどすか?」

「……そうだね」

「ああいうコースは力の入れ所を細かく変える必要があるのです。それが出来ないなら、あまり意味はないのです」

刃羅の言葉に落ち込んだように俯く緑谷。それに周囲は心配そうに見つめる。

雰囲気を変えるように刃羅は、今度は切島に向けて声を掛ける。

「切島氏も同じでござるな」

「え?」

「攻撃があ大振りなのもおそうだけどお、一度決めたら攻撃のことしかあ集中出来てないかなあ」

「……確かに」

「一撃で倒せるなんてことの方が稀なのである。常に次を考えるのである。確実に相手が崩れたと確認出来るまでは、全ての行動は繋がっているべきである。それが出来てないから、攻められ続けるのである」

「……なるほど。けどよお……めっちゃムズいだろ、それえ」

切島は腕を組んで唸り、がつくりと肩を落とす。それに芦戸が励ますように背中をポンポンと叩く。

刃羅は苦笑しておにぎりを頬張る。

「簡単に出来るなら、ここでやらされたりしないだろう。それを常に意識しながら硬度を保てるようにするのが、ここでの課題だろう」

「そういうことか……!」

「刃羅、もう教師側じゃない?」

「相澤先生も刃羅ちゃんの扱いに困ってるみたいだものね」

「その結果がく重りく。まあ『個性』のく鍛え方がく難しいのもあるけど」

「刃ですものね」

「切れ味を上げるわけにもいきませんものね」

刃羅の言葉に梅雨と百が悩まし気に顎に指を当てる。

休憩が終わり、再び特訓に戻る生徒達。

「で？拙者は如何に？」

「切島の特訓に付き合ってもらおう。ただし……」

「ただし？」

「重さを8Kgから13Kgに増やす。グローブとプロテクターは変わらない」

「……18Kg×4で……72Kg!?20Kgアップ!?殺す気アルか!?期末試験の教師陣のハンデより重いアルよ!?アタシよりも重いアル!」

「さっきの様子だと余裕がありそうだからな」

「ほれ」と重りを渡される刃羅は顔を引きつらせる。

やはり自分だけ鍛練の目的がズレている気がする。

「筋力向上ならあん切島ちゃんにもおん着けたらあん？」

「それも考えたが、お前との差が大きすぎる」

「これほどの重さだと、おいらも手加減しきれねえだよ」

「構わん。それに硬化で耐えるのが切島の課題だ」

「そうでっか」

呆れ顔で重りを付けていく刃羅。リストアングルだけでもかなりの負荷だ。

グローブとプロテクターを着けると、腕を上げるだけでもきつい。顔を顰める刃羅に、相澤は切島に聞こえないようにボソリと呟く。

「お前……さっき蹴りを一切使わなかっただろ。手加減のつもりか知らんが」

「……」

「腕を満足に使えんなら、嫌でも使うだろ。切島には足元にも意識を向けさせろ」

「……はあく……クソが……!」

吐き捨ててドストドス!と切島の元に向かう刃羅。

その背中を相澤は見送る。そこにマンダレイが近づいてくる。

「随分と色々は無茶させるね。まあ、流女将の話聞いたら仕方がな

いかもしれないけどさ」

「正直、乱刀の『個性』はほぼ完成されていると言ってもいいですからね。複数の武器を出す術も検討が付いているようですし」

「そして体術はすでにプロ並み。ならば後やれるとしたら筋力と体力面。そして……他人とのコミュニケーションを増やすってことだね」

「そういうことです……蛙吹から夜の事も聞きましたしね」
「横になって寝れない……か」

相澤とマンダレイは蛙吹から刃羅の寝方について様子を見に行つた時に聞かされた。休憩中に流女将に連絡したら、家でもそうらしいとの返答があった。

ラグドールの《サーチ》でも、特に体調不良ではなかったので特に問題視はしなかった。ただし、刃羅を見たラグドールが「異常なほど鍛えられている体」と断言したことには頭を抱えたが。

精神面でも「びっくりするほど揺らぎがない」とまで言ったラグドール。

「実際、午前の時や休憩中のアドバイスも的確だったけどね」

「そうですね……」

相澤達の目の前で切島と組み手を始める刃羅。先ほどとは動きが変わり、切島は戸惑っている。

その変化にはマンダレイも目を見張るものがある。

刃羅はステップではなく、すり足での移動に変わり、攻撃もカウンターの関節技狙いになっている。しかし時折、鋭いアッパーやボディブローを繰り出し、足払いも使い始めていた。

「完全に状況に合わせて戦闘スタイルを即座に組み上げられてるわね」

「ですね……まあ、武器の特性故の動きでしょうが」

「回転も使ってるから、攻撃が硬化を上回っているね」

「そこは元々の狙いなので」

「ぐおえ!?!」

「「あ」」

刃羅のアッパーが見事に切島の顎に突き刺さり、思いつき後ろに

倒れる切島。

それに刃羅、相澤、マンダレイは声を上げる。

刃羅は恐る恐る切島を覗き込み声を掛ける。

「お〜い……起きれるか？」

「……ぐう」

「……駄目っばい！」

「だろうな……」

「こりやしばらくは無理だね」

切島は完全に伸びていた。

マンダレイがピクシーボブに《テレパス》を飛ばし、土人形で切島を運ばせる。

刃羅はグローブとプロテクターを外しながら相澤を見る。

「どうすればいいのです？」

「そうだな……また走り込んで来い。2時間を切るのが目標だ」

「へ〜い……」

うんざりとした顔で走り出す刃羅。グローブとプロテクターを外して、軽くなつたつもりでいる刃羅だが、実際は最初より重くなっていることに壁を登り始めたときに気づいて、また背中から落ちて後頭部を打つのだった。

「いつつだ〜!!?」

「受け身取ろうにも重りのせいで取れなかったのね……」

「アハハハハハ!!」

ピクシーボブが可哀想な目で見て、ラグドールは爆笑する。

それに近くで鍛練していた者達も注目する。

「あれえ!? おつかしいなあ!? A組は優秀なのに随分と滑稽だねえ！」

「物間。お前は自分の事に集中しろ。滑稽だと思うならお前も重りつけるか? 52Kgだそうぞぞ?」

『52Kg?!?』

B組の物間がここぞとばかりに虚仮にするが、ブラドが注意して刃羅が付いている重量をバラすと聞こえた者達が目を見開いて驚く。

流石に物間も顔を真っ青にして黙った。

「さっきまではそこに更に各5Kgのグローブとプロテクターを手足に着けて組み手をしていたそうだ。お前達もやってみるか？ちなみにあそこで倒れている切島は重り無しの『個性』ありで、乱刀は『個性』なしだったそうぞ」

ブラドの言葉にブンブン！と首を横に振る生徒達。

そして誤魔化すように自分の鍛練を再開する。

その時、

「づああああああ!!!」

ガアン!!

『?!』

叫び声と轟音が響き、全員が発生源に目を向ける。

そこには右足を壁に突き立てている刃羅の姿があった。

「このクツツがああああ!!!」

ズガアン!!

刃羅は声を荒げながら、右脚だけで体を持ち上げ、左足で壁を踏み抜くように壁に突き刺した。

その光景に全員が唾然とする。刃羅は周りに注目されていることにも気づかず、どんどん壁を突き刺しながら登っていく。もちろん腕は使わずに。

「50Kg着けて脚だけで登れとかよお!!テメエらも出来んのか先公ゴラア!!」

ガアン!!

(((((…無理かな)))

刃羅の叫びに相澤達はサツと視線を外す。

そして刃羅が登りきると、壁が45度ほどの傾斜に変わったことで教師陣の答えが分かった生徒達だったが誰も突っ込むことはなかった。

刃羅を除いて。

「自分らも出来ねえ筋トレをガキにやらせんなゴラア!!クソ髭に猫ババア!!」

「バ!?!」

「やめな、ピクシーボブ。確かに出来ないことをやらせたのは問題だったんだから」

「くうく……い！」

「……クソ髭……」

ピクシーボブが飛び掛かろうとしたが、マンダレイに止められる。そして相澤も地味にダメージを受けるのであった。

その後も刃羅は顔を顰めたまま走り続けた。

1時間後、復活した切島と再び組み手をする。しかしやや苛立っていた刃羅は開始早々顔面にクリーンヒットさせて再び切島を気絶させ、また走り込みをすることになり更にイライラが募るといふ悪循環に陥り、近くにいた者達が刃羅の怒気に顔を引きつらせるという全く鍛練に集中出来ない環境となったのであった。

「よし！今日はここまでだ！」

『は〜い』

相澤の号令で地面に座り込む生徒達。

「ふんー！」

バギン!!

刃羅は刃を生やして手足の重りの鍵部分を斬り壊して、重りを外す。

ドスン！と鈍い音を響かせて地面に落ちる重りに、音を聞いた生徒達は疲れ切った顔を青くする。

「あれを4つに、グローブとプロテクターも重かったんだよな？なんで普通に走って、今も立ってられんだよ……」

「あんま疲れたようにも見えねえし」

「バケモンかよ……」

刃羅の異常性をあまり知らないB組は衝撃が大きかった。

倒れている切島にB組の鉄哲が走り寄る。

「切島あ!!しっかりしろお！」

「だ、大丈夫だ……」

切島は目を覚ましていたが、まだ眩暈が強く起き上がれなかった。そこに腕を組んで顔を顰めた刃羅も歩み寄ってくる。

「すまねえだ。イライラして手加減効かなかったべ」

「き、気にすんな……元々手加減無しでって話だったしな。防げなかった俺が情けなかっただけだ」

切島は寝ころんだまま、苦笑いする。

刃羅は腕を組んだまま、相澤を睨みつける。

「明日もこれを繰り返すのか？我はもちろん切島にも効果がある様には思えんぞ。まだその鋼男のほうが組み手の相手に相応しいだろう」

「……そうだな。少し考える」

刃羅の言葉に頷く相澤。

それに刃羅は「ふん！」と鼻息を荒げて、施設へと戻っていく。

その後ろを他の生徒達もノロノロと施設へと足を進める。

「で？実際どうするんだい？イレイザー。確かに今日と同じじや、あの子もそうだけど男子の方も倒されてばかりじゃね」

「そうですね……ブラドとも話して決めます」

「頑張りな」

マンダレイの言葉に考えるように顔を顰める相澤。

しかしすぐに答えが出るわけではないと諦めて、とりあえず施設に戻ることにしたのだった。

16時。

施設の外に設置された炊事場に集まる生徒達。

「さあ！昨日言ったね！世話を焼くのは今日だけって!!」

「己で食う飯くらい己で作れ!!カレー!!!」

『……イエツサ……』

ピクシーボブとラグドールの目の前にはカレーの材料や飯盒が並べられていた。

それに生徒達はグタツと燃え尽きた様子で返答する。刃羅は後ろの方でブスッと両手をポケットに突っ込んだまま立っている。

その様子にラグドールが大笑いする。

「アハハハハハハ!! 全員全身ぶつちぶち! だからって雑なネコマンマは作っちゃ駄目ね!」

その言葉に項垂れていた飯田が、ハツとする。

「確かに……災害時など避難先で消耗した人々の腹と心を満たすのも救助の一環……流石英雄!! 無駄がない!!」

何やら1人で納得して声を上げる飯田。

そして、生徒達に振り返って叫ぶ。

「世界一美味しいカレーを作ろう!! 皆!!」

「オ……オオ……」

(飯田……便利……)

こうしてカレー作りが始まった。

いざカレー作りが始まると、生徒達は活気づいた。

「轟——こっちにも火イ頂戴!」

「爆豪。爆発で火イつけねえ?」

「つけれるわ! クソがあ!」

ポオン!

「ええ……!?!」

「皆さん! 人の手ばかり煩わせてばかりでは火の起こし方も学ばせんよ」

「……ええ?」

テーブルの方でも野菜を切っていた飯田は張り切っていた。

「カレーの具材はどれくらいの大きさが最適のだろうか!?! どんな切り方がいいのだ!?!」

「いや、そこまで決めてたら時間もったいねえよ」

「カレーを待っている人を待たせるのは良くないぜ?」

「は!?! その通りだな!」

「行くぜ! 乱刀!」

「うむ」

「ん?」

切島の声に飯田や砂藤が後ろを振り向くと、両手に人参を抱えた切

島と梅雨に机を挟んで目の前にボールを置いて立っている刃羅がいた。

飯田達が首を傾げた瞬間、人参を放り投げる切島と梅雨。

「短刀十指・乱れ斬り!!」

「シャキキキキキキキン!!!」

両手の指を短刀に変えて、高速で両腕を振る刃羅。すると、投げられた人参がぶつ切りに分かれて目の前のボールに収まる。

「すっげー!!」

「綺麗に切れてるわ」

「次! ジャガイモだな!」

「切島くん! 自分でやらなければ意味がないぞ!」

「飯田ちゃん。別に全部ではないわ。それに早く出来ることはいいとよ」

「梅雨ちゃんくん……しかしだな……」

「まあ、別に梅雨達に投げてもらう必要はないけどな」

腕を組んで唸る飯田に、刃羅が自分でジャガイモを投げて両手を振るってぶつ切りにしていく。

その後もヒョイヒョイと投げては斬り投げては斬る刃羅に、飯田は悩まし気に唸る。

「あ。肉も切り終わっとるで」

「はや!」

「そら、おいらは片手だけでも包丁5本分だべ」

「なるほどなあ」

「ジャキン! と指に刃を生やす刃羅に砂藤が納得した様に頷く。

「適材適所やよって。確かに出来るに越したことはあらへんけど、出来るもんがおるなら遠慮なく使おうたらええぞ。下手に時間かけてしても体力使うほうが問題でっしやろ」

「むう! そういう考え方もあるか……」

「ほれ、腹が減つとるんじや。まずは早う作るのじや。被災者達は待っておるぞ」

「そうだな! 作業を再開しよう!」

「ケロケロ」

その後はスムーズに調理が進み、カレーが完成する。

「いただきまーす!」

「うめー!」

「……うどんは」

「流石にそれは無理じゃないかしら。 刃羅ちゃん」

カレーにがつつく生徒達。

刃羅はカレーうどんを思い浮かべるが、梅雨に諭されて落ち込みながらカレーを食べる。

「ん?」

「どうしたの?」

「緑谷だ」

「ケロ?」

ふと目を向けると緑谷がカレーを持って森の中に入って行った。

それに首を傾げる刃羅と梅雨。

「どないしたん? あいつ」

「どこに行くのかしら?」

「まあ、一人で考えたいことでもあるんだろう」

「ケロ」

梅雨は心配そうにしていたが、刃羅はカレーに注意を戻して食事を再開する。

その後、緑谷が手ぶらで帰って来るのを目撃し、再び首を傾げる刃羅達だった。

刃羅はカレーを食べ終えて片づけをしていると、そこにマンダレイが近づいて来た。

「ちよつといいかい?」

「あん?」

マンダレイに声を掛けられて、施設内にある事務所に連れて行かれると、そこには緑谷とプツシーキャッツの面々がいた。

不思議なメンバーに首を傾げる刃羅。

「急に悪いね」

「あつしに何用だよ！」

「彼が君に聞きたいことがあるんだよ。その内容がちよつと私達も無関係じゃなくてね」

「む？」

刃羅はマンダレイの言葉に更に首を傾げる。

緑谷はオドオドした様子でキョロキョロしている。

「え、えつとね、乱刀さん。ちよ、ちよつと、というか……かなり？き、聞きにくいことなんだけど……」

「……何なのだ？」

「洗汰のことなんだよ」

緑谷の要領を得ない言葉に刃羅はイラつと顔を顰める。

それに苦笑してマンダレイが口を挟む。

「洗汰？……ああ、あのとんがり坊主かいな」

「そう」

「その坊主と拙者がどう繋がるのだ？」

「……悪いけど他言無用で頼むよ」

マンダレイは洗汰とその両親の事を話し始める。その内容に緑谷はもちろん、プツシーキャッツの面々も悲し気に顔を曇らせる。

話を聞いた刃羅は腕を組んで目を瞑り、事務所の壁にもたれ掛かっている。

その様子に申し訳なきように俯きながら緑谷は話を引き継ぐ。

「さつきも洗汰くんと話したんだ。洗汰くんはヒーローだけじゃなくて『個性』、超人社会そのものを否定しちゃってるんだ。それは……とても辛い事なんじゃないかと思って。それで……」

「似た境遇である私から話を聞いて、何か出来ることはないか……と？」

「……うん。どうにも気になっちゃって……」

「ない」

「え？」

刃羅の言葉に緑谷は顔を上げる。

刃羅はまっすぐに緑谷を見つめる。

「傲慢にもほどがある。否定する事が辛い事だと？では、肯定すれば楽になれるのか？肯定すれば親の死は立派な事だと思えるのか？」

「そ、それは……」

「ヴィランから一般人を守って死んだことはヒーローとして立派である？その考え方が歪であると何故考えぬ？貴様らは」

「……」

「名誉ある死？そんなものあるわけがない。死は全てにおいて残酷で無価値なものでしかない。そこに意味を付けるから歪みが生まれる」

刃羅の言葉に緑谷は反論しようとするが、言葉が出なかった。

「僕もヒーローが嫌いじゃ。ヴィランも嫌いじゃ。この『個性』も好かん。この3つを容認する社会も好かん」

刃羅は顔を歪めながら吐き捨てるように話す。

その内容に緑谷とマンダレイ達は目を見開く。

「当然やろ？うちはこれらに家族も、普通の人生も奪われたんや。なんで好きになると思てるんや？」

「なら……」

「何故ここにいるのか、かね？簡単な事だよ。嫌うことすら諦めなければ生きられない社会だからだ。しかし母と同じヴィランになっては、それこそ最低だ。ならばヒーローになる方がまだマシなのだよ」

「……嫌うことすら……」

「そうなのです。ヒーローを否定すればヴィランの仲間だと言われ、ヴィランを否定すればヒーロー信者と言われ、『個性』を否定すれば社会に馴染めず生きていけないと言われるのです。いや……言われたのです」

刃羅の話に息を飲む緑谷。プツシーキャッツの面々も顔を顰める。

【超常】が【日常】になってしまったが故に、『個性』を否定すると社会の成り立ちそのものを否定してしまうことになり、一気に社会の弾かれ者になってしまう。

「そんな歪んだ世界で5歳の少年に「否定するな」と？それこそ酷な話ですわ」

「……じゃあ、どうすれば……」

「だから無理だつて言ってるべ。逆にどうなって欲しいんだべか？ヒーローを好きになって欲しいんだべか？自分の親が死んだ原因で、死んだ事を良い事だなんてほざく連中を？」

「!？」

「かと言つて、ヴィランにもなれぬでござろうな。親を殺した連中と同じになれば、親を否定することになるでござる。親の死が苦しいからこそ、親を穢す事は出来ぬでござろう。ならば少年に出来ることはただ一つ。この社会を否定する事のみでござる。そんな少年にヒーローを目指す者達がしてやれることなどあると思うでござるか？」

緑谷は自分の思いと刃羅の言葉が頭の中でグルグルと巡り続ける。『無個性』だった緑谷も社会に馴染めない辛さは分かる。だからこそ、刃羅の言葉に共感も出来る。しかし、だからこそそれを否定したい自分もいるのだ。

オールマイトに見出され、ここまで来れた自分がいるのだから。

緑谷の葛藤を何となく察した刃羅。

「……納得できないならあ好きにすればいいよお。私にいそれを止めるう権利はないしねえ」

「……うん」

「ただ〜」

刃羅は壁際から一瞬で緑谷に迫り、首筋にロングソードを添える。『!？』

緑谷は硬直し、マンダレイ達は止めようと椅子から立ち上がる。

しかし、刃羅からプツシーキヤツツに向けて殺気が放たれて、うかつに動けなくなる。

「覚悟を持って」

「……か……く……?？」

「あの少年の人生を背負う覚悟だ。貴様の思いを聞いたうえで少年が決めた人生の結末を背負う覚悟だ」

「……人生……を」

「お前の言葉を聞いてヒーローになるかもしれん。しかしヴィランに

もなるかもしれん。更にこの社会を否定することになるかもしれん。その責任の一部を背負う覚悟を持て。ただ命を救うとは違うのだから」

刃羅は殺気を消して、腕を戻す。ホッと息を吐く緑谷やプツシーキャッツに、刃羅は背を向けて事務所を後にする。

「ふうく……焦ったく……」

「アハハハ……ちよつと怖かった」

「我でも押さえられたかどうか……」

「大丈夫だった？」

「あ……はい……」

全員が冷や汗を拭う。それだけ刃羅の殺気は凄まじかったのだ。

緑谷は刃羅の最後の言葉が強く胸に刻まれる。

「……命を救うのとは……違う……」

その呟きにマンダレイも頷く。

「悔しいけどね。あの子の言う通りだよ。洗汰の事は君達が習っている人命救助とは違う。私達だって、未だに答えが見つからない」

「……はい」

「それにしても、思いつきりヒーロー嫌いを口にしたね。あの子」

「まあ、事情が事情だからね。仕方がない部分もあるけど……」

「彼女は洗汰を突き詰めた1つの姿とも言えるな」

ピクシーボブが椅子に座って手で顎を支えながら顔を曇らせる。

それにマンダレイは苦笑し、虎が腕を組んで唸る。

「彼女の体育祭での試合は私達も見てたけどね。想像以上に厄介だねえ。あの子も」

「君も一度戻りな。そろそろ入浴時間だし」

「……はい」

緑谷は更に悩みが深くなってしまつて困惑している。

緑谷の頭にマンダレイがポフツと手を置く。

「難しいかもしれないけど、今は自分の合宿に集中しなさい。ヒーローになって、その答えを活動で示してくれれば、洗汰も見えてくれるかもしれないからね」

「……はい」

緑谷は事務所を出て、クラスメイトの元に向かう。

(オールマイトなら……どう答えるんだろう?)

緑谷は憧れであり、自身に力をくれた最強のヒーローのことを頭に浮かべながら、答えを考え続けるのだった。

#26 女子会!

緑谷との会話を終えて事務所を後にした刃羅は、梅雨達と合流した。

「風呂の時間がズレた?」

「ケロ。峰田ちゃんの覗き未遂があったからだと思うわ」

「また洗汰くんを監視してもらおうわけにもいかないもんね」

「男子達の後に女子だって」

刃羅の男湯覗きは事情が事情であることと、その後に男子が打ちのめされたことから不問とされたようだった。

ということ、刃羅達は時間までは部屋でのんびりすることになった。

刃羅は昨日同様窓辺で涼み、他のメンバーはトランプをしていた。

「そういうえば、明日の肉じゃがのお肉って結局どうなったんやっけ?」

麗日が大富豪をしながら首を傾げる。

肉じゃがの肉とは、本日の夕食後にピクシーボブが明日の夕食のメニューを告げたことがきっかけだった。豚肉、牛肉ともに1クラス分しかなく、どっちが使うを決めとくようにと言う話だった。最初はじゃんけんで決めようとしたが、そこに毎度の物間が挑発し、それに男子が見事に釣られたのだ。

「確か……この後男子で決めるということになりましたわ。……不安ですが」

「物間が絡むと変な方向に行くもんねえ」

「でもさあ、その時間って三奈ちゃん達補習じゃないの?」

「うがあー!!嫌なこと思い出させないでえ!!」

「相澤先生の補習はきつそうやもんね」

「そうね」

百が憂いを帯びた顔でため息を吐き、芦戸は補習の事を思い出し、頭を抱えて悶える。それに麗日と梅雨が同情の目を向ける。

刃羅はぼくつとしながら「麺……」と呟いている。

「それにしても結構きつかったねえ。今日の特訓」

「私は裸で突っ立ってるだけだったしなあ。じつとしてるのが辛かったけど！」

「透ちちゃんって、それ以上どうやって『個性』強くするん？」

「気配を隠す？」

「なるほどね」

「一番辛そうだったのはお茶子ちゃんと百ちちゃんね」

「吐き気に耐えるのと延々と甘いものを食べ続けるんだもんね」

「私は乱刀さんの方が可哀想でしたが……」

「刃羅ちゃんは先生方も迷走してただけな気がするわね」

本日の『個性』伸ばし訓練についての話題になる百達。

お菓子を食べながら創造する百と、吐き気に耐え続ける麗日の名前が挙げられ、百は刃羅の名前を上げる。それに梅雨が考えを述べて、それに他の面々も頷く。

「50Kgの重りだもんね」

「それでも切島をフルボッコにしてたけど」

「カレー作り始めるまでは凄い落ち込んでたよね」

「仕方ない気もするわ。切島ちゃんは『個性』ありで重りもなしだったのに、刃羅ちゃんに手も足も出なかったんだもの」

「最後のは刃羅の八つ当たりだった気がするけどね」

「あれは痛そうやったなあ」

「硬化してても倒れたもんね」

梅雨達は刃羅に目を向けるが、当の刃羅は梅雨から分けてもらったポッキーを食べながら、ぼくつとしていた。昨日のことからカップ麺の事を考えているのだらうと推測した梅雨達は、顔を見合わせて笑う。

そして耳郎が時計を確認する。

「あ。そろそろうちの時間だよ」

「準備しよー！」

「おっ風呂ー！」

「刃羅ちゃん。お風呂の準備しましよ」

「んお？はいな」

「ねえねえ」

「ん？どうしたの？葉隠」

「峰田君。また来ると思う？」

「……」

葉隠の言葉に全員が腕を組んで考え込む。

峰田のこれまでの言動を考えて、全員が出した結論は、

『来る』

だった。

「どんな手で来ると思う？」

「昨日と同じ手で来るとは思えないよね」

「穴とか開けてくる？」

「可能性はあるじゃろうな」

「B組にも伝えとく？」

「そうですね」

「むしろB組の時間の時も最初に私達も含めて監視したらどうかしら？」

「そうだな」

準備をして風呂場に向かう刃羅達。

風呂に入ってしまったらしく警戒していたが、特に異常はなかった。

そこからB組が狙いの可能性が高いと判断した百は、やはりB組が入る前に一度罫を仕掛けることを提案し、それに梅雨達が頷く。刃羅はどうでもいいので、のんびりと温泉に浸かっていた。

作戦を立て終えた百達は、昨日同様刃羅の髪をトリートメントするために刃羅を担ぎ上げた。今回は梅雨のトリートメントを使用し、今回もツヤツヤのキラッキラにして満足するのだった。

その後刃羅はぐったりと湯船に浮かんでいたが、今度は「刃羅ちゃんの肌荒れてる!？」と騒ぎ出し、今度は部屋に帰った時に誰のボディクリームを使用するかで盛り上がり、刃羅は顔を真っ青にするのだった。

百達は温泉から出て着替えを終え、準備をしながらB組が来るのを待つ。

「あれ？どうしたんだ？」

そこに拳藤を筆頭にB組女子が現れる。

「拳藤さん。少しご相談がありました」

「相談？」

「うちの峰田さんの事です」

母親のような言い方をする百に、拳藤達は言いたいことを理解した。

顔を顰めて首を傾げながら、百に尋ねる拳藤。

「昨日、覗こうとしたって奴だよな？昨日の今日で覗きに来るのか？」

『来る（来ますわ）』

「そ、そうか」

真顔で断言するA組女子に顔を引きつらせる拳藤。

そして百は作戦を説明する。それに拳藤達が頷いていると、刃羅がふと風呂場の方に視線を向ける。それに梅雨が目ざとく気づいた。

「刃羅ちゃん、どうかしたの？」

「……呆れた奴じゃのう」

刃羅は呆れた顔で呟く。それに梅雨は誰が来たのかを悟った。

「響香ちゃん。来たみたいだわ」

「了解！」

「百ちゃんも準備して頂戴」

「分かりましたわ！」

梅雨の号令に行動を始める女性陣。拳藤達も顔を引き締めている。

刃羅が静かに内扉を少し開く。すると壁の一部でギョルルルと音がする。

「……ドリルまで持って来とるんかい」

「その熱意を何で他に向けられないのかしら？」

ジト目を音源に向ける刃羅と梅雨。

その後ろで百がドライアイスを作り出して、湯気に見せかけて視界を悪くする。

そこに拳藤、塩崎、小大の3人が服を着たまま、扉から出て温泉に入る演技をする。

3人が出た瞬間に耳郎達が静かに壁に近寄り、穴を探す。刃羅は音もたてずに壁を登り、逃走時に逃げ道を塞ぐ役を担う。

そして穴を見つけた耳郎が速やかにイヤホンプラグを穴に突っ込んで、『個性』を発動する。

「ぎゃあああああああ!?!」

穴の向こうから叫び声が聞こえる。

しかし女子達は手を緩めない。今度は芦戸の『個性』で壁を溶かし、溶解液を峰田に浴びせる。

「うぎゃあああ!?!」

峰田は叫びながら転がり、風呂場に出てくる。

刃羅は壁から降りて、地面に落ちたドリルを回収する。

「本当に用意周到でござるな。ん?」

刃羅はジト目を峰田に向ける。峰田のポケットに何やら巻かれた布のような物が入っているのを見つけて、悶えてる隙を突いて回収する。

布を開くと中に入っていたのはピッキング道具一式だった。

「なるほどお。これでえ壁の隙間にい入れたんだあ」

「本当に警戒しておいてよかったですわ」

「いつか捕まるわよ。峰田ちゃん」

心底呆れた刃羅は女子達に睨まれた峰田に目を向ける。

百が本気で嘆く隣で梅雨もジト目を向ける。拳藤が百に声を掛けて「助かったよ」と礼を言う。

峰田は逃げようと一度女子達に目を向けると、その顔が何故か怒りに歪んでいき、最後に叫んだ。

「風呂場で服着てるなんざ、ルール違反だろうが!!!」

『……はあ!?!』

その叫びに女子達の顔も怒りで歪んでいく。

刃羅は「ここまで開き直ると逆に感心してまうなあ」と思っていた。

峰田はもはや自分の状況を忘れて叫び続ける。

「おいらは旅番組の温泉で、バスタオル使うタレントは許せない派なんだよー!!!」

「どういう訴えなのかね」

「はあ!? サイツツツツツテーーー!!!」

「ルール違反は!! お前だ!!」

的外れの暴論を叫ぶ峰田に、刃羅は呆れ、芦戸が叫び、拳藤も我慢できずに手を巨大化させて峰田を思いつきり叩く。

「ぶっお!!」

峰田は体を捻じって回転しながら飛んで行き、地面を転がって止まる。

ピクリともせず五体投地で横たわる峰田に駆け寄る者は誰もいなかった。

それどころか拳藤に向かって拍手するくらいだった。

「お見事ですわ! 拳藤さん!」

「そ、そう?」

「今の内に捕まえましょう!」

百が作った縄で峰田を拘束し、麗日が呼んだマンダレイ達に渡す。

こうして悪は撃退されたのだった。

悪を退治した刃羅達は部屋に戻り、一息つく。

「これで今日はもう安全だね」

「ドリルとピッキング用品まで持ってきていたなんて……」

百は峰田の執念に呆れて、深刻そうにため息を吐く。

それに他の面々もげんなりと同意するように頷く。

「明日もまた警戒するの?」

「相澤先生達と入れればええんちゃうか?」

『それだあ!』

うんざりと言う表情で耳郎が言うと、刃羅が解決策を告げる。それに女性陣は盲点だったとばかりに声を上げる。

解決策が出たことで、その後は和やかな雰囲気です刃羅達。

なにやら時折叫び声が聞こえる気がするが、男子が騒いでいるのだろうかとう気にしなかった。

またトランプをしていると、ノックの音が響く。

「はい！」

「拳藤だけど、ちょっといいかい？」

「拳藤さん？」

拳藤の訪れに首を傾げる百達。

百が立ち上がり、ドアを開ける。そこには拳藤、塩崎、小大、柳がいた。

「どうしましたの？」

「これ、さっきのお礼」

「お礼？」

百が首を傾げる。そこに芦戸が顔を出し、袋を覗き込むと中にはお菓子が詰め込まれていた。

「お菓子だー！」

「持ってきたお菓子の詰め合わせで悪いんだけどさ」

「もしかして峰田さんの件でしょうか？でも、あれはこちらが迷惑をかけたので、当たり前前の事をしただけですわ」

「そこまで気にしなくていいよ。これは私達の感謝の気持ちなんだから。ほんの気持ち」

「でも……」

「まーまー、ヤオモモ。あんまり断るのもよくないよ？」

百は納得出来ないようだったが、芦戸が手を伸ばし袋を受け取る。そこに葉隠が声を掛ける。

「だったらさー！皆で食べようよ！女子会！女子会！」

その言葉に女子達の顔に笑みが浮かぶ。

「さんせー！女子だけで集まるなんてなかったもんねー！」

「まあ！初めてですわ！」

「いいのかい？」

「どうぞどうぞー！狭いかもだけど！」

「では、お邪魔します」

「ん」

「女子会だー！」

盛り上がった女子達は飲み物を購入し、お菓子を出して場を整えていく。

窓際でぼくつとしていた刃羅はキョトンとしていたが、梅雨達に促されて場所を開ける。

布団を端に寄せてクッションのようにして車座で座る一同。

そしてジュースで乾杯してお菓子を食べ始める。

「女子会って一体何をするのでしょうか？」

「こうやって女子で集まって盛り上がるのが女子会でしょ？」

何やら期待にワクワクしている百に、芦戸が答える。

そこに葉隠もハイテンションで声を上げる。

「いやいやー！高校生の女子会と言えば！恋バナでしょうがー！」

その言葉に更に盛り上がる女子達。

刃羅だけは変わらぬテンションでチビチビとジュースを飲んでいく。

「恋バナ！恋バナ！」

「恋ねえ」

「えく……」

「そういうテンションか」

「ん」

少し戸惑う耳郎に、苦笑する拳藤。

百と塩崎も戸惑い、柳と小大はよく分からない。

それでも何だかんだで恋バナに決定した。

「で！今、付き合ってる人がいる人ー!!」

テンションを上げたままの葉隠が音頭を取り、挙手を促す。

それに他の女子達は同時にぐるりと周囲を見渡すが、誰も手を上げることはなかった。

『……えっ？』

誰も手を上げない状況に、目を見開いて愕然とする。改めて周囲を見るが、誰も隠しているようには見えなかった。刃羅は我関せず過ぎて逆に疑われなかった。

「……まあ、中学は受験でそれどころじゃなかっただろうし、入学した

らしたらでそれどころじゃないもんな」

苦笑しながら拳藤が言い訳のように話すと、それに同意する一同。

USJ襲撃に体育祭、職場体験に期末試験、そして普段の授業だけでも手一杯。そんな状況では恋する時間までは足りなかったのだ。

「じゃあー片思いしてる人は!?!」

ステイン。

と、心の中で即答するが、言えるわけもないので黙っている刃羅。ぶつちやけ恋バナほど刃羅に不向きな話題はない。自分の話は出来ないし、他人の恋に興味はない刃羅だった。

片思いと言うフレーズで麗日が顔を赤くし、それに周囲も気づく。

「麗日ーもしかしている!?!」

「え!?!お、おらん!おらんよ!?!」

「その反応は怪しいな〜!」

「吐いちゃえよ〜!」

芦戸と葉隠の追及に麗日は更に顔を赤くして、手を振り乱す。すると、手が自分に触れたのか、浮き上がる麗日。

「違うから!ひ、久々過ぎて、こ、興奮しただけ!!」

「どんな理由やねん」

「刃羅ちゃん!?!」

まさかの人からの追及に再び顔を真っ赤にして布団に倒れ込む麗日。

麗日の隣にいた塩崎が落ち着かせるように麗日の頭を撫でる。

「大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫……」

「他に片思いしてる人ー?」

もちろん誰も手を上げなかった。

それに葉隠と芦戸は唸る。

「うー……じゃあ!次はA組とB組男子で付き合うなら誰!?!」

葉隠の言葉に再び悩まし気に考える女子達。

「今までそんな風に見たことなかったからなあ」

拳藤の言葉に百は同意するように頷く。

刃羅はもはや胡坐を組んで、布団にもたれてくつろいでいる。

「刃羅は……いなさそうだよね」

「昨日ぶった切ったものね。刃羅ちゃん」

「なにしたんだよ……」

芦戸と梅雨の言葉に拳藤が呆れるが、それに百が昨日の事を説明する。話を聞いて納得の表情をする拳藤達B組女子。

「なるほどねえ。っていうか、覗いたんだ。乱刀」

「だから興味もねえ奴の裸なんて覚えてねえって」

「哀れ……」

「ん」

刃羅の言葉に柳が呟き、小大が頷く。

その時、百が耳郎と芦戸に目を向ける。

「耳郎さんと芦戸さんは上鳴さんや切島さんとよく話していらっしやいますけど……どうなのですか?」

百の言葉に恥ずかしそうに顔を顰める耳郎。

「ないない!上鳴はしゃべりやすいけどさ、チャライじゃん。絶対浮気する」

「私は切島とは中学一緒ってだけだしね。あいつは浮気はしないだろうけど、あの熱血漢は付き合うにはないかな」

芦戸はあっけらかんと笑いながら、手をパタパタする。それに百は「そうですか……」と何やら残念そうにする。

そこに刃羅の横で座っていた梅雨が参加する。

「上鳴ちゃんは意外と付き合ったら一筋になつてくれそうね」

「えっ、梅雨ちゃん。上鳴君が好きなタイプなん!」

「いいえ、全然。でも、上鳴ちゃんは女性には優しいでしょ?」

「女好きってだけでしょ?」

耳郎は少し照れ臭そうにしながら言う。

その内容に芦戸は拳藤達に顔を向ける。

「B組って峰田や上鳴みたいな奴いるの?」

「いないいない。結構硬派が多いよ。物間みたいなのもいるけど」

拳藤はひらひらと手を振りながら話す。

それに柳と小大、塩崎も反応する。

「物間はなく」

「ん」

「物間だな」

「ん」

「彼の荒れた心を癒すことは私では難しい…悲しい事です」

「どうやら物間はB組でも諦められているようだ。」

「その後も名前を上げては付き合った姿を想像する女子達。」

「そういえば轟は？イケメンじゃん？」

「そういえばばって、言っとる時点であかんやろ」

「でもイケメンだし、マイペースなところはああるけど……そこまで酷

いわけじゃないし……」

「あれ？アリ？」

「吾輩はエンデヴアーに紹介されたくはないのである」

刃羅の言葉に想像していた女子陣は思考停止する。あの巨漢と炎の体を目の前にして、上手くやっていける自信がない。

『……確かに……無理！』

全員が刃羅の言葉に同意し、轟の選択肢が消える。

「飯田ちゃんはどうかしら？」

「ああ。委員長の……」

「絶対浮気はしませんわね。付き合っても真面目そうですわ……」

「真面目過ぎて色々と時間がかかりそうだし、斜め上の事ばかりして疲れそう！やだ！」

『……確かに』

刃羅の言葉に飯田とデートする姿や手を繋いだりする姿を想像出来ないA組女子。

やや思い込みも激しいところもあり、確かに求めている以上の事ばかりしてきそうで逆に疲れそうだ。

「……手を繋ぐとか食事に行くだけでも時間かかりそう」

「食事とか高級料理店とか選びそう」

「流石にそこまでじゃないだろ？」

「ありえるわ。飯田ちゃんなら……」

梅雨の言葉に真面目な顔で頷くA組女子陣を見て、拳藤達は少しげんなりとする。

その後も話していくが、結局全ての男子が「彼氏としては微妙」となってしまった。

その結果に芦戸が布団でバタバタする。

「駄目じゃくん！もうちょっとキュンキュンしたいよう！」

「じゃあ！逆に考えよう！私達が男だとしたら!?男子が女子だとしたら!?!」

「選択肢が変わってないべ」

「……確かに！」

テヘッ！と笑う葉隠。見えないが雰囲気だけでなんとなく分かった。

その時、梅雨が刃羅を、柳が拳藤を見る。

「刃羅ちゃんが男子だったら、彼氏にいいかもしれないわ」

「一佳も男ならモテそう」

「ぬ？」

「へ？私？」

刃羅は首を傾げ、拳藤は目を丸くする。

その言葉に女性陣は納得するように頷く。

「B組で一佳が一番カッコいい」

「誰にも公平で、厳しくも温かい……中々出来る人はいません」

「ん」

「刃羅ちゃんも話し方はコロコロ変わるけど、頼りがいはあるし、子供っぽくてかわいいところもあるしね！」

「それに期末試験でも悩んでいた私に声を掛けてくれて叱咤激励してくれましたわ。昼間だって切島さんや緑谷さんに的確なアドバイスをしていましたし」

「なんだかんだで皆の事見てるものね。それに危なくなったら、いの一歩に助けてくれそうなもの」

刃羅と拳藤は恥ずかしそうに顔を顰める。

「やめて、テレんじやん」
「ぬう」

2人を尻目に周囲は2人を男にして付き合っている場面を想像して、黄色い声を上げる。

そこに耳郎が拳藤と刃羅を見比べて、あることに思い至る。

「拳藤と刃羅って……お似合いじゃない？」

「は？」

拳藤と刃羅はきよとんと目を丸くして、お互いを見る。

それに他の女性陣も目を輝かせて盛り上がる。

「確かに！」

「姐さん女房の一佳。でも、ここぞというところで守ってくれる乱刀。

……アリ」

「ん」

「儂が男なんじやな……」

「身長的にそっちの方がしっくりする！」

「そーそー！」

「や、やめろよ！乱刀もなんとか言えよ！」

「この状況で勝った試しはないのです！」

「諦めるなよ！」

周囲の盛り上がり拳藤は顔を真っ赤にして刃羅に詰め寄るが、刃羅は胸を張って諦めの言葉を吐く。

それに拳藤は呆れるが、実際周囲はどんどん盛り上がって割り込むところではなくなったのを見て、ため息を吐いて項垂れる。

刃羅はトリートメントの事を思い出して、大人しくジュースを飲む。

触らぬ神に祟りなし。

刃羅はそれを学んだのである。

「おや、飲み物が無くなったのである。吾輩ちよつと買ってくるのである」

「私も行くよ。この状況でここにいるのはきつい……」

刃羅と拳藤は財布を持って、部屋を後にする。

そして自販機でジュースを買っていると、そこに2つの人影が現れた。

「む」

「あ、マンダレイ」

「おや、珍しい組み合わせだね」

「……ふん」

現れたのはマンダレイと冼汰だった。

冼汰はポケットに両手をつっ込んで、慥然として顔を背ける。それにマンダレイは少し顔を曇らせるが、先ほどの事もあつて声を掛けられなかった。

そこに刃羅が動いた。

「ほれ、とんがり坊主。ジュースはいるかえ？」

右手のジュースをプラプラさせて冼汰の前に差し出す。

それにマンダレイと拳藤は意外とばかりに少し目を見開く。

差し出されたジュースを一瞥して冼汰を刃羅を睨みつける。

「いらねえよ。言っただろ。ヒーローを指す奴なんかとつるむ気はねえよ！」

冼汰の言葉にマンダレイと拳藤は顔を曇らせる。

しかし、次に聞こえた言葉に息を飲んで固まる。

「どうせいずれヴィランに殺されていなくなるからかね？ 両親のように」

「!!?!」

「いなくなる連中と仲良くして、死なれたらまた苦しい思いをするかもしれない。だったら、初めから仲良くしなければいい。違うか？」

刃羅の言葉に冼汰は目を見開いて固まる。そして、すぐさま齒軋りをして思いつきり叫ぶ。

「テメエに何が分かる!!」

「分かんだよ。しかもテメエよりな。俺っちも親を殺されてつかんな」

「……え？」

刃羅の言葉に冼汰は動揺する。

「しかも貴様より悲惨だぞ？ 我は母親をヒーローに、父親をヴィランに殺された。しかも母親にはその直前に首を絞められて殺されかけた。私の『個性』が憎い。世に出してはいけないと言われてな」
「……っ!!」

「その後はお主と同じじゃ。ヒーローを、ヴィランを、『個性』を、この社会を憎み、否定した。その結果、ヴィランに攫われた。最近噂のヒーロー殺しにの」

刃羅の話に冴汰は呆然と立ち尽くすしか出来なかった。

マンダレイと拳藤も声を掛ける事は出来なかった。

「まあ、攫われた時の事はどうでもええわ。問題なんはその前や」

「……前？」

「そうだべ」

冴汰は刃羅の話に耳を傾け始めた。

刃羅はしゃがんで冴汰と視線を合わせる。

「私はヒーローを否定した。そしたら、こう言われた。『お前はヴィランの仲間だ』と。石も投げつけられた。今度はヴィランを否定した。そしたら今度は『歪んだヒーロー信者かよ』と言われて、指を刺されて笑われた。次に『個性』を否定した。そしたら最後には『じゃあ、この社会にお前の居場所はないな』と憐れみの目で諭すように言われた。それでも『この社会』を否定した。そしたら遂に誰も近づかなくなった。誰も助けてくれなくなった」

その内容に冴汰達は目を見開いて固まる。

「わっちはどないすればよかったと思う？ とんがり坊っちゃん。ヒーローとヴィランは親の仇や。それを容認しはる社会や信じられんかった。親に『個性』を否定されたわっちゃんには親族やって信じる事が出来へんかった。どないなっただと思う？」

「……」

「諦めたのです」

「……諦めた？」

「そうである。憎むことも、信じることも、期待することも、諦めたである」

刃羅はゆつくりと立ち上がってマンダレイに顔を向ける。

「ヒーローなんてえ所詮その場だけのお存在さあ。【命】は救えてもお【人】は救えないい」

「……」

マンダレイは言い返す言葉が出なかった。実際に目の前に2人の犠牲者がいるのだから。

親戚の冼汰すら救えていないのだから、少なくとも自分に言い返す資格も言葉もない。

「じゃ、じゃあなんでお前はヒーローを目指してるんだよ……?」

冼汰はズボンを両手で握り締めながら、刃羅に質問する。

それに刃羅は少しだけ首を傾げて考える。

「そうでありますなあ。最後の審判……でありますな」

「……最後の……審判……」

「今のヒーローはあん信じられないしいん、期待できないわあん。だからあん、これからあん生まれるであろううんヒーローを間近でえん見るためよおん」

「自分が信じられるヒーローが?」

「そして、そのヒーローの手伝いが出来るのであれば……少しは前に進めるであろうな」

「……じゃあ、そのヒーローが見つけれなかったら?」

冼汰は意を決した様に刃羅に質問する。

刃羅はまっすぐ冼汰の目を見据える。

「第2のヒーロー殺しが生まれる……それだけだ」

刃羅の言葉に目を見開いて固まる冼汰達。

「もはや私は止まれませんわ。あなたはどうするのですか?あなたにはまだまだ時間があります。周りには人がいます。何より……両親を嫌っているわけではないのでしょうか?ヒーローであった両親を憎んでいるわけではないのでしょうか?あなたが一番大事にしたいのは何か。それを考えてみてくださいいな」

そう言うと刃羅は右手に持っていたジュースを冼汰の前に置いて背を向ける。拳藤に近づき、手に持っていた残りのジュースを拳藤に

渡す。

「少し頭を冷やしてくるべ。梅雨ちゃん達には謝つといて欲しいべ」

「……あんた」

戸惑う拳藤を尻目に刃羅はひらひらと手を振りながら、外へと向かう。

その背に声を掛けることは、誰も出来なかった。

刃羅は森の中の木の枝の上で胡坐を組んで座り、星空を眺めていた。

そして、先ほどの洗汰との話を思い出していた。

「あれだけ緑谷に警告して斬り捨てておきながら……情けないというか恥ずかしいというか……」

自分に呆れてしまう刃羅。

何をしているのかと思う。しかし、放っておけなかったのも事実。体育祭で轟に叫んだ『自分と同じ者を生み出さない』というのは本心だからだ。

それを為すためには今のヒーローでは、今の社会では無理だと言う考えは変わらない。

無報酬で人を助けるのは酷であると言うのは理解している。

刃羅が一番納得出来ていないのは『ヒーロー活動で優劣を競っている』ということだ。

ヒーロービルボードチャートJP。現役ヒーローの番付。これによつて多くのヒーローが事件解決や支持率向上のため名誉を求め、競い合っている。

その場限りの人助けばかりに目を奪われている。

だから、蹴落とされる者が減らない。社会から弾かれる者が減らない。苦しむ者が減らない。そう刃羅は考えている。

正しき社会のため、誰かが血に染まらねばならない。

そこまで歪んでしまっていると刃羅は考えている。

「……部屋に帰つてもく梅雨ちゃん達にく怒られそうだな。でもく

戻らなかつたらしく先生に怒られそうだな。ラグドールの《サーチ》でここも分かっているだろうし」

拳藤とマンダレイから洗汰との会話は伝わっているだろう。

ステインになるかもしれないとまで言ってしまった。間違いなく、梅雨達や相澤は問題視するだろう。

唸りながら考え込みながら、星空を見上げる刃羅だった。

そうして2時間が過ぎた。

いい加減戻らねばヤバいかと思い、枝から飛び降りる。

地面に下り立った瞬間、気配を感じて目を鋭くする刃羅。

腕を変えようとするが、変えることが出来なかった。

「っ!!ということは!」

『個性』が封じることが出来るのは唯一人。

それに思い至った瞬間、刃羅の全身を包帯のような布が縛り付ける。

相澤の捕縛武器だ。

「ぐうえ!」

「全く……峰田と言い、男子と言い、お前と言い……元氣にも程がある」

「まあまあ……若いんだからさ」

「アハハハハ!見つけ!」

現れたのは髪を逆立てた相澤、マンダレイ、ラグドールだった。

刃羅は縛り付けられて、横に転がる。

「マンダレイや拳藤から話は聞いた。まあ、緑谷のお節介がきつかけだし、お前の事情も事情だ。無断外出は見逃してやるが、いい加減戻れ。蛙吹達が騒いでるぞ」

「……む」

梅雨の名前に刃羅は顔を顰める。

それを見たマンダレイが申し訳なさそうに声を掛ける。

「ごめんよ。洗汰と私達のことです辛い話ばかりさせちゃって。しかも他の子にも聞かれたから帰り辛かったんだね」

「……はあ。とりあえず戻るぞ。蛙吹達にはちゃんと自分で話せ。こればかりは俺達でフオローでできることじゃない。それもお前の課題でもある」

「むう」

拘束を解かれて、立ち上がりながら顔を顰めたまま唸る刃羅。

その後、施設に戻った刃羅は梅雨に舌で拘束され、布団で簀巻きにされ、梅雨と百に抱き枕にされて寝ることになるのであった。

#27 そして世界は動き出す

林間合宿3日目。

朝、朝食を食べるために食堂に集まった緑谷達は不思議な光景を目にする。

「おはよう。麗日さん」

「おはようーデク君」

近くにいた麗日に挨拶する緑谷。それに麗日も笑顔で返す。

緑谷は光景に視線を向けて、麗日に尋ねる。

「乱刀さんはどうしてあんなことに？」

「あ〜……あははは……色々あったんよ」

「色々って……」

緑谷達の視線の先には、刃羅とその左右に梅雨と百が座っていた。ただし、刃羅の首には黒い首輪が付けられており、その首輪には2本の鎖が伸びていた。鎖の先はもちろん梅雨と百である。梅雨の右手首と百の左手首に腕輪のようなものがあり、そこに鎖が繋がれている。

犯罪者でも捕まえているかのような警戒態勢だ。刃羅は顔を顰めながらも、黙って朝食を食べている。

その光景に男子陣は顔を引きつかせる。

「またなんか怒らせることをしたのか？」

「はっ！馬鹿が！」

「だったらお前らもするか？首輪」

轟が首を傾げ、爆豪がざまあ！とばかりに鼻で笑うが、そこに相澤が現れる。

「どっかの馬鹿共の暴れっぷりに比べれば、まだマシなことだ。その乱刀があんなことになってるなら、お前らもされるべきだよな？」

相澤の言葉に男子達は昨日の説教を思い出して、顔を青くする。

「とつと朝飯食え。お前達は今日は2倍のメニューなんだからな」

「は、はい……！」

大人しく席に座り、食事を始める男子陣。それにため息を吐き、相

澤も食事を始める。

補習組は声を上げる元気もなく、眠気と戦いながら食事を続けており、静かだった。

ちなみに刃羅が顔を顰めているのは、首輪ではなく、眠気を耐えるためだった。抱き枕にされたせいで、落ち着かず全く眠れなかったのだ。もちろんそれを梅雨達には気づかせていない。それを誤魔化すために不機嫌な顔をしているのだ。

「ハグ……ンぐ……ンマンマ……流石に〜そろそろ〜外してほしいな〜」

「駄目よ」

「駄目ですわ」

「……アイヤ〜」

見向きもせず即却下する梅雨と百。がつくりと肩を落として食事を再開する。

そこに申し訳なさそうに拳藤が近づいてくる。

「あ、あのさ……そろそろ許してやってくれよ。私も止めなかったの悪かったからさ。それにあの内容じゃさ、仕方がないところもあるし」

「駄目よ」

「駄目ですわ」

拳藤の言葉ですら聞き入れない2人に、男子陣は更に不可解と首を傾げる。

クラスが違う拳藤まで関わっており、問題があったなら説明があってもおかしくない。

「何があったんだ？」

「さあ？喧嘩って感じでもねえしな」

「相澤先生も止めねえし」

「しかし蛙吹と八百万の怒りは相当なようだぞ？」

「麗日くん。何があったんだ？」

「ん〜……ちよつと話し辛いんよね」

飯田の質問に麗日は眉を顰める。近くにいた他の女性陣も困った

ように頷いている。

それに更に困惑する男子陣。

朝から刃羅と洗汰の会話について話すのは重過ぎるし、洗汰の身の上話がどんどん広まってしまうことになる。相澤やマンダレイからも口止めをされているので、何とも言えないのだ。

昨晚も刃羅が帰ってきた後に、女子陣で尋問紛いのことをしたが、刃羅は一切口を開かなかった。拳藤から話を聞いていたのである程度内容は知っているが、刃羅の口から聞きたかったのだが、刃羅はその話題になると一切話さなかった。

その不満の結果が簀巻き抱き枕と首輪なのだ。

その後、食事を終えた刃羅達はジャージに着替えて、昨日の修行場に向かう。

もちろん首輪は継続中。着替えの時だけ鎖を外されて、梅雨と百にジイーっと見られながら着替える。着替え終わると同時に鎖を繋かれる。顔を顰めるが誰も助けはくれなかった。

緑谷や飯田は「やめたらどうだ？」と声を掛けるが、梅雨と百の無言の抗議の視線に屈した。

今は心配そうに麗日と共に後ろで刃羅を見つめている。

「緑谷」

そこに相澤が声を掛けてきた。

緑谷は戸惑いながら、相澤に近づく。

「なんですか？」

「……昨日、乱刀が洗汰君に声を掛けたそうだ」

「!!」

相澤の言葉に緑谷は目を見開く。

「その内容は俺からは話せん。麗日達にも口止めしてある。乱刀も全く話さないそうだ。あれはそのせいだな。まあ、話した後少し外に出たのもあるだろうが」

「……」

「あれから洗汰君も考え込んでいるそうだ。気になるかもしれんが、あの子が答えを出すまでは待ってやれ」

「……はい」

「乱刀から何を話したのか聞くのは止めんが、無理矢理聞き出すのは止めておけよ。その理由は言わなくても分かるな？」

「はい」

頷いた緑谷を見て、相澤は歩みを速めて離れていく。

それを見送った緑谷は考え込みながら飯田達の元に戻る。

「大丈夫かい？」

「うん」

「……刃羅ちゃんのこと？」

「……うん。僕が巻き込んだみたいなものだから」

「そっか」

それを聞いた麗日は駆け足で、梅雨達に近づき声を掛ける。そして緑谷を指差し、緑谷を呼ぶ。

緑谷は少し慌てながらも刃羅達に近づく。

「どうかしたのかしら？」

「え、えつとお……乱刀さんのことなんだけど」

「刃羅ちゃんのこと？」

「き、昨日の事は僕が発端なんだ。僕が乱刀さんを巻き込んだから」

「どういうことでしょうか？」

「実は……」

緑谷は昨日の夕食時の洗汰との会話と、その後の刃羅との会話について話す。

それを聞いた梅雨達は事情に理解はするも、どこか納得しきれない自分達がいて顔を顰める。

刃羅は特に反応せず腕を組んで黙っている。

緑谷は頭を下げて刃羅達に謝罪する。

「ごめんなさいー！」

「……はあく」

緑谷の後頭部を見て、刃羅は深くため息を吐く。

「何に謝るアルか？まだ結果が出たわけでもないヨ」

「……それは」

「私は唯一人で勝手に話したただけだ。謝罪される筋合いも、礼を言われる筋合いもない」

そう言つて刃羅は前を向いて歩き出す。鎖に引っ張られて梅雨と百も歩き出す。

その後ろ姿を緑谷は申し訳なさそうに見つめるしかなかった。

訓練場に着いて流石に首輪を外された刃羅。

他の者達はさっそく訓練を始める。

「ミーは？」

「お前はこれだ」

相澤が指差したのは昨日も付けた重りだった。

「……」

「重さは変わらん」

「……」

「それにグローブとプロテクターを着ける。これも重さは変わらん」

「……」

「今日は切島と緑谷、B組の鉄哲を同時に相手にしてもらおう。もちろん本気でやってくれて構わない」

「罰したいなら、もう口にしてくれないかね!? 確か男子は2倍のとどだったが、自分の方が増えているのだがね!？」

「最後まで聞け。その代わり、走り込みはなし。奴らが倒れている間は休憩とすること構わん」

「……3人同時に倒れさせると? 無茶苦茶だろうに」

相澤の言い分に顔を顰める刃羅。

それでも重りを身に着けていく。決まっている以上変わることはないだろうし、視界の端で準備運動している切島達がいるからだ。

グローブとプロテクターも身に着けて、刃羅も柔軟を始める。

「本気でいいんだべな?」

「……ああ」

もう一度確認する刃羅に、頷きながらも少し嫌な予感がする相澤。許可を得た刃羅は、パン!とグローブ同士を打ち合つて前が出る。

「ほな、やろか」

「おう！まずは俺からだ！」

「全員だと言ってるだろうが」

「け、けど相澤先生！やっぱ、いくらなんでも！」

「構わぬ。全員で来るがよい。大して変わらんからのう」

その言葉に切島と鉄哲は流石にカチンときた。緑谷はどうすればいいのかとアワアワしている。

「後悔すんなよお!!」

切島と鉄哲が硬化しながら走り出す。緑谷は駆け出さずに、まずは乱刀の動きを見ることにした。

切島と鉄哲が殴りかかろうとした瞬間、刃羅はしゃがんで右脚で足払いを繰り出す。殴りかかっていた2人はもちろん避けられるわけもなく、足を払われて前に倒れ込んでいく。刃羅はバク転して後ろに下がりがながら、切島と鉄哲の顎を蹴り上げる。

「ぐお!?」

逆立ちになった瞬間、刃羅は脚を開いて体を右に捻じりながら左脚から着き、右脚を前に出して上半身を起こしながら右拳を振り抜き、鉄哲の腹部に叩き込む。

「ばがあ!?!」

鉄哲は背中から地面に叩きつけられる。緑谷はその光景に目を見開く。

切島は蹴り上げられた勢いで後ろに倒れる。そこに刃羅は詰め寄り、I字バランスの如く左脚を振り上げて一気に振り下ろす。緑谷は一瞬叩きつけられると思ったが、左脚は空振りする。緑谷は「え?」と驚いたが、空振りした刃羅は左脚を後ろに振り上げながら飛び上がり、空中で一回転して左脚を踵落としのように切島の体に叩きつける。

「ぐぼお!?!」

「重り付きやよって。効くやろ?」

「ぐ……ぐ……ほつ……」

切島は口から朝食を吐き出して悶える。鉄哲も吐くまではいかな

かったが、腹を抱えて起き上がることが出来なかった。

その光景に緑谷は完全に硬直し、相澤やブラド、近くで訓練していた生徒達も訓練を中断して注目する。

刃羅は緑谷を見据えて飛び出す。それに慌てて緑谷は全身に力を回して、近づいてくる刃羅を見据えて、拳を構える。

刃羅が目の前に来た瞬間に右拳を振り抜こうとする緑谷。それを見た瞬間、刃羅はすり足に変えて、左足を後ろに下げて半身にしながら右拳で緑谷の右ストレートを逸らして空振りさせる。

緑谷の腕が伸び切った瞬間、体を捻り左ストレートを緑谷の右顔面に叩き込む。

「っー」

「二辺倒だよね！アッパァー!!」

「!!?」

刃羅はすぐさま右アッパーを繰り出して、緑谷の顎に突き刺す。緑谷は両脚が地面から30cm近く浮き上がり、大の字で後ろに倒れる。

刃羅は右腕を下ろして、3人を見渡す。緑谷、切島はまだ起き上がれず、鉄哲は四つん這いにまではなっているが、立ち上がれてはいなかった。

「ふう……重いでござるなあ。走るのも一苦労でござる」
「((どが!))」

見ていた全員が心の中で突っ込んだ。

「で。起き上がるまでは休憩ということでもいいのだな?」

「……ああ」

刃羅の言葉に相澤は顔を顰めて頷く。

まさか本当に3人同時に倒すとは思っていなかった。しかも切島、緑谷に関しては回復までに時間がかかりそうだった。

「……70Kg近く重くなってるのに、あの動きか」

「……底がしれんど。本当に」

相澤とブラドは腕を組んで唸る。

それを尻目にぐるぐると右肩を回しながら刃羅は3人に声を掛け

る。

「何のために3人いるんだべか？せつかく《硬化》出来る2人がいんに、並んで真正面から来れば対処なんて簡単だべさ」

「ぐ……………」

「ち…………くしよ…………」

「切島はんは昨日のこと教えとらんのか？しかも、いきなり足元おろそかになつとるやないか。鉄哲はんも切島はんとわざわざ同じ攻撃してどないすんねん。逃げ道を減らしや。緑谷はんは全身強化しとんのに、攻撃手段がいつも同じ過ぎてオモロないわ」

「お…………なじ…………？」

刃羅の言葉に今の戦闘を振り返る3人。

「ほれ。戦場でいつまで寝ておるのじゃ！」

「ぐっ！うおおおおお!!」

「ぬうあああ!!」

「うううう!!」

刃羅の言葉に歯を食いしばりながら立ち上がる3人。

それを見届けた刃羅は、すぐさま緑谷に向かって走り出す。

緑谷はふらつきながらも拳を構える。そして再び右腕を引く。

「だから一辺倒！」

「ぶっ！」

刃羅は左ジャブを素早く放ち、緑谷の顔にパァン！と軽く当てる。

それにより目を瞑ってしまい、攻撃が止まる緑谷。

「そして足はただの移動手段か!?!」

「ぐう!?!」

緑谷の左膝横に右下段蹴りを放つ刃羅。それにバランスを崩す緑谷だが、追撃はなかった。

刃羅は後ろを振り返る。そこには鉄哲と切島が迫っていた。刃羅が腰を下げた瞬間、2人は足払いに備えて速度を緩める。しかし、直後刃羅は飛び出す様に前に出て、右ストレートを切島の顔に叩き込む。

「!?!」

「切島!？」

「人の心配してる場合かね!？」

ガアン!と鉄哲の左脛に、左ローキックを叩きつける刃羅。

「ぐっ!」

「反応が遅いよ!」

「!？」

痛みに呻いた鉄哲の顔に左フックを叩き込まれる。それに鉄哲は倒れ伏す。隣には切島も仰向けに倒れていた。

その時、刃羅の後ろから緑谷が飛び掛かってきた。両手を伸ばし、掴みかかろうとする。

それに刃羅は前に飛び出して、鉄哲と切島を飛び越えて躲す。

「!？」

「背中を向けていけば、そこを狙うよな?それが分かっていたら、逆に前に出ればむしろ安全ってわけだ。まあ、てめえらの手内が分かっていたからのやり方だがな」

「くっ!」

後ろを振り返りながら話す刃羅に顔を顰める緑谷。

刃羅は間に倒れている2人を見下ろす。

「貴様らは人の忠告を聞く耳はないのか?背を向けているとはいえ、何故2人同時で来る?」

ゆっくりと緑谷に向かって歩き始める刃羅。緑谷は後退りしながら構える。

「下がるんじやねえよ!!出久屋あ!!」

刃羅の声に足を止める緑谷。その瞬間、刃羅は横たわっている鉄哲の頭を蹴り上げた。

「が!？」

「!？」

「自分と敵の間に仲間が倒れとるのに下がるアホがどこにおるんや!!そして倒れとる時に攻撃が来んとか何してるんや!!戦闘中やぞボケエ!!」

刃羅の剣幕に飲まれる緑谷達。

刃羅は飛び上がり、切島と鉄哲の真上に移動し、踏みつけようとする。

それに慌てて転がって避ける切島と鉄哲。起き上がろうとした時には、身を低くして緑谷に迫っている刃羅。

緑谷は逆に前に出て掴みかかろうとする。しかし、刃羅も両腕を伸ばして緑谷の両腕の内側に差し込み、緑谷の頭をグローブで挟む。

それに慌てて緑谷は刃羅の両腕を掴もうとするが、その瞬間に刃羅は両腕を広げて緑谷の腕を弾く。そして、そのまま突っ込んで緑谷の鼻に頭突きを叩き込む。

「!!?」

今度は切島と鉄哲が刃羅の左右から挟み込むように迫る。

刃羅は切島に向かって走り出す。それに一瞬驚いてしまい、動きが鈍った切島。再び右ジャブが切島の顔に放たれ、怯んだ瞬間に切島の右腕を抱えて一本背負いを放つ。あまりにスムーズな流れに切島は何が起こったから分からず受け身が取れずに地面に叩きつけられる。

「がはっ!」

「くっ!」

背中を強打して、肺の空気が吐き出されて一瞬呼吸が止まる切島。そして刃羅の背後から迫っていた鉄哲は切島が投げられたことで妨害され、足を止めてしまう。

その瞬間、刃羅は大きく鉄哲に向けて飛び上がり、飛び蹴りを放つ。鉄哲の胸に飛び蹴りが突き刺さり、後ろに吹き飛ぶ鉄哲。

着地した刃羅は3人を見渡す。3人は仰向けで倒れており、起き上がる気配はなかった。

「流石にここまでかなあ?ちよつと休もうかあ。水飲みたいしいい?」

「構わん」

相澤に確認を取って、休憩に入る刃羅。

グローブとプロテクターを外して、ピクシーボブから水とタオルを受け取る。

水を飲みながら3人の様子を見る。緑谷は鼻血が出ているようで

鼻を押さえながら、ピクシーボブから水を受け取っていた。

「午後も続けるアルか？」

「いや、午後は違うメニユーだ。今を見てると、緑谷はやはりまだ早すぎるようだしな」

「それがよろしおす」

「緑谷、切島、鉄哲。もう一度、乱刀の言葉をしっかりと反芻しとけ」

「……はい」

「乱刀もヒント程度で構わん。考えさせろ」

「んなら、もうあんまり言うことないべなあ。……ただ」

「ただ？」

「拙者がヴィランだったら、殴られた回数分、お主らは死んでおるぞ。

拙者の『個性』ならばな」

「!!」

刃羅の言葉に目を見開いて顔を真っ青にする3人。

確かに『個性』アリだったら、殴り合うことすら無理だ。

「まあ、今回はそれ前提だから構わんが。それにしてもお前達の行動は殺されないことが前提過ぎる。体育祭の試合ではないのだぞ？なにより全員攻撃が『拳』一択だから、対処が非常に楽だな」

「あ……」

「……確かに」

「言われてみれば……」

「なんのためのく全身硬化に強化なのかく考えてみれば？」

刃羅の言葉に唖って考え込む3人。

それを横目に重りを外して、伸びをする刃羅。

「んく!!……ふわあ」

「あんなに動いて、今伸びしたのに、なんで欠伸なのよ」

「眠いものは眠い！」

水でタオルを濡らして、顔を拭く刃羅。

その様子をピクシーボブは呆れたように見つめる。

刃羅は切島達に目を向ける。3人はぐったりとしながらも、反省点や改善点を話し合っているようだ。

まだ時間がかかりそうだと思った刃羅は、岩場に顔を向け、足を進める。

岩肌の前に立った刃羅はペタペタと触り感触を確かめる。

「……うくん。行けるかなあ？」

少し首を傾げながら、一歩後ろに下がる刃羅。

その様子にピクシーボブも「何してるの？」とばかりに首を傾げる。すると、

「ふん！」

ガアン！

いきなり岩肌に右拳を叩きつける刃羅。もちろんグローブはして
いない。

音が轟き、岩肌に少し放射線状に亀裂が入る。

「ふん！」

ガアン！

続いて左拳を叩きつける。

それに周囲の者達は目を向ける。

「乱刀……何してる？」

「ん？拳鍛えてる。殴る瞬間に刃生やしてるけどな」

相澤に刃で覆っている拳を見せる刃羅。それを見て、目的は理解した相澤。

「攻撃の瞬間に刃を変える速度と強度を高める訓練か」

「なのです。木や土人形じゃ強度が足りないのです！」

「まあ、だろうな」

相澤はヒビ割れた岩肌を見る。岩肌は拳の形にへこんでおり、そこから放射線状にヒビが走っている。

「ん？」

その時、そのヒビに違和感を感じた相澤。近づいて確認し、あることに気づく。

拳の指に当たる部分の亀裂が深かったのだ。まるで刃物を深く刺したみたいだ。

相澤はギロリと刃羅を睨む。

「おい、乱刀」

「……ノーコメント！デース！」

「ふざけるな」

逃げようとした刃羅に捕縛武器を飛ばす相澤。

刃羅は捕まる直前に這いつくばるように身を低くして躲す。

「ガル！」

「この……！」

相澤は続けて縛ろうとするが、刃羅は四肢に力を入れて、後ろに飛び跳ねて躲す。

「グルルア！」

着地を狙って鞭のように捕縛武器を振るう相澤。

それを刃羅は獣のように四つん這い主体の動きで躲す。

「獣かよ!？」

「なんちゆう動きを……！」

刃羅は一気に走り出して、相澤から離れる。

「逃げるが勝ちであります！」

「駄目よ」

刃羅の左脚に梅雨の舌が巻き付く。

足を引つ張られて転び、顔から地面に叩きつけられる。

「むぎゃん!?!ぬぎゃあああ!?!」

顔を押しさえてジタバタと痛みに悶える刃羅。

相澤と梅雨が近づいてくる。

「よくやった。蛙吹」

「ケロ」

「さて、説明してもらどうぞ。乱刀」

「ぐうえ!?!」

相澤に縛り付けられる刃羅。引つ張り起こされ、相澤に見下ろされる。その隣には舌をブラブラさせている梅雨もいる。

「ふん」

刃羅は顔を背けて返答を拒絶する。

それに相澤は目を鋭くして拘束をきつくするが、刃羅は顔色を全く

変えなかった。

「……はあ」

相澤はため息を吐いて、拘束を解く。

「分かった。何も聞かん。ただし、その修業は今後するな」

「……はいな」

刃羅は肩を竦めて頷く。

再びため息を吐いて、他の生徒の所に向かう相澤。

刃羅は立ち上がり、切島達の元に戻る。それを梅雨は少し寂し気に見送った。

その後も訓練は続き、緑谷達3人は再び刃羅にボコボコにされた。

昼休憩中、刃羅は森に入っていて梅雨達の前から姿を消していたことで、梅雨達を心配させていたが、休憩終了直前にふらりと戻ってきた。

梅雨達が声を掛けるが、あまり答えてはくれなかった。

午後の訓練、刃羅は重りを付けて走り込みになり、顔を顰めたまま走り続けていた。今回は無茶苦茶な壁はなかったので、終始大人しく走り続けていた。

そして夕食の準備の時間。

「さて、今日は肉じゃがだよー」

「が、昨日男子が問題を起こしたので、男子は肉抜き。女子で話し合っ
て決めろ。そのため、調理は男子と女子で分かれて行え」

『……は〜い』

そして拳藤と百の話し合いの結果、A組が牛肉、B組が豚肉となった。

男子は沈んだ様子で調理を始める。女子も申し訳なさそうな雰囲気
気で調理を進める。

「なんか……申し訳ないな」

「分けたお肉も余ってしまいますね」

耳郎と百が男子の方を見て憐れむ。しかし、相澤達が決めたことを
破るわけにはいかない。

刃羅はいつも通りサラサラと指を刃物に変えて、野菜の皮を剥き、肉なども切っていく。

「ケロ？刃羅ちゃん、そんなお肉は使えないわ」

「だべなあ」

「じゃあ、どうして？」

刃羅はほぼ全ての肉を切っていた。それに梅雨や麗日は首を傾げて尋ねる。

それに刃羅は答えずに、肉の3つの更にそれぞれ盛り付け、その内の2つを持って男子の方に向かう。

男子達は切った野菜を炒め始めていた。

「ん？乱刀？」

「おっとお。肉が飛んでったあ」

「「おお！」」

刃羅はポイ！と肉を放り投げながらわざとらしい言葉を言う。炒めていた鍋2つに肉が投じられる。

「ら、乱刀！」

「乱刀くん！なにを!!」

「おや、肉が男子の鍋に入ってしまったのである。しかし、ここで取り出しても勿体ないだけであるなあ」

「……お前」

「どうするアルか？先生。ここで肉を取り出すのも、作り直すのも非合理的アルよ」

確信犯にしか見えない行動だが、すでに投じられたのも事実。

それに相澤は顔を顰め、マンダレイ達は苦笑する。

「……残すわけにもいかないだろ。そのまま作れ」

『ありがとうございます!!』

相澤の言葉にA組男子がガバア！と頭を下げる。

その隙に刃羅は何でもないように女子達の元に戻る。

「刃羅ヤルウ!!」

「お見事ですわ！」

「ケロケロ」

芦戸達が笑って刃羅を称える。刃羅はなんでもないように、追加でくべる薪を準備する。その姿をクラスメイト達は微笑んで見つめる。これによりB組男子も肉許可が出て、喝采が上がるのだった。

そして夕食後。

「さて！腹も膨れた！皿も洗った！お次は……」

「肝を試す時間だー！」

「試すぜー!!」

芦戸達補習組が無理矢理とばかりにテンションを上げる。

「その前に大変心苦しいが、補習連中はこれから俺と補習授業だ」

「ウソだろ!？」

芦戸が絶望の表情で叫ぶ。そして相澤に縛り付けられる補習組。

「すまん。日中の訓練が思ったより疎かになっていたので、こつちを削る」

「二うわああああ!?!堪忍してくれえ!!試させてくれえ!!」

引きずられていく補習組を憐れみながら見送る一同。

クラス対抗肝試しは2人1組で3分置きに出発。

脅かすのはB組先行となった。

組はくじ引きとなり、刃羅は百とのコンビで4番目の出発となった。

「よろしくお願いしますわ」

「こちらこそ」

何だかんだで女子は女子で固まったようだった。

峰田がそれに憤慨していたが、誰も反応することはなかった。

「で？百はん、肝試しは？」

「初めてです。で何とも……」

「お化け的なのは大丈夫なのかね？」

「大丈夫ですわ」

「わっちもや」

全く怖がる気配がない2人だった。

そして1組目の障子・常闇ペアがスタートする。

2組は轟・爆豪ペア。

「なんでっ……半分野郎と……!」

「くじだから仕方ねえだろ」

「うるっせえ!話しかけんな!」

「仲が良い切島と上鳴がいらないから、宥め役がいらないのです」

「心配ですわね。……B組の方に迷惑を掛けないと良いですけど」

「無理なことは望んじやダメだべ」

「おめえもぶっ殺すぞ!イカレ女あ!」

「やってみるがよい」

「はいはい!次のペア!」

不安なペアが出発した。

3組目は耳郎・葉隠ペア。すでに腕を組み合って震えている。

どうやら苦手な2人だったようだ。

そして6分後、耳郎達の悲鳴が聞こえながら出発する刃羅。

「なんか……ここまで悲鳴が聞こえると逆に怖くなるでござるなあ」

「そうですか?結構B組の方々も工夫されているようですし、案外怖いかもしれませんかよ?」

「あ……ん……」

「?どうしましたの?」

何やら言い淀む刃羅に、隣を歩く百が首を傾げる。

刃羅はホットパンツのポケットに両手を突っ込んで、顔を顰める。

ちなみに上はへそ出しタンクトップだ。

「……気配が分かっちゃまってよお……隠れてんの分かんだよなあ」

「……あははは、なるほど」

刃羅の言葉に百は苦笑して納得する。

静かな夜の森なのもあって、こつちを窺う視線や気配をはつきりと感じてしまう刃羅だった。元々動物が少ない森のため、特に分かりやすい。

しばらく歩いていると、刃羅はふと目の前の地面に視線を向ける。それに気づいてしまった百。

「……いますか？」

「……聞いたらあかん」

「……すいません！」

会話が聞こえてたのか、左右の茂みから音がする。

それに刃羅はさらにげんなりする。

「動揺するでないわ。そこに潜っておる者が余計に憐れではないか」

その声に拳藤と骨抜が茂みから顔を出す。そして地面が蠢き、ひよこつと小大が顔を出す。

「……なんでわかるんだよ」

「気配ダダ洩れ過ぎるのです。だから、黙ってたのです。でも百ちやんが気づいて聞いてきたのです」

「……ごめんなさい」

「それに動揺して音を出すから、誤魔化しようが無くなったのだよ」

「……」

「……すまぬでござるな。唯殿」

「んーん」

刃羅の謝罪に小大が首を振る。

刃羅達は微妙な雰囲気の中で進み始めるが、再び刃羅が足を止める。

「乱刀さん……？」

「……」

百はまたB組を見つけたのかと思ったが、刃羅の眼が鋭くなっており、忙しなく視線が動いている。

ポケットからも手を出しており、明らかに警戒態勢だった。それに百も異常を感じ取る。

「この臭いは……？」

少しだけ焦げ臭いのを感じた百。

「……それだけではない」

「え？」

「……耳郎達の声が……消えた」

「!？」

目を見開いて耳を澄ませる百。先ほどまで響いていた声が全く聞こえなくなっていた。

それに駆け出そうとする百だが、刃羅に腕を掴まれる。

「乱刀さん!？」

「有毒ガスであります!!この先からであります!!」

刃羅は口元を手で覆いながら叫ぶ。

それを聞いた百はすぐさまガスマスクを作り出す。

「これを!」

「謝謝!!」

ガスマスクを装着する2人。

「まずは耳郎さんの元へ!」

「百はガスマスクを量産しろ!B組にも渡せるようにな!」

「はい!」

走り出す刃羅達。

すぐに2人は見つかった。すでに意識はないようだった。

「耳郎さん!葉隠さん!」

「マスクを!」

「はい!」

「おい!お前ら!」

現れたのはB組の泡瀬だった。

「大丈夫か!？」

「俺たちたちはな!これを付けろや!」

「すまねえ!」

「他のB組連中は分かるかよい!？」

「分かる!」

「百!拙者はこの2人をラグドールのところに連れて行く!お主はB組にマスクを配るのだ!」

「分かりましたわ!」

「行くぞ!」

刃羅は2人を肩に担いで、中間地点に向かって走る。

百達は森の中に入って、他のB組の元へと走り出した。

『皆!!』

そこにマンダレイの《テレパス》が響く。

『ヴィラン3名襲来!!他にも複数いる可能性あり!!動ける者はすぐに施設へ!!会敵しても決して交戦せず撤退を!!』

「無茶言うべなあ!!いや!!このガスはマンダレイ達まで届いてないんだべかってえ!!?」

中間地点と思われる場所に見えた光景に目を見開く刃羅。

巨漢の上半身裸の男が、ラグドールを後ろから不意打ちして倒す光景だった。

「脳無!?敵連合じゃと?!おのれえ!!」

刃羅は歯軋りをして、抱えている2人を下ろしてスピードを上げて脳無に迫る。

左腕をロングソードに変えて、脳無を斬りつける。

「しい!!」

「ネホヒャツ!?!」

脳無の左手を斬り落として、すぐさまラグドールを抱えて距離を取る。

「ラグドール!!」

「……う……あ」

「シィットー!」

死んではいないが、かなりの出血だった。戦闘は不可能と判断する。

(意識不明3人!しかも相手は脳無!絶望的状况であるな!)

絶望はさらに加速する。

「おっとおー!これはラッキー!」

「!!」

脳無の後ろに現れたのはシルクハットと仮面を被り、コートを羽織った男。

刃羅はその姿に心当たりがあった。

「……Mr. コンプレス……!」

「おや?俺の事知ってるのか。流石だねえ。ステインの弟子だっけ

？」

コンプレスはお道化たように両手を広げる。

「随分とお思い切ったことおするねえ」

「だからいいんだろ？いい狼煙になるってな！」

「そういうことかえ……」

「自己紹介しとこうか。こいつ喋れねえしな。我ら！敵連合・開闢行動隊!!ってな」

その名乗りに顔を顰めながら、ラグドールを抱えて逃げる手段を考える刃羅。

それに気づいたのかコンプレスが刃羅を指差す。

「おっとお！悪いけど逃がさねえよ？お前さん達は一緒に来てもらおうぜ？」

「……何？」

コンプレスの言葉に訝しむ刃羅。それにコンプレスは両腕を広げる。

「ラグドールはよく知らねえが、乱刀ちゃん。君はヒーロー側にいるべき人材じゃあねえ！ステインの意志、継がなくていいのか？」

コンプレスの言葉を聞いた刃羅の顔から表情が消える。

ラグドールを下に寝かせる。

「お？やっぱ抵抗しちゃう？」

「抵抗？違う」

両腕をロングソードに変える刃羅。

「これは粛清だ。社会の屑ども!!正しき社会の供物になるがいい!!」

刃羅はコンプレスに向かって走り出す。

楽しい林間合宿は、一瞬にして崩れ去っていった。

世界を揺るがせる戦いが遂に始まった。

#28 ぶつかり合う意志と敗北

刃羅はコンプレスに斬りかかる。

「おっとー！」

コンプレスはヒラリと躲す。

刃羅はすぐさま脳無に標的を変えて、斬りかかる。

「ネホヒヤン!!」

脳無は背中からチェーンソーやドリルを何本も生やす。

刃羅はすぐさま離れてラグドールの傍に下り立つ。

「ちいー！」

「諦めてくれねえかねえ。あんまり俺もこのガスの中いたくねえしよ」

「では、とつとと斬られる」

「それは困るぜ」

コンプレスは余裕があり、刃羅も不敵に返すが内心では顔を顰めていた。

脳無の武器が刃羅との相性が悪いのだ。自分の武器を削られれば、刃羅の体が傷ついてしまう。

2対1、しかも意識不明者3人という状況では下手な傷は負えない。しかも向こうの『個性』の詳細は不明だ。

コンプレスの噂を知ってはいるが、分かっているのは人や物を閉じ込める『個性』ということだけ。

「多少は諦めるか……」

「殺すなよ！ってえ聞こえてねえか！」

「ネホヒヤンー！」

コンプレスの言葉に眉を顰める刃羅。

(奴の指示には聞かないのか？まあ、今までも死柄木の言葉しか聞いていなかったしな。それにネコちゃんって言ってるのか？)

脳無の狙いはラグドール。恐らく脳無が襲ったところをコンプレスが回収する段取りだったのだろう。

ガスだけでは捕らえられないと考えた策なのだろう。

(何故ラグドールを狙う? 一番可能性があるのは《サーチ》。居場所がバレたら困るからか?)

「……ターゲットは私達だけか?」

「教えると思う?」

「その言い方をする時点で別にもいると言っているぞ。馬鹿が」

「……言ってくれるねえ」

雰囲気が変わったコンプレス。

その様子に「もう聞き出せないな」と諦める刃羅。

刃羅は脳無に向かって走り出す。

脳無はチェンソーとドリルを刃羅に向ける。刃羅は腕を戻して、紙一重で躲しながら脳無に迫る。

「なんて動きしやがる!?!」

コンプレスの驚く声が聞こえるが、刃羅は無視をして力強く地面を蹴り、脳無の股下にスライディングして滑り込む。股下をくぐり抜ける瞬間にうつ伏せに回転し、両腕を大鎌に変えながら起き上がる。

「ふんぬうあああ!!!!」

そして両腕を振り上げて、脳無を大鎌で引っ掛けて放り投げる。脳無は手足をバタバタとしながら上空へと放り上げられる。

「なああああ!?!」

コンプレスが脳無を見上げて驚きに叫ぶ。

その隙にラグドールを連れて離れようとした刃羅。

しかし、

「!?!いいい!?!」

横たわっているはずのラグドールが見当たらなかった。

コンプレスかと思ひ、振り向く刃羅。

「馬鹿な!?!あの怪我で動けるわけが!しかも生徒を置いて!?!」

しかしコンプレスも驚いていた。

それに嘘はなさそうだと考えた刃羅は、切り替えて葉隠達の元に向かう。

「逃がさねえよ!」

コンプレスが追いかけてくるが、刃羅は両腕をバトルアックスに変

えて、木を数本薙ぎ倒す。

それをコンプレスは軽やかに躲すが、すでに刃羅は葉隠達を抱え上げていた。

そして左脚をバトルアックスに変えて、再び木を切り倒す。

「くそー！」

その木も軽やかに躲したコンプレスだが、すでに刃羅は森の中に入り込んで見えなくなる寸前だった。

「なんて速さだよー！」

コンプレスは吐き捨てるが、追いかけるのは諦めた。

今の速さ、先ほどの戦闘を考えたと危険と判断したのだ。

「まずはやりやすい方を狙うべきだな」

コンプレスは飛び上がって移動を始める。移動方向は刃羅達とは違う方向だった。

時は少し前。

スタート地点の広場。

マンダレイ達の前には3人の姿があった。

「なんでヴィランがいるんだよお!!？」

峰田の叫びが響く。

そしてヴィランの足元にはピクシーボブが頭から血を流して倒れていた。

それにヴィランの1人、トカゲのような男が両腕を広げて名乗りを上げる。

「ご機嫌麗しゆう雄英高校!! 我ら敵連合・開闢行動隊!!」

敵連合という名前に緑谷達は顔を青くする。

「敵連合……!!? なんでここに!?!」

するとサングラスを掛けて布に包まれた棒状のものでピクシーボブの頭を押さえている男がにやける。

「この子の頭、潰しちやおうかしら。どうかしら? ねえ、どう思うっ?」
それに虎が憤る。

「させぬわ！このっ……」

「待て待て！早まるな！マグ姉！虎もだ！落ち着け！」

トカゲ男が2人の間に入り込み、制止する。

「生殺与奪はすべて、ステインの仰る主張に沿うか否か！」

「ステイン……！当てられた連中か！」

トカゲ男の言葉に飯田が反応する。

その声にとカゲ男も反応する。

「俺はそうそう！おまえ！君だよ！メガネ君！保須市にてステインの終焉を招いた人物！申し遅れた。俺はスピナー」

スピナーは背中の武器を抜きながら名乗る。

抜いた武器は多数の刃物を無理矢理纏めた大剣だった。

「彼の夢を紡ぐ者だ！」

その武器の異形さに緑谷が後退る。そこに飯田がスツと近づき、声を掛ける。

「緑谷くん。今の聞いたか？」

「え……？」

飯田の言葉に首を傾げる緑谷。

「奴は今、ステインの終焉を招いたと言った。夢を紡ぐとも」

「……あつ」

「轟くんの話では、奴は逃げだしたはずだ……！なのに奴らがそれを知らないと言うことは……！」

「ヒーロー殺しと敵連合は、やっぱり通じていない……！」

緑谷の結論に飯田は頷く。

やはり刃羅の推測は正しかったと確認する飯田達だった。

その時、虎が前が出る。

「どうでもいいがなあ……貴様ら……！ピクシーボブは最近婚期を気にし始めててなあ！女の幸せ掴もうって、いい歳して頑張ってたんだよ。そんな女の顔、キズモノにして！男がヘラヘラ笑ってるんじゃないよ!!」

「ヒーローが人並みの幸せを夢見るか!!」

スピナーが飛び出そうとした時、

「まてえい！」

「「!!」」

残ったヴィランが初めて声を上げる。

それにスピナーも足を止める。

「なんだ!? 『鎧関』! 何故止める!」

鎧関と呼ばれたのは身長2mを超える関取のような体格と浴衣を着た男だ。黒髪の鬘に細い目、右頬に一筋の切傷がある。

ドスン! ドスン! と歩み出て、マンダレイ達に声を掛ける。

「乱刀刃羅嬢! ここにいるだろう!?」

「「!」」

刃羅の名前に緑谷達は目を見開く。

鎧関は右手を前に出す。

「彼女を渡せ! ステイン殿の弟子にして正位継承者である彼女は我らといるべきだ! 彼女を明け渡せば、おいどんはここで引いてやる!」

鎧関の言葉に緑谷達は怒りが込み上げる。

「ふざけるな!!」

「彼女は立派な雄英生だ!! 誰が貴様たちなどに!!」

「ちよつと鎧関! 何いきなりバラしてるのよ!? こいつらを殺して、探せばいいじゃない!」

「おいどんは優先順位を間違えたくないだけ。おいどんがここに来たのは彼女の保護のため。ヒーローやその眼鏡坊主は今はどうでもいい」

「ああ、もう!! ほんつとやり辛いわあん!」

マグネが鎧関の言葉に頭を抱える。

そしてやり辛いのはマンダレイ達も同様だった。

「まずいよ、虎……! 2対3だ。誰か1人抜けられたら止めきれないかも……!」

「それでもやるしかない! 《テレパス》で彼女に連絡して、何としてでもここで奴らを押さえる!」

「分かった!! 皆行つて!! いい!? 戦闘はしないように!! 委員長引率!! 君もターゲットだよ!」

「わ、分かりました!!行こう!皆!」

マンダレイの言葉に飯田は悔し気に頷き、残ったクラスメイトを促す。

その時、緑谷がマンダレイに振り向く。

「マンダレイ!!僕!!知ってます!!」

そう言っただけ別の方向に駆け出した。

「緑谷君!」

「くっ!どこに!委員長!!まずは施設に戻ってイレイザーに!」

「くそっ!承知しました!」

飯田はマンダレイの指示に従い、施設に向かって走り出す。

それと同時にスピナー達は話が付いたのか、再びマンダレイ達に武器を構えて迫って来ていた。

「てめえらのような利己的なヒーローもどきは粛清対象だ!!」

スピナーの攻撃を躲したマンダレイは《テレパス》を発動する。

『スピナー。ヴィランながらかつこいいじゃない。好みの顔してる』

「え!?!」

「何照れてんの?初心ね!!」

「いでっ!?!」

マンダレイの《テレパス》に惑わされたスピナーが一瞬動きをる。その隙を突いて、マンダレイはグローブの爪でスピナーの脇腹を引っ掻く。

「なんてっ……不潔な手を!尻軽女が!」

スピナーが怒り叫ぶ。マンダレイの後ろから大きな影が迫る。

「!!」

「どすこい!」

バツ!と横に飛んで躲すマンダレイ。浴衣の上だけを開けた鎧関がマンダレイのいた場所に突っ張りを放つ。

しかもその姿は先ほどとは随分と変わっていた。

「っ!!鎧を纏う『個性』!」

「如何にも!《肉鎧》という!」

鎧関の全身は鋼の鎧に包まれていた。ドズン!ドズン!と重厚な

足音を響かせる。

洋風を思わせる鎧姿に浴衣を腰に巻いているのが非常に違和感がある。

「さて、どうするのだ？ 虎はマグネに手一杯だ。お前ではおいどん2人は無理だと思うが？」

「くっ！ ラグドール……!? どうしたの？ 返事が来ない！」

「どすこいー！」

ラグドールから通信が来ないことに焦りの表情を浮かべるマンダレイ。戦闘中だとしても何も無いというのは一度もなかった。

つまり通信すら出来る状態ではないと言うことだ。

ピクシーボブの姿を見て、嫌な予感が強くなるマンダレイ達だった。

刃羅は2人を抱えながら森の中を走っていた。

「私があターゲットだってえ言うのはあもう分かってるんだけどなあ」

コンプレスから逃げ出して、すぐに届いた《テレパス》。刃羅は戦闘を避けるようにと言われたが、それを聞いている場合ではない。

「……あの《テレパス》からするとマンダレイ達も戦闘中。ラグドールは行方不明。敵の数も不明。ここまで用意周到だと施設側にも手が伸びてそうだな」

足を止めて、葉隠と耳郎を見つかりにくそうな場所に寝かせる。

自分が標的である以上、下手に連れ回るのも危険だった。幸い今いる場所はガスが薄い。ガスマスクの使用限界を迎えるまで時間を稼げるだろう。

「……さてー……ここはスタート地点と中間地点の真ん中くらい！」

現在地を確認する刃羅。ルートに出るにしても、下手に接敵するとクラスメイトやB組に迷惑がかかりそうだと考える。

かと言って、来た道に戻って脳無やコンプレスにまた出くわしても厄介だ。

ということ、むしろ敵の目を集中させるためにマンダレイ達の前に向かうことにした。

木の上に飛び上がり、木を飛び移りながら移動する刃羅。その途中でガスマスクを捨てる。

すると遠くで地鳴りのような音がする。木の上に飛び出して、周囲を確認すると施設近くの小山で土煙が上がっていた。

「あつこにも敵かいな。しかも戦闘中。施設付近にも何や炎が見える。レイザーは期待出来ん。周囲もガスに山火事。これはどつちかつちゆうと逆方向……ガスはともかく山火事はなんであないなところ？施設から目を離すため？」

敵に関する情報が少なく、推測が纏められない。

顔を顰めながらも、とりあえずスタート地点を指すのだった。

そしてスタート地点が見えてきた。戦闘中とみられる人影が複数目視出来た。

刃羅はそのまま速度を緩めずに、広場に飛び込むのだった。

ズザザザア!!

滑りながら着地する刃羅。

その姿をマンダレイ達やスピナー達は目を見開いて、見つめる。

「っ!?あ、あんた!!何でここに!?!」

「ラグドールはヴィランに襲撃されて、一度助けたのだがいつの間にか行方不明でござる!!申し訳ないでござる!!」

「!!」

「脳無、それにもう一人ヴィランがいましたが、狙いが私であるならば逃げ回るよりこの方に来た方が敵の目も集中できるかと思つたのですが……」

刃羅は顔を顰めながら倒れているピクシーボブを見る。

「ここも完全に劣勢だった。」

刃羅の判断にマンダレイ達は異を唱える事は出来なかった。状況的には最悪だが、刃羅が知りえる状況だと確かにその判断は正しかった。問題はプロヒーローが対応し切れていないことに帰結する。完全に後手に回っているからだ。

そこに鎧関とスピナーが笑みを浮かべて、刃羅を見る。

「ステインの弟子!!」

「待っていたぞ!」

「ああん?」

スピナーと鎧関の声に顔を顰める刃羅。

刃羅の顔がピクピクと引きつっているのだが、マンダレイ達は気づいていない。

「俺達と来い!!ステインの意志を俺達で甦らせよう!!」

「……ステインの意志だと?」

「聞いちゃ駄目!!施設に向かいなさい!」

表情を消す刃羅にマンダレイは叫んで、鎧関に飛び掛かる。

それを見たスピナーが刃羅に歩み寄る。

マンダレイと虎が止めようとするが、今度は逆にマグネと鎧関が詰め寄り足止めをする。

「俺達と!!腐ったヒーロー共とメガネ君を肃正しよう!!ステインの夢を叶えよう!!」

両腕を広げて高らかに叫ぶスピナー。

刃羅は無表情のままスピナーをまっすぐ見つめている。

そして刃羅はスピナーに向けて右手を差し出す。

スピナーはそれに笑みを浮かべる。

「分かってくれたかあ!!やっぱりステインは偉大だあ!」

「駄目!!」

マンダレイが叫ぶが、刃羅は反応しない。

そしてスピナーが刃羅の手を握り返そうと手を伸ばした瞬間。

「死ね」

刃羅の右腕がパルチザンに変化する。槍先はスピナーの胸に向かって伸びていく。

「!!?があ!」

スピナーはギリギリで身を振って躲そうとするが、胸を横一文字に斬り裂かれて血を流す。しかし、致命傷ではなかった。

スピナーは慌てて後ろに下がって、武器を抜く。

それに他の全員も目を見開く。

「な、何を……!?!」

「ステインの意志? 夢を叶える? 本当に貴様はステインの思想を理解しているのか?」

「え?」

刃羅の言葉にスピナーは啞然とする。

腕を戻した刃羅は、一瞬でスピナーに詰め寄る。

「!?!」

「……砕」

バツキイン!!

両腕を大剣に変えてスピナーの武器を砕く。

「ええ!?!」

「グルルア!!」

両腕を戻しながら、左足をマムベリに変えて蹴り上げる。

「ううわあ!?!」

スピナーは尻餅を着くように後ろに転んで躲す。

刃羅は足を戻して、後ろに下がる。直後に両腕を鎖鎌に変えて飛ばし、スピナーを絡めとる。

「なあ!?!」

「速い!」

「なに!?!あの子!?!」

刃羅の動きにヴィラン3人は目を見開く。

そして刃羅は体を捻り始めて、スピナーを振り回し始める。

スピナーは慌てるが何も出来ずに、ただ振り回される。そして最後は砲丸投げのように鎖を解除して、スピナーを森に向かって投げ飛ばす。

「ぬおおおおお!?!」

刃羅はスピナーを追いかけて森に向かって走る。

それにマンダレイは目を見開く。

「ちよっ!?!待ちなさい!!」

「おお!!」

「くう！」

マンダレイが呼び止めるが、鎧関の突っ張りが飛んできて、また足止めされる。

「……逆鱗に触れたな。あいつはもうダメだろう」

「はあ？」

「こつちの、ことだ!!」

鎧関の眩きにマンダレイは眉を顰めるが、それに鎧関は突っ張りで答える。

(まあ、不快であったのは同意する。やってしまえ。『エスパデス』)
鎧関は刃羅達が消えた森に目を向ける。

スピナーは森の中に落ちて四つん這いで呻いていた。

「ぐ……うう……なんて奴だ……!!」

「ステインの思想を言ってみろ」

「!!」

バツ！と顔を上げると、目の前に刃羅が立って見下ろしていた。

刃羅の無表情で無機質な目に背筋に悪寒が走るスピナー。

「どうしたの？ステインのく意思をく継ぐんでしょ？ほらく言いなよ」

ふらつきながら起き上がるも一歩後退るスピナー。

それに合わせて刃羅も一歩前が出る。

「ひい!？」

「……はあ。仕方ないのう。儂が教えてやろう」

怯えているスピナーを見て、刃羅は無表情なのにため息を吐くという器用なことをやって見せる。

「ヒーローとは見返りを求めてはならず、自己犠牲の果てに呼ばれる称号であらねばならない。現在のヒーローは金、名誉などの私欲に塗れた贗物であり、真の英雄を取り戻すためには、肅正が必要であるのだよ」

「そ、そうだ！だ、だから俺達がそれを！」

「それでもう1つ!!」

「!?」

「己が私欲のために徒に力を犯罪者も……肅清対象なのである!!!」

刃羅の叫んだ言葉にスピナーは目を見開いて固まる。

「貴様は随分と高らかにステイン、ステインと叫んでいたが……今回の仲間には随分と肅清対象がいるように思えるか?そこはどうした?」

「……あ……ああ」

「マグネ、脳無、それにあの無差別なガス使い。少なくとも3人は信念よりも快楽が目立ってはるなあ。なんで仲良うしてはりますのん?ステインは……お師様は、同じ組織やからって見逃すと思えますのん?……随分安っぽい信念やよって」

スピナーは後退りして木の根に躓いて、尻餅を着く。

「仮初の信念を自慢げに語るな。屑が」

両腕をロングソードに変えて、高速で振るう刃羅。

スピナーは何も出来ずに全身を斬り裂かれる。

「があ……!?」

全身から血を噴き出して、仰向けに倒れるスピナー。

その頭元に立つ刃羅。

「あ……ああ……」

「冥途の土産に教えといてあげるわ。ステインは私達がすでに助け出してるの。敵連合に帰ってきた?」

「……!?」

虫の息だが目を見開くスピナー。

それを無表情で見下ろしながら、右腕を切っ先が丸い剣、エグゼキューションナーズソードに変える。

「死になさいな。正しき社会への供物」

そして刃羅は腕を振り下ろした。

森の中を歩く刃羅。

そこに再びマンダレイの《テレパス》が響く。

『A組B組総員、戦闘を許可する!!そしてヴィランの狙いの1つがさらに判明!!生徒のかっちゃん!!かっちゃん、乱刀刃羅は戦闘を避けて、単独では動かないこと!!』

「……めっちゃ単独行動しとるけどなあ。しかし爆豪はんとは……。あの凶暴性かいな?ヴィランに欲しいかあ?」

いつもの雰囲気に戻っている刃羅は敵連合の狙いに首を傾げる。

どうにも敵連合の目的が分からない。

「爆豪ちゃんとおん私をん手に入れてえんどうしたいのかしらあん?……まだあんステインの脱走をん知らないのおん?」

それならば自分が狙われる理由は分かる。ステインに変わる広告塔ではあるだろう。

しかし爆豪は狙いが分からない。あの凶暴性だけで決めたのだろうか。

「まあ、あれはある程度接していないと分からんか。それにしても鎧関は何故いたのか……ドクトラあたりか」

現状、敵連合は『此处を襲撃する』という目的は果たした。これだけでもかなり雄英にはダメージだろう。

ラグドールの失踪に関しては敵連合が行ったにしてはコンプレスの反応がおかしかった。しかし雄英生徒だとしても思い出す限り心当たりがない。

爆豪に関しては情報は無し。肝試しの順番とマンダレイの《テレパス》からして、まだスタート地点に戻っていない。ならば考えられることは4つ。ガスで倒れているか、戦闘中か、森を突っ切って施設に戻っているか、すでに攫われているか。

刃羅はコンプレのことを思い出した。未だに刃羅の元に来ないと言ふことは、爆豪の元に行っているということ。

そこに刃羅が向かうというのは、悪手だろう。

刃羅は再び木の上に飛び上がる。そして周囲を見渡す。

「む?ガスが消えたでありますな」

森を漂っていたガスが消えている。ということは生徒の誰かが倒

したと言うこと。

反対側に目を向けると、森の一部が凍り付いており、木が薙ぎ倒されている。

「轟だべな。戦闘しているようには見えねえべ」

少し集中すると、すぐ近くの森の中を移動する複数の気配を感じた。

向かっている方向は施設。元来た道は氷が張っている森。

つまりあの気配は轟達。爆豪もいることだろう。

「じゃあ、あそこに行くと行くのは駄目だなあ」

木の下に下りる刃羅。

そこに近づいてくる気配を感じて構える。

しかし、現れた人物を見て、目を見開いて構えを解く。

「……なんででめえが？」

森の中を全力疾走している影が3つ。

「グイグイグイグイ!!」

「やばいってーやばいって!!やばいってこいつう!!」

叫んでいるのはB組の泡瀬だった。その腕には頭から血を流した百が抱えられている。

その後ろから脳無が追いかけてきていた。

「八百万!!おい!生きてるか!?!頼む走れ!追いつかれる!!」

「大……丈夫です……!」

百は答えるが、意識は朦朧としていた。

泡瀬の『個性』《溶接》で何とか抱えていたが、どんどんと距離が詰まっていた。

「やばいってええええ!!」

チエーンソーが目の前まで迫った時、

「はあ!!」

脳無の真横から刃羅が飛び出してきて、脳無を蹴り飛ばした。

脳無は吹き飛ばされるも、すぐに起き上がる。

「ネホヒヤン！」

「元気なやつだな！」

「乱刀!!」

「ら……がた……な……きん？」

刃羅の登場に足を止める泡瀬。

「はよ、逃げんかい!!」

横目で百の出血を見ながら怒鳴る刃羅。

それに泡瀬が慌てて走ろうとするが、百が制止する。

「駄目……です！乱刀さんも……！」

「何言ってるんだよ！邪魔になるだけだぞ！」

「でも……！ヴィランの狙いは……！」

「だから言っているのである！吾輩は殺せないはずである!!」

刃羅が再び怒鳴った瞬間に、脳無は刃羅に向かって突撃しチェーンソーを振るう。

刃羅は紙一重で躲すが、背中にハンマーが叩き込まれた。

「ごおう！」

「乱刀!!」

「づああ!!」

吹き飛ばされながら、左腕をパルチザンに変えて脳無の脇腹に突き刺そうとするが躲されてしまう。

刃羅はすぐに起き上がるが、すでに脳無が詰めてきており、正面からドリル、左右からチェーンソーが迫って来ていた。

(躲しきれねえ！)

刃羅は歯軋りをしながら両腕をバトルアックスに変えて振り上げる。

そして横にずれながら刃で腹部をコーティングする。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ!!

刃羅の左脇腹をドリルが火花を散らしながら通過する。それに顔を顰めながら両腕を振り下ろして、左右から迫るチェーンソーに叩きつける。チェーンソーの腹を狙ったが、僅かに刃に当たりバトルアックスの刃が欠ける。それでも腕を振り下ろす。

右のチェーンソーは地面に、左のチェーンソーはドリルの腕を斬りながら下に叩きつけられる。

その隙に後ろに飛び下がる刃羅。

「つつうー！」

「ら、乱刀ー！」

「乱刀さん……！」

刃羅は左脇腹と両前腕から血を流していた。

「少し挟られただけアル」

両手を離握手して状態を確かめる刃羅。

痛みはあるが、特に問題ないと判断する。しかし状況は依然と悪い
まだまだ。

脳無はほぼ無傷。《再生》持ちではない様だが、痛覚はやはり無いよ
うだ。

想定外なのは脳無は、刃羅も殺す気満々であるということだ。

「……ちよつとお厄介かもお」

「ちよつとかあ!?!」

「このままでは……！」

脳無が一步前が出る。

刃羅は腰を据えて構える。

すると脳無は急に足を止めて、武器を戻して背中を向けた。

「ネホニヤンー！」

「はあ?」

「え……!?!」

「何故……?……まさか……」

歩き去っていく脳無に刃羅達は首を傾げる。

その時、百が何かに気づき、泡瀬に声を掛ける。

「泡瀬さん……『個性』でこれを……!奴にー！」

「何これ?ボタン?」

「いいから早くー!行ってしまおうー！」

百は手の平から何かを生み出して、泡瀬に渡す。受け取ったそれに
泡瀬は首を傾げるが、百に促されておっかなびっくりで近づき、脳無

の背中にそれを取り付ける。

脳無は特に反応せず、そのまま歩き去る。

「よし！付けたぞ！もういいか!？」

「ええ……」

「逃げるぞ！乱刀！お前も！つて、おい!？」

「乱刀さん!？」

泡瀬は百を担いで避難を開始する。刃羅にも声を掛けるが、刃羅はそれを無視して脳無を追いかけ始める。

（誰かの救援にしては余裕で移動しているのです。つまりは一定の目標は達成したと言うことなのです！私は捕まえられてないのです！つまり爆豪君が捕まった!）

脳無の進行方向を確認して、木の上に飛び上がり、先回りすることにする刃羅。

するとその先で青い炎が燃え上がった。

「あそこー」

刃羅は森の中に下りて、音を出さないように移動する。

近づいて茂みに隠れて様子を伺う。

そこにいたのは緑谷、障子、轟とコンプレス、そしてヴィランと思われる3人の男女。

（緑谷坊っちゃんボロボロやないの。爆豪坊っちゃんは……コンプレスやね。難儀やなあ）

状況に顔を顰める刃羅。

コンプレス以外のヴィランの顔は知らないため、『個性』が分からなかった。少なくとも青い炎はあの内の誰かだ。

（あと数分もせずに脳無も来る。爆豪救出は絶望的だな!）

コンプレスに狙いを絞る。

刃羅は勢いよく飛び出す。

『!!』

「Mr. !!後ろだ!!」

「!？」

「しゅー」

「つとおー」

緑谷達が目を見開く。ツギハギの男がコンプレスに声を掛ける。刃羅はコンプレスの背後から飛び蹴りを放つが、コンプレスは横に躲す。

「逃がつさんー!」

通り過ぎる直前に左腕をパルチザンに変えて突きを放つ。

パルチザンはコンプレスの仮面を砕く。

「ぐう……つぶねえ!!」

仮面を壊したただけだが、その時にコンプレスの口から2つほどのビー玉のようなものがこぼれる。

地面に着地した瞬間に両脚もパルチザンに変えて飛び出して、ビー玉に手を伸ばす。刃羅はそれが何かは知らないが、このタイミングで吐き出された物は怪しいと判断して無我夢中で飛び掛かる。

とりあえず1つ、左腕のパルチザンを戻しながらキヤッチする。もう1個にも手を伸ばそうとするが、そこにツギハギ男が手を伸ばして、先にキヤッチされる。

「くっ!」

「お前も来てもらうぞ」

「お断るよよい!!」

ツギハギ男は刃羅にも手を伸ばす。刃羅は両脚を戻しながら、右腕を薙刀に変えて無理矢理後ろに下がる。

後ろに転がり、すぐさま起き上がって更に距離を取る。

「乱刀さん!」

「とりあえず1個掴んだ!!何これ!」

「どれかが常闇と爆豪だ!」

「常闇!?ラグドールでねえべか!」

「ラグドール!」

轟の声を目を見開きながら、緑谷達に合流する刃羅。

ラグドールの名前に緑谷達も目を見開く。

「とりあえずツギハギのも取り換えすんだな!!」

「いや!逃げるぞー!」

「障子君!?!」

「俺も確保した!」

障子は左手から2つのビー玉を取り出す。

「奴が右ポケットに入れていた奴だ!」

「じゃあコレは何ですの!?!」

「それに奴のもだ!」

障子の言葉に混乱する刃羅達。

その時、森から脳無が現れる。

更に、

「合図から5分経ちました。行きますよ。茶毘」

「待て。まだ目標がそこにいる」

「ワープの……!」

「くっそ!俺のショウが台無しだ!」

黒い霧がヴィラン達の周囲に現れる。

茶毘と呼ばれたツギハギ男が刃羅に顔を向ける。コンプレスも顔を押しさえて叫ぶ。

「一度解除しろ。確認だ」

「ちい!」

茶毘がコンプレスに声を掛ける。コンプレスは舌打ちをしながら、指を弾く。

すると刃羅の手から常闇が、障子の手からは氷が、そして茶毘の手に爆豪が出現する。

『!?!』

「どうされますか?他の者達はすでに回収してしまっています」

「……ちっ。今回はこいつだけで満足するか」

「かっちゃん!!!」

「爆豪!!」

霧の中に入っていく茶毘達。

それに緑谷、障子、轟が走り出す。刃羅は常闇を抱きかかえて出遅れる。

爆豪は首を掴まれたまま霧に包まれていく。

緑谷が目の前まで迫った時、

「来んな。デク」

そして靄がズズツと消えた。

緑谷は飛び込もうとしたが、間に合わずに地面に落ちる。

刃羅達は靄が消えた空間を唯見つめることしか出来なかった。

「あ……ああ……あああああああああ!!!」

緑谷が痛みと悔しさで構成された叫び声を上げる。

その叫び声に刃羅や轟達はどうしようもなく、敗北を実感したのであった。

「……はあく……完全にやられたのう」

「……すまない……俺が油断したばかりに……」

刃羅の言葉に常闇が悔し気に俯く。

それに障子や轟が首を振る。

「お前のせいじゃねえ。俺達だって気づかなかったんだ」

「あの男が声を掛けて来なかったら、お前達がどうやっていなくなっただのかさえ分からなかったんだ」

「最初で躓いているのだ。この状況では、むしろよく耐えた方だろうな。学生としては、な」

刃羅の言葉に複雑な気持ちになり、素直に領けない轟達だった。

「とりあえず施設に向かうでござる。炎が近づいているし、緑谷氏を早く治療せねばいかんでござる」

刃羅の言葉に頷き、障子が緑谷を背負う。

「デクくん！皆！」

「刃羅ちゃん！」

麗日と梅雨が駆けつけてきた。

しかし爆豪の姿が見えないことと、緑谷の姿に状況を理解し、顔を強張らせる。

「ヴィランは撤退したで。施設、戻るか」

「刃羅ちゃん……怪我を……」

「そこに背負われてる男よりはマシだ」

「ケロ……緑谷ちゃん……」

梅雨は緑谷を心配そうに見つめる。

緑谷はすでに気を失っていた。

スタート地点に戻った刃羅達は、相澤達や飯田達と合流した。

そこにはB組の面々、葉隠と耳郎が横たわっていた。

「お前ら！」

「相澤先生！」

「……なんとか無事か」

「爆豪は攫われたべ」

「っ!？」

「そんな!？」

相澤や飯田達が刃羅達に駆け寄る。少しほっとしたような表情をする相澤だが、刃羅の言葉に目を見開き、切島達も目を見開き悔し気に顔を歪める。

刃羅はマンダレイ達の様子を見る。マンダレイと虎は必死にB組の看病をしていた。

「……やっぱラグドールは見つかってねえか」

刃羅はマンダレイ達に近づいていく。

それにマンダレイ達も気づく。

「あんた……!無事だったんだね……!」

「よかった……!」

「結局、ラグドールは見つけられておらん。すまんおう」

刃羅の言葉に一瞬間を曇らせる2人だが、すぐに微笑んで刃羅の肩に手を乗せる。

「確かに心配だけど……それは私達に任せて、今は休みな」

「その通りだ。むしろよくやってくれた」

それに黙って頭を下げて、梅雨達の元に戻る刃羅。

梅雨達は百のところに行った。百も意識を失っていた。

「刃羅ちゃん。簡単にしか出来ないけど、手当てするわ。せめて傷口を保護しないと」

「ごめん！」

「いいのよ」

百の横に座り込んで、大人しく応急処置を受ける刃羅。

その後、救急と消防が到着し、刃羅達は病院に搬送される。

そして雄英林間合宿への敵連合強襲は大々的に世間へと報じられた。

刃羅達の林間合宿は雄英史上最悪の事件として、幕を閉じるのであった。

新！刃格！（前にも出てるけど！）

エグゼキューションナーズソード（斬首剣）・話し方は普通の女性。一人称は「私」。体育祭で殺意マックスを表出したのはこの子。なので、基本的に雄英の中では表には出ない。

鎧関の紹介は次回！

#29 掴み損ねた人を探して

事件から翌日。

世間では『雄英大失態』でもちきりだった。

生徒40名の内、ガスによる意識不明者が15名。重・軽傷者が12名。無傷だった者は12名。そして行方不明者1名となった。

プロヒーロー6名ではピクシーボブが重傷で意識不明。ラグドールが行方不明となった。

刃羅達は合宿所近くの病院にて入院していた。

無傷・軽傷だった者達は昨晚の間に帰宅させられた。

刃羅と百は同じ病室で入院していた。百はまだ目を覚ましては無い。刃羅は先ほど診察を受けて、この後やつてくるリカバリーガールによる治療後に退院しても構わないということになった。

のんびりとベッドで横になっていると、梅雨、麗日、芦戸がやつて来た。

「刃羅ちゃん」

「おう」

「大丈夫？」

「リカバリーガールがもうすぐ来てくれるそうや。リカバリーガールの治療後に退院できるみたいや」

「良かった〜……」

「百ちゃんは……」

「まだ起きてはいない。そろそろ起きるだろうとのことだ」

刃羅の言葉にホツとする梅雨達。

耳郎と葉隠は別室に入院しており、まだ意識は戻っていないとのことだ。

談話室で話していると、百が目を覚ましたとこのことで病室に戻る。

「百ちゃん！大丈夫？」

「ヤオモモ〜！」

「皆さん。ええ、大丈夫ですわ。乱刀さんも無事でよかったですわ」

「そつちの方が重傷じゃわい」

「……爆豪さんは……」

百の言葉に梅雨達は悲し気に首を振る。

そして改めて昨日の状況を説明する。緑谷や葉隠達の事を聞いて、顔を歪ませて俯き、布団を強く握り締める百。

そこに看護師が訪れる。

「リカバリーガールが来られました。それと八百万さん。後程、警察の方がお話を聞きたいとのことなただけ……」

「はい。大丈夫ですわ」

「分かりました」

「失礼するよ」

看護師と入れ替わりでリカバリーガールが入室してくる。

「災難だったね。無事でよかったよ」

「領き辛いのです!!」

「だろうね。先に治療するよ」

「チューーー!!」と刃羅と百を治療するリカバリーガール。

腕を振り回して、脇腹を確認する刃羅。包帯を外そうとしたが、梅雨達に止められて診察を待つことになった。

その後、警察が来て百が事情聴取されている間に、刃羅は診察を受けることになり、梅雨達は帰宅を促されて帰宅していった。

診察して綺麗に傷が治ったので退院となった刃羅。

病室に戻ると百の姿は見当たらなかった。どうやら百も診察に行ったようだった。

刃羅は服を着替えて、帰宅の準備をする。

メモでも残そうと思ったが、別にいいかと思いつめた。

「……ほな、さいなら」

刃羅は鞆を担いで病室を出る。

病院を出て、携帯を取り出す刃羅。

「もしもしく?今、病院を出たわ。……ええ。そろそろ帰るわ。……ええ。じゃ、後でね」

翌日。

緑谷の病室にA組の面々が見舞いに来た。

しかし、その顔は混乱と焦りが浮かんでいた。

「乱刀さんが……行方不明……?」

その理由を聞いた緑谷は目を見開いた。

「ああ……昨日、病院を退院した後、行方が分からなくなったそうだが、警察が捜索してくれてる」

「……そんな……またヴィランが?」

「分からねえ。流石にそこまで知らされねえんだ」

「この情報もね、流女将さんから梅雨ちゃんに個人的に知らされたものなの」

轟と切島が顔を顰めながら説明し、麗日が隣にいる梅雨を見ながら情報源を教える。

その言葉に緑谷は梅雨に目を向ける。

「ケロ……ケロオ……」

梅雨は携帯をずっと抱えながら泣いていた。

刃羅にメールをしても、電話を掛けても繋がらない。しかし、それでも梅雨は諦められずに1時間ごとにメールと電話をしている。流女将からの連絡も待っているのも携帯を離せない理由である。

梅雨の様子に耐えられないように俯く緑谷や飯田達。

それに緑谷はあることを思い出す。

「……ヒーロー殺し……」

「え?」

「もしかして乱刀さんは……ステインの元にいるのかもしれない……」

「!」

『!!』

緑谷の言葉に目を見開く飯田達。

「な、何言ってるんだよ? ヒーロー殺しは捕まったんだろ!」

「……いや」

「え……?」

上鳴が冷や汗を流しながら叫ぶ。

しかしそれを轟を否定する。それに芦戸が戸惑う。

「……親父から聞いた。奴は脱走してる。警察は発表してねえけどな」

「そして、林間合宿で敵連合はステインの脱走を知らなかった。つまりステインと敵連合は別々で行動している……!」

「そんな……!」

「じゃあ、今回の事件を知って……!」

轟と飯田の言葉に衝撃を受ける梅雨達。

「爆豪のことだけでも先生達一杯一杯なのに……!」

「ここでヒーロー殺しまで出てくるのかよ……!」

「……これが俺達の定めだともいうのか……!」

両手を握り締めて顔を顰める常闇。刃羅に助けられた身として、何も出来ない無力さに苦しめられる。

他のクラスメイト達も悔し気に顔を歪める。

その時、切島が苦し気に顔を歪めながら、緑谷に声を掛ける。

「だからこそ……居場所が分かる爆豪を速攻で助ける。それで、乱刀を探し出す!」

『え?』

切島の言葉に轟以外の全員がポカンとする。

「い、居場所が分かるって……?」

「実は俺と轟は昨日もここに来ててよ。そこでオールマイトと警察に八百万が話しているのを聞いたんだ。ヴィランの1人に発信機を取り付けたってな」

『!』

緑谷達は目を見開いて驚く。

切島が言いたいことが分かったからだ。

飯田は両手を握り締めながら呻くように声を上げる。

「つまり……その受信デバイスを……八百万くんにつってもらおう……と?」

それに頷く切島。

堰き止めていた怒りが抑えきれなくなった飯田は声を荒げる。

「プロが2人倒れているんだぞ!?半数近くの生徒達が命の危機にあつたんだぞ!?これ以上はプロに任せろべき案件だ!!俺達の出ている舞台ではないんだ馬鹿者!!」

「んなもん分かってるよ!!でもさあ!!なんつも出来なかったんだ!!ダチが狙われてるって聞いてきてさあ!!ずっと苦しんできてたって分かってたの!!なんつも出来なかったんだ!!ここで動かなきゃ俺は!!ヒーローでも、男でも、ダチでもなくなっちゃうんだよ!!」

切島も抑え込んでいたものが弾ける。

爆豪とは仲良くして勉強も教えてもらった。刃羅には合宿中たくさんのお話を教わった。ここで簡単に諦めることは納得出来ない。

「き、切島。落ち着けよ」

「飯田が正しいよ!!でもさあ!!緑谷!!手はまだ届くんだよ!!」

切島は緑谷に手を差し出す。

緑谷は葛藤するように唇を噛む。

「ふっ!!ふざけるのも大概にしたまえ!!」

「待て。落ち着け」

飯田が再び怒鳴るが、障子が手を出して制止する。

「切島の何も出来なかった悔しさも、轟の眼前で奪われた悔しさも分かる。俺だって、俺達だって悔しい。だが、これは感情で動いていい話じゃない」

「オールマイトに任せようよ。僕達の戦闘許可は解除されてるし」

「青山の言う通りだ。……助けられてばかりだった俺は強くは言えんが……」

障子の言葉に青山と常闇も同意する。

そこで漸く梅雨が口を開く。

「皆、シヨックを受けているのよ。切島ちゃん。私だって爆豪ちゃんを救いたいわ。でもね、刃羅ちゃんだって救いたい。どっちが先なんて……決められないの。私は怖い。爆豪ちゃんの救出によって、刃羅ちゃんが遠のいてしまふんじゃないかって……」

「梅雨ちゃん……」

梅雨の背中を麗日がさする。

梅雨の言う通り、爆豪救出により刃羅を奪い返されることを恐れただ。ステインが闇に隠れる可能性は高い。

刃羅救出にもオールマイトが関わってくることは間違いないからだ。

それに全員が俯いてしまう。

そこに医師が現れ、緑谷の診察の時間となった。

それに芦戸達は病室から出ようとするが、切島は小さな声で緑谷に声を掛ける。

「八百万には昨日話した……行くなら速攻……今晚だ。重症のおめーが動けるか分からねえ。それでも誘ってんのはおめーが一番悔しいと思ってるからだ。今晚……病院の前で待つ」

切島はそう言つて、病室を出ていく。

それに緑谷は即答は出来なかった。

耳郎達の見舞いも終えて、病院を出る梅雨達。

外に出て、すぐに刃羅に電話を掛けるがやはり繋がることはなかった。流女将からも連絡はない。

先ほどの話もあり、梅雨は自分がどうすればいいか分からなくなっていた。

刃羅を探しに行きたい。しかし、手掛かりはない。手掛かりを得たとしても、ヒーローや警察以上の動きが出来るわけがない。下手に動いても刃羅の命が危なくなるかもしれない。でも、助けに行きたい。

堂々巡りの思考の渦に梅雨は囚われていた。

思い詰めている梅雨に麗日達はどう声を掛けたらいいのか分からなかった。

先ほど百の病室にも顔を少し出した時、百も涙を流していた。

「昨日まで隣にいたんです……たった20分。20分離れていただけで……いなくなってしまうなんて。何も出来ないなんて……」

そう言つて後悔していた。

沈んだ気持ちのまま帰路に就こうとした梅雨達。

すると、梅雨達の前に流女将が現れた。

「流女将さん……!」

「何か見つかったんですか!？」

芦戸の言葉に流女将は目を伏せて首を横に振る。

それに肩を落とす麗日達。

「ごめんなさい。新幹線に乗ったところまでは分かったのですが……
そこからはどうやって……」

「敵の『個性』……」

「恐らくは……」

「ケロオ……」

梅雨は目尻に涙を溜めて携帯を握り締める。

流女将は梅雨に近づき、そっと抱きしめる。

「私がここに来たのはあなたが心配だったからです。あの子が戻ってきたとき、あなたがボロボロになっていたら悲しむでしょうから」

梅雨の後頭部を撫でながら囁く流女将。

「今、私のサイドキックはもちろん、職場体験に行っていたエクレーヌの事務所も動いてくれています。流石に爆豪君ほどの人員ではないですし、大掛かりに動くとマスコミにバレてしまうので限界はありますが……」

「ケロオ」

「大丈夫ですよ。もうちょっとだけ、私達を信じて待っていてください」

「……分かったわ」

「ありがとうございます」

その後、周辺で少し調べ物をするという流女将と別れて、帰宅する梅雨達。

この夜に訪れる悲劇を知る由もなく……。

夜。

緑谷、轟、切島、百、飯田が爆豪救出に向かうことを決めたころ。

オールマイルト達、プロヒーローも動きを見せていた。

百の発信機、相澤達の供述や警察の捜査により、敵連合の拠点を特定したのであった。

それに合わせて様々なベテランヒーロー達に召集が掛けられ、一堂に会していた。

「そうそうたる顔ぶれが集まってくれたな。さあ！作戦会議を始めよう！」

警察の塚内による主導で状況と作戦が伝えられる。

「今回の最優先は拉致被害者の救出だ。そのため、そつちに主戦力を割くことになる。しかし、生徒が仕掛けた発信機が別の施設にて反応している。そのため救出と同時にアジトを襲撃し、逃げ道を塞ぐ。さらに『プツシーキャッツ』の1人、ラグドールが拉致されている可能性がある。他にも犠牲者がいる可能性も考慮に入れて欲しい」

塚内の言葉に頷くヒーロー達。

№. 2ヒーロー：エンデヴァー、№. 4ヒーロー：ベストジャーニスト、№. 5ヒーロー：エッジショット、№. 10ヒーロー：ギヤングオルカ

シンリンカムイ、Mt. レディ、虎、グラントリノ

そして№. 1ヒーロー：オールマイルト

トップヒーローの半分が顔を揃える事態に緊張感は嫌でも高まる。

「……塚内君」

「なんだい？オールマイルト」

「……乱刀少女の方は、何か聞いているかい？」

「……残念ながら、これと言った情報は見つからないそうさ」

「そうか……」

「まずは目先のことに集中してくれ。彼すらも助けられなかったら、それどころじゃなくなってしまうぞ」

塚内の言葉に頷くオールマイルト。

しかし、どうしても刃羅の事が頭から離れなかった。

（ヒーローを信じてくれと言っておいて、この始末か。本当に……情けない……！）

その時、
プルルルルル。プルルルルル。
会議室の電話が鳴り響く。

「何か動きがあったのか……!!?」

塚内が慌てて受話器を手取る。

「どうした?……つ?!何者だ!!」

『!!』

塚内の剣幕に部屋にいた全員が注目する。

塚内は顔を顰めて、逆探知の指示を手で部下に出しながら、スピーカーモードに変える。

「……変えたぞ」

『ゴ協力感謝イタシマス。塚内殿』

部屋に響く無機質な声に全員が顔を引き締める。

相手はボイスチェンジャーか何かで声を変えていた。この状況で、この部屋にそんなことをしてくるなんて普通ではない。

「どうやってここを?」

『ハッキングヲサセテ頂キマシタ。突入前ニオ伝エシタイ事ガアリマシテ』

「……何者だ?」

『今回ノ敵連合襲撃ヲ歓迎スル者、トダケ』

顔を顰めるエンデヴァーや何人かのヒーロー達。完全に内情がバレてしまっている。

『時間モナイデシヨウカラ本題ニイキマシヨウ。私ハ『ラグドール』ヲ保護シテイマス』

「!!」

目を見開く一同。

それを聞いた瞬間、虎が電話に詰め寄る。

「どこだ!!ラグドールはどこにいる!!」

「虎!落ち着け!」

「ラグドールは無事であろうなあ!?!」

ギャングオルカが虎の肩を掴んで宥めるが、虎はもちろん収まらない

い。

その時、

『虎あ？虎あ？』

今度ははつきりとした声が聞こえてきた。

「ラグドール!!無事か!?無事なのか!」

『アハハハハ……多分……目隠しされてるし、動けないから……』

『ゴ安心……ハ出来ナイデシヨウガ、治療モシテオリマス。流石二目隠シト拘束ハサセテモラツテイマスガ、ソレ以外ハ一切手ヲ出シテオリマセン』

「どこだあ!!」

『今カラオ教エシマス。場所ハ神奈川県横浜市南戸区猫屋町○?—△—303号室デス。鍵ハ開イテイマス』

虎は飛び出そうとするが、ギャングオルカに羽交い絞めにされる。

「落ち着けと言っている!!1人で行くな!!罠の可能性もあるのだぞ!!」

「ぐううう!!」

『続イテ、乱刀刃羅ニツイテデス』

「「な!」」

塚内、オールマイト、虎は驚きの声を上げる。

エンデヴァーやベストジーニストなども聞き覚えがある名前に眉を顰める。

『ハツキリト申シ上ゲマス。彼女ハ自分ノ意思デ、アナタ達ノ前カラ去リマシタ。今ハ探ス必要ハアリマセン。コレハ流女将ニモ伝エテイマス』

「……それを信じろと言うのか?」

『私ハ言ウシカアリマセンノデ。ソレデハ、健闘ヲ祈リシテオリマス』

「待て!乱刀少女はどこ……!」

『ツー。ツー。ツー』

今度はオールマイトが詰め寄るが、すでに電話は切られていた。

塚内が部下に逆探知がどうだったかを確認するが「先ほどの住所か

らです」ということだけだった。通話記録の解析を指示して、流女将達に連絡を取るように指示を出す。

「虎。君はラグドールの方に行ってくれ」

「よいのか？」

「落ち着かないだろ？問題なければ駆けつけてくれればいい」

「感謝する！」

塚内の言葉に虎はすぐさま飛び出す。

見送った塚内はオールマイトに目を向ける。

「オールマイト！彼女の事は流女将達が動いている!!尚更、この作戦を早く終わらせるぞ！」

「……そうだな。その通りだ!!」

塚内の言葉に頷き、拳を握るオールマイト。

(必ず2人を助けて見せる!!)

そう誓いながら。

ある廃ビルにて。

「さて……では、行きましようか」

「……」

たった今、通話を終えた電話を置いて、背後に声を掛ける執事服を着た女性。

声を掛けられた銀髪の女性は、空き部屋にポツンと置かれたベッドに横たわっている目隠しをされた女性を見つめていた。

目隠しをされた女性は先ほど少し電話で話しをさせると、すぐに麻酔で眠らされた。

2人は部屋を出て、出口を目指す。

「まだ怒っているのですか？刃羅さん」

「当たり前だ。メールくらい前もって送るくらい出来ただろう。鎧関まで使っておいて」

執事服を着た女性、ドクトラをギロリと睨みつける刃羅。

ドクトラは肩を竦める。

「あれだけの作戦をあなた一人に教えた所でどうにもできないでしょう？」

「……それはあそうだけどお」

「ストレデイを送っただけでも喜んでもらいたいものです。おかげでラグドールを奪われずに済んだでしょう？ スピナーとかいう者の死体も回収させましたし」

「……けっ！」

ラグドールを攫い、森の中で刃羅と出会ったのはストレデイだった。

ストレデイの『個性』《収納》。手で触れたものを合計600Kgまで体に収納でき、自身の体もまた開け閉め出来る箱であれば、どんな大きさでも入り込むことが出来る。

そして鎧関はドクトラが送り込んだスパイだった。ストレデイが隠れたサイコロサイズの箱を出撃中に森に捨てて、ストレデイは森の中を移動していた。

敵の標的であるラグドールを先に奪う予定だったが、脳無の方が早かったのだ。しかし刃羅が介入してきたので、隙を突いて収納し、一度箱に隠れた。その後、一度刃羅に声を掛けようとして、スピナー肅清場面に出くわしたのだった。

「これでラグドールは問題ないでしょう。後は神野区ですね。すぐに終わればいいのですがねえ」

「お主がそう言うのですが終わった試しはないぞ」

「オール・フォー・ワンが相手では私も予想は出来ませんよ。都市伝説とされたヴィランの生みの親ともいえる存在ですよ？」

ドクトラの言葉に顔を顰める刃羅。

ドクトラと刃羅は廃ビルを出て、道路を挟んだ対面のビルに入る。

「それにしても、良かったのですか？ あんな別れ方で」

「……そんな別れ方をストレデイに指示を出したんはおめえだべ……」

「そうではなくて、まるで攫われたかのような状況にしておいて、結局あの電話での言葉ではないですか。どうやっても探しに来ますよ？」

「そのつもりじゃからのう」

「はい？」

ドクトラは首を傾げる。

「今、下手に動けばマスコミがうるさいのである。いなくなるだけならば敵連合かもしれないと情報は封じられるのである。更にあの電話で誰もが情報規制に従うであろう？ あんなどころに電話をすることが出来る者が相手であるから。そしてこの戦いが終われば、別に雄英生が1人いなくなっても大して騒がれないのである。敵連合やオルマイトに目が行くはずである」

「まあ……その可能性はありますがねえ」

「注目が逸れている間に堂々と別れを告げますわ。それでおしまい」

「だといいますが……」

ドクトラは妙に懐疑的だった。

しかし刃羅は、どうせ戻る気がないのだから、周りが何を言おうとどうでもいいと思っている。

「頼んどった装備は持ってきてくれはったかえ？」

「ええ。その部屋に」

「センキューー！」

ドクトラが示した部屋に入っていく刃羅。

それを見送ったドクトラは顎に手を当てて考えながら自分の待機部屋へと向かう。

「……そう上手く行きますかねえ。まあ、いいですか。雄英に戻るなら、それはそれで面白いですし」

そして部屋の扉を開けるドクトラは、この後のための手配に意識を切り替えるのだった。

人物紹介!!

・ストレデイ／たのう多納 おさみ収未

誕生日：10月10日。身長：165cm。A型。

好きなもの：収納棚、整理整頓

黒髪ショートパーマに目元を覆うマスクに、黒の羽根つきチロリアンハットを被った手品師風の格好をしている。Bカップ。

20代後半。

運び屋。ドクトラの組合に所属しているため、普段はドクトラが指示を出すものを運んでいる。

シヤフルとチームを組むこともあり、仕事内容に筋が通っていれば文句は言わない。

刃羅とはドクトラの依頼で知り合い、顔見知り程度の付き合い。

Mr. コンプレスが大っ嫌い。

個性：《収納》

手で触れたものを体に収納できる。限界容量は600Kg。それを超える量を入れると一気に体重が全重量分になる。開閉できる箱であれば大きさ関係なく自分の体を収納できる。フェリーや飛行機も箱であれば大きさ関係なく収納できるが、重さは変わらない。

・ 鎧関／鎧藤 がいせう こうだい

誕生日：3月30日。身長：214cm。O型。

好きなもの：相撲、ちゃんこ

黒い鬘に浴衣を着ている。脂肪で目が細くなっており、右頬に一筋の傷痕がある。

30代後半。

傭兵のように全国を歩き回りながら用心棒をしており、最近はずドクトラが抱える施設で活動している。

刃羅とはドクトラの依頼で共に用心棒をした仕事仲間。刃羅からは「苦手」と言われている。

ヒーロー志望だったがステイン同様、当時のカリキュラムや教育理念に疑問を感じて中退する。その後はヴィジランテ的活動を続けていた。

個性：《肉鎧》

筋肉を鎧に変える。筋肉が多いほど鎧が硬くなるので、必然的に関取になった。集中力がいるのと鎧のまま1日いると筋肉痛になる。

刃羅やステインの天敵とも言える『個性』。

#30 邂逅と真実

緑谷達は神野区に到着した。

百の提案で変装して、発信地点を目指す。

その途中で相澤達の謝罪会見を見たが、ただ責め立てるマスコミや周囲の雰囲気にも異様さを感じた。

そして廃倉庫がアジトだと突き止めることに成功する。

「電気も点いてねーし、中に人がいる感じもしねえな」

「木を隠すなら森の中。廃倉庫を装っているわけだな」

工場入り口には人が出入りしている気配はなかった。

「他に出口があるのかな?」

「あの霧の奴だろ?」

「あつ、そっか」

黒霧の存在を思い出して、納得する緑谷達。

黒霧の力があれば、中に直接ワープすればいいだけだった。

その後、倉庫の裏手に回り、隣の建物と塀の隙間に入り込んで、入り口や中の様子を窺える場所を探す。

倉庫の窓が塀の近くにあり、飯田と轟が足場になって、切島と緑谷が中を暗視鏡で窺う。

中を覗き込んだ2人は倉庫の奥に無造作に安置されている脳無達を発見し、慄いてしまう。

「あんな無造作に……管理出来るなんて……あの化け物は……敵連合にとっては使い捨ての兵器なのか……?」

「ここに爆豪がいてもよ、あれ動かされたら戦闘は避けられねえぞ……!」

「くそ……!」

「分かっただろう!俺達では無理なんだ!」

「ここは一度離れましょう」

「っ!?ちよつと待て。なんか表が騒がしいぜ?」

飯田と百が作戦中止を提案するが、その時切島が倉庫の表が騒がしくなってきたことに気づく。

それに緑谷達も何だ？と確認しようとする、倉庫の表が突如爆発した様に崩れる。

「うおおおおお!?!」

あまりの衝撃に身を屈める緑谷達。

そして衝撃が収まったことを確認して顔を上げる。

「ど……どうなっているんだ!?!」

「いてててて……!?!」

切島と百が塀をよじ登り、中を確認する。

「Mt. レディにギャングオルカ……ジーンストまで……!?!」

「トップヒーローが2人も……!?!それに警察の機動隊ですわ……!?!」

倉庫の中ではジーンスト、ギャングオルカ、Mt. レディが脳無を引っ張り出して確保していた。

「うえええ!?!気持ち悪い!?!これ本当に生きてんのお?こんな楽な仕事でいんですかね?ジーンストさん。オールマイトの方に行くべきだったんじゃないですか?」

「難易度と重要性は切り離して考えろ。新人。それに見てみる」

「え?」

ジーンストの言葉にレディは脳無が入っていた箱に目を向ける。

そこには黒い霧が渦巻いていた。

「何です?あれ」

「あれが例の《ワープゲート》だろう。向こうの奴がこいつらを向こうに呼び出そうとしていたわけだ」

「うわっ!ギリギリい」

「機動隊!メイデンを!まだいるかもしれない。ありつたけ頼みます!」

「今の所、脳無しか確認出来ぬな」

ジーンストは機動隊に指示を出して、脳無の拘束を始める。

その間もギャングオルカが油断なく周囲を確認する。

その様子を緑谷達は目を見開いて眺めていた。

「ヒーローは俺達よりもずっと早く動いていたんだ……!?!」

「すんげえ……!?!」

「さあ！すぐに去ろう！俺達にもうすべきことはない！」

『オールマイトの方』……かつちゃんはそのうちにいるのか……」

飯田は何事もなく終わりそうにホッとすする。

それに緑谷がジーニスト達の会話を思い出して、爆豪の事を考える。

「オールマイトがいるなら尚更安心です！さあ、早く……！」

直後。

ドン!!!

緑谷達の真後ろで一瞬爆発した。

しかし、その一瞬で倉庫半分は跡形もなく吹き飛び、近くのビルも崩壊した。

何より、あまりにも濃厚な死の気配が緑谷達に降り注ぎ、ただ必死に息を潜めることしか出来なかった。

「せっかく弔が自分で考え、自身で導き始めたんだ。出来れば邪魔はよして欲しかったな」

緑谷達は必死に震えと吐き気を抑えることしか出来なかった。

本能で理解してしまった。

『見つければ殺される』と。

そして緑谷は理解する。

（冗談だろ……オールマイト……あれが……オール・フォー・ワン……！）

オールマイトが話していた、いずれ戦うことになる巨悪。

オールマイトですら倒しきれなかった悪の根源にして、《ワン・フォー・オール》のオリジンが生まれた理由。

それがいきなり後ろに現れた衝撃は大きかった。

すると、突如オール・フォー・ワンが拍手をする。

本来なら街の雑音に掻き消される程度の音。それが今は耳元で叩かれていくかのように聞こえた緑谷達。

「流石No.4!!ベストジーニスト!!僕は全員を消し飛ばしたつもりだったんだ!!」

明るい口調だが、内容は物凄く恐ろしかった。

「皆の衣服を操り、瞬時に端に寄せた！判断力、技術……並の神経じゃない！」

オール・フォー・ワンはすぐ目の前に倒れているジーニストを称賛する。

ジーニストは息も絶え絶えで、オール・フォー・ワンを睨みつける。「……………」

確かに敵連合にはブレインがいるとは聞いていた。オールマイトに匹敵する強さとも聞いていた。

しかし、己の安全が保障されない限り表には姿を見せないのではありませんか？

話が違う。

しかし、出てきた以上、接敵した以上、やることは変わらない。

そうジーニストは覚悟を決める。

そして攻撃しようとした瞬間、胸に衝撃が走る。

「相当な練習量と実務経験故の強さだ。君のは……………いらぬ。弔とは性に合わない『個性』だ」

一瞬でトップヒーローを倒したオール・フォー・ワン。

それに緑谷達は冷や汗と吐き気と恐怖で全く体が動かなかった。

バツシヤア

「げっほ!!くっせええ……………」

水が撒かれたような音がした直後、緑谷達の耳に探し求めている声が聞こえた。

「んっじやあこりゃあ!!」

「悪いねえ。爆豪君」

「あ!!?」

爆豪はオール・フォー・ワンを睨みつける。

すると、爆豪の後ろに死柄木達が爆豪同様突然現れる。

「また失敗したね。弔」

オール・フォー・ワンが死柄木に優しく声を掛ける。

「でも、決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい。こうして仲間も取り戻した。この子もね……………君が大切な駒だと考え判断した

からだ。いくらでもやり直せ。そのために僕がいるんだよ」

まるで大切な教え子、もしくは息子のように死柄木に声を掛けるオール・フォー・ワン。

「全ては君のためにある」

優しい声、優しい口調。

しかし、その内容はどうしようもなく異質だった。

緑谷は爆豪がそこにいることのみを考えて、どう助けるかを模索する。

そして動こうとした時、飯田が緑谷に掴みかかる。切島は百が掴んで引き留める。

それに冷静になる緑谷だった。

「……やはり……来てるな」

『!!』

オール・フォー・ワンの言葉に飯田達は一瞬呼吸が止まる。

そこに現れたのは、オールマイトだった。

オールマイトは上空から一気にオール・フォー・ワンに掴みかかる。

「全てを返してもらおうぞ!!オール・フォー・ワン!!」

「また僕を殺すか。オールマイト。それにしても、ずいぶん遅かったじゃないか」

パァン!!

2人がぶつかり合った事で巨大な衝撃波が周囲に放たれる。

それに爆豪や死柄木達は吹き飛ばされる。

「うおおおお!!」

緑谷達も互いにしがみついて衝撃波に耐える。

「バーからここまで5kmあまり……僕が脳無を送り、優に30秒は経過しての到着……衰えたね。オールマイト」

「貴様こそ。なんだその工業地帯のようなマスクは!? だいぶ無理してるんじゃないか!」

2人は軽口を言い合う。

オールマイトは体の調子を確認して、ステップを踏み、そして殴りかかる。

「5年前と同じ過ちは犯さん。オール・フォー・ワン。爆豪少年を取り返す！そして貴様を今度こそ刑務所に叩き込む！貴様が操る敵連合もろとも!!」

「それはそれは。やる事が多くて大変だな。お互いに」

オール・フォー・ワンが左腕を掲げた瞬間、腕が膨れ上がる。

左腕から空気の塊のようなものを放ち、オールマイトに直撃する。

腕から発射されたとは思えないほどの爆風を起こしながら、オールマイトは数棟のビルを貫き、薙ぎ倒しながら吹き飛ばされる。

『空気を押し出す』+『筋骨発条化』『瞬発力』×4『臂力増強』×3。
この組み合わせは楽しいな……増強系をもう少し足すか」

オール・フォー・ワンはなんでもないことのように話す。

「さて、ここは逃げろ。弔。その子連れて」

次にオール・フォー・ワンは右手指から赤い爪のようなものを伸ばして、気絶して倒れている黒霧の体に突き刺す。

「黒霧。皆を逃がすんだ」

「ちよーあなた！彼、やられて気絶してんのよ!?!よく分かんないけど、ワープを使えるならあんたが逃がしてちょうだいよ!」

「僕のはまだ出来たてでね。マグネ。転送距離は酷く短いうえに……彼の座標移動と違い、僕の元に持つてくるか、僕の元から送り出すしか出来ない。それに送り先は人。なじみ深い人物でないと機能しない」

すると、黒霧の頭部と両手の靄が巨大化する。

「さあ、行け」

「……先生は……!」

死柄木がオール・フォー・ワンに声を掛けた瞬間、遠くで何かが飛び上がる。

そしてオール・フォー・ワンのすぐ横にオールマイトが降りてくる。

「逃がさん!」

「常に考えろ。弔。君はまだまだ成長できるんだ」

死柄木に飛び掛かるオールマイトに、オール・フォー・ワンが割り込む。

「行こう死柄木！あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めてくれている内に！」

コンプレスが同じく倒れている茶毘に触れて圧縮する。

そして爆豪に顔を向ける。

「駒持つてよ」

「めんっ……ドクセー」

それに爆豪は不敵に笑うが、冷や汗が流れる。

コンプレスやトウワイズ達が爆豪を捕らえようとした時、

上空から敵連合に向けて『風』が襲い掛かる。

「！！！！」

「はーはっはっはっ！！ド派手だな！！だな！！」

「いやいや……これは流石にヤバイでしょ……」

飛び下がって風を避けたコンプレス達や爆豪は、上空から響く声の方向に視線を向ける。

「なんだあ!？」

「誰よ!?あいつら!」

現れた2つの人影に爆豪は顔を顰めて、マグネは目を見開く。

爆豪とコンプレス達の下り立ったのは、白い髪を靡かせる濃緑の軍服女性に灰色のコートとハットを被った男だった。

新しく現れた2人にオールマイトやオール・フォー・ワンも戦いを止め、そして緑谷達も意識を向ける。

「……何者だ……?」

「……あの2人は。それに……まさか……君が現れるとは……」

ザリ。ザリ。とオール・フォー・ワンとオールマイトに近づく人影。

その姿にオールマイトも死柄木達も目を見開く。

「……なんで……お前が……!？」

「……ハ……ハア……決まっているだろ」

現れたのは目元を覆う白い包帯に首元には赤いマフラー。そして全身に大量の刃物を装備した男。

「粛清だあ……！正しき社会を作るために……!」

その声と言葉に緑谷、飯田、轟も恐怖を忘れて目を見開く。

「やはり……ハア……歪んだ信念で生み出されるのは、無作為な破壊だけだ」

今回の事件のきっかけになった男が、遂に血を舐めに来た。

「お前も粛清対象だが……今回は後回しだ」

男は背中を抜いて、オール・フォー・ワンに切っ先を向ける。

「お前を粛清する……！オール・フォー・ワン!!」

ヒーロー殺し『ステイン』。

敵連合の象徴とも言われた男が、敵連合に刀を向けたのだった。

これにより戦場は更なる混乱に包まれる。

緑谷達はステインが現れたことは驚愕だったが、今の状況こそチャンスではないかと考える。

「どうする……?」

「馬鹿を言うな……！確かに混乱しているが、奴らが僕達を襲わない確証はないんだぞ!」

「襲う気はないわよ」

『!!』

突如、響いた声に心臓が飛び出たのではないかと錯覚したほど驚いた緑谷達5人。

見上げると、緑谷達を隠していた壁の上に、赤い布で頭を覆い、顔に赤い髑髏の仮面を被っている女性と思われる人がいた。ステインと似た黒のノースリーブの服と赤いパラッツオパンツに黒のブーツを身に着けている。右手には刀を持っており、背中にももう1本の刀を携えて、腰にもナイフが2本が差さっている。

「こっち見ない。それに声も出すんじゃないわよ」

女性は右手に刀を握ったまま、死柄木達がいる戦場に目を向けている。

「あんた達の事は知ってるわ。何でここにいいのかもね。ステインも私達も、狙いは敵連合」

ぐくぐりと唾を飲んで言葉を聞く緑谷達。

「私達があの子供と敵連合を離す。あんた達は上を目指して準備なさ

い」

「……上？」

「早くなさいよ」

「あ……！」

女性は左手で背中の中の刀を抜いて、飛び出していく。

それを唾然と見送った緑谷達は言われたことを必死に考える。

「ど、どうするんだ……!？」

「なんだか分かんねえが……今は爆豪だ……！」

「このままじゃオールマイトが全力で戦えない！助けるんだ！僕達で！」

「だが、どうやって……!？」

「この乱戦の中を戦わずにですよ!？」

緑谷は必死に考える。

『上を目指して準備なさい』

その言葉にハツとする緑谷。

(オールマイト、そしてステイン達はどうやってここに来た?)

そして答えに辿り着く。

「皆……！見つけた！戦闘にならず、同時に僕らも逃げれる！」

「聞かせろ」

轟の言葉に緑谷は作戦を説明する。

それに飯田達は顔を顰めるが、確かに一番可能性が高い。

「飯田さん……！」

「博打ではあるが……この状況では一番リスクが少ない。上手く行けば全てが好転する……やろう!!」

飯田の言葉に全員が顔を引き締める。

戦場では完全に混戦状態だった。

「くつそがあー！なんなんだよ!!てめえらはあ!!」

「我らは『ステイン親衛隊』である！ある!!小僧!!邪魔だ!!邪魔だ!!」

「はいはい……子供は後ろに居てね」

「ああん!？」

カンパネロとマガクモは爆豪を無視して、敵連合に攻撃を開始す

る。

「ちよ!?急になんだよ!こいつら!?ゆつくりだな!」

「ステ様あく!!殺させてえ〜!って、きやあ!」

「ちい!こいつら!」

「なんなのよおん!」

「……」

「ヒーロー殺しい?なんであいつがっ!」

敵連合は完全に混乱している。トガはステインの出現に興奮してカンパネロの風に吹き飛ばされ、鎧関はずっと黙り込んでおり、鎧を纏って防御はしても攻撃はしなかった。

死柄木は首を掻きむしりながらステインを睨んでいたが、後ろから迫る殺気に気づいて飛び下がる。

「あら。感が良いのね」

「てめえ……!なんなんだよ……!」

『『エスパデス』。敵連合が集めたかったステイン信者つよ!!』

エスパデスは死柄木に刀を振り、死柄木が手を動かした瞬間、距離を取る。

「カンパネロ!!」

「いいだろう!!だろう!!」

エスパデスが叫ぶと、カンパネロが死柄木に向かって《鎌鼬》を放つ。

死柄木はそれを転がって躲す。

「くっそがあ……!」

目を血走らせてエスパデス達を睨みつける。

エスパデスはトウワイズ達を牽制しながら、爆豪に近づく。

「準備なさい」

「ああ?」

「すぐにあんたのお仲間が上に現れるわ。いつでも行けるようにしときなさい」

「仲間だあ?……なにもんだテメエ……?」

「どうでもいいでしょ?『No. 1になる男』くん?」

エスパデスは近づいて来たマグネに刀を振る。
爆豪はエスパデスの戦う姿に既視感を感じた。

エスパデスはそのまま前に出て、トウワイズ達に斬りかかる。

「全然近づけねえぞ!!行けるよー!」

「茶毘がいねえのがきつい!!」

近接メインばかりで爆豪に近づけなかった。

頼みのオール・フォー・ワンはオールマイトとステインに押され気味である。

「ステイン!!乱刀少女はどこだ!?!」

「知らない」

「ちよつとこれはマズイね……」

オールマイトもステインといがみ合ってはいるが、攻撃までは仕掛けない。ステインはパワーはないが、右手の刀と左手のナイフ、そして恐ろしいほどの身のこなし。

衝撃波を放とうにも死柄木達を巻き込みかねないし、どちらか一方は確実に躲す。

殺せないが圧倒的なパワーを持つオールマイト。圧倒する力はないが殺しに来るステイン。その2人を相手にしながら、血を流さないように気を張り続けながら、死柄木達のサポートもしなければならぬ。

「脳無を呼び戻すかな?つとお!」

「させぬわあ!!」

「増えたところで粛清することには変わらん」

オールマイトの拳を右腕で防ぎ、左腕を骨で覆ってステインの刀を防ぐ。

その時、突如近くの壁の一部が吹き飛び、巨大な氷が出現する。

その音と氷に全員が目を向ける。

氷の上を高速で移動する数人の人影。

緑谷、飯田、切島だった。

「カンパネロ!!マガクモ!!」

「承知している!!いる!!」

「やれやれ……若者って凄いなえ」

エスパデスの声にカンパネロが鎌鼬を、マガクモが糸を放って敵連合に攻撃を仕掛ける。

オール・フォー・ワンが緑谷達に右手を伸ばそうとしたが、ステインとオールマイトが迫り防御に専念せざるを得なくなる。

そして戦場の真上に緑谷達が達した時、切島が下に手を伸ばして叫ぶ。

「来い!!!」

『すぐにあんたのお仲間が上に現れるわ』

エスパデスの声が頭に反芻する爆豪。

「仲間なんかじゃ……ねええ!!」

ボボオオン!!

最大出力で爆発させて、空へと舞い上がる爆豪。

そして手を伸ばして、切島の手をしつかりと握り締める。

「……バカかよ」

それに敵連合達は慌てふためく。

「どこにでも……っ……現れやがる……!!」

「あんたが自分から突っ込んだんでしょ?」

「!!」

呻くように叫ぶ死柄木にエスパデスが斬りかかる。

「あんたが殺してやろう、邪魔してやろうって突っ込んでおいて、何驚いてるのよ? オールマイトに似てる男だって知ってるでしょ? そりや来るわよ」

「……っ!」

「さて、これで邪魔はもういない」

エスパデスが死柄木に右手の刀を突き付ける。

「あんたは私が粛清する」

「……ふざけるなあ!!」

我を忘れて叫ぶ死柄木。

エスパデスは死柄木に斬りかかり、死柄木は触れようと両手を伸ばす。付かず離れずを繰り返す2人。

コンプレス達は何とか爆豪を追いかけようとするが、カンパネ口達が妨害する。

オールマイトはオール・フォー・ワンを殴り飛ばしながら、緑谷達を見上げる。

「マジかよ……全く！」

緑谷達は戦場外れの崩れたビルに着地する。

それを見届けたオールマイトにエスパデス達。

「……これでクラスメイトとしての義理は果たしたわよ」

エスパデスは小さく呟いて、死柄木を見据える。

そこに入れ替わる様に戦場に現れる黄色い弾丸。高速で飛び、トウワイズ達を気絶させていく。鎧関は全くダメージは無く、倒れているトウアイズ達を庇う様にカンパネ口達の前に立つ。

現れたのはグラントリノだった。

「遅いですよー！」

「お前が速すぎんだ。それにしても随分と厄介な状況じゃねえか」

「ステインの狙いはオール・フォー・ワンと敵連合です！悔しいですが、今は敵連合を!!」

「わあつたよー！」

グラントリノは死柄木とトガ、鎧関に目を向ける。

「それにしても緑谷!!つとに益々お前に似てきとる!!!悪い方向に!!」

グラントリノがオールマイトを指差しながら怒鳴る。

「本当に情けないことに……これで心置きなくお前を!!倒せる!!」

オールマイトがオール・フォー・ワンに歩み寄る。

「やられたな。綺麗に形勢逆転だ」

オール・フォー・ワンが動こうとするとステインが斬りかかる。

「本当に厄介だなー！」

「死ね」

「断るよー！」

ドン！と上空に向けて衝撃波を放ち、オールマイトとステインに距離を取らせるオール・フォー・ワン。その隙をついて爪を伸ばして、倒れているマグネに突き刺す。そして『個性』を強制的に発動する。

するとトガに向かって死柄木達が引つ張られていく。

「!?」

「え?やー!そんな急に来られてもおお!ぐえ!」

トガは飛んできたトウワイスやコンプレスとぶつかって黒霧の靄に吸い込まれる。

死柄木や鎧関も靄に向かって飛んでいく。

「鎧関。マグネを頼むよ」

ステインが爪を斬り落とそうと迫っているのを見て、鎧関にマグネを放り投げる。直後にステインに爪を斬り落とされる。

鎧関はマグネを掴み、靄に吸い込まれる。

「待て……駄目だ!先生!」

「逃がさん!!逃がさん!」

「おいおい……無茶するねえ」

「死になさい!」

カンパネロとマガクモが鎌鼬と糸を放ち、エスパデスとグラントリノが飛び掛かる。

「邪魔をしないでくれよ」

再び衝撃波を放つオール・フォー・ワン。死柄木の目の前に着弾して弾け、死柄木を靄へ吹き飛ばし、エスパデス達も後ろへ吹き飛ばされる。

そして靄が消えていく。

「君は戦い続ける。弔」

オールマイトがオール・フォー・ワンに殴りかかる。ステインは衝撃を避けるために少し後ろに下がる。

「僕は弔を助けに来ただけだが。戦うと言うなら受けて立つよ」

オール・フォー・ワンはオールマイトの拳を弾く。

オール・フォー・ワンの背後からステインが迫る。それに爪を伸ばして牽制する。

そこにさらにエスパデス、カンパネロ、マガクモ、グラントリノも飛び掛かるが、縦横無尽に右手の爪を振るい、左腕で衝撃波を放って近づかせないオール・フォー・ワン。

マガクモは衝撃波で吹き飛ばされてビルに叩きつける。

「マガクモ！」

「ところでオールマイト。もう1人の生徒は救わなくていいのか？そこにいるのに」

「!!？」

オール・フォー・ワンの言葉にオールマイトは目を見開く。

それにエスパデスが慌てたように飛び掛かる。

「生徒に戦わせたままでもいいのか？」

「黙りなさい！」

「ふははは！随分と乱れたねえ。エスパデス……乱刀刃羅」

バン！と小さい衝撃波で弾き飛ばされるエスパデス。地面を数回バウンドして、体を起こす。

「乱刀少女……なのか？」

「そんなわけではないでしょ」

「自分を偽るのは良くないよ」

オールマイトの言葉を即座に否定するエスパデス。

それをオール・フォー・ワンがあざ笑うかのように言葉を紡ぐ。

「泣ける話じゃないか。爆豪君を助けるために偽りの日常を捨てたんだろ？二度と雄英に戻らない覚悟でここに来たんだろ？」

「……乱刀少女」

「……」

「それに比べて情けないなあ。オールマイト。守るべき生徒と助けるべき生徒に助けられて」

オール・フォー・ワンの言葉に両手を握り締めるオールマイト。

「それにしても君には驚かされたよ。乱刀くん。まさかヒーロー殺しの元に行くなんてね。それは計算外だった」

「……は？」

オール・フォー・ワンの言葉に動きを止めるエスパデス。

カンパネロやオールマイトも訝しむ。

「ヴィランとヒーローの間に生まれた君にはとても興味があつてねえ。こつちに来てくれないかと色々手配したんだよ」

「手配……ですって……？」

「そうさ。君のお母さん、スライシスが君の『個性』で悩み、苦しんでいるのは知っていた。だから『いなくなっても仕方がないこと』とか『危険を事前に食い止める』ことは悪ではない』ってアドバイスしてあげたのさ。ヴィラン時の知り合いとは縁が切れなかったみたいだからねえ。お金を渡せば簡単に靡いたよ。薄情な友達だったね」

オール・フォー・ワンの言葉に目を見開くオールマイト。

「そして飛び出した夜にも、その友達の前に行ってたのさ。そこで『個性』をブーストさせる薬を飲ませて、暴走させてみたんだ、もちろんヒーローが駆けつける。そこにわざわざ僕が出向いて、そのヒーローの『個性』を強制発動させて殺させたのさ！」

「貴様ぁー！！！！」

オール・フォー・ワンは両腕を広げて、自慢げに語る。

そこにオールマイトが怒りに叫びながら飛び出して、殴りかかる。それを受け止めるオール・フォー・ワン。

エスパデスは、刃羅は目を見開いて、ただ固まっている。

「言っておくけど。お父さんには僕は何もしてないよ？まあ、ただ……」

オールマイトと押し合いながら、楽し気に話し続けるオール・フォー・ワン。

「僕の仲間が暴走したのは……本当に申し訳ないと思ってるよ」

それを聞いた瞬間、

「うああああああああ！！！！」

「刃羅！！」

「……ハア……」

刃羅は叫びながら、オール・フォー・ワンに斬りかかる。飛び出した刃羅にカンパネロも続いて飛び出し、ステインも顔を顰めてオール・フォー・ワンに向かって飛び出す。

オールマイトを弾き飛ばして、刃羅に顔を向けるオール・フォー・

ワン。

刃羅は仮面の下の目を血走らせて、殺意全開で刀を振るう。

オール・フォー・ワンは両腕に骨を纏って刀を砕く。刃羅は右脚を太刀に変えて蹴り上げるが、それも腕で防がれる。脚をすぐさま戻して、両腕をクレイモアに変える。

その時、オール・フォー・ワンの左腕が僅かに膨らみ、刃羅に左手に向ける。

クレイモアを振り上げていた刃羅は、それでも腕を振り下ろそうとする。そこにカンパネロが横から肩で突進して、刃羅を押し飛ばして場所を入れ替わる。

「未熟者!!」

「そう言っただけでやるなよ」

「があ?」

顔を顰めてオール・フォー・ワンに右手を突き出して鎌鼬を放とうとしたカンパネロ。それより先にオール・フォー・ワンから衝撃波が放たれて、カンパネロはくの字に吹き飛ばされる。

オール・フォー・ワンの後ろからステインが、正面からオールマイトが殴りかかる。

それをオール・フォー・ワンは全身から衝撃波を放って、全員を吹き飛ばした。

「ぬううう!!」

「ぐ……ちい……!」

「ああああ!!」

「うおお!!」

オールマイトは踏ん張って大きく吹き飛ばされるのを防ぎ、ステインも刀を地面に刺して滑りながら耐える。

グラントリノは空中で体勢を立て直し、刃羅は踏ん張れずに端まで吹き飛ばされる。

「貴様はどこまで!!踏みにじれば気が済むのだ!!」

「お前だって、そうじゃないか」

オールマイトが叫びながら左拳を振るう。

するとオール・フォー・ワンの目の前にグラントリノが出現する。それにオールマイトは目を見開くが、もはや腕は止められなかった。グラントリノの顔に拳が当たった瞬間、オールマイトの腕が跳ね返されたように弾かれる。

「すみません！」

「僕はお前が憎い。かつてその拳で僕の仲間を次々と潰し回り、お前は平和の象徴と謳われた」

ステインが斬りかかるが爪を伸ばして牽制する。

「僕らの犠牲の上に立つその景色」

オール・フォー・ワンの左腕が膨れ上がる。

それを見た瞬間、オールマイトは左手でグラントリノを引き寄せ、右腕を構える。

「さぞや良い眺めだろう？」

「DETROIT SMASH!!!」

ドン!!!

衝撃波を放つと同時に拳を叩きつけて無理矢理相殺するオールマイト。

「ヒーローは多いよなあ。守るものが」

「黙れ」

「!!」

オールマイトがオール・フォー・ワンの左腕を掴む。

「貴様はそうやって人を弄ぶ！壊し！奪い！つけ入り支配する！日々暮らす人々を！幸せを望む人々を！理不尽が嘲り嗤う!!私はそれが!!」

右手のグラントリノを放り投げて拳を握る。

「許せない!!!」

オール・フォー・ワンのマスクを砕きながら地面に叩きつける。

刃羅はその姿を、亀裂が走る髑髏の下で歪む瞳に、確かに焼き付けたのだった。

#31 様々な『おわり』

爆豪を見事に救出した緑谷達は戦闘域から脱出し、一般人の避難に紛れていた。

「轟君！大丈夫!?!」

『ああ。奴の背面方向に逃げてる。それにプロの避難誘導に従ってる』

「良かった！僕達は駅前にいるよ！奪還は成功したよ！」

轟達の無事にホツとする緑谷。

その横で爆豪は顔を顰めて立っていた。

「いいか。俺あ助けられたわけじゃねえ！一番良い脱出経路だっただけだ！」

「ナイス判断！」

爆豪の言葉に切島が親指を立てる。

「しかし……まさかヒーロー殺しとその仲間に助けられるとは……」

「乱刀さんも近くにいるのかもしれない……!」

飯田の言葉に切島が頷き、緑谷が刃羅の名前を上げる。

緑谷の言葉に爆豪が顔を歪める。

「おい……あのイカレ女がどうしたって?」

その言葉に緑谷達は悔し気に顔を歪める。

「病院を退院した後に行方不明になったんだ。今も見つかってなくて、ヒーロー殺しに攫われた可能性があるって話してたんだ」

その言葉に爆豪は先ほど自分に声を掛けてきた髑髏面の女を思い出す。

「あの髑髏女……」

「え?」

「あの髑髏女がイカレ女じゃねえのかって言ってるんだよ」

「!?!」

爆豪の言葉に緑谷達は目を見開いて固まる。

その事実は受け入れがたいものだった。

「そ、そんなわけあるかよ!?!」

「そうだ!!彼女はステインから逃げ出してきたんだぞ!?それがなぜ一緒に行動しているんだ!!」

「逃げ出したつつうのが嘘だっただけかもしれないねえだろが」

「それは……」

「嘘だったら何で雄英に入ったんだよ?」

「スパイとかでも何でも考えられるだろうが」

反論が上手く思い浮かばない飯田達。

特に緑谷は保須でのステインに向けていた刃羅の表情を思い出し
ていた。

それに刃羅はステインの思想に少なからず賛同しているとも言っ
ていた。そして刃羅の両親の事もある。

緑谷達が答えを出せずに考え続けていると、空を数台のヘリコプ
ターが飛んでいった。

すると駅前の巨大モニターに戦場が映し出された。

『悪夢のような光景！突如として神野区が半壊滅状態となってしまう
ました!!現在オールマイト氏が元凶と思われるヴィランと戦闘中
です!!え?ちよ、ちよつと待つてください!!オールマイト達のすぐ傍に
いるの、ヒーロー殺し!』

キャスターの言葉にニュースを見ていた全員が驚きに目を見開く。

『ほ、本物なのでしょうか!ここから見える限りでは本人と特徴が一
致しているように思われます!もし本物であるのならば、オールマイ
トの殺害を狙っているのでしょうか!』

遂にステインの存在が公に晒される。

ボロボロのオールマイトの姿に多くの者が不安に包まれる。

特にA組の面々は本当にステインが脱走していることで、緑谷達の
推測の信憑性が増してしまった。

しかし、その後の映像でそれらは碎かれていくことになる。

オール・フォー・ワンはオールマイトを吹き飛ばして立ち上がって
いた。

「弔がせつせと崩してきたヒーローへの信頼。決定打を僕が打って良いものか……」

オールマイトは膝を着いて荒く息を吐いている。
それを見て刃羅は嫌な予感がした。

(オールマイトの攻撃に耐えるなんて……!? それにオールマイト。あの姿……戦闘時間に制限がある!?! しかもあれだけのダメージ! 限界なのね!?)

刃羅は2本のナイフを抜いて駆け出す。

それを見てステインも飛び出し、オール・フォー・ワンに迫る。

「そろそろ邪魔だな」

「ぬかせえ!」

「しい!」

ステインと刃羅は同時にナイフを投擲する。

それをオール・フォー・ワンは体を逸らして躲す。ステインと刃羅は外れたナイフを掴む。初めからナイフを交換することが目的だったように。

そして一気に距離を詰めて、同時に斬りかかる。

刃羅が右手のナイフを逆手に持ち替えて、オール・フォー・ワンの顔面目掛けて斬りかかる。その反対からステインが刀で突きを放つ。それを顔を逸らして躲すオール・フォー・ワン。するとステインと刃羅はナイフと刀を手放す。刃羅が刀を、ステインがナイフを掴む。そして、そのまま斬りかかる。

オール・フォー・ワンは後ろに飛んで躲す。それにステインがナイフを投擲し、刃羅がステインに刀を投げながら、オール・フォー・ワンの左脚に左下段蹴りを放つ。もちろん足先には刃を生やしている。

オール・フォー・ワンは空中に浮いてナイフと蹴りを躲すが、そこにステインが飛び掛かり刀とナイフを振るう。その隙に刃羅はオール・フォー・ワンの背中側に回り、オール・フォー・ワンの背中に向かってナイフで突きを放つ。

「中々の連携だねえ!」

オール・フォー・ワンは2人の連携を素直に称賛するも、右手の爪

を伸ばして刃羅を攻撃し、左腕で衝撃波をステインに向けて放つ。

ステインは空中にいたため回避出来ずに吹き飛ばされ、刃羅も顔を逸らすが仮面の左半分と頭に巻く布が引き裂かれ、さらに腹部に2本の爪が突き刺さり、後ろに弾かれる。

引き裂かれた布の下からは銀色に輝く髪が現れる。

「まっず……!」

後ろに吹き飛ばされたのを利用して、左手で顔を隠しながら崩れたビルに向かって走って姿を隠した。

しかしオールマイトにははつきりとその顔が見えていた。

「やはり……乱刀少女……!」

そして他にも刃羅に気づく者達がいた。

『ど、どういうことなのでしょう! ヒーロー殺しはオールマイトではなく、黒いヴィランに攻撃を仕掛けました。仲間割れでしょうか! そしてヒーロー殺しの仲間と思われる者も黒いヴィランに攻撃を仕掛けますが、吹き飛ばされてしまいました!』

「今の髪って……!?!」

「本当に……乱刀くんなのか……!?!」

緑谷達は目を見開いて、隠れたと思われるビルの映像を見つめる。すぐに映像はオールマイトに戻されるが、緑谷達は刃羅の事で頭が一杯だった。

そしてそれはそれぞれの家でテレビを見ていたA組クラスメイトや相澤も見逃さなかった。

「刃羅ちゃん!?!」

「マジで……!?!」

「乱刀……!」

「あいつ……!」

梅雨はずつと握っていた携帯を床に落とし、思わずテレビに手を伸ばしていた。

「……刃羅ちゃん……?」

見間違うわけではない。

あの綺麗な銀色の髪は刃羅だ。ずっと傍で、そして林間合宿でトリーメントするときには手で触って間近で見たいのだから。なんでそこにいるのかは分からない。なんでステインといえるのかは分からない。

今、梅雨の胸に沸き上がる思いは唯一つ。

「無事で……よかったわ……」

状況はともかく、無事である。

それが分かっただけでも嬉しかった。

「お願い……無茶はしないで……帰って来て……」

テレビから目を離さず、ただただ祈る。

床に落ちた携帯に麗日を始めとするクラスメイト達から大量の着信とメールに気づくのは1時間後のことだった。

崩れたビルに飛び込んだ刃羅は荒く息を吐く。

「はあ……はあ……バレたやろか？」

「ギリギリってところね」

「……ストレディ」

刃羅の目の前にストレディが携帯でテレビを見ながら現れる。

「顔は写ってないわ。多分、今すぐバレることはないでしょ。はい。

仮面と布に武器よ」

左手からポコポコと物を取り出すストレディ。

それに刃羅はため息を吐きながら受け取る。

「マガクモ達は？」

「マガクモはすでに回収済み。カンパネロは「まだやる！」って言うてるわ。怒ってたわよ」

「……じゃろうな」

頭に布を巻き直す刃羅。ストレディも手伝い、きつめに縛る。そして新しい髑髏の仮面を顔に着ける。背中の鞘を放り出して、新しい刀とナイフを装着する。さらに薙刀を担ぐ。

その時、

ドオン!!!

「!!」

轟音が鳴り響き、バツ!と戦場を確認する刃羅達。

オール・フォー・ワンが左腕を突き出しており、その先には骸骨のように萎んだオールマイトが左拳を突き出して立っている光景だった。オールマイトが立っている場所からV字に地面が抉れており、そこからオールマイトがオール・フォー・ワンの衝撃波を防いだと推測する刃羅。

「は? 誰あれ?」

「あれがオールマイトの本当の姿だべ」

「はあ!？」

「騙し騙しやつとつたんやろ。出るわ。オールマイトも限界や。それにステインもどう反応するか分からん!」

刃羅はビルから飛び出す。

オールマイトの様子を見ると、オールマイトの後ろに人がいるのが見えた。

「……避けねえよなあ。狙ってやりやがったな。あのクソ野郎!」

戦場に下り立ち、走ろうとする刃羅。

その時、視界の端に赤いものが入る。

「!?……ステイン」

立っていたのはステインだった。

ステインはオールマイトを見て、固まっている。

「……オール……マイトお……?」

ステインはオールマイトの姿を受け入れられなかった。

本物の英雄と認めたオールマイトが、骸骨のように萎んでいる。自分が唯一殺してされていいと認めた男が、骸骨のように萎んでいる。

血塗れで、今にも倒れそうになっている。

絶対のヒーローの姿にステインは絶望を感じていた。

自分の足元が崩れ去るような感覚に襲われるステイン。

その時、

「死ね」

刃羅が薙刀を振り上げて、オール・フォー・ワンの背後から斬りかかる。

オール・フォー・ワンは振り返りながら躲し、右手の爪を刃羅に伸ばす。刃羅は薙刀を振り回しながら爪を全て弾き、踊る様にオール・フォー・ワンに迫る。

「オールマイト!!戦えないなら、後ろの女を連れて下がりなさい!!」

「……乱刀……少女……」

「そんな死んだ顔のヒーローなんて……誰も望んでないのよ!!」

叫びながら薙刀を振り、蹴りを繰り出す刃羅。

「ステイン!!あんたもやる気無くなったなら帰れ!!」

「元氣だねえ。乱刀刃羅。そんなに僕を殺したいかい?」

オール・フォー・ワンは左腕を膨らませる。

それを見た瞬間、刃羅は後ろに下がりながらナイフを投擲する。

「殺したいに決まってるじゃない!」

「それはそれは。欲望に正直なことだ。君も雄英生でヒーローを目指してるのになあ!」

「ちい!」

衝撃波を横に飛んで躲そうとする刃羅。しかし、僅かに右足に掠つてしまう。

「っ!」

痛みを耐えながら両足と左手を地面に着いて滑る。

「それにそれはヒーロー殺しの思想に反するんじゃないのかな?」

「でしょうね。だから何よ?」

「ほう?」

しゃがんだ姿勢のまま刃羅はオール・フォー・ワンを睨む。

「私は私。ステインの人形じゃないわ。私はあんたを殺す」

「それはそれは!ヴィランへようこそ。エスパデス」

「それくらいじゃないと私はオールマイトを救えない」

「……なに?」

刃羅の言葉に両腕を広げていたオール・フォー・ワンは動きを止める。

「私にはヒーローと違って守りたいものなんてほとんどない。だから、ヒーローみたいには戦えないわ」

「……」

「そしてあんたみたいな化け物を殺さずに抑え込む力もない。殺すことで精一杯」

刃羅は薙刀を両手で握り締める。

「本物の英雄を取り戻すには誰かが血に染まらねばならない。そうよね？ステイン」

「……刃羅」

「私は……本物の英雄オールマイトを守るために血に染まるわ」

「っ!?……乱刀少女!」

「贗物だけの社会にしないために。徒に力を振りまく犯罪者を減らすために。私は体を血に染める。だから死ぬ。社会のガン!!」

「言ってくれるじゃないか」

オール・フォー・ワンに飛び掛かる刃羅。

薙刀を横振りして斬りかかるが、オール・フォー・ワンが左腕を肥大化して振り払う。刃羅は後ろに滑りながらも、薙刀を体を捻りながら全力で投擲する。

体を反らして躲すオール・フォー・ワン。

その姿をオールマイトは見つめて続けていた。

「……本当に……情けない……」

両手を握り締めて、刃を食いしぼる。

その時、

「負けないで……」

背後で瓦礫に挟まれた女性が泣きながら声を上げる。

「オールマイト……お願い……救けて」

その言葉が耳に、心に響いたオールマイト。

(救げなければならぬ……!彼女を……乱刀少女を……!ここで……こんなところで折れるわけにはいかんだ!!!)

「もちろんさ」

オール・フォー・ワン、刃羅はオールマイトから噴き上がった気迫

に戦いを止めて目を向ける。

「ああ……多いよ……！ヒーローは……守るものが多いんだよ！
オール・フォー・ワン!!そして、君も守りたいんだ!!乱刀少女!!」
右手を握り締めると右腕だけがズム!と太くなるオールマイルト。

「だから……負けないんだよ」

不敵に笑うオールマイルト。

その姿に刃羅は改めてステインが心酔し、緑谷と爆豪が目標とする理由も理解した。

オール・フォー・ワンはオールマイルトに意識を向ける。

「渾身。それが最後の一振りだね。オールマイルト」

フワツと上空に浮かび上がるオール・フォー・ワン。

「手負いのヒーローが最も恐ろしい。腸をまき散らし迫ってくる君の顔。今でも夢に見る。2・3振りは見といた方がいいな」

右腕を膨らませるオール・フォー・ワン。

その時、薙刀を振り上げたステインがオール・フォー・ワンの後ろに現れる。

「社会を乱す巨悪。死ぬ」

ステインは薙刀を振り下ろし、膨らました腕を振って衝撃波で払うオール・フォー・ワン。

ステインは後ろに吹き飛ばされるが、

「遅いわよ」

「ハア……うるさい」

「なら、さっさと行きなさいよ」

刃羅がステインの背後に飛び上がり、受け止める。それにステインは薙刀を放り投げると、すぐさま両足で刃羅の太ももを踏みつけて、再びオール・フォー・ワンに飛び掛かる。

刀とナイフを抜き、オール・フォー・ワンを攻めるステイン。一度地面に下りた刃羅も薙刀を拾って、オール・フォー・ワンに飛び掛かる。

「あんなオールマイルトがヒーローでいいのか?ヒーロー殺し」

「己を顧みず、他を助けようとする。朽ち衰えた姿で尚戦おうとする

あの姿こそヒーローそのもの!! 貴様などに奪わせるものかあ!!」

ステインは力強く叫び、武器を振るう。オール・フォー・ワンは躲しながら、衝撃波を放とうと左腕を伸ばした瞬間、刃羅が薙刀で腕を斬りつける。

「ぐう!?!」

「斬った!!」

「させない!!」

左腕を肥大化させて薙刀を押し返したオール・フォー・ワン。

「化け物過ぎるわよ!?!」

「お前が未熟なだけだ!」

「ここで貶さないでよね!」

顔を顰めながら地面に下りる刃羅とステイン。

再び飛び上がろうとすると、オール・フォー・ワンに炎が襲い掛かる。

「!!」

オール・フォー・ワンが腕を振るい、衝撃波で炎を吹き飛ばす。

「その姿は何だあ!! オールマイトお!!」

現れたのはエンデヴァーとエッジショットだった。

「あの脳無達をもう制圧したか。流石No. 2ヒーロー」

オール・フォー・ワンがエンデヴァーに賛辞を贈る。

そこに再びステインと刃羅が斬りかかる。

エッジショットはオールマイトに近づき、その横を通り過ぎて背後の女性の元に向かう。

「彼女は任せてくれ。ジーニスト達はシンリンカムイが救けている。ここだけじゃない。周りにもヒーロー達が駆けつけている! オールマイトの負担を少しでも減らす!」

エッジショットが体を細くして女性を引っ張り上げる。

「皆がオールマイトの勝利を信じている。願っている。この程度しか手助け出来ないが……勝ってくれ! オールマイト!」

エッジショットの言葉にオールマイトは周囲に目を向ける。

エンデヴァーが炎を放ち、ステインと刃羅が絶えず飛び上がって斬

りかかり、さらにカンパネロも飛んできて鎌鼬を放つ。

その全員が時折オールマイトに目を向ける。

『そろそろ力は溜まったか?』と。

そして多くの人の声が聞こえた気がしたオールマイト。

事実、日本中がオールマイトに応援の声を上げている。

「いい加減、煩わしい」

「!!!!」

その声を掻き消すかのようにオール・フォー・ワンが真下に向けて衝撃波を放ち、周囲に爆散させる。

エンデヴァーやカンパネロ、ステイン達は耐えきれずに吹き飛ばされる。

オールマイトにも爆風が襲いかかる。

全力で耐えようとした時、目の前に人影が現れる。

「ううううああああ!!」

「……乱刀少女!」

刃羅は両腕を広げて背中で爆風を受けて、オールマイトを庇う。両足に刃を生やして地面に突き刺して固定する。

爆風が収まると刃羅はダランと両腕を垂らす。その背中は服が破けてボロボロになっていた。

「精神の話はよして、現実の話をしよう」

オール・フォー・ワンが静かに声を上げる。

『筋骨発条化』『瞬発力』×4 『臂力増強』×3 『増殖』『肥大化』『鋌』『エアウオーク』『槍骨』今までのような衝撃波では体力を削るだけで確実性がない」

ゴキゴキ!と音を立てて、右腕が膨れ上がって変形していく。

「確実に殺すために。今の僕が組み合わせられる最高・最適の『個性』達で……君を殴る」

巨大な上に所々棘や岩のようなものが生えている異形の腕。

刃羅は目を見開いてすぐさま動こうとするが、足が動かなかつた。そこにオールマイトが刃羅の腕を掴み、後ろに放り投げる。

オール・フォー・ワンはすでに腕を振り被りながらオールマイトに迫っていた。

オールマイトも腕を振り被り、左足を上げる。
そして思いつき踏み込んで拳を突き合わせる。

その瞬間、衝撃が走り2人の周囲の地面が吹き飛ぶ。刃羅も頭を抱えて吹き飛び、瓦礫に叩き込まれる。

僅かにオールマイトが押し負ける。

その瞬間、オールマイトの右腕が細くなり、左腕が太くなる。そして上半身を捻りオール・フォー・ワンの右腕を紙一重で躲しながら、左フックをオール・フォー・ワンの顔面に叩き込んだ。

「っ……!!」

「らしくない小細工だ。誰の影響かな？」

しかしオール・フォー・ワンは倒れず、左腕を掲げて膨らませる。
「浅い」

「全ては……正しき社会のために……!!」

ステインが刀とナイフを振り、膨れ上がったオール・フォー・ワンの左腕を斬り裂く。

オール・フォー・ワンの左腕は血を噴き上げて、腕が萎む。

その攻撃で刀とナイフが碎ける。

「オー……オールマイトオオオオ!!」

ステインの叫びに応えてか、オールマイトは再び右腕に力を流し込んで太くする。

「!!」

「そりゃあ!!腰が!!入ってなかったからなあ!!」

オールマイトは歯軋りをして、全身を捻じって右腕を振る。

「オオオオオオオオ!!」

そしてオールマイトの拳が、オール・フォー・ワンの顔に突き刺さる。

「UNITED STATE OF SMASH!!」

腕を振り抜いて、地面にクレーターが出来程の威力でオール・フォー・ワンを地面に叩きつける。

巻き上がる衝撃波にステインは吹き飛ばされていく。

土煙で視界が悪く、結果を息を飲んで見守る刃羅やエンデヴァー、日本中の人々。

そして土煙が晴れて眼に映ったのは、倒れ伏すオール・フォー・ワンとよろめきながらも立っているオールマイトの姿だった。

オールマイトはゆっくりと左腕を上げて、全身を膨れ上がらせて拳を突き上げる。

間違はなく、勝利の立ち姿だった。

その姿に日本中が沸き上がる。

オールマイトの姿に、刃羅は少しだけ寂しく感じていた。

「……終わったかあ」

刃羅は痛む体に活を入れて立ち上がる。

倒れ伏すオール・フォー・ワンの姿に、刃羅はもはや殺意は沸き上がらなかった。憎しみはある。なのに、殺す気になれなかった。

「……終わったか」

刃羅は再び同じ言葉を呟きながら歩く。

同じ言葉ではあるが、込められた意味は全く違うものだった。

オールマイトは腕を下ろして、体も元に戻る。

そして両手を見下ろし、自分の中から力が消えていくのを感じていた。

そこにグラントリノが近づいて来た。

「やったな。俊典」

「……はい」

静かに頷くオールマイト。

その顔には喜びは一切なかった。

「オールマイトオ……」

「!!」

聞こえた声に顔を向けるオールマイトとグラントリノ。

クレーターの外にステインが立っていた。その横には刃羅とカン

パネロも立っていた。

「ステイン……乱刀少女……!」

「そういやあ……お前さん達が残ってたなあ」

グラントリノが顔を顰めて構える。

その光景はテレビにも写されていた。

『ヒーロー殺し、ステインとその仲間がオールマイトに近づいて行きます!!ど、どうなるのでしょうか!』

その光景に緑谷達も息を飲む。

「乱刀さん……!」

「まさか……ここでオールマイトを!」

「いや……ヴィランを殺す気かもしんねえ!」

しかし、次の光景に目を見開いて固まる。

ステインがオールマイトに向けて、片膝を着き頭を下げた。

刃羅やカンパネロもそれに倣う。

その姿にオールマイトとグラントリノ、そして周りにいたエンデヴァー達も目を見開く。

「偉大なる英雄に敬意を……ハア……やはりオールマイトこそ真の英雄だ」

「……」

「……しかし、いつまでも英雄がいるわけではない。それはオールマイトも例外ではない」

「……投降をしてくれないか?」

「それは出来ん。貴方がいなくなるからこそ、贖物も犯罪者も見逃すわけにはいかない!!これからも粛清は続けていく!!」

オールマイトの言葉に首を振って立ち上がるステイン。

刃羅達も立ち上がり、オールマイトに背中を向ける。

「待つんだ!乱刀少女!」

オールマイトの呼びかけを無視して歩き続ける刃羅。

オールマイトは追いかけてしようとするがよろけてしまい、足が止まっ

てしまう。

それにエンデヴァーとグラントリノ、エッジショットがステイン達に迫る。

「今度こそ監獄に叩き込んでやる!!ヒーロー殺しい!!」

「逃がさん!!」

エンデヴァーが炎を放とうとした時、オールマイトとステイン達の間カン!カン!と何かが投げ込まれる。

直後、閃光と白煙が戦場を包み込む。

「ぐう!?!」

「しまった!?!」

視界を潰されてしまうエンデヴァー達。

閃光弾で僅かにふらついたヘリコプターの風が白煙を吹き飛ばしていく。そして視力が回復したオールマイト達の眼に映ったのは、誰もいなくなった戦場だった。

「おのれえ!!」

「まだ仲間がいたのか……!」

「……行ってしまった」

エンデヴァーとエッジショットは悔しがるが、オールマイトは掴み損ねた絶望感に襲われる。

再び刃羅はオールマイトと緑谷達の前から、姿を消した。

#32 刃を探して

翌朝、轟と百と合流した緑谷達は爆豪を警察に届けた後、家路に就こうとしていた。

しかし、緑谷達の顔に達成感は全くなかった。

「……乱刀の奴、帰って来ねえ気かな？」

「……その可能性は高いだろうな……」

轟と百は緑谷達から話を聞いた。

話を聞いた直後、百は膝から崩れ落ちて涙を流した。今も顔を俯かせており、言葉を発していない。

「くそっ……乱刀に関しては手掛かりがなんもねえ！」

「流女将達が何か掴んでればいいが……」

「とりあえず今は家に帰ろう……俺達だって家族や先生達に黙って来てるんだ」

「うん……」

その後、半日以上かけて帰宅する緑谷達。

まだ緑谷達の仲間を取り戻す戦いは終わってはいない。

数日後、オールマイトは雄英高校にいた。

先日、引退表明をしたばかりで、まだ傷も癒えてはいないが生徒達の安全確保のために動かなければいけないがなかった。

林間合宿での謝罪と新たな防衛策として全寮制の導入するための家庭訪問をこれから行う予定だった。

しかし、その前に話し合っておかなければならないことがあった。

「オールマイト。乱刀さんのことなんだけどね」

「……はい」

「流女将やエクレーヌが捜査を継続しているけど、未だに手掛かりは掴めていないようなんだ。ステインといえるのは間違いないと思うけどね」

「……彼女にはどのような処置を？」

根津校長に刃羅の処遇を尋ねるオールマイト。

根津や相澤もあの場で戦っていたのは刃羅と言うことに気づいている。

「難しい所さ。まだ判断は出来ていないのさ。あれが彼女だと言うことは警察すら気づいていない。塚内君には伝えているけど、彼は誰かに話すような人ではないからね。乱刀さんのことはまだ雄英関係者と流女将達しか知らないのさ。つまり、今後次第ではまだ繋ぎ留めることが出来るのさ」

根津の言葉にオールマイトは静かに頭を下げる。

そこに相澤が声を上げる。

「問題は恐らくA組の連中も気づいていることです。爆豪救出に動いたあいつらが何もしないととは思えないですね」

「そうだね。けど、これは私個人の考えでしかないけど……彼女を繋ぎ留めれるのはクラスメイト達の存在な気がするんだ」

「……」

相澤も内心では根津の言葉に同意する。

「相澤君達はそこも含めて生徒達に声を掛けて欲しい」

「分かりました」

そして相澤達は家庭訪問に赴く。

ありがたいことに全寮制には同意してくれる保護者達。

しかし、生徒達はやはり刃羅のことで思い詰めていた。特に梅雨と百は今にも崩れ落ちそうな程憔悴していた。

刃羅以外の家庭訪問を終えて、一度流女将の元を訪れる相澤達。

「……昨日、刃羅と思われる女の子がコンビニの監視カメラに一瞬写っていました」

「本当に……!?!」

「はい。ですが、それだけです。それ以外の監視カメラには全く写っていませんでした。なので今、その周辺に我々独自にカメラを設置しています」

「私達に出来ることはあるかい?」

「お2人には刃羅さんを見つけてからお力を借りようと思っ

す。……私達の言葉だけでは、きっと彼女の心には届かないでしょうから」

流女将は寂しそうに目を伏せる。

それに相澤とオールマイトは声を掛けられなかった。

「そう言えば、全寮制のお話でしたね」

「……ええ」

「もちろん賛成です。むしろ刃羅さんにとっては最適の環境だとも考えています。……蛙吹さん達は大丈夫ですか？」

「……正直、かなり参っています。やはり神野での事は全員気づいてました」

「……流石、なんて私が言える立場ではありませんね」

「そんなことはないでしょう」

相澤が流女将の言葉を否定するが、流女将は僅かに微笑むだけであれ以上は語らなかつた。

事務所を後にするオールマイト達は車の中で考え込むように黙っていた。

その時、相澤の携帯が鳴る。

「……プツシーキャッツからです。乱刀搜索に力を貸してくれるようです」

「!!……そうか……ありがたい」

ラグドール、ピクシーボブはリカバリーガールの協力もあって活動に支障がないレベルまで回復した。残念ながらラグドールは捕まっている間の事は憶えていなかった。しかしラグドールを保護した者達と刃羅は繋がっている可能性が高いと判断して、ラグドールが捕まっていたビルやその周辺を搜索していた。全く情報は得られなかったが。

「……彼女を救えるだろうか」

「……救うしかないでしょう」

「……そうだね」

相澤とオールマイトも悔しきは変わらない。まだ雄英生である以上、出来る限りのことをする。

そして事態が動いたのはその翌日の事だった。

翌朝。

流女将の事務所には人が集まっていた。

「これはこれは。豪華な面々が集まったものだね」

「オールマイトは？」

「今回の作戦には不向きなので、申し訳ないが待機してもらった」

「引退しましたし、怪我也治っていないですからね」

「目立つのもあるでしょうがね」

「それもあるね。さて……それでは、始めようか」

エクレーヌの言葉に私語を止めて、顔を引き締める一同。

「まずは神野や雄英もあって忙しい中、ご協力してくれることを感謝するよ」

「私からも。本当にありがとうございます」

エクレーヌと流女将が集まってくれた者達に頭を下げる。

「気にしないでよ。私達だってあの子の事は気になってたから」

「しかも我らはラグドールを救われている」

「私達モ生徒ノタメニ動クノダ。礼ヲ言ワレルコトデハナイ」

集まったのはプッシーキャッツのラグドール、マンダレイ、ピクシーボブ、虎。

そして雄英からは相澤、エクトプラズム、ハウンドドッグが参加している。

そこにエクレーヌと流女将、そしてそれぞれのサイドキック達。

「見つけたのは東京の外れ。アラジンは一昨日確認されたコンビニの近くにある廃屋マンションにいる」

エクレーヌの説明と共に目の前のモニターに映像が表示される。そこには間違いなく刃羅の姿が映っていた。

「現在、望遠の監視カメラで見張っているが、朝に3階の部屋に入っただけからは一度も出ていない」

「他に仲間はない」

「今の所は確認されていない。ヒーロー殺しもね」

エクレーヌの言葉に悩まし気に顔を顰める相澤達。

「マンションの見取り図を手に入れていた。部屋は6畳程度の1K。彼女の部屋の周りは空き部屋で、特に目隠しなどもされていない」

「……隠れ家にしては妙に警戒が薄い気がするな」

「そうだね。廃れたマンションって言うのも、すぐに手が伸びるって分かりそうだけど」

相澤とマンダレイの言葉に同意するように頷く他のメンバー。

それに流女将とエクレーヌも頷く。

「なので今回は罠であると想定して動きます」

「……なるほど。それ故の面子なのだな」

「その通りです。部屋へ突入するのは私、エクレーヌ、イレイザーヘッド、フィクスマンです。プッシーキャッツはマンションの外で待機してラグドールの《サーチ》で刃羅さんを目視することを最優先にしてください」

「分かった！」

「エクトプラズムは分身でマンション周囲を囲んでください。ハウンドドッグも逃走された際の追跡・捕獲を」

「了解シタ」

「分かった」

「ミラミラはマンション周囲に人が通れるサイズの鏡を設置してくれ。モリアガ、ローテリアはその手伝いと、もしもの時の避難誘導の準備を」

「あなた達もミラミラ達の手伝いを」

エクレーヌと流女将の指示に全員が頷く。そして、作戦開始に向けて動き始める。

その時、流女将の事務所の外で動く気配には、誰も気づかなかった。

夕方、ミラミラの鏡で廃マンション前に移動した相澤達。

「マンションの入り口には特に仕掛けはないようだぞ」

「確かに人が出入りしているな。匂いが残ってる」

「ここからは迅速に」

流女将の言葉に頷いて配置に着くヒーロー達。

相澤、エクレーヌ、流女将、フィクスマンが音を立てないように刃羅がいるはずの部屋のドアの前に立つ。

そしてフィクスマンが逃げ道を塞ぐように、空間を固めて壁を生み出そうとする。

ドガアン!!

「!!」

「ぐう?」

突如ドアが吹き飛び、ドアの正面にいたフィクスマンが柵と挟まれる。

そしてドアの内側には髑髏の仮面を被った刃羅がいた。

「思ったより早かったですわね」

「刃羅さん!」

「ほな、さいなら」

「逃がさ……!!」

相澤が『個性』を発動し、捕縛武器を放とうとした瞬間、部屋から煙が勢いよく噴き出す。

それにより視界は塞がれ『個性』を妨害されてしまう。その隙に刃羅は飛び出してマンションから飛び降りる。

「準備いいじゃないか!」

エクレーヌと相澤もすぐさま後を追う。

流女将はフィクスマンと共に固定した空間を床にして走る。流女将は袖から竹筒を取り出して、蓋を開けて竹筒を振る。すると穴から水が蛇のようにうねりながら現れ、刃羅に迫る。

さらにエクレーヌも光散弾を放つ。そして相澤が髪を逆立て、目を見開いて刃羅の『個性』を封じる。

「派手でござるな!」

刃羅は腰に吊っていた鎖鎌を振り回して、水の蛇を斬り払う。光弾は側転やバク転して躲される。その後も攻撃を続けるが、全く足を止めることなく、廃マンションの敷地の外に出る刃羅。

「本当に厄介な身体能力だね！」

「エクトプラズム！」

相澤が叫ぶと刃羅の目の前にエクトプラズムが3人ほど現れる。

「止マツテモラオウ！」

「いやだ〜！」

先頭にいたエクトプラズムの蹴りをスライディングで躲しながら軸足を鎌で斬りつけ、鎖の分銅を2人目のエクトプラズムの頭に振り投げてぶつける。そして起き上がる勢いそのまま飛び上がり、3人目に飛び蹴りを浴びせる。

消滅を確認することなく、走り出す刃羅。その後ろから相澤達が再び追い迫る。その上、10体近くのエクトプラズムが現れる。更にハウンドドッグ、ローテリアが駆けつける。

「ワアオ!!！」

「諦めろ！」

「大人しくなさい！」

「いやなのです！」

刃羅は身を捻じる様に回りながら、10本以上の苦無を相澤達に投擲する。相澤達はそれを容易く払うが、その隙を狙って刃羅は閃光弾と発煙弾を起動する。

「何本持つてるんだ!？」

「たくさん！」

「待ちなさい！」

「嫌だっつってんだろ!!ババア！」

「バっ!?!誰が!!！」

ローテリアが目を閉じたまま、小さな風の渦を生み出して煙を吹き飛ばす。エクレーヌはサンングラスをしていたので、閃光弾の影響はほぼなかったもので、煙が晴れたのを確認して周囲を見渡す。

刃羅の姿は消えていた。それにエクレーヌはため息を吐く。

「はあ。普通に突破されてしまったな。学生相手にプロが何人もいて情けない」

「ハウンドドッグ!匂いは!？」

「追えるー」

相澤がハウンドドッグに声を掛ける。ハウンドドッグは鼻をスンスンと鳴らして匂いを確認して頷く。

そして相澤達が追いかけてようと頷いた時、上から何か落ちてきた。

カン！バシユウン！！

それは地面に落ちた瞬間に再び煙を一気に噴き出す。煙に包まれた相澤達はすぐに異変を感じた。

「またか!? つ!? ゴホッ!! ゴホッ!」

「さ、催涙弾!? ゴホッ!!」

「グオオ!? は、鼻がああ!?!」

目が痛み、喉や鼻に痛みが走る。

ハウンドドッグは鼻を押さええて悶える。コーリネアが再び風を起こしてガスを上に巻き上げる。

相澤達は目や口を覆って足を止めざるを得ない。そこにミラミラ達が駆けつける。

「大丈夫ですか!?!」

「ゲホっ! か、完全にやられたね。ゴホッ!」

「ハウンドドッグ。無事か?」

「グルル! 鼻がやられグルルウ!」

相澤は目を押さええながらラグドール達に顔を向ける。

「見れましたか? ラグドール」

「バッチシ!! 位置も分かるよ!」

「それにしても完敗だねえ」

『個性』や動きばかりに気を取られてました。枷が外れるとここまでする。厄介になるとは……」

ラグドールは笑顔で胸を張る。マンダレイは相澤達を見て苦笑する。

相澤は顔を顰めて、頭を搔く。

「とりあえず一度撤退するよ」

「そうですね」

ピクシーボブの掛け声で相澤達は仕切り直すことに決めた。

ピクシーボブ、モリアガや流女将のサイドキック達は刃羅がいた部屋の調査に赴き、相澤達はミラミラの《ミラーゲート》で流女将の事務所に戻る。

「ラグドール。乱刀はどうです?」

「凄い速さで移動中だよ!豊巣区あたりを目指してそう!」

「海か……。それに倉庫街だな」

「また誘ってそうだね」

ラグドールは地図を確認しながら、距離と方向を考えて推測を立てる。

それを聞いて相澤とエクレーヌは腕を組んで考え込む。

もうすぐ日も暮れる。夜の倉庫街となると色々と厄介そうだと考える。

そこにピクシーボブ達も戻ってきた。

「おかえり。どうだった?」

「マンダレイが声を掛ける。」

それにピクシーボブは肩を竦め、モリアガ達は顔を顰める。

「収穫無しだね。カップ麺の空はたくさんあったけど、それ以外は武器とか簡単な着替えだけ。特別なものはなかった」

「逆にどうやって過ごしてたのか気になるぜ」

「……まあ、上の部屋でもほとんど物がありませんからね」

「問題はあの催涙弾やら閃光弾やらをどう防ぐかね」

「確力二」

ここにいる者で閃光弾などを防げる可能性があるのはピクシーボブくらいだ。しかし《土流》で壁を作ったところで意味はない。逃げられる隙が増えるだけだ。

さらに豊巣区の倉庫街は人工島で場所によっては土がない可能性がある。

「さらには仲間がいる可能性もある。次は我も前に入る」

「あの戦いにいた連中が出てくると、かなりの被害が出る可能性があるね」

マンダレイの懸念に全員が顔を顰める。

ステインはもちろん他の仲間も出られると、混戦になることは確かである。そうなるとマスコミなどにバレる可能性があり、刃羅の事が知られる可能性がある。

ちなみに先ほどの戦闘は前もって警察が周辺住民に根回しをしており、出歩いたり撮影は控えるように伝達していた。

作戦会議をしている間に、刃羅がやはり豊巣区の港の倉庫街で止まったことをラグドールが知らせる。

それに流女将が車の手配をして、相澤達は再出撃の準備をする。

「オールマイトはどうします?..」

「……一応連絡します」

「お願い」

その時、事務所の外では建物の壁にもたれ掛かっている人物がいた。

その者は携帯を取り出し、電話を掛ける。

「もしもし?.....うん。聞いた。豊巣区の倉庫街だつて。今から行くみたい。皆、行けそう?.....オツケー。お願い。うちは直接向かうよ」

電話を切り、すぐさま走り出す人影。すぐに人の雑踏に紛れ込んで姿を消す。

その存在に最後まで相澤達は気づくことはなかった。

そして、夜。

相澤達は倉庫街近くで車を降りて、ラグドールが示した場所に向かう。

そこは海の傍の倉庫だった。しかも、挑発するようにその倉庫だけ明かりがついている。

「罨ですってか」

「私ガ先ニ行コウ」

エクトプラズムは分身を生み出して、倉庫の入り口に近づく。

すると、倉庫の入り口が自動で開き始める。相澤達は構えるが、完全に開ききつても何もなく、中にエクトプラズムが入っていく。少しするとエクトプラズムが顔を覗かせて、入ってくるように促す。

「……どういことだ？」

「ラグドール。中にいるんだよね？」

「いるよー！」

「行くしかないだろう」

「行きましょう」

訝しむ相澤達だが、虎と流女将の言葉に頷き、倉庫に突入する。倉庫の中は中心にコンテナが1つあるだけで、後は何もなかった。

そして、そのコンテナの上に刃羅が腰掛けていた。左脚は膝立てて、右脚はぶら下げており、両手は後ろに着いている。

刃羅は入り込んできた相澤達を無表情で見ていたが、ラグドールの姿を見て顔を顰める。

「ラグドール……。そうか。夕方の時に離れた所から見ていたのか。どうりで来るのが早いはずだな」

「……お前1人か？」

「そうやで。あの後、自由行動になったんや。お師匠はふらりとどこか行つたわ。まあ、オールマイトのことで完全に吹っ切れたわけやないんやろ。他の連中は元々集まりたいときに声掛けるって感じやしな」

「……刃羅さん。ここまでにしましょう。戻ってきてください」

「戻るう？おかしなこと言うねえ。私はあ戻つて来てるよお？ステインの弟子つてえ立場にい。こつちがあほんとの私さあ」

刃羅の言葉に悲しそうに顔を歪める流女将。他の者達も顔を顰めて、刃羅を見つめる。

「……大人しくする気はねえんだな？」

「あつたらとつくに捕まっているのだよ」

「そりやそうだ。じゃあ……」

相澤が構えた瞬間、刃羅は右踵でコンテナの壁をガン！と叩く。

するとコンテナの壁が倒れて中身を晒す。中身は大量のカンが横に重ねられており、噴射口と思われる蓋が相澤達側に向いている。

目を見開いて足を止める相澤達。

「もちろん中身は分かっくんよなあ？言っとくけどよ、反対側からも噴き出るぜ？」

「……よくもまあ、そこまで集めたねえ」

「……乱刀少女」

マンダレイが呆れていると、そこにオールマイトが現れた。

マンダレイ達はオールマイトに道を譲り、オールマイトは相澤の横に並ぶ。

「おやまあ。もう戦えまへんのに何しに来はったん？」

「君と話がしたかったからさ」

「ふむ……もう他力本願しか出来なくなったというのに、もう一度ヒーローを信じてくれとでも言う気ではないじやろうな？」

刃羅の言葉に悔し気に顔を顰めるオールマイト。顔を俯かせて、左手を握り締める。

「……言えないさ」

オールマイトが握り締めて開いて左手を見つめながら答える。

その言葉に相澤やエクレーヌ達が目を見開く。

「爆豪少年を助けられず、緑谷少年達に助けられて、乱刀少女に守られた。そして力も失った。ヒーローでは無くなった私がヒーローの何かを伝える資格はないさ」

「では、何を話す気なのです？」

「……蛙吹少女達には何も伝えないつもりかい？」

「はあ？」

オールマイトの言葉に顔を顰める刃羅。

その声には少し苛立ちが込められているように感じられたオールマイト達。

「はあ……ここまで来て、そんなくだらないことを聞きに来たのか？」

「……くだらない……ですか？」

「まさか本気で仲良くしていたとしても思っていたのでござるか?」
流女将は信じられない言葉を耳にし、目を見開いて固まる。

刃羅はゆつくりとコンテナの上で立ち上がる。その両手には拔身の刀が1振りずつ握られていた。

「私が雄英に入ったのはお師匠の指示さ。ヒーローなんてどうでも良かったんだよね」

「なんでヒーロー殺しが?」

「視野を広げろとかあん言ってたわねえん。あんまり変わった気はあんしないけどねえん。さてえん、もういいかしらあん? 殺し合いを始めてもおん」

「待ってくれないかい? ヒーロー殺しが逃げたのに君は関係してるのかい?」

エクレーヌが声を上げる。

「当たり前だべ。おいらが依頼金出しただよ」

「あいつら、あんたが呼んだの!」

「メンバーを揃えたのは他の奴なのである。吾輩は金だけ出したであら」

ローテリアが目を見開いて驚いていたが、刃羅は肩を竦めるだけだった。

刃羅からすれば1500万消えたムカつく事件でもあった。思い出しただけでもドクトラやカンパネロを殴りたくなる。ちなみに今回もタダ働きだった。

「じゃあ、なんで保須でヒーロー殺しと戦った? わざわざ救出で金を出す必要もなかっただろう」

「……あれは少し予想外だったアル。まさか緑谷達に負けるとは思てなかつたヨ」

「そうじゃない。なんで緑谷達に加勢したのかって意味だ」
「……」

相澤の質問に刃羅は答えなかった。その反応に相澤はまだ希望はあると考える。

さらに声を掛けようと相澤が口を開こうとした瞬間、刃羅が右足を

持ち上げてコンテナを思いっきり踏みつける。

バシユウン!!と莫大な音を響かせて、煙が勢いよく噴き出す。

「っ!!オールマイト!!」

「ぐっ……!」

相澤がすぐさまオールマイトを縛って、後ろに投げる。エクトプラズムの1人がオールマイトを掴み、後ろに下がる。

ローテリアが前に出て腕を振り、風を巻き起こす。

エクレーヌが光弾を放とうと、竜巻の横に飛び出す。そこで目に入った光景に目を見開く。

コンテナの上にいる刃羅の手に火が付いたライターが握られている。ライターが刃羅の手から放り投げられる。

「っ!!火が付くよ!!」

『!』

「まずい!流女将!!」

「横に飛べ!!」

『!』

ガスに引火して一瞬で炎の竜巻が出現する。

相澤が流女将に怒鳴った直後、後ろから聞こえるはずがない音が響く。直後、冷気を感じてすぐさま横や上に飛び上がるヒーロー達。

氷結が炎の竜巻に突撃し、炎を一瞬で鎮火させる。氷結はそのままコンテナに到達し、コンテナを氷漬けにしてガスの噴出を止める。

刃羅も飛び上がったって氷結を躲すが、その表情は驚愕に染まっていた。

ガツシャーーン!!

倉庫の2階の窓が突き破られ、複数の人影が倉庫に飛び込んできた。

「黒影!!コンテナを吹き飛ばせ!」

「アイヨ!!」

黒い影がコンテナを押し飛ばして、壁を突き破って外へ飛んでいく。

「おらあ!」

「レシプロ・バースト!!」

「はあああ!!」

「しゃああ!!」

「どりやあ!!」

白いテープが刃羅に放たれ、その周囲から複数の人が刃羅に迫る。刃羅は刀でテープを斬り払い、高速で放たれた蹴りを両腕をクロスして防ぎ、後ろに飛ばされることで残りの攻撃を躲す。空中で体勢を立て直し、地面に着地すると上から網が降ってくる。

「っー」

刃羅は横に飛んで躲す。そこにピンク色の鞭が刃羅の右手首に巻き付く。

引つ張られそうになった刃羅は足裏に刃を生やして地面に固定する。

「……………これは……………」

「もう放さないわ。刃羅ちゃん!」

梅雨が突き破られた窓のすぐ下にへばり付いて、舌を伸ばしていた。

そして刃羅の周りに常闇、瀬呂、飯田、緑谷、切島、砂藤が囲み、緑谷の後ろに百と麗日が降りてくる。

更に入り口からは轟を先頭にA組の面々が走り込んできた。

「蛙吹さん……………!?!」

「……………お前ら……………なんで……………!?!」

「耳郎と障子、葉隠に流女将の事務所を見張ってもらってたんだ」

「で、うちの《イヤホン・ジャック》で会話を盗聴して、全員に連絡したんです……………!」

「爆豪は流石に来れなかったけどな」

轟と耳郎が倉庫を突き止めた理由を話す。

それに相澤は頭を抱え、マンダレイやエクレーヌ達は苦笑する。

オールマイトも後ろで驚いて、どこか安心した様に微笑んでしま

う。

「相澤先生!オールマイト!そしてヒーローの皆様!申し訳ありません

ん!!規則違反は承知しています!!先生方の信頼を裏切ったことも!!」
飯田が刃羅を見つめ続けながら叫ぶ。飯田の言葉にA組の面々も
頷く。しかし、誰の顔にも後悔の表情はなく、覚悟を決めていた。
「それでも!!これで除籍処分になったとしても!!乱刀くんにも何も出来
ぬまま別れるのだけは、A組総員誰一人として納得が出来ませんでし
た!!乱刀くんの言葉を聞いて、僕達の思いを伝えて、向き合った上で
答えを出したい!!」

梅雨が轟達の前に降りてくる。

刃羅は右腕を引っ張られながらも、黙って飯田の叫びを聞いてい
る。

飯田の言葉を聞き、A組面々の顔を眺めた相澤は盛大に顔を顰めて
考え込む。根津の言葉が頭に浮かぶも、教師として、プロとして認め
るわけにはいかないという思いも前に出る。

「……あほらし」

そこに刃羅の言葉が響く。全員が刃羅に注目する。

刃羅は無表情で立っており、左手の刀で梅雨の舌を突き刺す。

「ケロツ!」

「梅雨ちゃん!!」

梅雨は痛みで拘束が緩む。

刃羅は右手の刀を手放し、緩んだ隙に右手を抜いて再び刀を握む。

痛みに呻いた梅雨に芦戸が駆け寄る。

「乱刀……!」

「たかだか数か月学校で一緒だっただけで、よくもそこまで必死にな
れますわねえ」

「おまえ……!」

「友達ごっことしてはあ、まあまあだったかなあ。けどお、結局はあそ
の程度だよねえ」

切島や砂藤が悔し気に顔を歪めて、刃羅を見つめる。

刃羅は腰を落とし、左手の刀を中段に、右手の刀を上段に構える。

「次に来るなら、少なくとも手足の1,2本は覚悟しなさいよ。私はも
う……血に染まる覚悟は出来てるのだから」

鋭く睨み、殺気を発する刃羅に緑谷達は息を飲む。

それに百と梅雨は悔し気に顔を歪める。

相澤達も前に出て、緑谷達を庇える場所に着く。

「オールマイトとオール・フォー・ワン。正義と悪の頂点が同時に消えたわ。ねえ、ヒーローとその卵。オールマイトの変わり者は誰？ いる？ 今すぐ、誰もが納得する象徴なんて」

その言葉に相澤達は答えられない。オールマイトすらも。後継者たる緑谷も、バラせないこともあるが、それでもオールマイトに変わるかと言われたら絶対に否である。

「そう。いないわ。つまりそれは他のヒーロー達が利己的だと何処かで思っている部分があるからよね？ 強さも別格だったのもあるけど。ステインの言葉を否定出来る？ 今の状況で」

ヴィランでは死柄木弔という存在がいる。

対してヒーローには誰もいない。エンデヴァーには不安視する声根強い。他のヒーローに関しては名前すら上がらない。たった一人が折れたら、ここまで崩れる。それは多くの者がヒーローという存在は『オールマイト』だったという何よりの証。他のヒーローを名乗る存在は、ヒーローとして認められていないことと同義ではないのだろうかと刃羅は考える。

「次のヒーローが現れるまで、どれだけ無意味に血が流れるの？ 私にそれを我慢しろって言うの？」

「刃羅ちゃん……」

「審判は下った。ヒーローは信じるに値しない!! 私には『次の私』を生み出さないうちに、血に染まる!! それを否定するならお前達の全てを掛けて挑んできなさい!!」

ゾアツ！と刃羅から気迫が放たれる。その眼は静かに燃えている。

飯田、緑谷、轟はその眼と気迫に覚えがあつた。

ヒーロー殺し『ステイン』。刃羅の師。

更に刃羅はオール・フォー・ワンに立ち向かった者。

緑谷、飯田、轟、切島、百はその凄さを改めて実感する。緑谷達は目も合っていないのに心が折れかけていたのに。

「私の名は『エスパデス』!!ステインの一番弟子!!」

ザン!と一歩踏み出す刃羅に、相澤達も気圧される。
もはや一生徒として見る余裕はない。

「この【刃】!!折れるものなら折ってみろ!!ヒーロー共!!」

#333 絶対に諦めない

力強く宣言した刃羅は地面を強く蹴り出し、緑谷に斬りかかる。

「乱刀さん……!?!」

「ちいー!」

緑谷はまだ顔に困惑を浮かべており、反応が遅れる。

それを見た相澤が援護しようとして飛び出す。

しかし、それこそが刃羅の狙いだった。

刃羅は突如体の向きを変えて、左手から迫ってくる相澤に向けて右手の刀を投擲する。

「!!」

「あんたは庇わないといけないものね」

刀は相澤の腹部目掛けて飛んでくる。

相澤は無理矢理体を捻りながら横に移動して刀を躲すが、僅かに左脇腹に掠って斬られる。そこに刃羅が一瞬で距離を詰めてくる。左手の刀で突きを放つが、虎が殴りかかってきて中断させられて、後ろに飛び下がる。

「そこまでだ! 我らはお前を助けに来たのだ!」

「誰が頼んだのよ!! 私に求めてないわ!」

「ぐう!」

虎は刃羅を呼び止めるが、刃羅は鋭く刀を振るい拒絶する。虎は《軟体》で体を振りながら、高速で振るわれる刀を躲す。

そこにエクレーヌやエクトプラズム達も参加する。

刃羅は下がるどころか逆にエクレーヌ達に飛び掛かる。

「!!」

エクレーヌ達は目を見開くが、刃羅が右腕を刀に変えたのを見て狙いに気づく。

「イレイザー封じ……!」

「お主らなら一緒に封じられてしまうからのお。イレイザーも『個性』を止めずにはおれんよなあ!!」

相澤の『個性』《抹消》は視界に入った者全ての『個性』を封じる。

それは仲間の『個性』も含まれてしまう。そのため1対多ならば最も発揮するが、多対1では最も使い辛くなる。

それを刃羅は狙った。

「参ったねー！」

「ヌウー！」

エクトプラズムが斬られて消滅し、エクレーヌは急いで距離を取ろうとするが、それを確認した瞬間刃羅は近くにいた切島と砂藤に飛び掛かる。

「っ?!しまった!」

「砂藤下がれ!!俺が出る!!」

「切島!?!」

「駄目だ!!避ける切島!!今のお前では斬られる!」

切島が体を硬化して砂藤の前に出る。それに相澤が走り出しながら叫ぶ。『個性』を消そうにも切島も視界に入っており、消したところで左手の刀は消せない。

エクレーヌも同じく直線状に切島がいるため、光弾を放って躲されると切島に当たるため、攻撃が出来なかった。

そこに水の蛇と氷結が刃羅に迫り、刃羅は舌打ちをして攻撃を中断して切島から距離を取る。刃羅と切島の間を氷結と水の蛇が通り過ぎる。

「くっ!」

「この人数だ。いくらお前でも勝ち目はねえだろ」

「それが分からないあなたではないでしょう」

轟が右手に炎を、流女将が体の周囲に水の蛇を待機させて刃羅に声を掛ける。

刃羅はその言葉を無視して、エクレーヌに向かって飛び出す。エクレーヌは両手を突き出して光弾を放とうとした瞬間、刃羅は右腕を蛇腹剣に変えて振るう。エクレーヌは攻撃を中断して回避するが、その隙に距離を詰める刃羅。左手の刀で突きを放ち、それも紙一重で躲されるが、左前腕から鎌を生やして追撃する。

「!!」

「くっ！」

エクレーヌに避ける余裕はないと判断した相澤は『個性』を発動して、刃羅の『個性』を解除する。『個性』が解除された刃羅は刀で斬り返そうとするが、今度は青山のレーザーと瀬呂のテープが飛んでくる。刃羅は身をしゃがませて地面を転がることで回避し、その隙にエクレーヌが刃羅から距離を取る。起き上がろうとする刃羅に飯田が迫り、蹴りを放つ。

両腕を交えて蹴りを防いだ刃羅は後ろに飛ばされる。数回地面でバウンドしながら転がり、飛び上がった体勢を立て直す刃羅。そこに今度は黒影と緑谷が両腕を広げて飛び掛かってくる。

刃羅は両足を揃え身を捻りながらスパイラルカッターで高速回転する。刀を両手で持ち、腕を伸ばして回転しているので竹トンボのように空中を移動して躲す。

それでも黒影は無理矢理掴もうとするが、スパイラルカッターを解除した刃羅に思いつ切り顔を蹴られて弾かれてしまう。

「ちつくしよ。突っ込むタイミングがねえ！」

「こっちは逆に人が多くて、攻められる数が限られちゃう……！」

「それにしても、あれだけの攻撃をあそこまで躲せるのかよ」

「もはや修羅……だな」

切島と砂藤が顔を顰めて唸る。瀬呂と常闇は刃羅の動きに冷や汗が出る。

「イレイザーヘッド。助かったよ」

「ああ……しかしあいつ……」

「緑谷くん……！」

「うん……今、武器を2つ同時に出した……！」

緑谷の言葉に飯田と相澤が頷き、他の者達は目を見開く。

刃羅は奥の壁際まで下がり、少しだけ息を荒げてながら緑谷達を睨みつける。

「はあ……はあ……やっぱりの数は……厳しいわね……。イレイザーが本当に厄介だわ」

「乱刀さん!!もうやめてください！」

「そうだよーもうやめようー！一緒に帰ろう！」

百と麗日が刃羅に叫ぶ。

しかし刃羅は答えずに刀を右手に持ち替えて構える。

相澤、エクレーヌ、虎が緑谷達の前に出る。

「ここまでだ。乱刀」

「……」

「もう刀を下ろしてくれ。ラグドールの恩人とこれ以上戦いたくはない」

「……」

相澤と虎の言葉に刃羅は全く答えない。黙って刀を構え、相澤達を睨みつけている。

それに緑谷達が再度声を上げようとした時、

ボボオオオオン!!!

刃羅の真後ろの壁が爆発して、刃羅を吹き飛ばす。

「うあ!?!」

『!?!』

刃羅は地面に転がる。

相澤達は爆風に耐え、飛んできた瓦礫を打ち払う。

「何トロトロしてやがんだあ!!このクソ共が!!」

「え!?!ば、ば!」

「爆豪!?!」

「かっちゃん!?!」

爆発した穴から現れたのは、ここにいるはずがない爆豪だった。

いつも通り不機嫌全開に顔を顰めながら、緑谷達と刃羅を睨みつける。

突然の爆豪の登場に全員が目を見開いて固まる。刃羅は驚きもあるが、爆豪と相澤達に挟まれて身動きが取れなくなってしまった。

「かっちゃん!?!なんでここに!?!」

「君は外に出てはいけなさと警察に言われていただろう!?!」

「ああ!?!うるっせえクソデクにメガネ!!んなもん、抜け出してきたに決まっただろが!!分かれや死ね!!」

緑谷と飯田の言葉にいつも通り口悪く怒鳴り返す。

「けど爆豪!!おめえが抜け出してまで来てくれつとはよ!やつぱ仲間だぜ!!」

「はあ!?ふざけたこと言ってるなや。切島あ。俺あイカレ女がどうなるうとどうでもいいんだよ!」

「はあ!?じゃあ、なんで……」

爆豪の言葉に切島や上鳴が首を傾げる。

爆豪は両手で小さな爆発を起こしながら、しゃがんで相澤達や爆豪を警戒している刃羅を見下ろす。

「俺はただこのイカレ女に借り逃げされんのが我慢出来ねえだけだ!!」

「かつちゃん……!」

「……」

「それとイカレ女あ!!てめえ、あの言葉を撤回しろや!!」

爆豪の撤回と言う言葉に刃羅は訝しむように顔を顰める。

それに爆豪は目を血走らせながら、睨みつける。

「俺はただのNo. 1になる男じゃねえ!!No. 1ヒーローになる男だあ!!そこ間違えんじゃねえぞ!!」

叫んだ瞬間、右手を後ろに向けて爆発を起こして勢いよく刃羅に突撃する爆豪。

「!!」

「死ねやあ!!」

刃羅は目を見開いて、飛び上がる。爆豪は右手を叩きつけるように振り下ろし、爆発を起こす。

爆豪はすぐさま爆発させながら飛び上がって刃羅に迫る。刃羅は左腕を鎖鎌に変えて、天井の鉄骨部分に巻き付けてグン!と腕を引いて体を持ち上げて爆豪の攻撃を躲す。腕をすぐに戻して、壁を蹴つて爆豪に斬りかかろうとするが、真下からエクレーヌの光弾が飛んできて直撃する。

「ぐう!?」

「ケエロオ!!」

そこに梅雨の舌が伸びてくるが、それを左手で払い退ける刃羅。そこに黒影が回り込むようにして刃羅の背中から近づき、両腕で刃羅の体を掴む。その弾みで刀を手放してしまう刃羅。

「っ！」

「やったー！」

「よくやったー！黒影！」

「ドンナモンヨ！」

緑谷達が喜びの声を上げ、黒影が胸を張った瞬間、刃羅から閃光が弾ける。

油断していた全員が閃光に視力を奪われ、黒影は光に悲鳴を上げながら腕を放してしまう。

「眼が!!眼があああ!!」

「まずい……!!」

「全員!!離れろ！」

「イレイザー！お前だ!!」

『!?!』

峰田が目を押さえて地面をのたうち回り、相澤が声を上げるがエクレーヌの言葉で迫り寄る殺気に気づく。

相澤は殺気に向けて捕縛武器を放つが、斬り裂かれた感触が返ってくる。

それに「斬られる」と考えた直後、誰かに腕を引っ張られる。体ごと引っ張られ、その直後に左半身に鋭い痛みが走る。

「ぐう!!」

「ちっ……!!」

「イレイザー！」

「相澤先生!!」

相澤を引っ張ったのはエクレーヌだ。サングラスをしていたので閃光弾のダメージが最小限だったため、刃羅が相澤を狙うのが見えたのだ。

相澤を右腕で引っ張りながら、左手で光弾を放つエクレーヌ。しかし、なんと光弾は全て刃羅の体に弾かれてしまう。

刃羅は舌打ちをして、そのまま走り抜ける。

「ぐ……………」

「無事かい」

「すまない。助かった……………」

「相澤先生!!」

「大丈夫だ。致命傷じゃない」

視力が回復した緑谷達は相澤を見る。相澤は左手足と脇腹から血を流して跪いていた。芦戸達が近づくが、相澤が右手を上げて制止する。

そして刃羅に目を向ける緑谷達。

『!?』

「…………外したか。運のいい奴だ」

刃羅の姿を見た全員が目を見開いて固まる。

ガシャ!ガシャ!

倉庫に鉄が鳴り響く音がする。音の発生源は刃羅だ。

「…………なんだよ。それ……………」

切島が冷や汗を流しながら刃羅に尋ねる。

刃羅の手足は鱗のように刃が覆っており、両前腕から鎌が生え、左手はロングソードになっている。鱗のような刃は首まで覆っている。

【あらはばき荒刃刃鬼】。これが余の本気の姿だ。いつまでも1種だけで良しとするだけでも思っていたか? 2種出せるだけで良しとするだけでも思っていたか?」

ギヤリギヤリ!と鉄同士が擦れる音を響かせる刃羅。

その姿にゴクリと唾を飲む緑谷達。

武器2種同時展開だけでなく、同時に全身を刃で覆うほどの成長。切島と緑谷は『個性』が使えていたら殺していた」と言われたことを思い出す。あれは決して冗談ではなかったのだ。

しかし、フツ!と刃羅の姿が元に戻る。

「!!」

「…………本当に厄介じゃのう。その眼は。イレイザーヘッド」

「相澤先生……………」

「……これ以上、お前に被害を出させるわけにはいかん。反省文や謹慎ではすまなくなるんでな」

「……まだ言うか」

「刃羅ちゃん」

梅雨が刃羅の正面に立つ。

それを刃羅は無表情で見つめる。

「……色々と言いたいことがあるの。……でも、上手く言葉が纏められないわ。だから、一番思っていることを言うわ」

「……」

「……なんで黙っていなくなったのかしら？ 凄く心配したわ」

梅雨はまっすぐ刃羅の目を見て話す。

「……話したところで意味あったのお？ お師匠のおとこころに戻るってえ言ったらあ行かせてくれたのお？」

「……行かせないわ」

「だったら言うだけ無駄なのです」

「なんでヒーロー殺しのところに戻らなければいけなかったの？」

「お師匠が死柄木弔のところに攻め入るって聞かされただよ。で、おいらも狙われたことを仕返ししたかったべな。参加することにしただけだべ。まあ、オールマイトに先越されたけんど」

「……じゃあ、帰って来なかったのは何故？ あれが刃羅ちゃんだって気づいたのはここにいる人達くらいだわ」

「のこのこと帰って来てたらどうしてただろうなあ？ ええ？ 相澤先生よお？ いつも通りで終わらせつか？ ヒーロー殺しと繋がっている俺たちを」

刃羅は相澤やエクトプラズム達に目を向ける。

梅雨達も相澤に目を向ける。

その視線に相澤達は顔を顰める。

「……職員会議して、警察に連絡するってとこだろうな。乱刀が協力的なら監視の元英雄に通い、拒否するなら……拘束されることになるだろう。そう長いことは留置されることはないだろうが……恐らく英雄には戻れん」

「ソウダナ」

相澤の言葉にエクトプラズムやハウンドドッグも同意して頷く。

その答えを予測していたのか緑谷達は悔し気に顔を歪める。もちろん刃羅も予想していたので肩を竦める。

「そういうことだ。お前達が気づいた時点で、もう手遅れだったのさ。今、見逃されてるのはオールマイトが私の親の話をしたからだろう？」

「……親？」

「違うかね？オールマイト」

梅雨達は訝しみ、刃羅はオールマイトに顔を向ける。

後ろにいたオールマイトは俯いており、左手を強く握り込んでいる。

「……そうだ。乱刀少女には申し訳なかったが……そうでもしないと、本当に君を雄英に戻すことが出来なくなってしまおうと思っていたからね」

「……一体どういうことですか？乱刀さんの御両親の話は体育祭の時に……」

オールマイトの言葉に百が訝しむ。百の言葉に他のA組の面々も頷く。

それにオールマイトや相澤達は話すべきかどうか悩み、顔を顰める。

「別に隠すことではないでござる。某の両親の死にオール・フォー・ワンが絡んでいた。それだけのことでござる」

「オール・フォー・ワンが……!?!」

「しかしお師匠を選んで、お師匠の元に転がり込んだのは我の意思だ。オール・フォー・ワンは関係ない。それにオール・フォー・ワンがいなくても、結局母は我を殺そうとしていたさ。追い込まれていたのは変わらないのだから」

「でも、お父さんは生きていたかもしれない」

「いや、死んでおったじゃろう。儂に殺されてな」

刃羅の言葉に凍り付く緑谷達。

刃羅は無表情のまま首を傾げる。

「私は一度でも『父は立派な人だ』などと言いましたか？『父は私を愛してくれた』などと言いましたか？言ったことはないと思いますわ」
「……まさか」

「そうであります。小官は父からも虐待を受けていたであります」
「……そんな」

「首を絞めた母を止めた時も『ヒーローの妻が子供を殺したなど醜聞以下だ！俺の邪魔ばかりするな！』と言っていたよ。本当に……なんで結婚して、私を生んだのだろうな？だから……父と母が死んだときは、心底嬉しかったよ」

刃羅はニヤアと笑う。

その笑みにゾツとする緑谷達。

「さて、改めて聞いわ。私を雄英に戻したい？ヒーローを目指させるべきかしら？」
「嘘だわ」

両腕を広げて、質問する刃羅。

すると梅雨がはつきりとした声で、力強い瞳で刃羅を見つめながら声を上げる。

それに刃羅は一瞬で無表情に戻る。

「……はあ？」

「刃羅ちゃん。はつきりと根拠は言えないけど……今の御両親の話は嘘だわ。今までの嘘とは違うもの。まるでそう思い込もうとしているかのようだよ」
「……」

「確かに私達は刃羅ちゃんとは出会って数か月よ。刃羅ちゃんは演技でただけかもしれない。でも、この数か月で刃羅ちゃんが私達に掛けてくれた言葉は、絶対に嘘じゃないわ」

「そうです……そうですわ！乱刀さんは期末試験で言ってくれましたわ!!『失敗も敗北もある。それでも立ち上がり、出来ることを模索するのがヒーロー』だと!『迷う前に声を上げろ』と!!」

「それに乱刀くん!!君は僕達に期待してると言ってくれた!!その言葉

は嘘だったのか！まだ僕は……君に何の答えを見せれていないんだ！！」

梅雨の言葉に百と飯田も叫ぶ。

「……本当に俺達と袂を別つ気だったなら、なんであの時、俺達に声を掛けて爆豪を助ける手助けをしたんだ？林間合宿の時も、保須でのヒーロー殺しの時も、USJでも、お前はいつも誰かを助けるために先頭で動いてた。体育祭でも話さなくてもいい親の話をして、俺に何のために雄英に来たのか気づかせてくれたじゃねえか。もし演じてただけなら、どれもしくなくてもいい事ばかりだ」

「そうだよ……！冼汰君のことだって、林間合宿の組み手の時だって、乱刀さんはいつも真剣に僕達と向き合ってくれたんだ……！あれは決して演技じゃなかった！」

「林間合宿の魔獣の森でもわざわざ探しに来てくれて、猪食わせてくれて、走り方とか教えてくれたしな！」

「俺の時だって、己が狙われているのに攫われる危険を冒してまで、俺を助けてくれた」

「借り逃げはさせねえ!!」

轟、緑谷、切島、常闇、爆豪も続く。それに他のクラスメイト達も頷く。

刃羅の言動はA組メンバーにとって、ヒーローとしての在り方を考えさせてくれた。それによって救われたこともある。

それだけは刃羅にだって否定させない。

刃羅は僅かに顔を歪める。

「……くだらぬ。もはや我はステインと同じ道を歩むと決めた。もはや貴様らと交わることはない」

「待ってくれないか」

オールマイトが緑谷達の横に並ぶ。

「やっぱり言いたくなってしまったよ。乱刀少女」

「ヒーローを信じろってかあ？」

「違うさ。ヒーローになる友達を信じてあげて欲しい」

「……」

「それに君だってまだヒーローになれる。いや……君のような人だからこそヒーローになつてほしいと私は思う。君だって象徴になりえると私は思うんだ」

「……それは無理よ。平和の象徴だった人。私はすでに血に濡れているのだから。私はあなた達が言うヒーローにはなれないわ」

刃羅の言葉にオールマイトや相澤、流女将は目を見開く。

「ホンマにステインの元におつた3年間で誰も殺さへんかつたと思てたんか？ 層の2, 3人は殺しとる。もう、うちの《刃》は【命の味】を知つとんねん」

はつきりと「人を殺した」という言葉に梅雨達も衝撃を受ける。

「そんなわつちが……ヒーローに、象徴になれる？ それは……馬鹿にし過ぎやよつて。オールマイト」

つう。と一筋の涙を流して微笑みながら語る刃羅。

オールマイトは己の失言を悟ってしまい、虚無感に襲われる。

刃羅は袖からスイッチのようなものを取り出し、ポチツと押す。

相澤達が構えた直後、倉庫の明かりが消える。

「っ?! 逃がすかクソがあ!!」

爆豪が刃羅の元に飛び込もうとした瞬間、再び強力な閃光が弾ける。

再び目をやられて、蹲る緑谷達。

エクレーヌも暗闇からの閃光だったので、流石にダメージが大きかった。

「くっそがあ!!」

「……学ばないねえ。私達」

「ラグドール!! 乱刀さんは!？」

「目えイッタイ! 海! だと思っう!」

まだ完全に回復してないが、走つて外に出る緑谷達。

周囲を見渡すも暗闇で海の様子も全く分からなかった。

「くそっ……!」

「何か手は……!？」

「ラグドール。本当に海の方?」

「うん！でも、また凄いスピードで離れてる!!」

「ボートか！」

「岸に向かっているのか？」

「うーん。そんな感じじゃなさそう！」

「岸デハナイ？……離島カ！」

悔しがりながらも刃羅の行き先を考える一同。

「でもよお……帰ってくるかな？乱刀」

上鳴の言葉に緑谷達が顔を俯かせる。

両親の事、命を奪ったことがある事。何よりも本人に戻る意志がない事。

このまま追いかけても、どうすればいいのか分からない。それではダメではないのかと考えてしまう。

「それでも私は連れ戻したいわ」

梅雨は刃羅が去ったと思われる方向を見つめながら、携帯を握り締める。

「何が正しいかなんて、まだわからないけど。それでも声が届くなら、顔が見えるなら、いつか届くかもしれないわ」

「……梅雨ちゃん」

「でも、このままだと声も届かないし、顔も見えないわ。それだけは納得出来ないの。だから私は絶対に諦めない。また刃羅ちゃんと笑いたいんだもの！」

「でも……どうやって……」

「だから、お願い……！力を貸してほしいの！」

梅雨は携帯に目を向ける。その画面は『通話』を示していた。

そしてこの場面で最も信頼できる人に助けを求めめる。

「助けて……！船長！シリウスさん！」

#34 それでも傍にいて欲しい

刃羅は小さな離島に降り立っていた。

「ここにやあ小屋しかねえんだよなあ。もう閃光弾もねえし、武器もねえ。ラグドールの《サーチ》の効果もいつまでか分かんねえ」

ここに居ることはバレている。

岸に向かわなかったのは、船をそう簡単に手配は出来ないだろうと考えたからだ。

陸地なら車やら他のヒーロー達も追いかけてやすいが、海だと活動しているヒーローも限られるし、接近も気づきやすい。

ただ問題は相手にイレイザーと流女将がいることだ。

海水に囲まれた船や離島では流女将の武器が尽きることはない。ただでさえ厄介なのに、そこに相澤がいることで『個性』が使えない。そこにエクレーヌやA組の面々とやり合うのは限界がある。

刃羅は顔を顰めながら小屋を目指して歩く。

「……この1日でえ隠れ家2つもお無くすなんてえ最悪う」

この離島は無人島だと知っていただけだ。小屋には漁師が使っていると思われる道具や囲炉裏などがあるだけ。食料などはない。ここまで来たボートも何も乗せてはいない。相澤達がいっ来るか分からないから下手に食糧調達も出来ない。

刃羅はため息を吐く。

「携帯も圏外……ちゆうか、この携帯も処分せなあかんなあ」

バキン！と携帯をナイフに変えた指で刺し壊す。そして海に向かって放り投げる。

「さて、いつ逃げるか」

小屋に近づく刃羅。

その刃羅に更に近づく影があったが、まだ刃羅は気づいていなかった。

梅雨達はまだ倉庫街にいた。

しかし、梅雨達の前には一艘の船が着岸していた。船の名前は『沖マリナー』と書かれている。

「シリウスさん！」

「梅雨ちゃん！」

船から現れたのは船員服を着た青髪の女性。梅雨の職場体験の教育担当のシリウス。『個性』《グッドイヤー》を持つ海難ヒーローのサイドキックだ。

梅雨はシリウスに走り寄り、シリウスは梅雨に笑顔で抱き着く。

そしてその後ろから大柄の人影が現れる。

「よおーフロップヒー！」

「船長！」

梅雨に声を掛けたのは、アザラシ顔で筋肉質の男。

海難ヒーロー『セルキー』。《ゴマファアラシ》という梅雨と同タイプの『個性』を持つヒーローだ。

「久しぶりい！」

セルキーが突如、両手を顎に当てて裏声で可愛い子ぶる。それにシリウスが顔を覆い、百達は苦笑いする。

セルキーと梅雨は可愛いと思っただが、他には不評だった。

「さてえ、挨拶はこれくらいにしておくか。急ぎなんだろう？フロップヒー。真面目なお前があんなSOSを送ってくるんだからな」

「船長……」

「ただし、しっかりと説明はしてもらおうぞ。辛い言い方になっちゃうが、俺達だって何でもかんでも手を伸ばせるわけじゃない。お前以外にも助けが必要な者が出るかもしれない」

セルキーは真剣な顔で梅雨を見つめる。シリウスは梅雨を心配そうに見るが、セルキーの判断に従うのがサイドキックとしての役割だ。私情で動くわけにはいかない。

セルキーの言葉にしっかりと頷く梅雨。そこに相澤と流女将もセルキーに近づく。

「あんだ達は……」

「こいつらの担任の相澤です。イレイザーヘッドで通してます」

「久しぶりですね。セルキーさん」

「流女将にフロツピー達の担任まで出てるってことは、それなりの山つてことか。しかも怪我してるじゃねえか」

腕を組み、目を鋭くするセルキー。

そして相澤と流女将が刃羅の事について説明する。そして現在の状況についても。

「……なるほど。確かに厄介な状況みたいだな」

悩まし気に唸るセルキーに、梅雨が頭を下げる。

「本当は私達だけで解決しなくちゃいけないことだわ。でも、情けないけど私じゃ刃羅ちゃんに追いつけないわ。このままだと二度と会えなくなってしまう。それだけは我慢出来ないの」

「……梅雨ちゃん」

「こんなことダメだつて分かってる。わがままだつて分かってる。それでも、私は刃羅ちゃんを助けに行きたい。だからお願い！船長！シリウスさん！力を貸してほしいの！」

「……」

セルキーは梅雨の後頭部を黙って見下ろす。すると、梅雨の後ろに緑谷達も近づいて、一緒に頭を下げ始める。

それに相澤と流女将も頭を下げる。

シリウスはセルキーに縋るような目を向ける。

するとセルキーが梅雨の頭にポフッと手を乗せる。

「確かにわがままだ。そのわがままでも、もしかしたらここに来なかったら助けられたかもしれない、なんてことが起きるかもしれないねえ」

「……ケロ」

「しかし！だからと言って、目の前で助けを求める声を無視するなんてヒーローとして選ぶわけにはいかん」

「船長……」

「お前が、お前達がそこまでしてるんだ。先輩ヒーローの俺達が見捨てるわけにはいかねえよなあ？シリウス」

「はー」

梅雨が頭を上げる。

セルキーは梅雨を見て、ニカッと笑う。そして、船に顔を向ける。
「野郎どもおー！出港準備だ!!フロツピーの仲間を助けに行くぞお!!」

『了解!!』

「船長……………」

「乗れ！フロツピー！そして雄英のヒヨッコ共！海難救助は迅速が鉄則だ！」

『ありがとうございます!!』

船に乗るのはA組一同、相澤、流女将、エクレーヌとミラミラ、ラグドール、マンダレイ、オールマイト。残りのメンバーは港で待機して、ミラミラの鏡を通して駆けつける方針となった。

出港し、ラグドールで場所を聞いたセルキーは先行すると海に飛び込む。

全速力で離島を目指す梅雨達に相澤が声を掛ける。

「まあ……………本当なら怒らなきゃいけないんだが……………今回に限っては、やはりお前達が鍵だ」

相澤の言葉に力強く頷く梅雨達。

「だが、次が最後だ。次で逃せば、もう雄英でも庇えん。この状況がすでに特例に近いってことを忘れるな。そして俺は本当に危険だと判断すれば、お前達を縛りつけて撤退する。いいな？」

『……………はい！』

「……………」

「……………オールマイト」

オールマイトは進行方向を見つめて、黙り込んでいる。その後ろ姿に緑谷達が心配そうに声を掛ける。

「……………私は……………本当に失敗ばかりだ。これで平和の象徴だったなんて情けない」

「そんなことは……………」

「乱刀少女の苦しみが分かった気になって、さらに苦しめてしまった。戦えなくなっただけで、ここまで無力になるとは。本当に情けないよ」

先ほどの刃羅の涙を思い出す緑谷達。

人を殺したことがある。

この事実これからのように向き合っていくかは緑谷達も考えなければいけない。それに自分達だって事故で殺してしまうことだってあり得る。決して他人事ではないのだ。

「……あの刃羅の言葉って実際のところどうなんですか？」

芦戸が相澤に質問する。

「……何とも言えん。嘘とも本当だとも断定する証拠はないからな。それに殺したとしても、どのような状況だったかというのにも必要になる」

「刃羅ちゃんのお母さんの命を奪ったヒーローはどうだったんですか？」

「オール・フォー・ワンが関わってたって話だしね」

「……それに関しても証拠がない。それに……そのヒーローは捕まった後、故意だったと自供したらしい。だから、これまで誰も気づかなかったんだろ」

「そうですか……」

「今はまずあいつを説得することを考えろ」

相澤の言葉に頷く緑谷達。

その時、海から水柱が立ち上がり、中からセルキーが飛び出てきて甲板に降り立つ。

「船長！」

「離島に小舟があるのを確認した！だが、ちよつと様子がおかしい」

「というところ？」

「おそらく戦闘だ。それもかなり激しい」

『えっ！』

セルキーの言葉に目を見開く一同。

「あの離島は無人島だったはずだ。時折漁師が休憩に使うくらいで、こんな夜更けにあんな激しい戦闘をするなんてことはない」

「まさか他のヒーロー？」

「いや、だったら無線で連絡があるはずだ。海域での戦闘は他の船に避けるように常に連絡をしなければならん。それが無いってことは、

すくなくとも海難に携わる奴じゃねえ」

セルキーは顔を鋭くして、緑谷の言葉に丁寧に説明する。

嫌な予感がする梅雨達は早く到着することを祈ることしか出来なかった。

そして離島に近づく。

島からは明らかに戦闘音が響いてくる。

「刃羅ちゃん!」

「一体何が……!?!」

「お前らは後から来い!エクレーヌ!!」

「もちろん!ミラミラは他のヒーロー達を呼んでからおいで!」

「はい!」

相澤とエクレーヌが先頭で飛び出し、その後ろにマンダレイ、ラグドール、セルキーが続く。その後ろに緑谷達が走り、流女将とシリウスが殿を務める。

走った先で見たのは、

「はーはっはっ!!大人しくしろ!!しろ!!」

「やれやれ……そろそろ大人しく捕まってくんねえかねえ」

「いつきなり攻撃仕掛けてきやがって勝手なことばっかほごくなゴラア!!」

カンパネロとマガクモが刃羅に攻撃を仕掛けている光景だった。

その状況に混乱する相澤達。

「あいつら確か……」

「神野で乱刀さんと一緒にいた人達だ!」

「なんでそんな奴らが乱刀を攻撃してるんだよ!?!」

「知るかよ!?!」

「刃羅ちゃん!!」

梅雨達の声に刃羅達も気づき、刃羅は顔を顰め、カンパネロ達は目を見開いて驚く。

「だから来るの早過ぎるだろう……!?!」

「これは驚いた!!驚いた!!まさか雄英やヒーローが現れるとは!!とは

!!

「おいおい……聞いてないねえ」

刃羅はあちこちに切り傷を負っており、左脇腹から出血して服に血が大きく滲んでいて荒く息をしている。

「……君達は仲間だと聞いていたが？」

『金で繋がる』が前に付くがな!!がな!!」

「そうそう……俺達はただお金の回収に来ただけだよ」

「だから何の金じゃ!!前の依頼分は払ったじやろうが!!」

「いやいや……神野のお金さ。後は長野でのお金」

「はあ!？」

マガクモの言葉に刃羅は盛大に顔を顰める。

金を払うようなことはしていない。それに自分だってタダ働きなのだから。

するとカンパネロがビシィ!と刃羅を指差す。

「1つ!!お前の回収での人件費!!」

「ホワイ!？」

「2つ!!ラグドールの治療費と受け渡しによるビルの損失!!」

「治療は確かに我の提案だが……」

「3つ!!お前を庇った私の治療費!!」

「おめえ、あの後も元気だったべ!？」

「4つ!!私達の依頼金だ!!」

「なんでやねん!？」

ラグドールの治療費以外は明らかにおかしいと断言できる。

「計1000万だ!!さあ払え!!払え!!」

「誰が払いますか!!」

「やれやれ……残念だねえ」

「お前らの依頼金はアタシじゃなくてステインに請求するアル!!」

「断る!!断る!!」

「そうそう……元々お前さんの紹介だしねえ」

「どんな理屈かね!？」

カンパネロとマガクモが動こうとした瞬間、閃光が2人に向けて放

たれる。

カンパネロが右手を向けるが、何かに気づいて慌てて飛び下がる。

『個性』が使えん!!使えん!!」

「おいおい……あれ、イレイザーヘッドかよお?」

「悪いけどお2人さん。その子はこっちが先客でね。ここは退いてくれないかい?」

「断る!!断る!!」

「やれやれ……悪いねヒーローさん。こっちも仕事なんでね」

相澤が目を見開いてカンパネロ達を睨み、エクレーヌが右手に光弾を生み出しながらカンパネロ達に声を掛ける。

そこに虎達も追いつき、状況に目を見開く。

「おいおい……随分と来たねえ」

「はーはっはっ!!エスパデス!!どっちか選べ!!選べ!!向こうに捕まるか、こっちに捕まるか!!捕まるか!!」

カンパネロの言葉に顔を顰める刃羅。

(……どういうつもりだ?ドクトラの奴。何がしたい?)

カンパネロ達の目的を考える刃羅。

相澤達から逃がすのが目的なら、戦う必要はない。なのに明らかに殺す気で仕掛けてきた。

意図が読めずに、両陣に警戒する刃羅。

「やれやれ……じゃあ、こっちが貰うよ」

マガクモはナイフを構えて、一気に刃羅に攻めかかる。

刃羅は両腕をロングソードに変えて迎え撃つ。

「ちいー」

「おっとおーイレイザーヘッド!!ヘッド!!私を無視していいのか?!いいのか!?!」

刃羅の所に向かおうとした相澤に、カンパネロはすかさず《鎌鼬》を放つ。

エクレーヌが光弾を発射して鎌鼬を相殺しようとするが、光弾とぶつかった鎌鼬は拡散して飛びかかってきただけだった。

「相性悪いね！」

「くそー！」

「刃羅ちゃん！」

相澤はカンパネロを睨みつけ、『個性』を封じる。

その隙にマガクモが糸を束ねて槍のように固め、刃羅に向けて10本近く放つ。刃羅は躲しながら斬り払うが、斬り払ったロングソードが欠けてしまう。

「ぐっ！」

「やれやれ……俺の【鋼糸槍】こうしそうちょうに勝てないのは分かってるだろうに」

マガクモの《糸》は粘着性、硬度を自在に変えられる。鋼糸を束ねて回転させながら放つ今の技は刃羅の刃を削る。なので【荒刃刃鬼】も通じない。

それを警戒して刃を展開させなければ、カンパネロの《鎌鼬》が飛んできて刃羅の体を斬り刻む。

基本的に刃羅の間間は、刃羅が苦手な戦い方をする連中ばかりだった。体術が優れていても、どうしようもない攻撃をする連中が多いのだ。

「やれやれ……それにしても愛されてるねえ。エスパデス。お前さんのためにここまで来てくれるなんてねえ」

「……うるさい！」

「おおおお……地雷だったかな？まあ、お似合いじゃないか？実際、苦手だろ？人殺し。実際、今までヴィラン相手に突発的に殺してしまっただけって聞いたよ？」

「シャラップ!!」

「はーはっはっ!!誤魔化すな!!すな!!お前が今まで殺したのは子供や妊婦に襲い掛かっていたヴィランだけだろう!!だろう!!しかも拘束するだけでは間に合わなかったときばかりだ!!ばかりだ!!殺さなければ助けられなかったんだよな!!だよな!!」

「黙りなさい!!」

マガクモとカンパネロの言葉に、苛立ちを隠さずに怒鳴る刃羅。

その様子にカンパネロ達の言葉が正しい可能性が高いと思う相澤

達。

「やれやれ……強情だねえ。スピナーだっけ？殺そうとしたけど殺せなくて、その隙に逃げようとしたら血で足滑らせて後頭部打って死んだ馬鹿って。それをわざわざ自分が殺したことにするために、首を斬り落としたんだろ？健気だねえ」

「うるせえって言うてんだろぅがあ!!!」

目を血走らせて叫ぶ刃羅は、両手を圈に変えてマガクモに殴りかかるが、動きは精細さを欠いていた。そこに糸を絡められて身動きが取れなくなる刃羅。刃で斬ろうとしたが、束ねられた鋼糸で斬ることが出来なかった。

「マガクモオ!!」

「やれやれ……諦めっ!!」

暴れる刃羅にマガクモが近づくと、そこに氷結が走りマガクモと刃羅の間に氷壁が出来る。

「飯田!!緑谷!!」

「おおおおお!!!レシプロ・エクステンドオ!!!」

「やああああ!!!」

飯田が脚を振り抜くと、その足に掴まっていた緑谷がマガクモに向かって高速で飛んでいく。

マガクモが糸を出そうとするが、糸が出ることはなかった。目を見開いて相澤に目を向けると、相澤が目を見開きながらマガクモに迫っていた。

マガクモは刃羅を捕らえていた糸を切り離し、後ろに下がる。

そこに緑谷が思いつきり蹴りを振り抜いた。

「おいおい……今のが子供の放つ蹴りかよ……!!」

「乱刀さんは……連れて行かせないぞ!!」

「下がれ!緑谷!!」

相澤がマガクモに迫る。捕縛武器を振るうが、マガクモもナイフで斬り払いながら対応する。

「やれやれ……そういう武器の挙動は熟知してるよ」

「ちいー!」

「イレイザー！鎌鼬が行くぞ！」
「っ！」

エクレーヌの声に相澤が後ろを振りろうとするが、マガクモが手を動かしたのを見て動きを止める。

相澤に鎌鼬が迫る。

「黒影!!」

「おおおおお!!」

「切島君!」

切島が黒影に投げられて、硬化しながら鎌鼬に突撃する。その腕には盾が取り付けられていた。

緑谷が目を見開き驚いていると、急に切島が空中で止まる。切島の腰には瀬呂のテープが巻かれており、その先は砂藤と障子が握り締めていた。

「つつうく!」

「大丈夫!」

「おう！少し切れただけだ！」

「おいおい……ほんとになんて子達よ……」

「バカばかりなんだよ。全く」

「おやおや……そこにエスパデスまで含めるなんて頑張るねえ」

「あいつらが取り戻すって決めたからな」

相澤とマガクモが睨み合っている間に、刃羅に近づく梅雨や芦戸達。

「刃羅！待ってて！この糸溶かすから！」

「帰るわよ！刃羅ちゃん！」

「……」

芦戸が刃羅に絡まっている糸を溶かしていく。

梅雨が刃羅に声を掛けるが、刃羅は顔を顰めるだけだった。その間に他のA組の面々も近づいてくる。

「大丈夫!？刃羅ちゃん!!」

「もう大丈夫だぞ!!乱刀くん!!」

「心配かけんじゃねーっての！」

「後はあいっただけだな」

「ぶっ殺す!!」

「……私を捕まえに来たのだろうか……何をしているのだ……」

刃羅を背に庇い、マガクモやカンパネロを睨みつけるA組の面々。それに更に顔を顰めて、唸る様に声を絞り出す刃羅。

「流石に2人ではキツイか!!キツイか!!」

「うんうん……レイザーヘッドがいるのは厳しいねえ」

「こつちには鎌鼬が跳ね返されてしまう!!しまう!!それにピクシーボブが厄介だ!!厄介だ!!」

「残念だったね!」

「風ならこつちのもんよ!」

カンパネロの言葉に不敵に笑うのはピクシーボブとローテリア。

ローテリアの《回転》は動いているものであれば対象に出来る。《鎌鼬》を回転させてカンパネロに投げ返し、ピクシーボブの《土流》で周囲に土魔獣や土壁を作り出し、カンパネロの動きを阻害していた。そこにエクレーヌやエクトプラズムの分身が襲い掛かってくる。モリアガの《声援》でパワーが上がっているので、更に厄介さが増していた。

しかし、内心ヒーロー達はカンパネロの実力に舌を巻いていた。逆にこれだけの攻撃を仕掛けているのに、未だに傷一つつけられていない。

「しかし!!このままでは帰れん!!帰れん!!」

両手をクルクルと回すとゴオウ!!と音を立てて風が渦巻き、両腕を振り上げて一気に振り下ろす。

巨大な鎌鼬が緑谷達に向かって放たれた。

「っ!しまった!?!」

「危ない!」

ピクシーボブとローテリアが巨大な鎌鼬に目を向けるが、エクレーヌが2人を引っ張り後ろに下げると、2人がいた場所に小さな鎌鼬が飛んでくる。

巨大な鎌鼬の接近に緑谷達は考えていた。

「まずくない!？」

「俺がまた行く!」

「そのデカさは無理だろ!？」

「氷で防ぐ!どけ!」

轟が氷結を放つが、壁を作り切る前に碎かれてしまう。

「くそ!」

「常闇!!黒影は!？」

「あれを防ぐとなると確実に暴走する!!危険だ!」

「まずいよ!?!来るよ!？」

「ちい!!やつぱ俺が!!」

切島が硬化して前に出ようとすると、その上を飛び越える影があった。

その影はギリイ!と音が響くほどの歯軋りをして体に力を籠める。そして両腕をロングソードに変え、両前腕に鎌を生やして、空中で両腕を振るう。更に全身を刃で覆い、全身を振り回し空中でブレイクダンスを踊る様に舞い、鎌鼬を斬り払う。

「ハアアアアア……!」

「乱刀……!」

「刃羅ちゃん!」

ズシャン!と重厚感ある音を響かせて着地し、息を吐く刃羅。

その姿に切島達は目を見開く。

「はーはっはっ!流石だな!!だな!!」

「こ奴らは余の獲物……!勝手に手を出すな。殺すぞ下民!!」

ギラン!とカンパネロを睨む刃羅。

本気の殺意を感じ取ったカンパネロは、一瞬目を見開く。

(今のは本気だな。やはりお前は……。なるほど……。そういうことか)

「はーはっはっ!流石にそのお前とイレイザーヘッド相手にはもう限界だな!!だな!!」

「やれやれ……。任務失敗だねえ」

「しかしエスパデス!!お前への請求は無くなったわけではない!!ない

「!!いずれしつかりと払ってもらおうぞ!!もらおうぞ!!」

「逃げれると思うのかい?」

エクレーヌ達が飛び掛かろうとすると、カンパネロは右手でエクレーヌ達に向けて巨大な鎌鼬を放ち、続いて相澤と緑谷達に向けて小さな竜巻を放った。

ローテリアが鎌鼬に手を伸ばして、回転させようとした時、強力な閃光が輝く。

「っ!?また閃光弾!?!」

「ローテリア!!鎌鼬は?!」

「行けます!」

「上に飛ばして!!」

閃光に目を閉じたローテリアは言われるがまま両手を上に振り上げて、鎌鼬の上に飛ばす。

竜巻と閃光に目を細めてしまった相澤は、マガクモに糸を伸ばして逃げられてしまう。それに顔を顰めた相澤だが、竜巻を見てそっちの対処に向かう。

竜巻を目の前にした刃羅は、竜巻目掛けて走り出す。

「刃羅ちゃん!?!」

「それは無茶だろ!」

梅雨達の声を無視して竜巻に向かう刃羅は、両腕の鎌とロングソードを戻して、両腕をフランベルジュに、両脚を揃えてスパイラルカタールに変えてコマのように高速で回転する。

そして竜巻に突撃し、せめぎ合う。

しかし20秒ほどで体を持ち上げられ、吹き飛ばされる。

「刃羅ちゃん!!」

「竜巻が弱まった!!轟君!!かっちゃん!!」

「分かった!!」

「命令すんな!!クソナードオ!!」

梅雨が刃羅に向かって走り出す。緑谷は竜巻が弱まったのを見て、轟と爆豪に声を掛ける。

それに轟が氷結を放ち、爆豪が飛び出して竜巻に向けて右手を叩き

つけるようにして爆破する。氷結と爆破で竜巻は霧散する。

カンパネロとマガクモは姿を消していた。

しかし、今は全員がそれどころではなかった。

「刃羅ちゃん!!しっかりして!!」

「乱刀さん!!目を開けてください!!」

刃羅は仰向けに倒れていた。全身傷だらけで、特に左脇腹と両腕からの出血が酷かった。

「ハッ……ハッ……あ……ぐ……コフツ……」

「動くな!!すぐに病院に連れて行く!!」

「刃羅さん!ジツとしてください!!」

「は……なせ……」

浅く速く息を吐く刃羅は目を開け体を起こそうとして、吐血してまた倒れる。しかし、すぐにまた動こうとして相澤と流女将に止められる。それでも動こうとし、相澤達から離れようとする。

そこにミラミラとモリアガ、虎が鏡を抱えてやってくる。相澤達が刃羅を抱えて鏡の中に飛び込んでいく。

「刃羅ちゃん!」

「大丈夫よ」

梅雨達が慌てるが、マンダレイが制止する。

「病院は手配してあったからね。そこに鏡を繋げたから、もう治療を受けているはずだよ。明日には面会させてもらえるはずだよ」

「……よかったわ」

「それにしても……色々と厄介な状況になったね」

「敵連合とあの2人から守っていかなければならんな」

「それに本人もまだ荒れそうだしね」

「とりあえず港に帰るぞ。あの閃光弾で誰か来るかもしれない」

セルキーの号令で船に戻る一同。

梅雨達は病院を教えてもらい、明日病院に集まることになった(爆豪以外)。

オールマイトは船で待機していたが、もはやパニック状態だった。緑谷達が宥めて、刃羅の事を聞いて顔を真っ青にして座り込んでしま

う。しかし、他の者達も達成感がないため、悔し気に顔を歪めたまま帰路に就く。

梅雨や百達は甲板に座って、黙って海を眺めていた。

「フロツピー」

「ケロ……船長……」

セルキーとシリウスが梅雨達に近づいて来た。

「船長。本当に助かったわ。何度お礼を言っても足りないほどだわ」

「よせやい。まだ終わってねえだろ」

「ケロ？」

「あいつがお前の傍に帰って来て、ようやく成功だ。分かってんだろ？ありやあ、これからが大変だぜ」

梅雨の頭を撫でながら、語り掛けるセルキー。

目尻に涙を溜めていた梅雨は、その言葉に少し俯くもしっかりと頷く。

「俺達が出来るのはここまでだ。いい報告、期待してるぜ？」

「……ええ！絶対に繋ぎ留めて見せるわ！」

「その意気だ！」

「頑張つてね！梅雨ちゃん！」

「ケロ！」

涙を拭いて力強く頷く梅雨。それにセルキーとシリウスも笑顔で頷く。

港に着港し、一度解散となる梅雨達やヒーロー達。

梅雨は家に帰る前に、刃羅と来た砂浜に顔を出す。

なんとなく足を運んだが、今はその理由がよく分かる。

ここでの刃羅との会話を思い出していたからだ。

「……止められなかったわ。ずっと刃羅ちゃんは苦しんでいたのに」

今更ながらに理解したのだ。あの時の言葉こそが刃羅のSOS信号だったのだと。

恐らくだが、今まで刃羅は本気で助けを求めたことなどないのだから。そう梅雨は考える。

林間合宿での洗汰に話した内容は拳藤やマンダレイから聞いている。

ヴィランだった母は刃羅の『個性』で苦しんでいた。首を絞めてしまうほどに。そんな母に助けを求められるわけではない。

ヒーローだった父は虐待していたどうかは分からないが、助けを求めても、どうしようもなかったのかもしれない。妻がヴィランだったことを誰かに伝えても、逮捕されるだけだろう。刃羅を隔離するのも出来なかったに違いない。刃羅に罪はないし、施設に入れるにしても母の事がいずればれることは想像がつく。家族を守るために、ヒーローとしてあるために雁字搦めになって、最悪の結果を招いてしまったのだと梅雨は考える。

両親を失った刃羅の味方は少なかったのだろう。体育祭で叫んでいたように、ヒーローとヴィランと言う存在が両親を奪い、そのきっかけが自身の『個性』だ。洗汰のように全てを恨んで当然である。洗汰と違ったのはその恨みを受け止めてくれる人がいなかったこと。恨むことを諦める程に。

そんな刃羅にとって、『英雄回帰』を掲げてヒーローもヴィランも粛清していたステインと言う存在は、オールマイトが世の中に現れたときに近い衝撃だったに違いない。

手を伸ばすのも当然だろう。誰が責められるのだろうか？

刃羅はただ『ヒーロー』に手を伸ばしただけだ。助けを求めただけだ。そしてステインもそれに答えただけ。

「刃羅ちゃんは人を殺した。でも、それは誰かの命を守るため……」
それはここでも言っていた。

『誰かを助けるためには、殺しこともやむを得ない』と。そして船でオールマイトからも話を聞いた。『彼女は私を助けるために殺す覚悟を決めた』と。

殺す事は間違っている。しかし、そうしなければ助けられなかったとしたら？

自分だったらどうするのだろうか？と梅雨は考える。

「違うわ……。どうするのかなんて考えてる時点で、ヒーローとして

は遅れてるのね」

そこが刃羅や緑谷と己との違い。

絶対に曲げられないことにすぐさま動く。ただ結果が違うだけ。

緑谷は『自分が代わりに傷ついても弱き人を守る』。

刃羅は『敵の命を奪ってでも弱き人を守る』。

もちろん、そのままではいけないから雄英で学んでいる。

「けど、刃羅ちゃんはそれでは救えない人が多いと思ってしまったのね。だから、雄英を去ることにした」

良くも悪くもまつすぐだっただけ。緑谷や爆豪よりも不器用なのだ。けど、それを理解してもいる。だから1人で消えた。

「……私は刃羅ちゃんに何が出来るか分からない。だからって、何もしないなんて出来ない。少なくとも傍にいる事は出来るわ」

梅雨は決めた。

「世間の言う『ヒーロー』としては間違っているかもしれないわ。それでも私は私が正しいと思う道を進む。刃羅ちゃんと並び立つために」

梅雨は両手を強く握る。

「例え刃羅ちゃんに恨まれたとしても……それでも、私は諦めないわ。だって、傍にいて欲しいのだから」

梅雨は明日に向けて備えるために帰路に就く。

「私は刃羅ちゃんと、親友になりたいの」

覚悟を言葉にして、梅雨は刃羅と向かい合う。

#35 居場所

翌日。

爆豪を除いた梅雨達は、教えてもらった病院に集まっていた。エントランスにエクレーヌと流女将が待っていてくれた。

「おはようございます」

「おはよう諸君。少しは休めたかい？」

『おはようございます』

「……刃羅ちゃんはどうかしら？」

挨拶をして、さっそく梅雨が状況を聞く。

それに流女将とエクレーヌは眉尻を下げる。

「怪我は大丈夫だよ。腹部には少し傷跡は残るけど、後遺症はない。リカバリーガールも来てくれたからね」

「ただ……一言も話しません。イレイザーや私達が交代で監視しているので、逃げ出すような素振りはないですが」

「拘束もしているから、嫌な気分ではあるだろうしね」

「……そう」

刃羅は両手脚を拘束されているが、暴れることもなく大人しくしている。しかし一切声を発さず、どんなに質問しても目を瞑って横になっっている。食事も食べていないとのこと。

それに梅雨達は心配で顔を曇らせる。

「残念ですが、やはり私達の言葉は届かないようです」

「アラジンはやはり私達ヒーローへの失望はぬぐえない様だ」

流女将は悲しそうに目を伏せ、エクレーヌはそれを誤魔化すように苦笑する。

それに考え込む緑谷達。自分達は何を伝えられるだろうか。

「刃羅ちゃんは、ただまっすぐなだけ。誰よりも『誰かを救うため』に考えてると私は思うの」

「梅雨ちゃん……」

梅雨が指を口の下に当てながら、考えを語る。それに緑谷達が目を向ける。

『ヒーロー』という存在は刃羅ちゃんにとって、とても重いモノなんだと思うわ。【職業】ではなく【存在】として『ヒーロー』を見ているの。そして追い詰められていた刃羅ちゃんにとって、一番のヒーローがヒーロー殺しだったのよ。ヒーローとヴィランが信じられなかった刃羅ちゃんにとつて、ヒーロー殺しこそが私達にとつてのオールマイトなんだと思うわ」

「……なるほどな」

「でも、それだけでは解決に繋がらないことも理解しているのよ。だから、迷ってるのだと思うわ」

「迷ってる？」

「ケロ。上手く言えないのだけど。ずっと苦しんでるのだと思うわ」

梅雨の言葉にまた考え込む緑谷達。

答えは出ていないが、とりあえず刃羅のいる病室に向かう一同。刃羅は個室に隔離されていた。扉の前にはフィクスマンとミラミラが待機していた。

病室はかなり広く、楽々A組面々が入る余裕があった。

刃羅は部屋の中央のベッドに寝かされていた。両手脚を拘束されていて、相澤がその横の椅子に座っていた。ドアの近くにはオールマイトも座って俯いていた。

刃羅は梅雨達が入って来ても、目を瞑ったまま反応しなかった。

梅雨達は刃羅のベッドを囲む。

「刃羅ちゃん」

「……」

「昨日からこの調子でな。まあ、仕方ねえことだがな」

「ケロ……」

梅雨は刃羅に近づき、刃羅の手に自分の手を重ねる。

「昨日ね、プールの帰りに刃羅ちゃんで行った海に行ったの」

梅雨は独り言のように話します。

「そこで刃羅ちゃんの言葉を思い出したの。『誰かを助けるためには、殺す事もやむを得ない』『もしもの時は止めてくれ』。その意味が今更ながらに分かった気がするの」

「……」

「刃羅ちゃんは……両親の事が大好きだったのね。お父さんはもちろん、お母さんの事も。だから、今も苦しんでる」

梅雨の言葉に全員が耳を傾ける。

『「エスパデス」、そして『スライシス』。響きも意味もよく似てるわ。いつから名乗り始めたのかは分からないけど、きつと誰かを助けるために命を奪った時だと私は思うの。刃羅ちゃんのお母さんが自分を殺そうとした理由を忘れないために。自分もいつか殺されることを覚悟して」

「……」

「ヒーローに固執してたのはお父さんがヒーローだったからだわ。自分達を守ろうとして1人で頑張って、それでも倒れてしまったお父さんの職業を……汚されなくなかったから。見返りを求めず、名誉を求めず、ただ助けを呼ぶ声に応える。きつとお父さんはそんな人だったのよね？」

「……」

『「マイスタード」。家に帰って少し調べたんだ」

今度は緑谷が口を開く。

「マイスタード。調べたらさ……事務所もなければ、サイドキックも雇っていなかったことが分かったんだ。『お金がないから』って取材で答えてたけど……それはヒーローで得た報酬は全て孤児院やヴィラン事件の被害者の支援に無名で寄付してたからだだったんだ。マイスタードは、ヒーロー活動も生活も全て副業だけで賄っていたんだってネットの古い書き込みがあつたよ」

緑谷の言葉に梅雨達や相澤、オールマイトも含めて驚きに目を見開く。

ヒーローの給料は歩合制。だからこそヒーロー達は事件解決に競争のように走る。副業なんて微々たるもので、それで全てを補うなんて無理に決まっている。

「きつとマイスタードは本当に眠る暇もないほどギリギリだったと思うんだ。そんな中でヴィランだったお母さんや乱刀さんも守ってい

こうとしていたんだ。……凄い人だったんだね」

緑谷は両手を握り締めて俯く。

「……せやけど、この社会はそんなお父さんを馬鹿にしよった」

刃羅は目を開けて、声を上げる。

「刃羅ちゃん……」

「家族と人のために自分をギリギリまで追い込んで頑張っていた父を、周囲は鼻で笑い、または憐れんだ。オールマイトのように常に笑顔浮かべて走り回っていた父を、この社会は『ヒーロー』としては普通以下』と烙印を押す。見返りも名誉も求めず、ただ人助けに命を賭けていただけなのに。事務所がなく、サイドキックが雇えないという事実だけで。その理由も知ろうとせず」

その言葉で刃羅が父親を尊敬していたことが伝わる。

「ただ……その信念のために、おいらとお母が苦しんだんも事実だべ。お父が家に帰ってきたのなんて、月に1回くれえだったべ。けど、お父の笑顔を見れるのが嬉しかっただよ」

「……家族を守ろうとすれば他の苦しむ人を取りこぼし、その人達を救おうとすれば家族が苦しむ。……ジレンマだな」

飯田が顔を顰めて、マイスタードの苦悩を思い浮かべる。

間違っではないが、間違っている。素晴らしいことだが、どうしようもなく愚か。

立場が変わるだけで大きく評価が変わってしまう。

「母は父を支えようと必死に働こうとするが、ヴィランとして顔がそこそこ知られていたことが邪魔をする。偽名を名乗っても、すぐにバレてしまい、家を転々とした。かと言ってヴィラン仲間を頼るわけにもいかん。それこそ父の邪魔になる」

「……ヴィランに引退はねえからな。スライシスは自首しても確実に無期懲役だ。耐える以外になかった……か」

一度犯した罪は消えない。

それによって普通の幸せを得ることが出来なくなってしまった。

「父を支えられず、犯した罪を自責する母にとって、吾輩は……母とほぼ同じだった吾輩の『個性』はまさしく【罪の象徴】だったのである。

それでも『娘だからと』必死に耐えて、吾輩を育てていた」

「……だから刃羅ちゃんには誰にも助けを求められなかったのね。お父さんは家にいないし、お母さんは更に苦しめてしまうだけだった」

「そして、それは乱刀さんの御両親も同じだったのですね」

「そこをオール・フォー・ワンがつけ込んだ」

「僕は……首を絞められた時、母になら殺されてもいいと思った。けれど、その思いが最悪を呼び寄せた」

運良く、または運悪く父が帰って来て、母を止める。止められたことで自分がしていたことに気づいた母は家を飛び出し、暴走させられる。そしてヒーローに殺されてしまった。

それを刃羅もマイスターも己を責めたに違いない。

その2日後に事件が起きた。マイスターの死だ。

「家の近くでえヴィランが現れてえ、私はあ父さんを送り出したのお。ヒーローだからあ。それがあまた最悪を呼んだのお」

ヒーローである父を尊敬していたからこそ、自分が我慢して耐えればいいと思った。困っている人達の所に行ってほしいと思った。ただそれだけだったのだ。

しかし父は帰って来なかった。母の元に旅立った。それを責めることは刃羅には出来なかったのだ。

「だから刃羅ちゃんは、家族を苦しめ、家族を奪った『ヒーロー』と『ヴィラン』という存在を恨んだのね。そして、それを可能とし、家族を苦しめた『個性』も。そしてそんな時にヒーロー殺しの存在を知ったのね」

『英雄回帰』。もしそれが為されれば、それはアラジンにとって『マイスタードは真の英雄だった』と社会に認めさせることになる……か」

「命を賭けるには十分やよつて。マイスタードを『ヒーロー』やと認めさせたれば、母様の死は無駄にならへん。そのためにわつちの『個性』を使い潰すと決めたんや」

刃羅は拘束された腕を持ち上げて、両手を見つめる。

「この血濡れた手では、例え贖物でも『ヒーロー』なんて名乗れないわ。だからヴィランとされようとも、母が憎んだ【罪の象徴】になろうと

も、私は『本物のヒーロー』を取り戻す。だから……もうぶう!?!」
いきなり刃羅の顔を梅雨が両手で挟む。

そして刃羅の顔を覗き込むように顔を近づける。

「っ、梅雨ちゃん!?!」

「勝手に決めつけないで」

梅雨は更に力を込めて刃羅の顔を掴む。

「誰かを救うために血に染まったから名乗れないなんて、そんな安っぽいモノは『英雄』なんかじゃないわ。それに刃羅ちゃんが犠牲になつて、取り戻した『英雄』なんて私は認めないわ。だって刃羅ちゃんが救われてないんだもの」

「……」

「……蛙吹さん」

「私は刃羅ちゃんが傍にいないと嫌。刃羅ちゃんが犠牲になるなんて許せないわ。例えそれで傷つく人がたくさん出ても、私は嫌よ」

「……そうやって死んでいくのだ」

「死なないわ。だって、ここには皆がいるんだもの。刃羅ちゃんの御両親とは違うわ。ここにいる皆で刃羅ちゃんも苦しんでいる人達も助けるわ。マイスタードとは違う。1人じゃないわ」

梅雨の言葉に緑谷達も頷く。

刃羅の過去を知つても、刃羅に手を差し伸ばすと決めた。ならば1人で苦しむことはない。

「私達が刃羅ちゃんの居場所になる。だから……まだ全てを見捨てないで」

刃羅は梅雨をまつすぐに見て、目を瞑る。

「……どっちにしる私は囚われた身。好きに決めればいいわ」

「雄英に帰るわよ。刃羅ちゃん。皆で考えましょう。『ヒーロー』とは何かを」

梅雨の言葉に緑谷達が頷く。

相澤達はそれを後ろで聞いていた。

「……いい子達が揃っていますね。A組は」

「……それ故に様々な壁にぶつかる。今回は特に響くだろうね」

「それをいい方向に手助けするための俺達です。まあ、手が焼き過ぎる連中ばかりですがね」

「全くだね」

「だからこそ、期待したくなる。こいつらがどういう『ヒーロー』になつて行くのかを」

相澤はゆつくりと梅雨達に近づく。

「さて、乱刀の処遇についてだが、全寮制になつたことで乱刀を保護・監視がしやすい環境にもなつた。だから乱刀には基本的にはこれままで通り雄英に通つてもらおう」

「よっしゃー!」

「よかつたあ!!」

「乱刀。お前には罰としてこれからもヒーロー目指して頑張つてもらおう。仮免試験にも出すからな。落ちたら反省文かつ留年だ」

「……」

相澤の言葉に上鳴と芹戸がハイタッチをする。刃羅は顔を顰めて相澤を睨む。

「で、ヒーロー殺しに関してだが……」

「何も話す気はねえ」

「だろうな」

期待はしていなかつた相澤。

結局刃羅を説得したわけではないのだから仕方がない。

とりあえず繋ぎ留めただけでも良しとするべきだと考える相澤だった。

「丁度いいことに明日は入寮日だ。全員、程々で帰れよ」

『はいー!』

こうして何とか刃羅を繋ぎ留めたA組だった。

昨日。深夜。とあるビル。

「お疲れ様です。お2人方。どうでしたか?」

「駄目だった!!だった!!」

「やれやれ……まさか雄英やヒーロー達がなだれ込んでくるとはねえ」

「そうですか。それは残念」

「どこが残念だ!!残念だ!!ドクトラ!!お前はこうなると思っていただろ!!だろ!!」

「まさか。そこまで早く駆けつけるとは思っていないませんでしたよ」

カンパネロ、マガクモの言葉にドクトラは肩を竦める。

ドクトラは2人を椅子に座らせて、自ら紅茶を淹れる。

「ところで!で!刃羅を雄英に戻らせるとは何がしたい!?!したい!?!」

「おいおい……やっぱりそういうことだったのかよ」

「おかげであいつから本気で睨まれたぞ!!たぞ!!」

「それは申し訳ありません。ただ、これはステイン様からの依頼でしたので」

ドクトラの言葉に目を見開くカンパネロ達。

ドクトラは微笑んだまま紅茶を一口飲む。

「今回の依頼料などは後程お振込みします。これで刃羅さんはまたしばらくは雄英にすることが出来るでしょう」

「やれやれ……手の込んだことだねえ。まあ、随分と無茶な依頼だと思っただけど」

「おかげで刃羅の地雷をガンガン踏んだな!!だな!!」

カンパネロとマガクモは依頼を受けたときに、なんとなく目的を予想していた。だから、わざと刃羅が悪ぶったり、意固地になっている理由となる部分を暴露したのだ。

それを雄英やヒーローに聞かせることで、刃羅が戻りやすくするために。

「それは……怒るでしょうねえ」

「しかしステインは何がしたいのだ?のだ?」

ドクトラは刃羅の怒りを予想する。しばらくは連絡しない方がよさそうだと決める。流石にその地雷はドクトラでも中々踏めない。

そんなことを考えていると、カンパネロが首を傾げてステインの依頼してきた理由を聞いてきた。

それにドクトラは紅茶を置く。

「オール・フオー・ワンの戦いで、叱咤された仕返し……またはお礼ですかねえ。オールマイトのあの姿には流石に驚かされましたし」

「うんうん……あれは驚いたねえ」

「刃羅さんの御両親のこともありましたし」

「あれは驚いたな！ たな！」

「最近、刃羅さんが悩んでいたのも知っていたようですし、もう一度突き放して自分の考えを見つめ直せということでしょう」

「おやおや……思ったよりしつかり弟子を見てるんだねえ」

ステインの親心にマガクモが意外とばかりに目を見開く。

それにドクトラも内心同意する。まさかステインがそんな依頼をしてくるとは思っていなかった。

「まあ、刃羅さんはまだ若いですし、色々和多感な時期ですからね」

「あいつは良くも悪くも純真だからな！ かな！ ヴィランとヒーロー両方を良く知った方がいいだろうな！ ろうな！」

「そういうことです」

「やれやれ……何だかんだで俺達もあいつの選ぶ道を尊重したいってことか」

「あいつに捕まるならまだ納得出来るからな！ かな！」

「妹分と思われてることに気づくのはいつでしょうかねえ」

3人は苦々しく顔を顰める刃羅の顔を思い浮かべて笑う。

良くも悪くも純真。

理想を追い求めて走り続ける刃羅の行く末を見たいと思うようになってるドクトラ達。

刃羅本人も気づかない間にたくさん居場所が出来ている。

それに気づくのはいつか。気づいた時にどんな反応をするのか。楽しみな3人だった。

#36 入寮

8月中旬。刃羅を確保した2日後。

A組一同は雄英高校に集合していた。

雄英敷地内、校舎から5分、築3日。

『ハイツアライアンス』。

今日からここが刃羅達の生活の場となる。

「すげー!」

「恵まれし子らのー!!」

芦戸達がテンションを上げて、寮を見上げている。寮の入り口の上には「1—A」とデカく掲げられていた。

それを刃羅は無関心とばかりに集団の後ろで立っていた。隣には梅雨と百。刃羅に声を掛けるが最低限の返事しかなく、少し寂しそうに刃羅を見ていた。

「とりあえず1年A組。無事にまた集まれて何よりだ」

相澤が緑谷達に声を掛ける。

それに感慨深げに頷く緑谷達。

「結構大変だったのにさ。林間学校から何だかんだで1週間とちよつとだもんね」

「本当になあ」

「いいじゃん。集まれたんだしさ」

「だな」

「さて……これから寮について軽く説明するが、その前に2つ」

相澤が手を叩いて、静かにさせる。

「まずは乱刀についてだ」

「刃羅ちゃんのこと？」

相澤の言葉に全員が刃羅に注目する。

刃羅は顔を顰めて、胸の下で腕を組む。

「雄英には引き続き通えることにはなったが、脱走のリスクが消えたわけではないのは諸君らも分かっているな」

相澤の言葉に緑谷達は少し悲し気に頷く。

「諸君らは嫌かもしれんが、学校としては対処せざるを得ん。だから、乱刀の首に発信機付きのチョーカーのようなものを常時身に着けることになった。基本的に外せるのは俺か校長のみ。無理矢理外せば即座に警報が鳴り響くことになっている」

トントンと自分の喉を指し示し説明する相澤。梅雨達は刃羅の首元に確かに黒いチョーカーのようなものが巻かれている。

「いい気分ではないだろうが、しばらくは我慢してほしい。それを外せるように諸君らがしっかりと乱刀と信頼関係を築いてほしい」

相澤の言葉に力強く頷く梅雨達。

刃羅は顔を顰めたまま、黙って大人しくしている。

「続いて2つ目だが……轟、切島、緑谷、八百万、飯田、そして乱刀。この6人はあの夜、あの場所に爆豪救出に赴いた」

相澤の言葉に顔を強張らせる一同。刃羅救出で集まった際に話は聞いていたのだ。

「そして、その後の乱刀救出には全員が来た。事情などは色々棚上げした上で言わせてもらおうよ。オールマイトの引退と乱刀の特殊な事情が無ければ、俺は全員を除籍処分にしてる」

相澤の言葉に目を見開いて固まる緑谷達。

「彼の引退でしばらくは混乱が続くだろう。敵連合、そしてヒーロー殺し達の出方が読めない以上、今英雄から人を追い出すわけにはいかない。理由はどうあれお前達は俺達の信頼を裏切った形だ。今後は正規の手続きを踏み、正規の活躍をして、信頼を取り戻してくれるとありがたい」

そして、相澤はくるっ！と寮に体を向ける。

「以上……さっ！中に入るぞ。元気に行こう」

「行けるかい。ドアホ」

流星に刃羅がジト目で突っ込む。

その後、爆豪が上鳴を茂みに連れ込み爆発と電撃が響く。直後『ウェイ上鳴』が飛び出し、それがツボの耳郎が嘔き出し、他の者も笑い出す。

それで雰囲気に戻った一同は寮の中に入っていく。

1棟1クラス。

右が女子棟、左が男子棟に分かれており、1階は共同スペース。食堂・風呂・洗濯なども1階だ。

共同スペースにはソファやテレビが置いてあった。

それにテンションが上がる一同。

「広！キレー！そふあああああ!!」

「おおお!!」

「中庭あるじゃん!」

「豪邸やないかい」

「麗日くん……!」

なんとエレベーターまで完備されており、2〜5階が各部屋で1フロア男女それぞれ4部屋だ。

部屋を覗いた全員が目を見開く。部屋はエアコン、トイレ、冷蔵庫、クローゼット、ネット完備の贅沢空間だった。テレビも設置可能だ。

「すごいなあ!」

「我が家のクローゼットと同じくらいの広さですわね……」

「豪邸やないかい!」

そして1階に戻り、相澤が部屋割りを発表する。

刃羅は5階で梅雨と百と同じフロアとなった。

「蛙吹、八百万」

「は、い」

「これを渡しておく」

相澤が2人に手渡したのは鍵だった。

「これは何かしら?」

「乱刀の部屋の鍵だ。お前達には乱刀の監督役をしてもらおう」

梅雨と百は間にいる刃羅を見る。刃羅は相変わらず腕を組んで黙っている。

「ちなみに窓も鍵がかかっている。窓が開くと警報が鳴る」

「そこまで……」

「ケロ……」

「それだけの事をしたってことだ。まあ、どういう風に監督するかは

お前らに任せる」

そして、本日は部屋作りとなった。

「八百万」

「はい」

「あれ、お前の部屋に入らなかつた荷物だ」

相澤が指差した先にはピラミッドのように積まれた段ボール。

それを梅雨と刃羅が咄然と見上げる。

「これ全部う？」

「凄い量ね」

「どうしても必要な分だけ選んで送り返せ」

「ええ!? そんな!？」

「物が多いのも考えものでござるな」

「そうね」

梅雨と刃羅は落ち込んでいる百を放置して部屋に向かう。

一番端の部屋が梅雨。その隣が刃羅。一部屋空いて、百の部屋と
なっている。

刃羅の荷物は流女将が送っていた。

部屋に入り、制服を脱いだ刃羅は青の甚平に着替える。

「さっさと終わらせるか」

ベッド、机、タンスは備え付けの物を使うことにした。

どうやら流女将の部屋で使っていたものは、ほぼそのまま送って来たようだ。刃羅はクリアボックスをクローゼットに突っ込んで、梅雨達と買った服を吊るしていく。タンスに下着や部屋着を突っ込んで、教科書を机に並べる。そしてベッドにシーツを敷く。

1個段ボールが残り、首を傾げる。服は全て出している。もう荷物は
はないはずだ。

段ボールを開けると、中にはカップ麺と電気ポッド、割り箸が詰め
られていた。

「……」

一番上にメモがあり、それを開く。

『1日1つ。食べ過ぎないようにしてくださいね。麺類ばかりじゃな

く、バランスよくご飯は食べてください。体を大事に』
流女将の文字だった。

「……うっせえよ」

ポットをタンスの上に設置して、タンスの横にカップ麺が入った段ボールを置く。

これで全て終了した。開始してまだ1時間だった。

刃羅はフローリングに座り、ベッドにもたれ掛かり座禅を組む。そして目を瞑る。

「……私が犠牲になって、取り戻した『英雄』は認めない…か」
刃羅は梅雨の言葉を思い出して、顔を顰める。

『英雄』は犠牲があるから、そう呼ばれるに足る。そう刃羅は考えていた。犠牲が出ない世界に『英雄』は必要ないからだ。誰かが倒れ、誰かが血濡れて、それでも弱き者のために立ち上がるから『英雄』なのだ。

しかし、

「……『英雄』を生み出すために犠牲になるのは違う…ということかのお」

梅雨の真意を考える刃羅。

その後も色々と考えていく。もちろん答えなど出るわけがない。ただ、

「あそこまで来させて、あそこまで言わせて、捕まったからと不貞腐れているのは……情けないにも程があるか。今度は我がステインに怒鳴られる」

どんな形であれ、不本意であれ、こうなった以上適当にやることは本当に梅雨達に負けたことになる。

あそこまで色々と啖呵を切った以上、情けない姿は晒せない。そう吹っ切る刃羅であった。

瞑想を続けていると、ドアをノックされる。

「ん？」

「刃羅ちゃん。入ってもいいかしら？」

「構わんのである」

「お邪魔するわ」

入ってきたのは梅雨だ。梅雨は体操服に着替えていた。

「もう終わったの？」

「わっちは荷物やほぼありまへんよって」

「私はもう少しかかりそう。百ちゃんはどうしてるのかしら？」

「まだ気配はないでござるな」

梅雨は刃羅が答えてくれることに笑顔を浮かべる。

休憩がてら1階の様子を見に行く2人。

そこで見たのは、

「銀の食器セットは………いらぬ。絵画も………1枚でいいですわね。ティーセットは………皆さんにも飲んで頂きたいですし………」

唸りながら取捨選択に未だ追われている百。

まだ段ボールの山の半分も見れていないようだった。

「………もう誰もいない2階全部を百の部屋にしてやったらどうだ？」

「今日中に終わりそうにないわね」

「あ………蛙吹さん、乱刀さんも………」

「一体何を持ってきたのかしら？」

「えつと………最新式家電一式に、イブニングドレスに、世界中の図鑑と百科事典に、ティーセットに、食器に、絵画に………」

「………」

『お前は何しに来た』と内心ツツコム刃羅と梅雨。

特にイブニングドレスは何の式典に出る予定なのだろうか。

「ドレスなんて何処で着るつもりだ？」

「パーティーの授業があつたときに………」

「あるわけねえべ」

「家電も最新式ばかりよ。百ちゃん」

「マイルームでティーにケーキをクックするなら別デースが」

「………流石にそこまでは………」

「電子レンジとか食器は食堂に寄付してもいいでしょうけど………洗濯機はもう置くところはないわ」

ジト目で百にダメ出しする刃羅達。

2人も手伝って必要なものを選別し、部屋に運んでいく。
そして百の部屋に入り、更に呆れる刃羅と梅雨。

「……ベッドとお本棚があ大き過ぎい」

「本当にお嬢様なのね。百ちゃん」

「あのベッドってえん、どうやってえん入れたのかしらあん？」

「百ちゃん、この部屋にあの段ボールの中身は無理だと思うわ」

「まさかここまで狭いとは思ってなくて……」

天井ギリギリの天蓋付きベッド。どうやっても部屋の扉よりも大きい。そして分解できるようなものでもない。

物を運ぶ『個性』を使わせたのだろう。そこまでさせたのは雄英かそれとも八百万家かは分からないが。

刃羅はその後百の手伝いをする。梅雨は途中で自分の部屋の片づけに戻った。

「すいません。乱刀さん」

「まあ、構いませんが……送り返すだけでも一苦勞ですわねえ」

「……反省しますわ」

「とりあえずこれで全部かな〜？」

「はい！後は自分でやりますわ！ありがとうございますわ！」

仕分けした荷物を運び終わると、百はフンスと両手を胸の前で握って気合を入れて部屋に入っていく。

刃羅は部屋に戻ろうとすると、反対側の男子棟5階で何か大きいものが動いているのが見えた。

「……轟屋か。……豊？」

轟は豊を運んでいた。

「豊なんてどこから持ってきたのよ……。そういえばエンデヴァアの息子だったっけ。金持ちの可能性はあるか……」

呆れた顔で轟の行動を見つめる刃羅。

豊を部屋に持ち運んでどうする気なのか。気にはなるが、流石に反対まで行くのは面倒なので部屋に戻る刃羅であった。

ATTOTIUMANI……YORU。

部屋の片づけが終わった男子は、1階の談話スペースに集まっていた。

「疲れたー」

「共同生活ってワクワクすんなあ！」

「共同生活……これも協調性や規律を育むための訓練……！」

「気張るなあ。委員長」

ソファでダラけている切島の後ろで飯田がカクカクと腕を動かして気合を入れていた。

それを緑谷達は苦笑して見ていた。

そこに刃羅達女性陣も降りてくる。

「男子部屋出来たー？」

芦戸が声を掛ける。

「うん。今くつろぎ中って乱刀!?服ヤバいつて！」

「谷間……!!！」

「ああん？」

上鳴が手を上げて答えると、刃羅の甚平を見て顔を赤らめる。

刃羅の甚平は前が少し開けており、谷間がかなり露出していた。それに峰田が目を見開いて叫びながら興奮する。

刃羅は髪も下ろしており、下もホットパンツ位なので太ももが露出しており妙にエロイ。

梅雨と百が呆れたように刃羅を見る。

「峰田ちゃんが喜ぶだけだから、着替えたらッて言ったのだけど」
「面倒だと押し切られてしましまして……」

「興味もない男共に見られたところでどうでもいいのです」

「ちくしょー!!！」

「乱刀くん!!だからと言って、そのような刺激が強い服を着るのは……！」

「その前にその葡萄頭のセクハラ発言注意せい」

「む……確かに……！」

刃羅の言葉に上鳴と峰田が崩れ落ち、飯田が刃羅を咎めるが、簡単に言い包められる。

「でね！今話しててね！提案なんだけど！お部屋披露大会！！しませんか!？」

『…………え?』

芦戸の言葉に男子数名が絶句する。

しかし芦戸達の勢いそのままに部屋を見に行くことになった。

まずは男子棟2階。

緑谷の部屋。

「わああ!!ダメダメ!ちよつと待つ…………!!」

緑谷は止めるも容赦なくドアを開けられる。

部屋中オールマイトで埋め尽くされていた。

「おお!!オールマイトだらけだ!オタク部屋!」

「緑谷ちゃんらしいわね」

「憧れなんで…………恥ずかしい…………」

緑谷が顔を真っ赤にして俯いている。

刃羅は集団の後方で面倒臭そうに壁にもたれている。

「人の部屋見て楽しいアルか?」

「俺は興味ねえ」

「俺もだな」

同じくどうでもよさげな轟と障子も刃羅の言葉に頷く。

轟の声を聞いて、あることを思い出した刃羅。

「そういえば、轟殿。畳を運んでいたが何処から持ってきたのだ?」

「学校の粗大ごみ置き場だ。色々あつてリカバリーガールから教えてもらった」

「部屋の床を全部畳にしたのか?」

「ああ。家が日本家屋だよ。フローリングとか落ち着かねえんだ」

「…………百と言い、あんさんも面倒なやつちなあ」

「そうか?」

障子と刃羅は呆れながら轟を見る。

轟は不思議そうに首を傾げるが、それ以上刃羅達は何も言わなかつ

た。

その後も部屋を見ていき、峰田達が何故か対抗心を出して、女子の部屋も見せろと言いつつ出す。

それに芦戸が同意し【第一回部屋王】を決める事になった。

「梅雨。まだ付き合わなければ駄目か?」

「駄目よ。刃羅ちゃん」

「人の部屋に興味などないのだがね」

「一緒に居ることが大事なの」

梅雨の言葉にガツクリと肩を落とす刃羅。

その様子を少しだけ嬉しそうに見る麗日達。

そして轟の部屋を見に行く一同は、扉を開けると目を見開いた。

「和室だ!?!」

「造りが違うね!?!」

フローリングは畳に変わり、カーテンは障子に変わっていた。

「……どれだけゴミ置き場から持ってきたのよ……」

「壁まで変わってるな」

「あいつは来年寮を移ること理解しとるんかいな?」

「してないだろうな」

刃羅と障子はもはや轟に何か言うのは諦めていた。

次の砂藤の部屋ではシフォンケーキが振舞われた。

刃羅以外の女性陣はそれに食いつき、笑顔で頬張る。

「あんまあい!フワッフワ!」

「ポーノ!ポーノ!」

「素敵なく趣味をお持ちですね。砂藤さん!今度私のお紅茶と合わせてみませんか!」

「とても美味しいわ。砂藤ちゃん」

「オオ……こんな反応されるとは……」

砂藤は梅雨達の反応に照れて顔を赤くする。

轟や障子達と後ろでモチヤモチヤと食べる刃羅。

「ングング……ンマンマ……障子君の複製腕って胃袋に繋がっているのです?」

「ああ」

と、どうでもいいことを話しながら。

その後は女子棟も見て回る。

最後に5階に上がり、梅雨の部屋。

「私も普通の部屋よ」

梅雨の部屋は窓横に観葉植物が置かれており、緑色を基調としたカーペットにシートが敷かれている。

「なんか落ち着く〜!」

「梅雨ちゃんっぽくて可愛い!」

「ケロ」

麗日達の反応に照れるように笑う梅雨。

そして次は刃羅の部屋。

「何もく見るものはくはないよ〜?」

「シヨップピングモール行くときも何もなくて驚いたもんね。外出用の

服すらほとんどなかったもん」

「ああ……だから皆で集まったんだ?」

「そうよ。今着てるような服しか持ってなかったもの」

「めっちゃ買ったよね〜」

そして開けた部屋は、ぶっちゃけモデルルームそのままだった。

「そのまま!」

「障子の部屋よりはあるけどな」

「ベッドやらを出すのも面倒じゃっただけじゃ」

「そんな理由かい!?!」

「俺たちは寮の部屋の要望は出してなかったかな。モデルルームの

まんまだったんだよ」

「なるほどな」

耳を小指でほじりながら話す刃羅に納得する一同。

そして最後。百の部屋だ。

巨大なベッドと本棚が部屋を占拠していた。

「私、見当違いをしてしまいました……皆さんの創意溢れるお部屋と比べて……少々手狭になってしまいましたの」

「でけえー！狭!?!どうした八百万!？」

「私の使っていた家具なのですが……まさかお部屋の広さがこれだけとは思っておらず……」

「段ボールだけでも3部屋は埋め尽くせるほどだったものね」

「ドレスやら家電一式やら……一軒家にも行く気だったのかと思っただぞ」

「ご迷惑をおかけしました!」

「シーツやらの洗濯は自分でやるのだよ」

「分かっていますわ!」

刃羅の言葉に顔を赤らめながらも力強く頷く百。

偉そうに言う刃羅だが、刃羅も流女将にやってもらっていたので人の事は言えなかったりするのだが、梅雨達は知らないので誰もツッコむことはなかった。

1階に集まり、誰の部屋が良かったのかを投票する。

「えー。それじゃあ皆さん!投票はお済でしょうか!?!自分への投票はなしですよ!?!」

芦戸が箱を持って全員に呼びかける。

「それでは!爆豪を除いた……第1回部屋王暫定1位の発表です!!」

結果は……。

「投票数5票!!圧倒的独走単独首位を叩き出したその部屋は……!!砂藤ー!!力道ー!!」

「はああ!?!」

結果に砂藤が目を見開いて驚く。

「ちなみにその5票は梅雨ちゃんと刃羅以外の女子!理由は『ケーキ美味しかった』だそうです」

『部屋は!?!』

告げられた理由に上鳴達が叫ぶ。

「ちなみに梅雨ちゃんと乱刀はどこに入れたんだ?」

「私は轟ちゃんよ」

「おいらは梅雨だべ」

上鳴や峰田達が砂藤に抗議している横で、切島が刃羅達に声を掛ける。

終わったことでそれぞれが就寝に動こうとした時、緑谷が声を上げる。

「あ。飯田君！乱刀さん！ちよつといいかな？」

「ん？なんだ？緑谷くん」

「ほえ？」

飯田と刃羅が緑谷に顔を向ける。近くにいた切島、梅雨、轟も緑谷に顔を向ける。

緑谷は2人に近づく。

「2人をお願いがあつて……」

「お願い？」

「うん。乱刀さん林間合宿で言つてたよね？僕の攻撃は拳だけで読みやすいつて」

「そやね」

「実は……あの戦いで腕に爆弾が出来ちゃつて。あの時と同じ怪我をすると、もう腕が使えない生活になるかもしれないんだ」

「何だつて……!?!」

「マジかよ……!?!」

緑谷の言葉に刃羅以外の4人が目を見開く。

かなりの大怪我だったことは見ていたので知っていたが、そこまですとは思つていなかった。

刃羅は腕を組んで緑谷を鋭く見つめる。

「……なるほど。だからマガクモに飛び掛かった時に蹴りを使ったのだな？」

「うん」

「緑谷ボーイのお願いはキックメインのバトルスタイルのコーチデースね？」

「うん」

「なるほど。もちろん構わないぞ！君に教えることで俺も見直す事にもなる！」

刃羅の推測に頷く緑谷。

飯田は納得して頷き、ビシィー!と腕を伸ばして快諾する。

「ありがとう!飯田君!」

「ほなら基本的には飯田坊っちゃんに教わりなはれ。男と女では体の使い方が異なるさかい。わっちは時折アドバイスか組み手の相手してあげますよって」

「十分だよ!ありがとう!」

「ケロケロ」

刃羅の言葉に緑谷が頭を下げ、梅雨が刃羅の横でニコニコと笑う。

「乱刀!俺も俺も!また組み手してくれ!」

「何その話!?!ずるい!刃羅!私も格闘術教えてよ!」

「あ!私も!」

「私もお願いしますわ!武器の取り扱いなども教えて欲しいです!」

切島がガン!と拳を合わせて声を上げると、芦戸、麗日、百も刃羅に指導してほしいと詰め寄る。

刃羅は顔を引きつかせるが、さりげなく梅雨が後ろに回り込んで逃げ道を塞ぐ。

「梅雨ちゃん!」

「ケロケロ……モテモテね。刃羅ちゃん」

梅雨は笑って、後ろから刃羅の腰に抱き着く。芦戸達も刃羅の腕や腰に抱き着いて笑いながら、刃羅に詰め寄り続ける。

それに峰田や上鳴が鼻を伸ばして、耳郎にプラグを刺されて爆音を流されて撃沈させられる。

葉隠も飛び掛かり、慌てふためくも振り解かない刃羅を轟や緑谷達は微笑んで見つめる。

いつもの日常が戻ってきた。

様々な不安を乗り越えて、【1-A】はまた前に向いていく。

#37 必殺技を編め

入寮して翌日。

1階の洗面所に歯磨きをしに集まる緑谷達。

そこに女子も集まってくる。

「おはよー!」

「おはよう!」

シヤコシヤコと歯磨きを始める一同。

そこに梅雨と百が現れる。後ろには刃羅が眠たげに立っていた。

「おはよう。皆」

「おはようございませすわ」

「ういゝ……」

「おはよう」

「おはよう!乱刀くん!しっかりしないか!」

「ああ……飯田さん。許してあげてください。私達のせいなんです」

飯田が腕をブンブン!と動かして、刃羅を叱咤する。

それを百が眉尻を下げて制止する。

飯田達が首を傾げる。

「どういうことなんだ?」

「……その……最初はそれぞれの部屋で寝ようとしたのですが……」

「ベッドに入った途端、刃羅ちゃんがまたいなくなりそうで怖くなったの。だから……」

「乱刀さんの部屋に顔を出そうとしたら、蛙吹さんとお会いしまして……」

「百ちゃんと2人で部屋を訪れたの」

「そして、そのまま……3人で……」

百と梅雨が申し訳なさそうに顔を俯かせる。

梅雨と百は刃羅がいなくなると不安で、なんと刃羅の部屋のベッドで3人で寝たのだ。

「あの部屋のベッドって……3人で寝れる大ききだったかな?」

「いいえ。だから……」

「乱刀さんに……抱き着いて……」

緑谷の疑問に顔を赤くして俯く百。

それを聞いて刃羅が何故眠そうなのかを理解する一同。

「ただでさえ人が近づいたら攻撃する寝方してたのに……」

「2人に抱き着かれたら、そりゃあ寝れねえよな」

「反省してるわ……」

「反省してます……」

緑谷と轟に言葉に肩を落とす百と梅雨。

気持ちも分かるので責めるのもどうかと思った飯田達。

そこに芦戸が思いついたように声を上げる。

「あー! だったらさーヤオモモのベッドで寝れば? ヤオモモのベッドって大きかったよね?」

「それだ!」

「余計なことを言うでないわ」

芦戸と切島の言葉に顔を顰めて刃羅が抗議する。

「嫌なん? 刃羅ちゃん」

「我はまず横になって寝ること自体耐えられんのだ。林間合宿だつてギリギリだったのに、抱き着かれて寝れるものか」

「え? 林間合宿の時、刃羅つて布団で寝てなかった?」

麗日が首を傾げると、刃羅は顔を顰めたまま吐き捨てるように話す。

それに芦戸がさらに首を傾げる。

「三奈ちゃん。あれは演技よ。刃羅ちゃんはその後、部屋の隅でしゃがんだ状態で寝てたわ」

「ええ!? 本当ですか!？」

「夜中に目が覚めた時に見たの。でも、あの時も刃羅ちゃん起きてたのよね? 私を布団に戻してくれたの、刃羅ちゃんなんですよ?」

「ふわあく……そだよお……人が動いたあ気配がするとお目が覚めちゃうからねえ」

刃羅と梅雨の言葉に目を見開く百達。

刃羅は女子全員が寝静まった後に布団を出て、女子の誰かが起きる

直前に布団の上に戻っていたのだ。

それでも2時間は寝れていたのですが、まだ寝た気がしていたが、今回はずっと誰かに触られているので全く寝付けなかったのだ。

むしろ耐えていたことを褒めて欲しいくらいだった。

「梅雨ちゃんくん達の気持ちも分かるが、流星に活動に支障をきたすのは問題だぞ！」

「申し訳ありませんわ……」

「反省するわ」

飯田の言葉に項垂れる2人。

その後、歯磨きをして配膳されたランチラツシユの朝食を食べる刃羅達。

「毎食ランチラツシユのご飯って贅沢だよな」

「しかも選択出来るんだもんな」

「んゆ〜……」

「刃羅ちゃん。食事は目を開けて頂戴」

その後、着替えて学校に向かう一同。

今までと違い、歩いて数分の距離なので余裕をもって登校する。

「新鮮だな！皆で登校するの」

「だな。ってゆーか、今日から何するんだらうな？」

「仮免に向けてって言ってもなあ」

瀬呂、切島、砂藤が首を捻りながら教室に入る。

刃羅達も教室に入り、席に座る。

そして時間になると相澤が入ってきた。

「全員揃ってるな。さて、以前話した通り、まずは仮免取得が当面の目標だ」

「はいー」

「ヒーロー免許って言うのは人命に直接係わる責任重大な資格だ。当然取得のための試験はとても厳しい。仮免と言えどその合格率は例年5割を切る」

「仮免でそんなきついのかよ……!?!」

相澤の言葉に峰田が慄く。

他の者達もゴクリと唾を飲む。

「そこで今日から君らには1人最低でも2つ……」

その時、ガラリと教室のドアが開く。

そこにミッドナイト、エクトプラズム、セメントスが立っていた。

「必殺技を作ってもらおう!!」

『学校っぽくて、それでいてヒーローっぽいの来たああああ!!』

ミッドナイト達が前に並ぶ。

「必殺!コレ スナワチ必勝ノ型・技ノコトナリ!」

「その身に染みつかせた技・型は他の追隨を許さない。戦闘とはいかに自分の得意を押し付けるか!」

「技は己を象徴する!今日日、必殺技を持たないプロヒーローなど絶滅危惧種よ!」

「詳しい話は実演を交えて合理的に行いたい。コスチュームに着替えて体育館Yに集合だ!」

『はい!』

更衣室に向かい、コスチュームに着替える梅雨達。

「あら、刃羅ちゃん。コスチュームは結局ノースリーブにホットパンツになったのね」

「なんも言ってるねえ。開ける度に変わってるってなんだよ……」

刃羅のコスチュームはノースリーブの青の和服に赤い帯、黒のホットパンツになっていた。両足の裸足は変わらなかった。赤のネックウォーマーを身に着け、白の包帯で髪を縛る。

「まあ、ええか」

「いいの!?!」

「事実、本気になったら破れるしな」

スパイラルカッターを発動すると、結局ホットパンツになるし半袖になる。

「何かしら武器でも頼むべか」

「身軽になったよね」

「鞭とかだったら没収されないのである」

着替えを終えて体育館に向かう女性陣。

「それにしても必殺技かあ！」

「どんなのがいいかな？」

「葉隠って必殺技なんてどうするの？」

「う〜ん……裸！」

「すでにね」

芦戸達は必殺技で盛り上がる。

その後ろを刃羅、梅雨、百が歩いている。

「刃羅ちゃんはどなの？必殺技」

「どうもこうも我は武器がすでに必殺技だ。貴様らに見せた【荒刃刃鬼】とて必殺技と呼べるだろうさ」

「確かに……」

「轟の炎や氷、瀬呂のテープだって、それぞれのもんが必殺技と言えんべ。ようは困ったときに頼れる使い方ってことだべさ」

刃羅の言葉に納得するように頷く百。

あーだこーだと話をしながら、体育館γに集まるA組一同。

「さて、ここが体育館γ。通称トレーニングの台所ランド。略してTDL」

『それはだめじゃね？』

「ここは俺考案の施設。生徒一人一人に合わせて地形や物を用意出来る。台所って言うのはそういうことだよ」

「なーる」

「ピクシーボブの《土流》と似たようなものでござるな」

セメントスの言葉と刃羅の例に頷く一同。

「質問をお許しください！」

飯田がシュバ！と右手を上げて発言する。

「何故仮免取得に必殺技が必要なのか、意図をお聞かせ願います!!」

「落ち着け。順を追って話すよ」

相澤が飯田を宥めて話を続ける。

「ヒーローとは事件・事故・天災・人災……あらゆるトラブルから人を救うのが仕事だ。取得試験では当然その適性を見られることになる。情報力、判断力、戦闘力、機動力、コミュニケーション能力、魅力、統

率力など多くの適性を毎年違う試験内容で試される」

「その中でも戦闘力はこれからのヒーローにとって極めて重視される項目となります。備えあれば憂いなし！技の有無は合否に大きく影響する」

相澤とミッドナイトの言葉に納得したように頷く飯田達。

「状況に左右されることなく安定行動を取れば、それは高い戦闘力を有していることになるんだよ」

「技ハ必ズシモ攻撃デアル必要ハ無イ。例エバ飯田君ノレシプロ・バースト」

「！」

「一時的ナ超速移動、ソレ自体ガ脅威デアル為、必殺技ト呼ブニ値スル。ソシテ乱刀サンガ豊巢ノ倉庫デ見セタ姿。アレモマサニ必殺技ダ」

「アレ必殺技でいいのか……！」

「なるほど……自分の中に「これさえあれば有利・勝てる」って型を作ろうって話か」

セメントス、エクトプラスムの説明と例に飯田が感動し、砂藤が訓練の意味を理解する。

「合宿での『個性』伸ばし訓練は、この必殺技を作り上げるためのプロセスだった」

「!!」

「つまりこれから後期始業までの残り十日余りの夏休みは、『個性』を伸ばしながら必殺技を生み出す圧縮訓練となる!!」

相澤の言葉と同時にセメントスが地面を盛り上げ、エクトプラスムが分身を生み出す。

それに飯田達が気合を入れる。

「尚、『個性』の伸びや技の性質に合わせて、コスチュームの改良も並行して考えていくように。Plus Ultraの精神で乗り越えろ。行けるな？」

『はっ!!』

そして訓練が開始した。

生徒1人にエクトプラズム1人が指導役として付く。

刃羅は腕を組んで、他の者達の訓練を眺めていた。

「わっちは『個性』伸ばしに専念しますよって。指導はいりまへん」
「アレダケデイイノカ？」

「他にもあるのです。でも、今やることと言えば【荒刃刃鬼】の刃鱗の硬度を上げるのと武器同時展開の数を増やすくらいなのです」

刃羅は既に必殺技と呼べるものは完成している。後はそれをさらに高めていくだけ。

『個性』の性質や使い方を熟知している刃羅は、今更指導される必要性を感じていなかった。

「とりあえず、全身展開しますので攻撃してくださいな。わたくしはそれに耐えて硬度を高めますわ」

「……イイダロウ」

ギャリン！と【荒刃刃鬼】を発動する刃羅。

そこにエクトプラズムが蹴りを放ち、刃羅はそれを踏ん張って受け止める。数回蹴りを浴びると、エクトプラズムが消滅する。

「……なるほど。義足が碎けるだけでも分身は消えるということか。これでは訓練にならない。壁をサンドバックにするでしょう」

ガン！ギャン！ズガン！と壁を殴る蹴るを続ける刃羅。扱られるように壁が削れていき、崩れる前にセメントスが補強するを繰り返す。

その様子を相澤達は見上げていた。

「流石に自身の鍛え方は理解しているわね」

「こういう訓練になると指導するにも限界がありますね。心構えを教えるわけにもいかない」

「体術に関してもすでにプロ並みだものねえ。やつぱり合宿同様、誰かの組み手や指導させて交流を深めることを重視すべきかしら？」

「そうですね……」

相澤達は悩んだ結果、刃羅に林間合宿同様他の者にアドバイスや組み手をさせることにした。

刃羅はうんざりという顔をしながら緑谷に近づいて行く。

緑谷は筋トレをしていた。

「あ……乱刀さん」

『アドバイスして回れ』だそうだ。だから蹴りでも見てやる」

「ありがとう！助かるよ！」

刃羅は緑谷に蹴りを指導することにした。

「それでえ蹴りはあまりいい使ってこなかったんだよねえ」

「うん。オールマイトが腕を使っているイメージが強すぎて……」

「まあおう」

あの部屋から緑谷のオールマイトへの憧れは異常であると理解はしている。後継者的な扱いもされていることも知っているので、仕方がないと刃羅は思う。

「で、貴様に蹴りを教える前に、その意識改革せねばならんな」

「え？」

「オールマイトとは違い、お前は速さもパワーも足りん。オールマイトへの憧れがお前への足枷になっている」

「!!」

刃羅の言葉に緑谷は顔を俯かせる。

「職場体験で指導してくれたヒーローからも同じこと言われたよ」

「やろうな。特にお前は攻撃Ⅱ必殺技のイメージがデカいわ。あれはオールマイトやからこそ出来ることや。今のお前ではそこまでに達してへん」

「……うん」

「さらに君の場合は防御が優れているわけではないのだよ。だからこそ、下手な大振りの攻撃は一気に形勢が傾く場合があるのだよ」

「……確かに」

「後お腕はあ使えないわけじゃないよねえ？」

「うん。無理をしなければ」

刃羅の言葉に頷く緑谷。

「ならばお主がすべきなのは蹴りの必殺技と、それに繋げるコンビネーション攻撃を考えることだな」

「コンビネーション……」

「例えばボクシングのジャブでござる。相手の体勢を崩して、必殺技を当てやすくする動きでござるな」

「……なるほど」

「ユーのアームパワーを牽制にユーズし、フィニッシュにキックをユーズするということデース！」

刃羅の言葉に緑谷はイメージを固めていく。

そして、刃羅が蹴りの手本を見せ、緑谷は一挙動ずつ確かめていく。「蹴りが拳と最も違うポイントは、攻撃時に軸足のみで体を支えるということですわ。つまり下手な攻撃は相手に逆転の機会を与えてしまふということ。拳と違い、細かな動作は出来ませんから」

「……確かに」

「そして力の乗せ方も重要なのである。腰、股関節、膝の力を掛けるタイミングを間違うと、負荷が恐ろしくかかるのである」

刃羅の説明に頷きながら、蹴りを振るう緑谷。

その後も素振りを続けていく。

「だから軸足からだつて言つてんだろゴラア!!」

「は、はい!」

「膝はインパクトの直前!!伸ばし切ると痛めるよ!!タイミング!!」

「くっ……!」

「振り回されるでない!!腹筋と背筋を使わぬか!!肩や腕も使え!!」

「はい!」

刃羅の怒号が体育館に響く。

それに他のクラスメイトも注目する。

「スパルタだなく。乱刀」

「でも、実際あいつの動きスゲエしな」

「いいなく。私も教えてほしい」

「けっ!」

切島、瀬呂が休憩がてら眺め、芦戸も羨まし気に声を上げる。

爆豪は緑谷達を見て、吐き捨てるようにエクトプラズムに向かい合う。

緑谷は左右交互に蹴りの素振りを続ける。

「ハア……ハア……ハア……」

「ここからが本番なのです。力めなくなってきたときに、どう力を伝えるかが重要なのです。それを覚えるのです」
疲れてきた緑谷に刃羅が声を掛ける。

そこにオールマイトが顔を出した。

「蹴りに切り替えたんだね」

「あ！オールマイト！」

「足止めんなゴラア!!髪の毛刈つぞお!!」

「ごめんなさい!?!」

「……スパルタのようだね」

「武術の心得がないのだから当然であります。あと数日で必殺技に仕上げたいなら『死あるのみ』の精神であります！」

「そこまではいなくなっていくかな?！」

刃羅の言葉にオールマイトも慄く。

しかし刃羅からすれば実用的にまで高めるならば、そのくらいの気持ちでないと厳しいと思っている。

その後も素振りを続ける緑谷。

オールマイトは他の生徒へアドバイスすると離れていった。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

汗だくで素振りを続ける緑谷。

最低限の形にはなってきたように思えた刃羅。

「一回休憩や」

「ハア！」

ドサツと尻餅をついて座り込む緑谷。

刃羅はタオルと水を緑谷に放り投げる。

「ありがとう……ハア……ハア……ハア……」

「まあ、形にはなりつつあるが、まだまだじやの」

「うん……」

「でもとてもじゃないけど必殺技にするにはくまだ荒いかな」

その防御性がないコスチュームも考えるべきだと思おうよ」

「やっぱりそうだよね……」

「少なくとも脚を庇う何かが必要いわね。出来れば全ての蹴りをカバー出来るタイプ」

「全ての蹴りを？」

緑谷の言葉に頷く刃羅。

「今、やらせてるのはミドルキックだべ。けんど蹴りにはローキック、ハイキック、後ろ回し蹴りに押し蹴り、かかと落としの類もあるべ」「そっか……」

そりやそうだと思う緑谷。まだまだ身に着ける技は控えているのだ。

教わったことを反芻することに頭が一杯だったので、抜け落ちていた。

緑谷のコスチュームは手足を防護する類が少ないと思っっている刃羅は、ここを加えるだけでも十分武器になると思っていた。

「とりあえず、そこらへんをメインに改良でもして来い」

「そうだね。ありがとう！ごめんね。乱刀さんの時間を使わせちゃって」

「かまいまへんえ。わっちはある程度技は完成しとりますよって」

「あの鎧武者見たいな感じの奴だよな？他にもあるの？」

緑谷の言葉にジト目を向ける刃羅。

「離島でえん見せたでしょん」

「え？」

目を見開く緑谷。

それのため息を吐いて、前に出る刃羅。

そして両腕をロングソードに変え、体を捻るとその場で独楽のように高速で回転する。

「!!」

緑谷は更に目を見開き、他のクラスメイトや相澤達も目を見開く。刃羅は傾いたかと思うと、ギヤリギヤリ！と地面を削りながらスピードを上げて近くの壁に突撃する。

壁を削りながら、壁に沿って進み、再び緑谷の前まで移動して止まる。

そして少し飛び上がった体を開いて回転を止めて下り立つ。

「今のがもう一つの妾の技。【嵐の刃】ぞ。スパイラルカッターにて回転し、斬り刻むのじゃ」

「……凄い」

今の刃羅の技に相澤達も唸り声を上げる。

「あの時は竜巻であまり注意していなかったが……」

「中々対処が難しいわね。特に近接系の『個性』や戦闘スタイルでは手も足も出ないわよ?」

「遠距離ならば、もう一つの方を使えばいい…か。A組であれを止められるのがはたして何人いるか……」

「確かにね」

軸を狙おうにもスパイラルカッターだから下手な攻撃は斬られるだけ。

大質量の遠距離攻撃しか止める手段が中々思いつかない。

「すっげえ……!」

「本当に仕上げてんなあ」

「けっ!」

上鳴と砂藤が感心していると、爆豪がまた吐き捨てる。

その後、緑谷は1人で素振りを続け、刃羅は百の元に行った。

「武器の扱いアルか?」

「はい。それに合わせた体術も教えてほしいのです」

「なんの武器かによる!」

「今考えているのは剣と槍ですわ」

百の言葉に頷いた刃羅は、剣を作らせて構えさせる。

それを見た瞬間、刃羅は目を鋭くして、構える。

「俺っちをヴィランと思ってかかってこいや」

「え!?で、ですが……!」

「こっちから行くでえ!!」

「っ!」

飛び掛かってくる刃羅に、百は顔を強張らせながらも剣を突き出す。

狙いは刃羅の左腕だというのが丸わかりだった。

刃羅は左脚で剣を握る手を蹴り上げる。百は剣を手放してしまう。

「あ!？」

百は剣に目を向けてしまう。

その隙に刃羅は百に掴みかかり、押し倒す。さらに落ちてきた剣を掴み取り、百の首元に添える。

「!？」

「斬りつけちまうのを怖がってんのが、バレバレだべ。はつきり言っておめえらよりヴィランの方が、この手の武器の扱えは上の可能性が高けえべ。そげな奴相手に怖がってたら、奪ってくれって言ってるようなもんだべさ」

「っ!!」

刃羅の言葉に目を見開いて固まる百。

刃羅が上から退き、立ち上がる百に対して、刃羅は剣を大道芸のように振り回す。

「武器は目で見るものではない。そして殺すことを怖がるならまだしも、斬りつけることを怖がるならば本末転倒だ」

「……はい」

「武器の扱いを学ぶ際に重要なのは、殺さぬ方法ではないのじゃ。どうなったら命を奪うのかを知る事じゃ。それが分かれば、自ずと殺さぬ振るい方が分かるのでう」

「……」

「これだったらあまだ棍棒とかの方があいいと思うよお?」

「分かりましたわ」

「じゃく棍棒での体術にく絞ろうか。せつかくだからく戦いながら棍棒を作るところからく始めよ」

「はい!」

刃羅が飛び掛かると、百は飛び下がりながら右腕から棍棒を創造する。

しかし構えた瞬間、刃羅に棍棒を蹴り飛ばされる。殴りかかれた百は盾を生み出してガードする。そして、後ろに下がりながら再び創造

しようとするが、刃羅がすぐに距離を詰めて来て、ガードに専念せざるを得なくなる。

「くっ！」

「創造が遅い！必殺技はどうした!？」

「こういう時に！」

「そう！こういう時に輝くのが必殺技なのだよ！」

刃羅が叫んだ瞬間、百の二の腕からマトリョーシカが飛び出て地面に落ちていく。

訝しげにそれを見つめる刃羅。

コン！と地面に落ちた瞬間、マトリョーシカの中から筒が現れる。

「!？」

カツ！と閃光が弾ける。

「あつしの十八番かよい!？」

「やあー！」

「っ!？ぐう！」

目をつぶされた刃羅は顔を顰めるが、百の声にとつさに頭を両腕で庇う。腕の上に衝撃が走り、刃羅は地面を蹴って飛び下がる。

ゆっくりと目を開けると、ぼやける視界に棍棒を構える百の姿が見えた。

「厄介ねえん。その何でも作れる体あん」

百の恐ろしいところは両腕を塞いでも、腹や脚からも物を作り出せることにある。

刃羅は再び飛び掛かる。

百が棍棒で突いてくる。それを横に躲し、詰め寄ろうとする刃羅。

「くっ！」

「ここで横に薙ぐのです！」

「はい！」

言われたとおりに棍棒を横に薙いで、刃羅に叩きつけようとする百。

脇腹で受け止めた刃羅は、更に前に出ようとする。

「そこで横に動け！棍棒を背中に回すように！」

百は棍棒で抑えつけたまま横に動く。棍棒は刃羅の体を滑る様に背中に回っていく。

「ここですらに横に薙ぐんや！」

「はいー！」

「そうすると相手は前に押されてバランスを崩すわ！そこで棍棒を引き寄せながら持ち替えて、叩く！」

百は握っていた部分が穂先に来るように持ち帰る。そうすると自然と振り上げる形になり、言われるがままにそれを振り下ろして刃羅の背中を叩く。

刃羅は背中に刃鱗を展開してガードする。

そしてクルリと百に向き直る。

「今のを素早くやるだけで、チャンスは増えるじやろうな」

「はいー！」

「今のように創造と棍棒を組み合わせる戦い方を組み上げていくのがいいのである」

「なるほど」

「少しずつ動きを増やしていくのだよ。今は創造速度を速めることに集中すべきと愚考するのだよ」

「はいー！」

百はしっかりと頷く。

その後は『個性』伸ばしに集中し、創造速度を速めることに力を入れる。

刃羅は再び緑谷のところに戻り、蹴りの指導に戻る。

そうして時間が過ぎ、初日の訓練は終了となった。

寮に戻って、のんびりしようと思った刃羅。

「悪い。少しいいか？」

「あん？」

そこに轟が声を掛けてきた。

「なんじゃ？」

「今の俺とならお前はどっち戦う？」

「……」

「体育祭では炎を使わなかった。くだらねえことに拘って。それ以降、お前とは戦ってねえ。だから、聞きてえ」

轟は真剣な目で刃羅を見つめる。

その目を見て、刃羅は相澤に声を掛ける。

「轟君と試合したい！」

「……やりすぎんなよ」

「センキュー！」

「……乱刀」

「かかってくるがいい。轟」

「……分かった」

セメントスに地面を戻してもらって、向き合う刃羅と轟。

その試合を見ようと全員が残っていた。

「体育祭ではお互い不完全燃焼だったもんな」

「少なくとも轟君の氷は攻略されてる……！」

「ケロ。あの炎を刃羅ちゃんがどうやって攻略するかね」

見ている緑谷達の方が緊張で息を飲む。

ミッドナイトが体育祭と同様、審判役を担う。

「いい？派手にやり過ぎないこと」

「分かってんよ」

「ああ」

「じゃあ……始め！」

ミッドナイトの合図と共に刃羅が轟に向かって走り出す。

轟はさっそくとばかりに炎を放つ。

「いきなりかよ!?!」

「どうする……！」

「刃羅ちゃん……！」

刃羅に炎が当たる直前、

「テンペスタ・ラーマ」

ギューン！と両腕を広げながら高速回転する刃羅。

炎に飲み込まれたと思った直後、炎を巻き上げながら轟に迫る独楽の姿があった。

「!!」

轟や緑谷達は目を見開く。

「なにあれ!?!」

「炎が効いてねえのか!?!」

「……高速回転で風を生み出して炎を振り払ってる?」

「確かにあれだけの回転です!簡単に燃え上がることはありませんわ!」

「炎も攻略かよ!?!」

「ナンテ力技ヲ……!」

緑谷と百の推測に慄く一同。

「どうされるのです?妾はこの程度では止まりませぬよ」

「くっ!」

炎を止めて、氷結を放つ轟。

その瞬間、回転を止めて飛び上がる刃羅。その体は刃の鱗で覆われていた。

「荒刃刃鬼!余の進軍を止めるには貧弱な氷であるぞ!!下民!!」

氷を殴り砕き、斬り砕きながら迫る刃羅に、轟は焦りの表情を浮かべる。

左腕をロングソード、両前腕から鎌を生やして両腕を振るい、両脚も刃鱗で覆われているため氷を踏み、蹴り碎いて歩を進めてくる。

「くっそ……!」

「どうした!?!この程度かあ!」

轟は下がりながら氷結を放つが、全く脚を止められなかった。

「あの轟くんの攻撃が……!」

「まさしく鬼神の如し……!」

「……っ!」

飯田、常闇が刃羅の猛攻に慄き、爆豪は歯軋りをして刃羅を睨む。

そして、荒刃刃鬼を解除した刃羅は飛び上がり、氷の柱に脚を掛けて上半身を捻る。直後、両手を合わせて突き出し、回転しながら飛び出す。合わせた両手をクレイモアに変え、両脚にスパイラルカッターを生やす。

【螺旋の投槍】
エリセ・ランサ

「!!」

回転しながら、氷を砕き貫いて飛んできた刃羅を、轟はしやがんで躲す。

躲された刃羅は両手足を戻して、体を開きながら回転を止めて着地する。

「まだやるかえ?」

「……いや。ここまででいい」

「ふう……疲れたのう」

互いに構えを解いた2人を見て、はあく息を吐き出して緊張を解く緑谷達。

「……完敗だな」

「まだステインに言われた部分が直ってないからだ」

「……大雑把…か」

「それに範囲は変わっても温度と堅さは変わらねえ。だから怖くねえんだ」

「温度と堅さ……」

「もつと圧縮出来へんの? 氷の密度や炎の温度も上がるんちゃうか?」

「……そうだな。すまねえ。参考になった」

「構わないわよおん」

轟と刃羅はクラスメイトの元に戻る。

「凄かったわ。刃羅ちゃん」

「熱かった」

「まさか、あんな突破をするなんて……」

「だから必殺技って言えるのだよ」

「なるほどな!」

刃羅の言葉に飯田達は改めて必殺技の重要性を理解する。

飯田達は改めて必殺技の構想に力を入れようと考える。

「じゃ、今日はここまでだ。開発工房に用がない奴はさっさと帰れ」

『はい!ありがとうございます!』

こうして、新たな目標に向けてA組は走り始めたのであった。

新・刃格！

【荒刃刃鬼】：あらはばき全身に刃の鱗を展開し、両前腕から鎌、両腕または両手をロングソードやナイフに変える同時展開型。一人称は「余」。現在は2種展開が限界で、両腕での変化しか出来ない。

【嵐の刃】：テンベスタ・ラーマ両脚にスパイラルカッターを展開して独楽のように高速回転し、両腕をロングソードなどに変えて斬りかかる。一人称は「妾」。回転中の移動に集中するため、全身に刃の鱗の展開まで出来ない。ちなみに逆立ちしても可能。これの応用が【螺旋の投槍】エリセ・ランサである。パイルバンカーをイメージして頂ければ。

#38 ごめんなさい!

訓練を終えた刃羅は、ふと武器が欲しかったことを思い出す。

「あ。忘れとった」

「刃羅ちゃん?」

「開発工房行くのです。武器を依頼するのです」

「そういえば言っていましたわね」

「私達も一緒に行くわ。聞きたいこと出来るかもしれないし」

「イエア!」

百と梅雨の3人で工房に向かう刃羅。

すると、飯田と麗日が歩いているのが見えた。

「飯田さん!麗日さん!」

「あ!百ちゃん!2人も!」

「飯田ちゃん達も工房かしら?」

「うむ!コスチューム改良を依頼したいのでな!」

右腕でヘルメットを持っているので、カクカク!と左腕を振りながら頷く飯田。

飯田は『個性』のデメリットを軽減したいとこのことでラジエーターの改良を、麗日は酔いの軽減を目的とのことだ。

蹴りについて飯田が刃羅に相談し、それにめんどくさげに答える刃羅。

その横で麗日達が談笑する。

校舎1階の開発工房に近づくと、扉の前に緑谷がいた。

「あれ!?デク君だ!」

「廊下を走るな!」

緑谷に気づいた麗日がツツテケテーと走り出す。それに飯田が注意を上げるが、無視される。

緑谷麗日達に気づく。

「デク君もコス改良!」

「あ、麗日さ……!?!」

緑谷が少し扉を開けた瞬間、

ドツガアアアアン!!

扉が吹っ飛び、緑谷は笑顔で爆発に飲み込まれていった。それを刃羅達は唾然と見つめるしか出来なかった。

「クレイジーなファクトリーなのデースか?」

「そうみたいね」

「み、緑谷さん!」

「デク君!」

百、麗日が駆け寄り、飯田が早歩きで進む。

刃羅と梅雨はその後ろを歩いてついで行く。

「フフフ。いてて……」

「ゲホツゲホツ!お前なアア……思いついたもの何でもかんでも組むんじゃないよ……!」

煙の中で声が聞こえ、工房の中から咳込みながらパワーローダーが出てくる。

パワーローダーは煙に向けて話しかける。

「フフフフ。失敗は発明の母ですよ。パワーローダー先生。かのトーマス・エジソンがおっしゃってます。作ったものが計画通りに機能しないからと言って、それが無駄とは限らな……」

「今、そういう話じゃないんだよオオ!一度でいいから話を聞きなさい……!」

煙の中で動く影。

近くにいた麗日、百は目を見開いて慄く。

倒れている緑谷の上に、押し倒すように1人の女子が押し掛かっていた。

「発目!!」

「あれ!?あなたはいつぞやの!」

発目と呼ばれた女性は緑谷を見ながら、胸を緑谷に押し付けている。

それに気づいた緑谷は顔を真っ赤にして震えている。

麗日も何故か目を見開いて衝撃を受けていた。

「とりあえず、緑谷さんの上から退いてください!」

「はいー!!ごめんなさい!」

百の言葉にサツ!と離れて立ち上がる発目。

緑谷は顔を真っ赤にしたまま、胸を押さえて動悸に耐えながら起き上がる。

「どうやら怪我などはないようだ。」

「突然の爆発、失礼しました!!お久しぶりですね!ヒーロー科の……えーっと……全員お名前忘れちゃった!!」

「全く反省しとらんのか」

「不思議な子みたいね」

「まあ、体育祭でも自分本位のようにでしたが……」

発目の言葉に呆れた目を向ける刃羅、梅雨、百。

緑谷は顔を真っ赤にしたまま発目から目を背け、どもりながら名乗ろうとしていた。そんな緑谷を麗日は絶望の表情で見つめ、飯田が手をブンブンと手を振りながら鼻息荒く発目に詰め寄る。

「飯田天哉だ!体育祭トーナメントにて、君が広告塔に利用した男だ!!」

「そやったっけ?」

「私も覚えてないわ」

「飯田さんと発目さんの試合の時、お2人は上鳴さんとの試合の事で話してましたから……」

「あの時か」

「ケロ」

飯田の言葉に全く心当たりがない刃羅と梅雨。

首を傾げている2人に百が苦笑しながら説明する。その内容に納得した刃羅達は、改めて発目を見る。

「なるほど!!では私はベイビーの開発で忙しいので!」

発目はギョルン!と反転して、工房に戻っていく。

緑谷は慌てて発目に声を掛ける。

「あ、あの!コスチューム改良の件でパワーローダー先生に相談があるんだけど……!」

「コスチューム改良!?興味あります!!」

緑谷の言葉に再びギョルン！と反転し、シユン！と緑谷に詰め寄る
発目。

詰め寄ってきた発目に、緑谷は無理矢理目を逸らす。

刃羅は「なんで、そこで声を掛けたんや？」とジト目で緑谷を見つめる。

そこにパワーローダーが顔を出して、緑谷達の中に入れる。

中は様々な器具やコンピューターが設置されている。

「わあ………秘密基地みたいだ！」

緑谷、麗日、飯田、百は工房を見渡す。

刃羅と梅雨は一度訪れているので、特に感動はない。

「じゃあ、コスチュームの説明書見せて。ケースに同封されてたものがあるでしょ。俺、ライセンス持つてるから、それを見ていじれるとこはいじるよ」

小さい改良ならば、改良の後にデザイン事務所に変更点を報告すれば手続きをしてくれる。

大きい改良ならば、申請書を作成してデザイン事務所に依頼する形となると説明を受ける。改良したコスチュームは国に審査を受けて、許可を得る必要がある、雄英と提携している事務所だと約3日で戻ってくるとのこと。

「おいらはコスチュームでなくて、武器をお願いしたいべ」

「……乱刀さんは以前違法改造の前科があったよね？」

「だから鞭とか刃物じゃない武器を所望するのだよ」

「なるほどね」

刃羅の言葉にパワーローダーが頷く。

するとそこに発目が顔を寄せてきた。

「それならば、これはどうでしょう!？」

「ほえ?」

「暇つぶしのベイビー! 『ウィップ・ワイヤー』!」

「暇つぶしかえ?!」

発目が不穏な言葉と共に取り出したのは、赤い腕輪のような機械。

発目は問答無用で刃羅の手首に装着する。

「手首の動きで太めのワイヤーを発射して、鞭のように振るうことが出来るハイテクっ子です！第41子です！」

「……うん」

「いい感じではないでしょうか？」

「ケロ」

思ったより普通だったので、リアクションに困る刃羅。

百と梅雨も問題なさそうに見えた。

手首を動かすとバシユツ！と3mmほどの太さのワイヤーが飛び出す。途中で止まり、ワイヤーを掴むことで鞭のように振るうことができる。

「マガクモみてえだな」

「マガクモって……」

「あの糸出してた奴じやの」

「ああ……」

「フフフフ！それだけではないのですよ!!このスイッチを押すとですねえ！」

発目が笑顔で腕輪の横についているボタンを示し、それを刃羅が押すと、

「ビババババババババ!」

「ケロ!」

「きゃあ!」

突如電流が全身に走り、刃羅が悲鳴を上げながら痺れる。

真横にいた梅雨と百は慌てて離れて、驚きに声を上げる。

刃羅は10秒ほど痺れて、電流が止まって、ボタン！と前に倒れる。慌てて梅雨と百が近寄り、腕輪を外す。

「大丈夫ですか!」

「……な、なんでえ？」

「どうやら電導域のセッティングにミスがあつたようです!ごめんなやー」

「今の上鳴君なら使いこなせそうだな」

「充電も出来るし、相手も痺れさせるしね」

発目は腕輪を回収しながら、笑顔で謝る。

緑谷は顎に手を当てて考察しており、それに麗日も頷いている。

続いて発目が刃羅に手渡したのは、警棒のようなもの。

「……これは?」

「第28子!!『ウィップ・ステイック』です!振ったときにボタンを押すと、鞭のように伸びるのです!」

言われたとおりに振りながらボタンを押す刃羅。

ボオオン!!

「うわああああ!」

「ぴぎやああああ!」

「刃羅ちゃん!」

突然の爆発に緑谷と麗日が驚き、手元で爆発したことで痛みに叫ぶ刃羅。

梅雨が慌てて刃羅の手を確認すると、出血まではしていないかった。

「もうこの人やだー!!びえくん!!」

「でしょうね」

「いい加減にしなよ!発目!」

「ごめんなさい!」

パワーローダーの鶴の一声で、刃羅の武器はデザイン会社へ申請することで片が付いた。

続いて緑谷が腕のサポーターと足の装備を依頼する。

「腕の靱帯への軽減だね。つまり腕もある程度使うことは考えてるんだね?」

「はい。でも、不安が大きいので脚を主体に切り替えていこうと思つて……」

緑谷が説明していると、突如発目が緑谷の体をヒタヒタと触り始める。

それに緑谷は顔を真っ赤にして体を硬直させる。

「はいはい。なるほど」

「は……発目さん?何を?」

「フフフ。体に触れてるんですよ」

麗日が何やら顔を青くしながら発目に尋ねる。

発目は意に介さずに体に障り続ける。

刃羅、梅雨、百は壁際に下がって黙って見守っている。不用意に危険には近づかない。これ大事。

「はいはい、見た目よりがっしりしてますねえ。フフフ、いいでしょう。そんなあなたには……」

シュバー！と緑谷の体に何かを装着させる発目。

それは全身を覆う機械のスーツだった。

「とっておきのベイビー!! 『パワード・スーツ』!」

「あの……」

「筋肉の収縮を感知して動きを補助するハイテクっ子です!! 第49子です!! フフフフ!!」

「爆発かな!? 電流かな!?!」

「どっちもありそうですわね」

「あの規模での爆発は怖いわ」

刃羅達が後ろで物騒な予想をしている。

そしてスイッチが入られる。

「あ、凄い……勝手に動く……!」

緑谷が発目に顔を向ける動作に反応して、腰が回り始める。

「あれ……待って……止まんない……まっ……いだい!」

しかしドンドンと腰が回り続けて行くスーツ。緑谷が止めようとするが、全く止まらない。

「いだだだだ腰がいだだだだ!!」

「デククーン!?!」

「緑谷さーん!?!」

「まさかのねじりじゃと!?!」

「STOP! どうやら可動域のプログラミングをミスったようです! ごめんなさい!」

全く反省していない笑顔で謝る発目。

スーツを脱いで崩れ去る緑谷。

「まさか手足のサポート頼んだのに、まさか胴をねじ切られそうにな

るとは……」

「これはこれで捕獲アイテムとして使えそうですね！」

「前向きでござるな」

相手の心配よりも、使い道を考える発目に呆れる刃羅。

その隙に飯田がパワーローダーにコソツツと声を掛ける。

「その……脚部の冷却機を強化してほしいのですが……」

「フム……」

「そういうことならー」

ヌウつと飯田の背中に這い寄る発目。

そして飯田が逃げる隙も与えずに、腕にアイテムを装着させる。

「このベイビー!!発熱を極限にまで抑えたスーパークーラー電動ブースターです!第36子です!どっ可愛いでしょう!?!」

「いや、ブースターはいらないんだ!発目くん!しかも何故腕に……!」

「ブースターオン」

「オイ!?!」

飯田の抗議をやはり無視してアイテムを起動する発目。

それを「外部がスイッチ入れるのであるか!?!」と内心ツツコむ刃羅。

直後、ブースターを下に向けていた飯田は真上に飛び上がり、天井に激突する。声も上げずにただ真顔で耐える飯田を、刃羅達は憐れみの目で見上げる。

「まあ……凄くはあるのだが……」

「勧めるものが悉くズレてるわね」

「そして悉く被害を出してますね」

ブースターが止められて床に降り立つ飯田は、ブースターを脱ぎ捨てて崩れ去る。

緑谷と麗日が駆け寄り、声を掛ける。

「俺の『個性』は脚なのだが!!」

「フフフ。知ってます。でもですねえ。私、思うんですよ。脚を冷やしたいなら、腕で走ればいいじゃないですか!」

「何を言っとなるんだ!君はもう!」

「何でだろうねえ？あそこまで堂々とお言われるとお間違っていない気がするう」

「本当ね」

もはや壁にもたれて座っている刃羅と梅雨。

百はハラハラして飯田に駆け寄って行っていた。

パワーローダーが発目をようやく注意して、自分の作業に戻る発目。

その後ろ姿を見て、刃羅は「ああいう奴が将来さり気なく何かしら名前を残すんだろうなあ」と思っていた。

しかし、まずは……

「下民共。貴様らの目的は何一つ果たせておらんぞ？」

「あ!？」

「その通りだ!」

「麗日さんはどこを改良したいのですか？」

「私は酔いを抑えたくて……」

「それならこれなどどうでしょう!？」

「「ええ!？」」

麗日の言葉に発目がタンクのようなものを抱えて、近寄ってくる。それに麗日達は嫌な予感しかなく、慌てて距離を取る。

4人が逃げた先には刃羅と梅雨がいた。

「ケロ!？」

「ちよ、ちよつと!？こっち来ないでよ!？」

「そんなこと言われたって!？」

「は、発目さん!何なん、それ!？」

「フフフ。これはですわねえ。こうすると……」

「煙が出てますわ!？」

「発目さん!？」

「ま、待ちたまえ!？」

タンクのようなもののスイッチを入れた途端、黒い煙が噴き出す。

それに慌てる刃羅達だが、発目はにじり寄ってくる。

そして案の定爆発する。

ボオオン!!

『ぴぎやああああ?!』

再び爆発に巻き込まれる刃羅達。

学内なので『個性』を使ってもいいのだが、頭から抜け落ちている刃羅と百は防御もせずに爆発を浴びる。

「ごめんなさい!」

「……君の謝罪は信じられないのだよ」

「ごめんなさい!」

「こういう子なのね」

ボロボロになった刃羅、梅雨、百は緑谷達を生贄に捧げて、そそくさと工房から逃げ出す。

その後、シャワーを浴びて煤を落とし、寮に戻る。

「酷い目にあつたであります」

「悪い子じゃないのでしょうか」

「失敗を前向けに受け入れ過ぎですわね」

寮に入ると、芦戸達がソファでダラけていた。

「あ。おかえり」

「コスチューム?」

「武器を頼んでたのです」

「私達は付き添いよ」

「随分長かったね?」

「緑谷さん達もいましたので。それにサポート科の発目さんの騒動にも巻き込まれました」

「発目?」

百と梅雨は起こったことを説明する。

話を聞いた芦戸達は、顔を引きつかせる。

「そんな子いるんだ……」

「うちもコスチューム改良したかったんだけどなあ……」

「才能はあると思うわよ」

「ただ失敗したときが悲惨というだけじゃ」

「パワーローダー先生を通せば、大丈夫だと思いますわ」

全く安心は出来そうにない言葉に苦笑するしかない芦戸達。

刃羅達は私服に着替えて、1階に降りる。

百が紅茶を用意して、全員に配る。

「おいしいわ。百ちゃん」

「良かったですわ!」

「砂藤のお菓子ないの?」

「砂藤君は部屋だよ」

訓練の話や他愛無い話で盛り上がっていると、緑谷達が疲れた顔で戻ってきた。

「おかえり〜」

「ただいま……」

「無事に終わったの?」

「あはは……なんとか……」

「お紅茶をご用意しますわ。テーブルにどうぞ」

「ありがとう!八百万くん!それにしても乱刀くん!やはり君の服装は刺激的すぎるぞ!」

刃羅はショート丈のタンクトップにホットパンツ姿だった。へそ出して、もはや下着姿と言っても過言ではない。

刃羅は顔を顰めて、飯田を見る。

「裸じゃねえんだ。文句言うなよ」

「しかしだな!」

「まあまあ、飯田。女子ってこういうもんだよ。紅茶を飲んで、落ち着きなよ」

芦戸が飯田を宥めて、紅茶を勧める。

それに飯田は顔を顰めながらも、言われた通り紅茶を飲んで一息つく。

その後、夕食を食べて、風呂に入る一同。

刃羅は梅雨と百と風呂に入り、また2人にトリートメントをされる。

妙に嬉しそうな梅雨と百に、刃羅は顔を顰めながらも大人しくしていた。

そんなことをしながら風呂を出て、また共有スペースでのんびりする。

刃羅は部屋から持ってきたカップ麺を開けて、お湯を注ぐ。

「さっそくね。刃羅ちゃん」

「まあ、らしいと言えればいいですが」

梅雨と百はニコニコと刃羅の様子を見守る。

そしてソファに戻ってきて、出来上がりを待つ。

そこに同じく風呂上がりの障子、轟、砂藤、緑谷、飯田が顔を出す。

「ズズズ……ンマンマ……んふく♪」

「……乱刀ってそんな顔するんだな」

「あら。知らなかったの？砂藤ちゃん。刃羅ちゃんは麺類食べると、

こういう顔をよくしてるわよ」

幸せそうに目を細めて味わっている刃羅の表情に、砂藤、障子は僅

かに目を見開く。

それに梅雨が答え、緑谷達は昼食で一緒だったので、意外性はな

かった。

「しかし乱刀くん!!夜食は生活の乱れに繋がるぞ!」

「ズズズ……ンマンマ……何言っとなねん。ヒーローになったら規

則正しい生活の方が珍しなんで?」

「……確かにな」

「むう……!しかしだな……!」

飯田の注意に刃羅はジト目で返し、それに轟が頷く。

飯田は腕を組んで唸るが、さらに刃羅は続ける。

「ズズズ……ンマンマ……儂にとつてカップ麺を食べるのは、心を

落ち着かせるルーティンみたいなものじゃ。そういうものは大事

じゃぞ?」

「……確かにな」

「むう……!確かに平常心を保つことは重要なことか……!」

「……間違っではいけません……」

「カップ麺が食べられないときはどうするのかしら?」

「ズズズ……ンマンマ……座禅だな」

再び轟が頷き、飯田が言い包められる。

百と梅雨が理論の穴を突くが、刃羅は何ともないように正攻法を言う。

それに砂藤と障子も頷き、自分達は何がいいのかと考える。

「そう言われると俺は何がいいんだ？」

「確かに戦闘中や日常生活の中で落ち着ける手段を考えるのも、必殺技と同じくらい重要だな」

「そうだね……」

「ケロ……私は何かしら？」

「そうですねえ……」

緑谷達はそれぞれ考える。

その間にカップ麺を食べ終える刃羅。食堂に行き、空容器をゴミ箱に捨ててソファに戻ると、轟が顔を向けてくる。

「座禅ってどういう気持ちでやるんだ？」

「……おめえは常にやってる気がするべ」

「そうか？」

普段から刃羅以上に何を考えているのか分からない轟。

刃羅の言葉に障子達も内心で同意していた。最近では実は天然だということも分かってきたが。

「まあ、ええか。別に単純やで。要は五感で感じたことを思えばええだけや。他はなあんにも考えへん」

「……ムズイなあ」

「そうね」

「あまり考えないということが稀ですものね」

「僕も考えちゃうしなあ……」

「そうだな……」

砂藤が腕を組んで悩まし気に顔を顰め、梅雨や百も考え込み、緑谷と飯田も顔を顰めて、それに轟、障子も頷く。

ソファに座って刃羅は手本とばかりに、脚を組む。

「ここなら中庭がベストなんだろうがな。最初は慣れた空間でやればいい。五感が大事だから、目は半目で最初に深呼吸。後は自然に任せ

る」

スウー、フウーと2、3回深呼吸して、そこからは静かに呼吸する。背筋が伸び、ピタリと動きが止まった刃羅。突如、刃羅の気配が本当に空気のように希薄になり、緑谷達は目を見開く。

すぐ刃羅はフウーと深く息を吐いて、目を開く。

「まあ、これくらいになれば最適であるな」

「無理だろ」

「そこはあ練習あるのみかなあ。でもお上手くなればあ戦闘中でも出来るよお」

「結局そこも練習なのね」

「山とかだったら、すぐに出来るのです。でも、ここだと中庭くらいなのです」

「なるほどな」

刃羅の言葉に頷く障子。

今度は立ち上がって、深呼吸する刃羅。再び気配が希薄になった刃羅を「まるで菩薩」と思った一同。

すぐさまいつも通りに戻り、伸びをする刃羅。

「てく感じかな。一番大事なのはく呼吸かな」

「呼吸……」

「そやねえ。人間追い込まれてまうと呼吸が速おなつてまう。そこで一呼吸置けるかどうかゆうんは、戦況左右しはることもありますよつて」

刃羅の説明に納得する緑谷達。

その後、緑谷に復習とばかりに蹴りをさせて、飯田と共に指導する刃羅。

それに百や砂藤も真似をするように体を動かし、百の動きを刃羅が修正する。

しかし、

「痛い!?ら、乱刀さん!?痛い!イタタタタですわ!」

「てめえ、体ちよつと硬えんだよ。ほれ!もつと脚開けやゴラア!」
「痛いく!!」

脚を無理矢理開脚して前屈させられる百。座ってる百の後ろに刃羅が座って背中を押し、両脚で百の両脚を無理矢理広げさせる。そこに他の女子や男子達も風呂から出てきて、共有スペースに現れる。

そして百と刃羅の姿を見て、首を傾げる。

「なにしてんの？」

「蹴りの指導をしてもらったのだけど、百ちゃんの体が硬いって刃羅ちゃんが言い出したの」

「すつげえエロイんだけど。見た目が」

「峰田が風呂で良かったな」

芦戸の疑問に梅雨が答え、上鳴と瀬呂が2人の様子に鼻の下を伸ばす。

脚を開放して立ち上がる刃羅に、百は息を荒げて座り込む。

「お主はもう少し柔軟性を上げねばいかんでござる」

「わ、分かりました」

「貴官もであります！・緑谷！・靱帯や関節の負担は柔軟性も大事であります！・」

「は、はい！」

「スパルタだよね〜」

「仮免までに仕上げたいみたいだしな」

そして芦戸、麗日にも軽く指導する刃羅。

葉隠も指導しようとしたが、ホットパンツだったため脚が透明で動きが見えなかつたので無理と判断された。

芦戸はダンスをやっていたこともあり、体も柔らかく身体能力も高いので、すぐに様になっていく。麗日も職場体験での経験で、そこそこ様になっている。

「麗日君は自分を浮かせることに集中するのだったかね？」

「うん」

「では、浮いた状態で見た方がいいじゃろ。無重力だと振り回されてしまうからの」

「そうだよね」

「じゃ、ここまで！寝よ！」

「そうだな！皆！明日も訓練だぞ！」

『うーい』

飯田の号令で就寝の準備を始める一同。

齒磨きをして、部屋に戻る刃羅達。

「……今日はあん各々の部屋でえん寝るのよおん」

「……分かったわ」

「……そうですね」

悲しそうな顔をする梅雨と百だが、昨晚はそれで刃羅に負担を掛けたので大人しく引き下がる。

しかし、梅雨と百は訓練で疲れているはずなのに、刃羅が気になってしまい、全く寝付けなかった。

翌朝には眠たそうに大欠伸をする梅雨と百、そんな2人に呆れている刃羅が目撃されたのであった。

#39 俺と戦えや!

訓練開始から3日。

それぞれ方向性が定まり始めて、訓練が活気付いてきている。

刃羅は自分の訓練をしながら、人にアドバイスをするということを繰り返していた。

「今日は午後からB組がここを使う。集中しろ」

相澤の言葉に頷いて、各訓練に集中する一同。

今は刃羅も自身の訓練を行っていた。

切島同様に【荒刃刃鬼】状態で、壁を攻撃し続けることで刃鱗の硬度を高めていく。

緑谷はエクトプラズムから蹴りを教わっていた。

そして、終了時間がもうすぐというところで、刃羅に近づく影があった。

「おい……!」

「ほえ? 爆豪君?」

声を掛けてきたのは爆豪だった。

それに刃羅は訝しみ、相澤や他のクラスメイト達も注目する。

今までこの2人はいがみ合っているようで、直接ぶつかり合ったこととはない。

体育祭や戦闘訓練でも一度も戦ってはいない。

「俺と戦え!」

「……」

爆豪の宣戦布告に、刃羅が顔を鋭くする。

周囲は突然の宣戦布告に目を見開く。

爆豪は不敵に笑いながら、両手を広げて小さな爆発を起こす。

「半分野郎と戦って、俺とは戦わねえなんて言わねえよなあ……!」

「……理由を聞かせい」

刃羅はまっすぐ爆豪を見つめて、理由を尋ねる。

爆豪もまっすぐ刃羅を睨み返す。

「決まってるんだろ。どっちが強ええか決めてえからだよ!」

「……」

「半分野郎とも決着は付ける！けど、まずは半分野郎に勝ったテメエに勝ちゃあ俺がN.O. 1ってことだあ！」

「……相変わらずというか……」

「俺があ!! オールマイトの次に上に立つんだよお!!」

一瞬呆れた刃羅だが、その後の爆豪の言葉に出かけていた言葉を飲み込んで目を細める。

そして、こつちを伺っていた相澤に目を向ける。

相澤は刃羅の視線に気づいて、顔を顰める。

「セメントス講師。地面を戻してくださいますかしら？」

「……相澤先生？」

刃羅の言葉にセメントスは相澤を見る。

相澤は顔を顰めたままだが、セメントスの視線に頷く。

セメントスは地面をに手を置き、地面の盛り上がりを戻す。

轟の時同様、クラスメイト達は脇に下がって観戦する。

「しつかし、いきなりどうしたんだ？爆豪の奴」

「さあ？やっぱこの前の轟との試合なんじゃね？」

「けど、確かにある意味これがA組最強決定戦だぜ！」

「どっちもセンスの塊だもんなあ」

上鳴、瀬呂、切島、砂藤が座って前のめり気味に爆豪達を見る。

その横で轟、飯田、障子、常闇達も腕を組んで、どっちが勝つかを

考えている。

「轟の炎と氷を破ったあの技を、爆豪がどう破るか……？」

「爆豪の戦い方はヒット&アウェイ。どっちにしろ接近戦は必須だからな。あの回転技とかは、あいつにも厳しいはずだ」

「あの籠手の爆破なら可能性はあるだろうが……」

「それは乱刀くんも分かっているだろう。これは荒れそうだな……」

梅雨や百、麗日達女性陣は心配そうに刃羅を見ている。

刃羅と爆豪は向かい合って、不敵に笑い合う。

「手加減なんざすんじゃねえぞ？」

「ああん？それはあれか？爆発頭。俺っちより弱ええから気を付けて

「くださいつてえことかあ?」

「……ぶつ殺す!!」

「やってみろやあ! 斬り殺す!!」

「殺すなよ。やりすぎだと思ったら止めるぞ」

「分かってんよお!!」

「……本当に分かってんのか?」

今回は相澤が審判役をするようだ。

この2人の危険性を考えてのことだ。

「じゃあ……始め!」

開始の合図と同時に駆け出す爆豪と刃羅。

爆豪が両手を後ろに回して爆破で速度を上げる。刃羅は両腕を蛇腹剣に変えて、腕を振るう。

「なめんなあ!」

爆豪が爆破で軌道を変えて、蛇腹剣を避ける。そして蛇腹剣を爆破しようと腕を向ける。

「てめえの武器はやられたら、てめえの腕も吹っ飛ぶんだよなあ!」

「そうねえん。だからあん……そう来ることなど予想していないでも思ってたか!?! 下民!!」

「!?!」

爆豪の横から【荒刃刃鬼】を発動した刃羅が飛び掛かって来ていた。蛇腹剣は避けるにしても、打ち払うにしても、一瞬刃羅から目を逸らす。その一瞬があれば刃羅には十分だ。

両腕を戻しながら蹴りを放つ刃羅。爆豪は蛇腹剣を狙っていた手で、そのまま爆破して回避する。

しかし、刃羅も右腕をコルセルカに変えて突きを放つ。

「ちい!」

「貴様のその爆破移動は見事だが、直線的な動きであることは変わらん!! 手を差し出した方向で見極める些事、余には容易い!!」

爆豪がさらに爆破で移動しようとした先に、刃羅は左腕を薙刀に変えて進行方向を塞ぐ。

コルセルカと薙刀を振り回して、時には棒高跳びのように地面に突

き刺して爆豪に飛び迫る。近づけば蹴りで、離れようとするれば武器で牽制する刃羅に、爆豪は行動を制限されて顔を顰める。

「くっそがあー！」

そして爆豪が後ろに飛び下がった瞬間、

「ふう!!」

「!？」

刃羅は右腕も薙刀に変えて、刃鱗を解除ながら高速で回転し、独楽のように爆豪に迫る。

「それを待ってたあ!!」

「!!」

爆豪は真下に向けて爆破し、上空に飛び上がる。

そして刃羅の真上に来た瞬間、右腕の籠手のピンに指を掛ける。

「死ねやあ!!!」

ピンを引き抜き、籠手から巨大な爆発が発射される。その爆発は真下にいた刃羅に降り注ぐ。

「刃羅ちゃん!!」

「直撃だ!!」

「そうか!!上からなら面になってるから……!!」

「爆破の衝撃をモロに受ける……!!」

梅雨と飯田が叫び、緑谷と切島が爆豪の狙いに気づいて目を見開く。

相澤が動こうとしたが、

「この程度で妾の命は奪えませぬよ」

『!!』

「妾がいつ腕は広げていないといけななどと言いましたか?」

刃羅は未だに回転を続けていた。ただし、先ほどまでとは違い、縦長で錐のようになっていた。

刃羅は回転を止めて、地面に立ち、空中の爆豪を見上げる。両腕はロングソードになっている。

「両腕を広げていたのは、刃の傾きで移動を行うためだ。移動を捨てれば、これくらいは出来る。轟の戦いでも見せたはずだが、飛んでた

から忘れてたか？」

「ちいー！」

「まあ、狙いは良かったぞ？しかし、どうした？随分と消極的ではないか。テンペスタ・ラーマを使うまで耐えるなど」

「ああん!？」

刃羅の言葉に声を荒げる爆豪。

しかし、刃羅の言葉を相澤や緑谷、切島も内心同意していた。

「なあ、緑谷。爆豪、なんか調子悪いよな？」

「うん……いつもの勢いがいい……。正直、いつものかつちゃんの攻めなら、乱刀さんはもっと攻め辛いはずなのに」

「そうなのか？」

「乱刀さんは全身に刃を展開出来るけど、切島君みたいに硬化してるわけじゃない。刃の鎧を身に着けてるだけ。だから爆破は多少防げても完全じゃないし、爆破の衝撃は防げないはずなんだ」

緑谷の言葉に盲点だとばかりに目を見開く切島達。

「わざわざあの回転技を待つ必要はないはずなんだ。むしろ、あの技を使わせないように速攻で行くべきだった。それをなんで……」

緑谷は爆豪の意図が分からずに、心配そうに爆豪を見つめる。

しかし、その爆豪は不敵に笑みを浮かべていた。

それに刃羅は目を細めて、警戒心を高める。

だからこそ、攻勢に出る。

刃羅は爆豪に駆け出し、両腕のロングソードを振るう。爆豪が飛び下がった瞬間に【荒刃刃鬼】を発動し、さらに速度を上げる。

「っ!!まだっ上がんのか!」

「足の刃鱗はスパイク代わりにもなる!摩擦を極限まで減らしている!」

「くっそがあー!」

爆豪も腕を振るって、爆破を起こしながら牽制する。刃羅はロングソードを戻して、両腕を狙った爆破を躲す。体にも爆破を浴びるが、刃羅は踏ん張って耐え、拳を振るって爆豪の左腕の籠手を後ろに弾く。

「あああ!!」

それでも爆豪は右腕を刃羅に伸ばす。刃羅は荒刃刃鬼を解除して、左膝を着いて左脚を後ろに下げる。

直後に爆破が放たれる。再び梅雨達が叫びそうになったが、刃羅が爆煙から片膝を着いた状態で、後ろに高速で下がる姿を見て、驚きの声を上げる。

それに相澤や爆豪も目を見開く。

「Y E A H H H H H H H!!」

「なんだありや!?!」

「ケロ!?!」

「どうやって……!?!」

刃羅は滑りながら、立ち上がる。膝を着いていた左脚先だけがスパイラルカッターになっていた。

「まさか……!?!スパイラルカッターをローラー代わりに!?!」

「そんなことまで!?!」

「裏技デース!!」

ちなみに右足は足裏に刃を生やしてスケートにしていた。

改めて向かい合う爆豪と刃羅。

「ちっ!とつとと死ねや!イカレ女!!」

「まだまだじゃよ。爆発坊主」

「けど、やっぱだあ……!見切ったぜ!てめえの弱点をなあ!!」

『!!』

爆豪の言葉に目を見開く一同。

刃羅は顔を顰めて、爆豪を見つめる。

「乱刀さんの弱点……!?!」

「なんかあったかな?」

「ケロ?」

百と緑谷は顎に手を当てて、考え込む。それに梅雨も指を顎に当てて首を傾げる。

他の者達も考え込むように腕を組む。

「よお……イカレ女。てめえ、今何でしゃがみながら腕で武器を作ら

「なかった？」

「……」

「それだけじゃねえ。あの鎧みてえな姿の時も、なんで足で武器を作らねえ？あのコマみてえな技の時も、両腕で同じ武器しか作らねえよなあ」

「……」

「そして何より……てめえ、『余』と『妾』って言い分けてんよなあ？つまりい！てめえはまだ自在に複数の武器を組み合わせることが出来ねえってことだ!!」

爆豪の言葉に緑谷達は目を見開く。

それに刃羅は肩を竦める。

「見事だな。さっきまでの行動はそれを見極めるためか」

『余』って奴が両腕だけで、『妾』はスパイラルカッターとの組み合わせだよな？」

「そこまで見抜かれたんかい」

刃羅は顔を顰める。

それに緑谷達も考え込んでいる。

「そうか……乱刀さんは武器で性格が変わるから……」

「2種類にしても性格を定めるために、一定の条件が必要となるのですね」

「それを必殺技という形にして目隠しにしたということね」

刃羅は手を腰に当てて、ため息を吐く。

「まあ、そういうことであるな。2種類以上で作るときは、何かしらの特徴があるのである」

「それで汎用性を考えたら、あの2つになったわけか」

相澤の言葉に頷く刃羅。

しかし、再び構える。

「まあ、それが弱点かと言われれば、否と答えるがな」

「ああ？」

「確かに自在に武器を出せるわけではないわよ？けど、それを見抜いた程度で勝った気になるのはねえ」

「そうかよ。じゃあ、試してやるよお!!」

再び飛び出す爆豪。刃羅も合わせて走り出す。

爆豪が爆破でスピードを上げて、右腕を振るう。刃羅は新体操のように両脚を開いてしやがみ、両腕をトウ・ハンド・ソードに変えて、振り上げる。爆豪は爆破で軌道を変えて躲す。背後から攻めかかろうとした爆豪だが、刃羅は両腕を戻して体をねじりながら逆立ちする。両脚を大鎌に変え、両腕をスパイラルカッターにして独楽のように回転する刃羅。

「逆立ちでもいいのかよー!」

爆破を放つが、普通の爆破ではやはり効果はなかった。その爆破を利用して、後ろに下がりながら左腕の籠手のピンを指で引っ掛ける。

「吹き飛ばやあ!!」

爆豪が叫びながらピンを抜いた瞬間、籠手そのものが爆発を起し、逆に爆豪を吹き飛ばす。

「づああ!?!なあ!?!」

左腕を押さえて下がる爆豪。その顔は何が起こったのか分からず、混乱している。

相澤達も何が起こったのか分からず、首を傾げる。

刃羅が回転を止めて立ち上がると、ニイイ!と笑って爆豪を見つめる。

「あかんでえ? 装備は常に確認せんとなあ。いつ壊れるか分からんぞ?」

笑いながら右拳に鈎爪を一瞬だけ生み出す。

それに爆豪達は目を見開く。

先ほど籠手を殴られた時に鈎爪で穴を開けていたのだ。

「まあ汗が抜ければいいかな〜って〜くらいだったけど〜」

「くそが……!」

爆豪が顔を顰めていると、突如刃羅が両脚をハルバードに変えて飛び出す。

すぐさま両脚を戻し、右腕を鎖鎌に変えて爆豪に向けて投げる。

「っ!」

爆豪は横に飛び避け、鎖鎌が地面に刺さる。

「なのですー！」

その瞬間両足裏に刃を生やして、腕を戻すのを利用して一気に爆豪の近くまで滑る。

腕を戻すとブレイクダンスの動きで爆豪に飛び掛かって、右脚をパルチザンに変えながら蹴りを放つ。爆豪はパルチザンの横から右腕を叩きつけるように爆破を放つ。それに刃羅は右脚を戻しながら、爆破の勢いのまま回転して裏拳の要領で右腕を振りながら、右腕をマムベリに変える。

「グルアー！」

爆豪は右腕でガードしようとするが、湾刀の形に気づいて右腕を振る。湾刀の切っ先を籠手に突き刺させて、顔への攻撃を防いだ。

刃羅はマムベリを解除する勢いで、爆豪の右腕を引っ張り、爆豪の右横に移動する。右腕を押さえられた爆豪は、顔を顰めながら痛む左腕を刃羅の腹に向ける。

「A・P・ショットオ!!」

「ぐおえ!？」

圧縮された爆撃が刃羅の腹部に突き刺さる。

手の平の1点に集中して爆破を放つ爆豪の新技だ。

刃羅はくの字に後ろに吹き飛ばされる。

「づう……!？」

爆豪は左腕を右手で押さえて顔を顰める。流星に発射の衝撃で激痛が走り、動きが止まってしまった。

右腕の籠手も一部が割れている。

「いったあい!!びゃらん!!」

刃羅は数回地面を転がり、すぐに泣きながら起き上がった。コスチュームの腹部に穴が開いていたが、そこから鉄の板のようなものが見えた。刃鱗だ。

泣きながらも爆豪に走り出す刃羅。爆豪も右腕を構えて、待ち構える。

その時、2人の間に壁が出現した。

「!!」

「そこまでだ。これ以上は大怪我を負う危険があると判断する」
相澤が髪を逆立てて、2人を睨む。

『個性』が発動しないことを確認して、顔を顰める2人。

「まだ決着がついてねえ!!」

「気持ちは分かるが、これ以上は訓練に支障が出る。それは認められん」

「くっそがあ!!!」

「乱刀もいいな?」

「まあ、わっちは構いまへんえ」

相澤の言葉に壁を殴りつける爆豪。

それに対し、刃羅は肩を竦めて素直に頷く。元々爆豪に挑まれた側なので、文句はない。

刃羅は相澤の横を通る時に小声で声を掛ける。

「あ奴。何か迷っておるぞ?焦っている……という言葉もあるかもしれんがの」

「……みてえだな」

「考えられるのは緑谷……もしくはオールマイトの引退。またはその両方」

「……」

「ああいう奴が悩み続けつと、俺っちみてえになっぞ?しっかり見えてやれや」

「……分かった」

刃羅は梅雨達に近づく。

「ケロ。怪我はない?」

「大丈夫!」

「よかったわ」

「けどくまた色々考えないとなく。もうバレちゃったく」

「十分だろ」

切島が呆れたように刃羅を見る。

爆豪と轟相手にあれだけ戦えれば十分だと思いう切島達だった。

「そうもいかん。実際、カンパネロやマガクモには破られたし、お師匠にも鼻で笑われて終わりだろう」

刃羅の言葉に顔を顰める梅雨達。

刃羅がボロボロになっていたのは記憶に鮮明に残っている。とうか、あそこまで追い込まれたのは初めて見た。林間合宿での戦いでも、あそこまでは傷ついてはいなかった。

「体術ではお師匠には敵わぬ。『個性』ではカンパネロとマガクモ相手では相性が悪いしの。まあ、あの2人だけではないが。遠距離型や切島のような『個性』相手にはごり押しか後手に回るしかないでの。それでは戦い抜くことは難しいのじゃ」

刃羅は腕を組んで、目を鋭くする。

近づけない、または近づけても攻撃が効かない相手には滅法弱くなる刃羅。それはもちろん刃羅だけではないが、前回のことを考えると一人でも戦い抜ける力が必要だと考える刃羅だった。

「そういう時はちゃんと私達に頼るのよ。刃羅ちゃん」

梅雨の言葉に百達も頷く。

それに刃羅は肩を竦める。

「やったら、もっと強くなってもらわんとなあ。うちは弱い奴に頼る気はないでな」

「……そうね。私達ももっと強くなるわ」

「もちろんですわ!」

梅雨と百は力強く頷く。もちろん周りにいた緑谷や麗日達も頷く。

それに刃羅はまた肩を竦めるだけだった。

その様子を爆豪は顔を顰めながら見つめ、両手を握り締める。

相澤達も刃羅達や爆豪の様子を見て、まだまだ課題は山積みであると気合を入れる。

各々の目標のために、訓練に気合を入れ直すA組一同なのであった。

#40 夜中に響く音……？

土曜日。

訓練が終わり、へとへとで帰る用意をするA組一同。

相澤達教師陣が今後の予定を話している。

そこに刃羅が歩み寄る。

「どうした？」

「聞きたい事あんねん」

「なんだ？悪いが、外出はまだ認められんぞ」

「ちげえよ」

相澤の言葉に顔を顰めながら否定する刃羅。

それに首を傾げる相澤達。その後の刃羅の言葉に、顔を顰めて腕を組むことになる。

「別にいん駄目なことじゃないでしょおん？」

「……まあ、そうだな」

「で？いいの？駄目なの？」

「……いいだろう。ただし、監視は付くぞ？」

「分かってんよ」

相澤の言葉に頷いて、着替えに向かう刃羅。

その後ろを姿を見て、顔を見合わせる相澤達。

「……厄介な奴だな」

「あの事情が無ければ、文句なく応援したいけどねえ」

「しかし止めることも出来ないでしょう。仮免試験を考えれば、間違っではないんですからね」

「ソウダナ。ソレニ彼女ノ存在ハA組ニトツテ、色々な意味デ欠カセナクナツテイル」

『個性』での力押しに頼ってしまう轟君、センスの高さ故に中々並ぶものがない爆豪君。あの2人に戦闘において一番刺激になるのは彼女だけなものね」

「それに緑谷君や切島君などにとっては、体術や戦闘スタイルの手本にもなってますしね。彼女の指導や組み手での指摘は的確ですし」

ミッドナイト、エクソプラズム、セメントスも悩まし気に眉間に皺を寄せる。

未だにステインの元に戻ることを捨ててはいない言動を時折している刃羅。しかし、それを注意すれば仮免試験を受けるかどうかも怪しい。厄介なのは刃羅の存在がA組のモチベーションに関わっているということだ。もちろん全員ではないが、数名ほどは間違いなく集中出来なくなると相澤達は考えている。

それは問題ではある。しかし集中できない一番の理由は、刃羅が語る『本物のヒーロー』への答えが出ていないからだ。それは相澤達も同様だ。

オールマイトと同じでは意味がないのだ。なので、刃羅を納得させられる答えが出ない限り、刃羅がいなくなる恐怖を抱えている。そして、その答えは本人の将来のヒーロー像にも直結している。

資格ではなく、存在でヒーローを見ている刃羅との意識の差を、緑谷達は時折見せつけられているのだ。

「あの子達はオールマイトも、敵連合も、乱刀さんにも深く関わっているからこそ、難しい問題よね。私達だって今までみたいに『まずは資格を！』ってわけにもいかないわ」

「……全く。だからあの人は教師に向いてないって言ったんだ」

相澤はオールマイトを思い出して、顔を顰める。それにミッドナイト達は苦笑するだけに留める。

とりあえず、今日は飲もうと相澤に声を掛けるミッドナイト。それを聞いたセメントスは、『プレゼントマイクとオールマイトだけは絶対に巻き込もう』と心に決めたのであった。

日曜日。寮生活初めての休日にして、週1日だけの唯一の休みだ。

朝7時前。

飯田はいつも通り目覚ましが鳴る5分前に起床した。

「休みとはいえ、生活リズムは崩していけない。寮生活だからこそ、自己管理は徹底せねば！」

カーテンを開けて、トイレを済ませて、洗面用具を持って1階の洗面所に降りる飯田。

その時、中庭に人影が見えた気がして目を向ける。

「ん？……乱刀くん？」

中庭にいたのは刃羅だった。刃羅はTシャツにホットパンツという軽装で、柔軟をしていた。

「体操か？しかし、平日は見たことがないな」

首を傾げながらも、まずは顔を洗い、歯磨きを行う飯田。

歯磨きをしながら中庭を伺うと、刃羅は深呼吸をしており、終わると唐突に拳を構えて正拳突きを思わせる型を始める。その後も下段蹴りや上段蹴りなど様々な型を、始めはゆっくりと行い、徐々に鋭くしていった。

その様子を歯磨きしながら見ていた飯田は、『やはり、あの体術は日々の鍛錬の賜物なのだ』と理解する。

そこに障子や口田、常闇が洗面道具を持って降りてきた。

「おはよう」

「今日も早いな。委員長」

「おはよう。……奮励努力……か」

「……すごい」

常闇達も中庭の刃羅に目を向ける。刃羅の動きはどんどん激しくなっており、今は中国拳法の型を流れるように行っている。ビタ！と止めた腕や脚からは空気が弾けるような音が聞こえそうなほど、緩急がはつきりしている。

刃羅はすでに汗びっしりで、それだけ集中して全身の動きを細かく意識して、型を行っていた。

飯田達は歯磨きを終えても、しばらくは刃羅の鍛錬を見学していた。そこに百や麗日、梅雨、緑谷、轟達も降りてきた。

「刃羅ちゃん。部屋にいないと思ったら」

「おはよう。皆」

「おはようございます。……乱刀さんはいつから？」

「俺が部屋を出たときには、もう中庭にいた。その時はまだ準備運動

程度だったが」

「そうですか」

「ケロ」

百と梅雨は起きた後、刃羅の部屋を訪ねて姿が無かったので少しパニックになっていた。音がしたので中庭を見ると、刃羅が型稽古をしていてホッと座り込んだのだ。

飯田は洗面道具を部屋に置きに行き、緑谷達は歯磨きをしながら刃羅の稽古を見学する。

すでに刃羅は型稽古の域を超えて、シャドーに入っている。殴蹴組み合わせて、バク転などもしながら激しく動いている。そのスピードはどんどん速くなっていく。

「……ヒーロー殺しをイメージしてんのか？」

「え？」

轟の呟きに緑谷達は首を傾げる。

「あのシャドーの相手だ。あれだけ激しく動いて、しかもあの回避行動。ヒーロー殺しと戦ってるみてえだ」

「……確かに」

「あ!？」

麗日が突如、声を上げる。その声に緑谷達は目を向けると、空中にいた刃羅が突如無理矢理体を捻り、バランスを崩す。刃羅はそのまま背中から地面に落ちて、芝生を滑る。

「刃羅ちゃん!」

「乱刀さん!」

梅雨と百が中庭に飛び出す。それに緑谷達も付いて行く。

刃羅は荒く息をしながら、仰向けに寝転んでいる。

「はあ……はあ……はあ……はあ……くっそ! やっぱ、きつちなあ……」

「刃羅ちゃん!」

「大丈夫ですか!？」

「ほえ?」

顔を顰めて起き上がると、梅雨達が駆けつけてくる。

それに刃羅は不思議そうに首を傾げる。

「どないしたん？」

「あんな落ち方して驚かない方が無理よ。刃羅ちゃん」

「それにしても激しすぎんだろ」

梅雨と切島が呆れて声を掛ける。それに百達も頷く。

「そう言われてもねえ。怪我しないからこそお全力でやらないとねえ」

「ヒーロー殺しを思い浮かべながら戦ってたのか？」

「そうでござる。接近戦ではやはり一番想定できるとござるからな。まあ、負けたが」

立ち上がり、ベンチに置いてあったタオルで汗を拭いて行く刃羅。

その言葉に梅雨が眉尻を下げて声を掛ける。

「部屋を訪ねていなかったから驚いたわ」

「いくら何でも私の鍛錬のために朝5時半から起こすなど出来るか。それに寮生活全てを監視されるのはたまらん」

刃羅は水を飲みながら顔を顰めて、トントんと発信機である首のチョーカーを指で叩く。

それに梅雨達は悲し気に眉尻を下げる。未だに相澤達からは外すことを許されていない。それに刃羅も逃げ出さないと断言している。

「まだヒーロー殺しの元に戻りたいのかしら？」

「当たり前じゃろ？ 儂はまだお主らからなんの答えも聞いておらんし、ヒーロー達は何も変わっておらんではないか。何故お師匠の思想を捨てねばならん。今はただ儂の力を高めるのに丁度いいから、大人しくしておるだけじゃ」

「……」

そう言つて着替えに戻る刃羅の後ろ姿を、梅雨達は見送ることしか出来なかった。

「……そうだよ。僕達はまだ何も答えを見せてないんだよね」

「そうだな。……すぐ出せるもんでもねえが……」

「乱刀さんは一度答えを出してしまった。だから私達の答えを待ちな

がら、ヒーロー殺しの元に戻る機会も伺っているのですね」

「ケロ……」

緑谷、轟、百が刃羅の行動の理由を推測する。それに梅雨は俯き、切島達も悔し気に顔を歪める。

確かに刃羅はA組に戻った。しかし、それは本当に梅雨達がヒーロー殺しの事を知る前の状態に戻っただけで、解決になっっていないと改めて理解する緑谷達だった。刃羅は未だに『エスパデス』の名前を捨てていない。それが出来ない限り、刃羅が梅雨達の隣に立つ未来は訪れない可能性が高い。

『ヒーロー』という存在の重さを改めて実感した緑谷達だった。

その後、朝食を食べて、一度シャワーを浴びる刃羅。

出てきた刃羅はジャージに着替えて、靴を持って出かける準備をしていた。

それを梅雨は首を傾げてみている。

「どこかに行くの？」

「学校！昨日、先生に施設使わせてって頼んだの！」

「ケロ……休まないと体に毒よ？」

「むしろ今の方が休み過ぎなんだよ。体が鈍る」

そう言っただけで玄関に向かう刃羅。

梅雨も付いて行くこととするが、

「今回は付いてきても一緒に出来ることじゃないべ。先生達が監視につくだろうから、別にいいだよ」

「でも……」

「夕飯までにはあ戻るよお」

梅雨の答えを聞く前に出ていく刃羅。

梅雨は朝の事もあり、追いかけることが出来なかった。

刃羅が校舎に入ると、相澤とオールマイトが待っていた。

「おはよう。乱刀少女」

「悪いが12時までだ。俺達が監督につくからな」

「……へえ〜い」

「他にはいないのか？」

「来たってどうしようもないのです」

「……まあな」

刃羅の言葉に僅かに顔を顰める相澤だが、すぐにいつもの気だるげの表情に戻り、歩き出す。

刃羅もそれに続き、オールマイトも付いて行く。

「……寮生活はどうか？乱刀少女」

「別に〜。普通〜」

「友達と一緒にだろ？楽しくないのかい？」

「別になあ。どうでもええわ」

「……そうか」

そして着いたのは小さなドーム状の部屋。壁一面に穴が開いている。

刃羅は隣の控室に鞆を置き、上着を脱いで中に入る。

相澤とオールマイトは別室にあるモニターの前に座る。

『じゃあ、こつちで操作するからな』

「了解だ」

相澤がマイクを通して、刃羅に語り掛ける。

それに刃羅は頷くと【荒刃刃鬼】を発動する。それとほぼ同時に壁の穴から何かが発射される。刃羅は頭を庇い、発射されたものを右腕で受け止める。

「ぐー」

刃羅が受け止めたのは軟式ボールのようなものだった。

『どんどん行くぞ』

相澤の言葉の直後、大量に壁からボールが発射される。それを刃羅は腕や蹴りで弾いたりするも、開始の場所からは動かない。もちろん全てを弾くことなど出来ず、体中にボールが叩きつけられる。

「ぐうー……がー……ぶー……ぐー……」

痛みに耐えながらも動き続ける刃羅。特に刃が展開出来ない頭部を重点的に庇う。それ以外は出来る限り刃鱗を維持して、直撃を避け

て逸らすことを意識する。

刃羅はこの訓練で痛みを耐えながら荒刃刃鬼を維持し、叩きつけられることで刃鱗の硬度を高めるつもりなのである。本来なら刃は鉄なので、熱した状態で叩かれることがベストなのだが、そうすると髪が燃えてしまう。さらに目や口などの粘膜もやられてしまうので、切島のように全身に攻撃を浴びるしかないのである。

そして耐えるだけでなく、荒刃刃鬼を維持して攻撃を浴びながら動き続ける訓練にもなる。

「づうあ!？」

しかし防ぎきれずに後頭部にボールが当たり、一瞬動きが止まる。全身にボールを浴びて、持ち直すタイミングを失った刃羅。頭を両腕で庇うが、どんどんボールの量が増えていき、ただ耐えるだけになる。

「おのれえ!!」

刃羅は回転して「嵐の刃」を発動しようとするが、それには荒刃刃鬼を解除しなければならず、回転に乗り切る前にボールを全身に浴びて倒れる。

それを見た相澤がボールの発射を止める。

「はあ!……はあ!……はあ!……はあ!……」

『まだ始めて10分だが……どうする?』

「まだやるに決まっておるだろう……!」

刃羅は荒く息をしながら立ち上がり、再び部屋の中心に立つ。

『そこにいろよ。ボールを回収する』

その言葉の直後、刃羅が立っている場所以外の床が開き、ボールを回収する。そして閉じて真っ新な床に戻る。

「ふん……金だけは掛けているな」

『じゃあ、いくぞ』

「来い!」

刃羅は手の込んだ施設に呆れていたが、相澤の言葉と同時に再び荒刃刃鬼を発動する。

そしてボールが発射され、再び攻防が始まる。

それを眺めている相澤とオールマイト。

「……確かにこの訓練は他の皆がいるところでは出来ないね」

「まあ、『個性』伸ばしは同時にやるには限界がありますからね」

「それに彼女の場合、普段は他のクラスメイトに時間を割いている。彼女の『個性』が伸ばしにくいのもあるが」

「ですね。必殺技も爆豪との戦いで弱点が露出しましたが、彼女の必殺技の構想はやはり命を奪う危険性が高くなる」

複雑なことを考えれば考える程、1つのミスが大きな怪我に繋がりがねない。それが教師陣の刃羅の『個性』への評価だ。どうやっても刃物である以上、扱いをミスれば、人の命を奪ってしまう。複数の武器を発現することは、それだけ扱いに注意が必要となる。そのため、刃羅の『個性』をこれ以上伸ばすことに否定的な意見を述べる教師も少なくない。

「だからと言って、今の弱点をそのままにさせておくのも問題……か」
「ええ。厄介な奴ですよ。本当に」

「彼女の思想は私達ヒーローと社会が生み出したものだ。それを否定するのは難しい。間違っただけはいるが、間違っていない。それは彼女にも、今のヒーロー社会にも当てはまる」

「……ですね」

オールマイト達も「再びヒーロー達を信じてもらうにはどうすればいいのか」とよく職員室や寮で話題にしている。結局最後には話が脱線して、結論が出たことはないが。

「あー」

お互いに顔を顰めていると、再び刃羅がボールに耐え切れずに床に倒れる。

「……までか」

それを見て相澤が装置を止める。

刃羅は荒く息を吐きながら立ち上がり、再び部屋の真ん中に立つ。

『……次だ』

「……休憩しろ」

『黙れ下民。むしろここから本番であろうが。早くしろ』

再び荒刃刃鬼を発動して、ギロリとカメラがある位置を睨みつける

刃羅。

それのため息を吐いて、ボールを回収する相澤。

「次が終わったら休憩しろ。いいな？」

『……ちつ。生温い……いいだろう。早く始めぬか』

相澤の言葉に舌打ちをして、渋々頷く刃羅。

それに顔を顰めながら相澤は再びボールを発射する。

「……生温い……か。一体ヒーロー殺しはどんな訓練をさせてたんだ？」

「林間合宿での森での活動を見てみると、合理的ではなさそうですがね」

その後も12時ギリギリまで、相澤が止めない限り続けようとする刃羅に、改めて今後の指導方法について頭を悩ませる相澤達だった。

時間が来た刃羅は相澤に言われてリカバリーガールの元を訪れ、簡単に治療されて寮に戻る。

入ってすぐのソファに梅雨や百達がいた。

「お帰り刃羅ちゃん。お昼ご飯来てるわよ」

「はいな」

洗面所で手洗いをした刃羅は、昼食を食べる。梅雨達もまだだったように刃羅の横や前に座る。

「食べてなかったのか？」

「今日は学校もやってないから、刃羅ちゃんが返ってくるまで待ったの」

「午後学校に行くのですか？」

「いや、教師共に午後は禁止にされた」

「ケロ。それがいいわ」

顔を顰める刃羅に梅雨達は「先生グッジョブ！」と内心感謝する。

そして午後は百や葉隠達に捕まり、耳郎の部屋で楽器を触らせてもらうことになった。その後も様々な部屋に連れ回されて、訓練をさせまいと躍起になってる梅雨達に呆れる刃羅だった。

その夜。

刃羅はベッドに胡坐を組んで座って寝ていると、唐突に目を開ける。

「……何の音だ？」

奇妙な音が廊下から聞こえてきたのだ。

ヴィーンという昨日までは聞こえたことがない音だ。

刃羅は廊下に顔を出すか誰もおらず、また何もなかった。

「……うんや？エレベーターやないやろうし」

特に気配もなく、首を傾げる刃羅。

その後も時折聞こえるが、結局誰もおらず、刃羅は無視して眠ることにした。

翌日。

刃羅が聞いた音は他の者達も聞いており、訓練の休み時間に顔を引きつかせながらもその話でもちきりになる。

他には梅雨、瀬呂、芦戸、上鳴、常闇、障子、峰田が聞いていたそうだ。

特に峰田はドアをノックされて名前も呼ばれたらしい。

「刃羅ちゃんも聞こえたの？」

「うむ。しかし誰もおらんかったぞ？気配も特にせなんだな」

「ふむ……乱刀が気配を感じなかったのだから、人というわけではないのだろうな」

「や、やめろよ障子い!!じゃ、じゃあ誰がおいらの名前呼んだんだよ!?誰がノックしたんだよお!!緑谷は聞こえてねえのか!？」

「うん……昨日は特訓で疲れてぐっすり……」

「……やっぱ昨日の怪談話?でも乱刀はいなかったしな……」

上鳴が顔を引きつらせながら話す。

刃羅以外の者達の共通点は、昨日の昼頃に常闇の部屋で怪談話をしていたということだ。

それに瀬呂が「や、やめろよ」と笑いながら言うが、その顔は引きつっていた。

「怪談話だなんて本当に信じてんのか?寝ぼけてたんじゃねーの?」

「べ、別に信じてねえよ!?でもさあ、常闇のは本当にあつた話かもしれねえって……!」

「どんな話なんだ?」

砂藤が笑いながら上鳴達に声を掛け、上鳴の反論に切島が興味を持つ。

それに近くにいた爆豪と轟がビクツと僅かに震え、爆豪は突如「けっ!うっせえんだよ!」と歩き去っていく。

その後ろ姿を見て緑谷は「もしかして、ちよつと怖かったのかな?」と思つた。

そこに耳郎が手を上げる。

「あ、あのさあ……ウチも聞いた。変なヴィーンって音」

「ほ、ほら!やっぱ本当にしてたんだよ!」

耳郎、障子、刃羅と音や気配に敏感な3人が証言したことにより、信憑性が高まる。

特に刃羅の姿も気配もないという言葉が恐怖を煽り、全員に戸惑うような気配が流れる。

「呪いかどうかは置いといて、複数人が音を聞いているとなると、これは由々しき事態だぞ。もしかしたら寮の欠陥の可能性もある。音の正体を確かめねばなるまい。ここは委員長の俺が責任をもつて起きていることにしよう!」

「こんな話聞いて爆睡できる奴おりますのん?」

「ケロ」

飯田がフシユー!と鼻息荒く、宣言する。

それを刃羅は壁にもたれながらジト目でツッコみ、隣にいた梅雨も同意するように頷いていたが、飯田には届かなかつた。

その日の夜。

飯田は自室の扉の前で、タオルケットに包まって座っている。睡魔と戦いながらも、百達が差し入れしてくれたコーヒーを飲みながら耐えていた。

緑谷や百達は交代制でやろうと言ったが、飯田は「皆の睡眠は俺が守る！」と力強く宣言し、1人で行っている。

「……今の所は何もないな」

眠気に襲われながらも、飯田は異常がないことを確認していた。

その時、

グイイ……

「!？」

突如聞きなれない音がして、周囲を見渡すが何も見えなかった。

飯田が立ち上がると、同じ階の上鳴と口田も部屋から出てきた。

「君達、起きていたのか」

「う、うん」

「あんな話されたら寝れねえって……！なんだよ、この音は!？」

飯田達はウロウロビクビクしながら周囲を確認するも何も見当たらず、顔を見合わせて首を傾げる。

その時、

『ぎゃあああああ！』

小さく叫び声が聞こえた。

「峰田か？」

「行ってみよう！」

飯田達が2階に降りると、峰田が緑谷に抱き着き、青山と常闇が顔を青ざめながら周囲を見回している。

「どうしたんだ!？」

「ま、また呼ばれたんだよおお！」

「僕も聞こえた。ノックしてから……」

それに青山と常闇も頷く。その表情は真剣そのものだった。

そこに他の男子達も降りてきた。全員聞こえたようで顔が真っ青だった。

「いったい、何が起こっているんだ……」

飯田が愕然と呟く。

梅雨達女子陣も音を聞いており、朝食時にはどんよとした空気が流れていた。

#41 ナイトパニック

全員が謎の音を聞いた翌日。

もちろん緑谷達は訓練など集中出来ずに相澤達からお叱りを受ける。

しかし、相澤達も全員が同じ状況なことを疑問に思い、事情を聴く。

「音ねえ……」

話を聞いた相澤達は腕を組んで訝しんでいる。

「私達の寮では聞こえないわねえ」

「シカシ、全員ガ音ヲ聞イテイル。嘘トイウコトハアルマイ」

「まあな。しかし、呪いなんて非合理的なもん本当に信じているのか？」

「なんか乱刀さんまで怯えてるのは意外よね」

呆れている相澤に、ミッドナイトが刃羅を見ながら首を傾げる。

刃羅も気だるげに立っており、寝れていないことが伺える。ミッドナイトの言葉に刃羅は腕を組んで、百を睨む。

「どっかの奴が抱き着きながら寝てきやがったからなあ……!」

「……ごめんなさい。し、しかし……不可解な出来事が起きているとなると……」

「ケロ」

「そういうこと……」

百達も音が聞こえると、同じ階の者同士で集まって同じ部屋で寝ることになったのだ。そうなると初日の夜同様、梅雨と百は刃羅と一緒に寝たことになる。今回は百の部屋の大きいベッドで寝ていたが、音が聞こえた瞬間に百が隣で横になっていた刃羅に抱き着いて、そのまま眠りについたのだ。刃羅は2人が寝たら、自分の部屋に戻ろうと考えていたが、百に抱き着かれたのでそれが出来ず、そのまま朝を迎えたのだ。もちろん刃羅は一睡も出来ていない。

それにミッドナイト達も納得する。相澤から林間合宿でのバスや宿での寝方を聞いている。

「先生……これは大変な事態です!我々の生活基盤に何らかの異変が起

きているのは事実。このままでは我々は授業や訓練に集中出来なくなります！ここは早急に原因追求と事態の解決を望みます！」

飯田がズバー！と手を上げる。

その言葉に相澤は腕を組んで考え込む。

「呪いか……そーういや、雄英にもそーういいう話があつたな」

「ああ！あつたあつた！」

『え』

相澤とミッドナイトの言葉に刃羅以外の全員が注目する。

慌てた芦戸が相澤に声を掛ける。それにミッドナイトが指を顎に当てて、思い出しながら語る。

「本当ですか!？」

「えーつと……雄英七不思議の1つになってたはずよ？」

「たしか……ヒーローになれなかった卒業生の霊がさ迷つてて、それを見ると呪われるって話だったな。よく学校裏の森に出るって……ああ、丁度今寮が建っているあたりだな」

『え』

芦戸達は一瞬唾然とした後、パニックに陥った。

「その幽霊が寮の中をさ迷つてるの!？」

「やめてえ!？」

「ハイツアライアンスは呪われた寮なんだあ!!」

「……ちよつとイレイザー」

「ミッドナイトさんもでしょうが……」

火に油を注ぐ形になってしまい、しまったと顔を顰める相澤達。

落ち着かせようとするが、自分が火を大きくしたこともあり、その声は届かなかった。

「ら、ららららら、乱刀さん!!ど、どうしましょう!？」

「ぐうえ!?!く、くく、首が……!?!や、やめ……!？」

百もパニックになり、刃羅の首元に抱き着いて締め付けながらガクガクと揺する。刃羅は首を絞められて声が出せず、顔を真っ青にしていく。

「お前ら……いい加減にしろよ?。」

『!!』

ドスの聞いた相澤の声に一瞬で鎮静化する芦戸達。刃羅も解放され、白目を剥いて倒れそうになったところを障子と梅雨に支えらるる。

そんな生徒達を相澤は見回して、仕方なさそうにため息を吐く。

「そんなに音が気になるなら、今夜見回りをする。今夜は嵐らしいし、寮の欠陥なら尚更必要だろう。点呼もするからちやんと各自の部屋にいろよ」

「せつ、先生え……!」

「……今日はあ…寝れるう?」

「ケロ」

「多分な」

「ごめんなさい……」

相澤の言葉に感動して目を潤ませる芦戸達。その後ろで刃羅は意識朦朧としながら話す。それに刃羅を支えている梅雨と障子は頷き、隣で百が申し訳なさそうに顔を俯かせながら謝罪する。

そうして本日は帰宅となった。

夕方から雨が降り出し、夜には嵐になった。

風で窓がガタガタと揺れ、木々が今にも倒れそうなほど傾いている。

刃羅達は既に各部屋で就寝している……ことになっている。もちろん相澤が見回っているからと言ってすぐに寝れるわけではない。しかも外の嵐が尚更不安を煽る。ちなみに刃羅はすでに寝ている。嵐はどうでもいいし、音も実害がないので興味を失っていた。

相澤はすでに1階に訪れていた。本来なら消灯をしているのだが、見回りもかねて電気をつけている。

雷が落ちたこともあり、ブレーカーの確認や懐中電灯もすでに準備している。

問題は停電による生徒達のパニックである。自分が火を大きくしたとはいえ、ヒーローになるつもりの雄英生が幽霊と停電如きでパ

ニツクになつていたら、ヒーローどころではない。

停電にならないことを祈る相澤だった。

「しかし……いったい何の音だ？」

音の正体を考える相澤。

その時、

ヴイ……イイ……

「!!」

僅かにだが雨や風の音の合間に奇妙な音が耳に届いた。

相澤は息を潜めて、音の発生源を探る。音が聞こえる方向が変わっていく。つまり動いているということだ。

(生き物?……しかし、これは機械音……まさかな……)

そして神経を研ぎ澄ませて、食堂で音の正体を見つける。

その正体を見た相澤は目を見開く。

「嘘だろお……」

それに手を伸ばした直後、相澤は後頭部に衝撃を感じた。

時間が経過して、飯田は峰田の部屋の訪れていた。

相澤が回ってこないのだ。

「来てねえよ……上から回ってんじやねえの?それか女子の方からとかさあ……」

峰田はビクビクしながら答える。しかし、飯田同様様子を見に来た轟や砂藤、瀬呂は首を横に振る。

「来てねえぞ」

「峰田の部屋から音がしたのに、女子からは回んねえだろ」

「そうだとしても上にも下にも来てねえのは遅すぎんだろ」

状況を訝しむ飯田達。その時、隣の部屋の緑谷も顔を出す。

「みんな……やっぱりおかしいよね。相澤先生が時間通りに来ないなんて」

「怖えこと言うなよお……!また乱刀がなんかしてんじやねえのか!」

「とりあえず1階に降りてみよう」

緑谷の言葉に峰田は震えながら声を荒げる。

そして飯田の言葉に頷き、飯田達は連れ立って1階に降りる。降りたと同時に雨と風が窓ガラスを叩く。

「それにしても嵐やべえな」

「万が一に備えて、避難の準備や明かりの準備はしているか？駄目だぞ！雄英生たるもの、そういう事態にも備えていなければ！」

瀬呂が窓を見ながら呟くと、飯田が声を上げる。

それに緑谷や砂藤は苦笑していると、ふと食堂のテーブル付近で視線が止まる。

「あれ？……あそこ……っ!?相澤先生!？」

『え!?!』

緑谷の声に目を見開く飯田達。

緑谷が指差した方向を見ると、相澤がテーブルの横に倒れているのが発見された。

相澤が倒れているのが発見されて、全員が1階の談話スペースに集まる。

ソファでは相澤が寝かされていた。

「どうしてこんなことに……」

「ふわあ……ねむく」

「刃羅ちゃん。しっかりして頂戴」

百が相澤を見ながら、深刻そうに右手で顔を覆う。その横では百達に叩き起こされた刃羅が眠そうに目を擦っている。

全員が顔を強張らせて互いに顔を見合わせていた。

「ふわあ……ほんで？先生は気絶しとるだけかいな？」

「うん……特に怪我はしてなさそうだけど……」

「ふくん」

緑谷の言葉に欠伸をしながら頷きながら、刃羅は相澤に近づく。

確かにパツと見では怪我をしているようには見えない。息も落ち着いている。

刃羅は相澤の手首を掴んで脈を測り、服を捲ったりしていく。

「乱刀さん？」

「刃羅ちゃん？」

「……服の下にも外傷は見当たらないのである。脈も普通であるな。……ん？後頭部が少し腫れているのであるな？熱っぽいのである」

刃羅は冷静に相澤の診察を行う。

その行動に少し落ち着きを取り戻す百や梅雨だが、他の者はそうはいかなかった。

「な、なあ！先生の首に金髪絡まったりしてねえよな……？ひい!?金髪!?って、なんだ。俺の髪か……」

「だまっとれ阿呆」

上鳴の1人コントに刃羅がジト目でツッコむ。

刃羅はなぜ金髪が気になるのか知らない。しかし、怪談に参加した者達は顔を真っ青にする。

「そういうこと言うんじゃないやねえ！アホ面！」

そこに爆豪が怒鳴る。それに対抗するように峰田が叫ぶ。

「やつぱり呪いだ……！呪いなんだああ!!」

「それよりもヴィランなんじゃねえのか!?相澤先生が気絶させられているんだぜ？」

峰田の叫びに切島が反論する。

それに感化されて周囲の者も「幽霊!」「ヴィラン!」などと慌て始める。

その声はドンドン大きくなり、パニック寸前である。

飯田や百が落ち着かせようと声を上げるが、その声は騒ぎと雨風の音で届かない。

その時、

「いい加減にせい!!」

『!?!』

刃羅の声が轟き、全員が動きを止める。

刃羅は腕を組んで顔を顰めている。

「今は正体が何かではなく、どう動いて行くかが重要だろう」

「そうね。まずは相澤先生の事を他の先生にも伝えないといけな
わ。私達だけで動くわけにもいかないもの」

刃羅と梅雨の言葉に、我に返る一同。

「その通りだな！乱刀くん！梅雨ちゃんくん！確か先生の部屋に内線
が通っているはず……」

飯田が言いながら動こうとした時、雷が轟き、次の瞬間に寮の明か
りが全て消える。停電のようだ。

「ひゃあ!？」

「こんなタイミングで停電かよ!？」

「っ!?!落ち着け!?!黒影……!?!」

「ちよ!?!常闇!?!黒影出すなよ!?!」

突然の暗闇で目が慣れず、誰がどこにいるのか分からなくなる。そ
れにより、恐怖が爆発して再びパニックに陥る。

「皆!?!落ち着くんだ!?!」

「百!?!懐中電灯か何かを出すでござる!?!」

「っ!?!は、はい!?!」

飯田が落ち着かせようと声を上げ、刃羅が百に指示を出す。

飯田同様落ち着かせようと声を上げていた百は、それにハツとして
懐中電灯を作り出そうとする。

その時、百の足元を何かが通り過ぎた。

「きゃあああ!?!」

「うわっ!?!ヤオモモ!?!どうしたの!?!」

百の悲鳴に耳郎が声を掛ける。未だに居場所が分からない。

「な、何かが足元を通って……!?!」

「何かって……ヒヤア!?!……なんかおる!?!」

百の言葉を聞いた麗日の足元にも何かが通り過ぎる。

それに更にパニックになり、あちこちでも悲鳴が上がる。どうやら
それは動き回っているようだ。

(なんだべ?……あの音はしねえし、気配ははっきりしてんべ)

刃羅は目を凝らして気配を探る。しかし、今までのと違う様子に困
惑している。集中したくても、クラスメイト達も悲鳴を上げて動き

回っているので、気配が追えないのだ。

「誰か明かりを！」

飯田の声に爆豪が舌打ちをしながら《爆破》を起こして、明かりを照らす。

その一瞬に全員が白い何かが宙を素早く移動して闇の中に消えていくのを目撃した。

「なななななななななななんかいたよお!!？」

「あれが幽霊か!?呪いか!？」

「っ！」

葉隠と上鳴が叫び、刃羅は白い何かが消えた方向に駆け出して追いかける。

「み、緑谷……幽霊には氷と炎、どっちが効くんだ……?！」

「へ?い、いや、流石に考えたことはないけど!?!で、でも氷は効くイメージないし、炎なら……。でも、幽霊は実体がないから物理攻撃が効かないんじゃない?！」

意外と動揺している轟の質問に、緑谷も動揺しながらも分析する。しかし、その答えに轟は絶望する。

「!?ど、どうすりゃいいんだ……!？」

「もうだめだー!!!!おいら達みんな殺されるんだー!!！」

峰田の泣き叫ぶ声が響く。それに更にパニックになる一同。

刃羅はそれを無視して必死に気配を追っていた。

「ええいーうるさい……いーくそーどこに行っただ!？」

その時、玄関の扉が開いた。

それに悲鳴も止まり、凍り付く一同。

その時再び雷が轟き、稲光で姿が見える。

その姿は長い金髪だった。

ペタリ、ピチャリと水が滴る音を響かせて、寮の中に入ってくる。

刃羅が気配に気づき、声を掛けようと金髪に近づいていく。

「ん?お前……」

「ぶれ……」

『金髪の幽霊だー!!!』

『いやああああ!!』

金髪が刃羅に気づき、刃羅もその正体に気づいた瞬間、クラスメイ
ト達は叫んで一斉に『個性』で攻撃を仕掛けた。

もちろんパニックになった常闇は黒影を抑えられるわけではない。

「ソノ獲物ハ俺ノモンダアア!!!」

そして金髪に襲い掛かる。

「ちよ!?!ぎやあああ!?!」

「びぎやああああ!?!ごぶう!?!」

2つの悲鳴は、パニック状態で加減などされていない攻撃の音でか
き消された。

ドサツ!

ドガアン!!

何かが倒れた音に、ハッと我に返る一同。

すると電気が復旧し、明かりがつく。それに黒影が涙目になって常
闇の中に戻る。

それにホツとした上鳴達は、すぐに顔を引き締めて攻撃をした先を
見つめる。

あたりは炎や氷結、爆破、酸、電気、テープ、峰田のモギモギ、百
の大砲が入り交じり、もくもくと煙が立ち上がっている。

その煙は攻撃により壊れたドアや窓からの風に吹き飛ばされてい
く。

煙が晴れた先では、金髪が大の字で倒れていた。

「ゆ、幽霊なのに消えてねえ……」

峰田は愕然として呟き、一同は互いに腕を組んだりしながら恐る恐
る金髪に近づく。

その時に麗日腕を組んでいる梅雨が「ケロ? 刃羅ちゃんはどこ?」
と周囲を見渡すが、姿が見えなかった。

そして近づいた金髪を覗き込むと、だらりと垂れた金髪の隙間から
金色のちよび髭が見えた。

「……え? 女じゃない?……」

「……げっ! プレゼント・マイク先生じゃん!」

『え?……あー!!』

芦戸が訝しんでいると、後ろから覗き込んだ耳郎が目を見開いて青ざめて叫ぶ。

それに芦戸達も改めて見て、声を上げる。

普段の逆立った金髪ではなかったので、気づかなかったのだ。

「せ、先生!?!プレゼント・マイク先生く!!」

麗日が慌ててプレゼント・マイクに近づき、声を掛ける。その横に耳郎も近づき、耳のプラグで心音を確認する。

「大丈夫。生きてる」

「もしかして停電で見に来てくれたのだろうか?」

「相澤先生を探しに来たのかもね」

耳郎の言葉にホッとする一同。

それに飯田と緑谷が推測していると、

「ケロ!?!刃羅ちゃん!?!」

『え!?!』

壊れた玄関の扉の上に、刃羅が雨風に打たれながら倒れているのを梅雨が見つける。

それに慌てて駆け寄った梅雨達によって寮の中に運ばれた刃羅は、プレゼント・マイク同様ボロボロになっていたが気絶まではしていなかった。

「刃羅ちゃん!」

「乱刀さん!」

「ううく……痛いく……」

「なんで乱刀まで巻き込まれてんだ?」

「白いのお追いかけてたのお……」

「なるほど」

「んあく……そしたく……プレゼく……来たく……声かけく……やられたく」

「……そしたらプレゼント・マイク先生が来たから、声かけようとしたら僕達にやられた?」

「なのですう」

刃羅の言葉に申し訳ない気持ちになる一同。プレゼント・マイクも未だに起き上がらない。

「おい、お前ら……」

その時、後ろから声がかげられる。緑谷達が振り向くと、相澤が起き上がっていた。先ほどの攻撃の音で目を覚ましたのだ。

相澤に芦戸達が駆け寄る。

「金髪の幽霊が来たと思って攻撃を……!」

「先生、一体何があったんですか!? 幽霊ですか? ヴィランですか?」

「白い幽霊もいるんですー!」

未だに興奮している生徒達に相澤が「落ち着け」と一喝する。それに条件反射の如く静まる芦戸達。

すると相澤が天井を見上げながらウロウロと歩き出した。刃羅は障子に背負われて移動する。内心「もう、あのまま寝かせてくれや」と思っていたが。

「……あった」

しばらく歩いた相澤が何かを見つける。それに耳郎も何かに気づく。

「あの音がする……!」

「え!」

耳郎の言葉に目を見開く芦戸達。その言葉に頷きながら、相澤は天井を指差す。

「蛙吹。あのちっこいの分かるか? とってくれ」

「……あの黒い点かしら? ええ、もちろん」

相澤の言葉に頷いて、舌を伸ばす梅雨。何とか掴み、舌の上でもよく見ないとあるかないかどうかも分からない黒い粒のようなものを相澤に渡す。

その黒い粒からヴィーと機械音が響いている。

「これが俺が気絶した原因で、謎の音の正体だ。天井についてたのを取ろうとしてテーブルが上がったら、出しっぱなしにしてあった台布巾で滑っちゃまってな」

「あ、私だ! 早く部屋に戻らなきゃと思って、片付けるの忘れてた!」

「てへー!」つとぶりつ子ぶる葉隠に相澤がジト目を向けるが、ため息を吐くだけで収め、生徒達によく見えるように差し出す。

目を凝らす生徒達。しかし、よく見えなかった。そこに百が拡大鏡を作り出して、それを通して改めて確認する。

それは極小サイズの機械のようだった。

「……なんでこんなものが?」

「峰田が絡んでるとなれば、あれだろ」

そう言っつて相澤は女風呂の入り口に近づく。

そして最近設置されたのぞき対策セキュリティアイテムの近くにその機械を置く。すると、その機械はセキュリティアイテムの中に入っつていき、「充電中」と声が響く。

『……』

「確か造ったのは……サポート科の奴だったな」

相澤はパワーローダーに連絡を取る。そして作成者になつてもらう。

「フッフ。それはですねえ、夜中も勝手に見回りをしてくれるドツ可愛いベイビーなんですよ!そちらの寮にはどえらい変態さんがいるとのことでしたので、その方……名前はどうでもいいので忘れまじたけど!……その方だけ、ちゃんと部屋ににいるか確認機能も付けてあります!フッフ、凄いでしよう!可愛がつてあげてください!それでは私はベイビーの開発がありますので!」

一方的に話し、そして一方的に切られた。

「……発目さん……」

「また彼女か……」

「やっぱり嫌い!」

緑谷と飯田は肩を落とすし、刃羅は電撃と爆発を思い出して顔を顰める。

発目の言葉に峰田が憤るも、内心では「呪いじゃなくてよかったあゝ」とホツとしている。

しかし、まだ残っている謎がある。

「で、でもあの白いのは?!みんな見たよな!?!」

上鳴の言葉にハツとする芦戸達。

それに刃羅が声を上げる。

「口田。お前の声で呼びかけろ」

「え？」

「あの白いのははつきりと生き物の気配があったのだよ。だから君の声に応えるだろう」

刃羅の言葉に、口田は戸惑いながらも頷いて声を出す。するとソファの陰から白いものが飛び出してきて、口田の胸に飛び込んでくる。

それは口田が飼っているウサギだった。

「あ……もしかして……ドア閉め忘れてたかも……ごめんなさい」

ウサギを抱きかかえて、恐縮しながら謝罪する口田。

それに上鳴達は謎が解けたとホツとして笑う。

「よかった〜」

「この状況のどこがよかったんだ……？」

『え……』

地を這うような相澤の言葉に緑谷達は周囲を見渡す。

玄関付近はドアも吹き飛び、窓ガラスも割れて、部屋の中には雨が降りしきりビショビショだった。さらに爆破、炎などでカーペットも所々焦げている。そして未だに気絶しているプレゼント・マイク。

改めて見た寮の状況に顔を青くする一同。

「まだ建って間もねえって言うのに……。原因は怪談だったな？それだけでここまでパニックになるとは……」

髪を逆立てて、目を光らせて睨む相澤。眉間も顰めて、怒りのオーラ全開で、相澤の背中に鬼が見えた緑谷達。

それに幽霊の時とはまた違う恐怖に襲われて、全員が直立不動になる。

「……状況的に乱刀は被害者だな。乱刀以外、全員明日までに反省文提出！しばらくの間、就寝時間は八時！以降、この寮で怪談話は禁止！！いいな！」

『はい！！すいませんでした！！』

呪いも幽霊も怖いが、見えている恐怖の方が怖いのだと理解した芦戸達だった。

「やっど……寝れるわ……」

「乱刀は痛みが引かないならリカバリーガールのところに行け。ただ、その前に服を着替えろ」

「まずはグツナイしたいデース。今日はスリーピングしてたのに……」

『……ごめん（なさい）』

「……風邪をひく前に一度風呂にでも入れ。蛙吹、八百万。責任もつて看病しろよ。お前ら2人はそれで反省文無しだ」

「はい……」

障子の背中でごつたりとしている刃羅に、プレゼント・マイクを肩に担いだ相澤が声を掛けるが、刃羅はそれよりも寝たかった。

服もボロボロでビショビショの刃羅のボヤキに、全員が謝罪をする。

ちやんと寝ている所（ベッドに座ってだが）を叩き起こされて、解決しようとしたらクラスメイト達に総攻撃をくらう。そして吹き飛ばされてビショビショになったのに、原因は全て峰田のスケベ心のせいであったなど、刃羅にとつては理不尽でしかなかった。

流星に不憫に思った相澤は、監督役の2人に看病を命じる。

誰よりも冷静に動いていた刃羅に申し訳なく思っていた百と梅雨は、相澤の指示に頷く。

そして解散となり、同じく申し訳なく思った芦戸達も刃羅の看病を手伝うと言い、怪我の確認ついでに女子全員で風呂に入る。すると、刃羅の腹部が腫れ上がっており、左腕は僅かに火傷、右脚には切り傷を負っていた。

それに慌てた百達は急いで刃羅の体を拭き、ジャージに着替えさせて全員で抱え上げてリカバリーガールの元に連れていく。この間、刃羅は眠り（気絶とも言う）についていた。

リカバリーガールの診断の結果、腹部は肋骨が折れているのと打撲、左腕は酸によるもので、右脚はガラスで斬ったのだらうとのこと。

その診断に百と芦戸が更に顔を真っ青にする。酸は芦戸、腹部に関して百が造った大砲の玉であると理解したからだ。

リカバリーガールにより治療された刃羅は、再び芦戸達に抱えられて寮に戻る。

そして百と芦戸が目には涙を浮かべながら「私達で刃羅を看病する」と言い出し、梅雨達は寝るように伝える。それに梅雨が「だったら皆で交代で看病しましょう。2人ずつで刃羅ちゃんを見ながら反省文書きましょう」と提案し、刃羅の部屋に机や布団を持ち込んで女子6人で反省文を書きながら、刃羅を看病する。気絶している刃羅は大人しくベッドで横になっており、安らかな顔で寝ていた。

翌朝、刃羅は目を覚ますと、ベッドの周囲に寝転がっている梅雨達を見つめる。まさか全員いるとは思わず、しかも体の痛みが引いていることに首を傾げる。

刃羅はとりあえず掛布団がはがれている芦戸や麗日に向け直し、ベッドに座って胡坐を組んで目を瞑る。

百達が起きて、刃羅に飛びついて泣きながら謝るまで、後30分。

#42 その頃……

刃羅達が仮免許試験に向けて、気合を入れている時。もちろん他の者達も次に向けて動いていた。

『なるほど。では現在、敵連合は分散していると』

「うむ。捜査かく乱と新しい同志を探す、が名目だ」

鎧関は隠れ家でドクトラと連絡を取っていた。

「おいどんはこのままでいいのか？」

『死柄木達は何と？疑われたりは？』

「疑われてはいるだろうがな。オール・フォー・ワンの逮捕とステインとの敵対でおいどんだけではなく、茶毘やトガ嬢なども敵連合にこのままいるか怪しいからな。戦力低下を避けたいならば、それどころではないというのが実際の所だろう」

『ふむ。確かに絶対の後ろ盾がない今、仲間割れは避けたいでしょうからね』

「うむ。ステインもあれから動きを見せていないだけに、茶毘達もどうするべきか決め切れないという感じだろう」

ステインの意志を継ぐために敵連合に入った茶毘。神野では気絶していたため、ステインのことは見ていないが、死柄木が「先生」と呼んでいたオール・フォー・ワンと戦ったという事実は茶毘にはかなりの衝撃だったようだ。

現在、茶毘は連絡が付かない状態だ。

しかしゴロツキの焼死体が時折発見されていることから、何やら動いてはいるようだ。

『……もうしばらく敵連合にいてください。新しいメンバーが増える可能性もあるので』

「分かった」

『もし、疑われて危険だと判断したら貴方の判断で離脱してください』
「うむ」

ドクトラの言葉に頷いて通話を終える。

「ステインがどう動くかな。それが分かれば茶毘の動きも読めそう

なのだが……。まあ、しばらくはおいどんは大人しくしとくか。目立つからなあ、おいどん」

鎧関は腕を組んで、とりあえずの方針を決めるのであった。

夜。ある路地裏。

茶毘は気だるげに歩いている。

その先にはゴロツキ達がいた。

「おうおうおうおう!! てめえかあ? 最近、このへんを荒らしてやがんのはよお!!」

「気持ちわりい面してんなあ!!」

「殺されたくなきや謝んなあ!」

「まあ、100発殴らせてもらうけどな!!」

『ぎやははははは!!』

オールマイトの引退以降、今まで怖がっていた連中が集まって行動する者達が増え始めていた。

茶毘はゴロツキ達を無表情で眺めていた。

「……こんな奴らに大義もクソもねえよな」

「ああん?」

ゆつくりと右手を上げる茶毘。

それを訝しむゴロツキ達だが、次の瞬間目を見開いて悲鳴を上げる。

『ぎやあああああ!!』

「てめえらは敵連合どころか社会ですらいらねえゴミだ」

青い炎で一瞬で全身燃やされるゴロツキ達。悲鳴もすぐに消えて、地面に倒れ伏す。

それを茶毘は無感動で見下ろす。

「ゴミならせめて、俺の薪になれ」

「やれやれ……派手にやるねえ」

「!!」

茶毘が立ち去ろうとした時、上から声がかけられる。

バツ！と上を見上げながら構えると、ビルの非常階段の踊り場に灰色コートとハットを被った男がいた。

「……なにもんだ？」

「おやおや……お友達から聞いてないのかい？神野で遊んだんだだけだねえ」

「っ!!……そうか。てめえらが『ステイン親衛隊』とかほざいてた連中か……」

「そうそう……と言っても、もう解散したけどねえ。依頼でお供しただけだから」

「……フリーの傭兵とか言う奴か」

「そうそう……で？敵連合さんは何してるんだい？お友達はいないみたいだねえ」

マガクモの言葉に茶毘は何も答えずに睨みつける。

それにマガクモは肩を竦めて、苦笑する。

「ふむふむ……御頭さんが捕まって動きにくいから個別に逃げ回ってるってところかな？まあ、君は逃げてるつもりはないようだけど」

「……ヒーロー殺しはどこだ？」

「やれやれ……残念ながら知らないよ。お供は断られたからねえ。まあ、彼がつるむのは弟子の女の子くらいかもね」

「……ちっ……」

茶毘は林間合宿での刃羅の姿を思い出して、舌打ちをする。

マガクモがトン！と地面に降り立つ。

「さてさて……ちよつと取引がしたいんだけどさ。どうだい？」

「取引？」

「そうそう……今の依頼人さんが敵連合の動向が知りたくてねえ。教えてくれないかい？」

「……そっちは何を出すんだ？」

「ふむふむ……ステインとの取り次ぎ、なんてどうだい？今の依頼人さんはステインと連絡が取れる立場だからねえ」

「……」

「そうそう……もし情報をくれるなら、ちゃんと敵連合から匿う用意

もあるよ？装備や仕事も斡旋するとき。好条件じゃないかい？」

茶毘を勧誘するマガクモ。

その言葉に黙って考え込んでいる様子の茶毘。

「……悪いが今すぐ答えられそうにねえ」

「ほうほう……」

「オールマイトが引退した。つまり次は……エンデヴァアの野郎がNO.1になる」

「うんうん……だろうね」

「俺は奴がどう変わるかを見届ける。それに合わせてヒーロー殺しの思想への考えも変わるかもしれねえ」

「やれやれ……若者は変わっていくねえ」

マガクモは肩を竦めて、ポケットから名刺を取り出して、ピン！と指で弾いて茶毘に飛ばす。

それを受け取った茶毘は名刺を見る。そこには電話番号が記されていた。

「はいはい……気が変わったら、それに連絡して頂戴な。スパイしてくれるだけでもいいし、完全にこっちに来てくれてもいいしね」

「……ふん」

マガクモはビルの上に糸を伸ばして、飛び上がっていく。

それを見送った茶毘も顔を顰めながら、両手をポケットに突っ込んで歩き出す。

人材集めを始めているのは敵連合だけではない。

それを茶毘は理解したのだった。

ドクトラはマガクモの報告を聞いて、ため息を吐く。

「はあ。そう上手くは行きませんか。やはりブランドは敵連合の方が上。オールマイトを引退に追い込んだのは大きいですよねえ」

「ステインを広告塔には出来ないものね」

「まあ、する気もありませんがね。しかし敵連合に人が集まるのは避けたいのも事実」

「大変ですね」

「シャフルとストレディが紅茶を飲みながら話し相手になる。

「ステイン様は？」

「しばらくは両方の動向を見守りながらも、肅清を続けるそうです」

「なるほど。まあ、オールマイトの引退でヒーローもヴィランも動きが活発ですものねえ」

「それもありますし、刃羅さんが気になっていたのでしよう」

「ドクトラの言葉にシャフル達は首を傾げる。

「あの子は雄英に戻ったんでしょ？」

「しかもステイン様の依頼だったとか？」

「そうですね。やはり神野での戦いで色々思うことがあったのでしよう。何だかんだで、今一番刃羅さんを理解しているのはステインですから」

「ああ、あの子の両親の事は未だにはつきりしたことは分かんないんでしょ？」

「……そうですね。オール・フォー・ワンはタルタロスの中。例のヒーローは刑務所の中でうつ状態で会話不能。そしてヴィランは未だ生死不明。手詰まりですね」

「刃羅の話もオール・フォー・ワンの話も正しいと言わせるだけの証拠がないのだ。

「刃羅さんの母君を暴走させたときれるヴィランも行方不明。結局暴走の原因も不明確なままです」

「厄介ねえ」

「だから刃羅さんも割り切れていないのでしようね。まあ、雄英の子達の影響もあるのでしようが」

「恐らくは」

「全員で「はあく」と大きいため息を吐く。

「刃羅さんに関してはステイン様も悩んでいるのでしようね」

「そうねえ。ヴィランにするのも何か違う気がするし、ヒーローにするには教えた事が邪魔になる……」

「少なくとも今のヒーロー社会には合わないでしょう」

「そうですね。本当の意味でのヒーローにでもならないと、刃羅さんは受け入れられないでしょうねえ」

「ステイン様は刃羅さんにどうなって欲しいのかが決まらないのですね」

「良くも悪くも師匠になっっているのでしょうかね」

自身の後を継がせるのも違う。今の社会でヒーローにさせるのも違う。刃羅の境遇を知っているからこそ、刃羅の手を取ったからこそ、自身が手解きしたからこそ、様々な期待をしているのだろう。

ステインの『英雄回帰』を最も理解し、誰よりも追いかけている刃羅。そんな若者に、自身と同じ血に染まるだけの道を歩ませるのは、何かしらの葛藤があるようだ。

「まあ、私だって『怪盗になりましょう』なんて中々誘えないわねえ」「そうですね。裏で生きる以上はやはり自身の意志で決めてくれないと」

「しかも、それが人殺しの道ですからね。ステインも勧めるのは憚れたのでしょね」

「というか、刃羅には向いてないわよ」

「それもありますね」

憧れのステインの口癖を真似しているが、少し仲良くなると強がっているのが丸わかりなのである。しかし、大抵強がるときは誰かが苦しめられている時だった。

つまり刃羅にとってステインの真似をするときは、何かを成し遂げようと決めたときなのだ。

本人が気づいているのかは謎だが。

「刃羅さんってステイン様の事を好きだって言ってますけど……」

「私はどちらかと言うと……父親と重ねているのでは？と思ってますかね」

「ああ……それもあるのかなあ」

「それにあんまり同年代の男性と過ごしたこともないのでは？」

「……確かにそうですねえ」

「……もしかして親愛と恋愛がまだ区別出来てない？」

「可能性はありますね」

ストレディの言葉に頷いて紅茶を飲むドクトラとシャフル。

まだまだ刃羅の周囲の環境は流動的。そう考える3人だった。

「雄英の子に恋したらどうなるのかしらね〜♪」

「ステインも動きそうですねえ」

「それはそれで見てみたいですね」

「失礼します」

ヴィランであろうと女子が集まれば恋バナが咲く。

しかし、そこにドクトラの部下が顔を出す。

「どうしましたか？」

「敵連合と懇意にしているブローカーに動きがありそうです」

「新しい仲間を紹介すると？」

「はい」

「それは予想済みのはずですが？」

「そうなのですが……紹介されると思われる者の情報に懸念点が」

部下の報告書を受け取り、目を通すドクトラの。その中身に顔を鋭くする。それを見て、シャフルとストレディも報告書を覗き込む。その中に記された名前に顔を顰める。

「この情報の精度は？」

「残念ですが……80%は越えます」

「……引き続き情報収集を」

「かしこまりました」

ドクトラの指示に頭を下げて、部屋を去る部下。

それを見送ったドクトラ達は腕を組んで、顔を顰める。

「なんで今更あいつが……？」

「わかりません。しかし、これはかなりまずいことになりそうですね」

「それにもう1人の方もそこそこの有名ですよ？」

「厄介な連中を捕まえたわねえ……」

『ニブルヘイム』、そして『ターボス』ですか……」

嫌な予感しかないドクトラ達。

新たな戦いは思ったよりも近いかもしれない。そう考えさせられ

たのであった。

夜。

ステインはビルの屋上で街を見下ろしていた。

「……ハア……」

眼下に見えるヒーロー達を観察し、標的を考えている。

その時、

ギユイイイイン!!

「!!」

モーター音が響き、ステインはすぐさま飛び上がり、刀とナイフを抜きながら隣のビルの屋上に降り立つ。

そしてステインが先ほどまで立っていた場所に、何者かが降り立ち地面が砕け散る。

「……何者だあ」

「フハハハハ!!流石はヒーロー殺しだ!!」

高笑いしながらビシイ!とステインを指差すのは、黒いフルアーマーコスチュームを着た190cmほどの男。

両前腕と両脛部分にタイヤのようなタービンが付いており、そのタービンにスパイクを装着している。黒いコスチュームには赤く輝くラインが通っている。

ステインはその姿に色は違うが保須市で戦ったヒーローとその弟の雄英生のコスチュームを重ねた。

「我が名は『ターボス』!!ダークヒーローだ!」

「……ダーク……ヒーロー……?」

ターボスの名乗りに眉を顰めるステイン。ヴィランなのかヒーローなのか判断出来なかったからだ。

「敵連合に合流する前に、貴様に挨拶しときたくてな!」

「……何故?」

「貴様が以前在籍していたからだ!これからは俺様が新たな敵連合の顔になるからな!」

「……ハア……」

ターボスの宣言にステインは頭痛に耐えるように顔を顰める。するとターボスのタービンが回転を始める。そしてビシィ!と武闘家のように構える。

それに目を鋭くして腰を落とし、刀とナイフを構えるステイン。

「だが、気が変わった!ここで貴様を倒せば、俺様の名は更に突き走る!!俺様の道に敷かれる!!ヒーロー殺し!!」

「……ハア……やってみろ」

ターボスはいきなり横向きに正座をするように膝をつく。脛のタービンをタイヤ代わりにして高速でステインに走り迫る。

ステインも同時に飛び出し、ナイフを投擲する。

ターボスがそれを腕のタービンで弾く。

その一瞬でステインはターボスの背後に回る。ターボスは即座に立ち上がりながら裏拳で殴りかかる。

「その程度、読んでいるぞー!」

「しいー!」

ステインはしゃがんで足払いを放ち、ターボスの左脚を蹴る。

ターボスは右脚を後ろに伸ばして前後に開脚する。直後、その場で回転してステインに足払いをやり返す。

「ちいー!」

ステインは飛び下がって、それを躲す。

(馬鹿弟子みたいな体術を……!)

ステインはタービンによる予測が難しいターボスの動きに顔を顰める。

両手足のタービンにより転ばせても動きを止められないことを悟る。しかもタービンのスパイクで掠るだけでも確実に体や武器が挟まれる。それによりフルアーマーの隙間を狙う隙が中々見つけれなかった。

「フハハハハ!!俺様の血を舐めたいならば、このタービンを攻略せねばな!」

ターボスは高笑いを上げながら、今度は普通に走り出す。

再びナイフを顔目掛けて投擲するステイン。

それを右腕のタービンで防ぐターボス。その時、右脇に痛みが走った。

「づう!？」

目を向けるとステインが脇に刀で突きを放っていた。突き刺さってはいないが掠っており、ターボスは慌てて右腕を刀に振り下ろす。

「くっ!」

ステインは即座に下がって、距離を取る。刀を確認するが、残念ながら血がこびり付いてはいなかった。

「ちっ……………」

「…………流石だな。あの一瞬でそこを狙うか……………」

「次は突き刺す……………」

舌打ちするステインに、ターボスは先ほどまでの余裕が消える。

ステインは更にもう一本ナイフを抜き、刀を構える。それに先ほどのように攻撃を仕掛けられることが出来なくなったターボス。

今のは運が良かっただけ。もう少し深く斬られていたら、間違いない。ターボスは負けていた。

（やはり恐ろしいまでの戦闘力……………」『個性』がそこまで強力ではないからこその実力か!）

ステインの『個性』はあくまで戦闘による副次的な武器。相手を傷つけない限り無意味な力故に『個性』に固執しない。しかし敵対する側からすれば厄介なことこの上ない。無視は出来ないのだから。肉を切らせて骨を切るという手段は絶対に出来ない。だからと言って遠距離に徹しても、あの身体能力ではそれも難しい。

「そこまでです」

「ぬ!」

「…………ハア…………お前は…………」

ターボスの横に黒い霧が出現する。黒霧だ。

「義爛殿から連絡を受けて様子を見に来てみれば…………ターボス殿、死柄木達が待っています。この場はこれまでとして頂きたい」

「…………いいだろう」

タービンを止めて、構えを解くターボス。

ステインも黒霧の能力を知っているので、深追いはしなかった。

「お久しぶりですね、ステイン。神野では随分と暴れられたそうで」

「……オール・フォー・ワンがいなくなっても、あの子供は止まらんか」

「ええ。むしろ更に決意を固めました。あなたの弟子は随分とフラフラとしているようですが……」

「……ハア……そのフラフラした弟子に貴様らの後ろ盾は一本取られたようだがな」

「……その借りはいずれお返しさせていただきます」

ターボスを包み込んで、ゆっくりと消えていく黒霧。

それをステインはナイフを投擲しようとするが、背中に靄が出現したのを感じて腕を止める。

そして黒霧も消えて、背中の靄も消える。

「……ハア……やはりまだ見据える必要がありそうだな」

武器を仕舞い、移動することにしたステイン。

「……あまりのんびりしていると激流に溺れるぞ？馬鹿弟子」

刃羅を思い浮かべて呟きながら、街の闇に消えていくのであった。

そして、ある廃墟ビル。

ターボスは敵連合と向かい合っていた。

敵連合は茶毘以外は集まっている。

「困るな、新人。ちゃんと時間は守ってくれないと」

「フハハハハ！すまんすまん！俺様は走り出すと中々止まれなくてな！」

「はあ………今後はちゃんと足並みを揃えてもらう。抑え込む気はないが、俺達だって遊びじゃない」

「分かってるさ！俺様だって道を整備するためなら、我慢はする！ただし、走りがいのあるアウトバーンで頼むぞ？」

「……いいだろう。で？お前は？」

死柄木はターボスの言葉に頷き、もう一人に目を向ける。

ターボスの隣に立っているのは茶色のファー帽子にロングファーコート。黒のレギンスに手袋、茶色のロングムートンブーツを履いている160cmほどの女性だった。銀髪のロングストレートに白い肌、水色の瞳を持つ無表情な妙齢の女性。

まだ夏なのに暑苦しいファッションはかなり場違いだったが、彼女は汗1つ流していない。むしろ今も寒そうだった。

「寒い……………」

フウつと口から漏れ出る吐息は白い。まるで真冬の息のように。それにトガ以外の全員が目を細める。

「…………噂通りの奴みたいだな。『ニブルヘイム』」

「ああ、苦勞したぜえ？口説き落とすのは」

死柄木の言葉に義爛が肩を竦める。

ニブルヘイムはそんな会話を無視して独白を続ける。

「助けないといけないの……………」

「助ける？誰をだ？力になるぜ！なれねえけどな！」

トゥワイスの言葉にも何も反応しないニブルヘイム。

それに義爛は苦笑する。

「全く表情は動かねえし、感情も出さないが話は通じる。実力も噂通りだ。ヒーロー殺しにだって負けねえネームバリューだぜ？」

「ヒーロー殺し……………」

義爛の言葉にニブルヘイムが反応する。

それに死柄木が目を細めて尋ねる。

「お前もステインファンか？」

「違うわ。殺したいの。助けないといけないの……………」

「だから誰をだ……………」

死柄木は訝しみながら、根気よく尋ねる。

しかし次の言葉に目を見開く。

「乱刀刃羅……………」

ニブルヘイムの言葉に鎧関はもちろん他の者達も目を見開く。

周囲の反応など全く気にも留めていないかのように続けるニブルヘイム。

「あの子を助けないといけないの……。ヒーロー殺しから……。あの
子は、私の傍にいたべきなの」

#43 芯なる硬さ

仮免試験まであと3日と迫った刃羅達。

全員、最後の仕上げとばかりに気合を入れている。そして続々とコスチューム改変を行っていた。

「また刃羅ちゃんのコスチューム、変わったわね」

「……なんで武器頼んだだけやのに変わんねん」

帯の脇に取り付けられた2本の鉄鞭。

それだけしか注文していないはずなのに、何故か脚に黒タイツが追加されている。

「しかし、破れるのでは？」

首を傾げる百に刃羅は呆れた顔で説明書を見せる。

それを覗き込んだ梅雨と百が見たものは、

『何度か入院されてた時に黙って頂いた刃羅様の脂肪組織片を培養して作った特製です！これで武器を作ってもコスチュームが破れることはありませんよ！もちろん外部からの攻撃では破れますのでご注意してください！頑張ったでしょう!』

「……」

「ありがてえけどよ。なんかもう怖ええよ。エスパデスでコスチューム整備してもらおう奴でも、こんなことしねえぞ」

うんざりとした顔をしながら刃羅はコスチュームを確認していく。

確かにスパイラルカッターを発動しても破れることはなかった。

「まあ、裸足でいるよりはいいと思うわよ」

「そうですね」

ずっと裸足だった刃羅の事を考えるとありがたいことではある。

どうやって刃羅の脂肪組織を奪ったのかを考えると未恐ろしいが。

げんなりしたテンションでTDLに向かう刃羅達。

その途中で緑谷達とも合流した。緑谷もコスチュームを改変し、アイアンソールという脚装備を作ってもらっていた。

そして訓練を始めるA組一同。

刃羅は今日も緑谷達の体術の指導を行っていた。

そこに切島が声を掛けてきた。

「なんじや？組み手か？」

「……ちげえ。いや、違わねえが」

「はあ？……おめえもだべかあ？」

「……ああ。試合して……いや、殺す気で来てくれ」

『!？』

「……何考えてるの？」

何やら思い詰めたような顔をして刃羅に申し出る切島。

殺す気で来いという言葉に近くにいた緑谷やエクトプラズム達が目を見開く。

刃羅は顔を顰めて真意を尋ねる。

「俺は皆みたいに中遠距離が張り合える技もねえし、機動力もない。林間合宿じゃあ何も出来なかつたし、あの島でも竜巻にビビっちまった。なんかパツとしねえことばっかで、皆と実力も経験値も開いちまって……」

握り締めた両手を見下ろしながら、独白する切島。

それを緑谷達は心配そうに見つめるが、どう声を掛けていいのか思い浮かばなかった。

「それと我が殺す気で貴様に斬りかかるのと何の関係がある？」

「……俺は《硬化》だ。出来るのは体を硬くすることだけ。俺は守れるヒーローになりてえ！また後悔したくねえ！」

「……だから私と戦って、ヴィランと向かい合っても恐怖を押し殺せるようにしたい……か？」

刃羅の言葉に頷く切島。

腕を組んで考え込むように黙る刃羅。

そこにエクトプラズムが声を上げる。

「ダカラト言ッテ流石ニ殺シ合イヲサセルワケニモイカナイゾ」
「する気はありませんわ」

「乱刀！」

「試合はあしてあげるう。でもお殺し合う価値はあないかなあ」
「っ！」

ギユウ！と俯いて両手を握り締める切島。

刃羅は相澤に声を掛けて、試合をする準備をする。

切島に上鳴や芦戸、緑谷達が駆け寄って、声を掛ける。

「切島！お前、流石に殺し合いは無茶だろ!!」

「急にどうしたのさ?」

「切島君……」

「わりい。でも、退けねえんだ」

その反対側では梅雨や百、飯田達が刃羅に声を掛けている。

「大丈夫かしら?」

「殺す気はありまへんえ」

「しかし、切島君は一体どうしたんだ?」

「皆とく同じじゃない?」

「同じ?」

「自分にとってヒーローとは何か、でござるよ」

そう言っただけに出る刃羅。それを見て切島も前が出る。

今回も相澤が審判役だ。

「殺し合いは許さんからな」

「分かっているのだよ」

「……うっす」

「……本当か怪しいもんだが、少しでも怪しければ止めるからな。始め!」

開始と同時に切島が硬化して走り出す。

それに刃羅はさっそく鉄鞭を両手で握り、高速で振る。

スパパ。スパアン!

「ぐう!?!」

切島が両腕を顔まで上げて防ぐが、痛みに呻いて足を止めてしまふ。

刃羅は容赦なく鉄鞭を振るい、容赦なく切島を叩き続ける。

「容赦ねえ」

「殴り合う以前に近づけさせてもらえねえのかよ」

「……あのバカが」

瀬呂、上鳴が刃羅の攻撃に慄き、爆豪は切島を見て顔を顰める。

「どうしたのです？この程度で足を止めるのです？まだ斬りかかってないのです」

「くっそお!!」

切島は叫びながら飛び出す。

近づいてきた切島に、刃羅は鉄鞭を振るいながら左脚をパルチザンに変えて切島の右脇腹を狙う。それを硬化して何とか弾くが、少し肌が斬れて血が噴き出す。

「つうー!」

「呻いている場合か」

顔を顰める切島の首に鉄鞭を巻きつけて引つ張る刃羅。

それに切島はあえて逆らわず、硬化して殴りかかる。

「だあー!」

刃羅はそれを紙一重で躲し、膝蹴りを叩き込む。

「っ！効つかねえー!」

「ほう。少しは強くなったようだな」

痛みに呻くことなく、刃羅に掴みかかる切島。それに感心したように声を上げながら、刃羅は鉄鞭から手を放し、切島の右腕を抱える。

「だが、まだ甘いのである」

刃羅が切島を背負い投げをして背中から叩きつける。素早く鉄鞭を掴み、鉄鞭を解きながら後ろに下がる。

切島は顔を顰めながらも、すぐに起き上がる。

再び刃羅が鉄鞭を振るい、切島を連続で攻める。

「ぐう!?!」

「下がるな！この程度で！お前は何のために、硬化で耐える!?!」

刃羅の言葉に歯軋りをして足に力を入れて耐える切島。

「はあ！……はあ！……守るためだ……!?!」

「だったら、もっと硬くせい！この程度で退き、あの程度の刃で傷つき、足を止める！それで守るなど片腹痛いわ!?!」

「ぐう!?!」

「何より！その『守る』は何を指している!?!」

「っ!？」

刃羅は鉄鞭を止めて、回収する。

切島は刃羅の言葉に目を見開いたまま、足を止めている。

「お前が本当に守りたいのは何かしら？言っただわね。『もう後悔したくはない』と」

「っ……!？」

「もう一度聞くわあん。あなたがあん守りたいのは何いん？」

「……」

「切島……」

顔を俯かせる切島を芦戸が心配そうに見つめる。

それを横目で見た刃羅は中学時代に何かあったのだろうかと推測する。

「……ヒーローとは見返りを求めてはならない。自己犠牲の果てに得られる称号である」

「……ヒーロー殺しの……」

「ええ。ステインは『ヒーローは私欲で戦ってはならない』という考えを持っているわ」

刃羅の言葉に飯田が顔を顰め、それを緑谷や麗日、轟が心配そうに見つめる。

「実はわたくし、そこだけは賛同していませんの」

「え?」

その言葉に全員が刃羅に注目する。

「質問しよう。切島」

「え?」

「誰かを助けたい」。その気持ちは私欲か否か」

刃羅の問いに目を見開く切島。それに飯田や緑谷、轟は刃羅が保須でステインと対峙したときに話していた言葉を思い出した。

「わたちの考えは私欲である、やよって。綺麗だろうが醜かろうが、願望である以上、それは私欲や」

「……」

「さて、いかなる願いでも私欲である以上、我らの行動は全て己が第一

であるということになる。己が傷つくことを厭わないものであつてもな」

刃羅の言葉に切島はもちろん全員が考え込むように唸る。

「誰かを守りたいのは、助けた人の笑顔を見たいから。傷ついたり、亡くなつた人の顔を見たくないから。結局、人である以上、全ての行動は己が最も前にいるのだよ。ただ、その願いの先にどれだけ犠牲が出るかで『正義』か『悪』かが決まるのだよ。だから君達はお師匠や吾輩の信念が認められない」

その言葉に爆豪はベストジーニストの『ヒーローもヴィランも表裏一体』という言葉を思い出した。

「さて、切島。お前は『守りたい』と言つた。ならば、どうすれば守れると思ふ?」

「……敵を倒す?」

「違う。倒れぬこと(で)ござる」

「え?」

刃羅の答えに切島が目を見開く。

「オールマイトがあそこまで支持されて、恐れられた理由は何だと思ふアルか?」

「……強いからだろ?」

「違うのです。誰よりも前で戦つて、誰よりも最後まで立っているからなのです」

「……あ……」

「USJでも、神野でも、オールマイトは先頭で戦つて、最後まで倒れなかつた。その姿に誰もが憧れて、誰もが目を離せない。ステインやオール・フォー・ワンでさえも」

No. 1であろうと、どんな小さな事件であつても、目や耳に入れば誰よりも早く駆けつける。そして、必ず勝つ。

その姿に人々は『ヒーロー』を夢見るのだ。

そしてヴィランは恐れるのだ。『自分が暴れたときに現れるかもしれない』と思つてしまうから。

「勝つだけなら、努力をすれば誰でも出来るわ。でもね、倒れないのは

簡単じゃないわ。ヒーローなら尚更よね」

ヒーローの背中には弱き人々がいるからだ。

「……」

「戦いにおいて、倒れないほど目障りなことはないの。どうしたって目が離せんからの」

立っている以上『何かある』と考えるのが人間だ。

「切島。この中では誰よりもてめえがそこにたどり着けんだよ」

「俺が……」

「故にもう一度問う。貴様が守りたいのはなんだ？」

その問いと同時に刃羅は荒刃刃鬼を発動し、両前腕から鎌、両腕をロングソードに変えて、ゆっくりと歩み寄る。

切島はその姿を見ながら、聞かれた答えを考える。

（俺が守りたいのは……一般人？ いや……ちげえ。そんなのは当たり前だ）

ヒーローなのだから。

（誰よりも前で戦って、誰よりも最後まで立っている。倒れないほど目障りなことはない）

刃羅の話を反芻する。

倒れないためにはどうすればいい？ 敵を倒す？ 違う。それでは不十分だと言われた。

倒れるということは自分が負けたということだ。

（俺が……負けた……？）

切島は中学時代の後悔を思い出す。

危険が迫る人を前にして足が竦んで動けなかった。だから、もうそんな思いをしたくないから英雄にきた。

入ってから怖い思いを一杯してきた。

オール・フォー・ワンが現れたときなんて息をするのも苦しかった。戦おうなんて気持ちにすらならなかった。

（そうだ……負けたら駄目なんだよ。敵にじゃねえ。俺の心が!!俺自身に!!!）

「俺が守りてえのは……」

グ！と両手を握り、刃羅をまつすぐに見据える。
それを見た刃羅は口を吊り上げて、駆け出す。

「さあ！見せてみよ！レッドライオット!!」

切島は体を硬化する。

(まだまだ！もつと！もつと!!身体も!!心も!!硬くしろ!!)

「俺自身だあ!!」

絶対倒れぬ壁となれ!!

切島の体からガキ！バキ！と軋む様な音が響く。

その姿に緑谷達が目を見開く。

「はああ!!」

刃羅が両腕を振るう。

切島はそれに防御をする素振りすら見せなかった。

ガツツキイイイン!!!

刃羅のロングソードは切島の肩と顔に当たるが、完全に弾かれ、むしろ刃が欠けてしまう。

それに目を見開くが、その瞬間切島が刃羅の両腕を掴む。

刃羅は慌てて鎌とロングソードを戻して、両腕をスパイラルカッターにして回転させるが、切島は手を放さなかった。

「安無嶺過武瑠!!俺はあ!!倒されねえ!!」

ガン！と刃羅の額に頭突きをする切島。

流星にくらつと意識が一瞬遠のいて、スパイラルカッターと荒刃刃鬼が解除される。

それを見逃さなかった切島は右腕を振り被る。

「必殺!!烈怒頑斗裂屠お!!」

「ぐふう!」

最硬度状態の切島の右拳が、刃羅の腹に突き刺さる。

刃羅はくの字になって吹き飛び、地面を転がっていく。
その光景に相澤を始めとする全員が驚く。

「完全に決まった!」

「あの乱刀の刃を完璧に止めたぜ!」

「爆豪や轟でも出来なかったのにやりやがった!」

「凄いよ！切島君！」

「……けっ！あれくれえ出来て当然だろうがドアホ」

刃羅はすぐさま立ち上がるが、ふらついてたたらを踏む。

「ぐほっーぐほっー……今のは……効いたべえ……」

額と両腕から血を流し、ペッ！と血混じりの唾を吐く刃羅。

切島は動く度にベキゴキ！と音を響かせる。

「いいじゃろう。それを儂は乗り越えねばならん!!」

刃羅は駆け出し、体を捻ってテンペスタ・ラーマを発動して高速で回転しながら切島に迫る。

切島も走り出して拳を構える。

「おおおお!!」

そしてぶつかり合う直前。

「気張りなさいませ!!」

「!!」

刃羅は回転しながら右脚を振り上げてバトルアックスに変え、左脚だけで回転して蹴りを放つ。

「はあ!!」

高速で迫る斧を切島は両腕でガードする。しかし、回転による遠心力とそれに乗せたパワーに堪え切れずに蹴り飛ばされる。

「ぐう!!」

ガン！ガン！と地面を転がる切島。10mほど転がって止まり、うつ伏せで倒れる。

刃羅も足を戻して着地するが、右脚に痛みが走り、片膝をつく。

「つうー……斧でなければ折れていたであるな」

刃羅は血を流す右脚を見て、冷や汗をかく。

それほど切島のアンブレレイカブルは硬かった。

「ぐ……」

切島はふらつきながら立ち上がる。両腕からは少しだけ出血していた。

「そこまでだ！」

そこに相澤が試合終了を告げる。

これ以上は本当に殺し合いの域になると判断した。

「はあ！はあ！くそ！」

「それはこっちのセリフやドアホ」

悔しがる切島に、座り込んだ刃羅がジト目で言い返す。

両腕と右脚を負傷した刃羅の方が、どう考えても劣勢で負けだった。

ゴロンと仰向けに大の字で寝転がる。

そこに梅雨達が駆けつける。

「大丈夫かしら？」

「そう見えるでござるか？」

「ボロボロだね」

「お腹も痛い！頭も痛い！手足が痛い！」

「つまり全身ですわね」

「イエア！」

その後、ハンソーロボでリカバリーガールの元に運ばれる刃羅。切島は自分の足で歩いて移動した。

「またあんたかね。緑谷よりも来てるじゃないか」

「試合挑んでくる野郎が多いんだよ。俺つちに言うな」

「……わりい……」

「まあ、この子との相性は悪いからね。しょうがないか」

刃羅の言葉に項垂れる切島。

「で〜？少しはくすつきりした〜？」

「ああ！ほんとにありがとな！」

「ほなら、よろしおす」

切島の言葉に頷く刃羅。

そこに梅雨、百、芦戸、緑谷、飯田、轟、上鳴が顔を出した。

「どうですか？」

「すぐに終わるよ」

「良かったですわ」

「切島あ。あんたはどうなの？」

「……これからだな」

「そっか」

「それにしても、バキバ切島ヤバかったな！乱刀の全身刃よりキバツてたじゃん」

「アンブレイカブルだ！」

そして治療を終えて、保健室を後にする一同。

他のクラスメイト達はすでに引き上げているようだ。

「それにしても、やはり刃が通じなくなると厳しくなるな。どうしたものか」

「いやいや！最後の蹴りはヤバかったからな!?アンブレイカブルじゃなかったら、腕斬り飛んでたぞ!？」

「あの回転と乱刀の全力の蹴りだもんなく」

「飯田君並みの蹴りだったよね」

「ああ」

「もしあそこがガードじゃなくて、カウンターだったら完全にヤバかったわ。それにあんただって、あれ以上硬くならないってわけじゃないんでしょ？」

「そうだけどよ……あれをカウンター出来る自信はまだねえよ」

「防がれた時点で、十分可能性があるのです。それだけで十分改善の余地があるのです」

「……相変わらず向上心高えな」

腕を組んで考え込む刃羅に、切島達が感心するも呆れた視線を送る。

緑谷、飯田も顎に手を当てて考え込む。

「でも、切島君のアンブレイカブルは脅威だよな」

「そうだな。俺や緑谷君も攻撃手段が限られてしまう」

「あれの持続時間が課題だぜ。1分保たねえからなあ」

「それに轟ちゃんや上鳴ちゃんの攻撃も完全に防げるわけじゃないものね」

「そうなんだよな」

完全なものなどありはしない。

それぞれの課題に頭を悩ませる一同。

「ケロ。無いもの強請りをしてもしようがないわ」

「まあの」

「そうだな」

「少しでも仮免試験で活かせるように高めるのみだ！」

「うん！」

こうして刃羅達は仮免試験当日を迎えるのであった。

#44 仮免試験開始!

ヒーロー仮免試験当日。

刃羅達は試験会場に到着した。

「降りろ、到着だ。試験会場、国立多古場競技場」

バスを降りた目の前には巨大な競技場が建っていた。

会場が見えたことで緑谷達は緊張が高まり、ソワソワしてきていた。

「この試験に合格し仮免許を取得できればお前達タマゴは晴れてヒヨッコ。特に乱刀」

「ほえ?」

「お前は落ちたら容赦なく留年だからな。気合入れろよ」

「へーい」

「ちゃんとして刃羅ちゃん」

梅雨の言葉に刃羅は肩を竦めるだけで答える。

「いよっし!不安も緊張もいつもの一発決めて吹き飛ばそうぜ!」

切島が空気を変えるように、声を上げる。

それに緑谷達も乗り、拳を構える。

「せーのっ『Plus……!』」

「Ultra!!」

そこに黒帽子を被った丸刈りの男が掛け声に参加してきた。

その後ろにいた同じ服装の者達が、丸刈りの男に注意する。

「勝手に他所様の円陣に加わるものではないよ。イナサ」

「ああ、しまった!!」

イナサと呼ばれた男はハツとして、唐突に頭を地面に叩きつけて謝罪する。

「どうも!!大変!!失礼致しましたあ!!」

『ヒイイ!』

余りに唐突の出現、そして思い切りのよい頭突きの謝罪に緑谷達は慄く。

「なんだ!?!このテンションだけで乗り切る感じの人は!?!」

「切島と飯田を足して二乗したような……!」

戸惑う上鳴達。

その周囲では他の受験者達が緑谷達やイナサを見て目を見開いている。

「おい、あの制服って……!」

「アレじゃん!西で有名な……!」

その声に応える爆豪が呟く。

「東の雄英。西の土傑」

土傑高校。

数あるヒーロー科を抱える高校の中でも雄英と並ぶ難関校である。するとイナサがガバァ!と体を起こす。

「一度言ってみたかったっス!!プルスウルトラ!!自分、雄英高校大好きっス!!雄英の皆さんと競えるなんて光栄の極みっス!よろしくお願ひします!!」

ドロツと額から血を流しながら、元気よく話すイナサ。

そしてイナサは他の者達に連れられて会場へと向かっていった。

その後ろ姿を見ながら、相澤が呟く。

「夜嵐イナサ」

それに葉隠が反応する。

「先生知ってるんですか?」

「夜嵐イナサ。あいつは昨年度……つまりお前達の年の推薦入試でトップの成績で合格したにもかかわらず、何故か入学を辞退した男だ」

その言葉に周囲は目を見開く。

「え?!じゃあ、1年!?ていうか推薦トップの成績って……!」

緑谷は冷や汗を掻きながら、轟を見る。

それは轟や百より実力が上ということだ。

その事実切島達も腕を組んで唸る。刃羅も腕を組んで、イナサを見る。

「そして2年生と一緒に仮免を受けることが出来る程の実力者ということであるな」

「あ!?!」

「そういうことだ。ありやあ、強いぞ」

相澤も認めたことにゴクリと唾を飲む緑谷達。
すると刃羅がスパアン!と緑谷の頭を叩く。

「いた!?!」

「何をビビっておるのじゃ。あ奴が推薦トップじゃろうが、お主らが
することは変わらんじゃろうが」

「そ、それはそうだけど……!」

「我らは1年全員で仮免試験を受けれる。奴が推薦でトップを取った
時の貴様らと今の貴様らとは、もう天と地も離れているだろうが。士
傑如きにビビるな」

刃羅の言葉に一瞬目を見開く緑谷達。

すぐに発破をかけてくれているのだと理解し、力強く頷く。

「ケロケロ」

「流石ですわね」

「ふん」

刃羅の横で梅雨と百が笑い、刃羅は腕を組んでそっぽを向く。

それに緑谷達も笑っていると、そこに更に近づく者が現れる。

「レイザー!?!レイザーじゃないか!!」

かけられた声に相澤がビクリと震え、顔を顰めながら声が出た方を見
る。

そこにいたのはオレンジのバンダナを巻いた緑髪の女性がいた。
制服ではなく、相澤に声を掛けたことからプロヒーローであると推測
するA組達。

「テレビや体育祭で姿は見たけど、こうして直で会うのは久しぶりだ
な!!」

笑顔で声を掛けてくる女性ヒーローに相澤は渋い顔を隠すことも
しなかった。

そして近寄ってきた女性ヒーローに緑谷は目を見開いて、刃羅は顔
を顰める。

「あの人は……!」

「狂笑……」
きやうしやう

スマイルヒーロー『M.S. ジョーク』。『個性』《爆笑》で強制的に笑わせて、思考や行動を鈍らせる戦闘スタイル。ジョークがいる戦場は狂気に満ちているらしい。

刃羅が呟いた言葉が聞こえた梅雨や百、飯田が首を傾げる。

「狂笑？」

「戦闘中に強制的に笑わされるんや。そのせいでまともに戦えんようになる。ヴィランではそこそこの有名な奴や。うちやステインみたいな接近戦メインのもんは関わりたあない奴やな」

「なるほど……」

強制的に笑わされるということは、呼吸を乱されるということ。それによって体の力みが乱れたり、呼吸困難になることで動きが鈍りかねないのだ。

「私と結婚したら笑いの絶えない幸せな家庭になるんだぞ？」

「お前に限ってはその家庭は幸せじゃないだろ」

「ブハ!!」

本気なのかジョークなのか分からない求婚をしているジョーク。それに相澤が返答して吹き出している。

「どうやら顔なじみのようだ。」

「お前の所もか」

「そうそう、おいで皆!! 雄英だよ!!」

ジョークが後ろにいる集団に声を掛ける。

「おお! 本物じゃないか!!」

「すごいよすごいよ! テレビで見た人ばかり!」

「1年で仮免?へえー。随分ハイペースだね。まあ、色々あったからねえ。流石やることは違うよ」

「傑物学園2年2組! 私の受け持ち。よろしくな」

すると黒髪のイケメンが緑谷の手を握る。

「俺は真堂! 今年の雄英はトラブル続きで大変だったね!」

「えっ? あ」

真堂はササツと他のA組の面々にも握手をしていく。

「しかし君達はこうしてヒーローを目指し続けてるんだね。素晴らしいよ！不屈の心こそ、これからのヒーローが持つべき素養だと思うんだ！」

「まぶしい……!!」

さわやかな笑顔で言葉を紡ぐ真堂。

上鳴達はそれに感心しているようだが、刃羅は目を細めて胡散臭げに真堂を見ていた。

「中でも神野事件を中心に経験した爆豪君！」

「あ？」

「君は特別に強い心を持っている。今日は君達の胸を借りるつもりで頑張らせてもらうよ」

真堂が爆豪に手を差し出す。それを爆豪は顔を顰めながら払い退ける。

「フかしてんじゃねえ。台詞と面があってねえんだよ」

「こら、おめー失礼だろー！」

切島が注意するが、爆豪は取り合わない。

真堂はそれに気分を害していないと笑顔で答え、他の者にも挨拶して回る。

そこに相澤が準備に動くように声を掛けて、移動を始める。

「やっぱ結構有名人なんだな。雄英生って」

上鳴が気分よさそうに歩いており、その横で耳郎も恥ずかしそうに頷いて歩いている。

「……上鳴。お前はあの男が言っていた意味を理解しているのか？」

「え？」

刃羅が呆れた目で上鳴に声を掛ける。

それに上鳴や他の者達も首を傾げる。刃羅は真堂達が離れていることを確認して、上鳴達に向き直る。

「あいつは遠回しに『俺は君達を知っている』って言ってんだぞ？この意味分かってんのか？」

「へ？」

「はあ……つまり吾輩達のことを調べていると言ったのである」

『!?!』

刃羅の言葉に上鳴達は目を見開く。

刃羅は呆れた目で言葉を続ける。

「体育祭であれだけ騒がれたのだよ？彼らがそれを見ていないとでも思うのかね？唯一、ライバルである雄英ヒーロー科の生徒の『個性』を見られると言うのにな？」

「あ……」

「特にA組はUSJ事件で注目されていたのです。そして、体育祭でもA組ばかりが目立ったのです。ここにいるほぼ全員の『個性』はバレているはずなのです」

「……でも、僕達は誰も知らない」

「その通り。つまり私達はくアドバンテージを失っているのさ。さして手の内が分かっている者とか分かってない者。どっちが狙いやすい？」

刃羅の問いかけに、上鳴達は仮免試験で起こりうる事態にようやく理解する。

「ちよ……え？……まじ？」

「競争的な試験だった場合、間違えなく雄英は狙われんべ」

ゴクリと唾を飲む上鳴達。

「んなもん、どうだっさいいんだよ！」

「爆豪……！」

「どうせやり合えばバレんだろうが。全員、正面からぶつ殺せばいいだけだ！」

「ま、そうゆうことやね。土傑の時に言うたと同じ。やることは変わりまへん。どうせプロになったらバレることやよって。相手の狙いごと、踏みつぶせばええどす。故にPlus Ultraやよって」

やることは変わらない。待ち受ける戦いは厳しい。されど、それを乗り越えるだけ。

いつもやっていることをやる。

緑谷達は改めて気を引き締める。

コスチュームに着替えたA組一同は、会場に入る。

会場内を埋め尽くすほどの受験者に緑谷達は目を見開く。

すると、壇上に疲れ全開の男が立つ。

「えく……ではアレ、仮免のやつをやります。僕、ヒーロー公安委員会の目良です。好きな睡眠はノンレム睡眠。よろしく」

今のも倒れそうな顔で自己紹介をする目良。

「仕事が忙しくてロクに寝れない……！人手が足りてない……！眠たい……！そんな信念の元、ご説明させていただきます」

目良の様子を心配そうに見つめる受験者一同。

「ずばりこの場にいる受験者1540人一齐に勝ち抜けの演習を行ってもらいます」

目良の唐突な説明にざわつく受験者達。

それに刃羅は腕を組んで顔を顰める。

「いきなり厄介な……」

「刃羅ちゃんが言ってた通りになりそうだわ」

「もはやそう思っただけで備えるべきですわね」

「マジかよ……！」

峰田がビビりながら周囲を見渡す。

目良は説明を続ける。

「現代はヒーロー飽和社会と言われ、ステインの逮捕以降ヒーローの在り方に疑念を呈する向きも少なくありません」

英雄回帰。

緑谷達は刃羅を見ながら、その言葉を思い出す。

「まあ、一個人としては、動機がどうあれ命がけで人助けをしている人間に『見返りを求めるな』は……現代社会において無慈悲な話だとは思わくですが……。とにかく、対価にしろ義勇にしろ、多くのヒーローが救助・敵退治に切磋琢磨してきた結果、事件発生から解決に至るまでの時間はヒクまでに迅速になっています。君達は仮免許を取得し、いよいよその激流の中に身を投じる。そのスピードについてい

けない者ははつきり言つて厳しい」

目良の言葉に受験者達は顔を引き締める。

しかし次の言葉に目を見開くことになる。

「よつて試されるはスピード！条件達成者、先着100名を通過とします」

1540人中100人のみ。

恐ろしいまでの厳選にざわつく受験者達。

「……ヒーロー飽和。そしてステインの英雄回帰にオールマイトの引退。量ではなく質、ということじゃな」

「そうですね」

「これはあ……結構厳しい試験になるかもねえ。一次試験でえこれだもんねえ」

「ケロ。そうですね。頑張りましょう」

梅雨の言葉に頷くA組面々。

「で、その条件と言うのがコレです」

目良が取り出したのは手のひらサイズの機械とボール。

受験者は3つ、ターゲットを他人からよく見える体の好きな場所に取り付ける。

そしてボールは1人6つまで所持できる。ターゲットはボールが当たると発光する仕組みで、3つ発光した時点で失格となる。

ただし、3つ目のターゲットにボールを当てた人が『倒した』ことになり、2人倒した者から勝ち抜きとなる。

「常に周囲を観察する必要があり、連携を意識させてますわね」

「ええ。しかも2人抑え込まないといけないことから、チーム内でも誰がターゲットにボールを当てるかが大事ですね」

刃羅と百はルールを吟味して、作戦を練る。

チームを組んでも1人の者がさっさと2人倒してしまうと連携が崩れる可能性がある。

「最低でも人数分の相手を同時に抑え込む必要があります。さらにその間、他の者達に3つ目をかすめ取られないように注意しながら」

「……中々厳しいわね」

「かと言って単独行動も厳しいですわね」

「えー……じゃあ展開後、ターゲットとボールを配るんで、全員に行き渡ってから1分後にスタートです」

『展開?』

目良の言葉に首を傾げる受験者。

すると会場の天井や壁が開いて行く。

開ききると、そこには山や森、工場、街など様々なフィールドが広がっていた。

「……雄英がマネーを掛けるリーズンがデイスデースか」

「大掛かりだね!」

「こりや更にムズイなあ」

刃羅は呆れながらターゲットとボールを受け取る

葉隠が緊張でハイテンションになり、砂藤がフィールド選びで唸る。

刃羅はターゲットを腹部に横に2つ、背中に1つ設置する。そしてボールが詰められたバッグを腰にセットする。

すると爆豪、切島、上鳴が飛び出し、轟も1人で走り出す。

それに緑谷は顔を曇らせる。

「緑谷。今は乗り切ることに集中するアル」

「乱刀さん」

「始まった瞬間に来ると考えるでござる。皆の者、下手にボールを投げてはいかんでござる!相手のボールとぶつかっては投げ損でござるからな!」

「確かに!」

「つてことは、捕縛優先だな!」

緑谷達は山フィールド方向に移動する。

そしてカウントダウンが始まる。

すると、やはり緑谷達に近づく気配を感じ取った。

「来るよ!!」

『おう!!』

『2……1……START!!』

合図と同時に目の前の岩陰から大量の人影が飛び出してきた。その中には先ほどの真堂達があった。

「自らをも壊す超パワー、それに刃を生やす体。まあ……杭が出れば、そりゃ打つさ!!」

そして全員が同時にボールを緑谷達に向かって投げる。

大量のボールが緑谷達に迫る。

「生温いわあん」

刃羅は不敵に笑いながら、両腕と左脚を蛇腹剣に変えて舞う。

その周囲では緑谷がボールを蹴り飛ばし、芦戸が酸で溶かし、瀬呂がテープで防ぎ、常闇が黒影で弾き、百が盾を生み出して防ぐ。

誰一人としてボールが当たる者はいなかった。

「締まって行こう!」

緑谷が全員に声を掛ける。

それを真堂達はある程度予想していたので、そこまでショックはなかった。

「ほぼ弾くかー」

「こんなものでは雄英の人達はやられないな」

「けどまあ、見えてきた」

すると仲間内でボールを手渡す。

ボールを受け取った者が腕を大きく振ってボールを投げる。そのボール達は地面に突き刺さり、地面を掘り進んでくる。

「皆下がって!ウチやる!」

そこに耳郎が両腕のアンブにプラグを突き刺して、それを地面に当てる。

「ハートビートフアズ!」

耳郎が地面に音を響かせて、地面を砕く。

それによりボールが地面から飛び出て峰田に向かう。

「おいらに来てるう!」

「よよい!」

「粘度、溶解度MAX!アシッドボール!」

刃羅が右腕を薙刀に変えて斬り払い、残りを芦戸が溶解液を壁のよ
うに放出してボールを塞ぎ止めて溶かす。

「助かった！いい技だな！」

「へっへーん！どろどろにして壁を張る防御技だよー！」

「隙が生じた！ブラックアंक！宵闇よりし穿つ爪!!」

耳郎の攻撃で地面が砕かれてバランスが崩れたところを常闇が逃
さずに黒影を巨大な手のように伸ばす。

真堂の近くにいた女子生徒に迫るが、その女子生徒は上半身を体
埋めて逃れる。

「危な！ふうー……強い」

「体育祭で見てたA組じゃないや。成長の幅が大きいんだね」

真堂も流石に顔を引き締める。

すると、

「ふっー」

「!!」

刃羅が真堂に向けてボールのようなものを投擲する。それを避け
る真堂は投げられたものを見て、目を見開く。

「石!?!」

それはボールと同じ大きさの石だった。

「ふむ。君は攻撃系の『個性』ではないようだね」

「!?!」

「それに今も特に攻撃しない。触れることで発動するタイプか」

刃羅は真堂の回避行動で『個性』の特徴を見抜く。

その言葉に真堂や周囲の者は目を見開く。

「あれだけで……!?!」

「十分だろう。回避行動は、人の得手不得手を表す。ヴィランを相手
にこれくらい出来ないかと死んでしまうのでな。ここ数か月で目が肥
えてしまった」

「……はは……それはまだ俺達には厳しいかな」

真堂は笑いながらも冷や汗を流す。

たった一手で刃羅が場を支配した。

その状況を相澤とジョークは近くで座って眺めていた。

声が聞こえないので、話などは聞こえないが。

「乱刀……やはりあいつが場を動かすか」

「随分と雰囲気がある子だね。まあ、体育祭の話からすれば仕方ないけどさ」

「色々あるし、あったからな。あいつは。正直、受験者の中ではある意味飛び抜けているだろう」

「……お前がそこまで言うなんてね」

ジョークは少し意外そうに目を見開いて相澤を見る。

しかし、すぐさまを顔を鋭くする。

「でもね、ヒーローを目指す子をいるのは星の数ほどいるわけで、その志の高さには有名も無名もないんだぜ？ 主役面をして他を見下してつと返り討ちに遭うのはそっちかもよ」

「……それはどうかな」

「え？」

相澤は会場を見下ろしたまま、ジョークの言葉に答える。

「志の高さに有名も無名もない。それには同意するよ。そんなもので決められるなら、それこそこの社会は終わってる」

「……」

「ただ……主役面も見下してもいない。すでにあいつらは何度も返り討ちに遭ってる。あいつらはいつもとどん底から、ただ上を目指して足掻いてるだけだ。『ヒーロー』という存在に誰よりも向き合っていると俺は思ってる」

「……イレイザー」

「A組ってクラスをしばらく見ていて、分かったことがある。連中は気づいているかどうかは分からんが、A組はその実、3人の作用が大きく作用している。クラスをまとめているわけでもないし、中心にいるわけでもない。おまけに仲が良いわけでもない。だが、いつの間にか3人の熱はクラスに伝播していく。妙なことだが大事の渦中の中には必ず3人の誰かがいるんだ。あいつらを見ると、プロの俺達す

らも引つ張られることがある。ジョーク、俺はな期待してるんだ。あいつらの存在が、クラスを底上げしてくれる」

その視線の先では事態が動き出していた。

真堂が両手を地面に触れていた。

「離れる！彼ら防御は硬そうだし、彼女は厄介そうだ。割る!!」

真堂の動きに刃羅は足元にあった大きめの岩を両手で上へ放り投げける。

その岩に他の者達の注意が向く。

直後、

「最大威力！震伝動地!!」

バガア!!

耳郎の数倍の範囲と威力で地面が割れる。

地面が盛り上がり、緑谷達はクラスメイト達と分断されてしまう。

「必殺技なら当然こつちも編んでるよ」

真堂の『個性』《揺らす》。

触れたものを揺らす。ただし、揺れの大きさや速度に応じた余震が体に来て動けなくなる。

真堂は余震が引くのを待ちながらしゃがんでみると、その首に鞭のようなものが巻き付く。

「!?」

真堂は目を見開くが、まだ体が動かない。慌てるが何も出来ることはなく、引つ張られて体ごと宙に持ち上げられる。

「ヨーくん!?!」

「真堂!?!」

持ち上げられる真堂の姿に離れていた仲間達が目を見開いて驚く。

真堂が引つ張られた先を見ると、その先には刃羅が鞭を右手で引つ張りながら真堂を見据えていた。

刃羅は真堂の攻撃の前に岩を投げて自分から注意を逸らし、地面が砕かれながらも真堂に近づいていたのだった。

「俺たち達に固執し過ぎだ。2回目の攻めが防がれた時に一度退くべ

きだったなあ」

「くっ……そー!」

「そして、やっぱり両手で触れる必要があるようですね?」

刃羅は左手でもう1本の鉄鞭を取り出して、真堂の両腕毎体を縛る。それと同時に首の鞭を外す。

「ぐー!」

刃羅は目の前まで引っ張られた真堂の顎を蹴り上げる。そのまま振り上げた脚を振り下ろして、真堂の頭に踵落としを叩き込んで顔から地面に叩きつける。

「っ!」

「焦りよったなあ。これで終わりや」

刃羅はボールを取り出して、素早く真堂のターゲット3つに当てる。

「ほな、また来年。お気張りやす」

鞭を回収して、刃羅は素早く移動を開始する。

「さて!どうしよっかな!」

『あ、ようやく1人目の通過者が……うお!?脱落者120名!たった1人で120人脱落させて通過した!!』

「1人目が出たかよい!あ!ならああつしも一気に行くかああ!」

周囲にクラスメイトは見当たらない。刃羅は下手に合流を狙うよりも通過に向けて単独行動することに決めた。

まだ周囲は砂塵が漂っている。それに身を隠しながら、気配を消して移動する。

少し高めの岩の上に登って、周囲を改めて見渡す。

「駄目でござるな。他のA組は見当たらんでござる。周りにいるのは……真堂の仲間でござろうか?……否。便乗した連中でござるか」

現れた者達は互いに競い合いながらも周囲を見渡している。

やはり雄英狙いの者達のようなだ。

「……合流出来る可能性もあるが、この状況での混戦は厳しいか。別エリアに向かうとしよう」

刃羅は更に便乗する連中が増えると予想し、一度離れることを決め

た。

そして刃羅は高層ビルエリアを目指して移動を始める。
仮免試験一次選考はまだまだ混乱を極めていくのであった。

#45 それは助けがない理由にならない

真堂の地割れで分断された百と梅雨は、障子と耳郎と共に高層ビルエリアに逃げ込んだ。

再び奇襲されることを考えて、ビル内に入って上階に上がる。

「どうですか？障子さん」

「……駄目だ。クラスの奴らの姿は見えない」

「ケロ。困ったわね。どうするの？百ちゃん。攻勢に出る？」

「そうだな。もう通過者も半分を超えているぞ」

「そうですわね……」

百は顎に手を当てて、作戦を練る。

先ほど放送で通過者が56人になったことを告げられた。あまり時間を掛けると合流も通過も厳しくなる。

「待って。誰かが入ってきた」

ビルの壁にプラグを刺して、侵入者が来ないか調べていた耳郎が顔を険しくして声を上げる。

それに百達も警戒態勢を取る。

「数は分かかりますか？」

「……4人。階段が上がって来てる」

「4人？随分と少ないですわね」

「他の仲間が負けて逃げてきたのかしら？」

「ううん。そんな感じじゃない。上にどンドン上がって来てる」

「他に仲間がいる？でも、何故4人だけ先に？」

百は相手の狙いを推測する。

しかし、相手の動きの方が早かった。

突如、耳郎の耳に大音量の音楽が響く。

「うあああああ!?!」

「耳郎さん!?!」

「響香ちゃん!?!」

慌てて耳を抑えながらプラグを壁から話す耳郎。

耳郎に百と梅雨が駆け寄り、障子が代わりに耳を壁に当てる。

「っ！音楽が大音量でなっている！俺ならともかく耳郎にはきついでろう」

「やっぱり響香ちゃんの『個性』がバレてるのね！」

「ということは、やはり狙いは俺達か！」

「やられた……！これでは索敵が！」

百は先手を打たれたことに顔を顰める。

対応策を考えようとするが、事態はどんどん悪化する。

突如、窓ガラスが順番に割られていく。

「っ！物陰に隠れて！」

百の言葉に梅雨達は壁や柱に隠れる。

どんどん窓ガラスが割られて、外の様子が見えにくくなっていく。

「ちい！俺の『個性』を封じる気か!？」

「……これで耳郎さんと障子さんの索敵を封じられた。2人の『個性』を完璧に把握している？」

「八百万！敵の狙いは何だ!？」

「恐らく私達をここにくぎ付けにするつもりですわ！」

「ケロ……その間に私達を包囲するつもりなのね」

「ええ！恐らく、もう近くまできているはずですわ！」

索敵が機能しない以上、もはや敵の位置や人数の把握は出来ない。

どのように展開されているか予測が難しい。

ただでさえ百達の『個性』は把握している敵だ。このまま、ただ数で襲撃してくるとは考えられない。

「だったら急いで動かないと！」

百の推測に耳郎が慌てて飛び出す。

「っ！うかつに動いては!？」

百が叫ぶが耳郎は両手のアンプにプラグを刺す。

「ハートビートファ……！」

耳郎が必殺技を使おうとした瞬間、窓を割った攻撃が室内まで届き、耳郎のアンプを破壊する。

「ああ!？」

「耳郎!？」

「大丈夫ですか!？」

「アンプがやられた!左耳のプラグも!」

耳郎は再び物陰に隠れながら被害状況を叫ぶ。左耳のプラグから少量の血が流れる。

耳郎の言葉に百は顔を顰めて敵の行動を推測する。

「読まれていた……!?!あの一度の攻撃だけで!?!それにこの周到な作戦。かなり頭が切れる者が相手にいるようですね……!」

ここに集まったメンバーは偶然。それなのに完璧に行動を呼んで抑え込んできている。

すでに耳郎と障子は封じられた。つまり次は梅雨と百が標的のはずだ。

「これまで相手は姿を見せていない。索敵を封じたからと言って、突入してくるのならば耳郎さんを攻撃した技をそのまま続けるはず。つまり、まだ遠隔操作で私達を封じる策がある……!」

百はまだこの危機は悪化すると結論を出す。

それはすぐに証明される。

「……なんか寒くないか？」

障子が気づく。その言葉に百もようやく肌寒さを感じる。

「?!?!これは……!空調?!」

天井の空調から冷風が強く噴き出している。

それに気づいて強引にでも動くとしたが、今度は窓にシャッターが下りて閉じ込められる。

「閉じ込められた!?!」

冷気が逃げ場を失い、どんどん室温が下がっていく。

薄着の百も体を震わせ始める。

「やばいよ!どんどん寒くなってきたー!」

「ケ……ケロオ」

「蛙吹!?!」

梅雨が突然倒れる。

障子が慌てて梅雨に近づくと、梅雨は今にも眠り込みそうだった。「どうしたのですか!?!」

「もしかして一気に寒くなったから冬眠!？」

梅雨の『個性』は《蛙》。寒さには弱かったのだ。

百は慌てて対策を考えるが、冷気はさらに強まり、さらに非常階段の扉から火花が上がる。

「え!？」

「まさか……溶接!？」

「くそ!俺達の逃げ道を塞ぐ気か!」

「とりあえず毛布を!」

百が毛布を創造して、梅雨に巻き付けて障子が抱き上げる。

「このままでは俺達も寒さにやられるぞ!」

「ヤオモモ!爆弾でドアを吹き飛ばせない!？」

「この寒さでは水蒸気爆発を起こす可能性があります」

「扉は1つだけだよ!」

「相手が確実に待ち構えていますわ。恐らく電源も抑えられているはずです」

百は考え込む。

障子や耳郎も寒さに震え始める。

そして百はある答えに辿り着いた。

「耳郎さんはもはや索敵も攻撃も出来ない。障子さんと蛙吹さんも同じ。つまり打開策が打てるのは私だけですわ」

「なら早く……!」

「それこそが敵の狙いですわ」

「どういうことだ?」

「相手にとって一番の不確定要素は私の《創造》ですわ。だから相手は私に創造を使わせることで、私の動きを封じるつもりです」

それに障子達も相手の作戦を理解する。

「なるほど。八百万の力を使い切らせた後で、悠々と乗り込んでくる気なのか!」

「ええ。ですから私は『個性』が使えません」

「でも、このままじゃここに閉じこもっていても、仮免試験に落ちちやうよ!」

「けど強行突破は相手も予測しているだろう」

「だったらどうやって!?!」

完全に八方塞がりの百達。

百は何とか打開策を考える。

(どうすれば……このままでは試験が……いえ……違うわ)

百は刃羅と緑谷の事が頭に過ぎる。

あの2人ならば、どうするか。考えるまでもない。自分を危険に晒しても他の者のために動く。

(試験ではなく、今は耳郎さん達の安全を確保しなければ!ならば、私が考えることは!!)

百は覚悟を決めた。

百達がいる部屋の外では白い制服を着た女性軍団が待ち構えていた。

その一番後ろでは左目にモノクルをかけた白髪の女性が椅子に座って、紅茶を飲んでいた。

「ふふ♪もう少しね」

聖愛学園、印照才子。『個性』《I Q》を駆使する天才少女。紅茶を飲み、目を閉じている間だけI Qが増加する。

これで百達の『個性』を推測して、作戦を練る。ちなみに同級生は完全に才子の配下と化している。

「さあ、『個性』を使いなさい。その時があなた達の最後ですよ♪」
不敵に笑う才子。それに周囲の者達は顔を真っ赤にして震える。

その時、

ギヤリリリリ!ドン!ギヤリリリリ!ドオン!

「?この音は!?!」

「ふ、不明です!?!」

「上から!?!」

突如、ビルの上から何かを削る音と何かが落ちる音が響く。

才子達は慌てるが、確認しようにも確かめようがなかった。才子達

の仲間には音に敏感な者はいるが、すでに音が聞こえている以上意味はなかった。

そして、その音と振動も百達にも届いていた。

「今度はなんだ？」

「ヤオモモ!!」

「わ、分かりません!これ以上、相手には仕掛ける意味が!」

何かを創造しようとしていた百も創造を中断して、周囲を見渡す。

そして遂に真上に音が響く。

「来るぞ!!」

ギヤリリリリ!ドオン!!

天井を何かが突き破り、百達の目の前に落ちてくる。

天井に穴が開いたことで空調が止まり、その穴から冷気が逃げている。

そして現れたのは、

「Y E A H H H H H H H H!!」

「刃羅!」

「乱刀さん!」

刃羅が地面に逆立ちして回転しながら叫んでいる。

それに目を見開いて驚く百達。

刃羅は飛び上がって、回転を止めて立ち上がる。

「随分とのんびりしとるやないか」

「どうやってここが?」

「他のビルの屋上からお前達が入っていくのが見えてな。合流しようとしたら、お前達の後をつけて入っていく連中や周囲を包囲する連中がいた。だから少し様子を見ていたのだが、随分と好き勝手にやらせているようだったからな。割り込ませてもらった。ああ、ちなみに外の狙撃犯はもう潰したぞ。全く、お前達がのんびりしているせいで一次試験通過が遅れたのだぞ?どうしてくれる」

「……乱刀さん……!」

「このまま上から逃げるのは簡単じゃがのう。馬鹿にしてくれた礼はせねばなるまい?雄英がこの程度の策略でやられると思われては、雄

英とオールマイトを追い詰めた敵連合に失礼じやろう」

「あはは……それはそれでなんかヤダ」

「全くだ」

刃羅の軽口に耳郎達も苦笑して緊張が解れている。

それに肩を竦めた刃羅は、百を見る。

「私が一番槍を務めるわ。援護と後ろは任せるわよ?」

「……はい!お任せください!」

「では、教えてあげましょう。ござかしい策略は所詮大きな力の前には平伏すしかないのだと!!」

刃羅は敵が待ち構えているであろう扉に走り出し、テンペスタ・ラーマを発動して一気に扉を破る。

「っ!?!あ、あなたは!?!」

「雄英の!?!」

刃羅の出現とまさかの特攻に慌てる聖愛学園の一同。

刃羅は止まることなく、才子に迫る。

「っ!?!」

「やらせない!」

「読んでましたわ!」

「!?!」

周囲の者が才子を守ろうと動くのを読んでおり、百は創造で捕獲銃を生み出していた。それを障子が大量に構えて一斉に捕縛網を発射する。

捕縛網を避けようとした者は冬眠から目覚めた梅雨が舌で攻撃して打ち倒し、耳郎も足のスピーカーで音波を放つ。

百は棍棒で刃羅の後ろについて殴りかかっている。

「そんな……!?!私の作戦が……!?!」

「別に不思議ではない」

慄く才子の前にザシャン!と全身を刃で覆われた刃羅が立ち塞がる。

才子は尻餅をついて後退りする。

「ひい!?!ど、どうしてここに……!?!わざわざ試験に落ちる危険を冒し

「てまで……」

「下民の策など、敵連合の殺意があるものに比べれば可愛いものだぞ？何、嘆くことはない。余らが異常であることは理解している。その異常さは下民の頭では考えることなど出来んだろうよ。それに余は仮免試験に合格しに来たのではない。ヒーローになりに来たのだ。試験に落ちる？それは助けぬ理由にならん！」

才子は目を見開いて固まる。周囲の者も刃羅の言葉に目を見開いている。

百や梅雨達は笑みを浮かべて、刃羅の背中を見つめる。

刃羅はニイイと口を吊り上げながら、才子を見下ろす。

「覚えておくがよいぞ、下民。確かに策とは弱き者が強き者に挑むためのもの。されど大いなる力の前には、策など紙切れに描いた空想に過ぎぬ。盾にもならぬし、壁にもならぬ」

「あ……ああ……！」

刃羅の言葉に打ちのめされる才子。

「さて、終わったか？余らが軍師」

「ええー！」

刃羅が振り返ると、才子以外の者達は全員倒れていた。

百が少し肩で息をしながら刃羅に近づいてくる。

「この下民は貴様に譲ってやろう。余はこの余興に満足したのでな」

「はい」

「でも、どうするの？ここにいる奴らじゃ2人足りないよ？」

才子も含めると倒れているの8人。

誰かが余ってしまう。

「許す。貴様らで好きにせよ」

「いいのか？」

「下民共の仲間はまだいるだろうし、屋上で転がしている奴もいるのでな」

「ケロ。刃羅ちゃん。助かったわ」

「それは早くターゲットを押ししてから言うのだな」

そう言って刃羅は屋上を目指して入ってきた穴から出ていった。

それを見送った百達はターゲットを押ししていく。そして百は才子と向かい合う。

「……ここまでですわ。最も私達も自分達で突破したわけではないので、少し申し訳なく思いますが、これが戦いというものです」

「……そうね。救援と言うイレギュラーを甘く見ていた私達のミス。そして目先の目標に囚われた私達が小さかっただけ。……流石は雄英。完敗ですよ」

才子は目を瞑って肩を落とす。

百は頭を少し下げて、才子のターゲットに当てる。

こうして百、梅雨、障子、耳郎、刃羅は一次予選を通過したのだった。

刃羅達は指示に従い、控室を目指していた。

「はあく、まだ一次試験なのにアンプ壊れたのはイタイなあ」

「左耳は大丈夫ですか？」

「まあ、右耳が残ってるしね」

「乱刀が来てくれなかったら、どうなっていたことか」

「ヤオモモが無茶する直前だったもんね」

「本当に助かりましたわ」

「ケロ」

「あいつらが策略家を気取っていたから間に合ったただけだ」

ヴィラン相手だったら、あんなチマチマしたやり方をしていたら確実に他のヒーローがやってきて混戦になると刃羅は考えていた。

「確実に狙うのは悪かねえがな。こんな混戦状態であんな作戦が完璧に出来るって思ってる方がおかしいんだよ」

「……それに俺達は完封されたわけだがな」

「助けが来てくれる運を持ってはるのも大事なことで」

「……他の皆さんは大丈夫でしょうか」

百は他のクラスメイトの事を心配する。

「ケロ。控室に行ってみないと分からないわ、百ちゃん」

「そうだよ。轟や爆豪達ならもう通過してるよ」

「他の連中だつて合流を目指して動いているだろう。飯田や緑谷が何もしないとは思えないしな」

「そうですわね」

「良くも悪くも雄英は目立っておる。ターゲットがないということはあるまい。多すぎる可能性はあるがの」

肩を竦める刃羅に苦笑しながらも頷く百。

通過した以上出来ることは何もない。今は信じて待つだけだった。

「それにしても一次試験でこの過酷さ。二次試験はどうなるのか」

「やめてよお！緊張しちゃうじゃん！」

「ケロオ。でも、考えとかなないとまた出遅れてしまうわ」

「乱刀さんはどう考えますか？」

「……一次試験で試されてんのは情報力、チーム内での連携、そしてリミットがある中での判断力と行動力と制圧能力ってとこだべな」

刃羅の推測に頷く百達。

「でもこれじゃあヴィランとの戦闘しか想定して無いアル。ヒーローの本質は『人助け』ネ。次でそれを見ないとヒーローの素質が問えないアル」

「……確かに」

「つてなると次は人命救助を想定した試験ってこと？」

「ええ、恐らくは」

「ここで考えるのは最初の公安委員の話なのです」

「ケロ？」

首を傾げる梅雨に障子、耳郎。

百は自分で答えを出そうと考えている。

「お師匠……ステインの名前と思想をわざわざあそこで話したのは何故？一次試験の趣旨のため？それにしても内容は内容が重すぎるわ。別に後半の話だけでも良かったはずよ」

刃羅の言葉に腕を組んで考え込む障子と耳郎。

「そしてえわざわざ100人に絞ったのは何故かあ」

「……流石に1500人も受験生全てを見るのは不可能に近い。し

かも屋内まで入れるのですから」

「そうだな」

「ということは……二次試験では私達の言動を細かくチェックするた
め？」

「そう考えるのが妥当であるな。つまり、二次試験は少なくとも競争
ではないと考えられるのである」

百と刃羅の推測に耳郎は分かったようで分からなかった。

「うくん？つまり……どんな試験？」

「ヒーローはいつも仲間内だけで戦うわけではありませんわ。時には
その場で初対面の方々と協力しなければなりません」

「ケロ……つまり他校と協力するような内容ってことね」

「そだね！他校の人達とすぐさま協力して、役割分担できるか!? っ
とこかな！」

「なるほど」

「……ムズイなあ」

おおよその予想を立てながら、刃羅達は控室に到着する。

中に入り、見渡すと轟が座っていた。

「轟さん！」

「お前らも通過できたのか」

「ああ。他の奴らは？」

「いや、ここにはまだ俺だけだ」

「そうですか……」

「まだ30人近く空きがあるんだからさ！大丈夫だよ！」

耳郎の励ましに笑みを浮かべて頷く百。

ターゲットを外して、ボールも返却し、お菓子や飲み物を飲んで休
憩する。

5分ほど休憩していると緑谷、麗日、瀬呂、爆豪、切島、上鳴が現
れる。

「皆さん！よくぞ無事で！心配してましたわ」

「ヤオモモー！ゴブジよゴブジ！っーか早くね!？」

「俺達だっつてっいさつきだ。轟が一番だな」

「刃羅が来てくれなかったら、やばかったけどね」

刃羅はハグハグとテーブルの上にある軽食を頬張っている。

その姿に耳郎達は苦笑して、談笑する。

「これでA組は12人か」

「後8人」

「先ほどのアナウンスでは通過者は82名。あと18人です」

「……ちよつとマズインちゃうか？」

「え？」

緑谷達は刃羅に目を向ける。

刃羅は緑谷達を見渡して、ハグハグと食事を続ける。

「残ってる面子で指揮を取れるのが、実質飯田君だけだよ。全員が集まっていれば、いいけど、バラバラなら誰かが焦って崩れるかも？」

「飯田君……」

「あ、あいつらなら大丈夫だろう？」

「終盤になればなるほど、混戦になって激しくなる。開始時から攻められ続けていたんだ。集中力も体力も限界に近づいているだろう」

刃羅の言葉に不安そうに顔を見合わせる上鳴達。

そして続々と控室にやってくる受験者。

『えー……これで通過者は90人。後10人ですねー。早くー』

「後10人……!？」

「A組は……」

「後8人。これ……もう全員は無理かなあ……」

「飯田君……!皆……!」

「頑張れ!頑張れ!」

通過しているが焦り始める緑谷達。

放送以外では情報が分からないので、もどかしい思いになる。

刃羅は腕を組んで目を瞑って立っている。

「……ここで倒れるか?A組。インゲニウム」

そして、

『ここで2名通過!残り8名!』

「うう〜！」

「みんなあー！」

『7名！……5名！続々と！この終盤で一丸となった雄英が！！コンボを決めて通っていく！！』

「雄英い！！続々う！！」

「いっけー！！」

放送に麗日、瀬呂、上鳴を筆頭に一喜一憂する。

『そして……残った雄英2名が通過！0名！！100人！！今埋まり！終了！です！ツハー！！！』

「ツハー！！！」

目良の叫びを真似して飛び上がる麗日達。

百や梅雨達もホツと息を吐く。

「全員一次通過あー！！」

「ケケロオー！」

「やったな」

「すげえ！こんなんすげえよ！」

「……これくらい出来てもらわないと困るわよ」

刃羅は飛び跳ねる麗日達を横目に小さく呟く。

その声は障子には聞こえていたが、障子は特にツツコまなかつた。

こうしてA組は全員一次試験を通過した。

#46 二次試験 『雄英にいる!』

ボロボロの飯田達が控室に到着した。

緑谷達が笑顔で駆け寄る。

「飯田君!」

「緑谷君!皆!」

「心配したよお〜!」

「すまない。峰田君や芦戸君達に助けられたよ」

横では芦戸や砂藤達が切島や上鳴達とハイタッチをしている。

そこに放送が響く。

『え〜、脱落された皆さんの撤収が終了しました。それでは皆さん、モニターをご覧ください』

「モニター?」

控室にいる全員が壁に取り付けられたモニターに目を向ける。

そこに映されたのは遠巻きに撮られた試験会場だった。

「フィールド?」

「なんだろう?」

緑谷と麗日が首を傾げる。

すると、突如ビルの一角が爆発し、それに連動するようにフィールドのあちこちで爆発が起こり、フィールドが崩れていく。

それに目を見開く受験者一同。

フィールドは無残な姿に変わり、瓦礫の山になった。

『これが最後の試験です!皆さんにはこれからこの被災現場でバイスタンダーとして救助演習を行ってもらいます!ちなみに皆さんは仮免許を取得したのものとして活動して頂きます』

「バイスタンダー?」

「バイスタンダー。現場に居合わせた人の事だよ。授業でやったでしよ」

上鳴と峰田の誤りを葉隠が訂正する。

「……」

「やっぱり刃羅ちゃんと百ちゃんの推測通りになったわね」

「ああ」

刃羅はモニターを見つめながら考え込んでおり、その横で梅雨と障子が先ほどの会話を思い出して頷いている。

すると、モニター内に子供や老人の姿が多数見受けられて控室がざわつく。

彼らは『HELP・US・COMPANY』。通称『HUC』。要救助者のプロだそうだ。

受験者は傷病者に扮したHUCを救助を行うことになるのだ。

救助ポイントを評価され、終了時に基準値を超えていれば合格らしい。

控室は10分の休憩時間が与えられた。

放送を聞き終えた刃羅は百に近づく。

「乱刀さん？」

「尋ねてえことがあつべ」

「何でしょう？」

刃羅は百にある『もの』が作れるか尋ねる。

聞いた百は一瞬目を見開くもすぐさま理由に思い至り、顔を鋭くして頷く。その後、すぐさま2人は行動を始める。

梅雨や障子も2人の傍にいて話を聞いており、2人に協力する。

その横で緑谷と飯田がモニターを見ながら、ある光景を思い浮かべる。

「緑谷君……」

「うん……神野区を模してるのかな」

誰もが記憶に新しい大事件。死傷者多数、ほぼ壊滅になった街。

現場にいた緑谷達はあの光景は決して忘れられない。

「あの時の俺達は爆豪君をヴィランから遠ざけて、プロの邪魔をしないことに徹した。その中で死傷者もたくさんいた」

「うん……頑張ろう」

「緑谷あ!!!」

すると上鳴と峰田が目を見走らせて駆け寄ってきた。

「何してんだあ！テメエはあ!？」

「試験中だぞ！人生舐めてんのか!？」

「わ!?!何!?!やめて!?!」

「とぼけんな！てめえ、あの士傑の女と裸でイチャイチャしてたらしいじゃねえか!」

「ああ……瀬呂君か！違うよ！そんなんじゃないってば!」

慌てて弁明する緑谷だが、説得力は皆無だった。

そこにその士傑高校の者達が緑谷達に近づいてくる。先頭には毛むくじやらの男が立っていた。

毛むくじやらの男は爆豪に近づいて行く。

「爆豪君よ」

「あ?」

「肉倉……糸目の男が君の所に現れなかったか?」

「……ノした」

「やはり……！色々無礼を働いたと思う！あれは自分の価値基準を押し付ける節があつてね。何かと有名な君を見て、暴走してしまった。雄英とはいい関係を築き上げていきたい。すまなかったね」

「……気にすんな。こつちにやあれ以上に価値観を押し付けるイカレ野郎がいんだよ」

爆豪はギロリと離れた所にいる刃羅を睨みつける。

毛むくじやらの男、毛原はその視線を追う。そして刃羅を見て、納得するように頷く。

「……確か彼女は体育祭で結構激しいことを叫んでいたね。なるほど。肉倉の言葉では、彼女の言葉には敵わないだろうな」

そして離れていこうとした時、轟がイナサに声を掛ける。

「おい、坊主の奴。俺、なんかしたか?」

「……ほホウ」

轟の言葉にイナサは目を鋭くして、振り返る。

「いやあ、申し訳ないっすけど……エンデヴァアの息子さん?」

「俺はあんたらが嫌いだ。……あの時よりいっくらか雰囲気変わった見

たいすけど。あんたの目は、エンデヴァーと同じっス」
そう言つて去つていくイナサ。

轟は言われた言葉に固まったまま考え込む。

それに緑谷が声を掛けようとするが、その時に警報が鳴り響いた。

ジリリリリリリ!!

『ヴィランによるテロが発生!!規模は〇〇市全域。建物倒壊により傷病者多数!!』

「演習のシナリオね」

「え!?!じゃあ……」

「始まっぞゴラア!!百お!手筈はあ!?!」

「問題ありませんわ!」

するとまた控室が開いて行く。

『道路の損壊が激しく、救急先着隊の到着に著しい遅れ!!到着するまでの救助活動はその場にいるヒーロー達が指揮をとり行う!1人でも多くの命を救出すること!!START!!』

そして全員が走り出す。

走り出してすぐに刃羅は耳元に手を当てる。そこには小さな機械が取り付けられていた。

「聞こえるでありますか!?!」

『問題ありません!』

『聞こえるよー!!』

『うるっせえ!黙れ!』

刃羅が百に提案したのは『小型無線機』。それをクラスメイト達に配つたのだ。

刃羅の耳に全員の返答が聞こえる。1人は怒鳴っていたが。

「よし!では、適時連絡を!他校との協力はもちろんだが、身内での連携が最も手早い!連絡は密にしろ!」

『了解!』

『行くぜえ!』

『まずは一番近く、遮蔽物が多い都市部エリアへ行きましょう!』
『了解だ!』

『あ！爆豪!?!だから1人で行くなつて!』

『うるせえんだよクソがあ!!』

結局爆豪や切島達は単独で動き出したらしい。

それにため息を吐きながらも刃羅は都市部エリアに入る。

エリアは完全に倒壊しており、どこもかしこも今にも新たに崩れそうだった。

「ヴィランによるテロじゃ!!爆破物などに注意せい!儂はまず周囲を確認してくる!」

『あ！子供が!?!』

早速緑谷が負傷者を発見したらしい。

刃羅は不審物の有無を確認しながら走り回る。

すると瓦礫に下半身が挟まれた老人が倒れているのを発見する。

「ヒーローや!意識はあるかいな!?!」

「う……た、助けてえ……」

老人の男は呻きながら刃羅に手を伸ばす。

刃羅はその手を握る。そして見える限りの観察をする。

「もちろんなのです!頭から出血はないけど痛みはあるのです!?!どこが特に痛むのです?」

「うう……あ、足があ……痛い」

「……脈は大丈夫。呼吸は……少し速い。体は……手足からの出血のみですわ。おじい様、上半身は瓦礫に当たってないかしら?」

「だ、大丈夫だ……」

「ちよつと太もも触りますよつて。……脈はしっかりしてはる。瓦礫をどかしても血栓とかはなさそうやね。瓦礫除けますえ?」

「あ、ああ……(ほう、思ったよりしっかり見るねえ。声かけもしてる)」

刃羅は瓦礫を除けて、老人の両足を確認する。

歩行は不可能と判断して、耳元の無線機に手を当てる。

「……歩行は無理だべ。百!負傷者発見しただ。周囲に簡易救出所や救護所は出来てるべか?」

『了解です。控室が救護所になってます。こちらの近くには負傷者を

集めてトリアージを行っています』

「了解！そつちに行く！おじいちゃん！ちよつと体持ち上げるよ！大丈夫！すぐに安全なところに運んであげる！」

「おお……ありがとう……」

刃羅は横抱きに老人を持ち上げて、移動を開始する。

出来る限り衝撃が行かないように注意しながらも素早く移動する。

その移動方法に運ばれている老人は目を見開く。

（ほとんど揺れがない。それに少し遠回りになっても崩落に巻き込まれないルートを素早く選んでいる！何より……）

「ご老人。どうだ？痛みがひどくなったりところはないか？苦しくなってきたはいないか？」

「大丈夫だ……（常に儼の変化に注意を払っている！中々！）」

そして刃羅はエリアに設定された簡易救出場に辿り着く。

「負傷者1名であります！両脚負傷！頭部、胴体の出血はなし！呼吸、脈も著大な異常はありません！」

「ご苦労様！そちらに！」

「それと途中で2名負傷者発見したのだよ！手が空いている者はいないかね！」

「どこだ!?俺が行ける！」

「私も！」

刃羅は示された場所に老人を寝かせながら、周囲に声を掛ける。

それに他校の者が手を上げて、刃羅に近寄る。

「おじいさん！もう大丈夫アル！ここで待つてほしいアル！」

「おお……ありがとうとおよお（なんと……走りながら他の負傷者も見つけていたのか）」

「では御免！こつちでござる！」

「おお!!」

刃羅は数人率いて走り出す。

そして崩れて少しだけ隙間が空いたビルと半分だけ崩れているビルの上の階を指し示す。

「そのあビルの奥う！もう1人はああのビルの上え！」

「どうやって入り込んだんだよ!？」

「私が入る!どいて!」

「クソ!入り口の瓦礫どかすと崩れそうだ!」

「だめだ!このビル、階段崩れてる」

「あ!あつしが登るよい!」

どうやら飛行系の『個性』持ちはいないようだった。

刃羅はひよいひよいと倒壊したビルを登っていく。

登った先には50代の女性が蹲っていた。

「遅くなったのである!ヒーローである」

「助けてー!!死ぬうー!!」

刃羅を見た瞬間、パニックになったように叫んで飛び込んでくる女性。

刃羅はそれを受け止めて、声を掛ける。

「もう大丈夫だよ。この下にもくヒーローが来てるからね」

「早くー!早く助けてー!!」

「もちろんじゃ。どうじゃ?手足が痛んだり、血が出ている所はあるかの?頭は打ったりしたかの?」

「早く!!早くー!!(落ち着いて声かけ出来てるわね。でも、まだ不十分よ!)」

「…:頭に少量の出血。右腕からも出血。あまり動かせんか。脚は大丈夫で、胴体も出血はなし」

「いやー!!(そう、まずは状態確認よ!)」

「大丈夫なのです。深呼吸するのです。一緒にここを出るのです。少しでも協力してほしいのです」

女性の状態を確かめながら、背中をさすって落ち着かせる刃羅。

それに泣き叫んでいた女性は少しだけ落ち着いた様子を見せる。

「おーい!大丈夫か!」

すると、下から声が聞こえてくる。

「大丈夫だ!頭部に少量の出血!右腕も負傷している!それ以外は大きな負傷はない!」

「そうか!良かった!」

「誰か着地を受け止められる奴はいねえか!? 壁のヒビが酷え!」

「士傑の毛原だ!! 私が受け止める!」

「イエア!」

刃羅は女性を再び抱き上げる。

「目を瞑ってくださいませ。少しでも我慢してください」

「大丈夫なの!? 大丈夫なの!? (さあ、どうするの?)」

「絶対に大丈夫やで! これ以上怪我はさせへん!」

「出来る限り上で捕まえる! 見えるか!」

すると、刃羅の視界に束になった毛が見えた。

それを確認すると刃羅は飛び出して、その毛の上に飛び乗る。

「見事!」

「もう大丈夫よおん」

「え!?! ホント!?! ホント!?! (衝撃がほぼ無し!?! それに行動が速いわね。

時には落ち着くのを待つ前に危険な場所から移動することは大事よ!!)」

「ほら、下を見ろ」

刃羅の言葉に女性は目を開ける。下に目を向けると、すでにビルの外で多くの受験生が下に待機していた。

下に降りた刃羅は近くにいた受験者に改めて状態を確認してもらい、女性を救護所に連れていってもらう。

「A組。状況は?」

『現在小チームに分かれて救出活動中です』

『他校の人と行動中だ!』

『ケロ。こっちは湖で救助しているわ。まだ何人か残ってるわ』
『そうか』

他のA組も順次救助中のようだ。

刃羅は周囲を見渡し、このエリアではほとんど救助を終えていると判断する。

「……順調と言えば順調である。しかし……」

「どうした?」

刃羅の呟きを聞いた毛原が刃羅に声を掛ける。

毛原に目を向けて刃羅は少しだけ顔を顰める。

「……嫌な視線を複数感じる。敵意だ」

「っ!!それは……」

「元々この崩壊はテロじゃ。つまり……まだ脅威は去っておらんはず」

刃羅が言いたいことを毛原も理解した瞬間、

ドオオオオン!!!

「!?!」

『なに!?!』

『爆発!?!』

エリアでも爆発が起こり、試験場の壁が吹き飛ぶ。

『ヴィランが姿を現し、追撃を開始!現場のヒーロー候補生はヴィランを制圧しつつ、救助を続行してください』

「救護所に近い!?!」

「ちい!?!A組!救護所に誰がいるか!?!」

『僕!緑谷!』

「敵は!?!」

『数十人規模!!しかも……ギャングオルカがいる!』

『はあ!?!』

「とことん神野区意識か!」

刃羅は走り出して緑谷の元に向かう。

緑谷は避難を手伝いながらも敵の動向を観察し続ける。

「近すぎる!?!このままじゃ間に合わない!」

緑谷は飛び出してヴィランの注意を引こうと考える。

ただ問題がある。

(ギャングオルカの『個性』は《シャチ》!確か超音波が使えたはず!僕だけじゃあ全員なんて止められない!)

しかし、動かなければどうしようもない。

そんな緑谷を見てギャングオルカは鼻で笑う。

「この戦力差に殿が1人だと?舐められたものだ……!」

「くっ！」

「下がれ！緑谷！」

「!?」

ギャングオルカの横から氷結が押し寄せる。

緑谷は飛び下がり、ギャングオルカは超音波で氷を砕いていく。

現れたのは轟だった。

「轟君！」

「手伝う。……ん？」

「ふうきイイイ飛べええつつ!!」

轟がギャングオルカを見据えると、ふいに風が舞う。

すると、更に横から突風が襲い掛かり轟の氷ごとヴィランを吹き飛ばす。

現れたのはイナサである。イナサは空中で止まり、ヴィランを見下ろす。

「ヴィラン乱入とか!!!なかなか熱い展開にしてくれるじゃないっすか!!……ム」

「ム」

しかし轟の姿を見ると、顔を顰める。それに轟もつられて顔を顰める。

緑谷はそれを見て、とりあえず避難を優先する。

（あの2人なら僕よりも多数への制圧に向いてる！ここは下手に邪魔するより避難が優先だ）

『緑谷!!状況教えやがれゴラァ!』

「乱刀さん！今、轟君と士傑の夜嵐君が来た！僕は避難を優先するよ」
『ならええか。こっちも負傷者見つけてしてもて、すぐに行けへん!』

「了解！」

緑谷は負傷者を抱えて走り出した。

ギャングオルカを見据えた轟。

そこにイナサから声を掛けられる。

「あんと同着とは……！」

「……お前は救護所の避難を手伝ったらどうだ？お前の『個性』的にも適任だろ。こっちは俺がやる」

「……ムムム」

轟はイナサに若干苛立ちながらも声を掛けて、ギャングオルカに右腕を向ける。

イナサは轟の言葉に唸りながらもギャングオルカを見下ろす。

そして轟が炎を放つ。すると同時にイナサも風を放出して、炎と風が逸れる。

それにギャングオルカ達は首を傾げる。

「なんで炎だ!?熱で風が浮くんだよ！」

「さつき氷結が防がれたからだ。お前が合わせてきたんじゃねえのか？俺の炎だつて風で飛ばされた」

「あんたが手柄を渡さないよう合わせたんだ！」

「は？誰がそんなことするかよ」

「するね！だつて、あんたはあのエンデヴァーの息子だ!!」

いがみ合うイナサと轟。

それにギャングオルカやギャングオルカのサイドキック達は顔を見合わせる。

「……さつきから何なんだよ。お前……！親父は関係ねっ!？」

イナサに顔を向けた轟にベチャ！と灰色の塊が当てられる。

「セメントガン！すぐ固まって動けなくなるぜ！」

「敵を前にケンカするとは。論外だな……！」

サイドキック達が2人に向けて右手に取り付けられた銃でセメントを発射する。

それを2人は躲すが、いがみ合いはやめなかった。

「俺はあんた達親子だけはヒーローとして認められないんスよおー！以上！」

2人は再び風と炎を放って逸らし合ってしまう。

「はあく………とりあえず」

ギャングオルカがため息をつきながら轟に腕を伸ばす。

轟は回避行動をとるが、ギャングオルカは超音波をイナサに向けて放つ。

「邪魔な風だ」

イナサはそれを避けようとするが、避けた先からセメントガンを当てられて超音波を浴びてしまう。

「があ!？」

超音波とセメントで風のコントロールを失い、地面に落ちていくイナサ。

それに轟は気を取られ、ギャングオルカに超音波を浴びて膝をついてしまう。

それを偶々振り返って目撃した緑谷は目を見開いて足を止める。

そして背負っている負傷者を近くの受験者に任せて戻ろうとするが、サイドキック達がこちらに走り始めたのを目撃する。

「くそー!」

『緑谷君! 状況は!?!』

「飯田君! 轟君達がやられた! ヴィランがこっちに来る!!」

『轟が!?!』

「夜嵐君といがみ合ってたから……!」

『何を……!』

「とりあえず足止めを……! 絶対に行かせない!」

『デクくん!』

状況を説明しながら構える緑谷。

状況は最悪だった。

麗日達は負傷者を抱えながら焦りを顔に浮かべる。

その時、

「スウ……雄英A組イイイイ!!」

『!?!』

突如、刃羅の声が無線機から、そして試験場に響き渡る。

百達は上を見上げると瓦礫の上に刃羅が立っているのが見えた。

それに思わず足を止める百や麗日達。

「ターボヒーロー!! インゲニウム!!」

『っ!? な、なんだ!?』

「お前は今どこだ! 周囲にはA組の誰がいる!？」

『……救護所からは少し離れている! 近くには常闇君、蛙吹君、芦戸君、葉隠君だ! 救助者は1名!』

「よし!! インゲニウム! お前はツクヨミを連れて、今すぐデクの救援に全速力で迎え!!」

『っ!!』

刃羅の指示に目を見開く飯田やクラスメイト達。

ヒーロー名で呼ぶ。その意味を飯田は理解した。

「今度こそ!! 駆けつけてみせる!!」

『……もちろんだ!!』

「ツクヨミ!! 林間合宿のリベンジだ。今度は連中を抑え込め!!」

『承知!!』

『行くぞ!! ツクヨミ!』

「オールマイトオタク、デク!!」

『へ!? な、なんで今それ……!?』

「1人も通すな。オールマイトに憧れてるならな!」

『っ!』

その言葉に思い浮かべるのは神野区でのボロボロになりながらも、オール・フォー・ワンの攻撃から一般人を守るために立ちはだかったオールマイトの姿を思い出す。

刃羅はそれをやれと言っているのだ。

『了解!! 絶対を守ってみせる!!』

「よし!! クリエティ!!」

『はい!』

「リアカーを出せ! そこに負傷者を乗せて移動しろ! 途中で会ったヒーロー達から負傷者を受け取って、そいつらを応援に動かせ!」

『了解です!』

「テンタコル! お前はリアカーを引きながら索敵!

ウラビティ！リアカーを浮かせて衝撃を消せ！

グレイプジュース！セロファン！お前達は負傷者をリアカーに固定し同行！近づいてきたヴィランの足止めをしろ！！

『任せろ！』

『了解！』

『やけくそだあああ！！』

『見せ場あ！！』

「トウインクリング！イヤホン・ジャック！お前達はレーザーや音で敵を引きつけろ！！アニマ！鳥を操って敵の周囲を飛ばせろ！インビジブル・ガール！お前は負傷者を運べ！」

『お任せ☆』

『やる！』

『うん……！！』

『地味だけど頑張る！』

「レッドライオット！お前達は!？」

『わりい！救護所とは逆側だ！それに負傷者も2人抱えてる！』

「ならば構わん!!そっちにも敵が来るかもしれん！お前が壁になれ！

その間にチャージズマと爆豪が敵を排除してくれる！」

『おっしやあ！』

『やるぜー！』

『指図すんなあ！！』

『アラジーン!!私達は!?!』

『ケロ』

『俺もだ！』

どんどん指示を出す刃羅。

名前をまだ呼ばれてない芦戸や梅雨、砂藤が声を上げる。

それに刃羅はニイイと口を吊り上げる。

「決まっているだろう……！ヴィラン退治だ!!斬り殺せ!!」

『駄目よ。アラジンちゃん』

『斬り殺さないけどやるぞー!!』

『よっしやあ!!』

「シヨート。聞こえているか？」

『……』

「聞こえているなら1分……いや、30秒でいい。死ぬ気で抗え!!」

『……?』

「よいか? 30秒全力で抗え。……余らが行く!!!」

『っ……!』

無線機越しでも伝わる刃羅の自信に満ちた声。

それに全員が嫌でも鼓舞される。

「見られているならば、見せつけてやろうではないか! ここにいる全ての者達に!!」

刃羅はヴィランがいる方向を見据える。

「ヒーローは!! 雄英にいる!!」

まだヒーローに対する答えなど出ていない。

未だにヒーローへの不信はある。ステインが間違っているなど思っていない。

それでも、少なくともここにいるA組はまだ信じられる。応えようとしてくれている。

それを無駄にされるのは、馬鹿にされるのは嫌だった。

「仮免!! それがなんだ! 助ける行為に仮も偽もあるものか!! 目の前に助ける命があり、目の前に倒すべき敵がいる!! ただそれだけで十分だ!!」

試験だろうが、偽物だろうが関係ない。

助けを求める声があるなら答える。誰かを傷つけようとするから倒す。

今はそれが最も重視すべきこと。

「行くぞA組!! 乗り越える!!」

『おう!!』

そして刃羅は走り出した。

#47 試験終了!

『ヒーローは!! 雄英にいる!!』

その言葉を聞いた時、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

(俺は……本当に……なにしてんだ)

くだらないことに囚われて、試験だからと甘く見て、最悪を招いた。

これがもし神野区だったら? 本番だったら?

父親であるエンデヴァーが認められないということすら、どうでもよくなるほどの悲劇が待っているだろう。

そうなればヒーローだなんて名乗れるはずがない。いや、名乗らせてもらえるはずがない。

今の声の主は、絶対に許さない。本当に殺しに来るだろう。

(情けねえ……あれだけあいつの覚悟を見てきたのに……まだ最低の私欲に拘ってた)

本当のヒーローを取り戻す。

そのために悩み続けて、抗い続けている刃羅に比べて、自分は何と小さな事ばかりに目を向けているのだと己を恥じる轟。

(30秒耐えればいい? 馬鹿か……俺は!!)

轟は未だ痺れてる体に活を入れる。

(最後まで!!……いつらを倒すまで!! 放ち続ける!!)

ゴオオ!! と轟の右半身から炎が噴き出す。

「ぬ!?!」

ギャングオルカは飛び下がり、再び轟に超音波を放とうとする。

すると風が舞うのを感じた。

「っ!?!」

風で炎が巻き上げられて炎の渦を作り出し、ギャングオルカを閉じ込める。

「動けない身体で……ここまで……フフ……いいじゃないか」

(まだだ!! まだ温度を上げろ!!)

動けないならば体が動けなくなろうと関係ない。

しかし反対側からサイドキックが駆けつけてくる。それを轟は氷結を生み出して邪魔をさせないようにする。

(動けねえなら……同時に使っても関係ねえや)

轟はただ炎をさらに大きくすることに集中する。

それに合わせてイナサも風を操って、それを補佐する。

「くっ！」

流石にきつくなってきたギヤングオルカ。

ギヤングオルカは乾燥に弱い。

「……見事だ。並みのヴィランであれば諦め……泣いて許しを請うだろう。ただ、そうでなかった場合は？」

ギヤングオルカは徐に水が詰められたペットボトルを取り出して、体に水を掛ける。

それを見た轟とイナサは顔を顰めるも『個性』は止めない。

しかし、体を濡らしたギヤングオルカは強めに超音波を放ち、炎の渦を掻き消した。

「で？次は？」

「余が務めよう」

「!?」

轟達を見下ろすギヤングオルカの頭上から声が響く。

目を見開いて見上げた先には全身を刃で覆い、両腕をトウ・ハンド・ソードに変えて振り振りながら飛び迫る刃羅の姿があった。

ギヤングオルカは慌てて飛び下がる。

刃羅の大剣は地面に叩きつけられ、地面を砕く。

「よく耐えた！褒めて遣わすぞ！ショート！」

刃羅は両腕をロングソードに変えて斬りかかる。

ギヤングオルカは腕のプロテクターで防ぐがヒビが入る。それを見てすぐさま振り払い、超音波を放とうと頭を向けるが、それを読んでいたかのように刃羅は右脚を振り上げて顎を蹴り上げようとする。

「ぬ!？」

「やはり頭頂部からの放射か！それに随分と重そうよな！その装備!!」

ニイイと笑いながら腕を振るい、蹴りを放ち、ギヤングオルカの頭を下げさせないように動く刃羅。

さらにギヤングオルカの動きと装備から、それが防具ではないことを見抜いた。

「っ……やはりお前は噂通り厄介なようだな」

刃羅の動きの良さは情報に挙げられていた。

実際に相対すると『良い』なんてレベルではなかった。

ギヤングオルカは捕まえようと腕を伸ばすと、刃羅はスライディングで下に滑り込んで腕を躲す。

そしてギヤングオルカの股を抜けようとしながら、両腕をコルセルカに変えてギヤングオルカの腹部に突き立てて打ち上げる。

「があ!？」

「な!! シヤチョー!？」

「あいつを止めろ!!」

ギヤングオルカの腹部プロテクターにヒビが入る。それにサイドキック達が慌てて、セメントガンを発射する。

刃羅は立ち上がりながら荒刃刃鬼を解除して、体を捻り回転を始める。セメントガンを躲し、当たってもテンペスタ・ラーマの回転で張り付くのを防ぐ。

「効かねえ!？」

「いつまでも回らねえだろ!そこを狙うぞ!」

「そうはさせないわ」

「!?!」

「ケエロオ!!」

「!?!」

突然サイドキックの真後ろに現れたのは梅雨だった。舌を振り、サイドキック達を振り払う。

「やべえ! 増援だ!」

「おおらあ!!」

「うわあ!？」

「黒影!!」

「アイヨオ!!」

「ぎゃあ!?!」

サイドキックに砂藤が岩を投げつけて当て、常闇が黒影で振り払う。

「……」

「まだ起きれないのかしら? 轟ちゃん」

「俺が運んでやるぜ!」

「危ない! 下がれ!」

「!?!」

砂藤が轟を抱えようとする、セメントガンが砂藤達に放たれる。それに一度離れざるをえない砂藤達だった。

「くそ!」

「ここまで乱射されたら舌も伸ばせないわ」

「やっぱ多いな!」

「刃羅ちゃんがギャングオルカを抑えつけてくれてるだけありがたいわ」

「でも、いつまでも1人じゃ!?!」

「……いいえ。大丈夫よ」

刃羅に目を向けた梅雨は何かを感じ取った。何か狙いがあるようだ。

その時、梅雨と砂藤の耳からある声が響いた。その声に耳を傾けた2人は聞こえた内容に目を見開いた。

ギャングオルカはすでに立ち上がっており、再び刃羅が動き回って攻撃を仕掛けている。

「ちい! (無理に捕まえようとするれば先ほどの二の舞! しかし、遠くから放とうにもこいつの方が速い! 離れられん!)」

「しい! ふ!」

刃羅はギャングオルカの正面に立たないようにしながら、斬りかかり続ける。少しでも頭を下げる素振りを見せれば蹴り上げを放ち、腕を伸ばすならば腰を落とす。完全にギャングオルカの超音波を封じ込んでいた。

その間にもサイドキック達には受験者達が押し寄せてきていた。
その時、

「轟い!!」

「っ?!馬鹿な!?まだ動けるわけが!」

刃羅が轟の名前を叫びながら後ろに下がる。

それにギャングオルカは驚いて、轟を振り返る。しかし、轟はまだ倒れていた。

ギャングオルカはすぐさまブラフであることに気づいて、刃羅を振り返ろうとするが、その前にギャングオルカの体に2本の鉄鞭が巻き付く。

「な!?!っ?!しまった!」

「油断しよったなあ!」

「この程度!!」

ギャングオルカが鞭を引き千切ろうと力を入れる。

それをさせまいと腕を引く刃羅。

「梅雨!!砂藤!!今じゃあ!!」

「!」

「砂藤ちゃん!!」

「おうよお!!轟!!行くぜえ!!」

「な!?!」

ギャングオルカが再び前を見ると、砂藤と梅雨が轟を抱き起して轟の右腕を支えてギャングオルカに向けていた。

(ブラフではなかったというのか!?)

「シヨオオトオオオ!!」

刃羅が全力でギャングオルカを締め付けながら叫ぶ。

それに轟は痺れながらも、しっかりとギャングオルカを見据える。

『俺つちがギャングオルカを捕らえる。誰でもいい。轟の右手をこっちに向けさせる。そうすれば轟が決める』

それが先ほど全員の耳に届いた刃羅の言葉。

近くにいた梅雨と砂藤はその言葉を信じて、ギャングオルカを縛つたのを見てすぐさま動いたのだ。

(本当に……お前は……)

轟が何もしないとは全く思っていない言葉。
失敗しかしていない自分に何故そう思えるのか。

(馬鹿か……今は……そんなことはどうでもいい……!)

轟は右手に意識を向ける。まだ痺れているが意地で動かして手のひらをギヤングオルカに向ける。

まだまだコントロールは甘い。同時に使うことばかり目を向けていた。刃羅に言われて意識は変わったが、まだ1か月も経っていない。だからまだ『ベタ踏み』だ。

それでも。

(右手……いやー手のひらだけで!!ベタ踏みする!!)

ジワリと右手のひらが真っ赤に光る。

それでも腕を掴んでいる砂藤や梅雨、そして手を向けられているギヤングオルカと刃羅は物凄い熱を感じていた。

「撃てえええ!!」

「っ!!」

ドッパアアアアン!!

刃羅の叫びと同時に轟の手のひらから真っ赤なレーザーが発射される。

レーザーはまっすぐギヤングオルカに向かう。

「うおおおおお!!」

「我慢比バダゴラアアアア!!」

刃羅はギヤングオルカの背中に飛びついて、ギヤングオルカを逃がさないように抑え込む。

ギヤングオルカを縛る鞭はすぐに熱で千切れてしまったので、火傷をしているのを感じながらギヤングオルカの両腕を抑える。

ギヤングオルカは熱と勢いに耐えられず、刃羅ごと後ろに吹き飛んでいく。そして岩場に叩きつけられる。

炎が止まった轟の右手のひらは真っ赤に火傷して爛れていた。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

「なんて……威力だよ……」

「ケ……ケロオ……」

腕を抑えていた2人も熱波だけで皮膚が火傷したようにヒリヒリしている。

そして、それを見ていた周囲の者達も噴き出した汗を拭いながら、啞然として轟を、そしてギャングオルカが吹き飛んだ先を見つめている。

「……あれが……雄英……」

「なんて熱量だよ……!?ここからでも喉が焼けるかと思っただぜ?」

「ギャングオルカは!?」

「乱刀さんも!」

「シャチョー!!?」

緑谷と飯田、そしてサイドキック達が慌ててギャングオルカ達の元へ駆け出す。

その時、

ビーーーーー!!

「!!?!」

『えー只今を持ちまして、全てのHUCの方が危険区域より救助されました。まあ、ヴィランもほぼ全滅ですが、これにて仮免試験全行程終了となります!!』

終了の合図が鳴らされて、動きを止める受験者達。

緑谷達は土煙が上がる場所に走る。

ガラガアアン!!

2人が叩きつけられた場所から岩が吹き飛ぶ。

そこから現れたのは、ギャングオルカを肩に担いだ荒刃刃鬼状態の刃羅だった。

「はあ……はあ……はあ……」

「ぐ……」

「乱刀さん!!」

「シャチョー!!」

荒刃刃鬼状態を解除した刃羅はドシャン!とギャングオルカを地面に降ろす。ギャングオルカは仰向けに倒れる。

そして刃羅はその横に座り込む。

「イタイー!!びやくくん!!」

「……泣きたいのは……こっちだろうが……」

「シャチョー!!大丈夫ですかあ!傷は……深いっすね!」

「乱刀君は!」

ギャングオルカのプロテクターは完全に砕けており、服もボロボロだった。

そして刃羅は服もボロボロで手足や顔は火傷で真っ赤だった。

「荒刃刃鬼で途中から覆ったけど溶けそうだった!死ぬかと思った!このシャチいなかったら死んでた!」

「つてことはシャチョー!!死んじやだめですー!!」

『集計の後、合否をこの場で発表します。怪我した方は医務室へ。他の方々は着替えて待機しといてください』

「急いで医務室へ!」

「うん!」

「シャチョー!!気をしつかりー!!」

「している……」

「イタタタタ!?掴まないで〜!いたいく!びやくくん!!」

「や、火傷が酷くて触れないぞ!」

「た、担架持つてくるよ!」

「持つてきたぞ」

「あ、士傑の……ありがとうございます!」

毛原が担架を抱えてやって来た。頭を下げた緑谷と飯田は担架を広げて、ポイ!と刃羅を乗せる。

「いったー!」

「が、我慢してくれ!」

刃羅が痛みにも叫ぶが、それを無視して飯田達は医務室へと運んでいく。

轟やイナサも医務室に運ばれる。

公安委員会に依頼された治療系『個性』の医師に治療を受けて、すぐに火傷は治った。

轟はセメントを除去されて、手のひらの治療を受ける。

そこに相澤やクラスメイト達が訪れる。

「大丈夫か？無茶しやがって」

「イエア！」

「それにしても、まさかギヤングオルカに勝っちゃうなんて……」

「プロテクターをく付けてたしく本気じゃなさそうだったけど」

「そりゃ試験だからな。元気になったなら着替えてこい」

「了解であります！」

轟は終始声を出さずに頷くだけだった。

それに相澤は特に声を掛けることはなかった。

（まあ、まだ合否は出てねえしな。最後の攻撃を試験官達がどう見る

かだが……）

相澤は隣の医務室に顔を出す。

そこにはギヤングオルカがベッドに横になっていた。

「……お前は……イレイザーヘッドか」

「お久しぶりです。ギヤングオルカ。大丈夫ですか？うちの連中が随分と暴れてしまつて……」

「フフ……最後のは焦つたな。神野と同じ思いをまさかヒヨっ子でもない卵から味わうことになるとはな。轟と乱刀……だったか。あれは未恐ろしいな。それに……『ヒーローは雄英にいる』か。あれはやられたな」

「まあ、まだまだ未熟ですがね」

「そうだな。まあ、それはお前や雄英に任せるとしよう」

ギヤングオルカは起き上がり、服を着替えて外へ出ていく。

それを見送った相澤は頭を掻く。

「……簡単に言ってくれる。はあ……乱刀に関して、また話し合わねえとな。インターン、今のままじゃ行かせられねえしな」

刃羅の今後の処遇を考えて、ため息を吐く相澤。

若干気落ちしながらも、合否を見に行くために席に戻るのであつた。

刃羅達は着替えて、しばらくのんびりしていた。
そこに轟が近づいてきた。

「乱刀」

「ほえ？」

「迷惑かけた」

轟が頭を下げる。突然の謝罪に百や梅雨、緑谷達は目を見開く。
それを刃羅はジト目で見つめる。

「それは火傷させたことにか？トドメを譲ったことにか？」

「……両方だ。それに……またお前に情けない姿を晒したことも」

「……」

「親父の事は乗り越えたと思ってた。けど、あいつの言葉で、結局誤魔化してただけだと気づいた」

「……簡単に乗り越えられるものではないから家族なのよ」

轟は頭を上げて刃羅を見る。

「私だって両親の死を乗り越えられていないわ。あんな死に方が受け入れられないから、ステインの元にいるの」

「……」

「刃羅ちゃん……」

「私は多分……乗り越えられない。だからせめて背負い続ける。そう決めたの」

「……背負い……続ける」

「生きていくことを受け入れている以上、過去を忘れるなんて出来ないのよ。それが出来るのは……きつと死んだときよ」

「……」

「あんたがヒーローを目指す以上『エンデヴァーの息子』という事実は決して目が離せないことよ。私が『エスパデス』なこと……『ステインの弟子』という事実が消えないのと一緒に」

刃羅とて、いつかはこの事実が必ず牙を剥く。

すでに敵連合にはバレているだろうし、少しずつヒーローの中でも広まっていくだろう。

ステインが逃げ出したこともバレた以上、必ず誰かが刃羅の存在に

辿り着く。『ステインの弟子』という事実。

果たしてその時、この社会はどのような結論を出すのか。雄英が庇えきれることなのか。

その時にならないと分からない。

「いい機会じゃない。今回を機に答えをちゃんと出しなさいよ。別にエンデヴァーと和解しろなんて言う気はないわ。エンデヴァーとあんたのヒーロー像との差をはっきりさせなさい」

「あいつとの差……」

「恐らくその答えがあんたの『ヒーロー』に対する答え。いい答えを期待しているわ」

「……ああ」

刃羅の言葉に頷く轟。刃羅はそれに肩を竦める。

「まあ、その前に仮免が受かっておればよいのう」

「……」

「台無しよ。刃羅ちゃん」

「へぶっ!?!」

「だ、大丈夫ですよ！あのギャングオルカをハンデありとはいえ倒したのですから！」

梅雨が舌ビンタを刃羅に浴びせて、百が慌ててフォローする。

それに緑谷達も頷くが、内心では不安だった。

それだけ轟とイナサの仲違いのタイミングは最悪だった。特に緑谷の場合、期末試験で同じ経験をしているので尚更だ。期末試験では合格にしてもらえたが、あれが仮免試験だったら絶対に落ちている自信があった。

刃羅のトドメを撃たせるというフォローは効果があったと思うが、果たしてそれがどこまで評価されているのか。

「まあ、わっちもあの最後の捨て身はどう評価されるんやろなあ？」

「……あれはなあ」

「必要と言やあ必要だったけどなあ」

緑谷と砂藤が腕を組んで唸る。

そこに耳郎がジュースを飲みながら、刃羅に顔を向ける。

「刃羅の場合、あの指示と号令は評価高いんじゃないの?」

「そうそう!あれ!かつこよかったあ!」

「なんかオールマイトがいるみてえだったよな」

耳郎の言葉に葉隠と瀬呂が頷く。

瀬呂と一緒にいた障子、百、麗日、砂藤は同意するように頷く。あの時刃羅の近くにいた瀬呂達は、刃羅の背中がオールマイトのように大きく見えたのだ。

「くっそく。ちよつと見たかったぜ」

「こつちは負傷者にケンカを売る爆豪の相手だったもんな」

「馬鹿にしてんのか!」

「だってよお……『勝手に助かれや!』とか『無事だろ!無事だな!歩けや!』とか『俺のヴィラン退治の邪魔だ!』とか言うんだぜ?」

「……爆豪さん……」

「それはないのです」

「うるっせえ!!」

全員が爆豪をジト目で見る。

爆豪は不機嫌全開で椅子に座って足を組んでいる。

「……拙者ですら人命救助を優先したというのに……」

「いや乱刀。お前は前から人命優先だ」

刃羅の言葉に障子がツツコむ。それに百達も同意するように頷いている。

USJの時から刃羅は人命を優先している。本人はついで気分だったが。

「あの慟哭を聞いて、ついでなんて感じる者の方が少数だと思うが?」

常闇の言葉に口田も頷く。

それに刃羅は不思議そうに首を傾げる。

その様子を苦笑する百達。

「そう言えば……」

「どうしたんだ?緑谷君」

「うん。M.S. ジョークの所の……傑物高校の人達は見なかったなと思っ……」

「ああ。真堂？じゃったか？あの地面を砕いた男なら儂が失格にした
のでな。あ奴が司令塔だったのかもしれない」

「あの人を!」

「砕いた後隙だらけだったのでな。鞭で釣り上げた」

釣り上げたという言葉に目を見開く緑谷。

「……やっぱりすごいや」

「全くだな」

緑谷の言葉に飯田が頷く。

自分達は怪我しないようにするだけで精一杯だったのに。

『えー、お待たせしましたあ。集まってくださーい。早くー。寝た
いー』

「行きましょう」

「よし！行くぞ皆！」

百と飯田の号令にゾロゾロと移動する一同。

会場に入ると流石に緊張感が高まってきた。

いつの間にか会場にはモニターとステージが出来ており、ステージ
上には目良が立っていた。

『えー。長い事お疲れさまでした。これより発表ですが……その前に
1つ。二次試験の採点方式についてです』

目良の説明を聞きいる一同。

『我々ヒーロー公安委員会とHUCの皆さんによる二重の減点方式で
あなた方を見させてもらいました。つまり……危機的状況でどれだ
け間違いのない行動を取れたかを審査しています』

その説明に緑谷達は轟に目を向けてしまう。

『とりあえず合格点の方は五十音順で名前が載ってます。今の言葉を
踏まえてご確認ください……』

そしてモニターに名前が表示される。

受験者達が緊張した顔で名前を探す。

刃羅は『ら』なのですぐに見つかった。

「おお、あったあった」

「ケロケロ。私もあったわ」

「私もです！」

「よっし！」

「麗日あ!!」

「あつた！」

続々と見つけて喜びの声を上げるA組。

しかし、

「……ねえ!!」

「……」

爆豪が盛大に顔を顰め、轟は悔しくもどこか当然と納得してる顔をしていた。

やはりあの失態は決定的だったようだ。

「轟!!」

そこにイナサが近づいてきた。

轟が目を向けると、イナサは再び頭を地面につける程、腰を曲げて頭を下げる。

「ごめん!!あんたが合格を逃したのは俺のせいだ!!俺の心の狭さの!!ごめん!!」

「元々、俺がまいた種だし……よせよ。お前のおかげで気づけたこともあるから」

轟はイナサを申し訳なさそうに見つめる。

「轟……落ちたの？」

「うちのツートップが両方落ちてんのかよー」

イナサの言葉に芦戸達も轟の不合格を知る。

それに峰田が「ヒエラルキー崩れたり」と轟に声を変えるが、飯田に離される。

百や梅雨が刃羅に目を向けるが、刃羅は肩を竦めるだけだった。

伝えることは先ほど全て伝えたからだ。

『えー、全員確認出来ましたでしょうか?続きましてプリントを配布します。採点内容が詳しく書かれますんで目を通してください』

目良の言葉と同時に公安委員の者が名前を読んで配り始める。

『ボーダーラインは50点。減点方式で採点しています。どの行動が

何点引かれたか等、下記にズラーつと並んでます』

刃羅の得点は92点だった。

「ふむ。思ったよりも……」

「どうだった？ 刃羅ちゃん」

「92点やね。最後の自己犠牲が引かれた感じやわ。それともう少し安心感を与えろみたいなき感じやね」

「凄いわ。私は89点よ。入水前と後の確認がまだ甘かったみたい」

「十分じゃろ」

「ヤオモモ。94点!!」

「むう……65点かあ。もう少し考えろってばかり」

互いの点数や減点された理由で盛り上がる一同。

「我の自己犠牲でもそこまで減点されていないのに、轟には結構な減点をしたのだな」

「そうね。……刃羅ちゃんの場合、最後に立ち上がったからじゃないかしら？ ギャングオルカを助けた形にもなったもの」

「そうだべか？」

梅雨の推測通りで、刃羅の減点が少ないのは、あの攻撃を行うまでの行動と荒刃刃鬼によって行動不能までのダメージを負うのを防いだこと、そしてギャングオルカを抱えて立ち上がったからだだった。

そしてあの演説と指示がかなりの好印象を与えたのも大きかった。

ちなみに刃羅を採点した公安委員の者は『俺、あの子のファンになった』と裏で話していたりする。

その後、目良から不合格者には特別講習の後、個別テストに受ければ仮免が取得できると知らされる。

爆豪と轟もやる気を出して、特別講習を受けることにした。

そしてその後、仮免許交付される。

顔写真とヒーローネームが記されている本格的なものだった。

「乱刀」

外に出ると相澤が声を掛けてきた。

「仮免を取ったことは嬉しい。けど……あんまり言いたくはないが、逆に言えばお前はこれで色々と後戻りは出来なくなった」

その言葉に近くで聞いていた梅雨や百、耳郎が目を見開く。

刃羅は無表情で相澤を見つめ、その後仮免を見る。

「まあ、こうなった以上、次に『エスパデス』を名乗れば雄英は庇えないわよね。仮免を取った者がヴィランを名乗るんだもの。ヒーローを育てるからこそ、受け入れることは出来なくなる」

「そう言うことだ」

犯罪者を名乗った警官が、警察に戻れるわけではない。

もはや特別扱いは出来ない。オールマイトであろうとも、根津校長でも。

「ま、今の所は雄英に付き合っただけでもいいと思ってるわよ。戻れる確証もないしね」

「……連中か」

「そ。連絡する手段は私にはないし、多分向こうもしばらくは私に興味が無いでしょ」

「だどいいがな」

相澤の言葉に刃羅は肩を竦めるだけ。実際、何も情報はない。携帯は壊してから買い直してないし、今回のような場合でもないし外に出るのも認めてもらえていないのだから。

「今回の試験については公安委員会に取り合っただけ、流女将とエクレーに映像を送る。近々一度、寮を訪ねると思う。ちゃんと会話しろよ」

「……むう」

流女将の名前に顔を顰める刃羅。

あの事件以降顔を合わせていないし、話もしていないのだ。それに試験でこっぴどく叱られることも叫んだので、あまり見せたくはなかった。

「諦めろ。言っとくが、雄英の教師陣でも見るからな」

「……むう」

そこにジョークが近づいてきた。

「イレイザー」

「！」

「せっかくの機会だし、今度合同の練習でもやれないかな」

「ああ。それ、いいかもな」

「うちの奴がその子にリベンジしたいみたいで気合入れてるしさ」
ジヨークが刃羅を見て苦笑する。

それに相澤も納得して頷く。

その後、イナサや毛原もやってきた。

イナサは轟に律儀なのかケンカを売っているのか分からない言葉を掛けて、毛原と共に刃羅の前にやってくる。

「ほえ？」

「ギャングオルカとの戦い！マジ半端なかったっス！今度自分とも手合わせお願いするっス！」

「と、言うことで今後は士傑とも合同練習などをお願いしたいと思つてね。わだかまりも解消したいし」

「そこはそっちの髭に言えや」

「ブハッ！」

「……髭」

刃羅のイレイザーの呼称にジヨークが噴き出し、相澤は顔を顰める。

その後、毛原と話して「検討する」と答える相澤。

刃羅はうんざりとした表情で相澤達から離れる。

その横を梅雨がニコニコしながら歩く。

「ケロケロ。人気者ね。刃羅ちゃん」

「全く嬉しくないのだよ」

「けど、良い事よ」

「あん？」

「それだけ皆が刃羅ちゃんがヒーローとして相応しいって思ってくれてるのだもの」

「……ふん」

「ケロケロ」

「ふふ」

公安委員会やHUCの人もあの点数から刃羅を認めている。そし

て他校の者も刃羅をライバル視している。

それは刃羅がヒーローになるべき人と認めてもらえている何よりの証だと梅雨は思った。

それに刃羅は顔を顰めるだけだった。

梅雨と百は誤魔化したことに気づいて笑う。

こうして仮免试験は終了し、刃羅達はヒーローへとまた1歩近づいて行くのであった。

#48 高みの見物

刃羅達は寮に戻り、風呂に入るなどゆったりとしていた。

「んあ〜……ねむ〜……」

「皆、頑張ったものね」

「なのに明日からフツの授業だもんねえ」

「色々ありすぎた夏休みだったなあ」

「前期に負けないほどの濃さだったよね！」

「そうですね。林間合宿で襲われ、爆豪さんが攫われ、乱刀さんが逃げ、神野区での騒動でオールマイトの引退、雄英は全寮制になり、乱刀さんを追いかけて、仮免試験……ですか」

「……それ、1か月で起こったことなんだよね？」

刃羅は欠伸をしてソファにもたれ掛かり、その横で梅雨が百が淹れた紅茶を飲みながら微笑む。

その向かいで芦戸がげんなりとして、横にいる耳郎が感慨深げに振り返り、葉隠が同意する。それに百が羅列していき、内容に麗日が呆れている。

「そのほとんどに刃羅ちゃんが中心にいるわね」

「悪いんは……わっちもやな」

「そうね」

「……」

刃羅は梅雨の言葉を否定しようとして出来なかった。自分がやらかしたのも事実だったからだ。その言葉を梅雨が肯定して、刃羅は腕を組んで顔を顰める。

それに百達が笑う。刃羅は話題から逃げるためにカップ麺を開けて、お湯を注ぎに行く。その後ろ姿にさらに笑う梅雨達。

お湯を注いで戻ってきたときには話題は仮免試験に変わっていた。

「でもさー、轟と爆豪が落ちたのは意外だよね〜」

「あの試験だと爆豪ちゃんはある意味、当然かもしれないけどね」

「轟さんも口下手ではありませんが……」

「轟の場合は夜嵐との因縁が嫌なタイミングで出ただけでござる。爆

豪とは少し毛色が違うと思うでござるよ。まあ……爆豪もまた色々と抱えておるようでござるがな」

「爆豪が？」

刃羅の言葉に首を傾げる芦戸。耳郎や麗日も首を傾げる。

「……相澤は結局間に合わなかったか」

「相澤先生がどうしたの？」

「ズズ……ンマンマ……前、爆豪と手合わせしたときにな。爆豪がどうにも迷っているように感じてな。相澤教師に見ておくように言ったのだ」

「それが上手くいかなかったと？」

「ズズ……ンマンマ……そういうことじやろうな。まあ、仕方がないことかもしれないがの」

刃羅は肩を竦めてカップ麺を食べ続ける。

梅雨達は気にはなるも、幸せそうにカップ麺を食べる刃羅の姿に苦笑するだけに留める。

そこから少しだけ離れた所で爆豪が緑谷に声を掛けていたことは誰も気づかなかった。

そして深夜。

寮にいる者達が寝静まっている。

その中を2つの影が動いていた。

「かつちゃん……どこまで行くんだよ？まずいよ、こんな夜中に出歩いて……」

緑谷と爆豪だった。

『デク、後で表出る。てめえの『個性』の話だ』

爆豪にそう言われて、緑谷は冷や汗を流し、鼓動が早まるのを感じながら後ろを付いて行く。

爆豪は緑谷の声には答えず、黙々と歩いて行く。

そして2人が向かった先はグラウンド・βだった。

爆豪はあるビルの前で足を止める。

「グラウンド・β……」

「初めての戦闘訓練でてめえと戦って、負けた場所だ。……ずっと気色悪かったんだよ」

爆豪はビルを見上げ、緑谷に背中を向けながら語る。

それを聞いた緑谷はもはや完全にバレていると理解した。

「無個性で出来損ないのハズのてめえが、どういうわけだか雄英に合格して、どういうわけだか『個性』を発現しててよお」

『人から授かった『個性』なんだ。いつかちゃんと自分の物にして《僕の力》にして君を超えるよ』

「わけのわかんねえ奴が、わけわかんねえ事吐き捨てて、自分1人で納得してドンドンドンドン登ってきやがる。ヘドロん時から……いや……オールマイトが街にやって来たあの時から……どんどんどんどん……しまいにや仮免にテメエは受かって、俺は落ちた。なんだこりやあ?なあ?」

緑谷はどう声を掛けていいのか分からなかった。

「ずっと……気色悪くてムカついてたぜ。けど、神野でなんとなく察しがついた」

爆豪は緑谷に振り合える。

そして確信的な言葉を放つ。

「オールマイトからもらったんだろ?その『個性』」
「っ……!」

「オールマイトと出会って、テメエが変わって、オールマイトは力を失った。『次は君だ』……てめえだけが違う受け取り方をした」

そこまで見られているとは思っていなかった緑谷。

両手を握り、顔を俯かせる。

それを見て、爆豪は事実であると改めて確認した。

「……クソが」

「……聞いて……どうするの?」

「……てめえも俺もオールマイトに憧れた。なあ……そうなんだよ。ずっと石ころだと思ってた奴が、知らん間に憧れてた人間に認められてて。……だからよ」

爆豪は左手を緑谷に向ける。

「戦えや。今、ここぞ」

「なんで!？」

突然の宣戦布告に緑谷は《ワン・フォー・オール》がバレたこともあつて混乱気味に叫ぶ。

「ええ!? 待つてよ! なんでそうなるの!? いや……マズイつて! ここにいるだけでもマズイんだし……! せめて戦うにしても……自主練とかで……とつとトレーニング室とか借りてやるべきだよ! 今じゃなきやダメな理由もないでしょ!？」

「……ガチでやると止められんだろうが。イカレ女の時みてえによ」

爆豪は今までのように怒鳴ることもなく、静かに緑谷を睨む。

「テメエの何がオールマイトにそこまでさせたのか。確かめさせる。……テメエの憧れが正しいつてんなら、俺の憧れは間違つてたのかよ」

「つ……! かつちゃん……」

「怪我したくなきや構えろ。蹴りメインに移行してんだろ? イカレ女に鍛えてもらつてよ」

「待つてつて! ……こんなの駄目だよ!!」

緑谷は未だに事態が受け入れられない。

しかし爆豪は左手で後ろに爆破を放ち、飛び出す。そして右腕を振り被る。

緑谷はフルカウルを発動しながら、右腕の攻撃がフェイントかどうか考える。

爆豪は緑谷の考えなど見抜いているように、右腕を叩きつけながら爆破する。緑谷は飛び上がるが右脚に爆破を浴びる。

「つた……!」

「深読みするよな。てめえはあ……! 来いや!!」

爆豪は緑谷を挑発する。

それでも緑谷は未だに構えない。

「待つてつて! 本当に戦わないといけないの!? 間違つているわけないじゃないか! 君の憧れが間違つているなんて誰も……!」

緑谷は説得しようとするが、爆豪は飛び込んで爆破を放つ。

それを緑谷は躲すことに専念するが、爆豪の機動力に追いつかれてしまう。

爆豪は緑谷に詰め寄りながら左腕を振り被る。緑谷はそれを掴もうと腕を伸ばすが、爆豪は左腕を直前に止めて、左脚を振り上げて緑谷の顎を蹴り上げる。蹴り上げた脚を振り下ろす勢いを利用して、前に出て両手を緑谷に伸ばす。緑谷は仰け反った勢いでバク転して、爆豪の両手を蹴り上げて爆破を躲す。

爆豪は爆破の勢いと両手を蹴り上げられたことで、後ろにたたたらを踏んで尻餅をつく。

それに緑谷が慌てて手を伸ばそうとして、爆豪はそれを振り払う。

「俺を心配すんじゃないやねえ!!戦えよ!何なんだよ!なんで!!なんで!!ずっと後ろにいた奴の背中を追う様になっちまった!!クソザコのテメエが力をつけて……!オールマイトに認められて…強くなってるのに!なのに何で俺はっ!!」

爆豪は立ち上がりながら、自分の胸元を掴みながら泣きそうな表情で叫ぶ。

「俺は……オールマイトを終わらせちまってんだ!!」

爆豪の叫びと表情に緑谷は衝撃を受ける。

「俺が強くて、ヴィランなんかに攫われてりしなけりや、あんなことになつてなかった!!イカレ女にもあんなみじめな真似させることもなかった!!イカレ女は攫われることもなく、戦い抜いたのに!!俺だけが弱かった!!」

爆豪は顔を俯かせながら叫び続ける。

「オールマイトが秘密にしようとした……誰にも言えなかった!考えねえようにしてても……フとした瞬間湧いてきやがる!どうすりゃいいか……わかんねえんだよ」

神野区では誰よりも中心にいた。

オールマイトが出てこなければいけない理由を作った。

自分1人では逃げ出すことも出来なかった。

その結果がオールマイトを引退させ、緑谷達に助けに来させて、刃

羅にヒーローを失望させて『エスパデス』に戻してクラスメイトと戦わせ、何より……あの神野区の甚大な被害を招いた。

自分が捕らえられたから。

そんなことを招きながら助けられた今、自分に出来ることはなんだ？

強くなること？でも、そんなの攫われる前と変わらない。

じゃあ、どうすればいい？

誰が……その答えを持っている？

分からない。

「だから……戦ええ!!」

爆豪は改めて緑谷を見据えて叫ぶ。その眼には、涙が浮かんでいた。

そして爆豪は緑谷に飛び掛かる。

緑谷は歯を食いしばって覚悟を決めて、爆豪の顔を全力で蹴る。

「……丁度いい……シユートスタイルが君に通用するかどうか……」

緑谷は爆豪を見据えて構える。

「やるなら……全力だ！サンドバッグになるつもりはないぞ！かつちゃん！」

2人が戦っているグラウンド・β。

2人を発見して相澤に連絡している警備ロボの他にも、眺めている者がいた。

「……やっぱ追い詰められてたわねえ」

刃羅である。

刃羅は近くのビルの屋上付近の非常階段の踊り場で、腕を組みながら2人の戦いを見下ろしていた。

気配に敏い刃羅は、夜中に殺気にも近い闘気の移動を感じて目を覚ました。

部屋を出て、気配がする方向を見ると、爆豪が部屋を出て下に降り始めていた。

「……爆豪?」

訝しむように爆豪を見つめていた刃羅は、もう1人部屋から出てきた者を見つける。

「……緑谷。……偶然ではなさそうじゃのお」

少しオドオドしながら下に降りていく緑谷を見つめながら、厄介事の気配を感じて腕を組んで顔を顰める。

しかし、あの2人は放っておくには少し危険だとも思う。

特に今の爆豪は仮免試験に落ちた直後であり、尚更嫌な予感がある。

「……はあく。まあ、様子だけでも見ておくか」

刃羅は音を出さないように追跡を開始する。

出来る限り気配を消して、グラウンド・βに入ったところでビルの屋上に上がり、2人と警備ロボに見つからないように移動した。

そして今の場所で爆豪の叫びと2人の戦いを見ていた。

「相澤もオールマイイトも……あの強さや性格の理由を考えたことはないのかしらねえ?せつかく忠告したのに」

確かに元々の才能が大きい。子供の頃から誰よりも優れていたのは緑谷から聞いたことがある。

常にトップで居続けた爆豪。

「それはあ素晴らしいことだけどねえ。でもねえ、見た事ないんだよねえ。彼があ誰かにい相談してるところお」

誰かに悩みを話す姿も、弱みを見せたのも見たことがない。

恐らくは雄英に入るまで、自分より優れた者が近くにいなかったことによる弊害だろう。

しかも10数年見下して、ずっと後ろにいた緑谷が迫ってきた。それは轟達との出会いよりも衝撃だったはずだ。それを戦闘訓練で実感し、期末試験では競うどころではなかった。

そして今回の仮免試験で明確な差として見せつけられた。

しかも轟とは違う形で、轟よりもどうしようもない形で。

よく知っている相手だからこそ、恐ろしかったのだろう。追いか

られることが、差が縮まることが、追いつかれたことが。

「まあ……ある意味、うちのせいやろかねえ。うちが雄英を離れてしまったことで、爆豪から目が離れる形になってもうた。被害者つちゆうのも大きかったやろうしな」

No. 1ヒーローになる。

その言葉は神野以降、爆豪にとって物凄く重い言葉になった。

しかし、それを目指すためにはどうすればいいのかが、はつきりしない。でも、誰にも尋ねることなど出来はしない。

No. 1ヒーローになるにはどうすればいいか？など、誰が答えられるのか。誰が教えられるのか。

教えられるのはただ1人。しかし、そのただ1人は憧れの人で、自分のせいでその座を降りた人。

「聞けるわけねえよなあ。てめえにやあ」

だから刃羅に挑んできたのだろう。何かしらの形が欲しかったのだろう。

下での爆豪の戦い方は刃羅との戦いの時よりも反応が早く、動きに迷いがなく、攻撃が鋭くなっている。

「……今の爆豪には勝てるかどうか分からぬでござるなあ」

それほどまでに爆破のタイミングや次への攻撃への繋ぎ方が恐ろしくスムーズだった。

その時、緑谷から感じる力が膨れ上がったのを感じた刃羅。

すると緑谷は今までよりも数段速いスピードで動き出して、飛び上がって蹴りを放つ。

それに爆豪も目を見開いて、迎撃が間に合わずガードするだけで手一杯だった。

爆豪は不完全ながらも両腕で頭をガードし、倒れるまではいかなかった。

すぐさま反撃に移り、右腕を振り被る爆豪。それを読んでいたかのように振り抜いた勢いで、左後ろ回し蹴りを放つ緑谷。

爆豪は左腕で防ぐが、緑谷はそれを利用して前に飛び出ること、爆豪の右手の爆破を躲す。

「無茶苦茶な動きばかりであるな……!?」

刃羅はもはや呆れるばかりだった。

特に緑谷に関しては、飛び回る蹴りばかりで結局まだまだ一撃一撃が必殺技のつもりのようだ。

「まあ、爆豪には下手な小技は反撃の材料になりかねないであります……。それでももう少し教えた事を活かしてもらいたいでありますなあ」

再び飛び上がった右足を振り被る緑谷。

それに爆豪は左腕を頭の横に掲げて右手だけで爆破して飛び上がる。

その時、緑谷が左拳を握った。

「っ!?そういうことかえー!」

刃羅は緑谷の狙いに気づいた。

緑谷は右脚は蹴り出さず、腰を捻って左フックを爆豪の顔面目掛けて放つ。

最初に爆豪にやられたフェイントの仕返しだった。

爆豪の顔に緑谷の拳が突き刺さる。

「敗けるかああああ!!」

すると爆豪が殴られながら吠え、右手で緑谷の左袖を掴む。

そのまま吠えながら右腕を引き、緑谷と上下を入れ替わる。そして左手を上に向けて爆破を放ち、地面に叩きつけると同時に右手で爆破を放つ。

煙が晴れた先では、緑谷が仰向けで爆豪に押さえ付けられていた。

「ハァー!ハッ!ゲホッ」

「ガハッ!ゲホッ!」

「……俺のお……勝ちだあ!」

爆豪は緑谷を見下ろしながら勝ちを宣言する。

「オールマイトの力……そんな力あっても、自分のもんにしても、俺に敗けてんじゃねえか。なあ……何で敗けてんだ……!」

爆豪は勝利したことを全く喜ぶ様子を見せなかった。

「そこまでにしよう。2人とも」

そこに近づくと人影が1つ。

「悪いが……聞かせてもらったよ」

「オール……」

「マイト……」

現れたのはオールマイトだった。

爆豪は緑谷から離れて立ち上がる。

「……乱刀少女の事と言い、本当に情けない。気付いてやれなくて……ごめん」

「っ……今……更……!」

オールマイトの謝罪に顔をクシャッと歪める爆豪。

「……なんでデクだ?」

「……非力で……誰よりもヒーローだった。君は強い男だと思った。既に土俵に立つ君じゃなく、彼を土俵に立たせるべきだと判断した」
「っ……俺だって弱えよ。あんたみてえな強ええ奴になろうと思ってきたのに!弱えから……あんたをそんな姿に!!」

「これは君のせいじゃない。どのみち限界は近かった。こうなることは決まっていたよ。君は強い。ただね、その強さに私がかまけた……抱え込ませてしまった。すまない。君も少年なのに」

オールマイトは爆豪の頭を胸元に抱き寄せる。

爆豪はそれを振り払い、後ろに下がる。

「でもね、長い事ヒーローをやってきて思うんだよ。爆豪少年のように勝利にこだわるのも、緑谷少年のように困っている人を救いたいと思うのも、そして乱刀少女のように理想を追い続けるのも、どれかが欠けていてもヒーローとして己の正義を貫くことは出来ない。緑谷少年が爆豪少年に憧れたように、爆豪少年が緑谷少年の心を畏れたように、そして君達や私達が乱刀少女の覚悟に揺さぶられたように……もう、分かっているんだろ?互いに認め合い、まっとうに高め合うことが出来れば、勝って救ける、救けて勝つ最高のヒーローになれるんだ」

オールマイトの言葉を聞いた爆豪は座り込んで顔を俯かせる。

「お前……一番強ええ人にレールを敷いてもらって……敗けてんな

よ」

「……強くなるよ。君に勝てるように……」

「はあ……あんたとデクの関係を知ってんのは？」

「リカバリーガールと校長……生徒では、君だけだ」

「バレたくないんだろ？ オールマイト。あんたが隠そうとしてたから、どいつにも言わねえよ。クソデクみてえにバラしたりはしねえ。ここだけの秘密だ」

「秘密は本来……私が頭を下げてくださいること。どこまでも気を遣わせてすまない」

「遣ってねえよ。言いふらすリスクとデメリットがデケエだけだ」

「こうなった以上、爆豪少年にも納得のいく説明が要る。それが筋だ」

そうして、3人は歩き始める。

オールマイトは爆豪に《ワン・フォー・オール》のこと、そのオリジン、オール・フォー・ワンとの関係、その戦いで体がボロボロになったこと、そしてデクを選んだことを話す。

その内容に爆豪は顔を顰めて、秘密にしていた理由を理解する。

「曝かれりや力の所在で混乱するって……ことか。なんでバラしてんだ、クソデク」

「全くじゃのう」

「?!?!」

突如聞こえた声に3人はバツ!!と声が出たビルの上に体ごと顔を向ける。

ビルの屋上には刃羅が腰に両手を当てて呆れた表情で立っていた。

「ら、ら、乱刀さん!」

「て、てめえ!いつから……!?!」

「察を出たところからなのです」

「最初から!?!」

「い、今の話は……?」

「聞いとつたに決まっとるやろ」

3人の前に飛び降りる刃羅。

オールマイト達は予想外の登場に汗をダラダラと流す。

それを見て、刃羅はため息を吐いて半目で見る。

「焦らなくても誰にも言わないわよ。というか、少なくともステインや私にはバラす利点がないわ。それに……ある程度は予想はしてたしね。USJと体育祭で」

刃羅の言葉に目を見開く緑谷と爆豪。

オールマイトは体育祭での話を思い出して、頭を抱えた。

刃羅はそんな3人を尻目に話を続ける。

「最初の戦闘訓練の時から、オールマイトから感じる圧に違和感があつたでござる」

「そんな時から……!?!」

「そしてUSJ事件でオールマイトと脳無の戦いを見て、オールマイトが衰えていること、そして……戦う時間に制限があること、体どころか異常があることに気づいた。脳無を失ったのに死柄木達を捕らえず、妙に吐血していたからな。脳無を倒した時点で限界だったのだろう。だから……緑谷が飛び出した」

「……恐れ入ったよ」

「それで体育祭じやの。儂を追いかけてきた時に『緑谷はオールマイトの後継者的存在か』と言ったら、オールマイトは否定せなんだ。そして神野じやな」

「……オール・フォー・ワンの言葉が聞こえてたのかい?」

「あの時、一番近くにおつたのはわっちやよって。『譲渡先は緑谷出久だろ?』。その言葉と緑谷の『個性』の出現の話を思い出して、繋がったということですね。それに……」

「それに?」

「緑谷に『オールマイトを意識過ぎている』と言ったら、『職場体験先でも言われた』と言ってたべ。つまり、オールマイトと深いつながりがあるヒーローということだべな。グラントリノ。神野でもかなり頼りにしていたべな?そんな人がデクを唯一指名していたべ。ここまで情報が揃って疑わねえ方が無理だべさ」

刃羅のほぼ完璧な推理に頭を抱えるオールマイトと緑谷。爆豪は呆れと怒りが混じった視線を2人に向ける。

そんな3人を眺めながら苦笑する刃羅。肩を竦めて、両手を上げる。

「だから誰にも言う気はないよ。オールマイトはもう象徴ではないし、私とステインからすれば、緑谷君はヒーロー足りえるって判断してるからね。それを私達が邪魔する気はないよ」

「……けっ」

「で、ようやく溜まり溜まったモノを吐き出せて、ひとまずは満足したかね？爆豪君。よかったではないか。ようやく本音を曝け出せる相手が見つかった」

「……てめえ……！」

爆豪は顔を顰めて刃羅を睨む。

刃羅はまた肩を竦める。

「あんたと私は似ているわ」

「似てねえわ！殺すぞ」

「そうね。似ていた、が正しいわね。あんたは上に向かう分かれ道を見逃す前に相手を見つけた。私は……見つけられなかった」

「……」

「今はまだ駄目だけど、せいぜい緑谷と競い合いなさい。そうすれば少なくとも私の粛清対象からは外れるわ」

刃羅はそう言うのと3人に背を向けて歩き出す。

その後ろ姿に3人はどう声を掛ければいいか分からず、黙って歩き始めた。

「……やっぱりまだ……ステインの元に戻ろうと考えてるんですね」

「ああ……でも、悔しいけど……私は何と声を掛けていいのかが分からない」

「……けっ（……見つけられなかった、か。俺はたったひと月……いや、半年足らずでここまで溜まった。なら、あいつはどれだけ耐えてきやがった？）」

刃羅は頼れる者がいなかった。

刃羅の事情は切島や上鳴から一通り聞いた。親が死んだ後も周りに当たり散らしたら、誰も近寄らなくなったというのも。

『似ていた』。それは俺が誰にも話せなかったのと同じってことか。胸糞わりいが俺には……デクがいた。けど、あいつにはいなかった。だから……ヒーロー殺しに手を伸ばした』

爆豪は優れていたために頼れる者が見つからず、刃羅は底辺まで落ちたために頼れる者が見つからなかった。

真逆だが、似ている。

刃羅はそう言いたかったのだと爆豪は理解した。

「あ、そうなのです。緑谷」

「へ!?!はい!?!」

「てめえ……今回はパンチのフェイントを狙ってやがったのは褒めてやるがよお。あんなピヨンプヨン飛び跳ねる蹴り、誰が教えたゴラア!!」

「ひい!?!ご、ごめんなさい!?!」

「爆豪や前のオールマイトのように空中でも移動できる手段があるならいいが、貴様にはないだろう! だから拳でのコンビネーションを意識しろと叩き込んでやったのに、まっつたく出来てないではないか! 一撃一撃大振りしよって!!」

「すいません!?!」

刃羅は緑谷にズンズンと詰め寄りながら怒鳴る。

緑谷は刃羅が近づいてきたことと、注意された内容に顔色が赤くなったり青くなったりと世話しなかった。その様子をオールマイトも呆れて見ていた。

その後、教職員の寮に向かい手当を行う緑谷と爆豪だったが、

「試験終えたその晩にケンカとは元気があつて大変よろしい」

ギリギリと相澤が捕縛武器で2人を締め上げる。

2人は問題を起こしたのも事実なので、大人しく耐えている。

その横で刃羅は腕を組んで呆れており、オールマイトも相澤を制止する。

「相澤君待って、捕縛待って。原因は私にあるんだよ」

「原因?……何です?」

相澤の言葉にビク!つとする緑谷と爆豪。

オールマイトは相澤に近づき耳打ちする。

「爆豪少年は私の引退に負い目を感じていたんだ。そのモヤモヤを抱えたまま試験に臨ませて、彼の劣等感が爆発した。気づけずにメンタルケアを怠った私達大人の失態が招いたケンカだったんだ」

「相澤先生殿には爆豪に注意するように伝えていたはずであるがね。」

『緑谷とオールマイトのことで焦っているように見える』と」

「ら、乱刀少女……!?!」

「……………んん」

オールマイトの言葉が聞こえた刃羅が、堂々と『教えてやったのに蔑ろにした相澤にも責任がある』と言い放つ。

それにオールマイトが慌てるが、2人の言葉を聞いた相澤は顔を顰めて唸る。

実際、爆豪のメンタルケアを怠ったのも事実であり、刃羅に注意するように言われていたのも事実である。それを甘く見ていたのは間違いなく相澤であった。

「まあ……確かにそうだな。で、乱刀がそこにいたのは?」

「もちろん行き過ぎるなら止めるためアル。アタシにも責任があると思たからネ」

「……………」

「まあ、あんまり止める気はなかったがね。オールマイトが近づいてると気づいたから放っておいたのもあるが」

「おい」

「仕方なからう?我だけ暴れまわったのでは、不公平だと思ったからな。どのみちとことん発散させねばいけなかったのだ。話を聞いていて、我では役不足というのもあったがな」

「……………はあ」

肩を疎める刃羅の言葉に、相澤はため息を吐くしかなかった。

「事情は分かった。こちらの責任も認める。しかし、だからルールを犯しても仕方ない、で済ますことは出来ない。然るべき処罰は下します。先に手え出したのは?」

「俺」

「僕も結構……ガンガンと……」

「爆豪は4日間！緑谷は3日間！寮内謹慎！その間の寮内共有スペースの清掃！朝と晩！！プラス反省文の提出！乱刀！お前も反省文を提出しろ！」

「アイヤ!?」

「寮を抜け出したのは事実だ。それだけで済ませてやる」

「ノオー……ウー！」

ビシ！と2人を指差しながら処罰を伝える相澤。刃羅も夜間の無断外出でも処罰を与えられて、崩れ落ちる。

それで解散となり、各自部屋に戻る緑谷達。刃羅は顔を顰めながらガリガリと反省文をさっさと書く。

そして翌朝。

緑谷と爆豪は掃除機を構えて清掃を始めていた。

「ケンカして」

「謹慎……!?」

「馬鹿じゃん！」

「ナンセンス☆」

「骨頂ー！」

クラスメイトからの言葉に顔を顰めて耐える爆豪。緑谷は恥ずかし気に顔を俯いている。

「ええ!?それ、仲直りしたの?」

麗日が心配そうに眉尻を下げながら声を掛ける。

「仲直り……っていうものでも……うーん……言語化が難しい……」

「殴り合って叫び合って認め合って、ようやくまっとうなライバルになったって感じやな」

緑谷がどう表したものと首を傾げて唸っていると、刃羅が簡単に説明する。

それに麗日達が首を傾げる。

「なんで刃羅が分かんのか?」

「拙者もその場にいたのでな」

「なんでお前は謹慎じゃねえんだ？」

「眺めておっただけじゃからのべえ!」

「乱刀さん!」

刃羅の頬に梅雨の舌ビンタが炸裂する。

「何で止めなかったの？刃羅ちゃん」

「いたい〜……体育祭や〜訓練時の試合と同じさ〜。ぶつかり合つて〜ようやく言えることも〜あるでしょ〜。他の目がある〜と〜満足いくまで戦えない〜時もあるしさ〜。今回は〜爆豪君には〜必要かなくって思つたの〜」

「もう大丈夫なのですか？」

「儂が見る限りではの」

刃羅の説明を聞いて、一応安心する梅雨達。

「では、これからの始業式には君達は欠席だな！全く!」

「ご、ごめん」

「後期初日からお前ら話題が絶えねえな」

「うるっせえ!」

「皆!遅刻する!そろそろ行くぞ!」

「へ〜い!」

飯田の号令にゾロゾロと玄関に向かう一同。

こうして波乱?から新学期は始まったのであった。

#49 3年生

始業式に向かう刃羅達。

途中、物間が何やら騒いでいたので、久しぶりに飛び蹴りを腹に突き刺した刃羅。

「ガツフウ!!」

「あ、スパイラルカッターにするの忘れてたのです」

「流石にそれは止めるぞ、乱刀」

「で、出来れば飛び蹴りを止めて欲しいなあ……拳藤」

腹を押さえて蹲る物間が拳藤にツツコむが無視される。その後、手で倒されて穴田に運ばれていく。

その後、刃羅達はグラウンドに整列する。

「やあ!皆大好き小型哺乳類の校長さー!」

朝礼台で根津が挨拶する。

毛の手入れや毛並みの話など、どうでもいい話が続く。

「ライフスタイルが乱れたのは皆もご存知の通り、この夏休みに起きた事件に起因しているのさ」

すると突然話題が重くなった。

「柱の喪失。君達が寮生活になったのもそうだけど、あの事件の影響は予測を超えた速度で現れているのさ。これから社会には大きな困難が待ち受けているだろう。特にヒーロー科諸君にとっては顕著に現れる。2・3年生の多くが取り組んでいるヒーローインターンも、これまで以上に危機意識を持って考える必要がある」

ヒーローインターンと言う単語に芦戸達は首を傾げる。

「ヒーローインターン?」

「職場体験の発展形みたいなものかしら?」

「2・3年つちゆうことは仮免合格が条件みたいやなあ」

「そうですね」

「暗い話はどうしたって空気が重くなってしまっうね。大人達は今、その重い空気をどうにかしよう頑張っているんだ。君達には是非ともその頑張りを受け継ぎ、発展させられる人材になって欲しい。経営

科も、サポート科も、普通科も、ヒーロー科も、皆社会の後継者であることを忘れないでくれたまえ！」

話を終え、スタスタと降りていく校長を見送り、その後も連絡事項が続く。

最後はハウンドドッグが朝礼台に上がり、連絡事項を伝えようとしたのだが、

「グルルル……昨日……ルルルル……寮のバウバウバウツ!!ガルウ!慣れガウ!バウバウ!生活グルルウ!アオーン!!」

「グルルウ!」

「乱刀さん!共鳴しないでください!」

「……クウッン」

完全に人語を失ったハウンドドッグの声に、刃羅も反応するが百に注意されて項垂れる。

肩で息をするハウンドドッグとブラドが交代する。

「えー、『昨日の夜、ケンカした生徒がいました。慣れない寮生活ではありますが、節度をもって生活しましょう』とのお話でした」

ブラドが通訳した内容に1年生は唾然として、ハウンドドッグを見送る。

「……離島の時は落ち着いた方だと思ったのですが……」

「あ、それ多分その前に私が逃げる時に、催涙弾浴びせたからだと思うよ!」

「……乱刀さん」

「レイザーヘッドの目を封じるのが目的だったのです。悪気は……そこそこあったのです」

「はあ〜」

刃羅の言葉に目元を覆う百。緑谷達の事といい、完全に問題児が集結していた。

その後、終了となり、各学年ごとに教室に戻る一同。

そして相澤からのHRが始まる。

「じゃあまあ、今日からまた通常通り授業を続けていく。かつてないほど色々あったが、上手く切り替えて、まずは学生の本分を全うする

ように。昨日は仮免試験もあつたので、今日は座学のみ。だが後期はより厳しい訓練になっていくからな」

相澤の言葉を聞いて、芦戸が梅雨に顔を寄せる。

「話無いね」

「なんだ？ 芦戸」

「ひい!? 久々の感覚!？」

芦戸が肩を跳ね上げると、梅雨が手を上げる。

「いいかしら？ 先生。さつき始業式で出たヒーローインターンってどういうものか聞かせてもらえないかしら？」

「そういや校長がなんか言ってたな」

「俺も気になっていた」

「先輩方の多くが取り組んでらっしゃるとか……」

「それについては後日やるつもりだったが……先に言っておく方が合理的か」

梅雨達の言葉に相澤は髪を掻きながら頷く。

「平たく言うと『校外でのヒーロー活動』。以前行ったプロヒーローの元での職場体験。その本格版だ」

説明に納得したように頷く麗日。

しかし、その後ある疑問に辿り着き、慌てて立ち上がる。

「では、体育祭での頑張りは何だったんですか!？」

「確かに……インターンがあるなら体育祭でスカウトを頂かなくとも道が拓けるか」

麗日の発言に飯田も疑問を持つ。

その理由を相澤が説明する。

「ヒーローインターンは体育祭で得たスカウトをコネクションとして使うんだ。これは授業の一環ではなく、生徒の任意での活動だ。むしろ体育祭で指名を頂けなかった者は活動自体が難しいんだよ」

「ふむ……職場体験のスカウトが『面接』、そしてヒーローインターンが『研修』という感じかの？」

「そんなもんだ。スカウトが来なかったヒーロー事務所に『インターンさせてください』と言っても受け入れてもらうのは難しい。仮免を

持つてる以上、インターンに行った者もヒーローとして活動してもらわないといけないからだ。つまり受け入れた側からすれば、活動評価に大きく関わる」

「なるほど。本当にサイドキック見習いとして参加するのですね」

「仮免を取得したことで、より本格的・長期的に活動へ加担出来る。しかし、1年での仮免取得は例が少なく、ヴィランの活性化も相まってお前らの参加は慎重に考えているのが現状だ。乱刀のこともあるしな」

相澤の言葉に刃羅に視線が集中する。正確には刃羅の首についているチョーカーにであるが。

「乱刀も仮免を取得した以上、インターンを受けさせないわけにもいかん。しかし未だ逃亡・襲撃の可能性がある以上、そう簡単にゴーサインも出せん」

「まあ、あんまり興味ねえけどな」

「……まあ、体験談も含めて後日ちゃんとした説明と今後の方針も話す。こつちも都合があるんでな。じゃ、待たせて悪かったな。マイク」

相澤の言葉に肩を竦める刃羅。

それに相澤は僅かに眉間に皺を寄せながら話を切り上げる。そしてドアに向かって声を掛ける。

するとドアからマイクがハイテンションで入ってきた。

「1限は英語だー！すなわち俺の時間!!久々登場、俺の壇場待ったか、ブラ!!今日は詰めていくぜ!!アガってけー!!イエアア!」

「はーい」

「イエア!」

「刃羅ちゃんって先生達に合わせてテンション変えられるんだね。今更ながらに分かったよ」

「ハウンドドッグ先生にも対応できますからね」

葉隠と百は、刃羅の新しい才能に今更気づいたのであった。

そして授業を終えて寮に戻る刃羅達。

「インターンかあ」

「体育祭のスカウトって言っても、私貰えてないしなあ」

「一番貰ってた爆豪と轟が落ちてるし、そこから受けてもらえないかな？」

「爆豪が行ったのはベストジーニスト。轟はエンデヴァーやよって。ベストジーニストは未だ療養中。エンデヴァーは保須事件で教育権剥奪中や。うちのエクレーヌも同じくやね」

「ああ………そういえばあ」

「流女将はどののですか？」

「受け入れてくれるかもしれんが……私とは毛色が違い過ぎるしな」

「まず刃羅ちゃんはインターン出来るかどうか分からないものね」

インターンの事で盛り上がる刃羅達。

まだ出来るかどうか分からないが、出来るようになったところで受け入れてくれるかどうかは分からない。それに芦戸、葉隠、耳郎は指名すら貰えていなかった。

そして刃羅はそもそも論状態。

前途多難感全開の女性陣だった。

「私もウワバミのところに、また行く気はあまりないですし……」

「CM出たもんねえ！ヤオモモ」

「あれはもういいですわ……」

「ん………行きたいけどなあ。コネがないなあ」

「……梅雨」

「何かしら？刃羅ちゃん」

「流女将の連絡先はまだ残ってるべか？」

突如刃羅が梅雨に尋ねる。

梅雨は首を傾げながらも頷く。

「ええ。時折、刃羅ちゃんのことを連絡してるわ」

「私もです」

「……」

「それがどうかしたのかしら？」

まさか報告会までしていると思わなかった刃羅。無然と腕を組む

が、今は本題について尋ねることにした。

「流女将ならあ紹介してくれるんじゃない？別に体育祭以外のコネはあ使っちゃ駄目だつてえ言われてないしい」

「……確かにそうね」

「あの人ならあん色々コネがあるでしょおん」

「……いいのしょうか？」

「いいのだよ。聞くだけならタダなのだからね」

刃羅は肩を竦めながら答える。

梅雨と百は悩まし気に眉を顰めるが、ふと横を見ると芦戸、葉隠、二郎の3人が期待の眼差しを向けていた。

それに顔を見合わせた2人は、行けることになったら聞くだけ聞くと答える。それに芦戸達も頷いて、とりあえずこの話はここで終わりととなった。

そして寮に戻ると流女将から荷物が届いており、開けるとカップ麺がたんまり入っていた。

段ボールを掲げて小躍りする刃羅に梅雨達は苦笑する。すると、段ボールの中を改めて見た刃羅が『A組の皆さんへ』と書かれている手紙を見つけて、梅雨に手渡す。

手紙を受け取った梅雨は自分が開けていいのか悩んでいると、百達を読むように勧めてきたため、梅雨は頷いて封筒の封を開けて中を見る。

『仮免試験お疲れさまでした。レイザーヘッドから連絡があり、刃羅さん達の活躍を見させて頂きました。仮免許を取得したことで、これからインターンに向けて動かれると思います。もし受け入れ先でお悩みならば、私でよければいつでも相談に乗るのでご連絡ください。これからも刃羅さんをよろしく願います』

と、書かれており、内容を聞いた芦戸達がバンザイ！をする。

スカウトがなかった男子の面々も喜び、それを見ていた緑谷と爆豪は置いて行かれた感が半端なくて内心焦りを感じた。

しかし飯田から『授業内容の伝達は禁じられている！』と言われて、更に追い詰められる。

刃羅なら教えてくれるのでは？と考えた緑谷と爆豪だが、梅雨と百のガードが固く、さらに『刃羅ちゃん。一緒にカップ麺食べましょう』『行くー』と梅雨の部屋へ連れていかれてしまう。

その後も緑谷と爆豪はもんもんとしながら寮内で過ごした。

翌日、授業も本格的に始まり、午後からはヒーロー基礎学だ。

刃羅達は食堂で昼食を食べていた。

「今日は何するのかしら？」

「基礎訓練か必殺技を向上させる訓練じゃないかなあ？」

「仮免試験が終わってすぐですしね」

寮制になったため、生徒全員が食堂を使用することになり、人数が半端ないことになっている。そのため食堂も急ピッチで改装を行い、広くなっていた。

「ズズ……ンマンマ……救助訓練とかもあるやろ。仮免試験では結構出遅れとったしなあ」

「確かに……」

いつも通りラーメンを食べながら、午後の訓練を予想する刃羅達。

その後ろでは、

「ねえねえ！何話すか決めた？私はねー、決まらないの！知ってた？言いたい事がまとまらないの！不思議〜！」

「ああ……将来有望な子達の前に立たないといけないなんて……辛い……。後ろから話してもいいだろうか？」

「駄目に決まってるじゃないか。全く君は、獣のような戦い方をするのに、心がネズミにも敗けているね。私は準備万端だよ。麗しい乙女達が待っているからね！男なんてどうでもいい！そう！私を乙女達が待っているのさー！」

「楽しみだよな！例の問題児もいるみたいだし！昨日問題児に会ったけど、とつても元気そうだったんだよね！」

「結局何話せばいいの？何伝えたらいいの？知らないの？ねえねえ！」

「……もう俺はいらないんじゃないかな？……辛い……帰りたい……」

！」

「男は通形に任せてあげよう。乙女達は私がもらうからね！ピチピチの乙女達に私だけが囲まれたい！」

「あははははー！もう失敗する気しかしないよね！」
と盛り上がっている者達がいた。

刃羅達は食事を終えて、教室に戻る。

そして昼休みが終わり、ヒーロー基礎学の時間になる。

教室に相澤が入ってくる。

「じゃ、後期最初のヒーロー基礎学は……救助訓練だ」

予想では出ていたが、初っ端からとは思ってなかった。

「先日の仮免試験で、やはり他校との差が露呈したからな。記憶が新しい内にやれることをやるべきだと思ってな」

相澤の言葉に頷く一同。

「コスチュームに着替えて、運動場γに集合しろ」

「へ？USJじゃないんですか？」

「この後は現場で伝える。急げよ」

芦戸が首を傾げるが、相澤は答えずにさっさと教室を出ていく。

刃羅達はコスチュームに着替えて、運動場γに集合する。

「よし。全員、集まったな」

「あの……相澤先生？」

「じゃ、中に入るぞ」

質問を無視して、どんどん中に入っていく相澤。芦戸達は嫌な予感をしながらも、後ろを付いて行く。

そして中心にある工場に入ると、中には人を模した人形が並べられていた。よく見ると人形はそれぞれ所々血を思わせる赤い痕が付いており、人形ごとで付いている痕の場所が異なっていた。それを見て、嫌な予感が高まる一同。

すると、

ドドドドドオオン！！

『!?!』

突如、周囲で爆発音が響き、建物が崩れる音が滝のように響く。さらに芦戸達が入ってきた入り口も瓦礫で遮られる。

「何!?何ですか!?!」

「何か見覚えあるぞ!?!」

「そういうことだ。……お前ら!周囲のビルが崩れた!ここに18人の負傷者がいる!俺は周囲の確認に行くから、お前達は各1人を選んで、それぞれ脱出しろ!いいか!?!急いでな!相談している場合じゃないぞ!」

急に相澤が雑な演技を始める。相澤は大雑把な指示を出して、走り出す。

それに芦戸達は未だに事態が飲み込めずにパニックっている。

「え?え!?!どういうこと!?!」

「どうすればいいんだ!?!」

刃羅は素早く人形を見渡して、赤い痕が最も少なく、頭部や腹部など致命傷の可能性が高いところに痕がない人形を見つける。

刃羅は人形に駆け寄り、素早く状態を確認する。

「乱刀?」

「先に行くよ!一番はもらった!」

障子が問いかけると、刃羅は素早く人形を背負って駆け出す。刃羅は瓦礫で穴が開いた隙間から外に出る。すると、ドン!と刃羅が出た個所が塞がれた。

それを見て、ようやく把握した百達。

「救助訓練レース!?!」

「マジで!?!」

「出口が限られてるぞ!急げ!」

「ケロ。私はこの人にするわ」

「あ!?!梅雨ちゃんズルい!」

「早く助け出したいもの」

梅雨も刃羅を真似て、傷が浅い人形を選んで舌で舌でくるんで背負い、走り出す。

そしてやはり梅雨が出た個所も塞がれた。

「やっぱり1人1個だ!？」

「やつべー!急がねえと」

「ぬあああ!どの人形もおいらよりデケエんだよお!!」

峰田が叫びながら人形を担ごうとする。しかし、どうやっても体のどこかが地面に擦りついてしまう。

「誰かあ!手伝ってくれよお!」

「ここになんか道具たくさんあんぞ!」

「マジで!?!助かった!」

上鳴が建物の端に台車やはしごなどが置かれているのを見つけた。そこに駆けつけた峰田達を横目に飯田や百、轟、障子達が脱出を開始する。

外はとことん破壊されており、普通に走るのも難しい状況だった。その上で人形を背負って、走って行かなければならない。しかもこの人形、しつかりと重さもある。なので、普通に走るだけでもかなりの負担だった。

飯田達は負傷者と言う想定を守りながら、無茶をせず、さらに瓦礫に巻き込まれないように走らないといけな。百も体力を温存するために創造を控えている。

そして、30分後。

外では息を荒げて座り込んでいる飯田達の姿があった。

「まだ半分か……。やはり個人になったら途端にもろくなるな」

相澤は時計を見ながら、座り込んでいる生徒達を見る。

「乱刀が1位、飯田が2位、瀬呂が3位。まあ、速さで言えば順当ではあるが……」

「あるが……?」

「飯田と瀬呂は途中負傷者の扱いが雑だったな。負傷者を背負いながら、随分とスピードを出して走り、テープで飛んでたな」

「う!」

「く!」

「というわけで、減点。ということで4位の蛙吹、5位の障子が繰り上がりだな」

「ケロ」

「それにしても、仮免ではどちらかと言うと役割分担が課題だったと思うが？」

相澤が評価しているところに刃羅が首を傾げて質問する。

刃羅はあまり疲れてはいなかった。

「まあ、それは緑谷と爆豪が復帰してからだな。今回は個人の課題を改めて洗い出す。仮免のように壊滅的な状態からの救助は、常に助けが得られるかどうかは分からないからな。個人でも1人くらい救えてもらわないと困る」

相澤の言葉に飯田達は納得するように頷いている。

「特にこういう工場地帯では、いつ爆発が起きたり、有害物質が噴出するか分からん。こういう場合はプロでもパニックになりかねない。その場合、1人でも行動しなければならん」

「まあ」

その後、峰田と葉隠が70分かけて最後にゴールすると、

「まだ救助者がいるかもしれん。スタート地点まで戻れ。走れよ」

「嘘だアアア!?!」

と地獄の宣告をされて、泣き叫ぶことになった。

ちなみにこの時すでに刃羅や梅雨達はスタート地点でのんびりとしていたのであった。

そんなこんなで3日が過ぎ、緑谷が復帰した。

「ご迷惑をおかけしました!!」

フシュー!と鼻息を荒く吹きながら、頭を下げる。

「デク君! オットメ、ご苦労様!」

「オットメって。つか、何息巻いてんの?」

「乱刀さん!! 飯田君!! ゴメンね!!」

「ほえ?」

「うむ……反省してくればいいが……どうした?」

緑谷は何やら気合を入れながら、刃羅と飯田に謝罪する。その気合

の入れように刃羅は首を傾げ、飯田も戸惑っている。
緑谷はやや目を血走らせながら、鼻息荒く拳を握る。

「この3日間でついた差を取り戻すんだ！」

「あ、良いな。そういうの好き！俺」

緑谷の気合の入れように切島が同調する。

それを席から眺めていた刃羅はジト目を向けながら、

「あいつは空回りするタイプや思うんやけどなあ」

「あははは……確かに」

「ケロ。そんな気配はあるわね」

前の席にいる百は苦笑し、百と世間話していた梅雨が頷く。

そしてHRになり、連絡事項を伝えた相澤が徐に話題を変える。

「じゃ、緑谷も戻ったところで、本格的にインターンの話をしていこう」

その言葉に背筋を伸ばす緑谷達。

すると、相澤は扉に顔を向けて、声を掛ける。

「入っただい」

「ん？」

「？」

それに首を傾げる緑谷達。

相澤の呼びかけ後に扉がスーッと開く。

「職場体験とどういう違いがあるのか、直に経験している人間から話してもらおう。多忙の中、都合を合わせて来てくれたんだ。心して聞くように」

入ってきたのは4人の男女。

短い金髪に筋肉質な男子生徒、水色の長髪でスタイルがいい女子生徒、前下がりの黄緑色のベリーショートにスレンダーでスラックスを履いている女子生徒、そして黒髪に目つきが鋭く、耳が尖っている男子生徒。

「現雄英生の中でもトップに君臨する3年生4名……通称、BIG4の皆だ」

相澤の言葉に騒めく緑谷達。

目の前に立っている4人はこの学園で最も優秀な者達ということだ。

「びっくふおー!」

「あの人達が……的な人達がいるとは聞いてたけど……!」

「めっちゃ綺麗な人達いるし、そんな感じには見えね……な?」

「あの人……思い出した!」

緑谷は謹慎中に金髪の男子生徒と出会っていた。その時は顔だけでよく分かつてはいなかったが、ようやく思い出した。

今年の体育祭で成績は良くなかったが、突然裸になったので記憶に残っていたのだ。

(他の3人も確か上位にはいなかったと思うけど……)

他の3人も見たことはなかった緑谷。

「じゃ、手短に自己紹介よろしいか?まず天喰から」

相澤の言葉に黒髪の男子生徒が突如ギンツ!!と緑谷達を睨みつける。それに刃羅を除く者達は気圧される。

(なんて目つきだ!?)

(一瞥だけでこの迫力!!おおおおお!)

「……駄目だ。ミリオ、波動さん、変衝^{かしよう}さん……!」

「ん?」

天喰の言葉に3人は天喰を見る。天喰は猫背になって震え始める。

「ジャガイモだと思って臨んでも……頭部以外が人間のままで、以前人間にしか見えない。どうしたらいい?言葉が……出てこない」

「ほえ?」

「……え?」

「頭が真っ白だ……辛いつ……!帰りたい……!」

天喰は背を向けて、黒板に顔を向ける。

それに緑谷達はポカンとする。

「え……?ヒーロー科の……トップですよね……?」

耳郎が首を傾げながら、恐る恐る尋ねる。

それに女性2人が反応する。1人は何やら楽しそうに、もう1人は右手で目元を覆って。

「はあ。全く……獣のくせに情けないな」

「あ！聞いて天喰君！そういうのノミの心臓って言うんだって！ね！人間なのにね！不っ思議い！」

「おお！流石、私のねじれだね！そうか！彼はノミだったのか！ならば、仕方がないね。ノミならば無様を晒しても、見守ってあげないかね」

（（ええー!?なんかボロクソ言ってるー!?））

笑顔で貶すねじれに、変衝は演劇でもしているかのように大げさに動きながら何やら納得しながら更に貶す。

それに引く緑谷達。

すると、ねじれが緑谷達に顔を向ける。

「彼はノミの天喰環。それで私が波動ねじれ。今日はインターンについて皆に話してほしいと頼まれてきました。けどしかし……」

ねじれは唐突に耳郎に近づく。

「ねえねえ！貴女のその耳は音楽プレイヤーに繋げるの?」

「え？あ、は……」

「あ！あとあなたは轟君だよね!?ね!?何でそんなところを火傷したの!?」

「っ!?……それは」

「芦戸さんはその角折れちゃったら生えてくるの?動くの!?ね?峰田君のそのボールみたいなのは髪の毛?散髪はどうやるの!?蛙吹さんはアマガエル?ヒキガエルじゃないよね?」

質問を仕掛けておきながら、答えを聞く前に次々と人を変えていくねじれに啞然とする一同。

ねじれはそんな反応知ったことかと好奇心全開で周囲を見回している。

「どの子も皆気になるところばかり！不っ思議い！」

「天然っぽーい。かわいいー」

「……幼稚園児みたいだ」

上鳴が何やら和み、芦戸が戸惑う。

名前を上げられた峰田が何やら悶え始める。

「おいらの玉が気になるってえ！ちよつとちよつとお！セクハラでずう!？」

突如、変衝が峰田の顔を両拳で挟む。そしてギラン！と睨みながら、

「おい、獣。私のねじれで興奮しないでくれ。穢れるじゃないか」

「……ひや、ひやい……」

殺意しかない視線に固まる峰田。

「その目も汚らわしいな。ああ、その目はいらなかな？抉ってもいいかい？いいよね？私の乙女達がこれ以上穢される前に、害獣は滅ぼそう。それが私のヒーローとしての天命だと今理解したよ。ありがとう。感謝しながら、その目と舌を抉ってあげよう。死ぬ」

「ひいひいひい!？」

「こ、怖っ!？」

男装が似合いそうな端麗な顔で恐ろしい言葉を発する変衝に、全員が顔を真っ青にして震える。峰田は涙と鼻水を垂れ流しながら、震えている。恐らく漏らしても誰も馬鹿にはしない。すでに峰田は林間合宿で漏らした前科があるが。

「ああ……やはり男なんて獣でしかないな。だから私は乙女だけと話したかったんだ。どうだい？八百万さん。この後、私と2人つきりで個人相談でもしないかい？安心して、その柔らかそうな肌を傷つけたりはしないよ。私は乙女の騎士だからね」

「え……えつとお……」

峰田をペイ！と投げ捨てた変衝は後ろの百に近づいて、顎クイをしながら話しかける。それに百は峰田とはまた違う身の危険を感じながらも、どう答えたものかと言葉に詰まる。

その後ろで刃羅と葉隠が呆れた目で見つめていた。

「……生粋のレスビアンなんじゃなあ。エクレーヌと気が合いそうじゃのお」

「……この人がトップの1人……」

「おお！君が葉隠さんかな？」

「ひい!？」

百にキスしそうな程、顔を近づけていた変衝は、ねじれと同じようにコロコロとターゲットを変えていく。

目の前にやってきた変衝に葉隠は悲鳴を上げる。

「ふふ。その透明感、というか透明な姿。暴きたいな。隅々まで……」
「ひい!？」

「いい加減にしとけ。変衝」

変衝の両腕を相澤が捕縛武器で縛る。

それに変衝は抵抗せず、肩を竦める。そして左手を掲げ、右手を胸元に当てながら自己紹介をする。

「やれやれ。愛には障害が付き物だ。では、乙女諸君。私は変衝かしよう好女このめという。乙女だけを愛し、乙女だけに愛される騎士さ。ああ、獣の男衆は今すぐ忘れてくれ。そして乙女達のことは忘れて、獣同士で交わってくれ。はい！ナウ！」

『無理だわ!!』

パン！と手を叩いて、ペット躡けるように恐ろしいことを言う好女。

流石に叫び返す男性陣。

もはやカオスでしかない状況に、相澤が目を光らせて髪を逆立てる。

「……合理性が無いな」

それに最後の金髪の男子生徒、ミリオが慌てる。

「イ、イレイザーヘッド！安心してください！大トリは俺なんだよね！」

すると、ミリオは唐突に右手を耳に当てながら、緑谷達に声を掛ける。

「前途ー!？」

(ゼント……?)

「多難ー!つつつてね！よおし！ツカミは大失敗だ！アツハツハツハ！」

高らかに笑うミリオに緑谷達は困惑しかない。

「……4人とも変だよな……BIG4という割には……なんつうか

……」

「風格が感じられん……」

「プツシーキャッツとええ勝負やな」

「それはそれで失礼な気が……」

ミリオは何やら思案するように顎に手を当てる。

「まあ、何が何やらツツと顔してるよね。必修でわけでもないインターンの説明に、突如現れた3年生だ。そりゃわけもないよね」

「この空気どうするんだい？変な目の獣くん」

「アツハツハツハ！責任転換に他人事かよー！でも、そうだよな。1年から仮免取得だよな。今年の1年って凄く……元気があるよね。そうだねえ。なにやらスベリ倒してしまったようだし……」

「？」

「おや？」

「ミリオ……？？」

ミリオの言葉に違和感を持った天喰達。

するとミリオは左手を掲げて、

「君達まとめて俺と戦ってみようよ!!」

「え……ええ〜!!」

こうしてインターンの説明会は混乱を極めていくのであった。

人物紹介！

・ 変衝かしよう 好女このめ

誕生日：3月14日。身長：169cm。B型。

好きなもの：乙女、ミルクティー

黄緑色のベリーショートヘアを前下がりで整えている。AAカットプ。

髪型と体格、そしてスラックスを履いていることから『男装の麗人』として有名。

レズビアン全開で女全てを『乙女』、男全てを『獣』と呼ぶ。女性は年齢関わらず乙女扱いする。男性は嫌いだが、排除まではしない（女

性に危害を加えなければ)。寮生活でウハウハ中。他の寮にどうやって忍び込むか画策中。ファンクラブあり。

#50 戦ってみようよ!

「君達まとめて俺と戦ってみようよ!」

突然の模擬戦発言に目を見開く緑谷達。

ミリオはそんな困惑を無視して、相澤に顔を向ける。

「俺達の経験をその身で経験した方が合理的でしょう?どうでしょうね!イレイザーヘッド!」

「……好きにしな」

相澤の許可も出たことで、緑谷達はジャージに着替えて体育館Yに集合する。

緑谷達は未だに状況が把握できずに戸惑っている。その横ではねじれが芦戸の触角を触って、その感覚に芦戸が悶えている。そして好女は女性陣の体操服姿に悶えており、全員からドン引き中されていた。

「あの……マジすか?」

「マジだよね!」

ミリオは準備体操をしている。

そこに体育館の端っこで壁に頭を付けている天喰が声を上げる。

「ミリオ……やめた方がいい」

「遠?」

「形式的に『こういう具合でとても有意義です』と語るだけで充分だ。皆が皆、上昇志向に満ち満ちているわけじゃない。立ち直れなくなる子が出てはいけない」

天喰の言葉に切島達は少し目を見開く。

今度はねじれが芦戸の触角をいじりながら、ミリオに語り掛ける。

「あ、聞いて。知ってる?昔、挫折しちゃってヒーロー諦めちゃって問題起こしちゃった子がいたんだよ。知ってた?大変だよねえ、通形。ちゃんと考えないと辛いよ。これは辛いよー」

「おやめください」

「まあ、ヒーローに関わる以上、綺麗なものだけ見れるわけではないからね」

好女も肩を竦めて、壁にもたれ掛かる。

その横で相澤も黙り込んでいる。

すると、常闇が声を上げる。

「待ってください。我々はハンデありとはいえ、プロとも戦っている」
「そしてヴィランとの戦闘も経験しています！そんな心配されるほど、俺ら雑魚に見えますか……？」

切島の言葉にミリオは仁王立ちで頷く。

「うん。いつ、どつから来てもいいよね。一番手は誰だ？」

「俺……！」

「僕、いきますー！」

「意外な緑谷!?」

切島が前に出ようとすると、緑谷が前に出て名乗り出る。それに切島が驚くも、緑谷は気にせずミリオを見つめている。

「ふむ。空回りせねばよいがの」

「それをサポートするのが私達の役目だわ」

「それもそうやな」

刃羅は靴を脱ぎ捨てる。

ミリオは緑谷を見て、テンションを上げる。

「問題児!!いいね、君。やっぱり元気があるなあ!!」

緑谷は腰を据えて構え、全身に力を回す。

それに合わせて切島達も準備をする。

「近接隊は一斉に囲んだらうぜー！」

「よっしゃあ！先輩、せいじやあご指導ー、よろしくお願いしまーっす
!!」

「お前ら！いい機会だ！しっかり揉んでもらえ！」

切島が叫ぶのと同時に緑谷が飛び出す。

すると、ミリオの体操服がバラア！と落ちる。

それに耳郎が顔を真っ赤にして悲鳴を上げる。

「ぬあー！ー!?!」

「今、服が落ちたぞ?!」

「ああ、失礼。調整が難しくくてね」

(今の落ち方は……?)

刃羅は落ち方に目を鋭くしながらも、緑谷に続く。

緑谷はズボンを直している隙を逃さず、顔面に向かって蹴りを振り抜く。

しかし、蹴りは顔をすり抜けていき、ミリオの後ろに移動する。

「やっぱり……すり抜ける『個性』！」

「顔面かよ」

「ならば足だべ」

「！」

ズボンを整えて、顔だけで緑谷を振り返るミリオの足元に、刃羅がスライディングするように滑り込んで右脚で足払いをするように蹴り抜く。

しかしその蹴りも足首をすり抜けて、またズボンが落ちる。

「っ!？」

「鋭いね！」

そこに今度は芦戸達の酸やレーザー、テープが襲い掛かる。緑谷と刃羅はすぐに飛び下がる。その攻撃もすり抜けて、後ろの壁に当たり、煙を巻き上げる。

「厄介ねえん！」

「っ！待て！いないぞ！」

煙が晴れた先にミリオの姿がなかった。

すると、刃羅は気配が急に移動したのを感じた。

「!?後ろだ！」

「!!?!」

「まずは遠距離持ちだよね！」

「ぎゃああああ!？」

刃羅は遠距離攻撃を仕掛けたメンバーの方に振り替わりながら叫ぶ。

一番背後にいた耳郎の後ろから全裸のミリオが出現する。

それに切島達が目を見開いて、急いで下がる。

「ワープした!？」

「すり抜けるだけじゃねえのか!?!どんな強『個性』だよ!」
(どっちい? ワープによるすり抜けえ? すり抜けによるワープう? だ
としたらあ、さっきの服の落ち方はあ?)

刃羅は走って戻りながら、ミリオの動きを観察する。

ミリオに常闇が黒影の腕を伸ばすが、また姿が消え、直後に常闇の
懐に現れて鳩尾に拳を叩き込む。その後ろにいた瀬呂がテープを放
とうとするが、直後にミリオが後ろに現れて、駆け抜けざまに瀬呂と
峰田の鳩尾を殴る。

それを見ていた刃羅は、あることに気づく。

「梅雨!」

「ケロ?」

「投げる! 壁に取り付け!」

「ケロ!」

近くにいた梅雨を抱え上げて、壁に向かって放り投げる。梅雨は訳
が分からなかったが、とりあえず壁に張り付いて待機する。

その間にも芦戸、青山、障子達を次々と鳩尾に拳を叩き込んで倒し
ていく。刃羅は百や上鳴の後ろに現れたミリオに蛇腹剣を伸ばすが、
またすり抜けてしまい今度は耳郎が殴り倒される。動き回るもあま
りにも一瞬での移動に追いつけなかった。そして百や上鳴達も倒さ
れる。

「POWERRRRRR!!!」

壁際で観戦していた相澤が呟く。

「通形ミリオ。俺が知る限り、最もN.O. 1ヒーローに近い男だ。プ
ロも含めてな」

その呟きが聞こえた轟は、相澤の横で目を見開いている。

「一瞬で半数が……!あれがN.O. 1に最も近い男……!」

「お前、行かないのか? 興味が無いわけじゃないだろ?」

「俺は仮免取ってないんで……」

(丸くなりやがって……)

ズボンを履いたミリオは呼吸を整えながら、緑谷達を見つめる。

「後は近接主体ばかりだよね!」

「何したのかさっぱり分かんねえ……！すり抜けるだけでも強えのに……ワープとかもう……無敵じゃないっすか！」

「よせやい！」

切島の言葉に、天喰は壁に向きながらも横目で観戦していた。

「無敵か……その一言で君達のレベルを押し量れる……」

「何かからくりがあると思うよ！」

「そうであるな」

緑谷と刃羅が声を上げる。それに目を見開く向ける切島達。

「ワープの応用ですり抜けているのか、それともすり抜けの応用でワープしているのか。どちらにしても直接攻撃されているわけだから、カウンター狙いでいけばこっちも触れられる時があるはず……！」

「そうだな。それに少なくとも奴のワープは『地面に潜る』必要があるようだ」

「！！！！」

刃羅の言葉に目を見開く切島達。それにミリオも少し驚いた顔をした。

「鳩尾を狙うのも、おそらくそれが理由と推測するのだよ。そこから考えられるのは『ワープはすり抜けの応用』であるということだね。ワープがメインならば潜る必要も、すり抜ける必要もないのだよ」「確かに……！」

「どうやってワープしているのかはさっぱり！でも、すり抜けの応用ならワープにも制限があると思うよ！」

「なるほど！」

「全員走り回るのです！！下手に止まる方が危険なのです！！」

「おうー！」

刃羅の言葉と同時に走り出す緑谷達。

「やるよね！面白い！」

ミリオは笑みを浮かべて走り出す。すると、ズボンだけを残して、地面に音もなく潜り込んだ。

「沈んだ!？」

「来るぞー！」

フツ！とミリオは緑谷の後ろに現れる。緑谷はそれを読んでいたかのように左後ろ回し蹴りを放つ。

「予測した!?だが必殺!!ブライントタッチ目つぶし!!」

ミリオは緑谷の蹴りをすり抜けながら近づき、指を緑谷の目に突き刺す。反射的に緑谷は目を瞑るが衝撃はなく、その隙についてミリオは緑谷の鳩尾に拳を叩き込んだ。

完全に隙を突かれた緑谷は崩れ落ちてしまう。

「ほとんどがそうやってカウンターを画策するよね！ならば当然そいつを狩る訓練!!するさ!!」

ミリオはそう言いながら、再び地面に沈む。

緑谷がやられたことに気を取られた飯田や麗日がすぐさまミリオに倒される。そして続けざまに切島達も倒されていく。

1分もせずに残ったのは刃羅と梅雨だけとなった。

「残るは君だけだよね！」

「ぬ？あそこに1人おるぞ？」

「え？」

「ケロ」

ミリオは刃羅が指差した方向を見ると、壁に梅雨が張り付いていた。

「ん〜？結構〜派手に叫びながら投げたんだけどなく？気づかなかった〜？」

「気づかなかったんだよね！いやあ失敗失敗!!アツハツハツハ！」

ミリオは恥を隠すこともなく笑う。

しかし、刃羅はその情報を必死に考える。

「……《すり抜ける》のが『個性』だとしたら……まさか発動中は……」

「まずは厄介そうな君を倒そうかな！」

ミリオは再び地面に潜る。

刃羅は今度は動かずに、気配を探る。

「？ 乱刀？」

「刃羅ちゃん？」

轟と梅雨が首を傾げるが、その合間にもミリオが背後から現れて刃羅に殴りかかる。

刃羅は緑谷同様後ろ回し蹴りを放つが、もちろんすり抜ける。

「甘いよねー!」

「You too!」

「!」

「スパイラル!!」

ミリオは刃羅の鳩尾を狙って拳を伸ばしていたが、当たる直前に刃羅の腹部の服が弾ける。

ギョルルルルル!!

刃羅の腹部でスパイラルカッターが回転し、ミリオの指を斬りつける。すぐさまミリオはすり抜けを発動したので、指が斬り飛ぶことはなかった。

しかし、

「ぶ!?!」

「!!?!」

「ヒーッット!!」

ミリオの指が斬りつけたのと同時に刃羅はミリオの顔に右フックを叩き込んだ。途中ですり抜けに変わり、ミリオは地面に潜る。

その光景に天喰達3年や相澤は目を見開く。

「あの変態を殴った!?!」

「凄いねー!ねえ、見た!?!ねえ!凄いなー!」

「……本当に怖い後輩だ」

「……可能性があるなら乱刀だとは思ってたが……本当にやるとはな」

刃羅はトン!トン!と飛び跳ねながら、移動してミリオを警戒する。

「厄介ではありますが……攻略は可能ですわね」

刃羅は荒刃刃鬼を発動する。

直後、刃羅の右側に現れたミリオは目を見開いて、攻撃を中止する。刃羅は腕をパルチザンに変えて、ミリオに伸ばす。パルチザンはミ

リオの胸をすり抜けて、再び地面に潜って少し離れた場所に現れる。

荒刃刃鬼を解除して、刃羅はミリオと向かい合う。

「凄いな君！さっきのは少しヒヤツとしたんだよね！」

「やっぱり……てめえ、『個性』発動すると目や耳が使えねえんだな？」

「ケロ!?!」

「な!?!」

刃羅の言葉に梅雨と轟は目を見開く。

それにミリオは特に隠す気もない様子で笑う。

「アツハツハツハ！バレたかー！」

「それでよく正確に移動出来るわね。しかも部分的に『個性』を解除、発動も出来る。恐ろしい戦闘技術がいるわ。まさにN.O. 1足りえる実力よね」

刃羅はジト目で呆れたようにミリオを見ながら、周囲を見る。

緑谷達はまだ呻いてはいるが、起き上がろうとしていた。

「ふむ……このままでは負けることはなくても、勝つのも難しそうですありますな。さて、どうするでありますか？続けるならば……小官も少し気合を入れなければなりません」

目を細めて、鋭い気配を纏う刃羅。それに気づいた相澤は捕縛布を構える。

バアアン!!

『!!』

突如、爆音が響く。

刃羅が目を向けると、そこには両手を合わせた好女がいた。どうやら今の音は好女の仕業のようだった。

手を離れた好女は肩を竦めてミリオを見る。

「そこまでにしようじゃないか。流石に説明会の域を超えそうだね。そう思わないかい？変態獣」

「アツハツハツハ！どんどん呼び方が酷くなってるよね！」

「乱刀。そこまでだ。それ以上は俺も止める」

「やれやれ。仕方ありまへんなあ」

相澤の言葉に刃羅は肩を竦める。

刃羅の横に梅雨も飛び降りて、舌を首に巻き付ける。

「くびい!？」

「やりすぎよ。刃羅ちゃん」

「じ……じまつでるう……!」

「絞めてるのよ」

「さて!それじゃあ、ジュール!乙女達の介抱をしよう!邪魔しないでおくれよ!私の至福の時間を!ジュール!ぐう!」

「やめろ、変衝。鳩尾殴られただけだ。すぐに起きれる」

顔を青くする刃羅。それでも梅雨は舌を緩めなかった。

その横で好女がよだれを拭いながら、倒れている百達に近づくが相澤に捕縛される。

好女が叫んでいる横で、無理矢理にでも体を起こす百達。このまま本当に介抱されるのだけは避けたかった。百は腹を押さえながら、梅雨を制止して舌を外させる。轟も緑谷達に声を掛けている。

そこにミリオ達が近づいてくる。

「ギリギリちんちん見えないように努めたけど!!すみませんね女性陣!」

「普通にド正面にあったわ阿呆」

「アツハツハツハ!マジゴメン。とまあ、こんな感じなんだよね」

「訳も分からずほぼ全員腹パンされただけなんですが……」

「まあ、その子にはほとんど見抜かれたみたいだけど、俺の『個性』強かった?」

「すり抜けるし、ワープだし!轟みたいなハイブリッドですか!」

ミリオの言葉に力強く頷く芦戸達。

痛みに呻いていて、刃羅の声はあまり聞こえていなかったのだ。

「いやーっ!」

「はーい!!」

ミリオが答えようとすると、今まで我慢していたねじれが笑顔で手を上げる。

「私知ってるよ『個性』!ねえねえ!言っがいい!?言っがいい!?トーカー!!」

「波動さん。今はミリオの時間だ」

「何言ってるんだいノミ。世界はいつでも乙女であるねじれの時間だよ。変態獣如きが甚だしい」

「……ひどい……!?!」

輝く無邪気な笑顔で答えるねじれを注意する天喰。しかし、すぐさま差別全開の好女に反撃される。その好女の言葉に項垂れる天喰。

その横でミリオが再び前に出て、話を続ける。

「そう。《透過》なんだよね！君達がワープと言うあの移動は、推察・看破された通り、その応用さ！」

「どういう原理でワープを……!?!」

ミリオの言葉に緑谷は手でエアメモの動きをしながら質問する。

「全身『個性』発動すると、俺の体はあらゆるものをすり抜ける。あらゆる！すなわち地面もさ！」

「あつ……！じゃあ、あれ……潜ってたんじゃなくて、落っこちてたってこと……!?!」

ミリオの言葉に麗日がハッと気づく。

それに頷くミリオ。

「そう！地中に落ちる！そして落下中に『個性』を解除すると、不思議なことが起こる。同じ質量のあるものが重なり合うことは出来ず、弾かれてしまうんだよね。つまり、俺は瞬時に地上に弾き出されているのさ！これがワープの原理。体の向きはポーズで角度を調整して弾かれ先を狙うことが出来る！」

「ゲームのバグみたい……」

「ブハー！言いえてミヨー！」

芦戸の感想に嘖き出すミリオ。

顔を顰めていた刃羅の前で、説明を反芻していた緑谷が慄く。

「攻撃はすべて透かして、自由に瞬時に移動できる……！やつぱりとても強い『個性』だ……!」

「どこがじゃ」

「えっ？」

緑谷達は刃羅を振り返る。刃羅は腕を組んで、顔を顰めていた。

「あらゆるものを透過する。それはつまり酸素は肺を通り抜け、光は目を通り抜け、音は耳を通り抜けるということだ。1mm先すらも見通せない闇の中を動いているということだぞ?」

『!?』

「そんな中で記憶と感覚だけで移動先を狙うやと?その上で透過する部分を選択し、攻撃するやて?ベストジーニストも真つ青なほどのコントロールが要求されとる。『強い』なんちゆう一言で終わらせられるもんちやう」

刃羅の言葉に緑谷達は目を見開いて、想像してゴクリと唾を飲む。

「そう。それは何も感じず、ただただ質量を持ったまま、落ちる感覚だけがあるということなんだ。わかるかな!?そんなだから、壁一つすり抜けるにしても、片足以外発動、もう片方の足を解除して接地、そして残った足を発動してすり抜け。簡単な工程にもいくつかの工程があるんだよね」

「急いでるほどミスるな。俺だったら……」

「おまけに何も見えなくなってるんじゃないや動けね……」

「そう!案の定、俺は遅れた。ビリっけつまであつという間に落っこちた。服も落ちた。この『個性』で上に行くには遅れだけは取っちゃ駄目だった!!予測!!周囲より早く!!時に欺く!!何より『予測』が必要だった!」

額をトトトト!と指で叩きながら力強く話すミリオ。

「そしてその予測を可能とするのは経験!経験則から予測を立てる!長くなっただけ、これが手合わせの理由!言葉よりも経験で伝えたかった!インターンにおいては我々はお客ではなく、1人のサイドキック!プロとして扱われるんだよね!それはとても恐ろしいよ。時には人の死にも立ち会う……!けれど怖い思いも辛い思いも全て学校じゃ手に入らない一線級の経験!俺はインターンで得た経験を力に変えて、トップを掴んだ!」

ミリオは左手をギュ!と握り込んで、緑谷達に語りかける。

「ので!恐くてもやるべきだと思おうよ!1年生!!」

ミリオの演説に緑谷達は身震いをして、拍手をする。

「お客かあ。確かに職場体験はそんな感じだったよな」

「危ない事はさせないようにしてたもんね」

「インターンはそうじゃないってことかあ」

「仮免を取得した以上、プロと同格に扱われる！」

「上昇あるのみ……！」

「気合入つとりますなあ」

「刃羅ちゃんも入れるのよ」

「……嫌」

「じゃないのよ」

「ぶぺえ!？」

「最近梅雨ちゃん激しいね!？」

飯田達が気合を入れている横で、刃羅は他人事のように見つめていた。それに梅雨がツツコむが、刃羅が拒否した瞬間、舌ビンタを浴びせる。梅雨の激しさに麗日が驚き、百がため息を吐く。

その様子を轟は後ろから見ている。

(急がねえと……置いて行かれちまう)

轟は両手を握って、更なる躍進を誓うのであった。

「そろそろ戻るぞ。挨拶」

『ありがとうございました!!』

「頑張つてほしいんだよね！」

「ねえ。私達がいる意味あった？知ってる？」

「何もしなくてよかった。ミリオに感謝しよう」

「その前にそのノミの心臓を兎並みに直しなよ」

「……酷い……!？」

その後、着替えてそれぞれの教室に戻る刃羅達。

ミリオ達も制服に着替えて、教室に戻るために廊下を歩いていた。

「ミリオ……手は大丈夫なのか？」

「ああ！かすり傷なんだよね！」

「ねえねえ！無駄に怪我させるかと思つてたの知らなかったでしょ！」

「怪我などさせてたら、私が変態獣を懲らしめていたよ」

「いや、しかし危なかつたんだよね！ちんち……」

「誰か面白い子いた!?気になるの！不思議〜」

「そりゃあ、あの女の子だろう。彼女は別格だったねえ。あの鋭い目で見つめられたい……」

好女は刃羅の鋭い目を思い出して、体を抱いてゾクゾクと震える。

それにミリオも頷く。

「最後列の人間から倒していく。俺の対敵基本戦法だ。彼女はそれをすぐさま見抜いて、対策を講じてきた。しかも俺の《透過》の弱点も突いてきて、最後にはカウンターをくらった。それに最後の雰囲気……プロにも負けないほどの圧だったんだよね」

「下手したら負けてたかもねえ。変態獣」

「アツハツハツハ！そろそろやめてほしいなあ！それと、件の問題児君。彼も俺の初手を分析して予測を立てた行動だった。2人とも！サーが好きそうだ!!」

ミリオは自身がインターンさせてもらっているプロヒーローを思い出して笑みを浮かべるのだった。

刃羅達は寮に戻って、ソファでのんびりとしていた。

その後ろでは爆豪が最後の務めとばかりに、イキりながらゴミ袋を広げていた。

「くうー！通形先輩のビリッけつからトップってのはロマンあるよねえー！」

「インターンが楽しみだね！」

「どうなんだろうね？インターン、1年はまだ様子見って言ってたけど」

「とりあえず相澤先生のGOサイン待ちですわね」

「んあ……」

「刃羅ちゃんはどうなるのかしらね？」

「別に〜どうでもいいかな〜」

刃羅はソファにもたれてダラけていた。その姿に苦笑する百達。

刃羅はインターンで得られそうな経験は、すでにエスパデスとして活動していた頃に得ていると考えていた。なので、正直インターンに行く利点も魅力も感じていなかったのだ。それにまだカンパネロ達の目論見を推測しきれていなかったのも、下手に襲撃される危険性を減らしたいというのもあった。

ステインが依頼を出していたなど思いついてさえいないのであった。

相澤達は1年生のインターンについて会議を行っていた。

「どうしますか？今の所、敵連合には大きな動きはないと言われていますが……」

「仮免取れたからと言って、今すぐインターンを始める必要もないのでは？正直、2年生になった春からでも早いくらいですし」

「そうだね。少し急ぎ過ぎな気もするよ。まだ敵連合を始めとするヴィラン全体の動向が見通せない状況では危険が大きい」

相澤の言葉に13号とオールマイトは否定的な意見を述べる。

それにミッドナイトが声を上げる。

「でも、元々リスク0なんてありえないわよ？」

「しかし、ただでさえ英雄の風当たりは未だに強い。ここでまたとなったら元も子もないぞ。爆豪のケンカ騒動では神野区でのケアが不十分であることも露呈した。それに乱刀の問題もある。それはA組全員に牙が向く可能性がある」

スナイプも慎重論を掲げる。

特に刃羅とステインの仲間との問題は未だに教師内では議論が尽きない状態だった。

「確かに彼女の仮免試験での言動は素晴らしかったです……」

「それはステインの野郎にまで届いてるわけじゃねえしな」

セメントスとマイクも腕を組んで唸る。

「寮や学校内ではそこまで逃げ出すような素振りは見せてないんだろ？」

「ええ。しかし、それは襲われたことに対する安全が校外では確保されてないからだと思いますが……」

「うくん」

校長も腕を組んで悩まし気に唸る。

そこにブラドも声を上げる。

「それにインターンに行かせるにしても、2、3年と同じというわけにもいくまい。安全性を確保しておかねば、事は英雄だけではなくなってしまう」

「そうだな……」

「出来ればB組にもせつかくの仮免取得を無駄にさせたくはないですな。校長。あの子達とて林間合宿での経験を糧にしています」

「そうだね……。乱刀さんだけ行かせないというのも教育としては差別さ。けど、だからといって誰も行かさないととなると、乱刀さんが責められかねない」

B組担任のブラドの言葉に、根津や他の教員達も中々答えを出せずにいる。

そこに相澤が声を上げる。

「乱刀についてですが……流女将から、ある連絡を受けています」

「どんな？」

「乱刀のインターン受け入れを強く希望しているプロヒーローがいるそうです」

「誰なんだい？」

「ナイト・ヒーロー『ヴァルキリ』。BIG4の1人、変衝のインターン先でもあります」

告げられた名前に目を見開く一同。

ナイト・ヒーロー『ヴァルキリ』。エクレーヌと同期で、ヒーロービルボードチャートJP：25位の女性ヒーローである。

「なんで彼女が？」

「ヴァルキリはマイスタードのほどこでもあるそうです。職場体験の時期はチームアップによる仕事で受け入れが出来なかったそうで、流女将と後輩のエクレーヌから話を聞いて、受け入れたいと。乱刀の事

情も把握していません」

「……なるほどね」

「乱刀のインターンが可能なときは出来る限り、流女将とエクレーヌもチームアップによる護衛という形で協力をすることも検討してるようです」

「……受ケ入レ体制ハ整エテイルト」

「ヴアルキリはインターン受け入れ実績も多く、そこに流女将も参加されるならば一概に『危険』だけで行かせないのも、難しいところでしょう。なので、インターンの受け入れ実績が多いところに限り許可する、というのはどうでしょうか？」

相澤の提案に再び思案する根津達。

オールマイトは眉間に深く皺を寄せながら、声を上げる。

「……やはり私は反対です。あの事件からまだ2か月も経っていない。まだ時期尚早かと」

「僕もです」

オールマイトの意見に13号も頷く。

「けど、だからと言って保護してばかりでは、それこそ強いヒーローが育たないわよ？ いずれ危険に身を投じる以上、逆に今だからこそ子供達の気も引き締まるんじゃない？」

「そうだな。それにプロヒーローだけでなく、必要なら我ら教員もバックアップに動けばいい」

「それに待ったからって、いい方向に向かうどうかかわからねえぜ？ なら、ここでヒーローと学校との連携体制をある程度作っておくのも大事だぜ？ 3年間インターン行かせられませんとか、それこそ本末転倒じゃない？」

「子供達ノ頑張りヲ否定シタクハナイデスネ」

ミッドナイト、ブラド、マイク、エクトプラズムは賛成する。

残りの教師陣は『好ましくはないが、ミッドナイト達の意見も無視できない。イレイザーヘッドの提案ならば、まだ学校もバックアップしやすいだろう』との意見でまとまった。

それに根津も頷き、相澤の方針で実施することになった。

「乱刀に関してはもう1人、生徒を監督役で受け入れてもらおうと思います。今の乱刀なら、他のクラスメイトを巻き込んでまで騒動を起こさないでしょう。……あいつもクラスメイトには期待しているようですよ」

刃羅に関してはちゃんと対策を考えることを改めて伝えて、インターン実施に備える相澤。

こうしてA組(轟、爆豪以外)はインターンに向けて動くことになった。

#51 面談

インターン説明会の翌日。

爆豪も復帰して、全員が揃った。

「えー……1年生のインターンですが、昨日協議した結果、校長を始め多くの先生が『やめとけ』という意見でした」

HRでの相澤の説明に切島は残念そうに声を上げる。

「えー！あんな説明会までしてもらったのに！」

「でも、全寮制になった経緯を考えたらそうなるか」

「ごまあ!!」

上鳴も残念そうだが、現状を考えると仕方がないかと納得し、仮免を取得できなかった爆豪が嬉しそうに声を上げる。

「が、今の保護下方針では強いヒーローは育たないという意見もあり、方針として『インターン受け入れの実績が多い事務所に限り、1年生の実施を許可する』という結論に至りました」

「クソが!!」

相澤が告げた方針に爆豪が悔し気に叫び、他の者達は職場体験で受け入れてもらったヒーローの事を思い浮かべる。

「船長はどうなのかしら？」

「ガンヘッドさんはどうなんやろ？」

「私、指名なかったからなー」

それぞれインターンの事を考えながら、その日の授業をこなす一同。

そして放課後となり、寮に戻って早速とばかりに動き始める梅雨達。

しかし、

「ああく……」

「どうしたの？麗日」

「ガンヘッドさんとこ、インターン駄目やった」

「船長も駄目だったわ。直接お礼を言いたかったのだけど……」

「セルキーさん？ああく、そうだよ。刃羅の事でお世話になったも

んね」

「ええ」

ソファでだらけながら話す女性陣。

刃羅は砂藤が作ったお菓子をハムハムと食べている。

「ウワバミも無理でしょうし……」

「職場体験で学校がオフアーした事務所も怪しいよね」

「やっぱり流女将さんをお願いすべきかなあ？」

「いきなりは駄目ですよ。流石にもう少し自分達で動かないと」

百はため息を吐きながら頬に手を当て、葉隠が唸りながら職場体験で行った事務所の事を思い出し、芦戸がソファにもたれながら流女将の手紙の事を思い出し、それに耳郎が指摘する。

「結局刃羅ちゃんはどうなるのかしら？」

「行けへんなら行けへんでかまへんて」

「それはもったいないですわ」

「でも、困ったよね。私達、誰もインターン受け入れ先ないじゃん」

「職場体験先決める時にインターンのこと言ってくれてたらなあ」

「それは指名が無かった私達への嫌味かー！」

「え!?ご、ごめん!？」

麗日が眉を顰めて体育祭直後のことを思い出して呟くと、スカウトが無かった芦戸が叫び、慌てて謝罪する。

その後もインターンの話で盛り上がり、爆豪がキレて怒鳴り、轟がどこか寂しそうに緑谷達を眺めていた。それに緑谷達が慌てるという騒ぎがあったが、刃羅は遠巻きにカップ麺をすすりながら、それを眺めていたのだった。

翌日の昼休み。

食堂に向かおうとした梅雨と刃羅達に声を掛ける者がいた。

「あー! いたいた! ねえねえ! 蛙吹さん! 麗日さん!」

「乱刀、八百万」

「ケロ?」

「あ、波動先輩?」

「ほえ？」

「相澤先生？」

ハイテンションでねじれが梅雨と麗日に、ローテンションで相澤が刃羅と百に声を掛ける。

ねじれは2人に顔を近づけて、話しかける。

「ねえ！2人はインターン先決まったの？職場体験のヒーローはオツケーだったの？ねえ、教えて？」

「ケロ？2人とも駄目でした」

「どうしたんですか？」

「じゃあね、私が行っている所はどう？楽しいよ？2人は面白そうだと思いますの！不思議〜！」

「不思議なんですか？」

ねじれの畳みかけるような会話に押され気味の麗日。しかし、インターンのお誘いには興味がある。

「で？そっちはなんじゃ？」

「まあ、同じくインターンに関してだ」

「え？」

相澤の言葉に首を傾げる2人。

刃羅はインターンへの参加に関してはまだ何も許可されていない。それに関してだとしても、そこに百を呼ぶ理由が分からない。

「蛙吹さんは……」

「後でお前から伝えてくれればいい。蛙吹は波動の話を聞いておけ。せっかくのお誘いだ」

「……ケロ」

「それに波動が誘っているだけで、まだインターンが出来るか分からないんだ」

「……分かったわ」

「じゃあ行こー！」

「俺達も行くぞ」

それぞれに分かれて、話を聞くことに。

刃羅と百は面談室に連れていかれる。

椅子に座ると、相澤は早速と本題を話し始める。

「さて、インターンについては昨日話したな」

「受け入れ実績が多い所のみでの実施を許可する、ですね」

「そうだ。そして乱刀についてもある方針が決まった」

「わっちの？許可出はったん？」

「ああ。現在お前に対して、あるヒーローからインターンの受け入れを希望されている。まあ、スカウトだな」

「スカウトですか？」

「希望したのはナイトヒーロー、ヴァルキリ。エクレーヌの同期で……マイスタードのはとこだそうだ。つまり、乱刀の親戚ということになる」

「!？」

目を見開く刃羅と百。

2人もヴァルキリの名前は知っているからだ。

「職場体験ではチームアップでの仕事のため、受け入れが出来なかったそうだな。エクレーヌから話を聞いて、かなり後悔しているらしい」

「……だから、そこどう？」

刃羅は顔を顰めて腕を組む。

「お前の場合は他の生徒と状況が少し違う。それは理解して思う」

「そらあなあ」

「敵連合、そしてカンパネロ達の襲撃の可能性を考えると、受け入れ実績が多いだけではお前の安全が確保されない。しかしヴァルキリは実力もあり、更に流女将とエクレーヌもお前のインターン時にはチームアップで護衛を担当する。しかもヴァルキリの所にはBIG4の1人、変衝がインターンを行っている」

「最後の情報がどうしても受け入れられねえべさ！」

「それに私が呼ばれた理由は何でしょうか？」

好女の名前に刃羅と百は盛大に拒否感を露わにする。しかし、今までの話だと百が呼ばれた理由が不明だった。

「お前を1人で行かせるのも不安だな。だから監督役である蛙吹か八百万のどちらかの受け入れを条件に出した。それに向こうが指定したのが八百万だったんだ」

「……つまり私は乱刀さんの監督役兼抑止力だと?」

「もちろんお前の成績や『個性』で判断されたことだ。確かにもう1人誰かいれば、よほどのことが無ければ暴走も逃走もしないだろうとは考えたが、それは俺の目論見だ。ヴァルキリは断ることも出来たからな」

刃羅と百は眉を顰めて考え込んでいる。

それに相澤は当然とばかりに頷く。

「すぐに決めろとは言わん。それに本題はもう1つある」

「もう1つ?」

「今週末、顔合わせということでヴァルキリに会ってもらおうってことになった。流女将も同行する。久々の外出でもある。インターンをするしないはともかく気晴らしにはなるだろう」

「逃がす気ないのです」

「まあ……向こうがかなり強く希望しているからな。ただ……親戚ということに対して、お前が思うところがあるとは思ってる」

「……」

刃羅の両親が死んだ5年前、ヴァルキリは間違いなくヒーローとして活動をしていた。その頃はまだ新米でサイドキックだったが、マイスタードについては知る機会あったはずだ。しかし、ヴァルキリは刃羅を見つけられなかった。もしくは……見つけていたが手を伸ばさなかった。

どっちであっても刃羅にとってはどうでもよかったが。あの時、姿を見せなかった時点で手を伸ばさなかったことと同義であるからだ。

正直、今更という思いしかない。謝罪されても、言い訳されても、何かが変わるわけではない。

「……」

「何を話すかも、どうするかも、お前で判断してくれて構わん。別にインターンはすぐに始めなければいけないわけじゃないしな。それに

八百万は乱刀に関係なく、行きたいと思うならば積極的に行け。後で乱刀が行きたくなっても、お前が行っているなら俺達が止める理由はない」

「……はい」

「話は以上だ」

「あの……週末の外出、蛙吹さんは……」

「別に構わんが、波動のインターンも恐らく週末での面談になるはずだ。そこはしっかり考えさせろ」

「はい」

「……」

刃羅は俯いて考え込むように黙ったままだった。

百は心配そうに見つめるが、声を掛けることは出来なかった。

その後、食堂で食事を摂り、午後の授業を受ける。

その間、刃羅は黙ったままで他の者達も心配そうに見つめるのだった。

そして授業が終わり、寮に戻る。

刃羅は部屋に閉じこもり、1階には降りてこなかった。

流星に気になりすぎて、百や梅雨から話を聞くことにした緑谷達。

「ナイトヒーロー、ヴァルキリが乱刀さんの親戚!？」

「それでスカウトを受けていて、週末に会うってことか」

「はい」

「ケロオ。困ったわ。波動先輩のインターンのお誘いと被ってるの」

「そうなんよねえ」

「普通なら良い事なんだろうけどなあ」

「微妙なタイミングだよね」

梅雨と麗日はねじれのインターン先を訪れる約束をしてしまっていた。もちろん約束した以上、今更キャンセルは出来ないがどうしても気になってしまう。

芦戸と耳郎、そして緑谷達も百や梅雨の不安を理解しており、悩まし気に顔を顰める。

「マイスターの話になるんだろうけど……」

「乱刀くんにとっては地雷になりかねないな」

「親戚でヒーローだものね。ある意味、刃羅ちゃんにとっては一番許せない存在かもしれない」

梅雨の言葉に全員が頷く。

そこに意外な人物が声を上げる。

「けど、それはヴァルキリにとってもそうかもしれない」

「轟君？」

轟だった。

轟は俯きながらも言葉を続ける。

「ヴァルキリもマイスタードや乱刀の事で、後悔していることがあるかもしれないねえ。それをずっと引きずってるかもしれない」

「……そうですわね」

「良いか悪いかは……会ってみないと分からねえ。長い時間がかかったからこそな」

「轟君……」

緑谷達は轟の母の事を思い浮かべていた。体育祭の後から毎週のように病院に見舞いに行っていることも知っている。少しずつ歩み寄れていることも。

だから轟は刃羅が今、悩んでいることがなんとなくだが理解出来る。

「今は待つしかねえ。こればかりは乱刀がその気にならねえとな」

「……はい」

「……ケロ」

百と梅雨が眉尻を下げて頷く。

すると、そこに刃羅が降りてきた。

「乱刀さん」

「刃羅ちゃん。大丈夫なの？」

近づいてきた刃羅に百と梅雨が声を掛ける。緑谷達も心配するような視線を向ける。

刃羅は首を傾げて、不思議そうな顔をする。

「何が？ウチがどしたの？超イミフー」

「どうした乱刀」

「ケロ。新しい子ね」

轟が真顔で声を掛け、梅雨が少し目を見開いて新しい刃格であると気づく。

その言葉で緑谷達も納得して、ホッとする。

「で、なんやねん？大丈夫って」

「週末の事です」

「ああ、別にどうも思っていないから気にするな」

「本当に？」

「うむ。別にはどこだとか今更どうでもよいしの」

「……………」

それは大丈夫ではない。

全員がそう思ったが、先ほどの轟の言葉を思い出して、自分達が口を出すべきことではないと思いつまらる。

刃羅はいつも通りの雰囲気に戻っており、ソファに座る。

「梅雨達はどうかだったのだ？」

「私達も週末に面談することになったわ」

「よかったですね。頑張るであります」

「ケロ。刃羅ちゃんもね」

「別に吾輩はどちらでもいいのである」

刃羅は肩を竦めて、百を見る。

「百はんが決めればよろしおす。わっちはそれに付いて行きますよつて」

「それは……………」

「正直、おいらは『エスパデス』の時に十分現場を見てるべ。まあ、ヴィラン側からだけんども。だから別にインターンに魅力を感じてねえべさ」

刃羅の言葉に百は悩まし気に顔を顰める。

ヴァルキリは刃羅が目当てで、百はあくまで刃羅をスカウトするための条件に過ぎない。なので、刃羅が断れば百の受け入れもなくなる可能性は高い。

だから、刃羅は『百がヴァルキリの所に行きたいなら、行けるように自分も行く。行かないならば、自分も行かない』と言っているのだ。それは刃羅を道具のように扱っているようで、受け入れがたい百だった。しかし、百が断れば刃羅も断る。それはそれでヴァルキリに申し訳ないとも思う。

それに今の刃羅の言葉にもどこか納得が出来ない。もちろんステインといた時による経験が元だからだろう。それにヴィラン側とヒーロー側で見るものが同じであるとは限らない。同じだと決めつけている刃羅の言葉には納得出来なかった。

そして何より、誰よりも『ヒーロー』を追いかける刃羅の言葉とは、とても思えなかった。

(……何かから逃げているような……ヴァルキリから？ でも、それならインターン自体拒否してもいいはず……)

違和感の答えが見つからない百。

そして、それは梅雨も感じたらしく、百と目を合わせて共に首を傾げる。

小さな違和感ではあるが、それは恐らくとても大事な事。

2人はそう感じたのだった。

そして週末。

刃羅と百は制服に着替えて、ソファに座っていた。

緑谷は慌てて走って寮を出て、麗日と梅雨も後髪を引かれながらもねじれと合流するために寮を出た。

「いつ行くの?」

「流女将さんが迎えに来てくれるそうです」

「なーる」

芦戸は眠たげに目を擦りながら、百達に声を掛けてくる。

そこに、

「失礼します」

流女将が玄関を開けて、中に入ってきた。

「「「おはようございますー!」」」

「おはようございます。お久しぶりですね」

1階にいた生徒達が挨拶する。それに流女将は微笑みながら返し、頭を下げる。

そこに百と刃羅が近づいて行く。

「今日はよろしくお願いします」

「おひさ〜」

「乱刀さん……」

「ふふ、元気そうですね。刃羅さん。八百万さんもよろしくお願いしますね」

百は礼儀正しく頭を下げて、刃羅はにへらと笑って挨拶をして、百に呆れられる。

流女将はどこか安心したように微笑み、百に頭を下げる。

「では、行きましようか」

流女将に従って、外に出る刃羅達。

校舎の外に車が待機しており、それに乗り込んで走り出す。

「さつそくではありますが、ヴァルキリの事務所に向かいます」

「はい」

「へいへい」

「今日の変衝さんはいないので、安心してください」

「……やっぱりあの趣味は知られているのだな」

流女将の言葉に刃羅は呆れ、百も苦笑いを浮かべる。

そして、しばらく車で移動して千葉県にある5階建てのビルの前で止まる。

車から降りて、流女将に続いて中に入る刃羅と百。

「ヴァルキリ……連れてきましたよ」

「む……感謝致す。流女将」

3階に上がり会議室のような広い部屋に入り、声を掛ける流女将。刃羅達に背を向けて部屋の窓際に立っていた者は、流女将の声かけに礼を言いながら振り返る。

ガシャ！ガシャ！

青を基調とし、縁は銀色の甲冑、兜を全身に身に着けており、肌の

露出は一切ない重騎士。腰には紅いマントがはためいている。

鎧の凹凸や細さから女性であることが辛うじて分かる。

そして両腕には凧型の盾が装備されており、腰のマントの上には劍の柄が数個ベルトに固定されている。

兜が動き、刃羅を見る。

「……よく来てくれたな。我がヴァルキリだ」

ヴァルキリは挨拶をして、着席を勧める。

椅子に座るとサイドキックと思われる者が紅茶とポッドを配って退室する。

「楽にしてくれ。危険がある中、わざわざ呼びつけたのだ。スカウトしている以上、本来なら我が其方達に品定めをされる側だ」

「い、いえ……！こちらとて未熟な中、御声を掛けて頂いたのですから」

「先にインターンについて話しておこう。我はクリエティ、其方にも是非我が事務所に来てほしいと思っている。決してアラジンを受け入れる条件だからではない。そこははっきりと否定させて頂く」

「……ありがとうございます」

ヴァルキリの言葉に頭を下げる百。

そしてヴァルキリは刃羅に顔を向ける。

「護衛を請け負う面もあるため、アラジンには少し息詰まるかもしれないが、基本私と行動を共にしてもらうことになる。流女将とエクレーヌもいてくれるが、あくまでも護衛。インターンとしての指導役として申し分はないが、そこまで頼るのは違うからな」

「好きにしな。俺たちがインターン受けるかどうかは百に任せてつからよ」

「乱刀さん……！」

「……刃羅さん」

「……そうか」

刃羅は興味なさげに紅茶を飲みながら答える。

それに百が慌てて、流女将は少し寂しそうに見つめる。ヴァルキリは兜で表情が分からないが、声はどこか悲しそうだった。

その後もインターンの説明を続けるヴァルキリ。仮免であっても報酬は出る事、授業は公欠になる事など。

「といっても出来る限り学業は重要視したい。なので、インターンは基本週末がメインになる。つまり休みは無くなるに等しい。もちろん毎週というわけではないが」

「……なるほど。だから必修ではないのですね」

「もちろん試験の時期などは考慮する。しかし、あまりに学業が疎かになるならばインターンは中止となる。その場合、大抵の事務所は再びインターンを引き受けることはない。例えばスカウトをして受け入れたとしてもだ。学校側が許可を出さんだろう」

それは当然だと百は頷く。

実際今もすでに特別な許可の元で動いている状態だ。そこで学業が疎かになるならば、郊外活動どころではなくなる。

「まあ、あなた達は1年生ですからね。今回は駄目でも2年生や3年生でチャンスはあるでしょう。体育祭は毎年ありますから」

流女将も補足してくれる。

そしてヴァルキリは2人に意思を問う。

「どうだろうか？ 我の元でインターンをして見ないか？」

「……」

百は刃羅に目を向ける。刃羅は肩を竦めて、百に手を向ける。

それに百は顔を顰めて、ため息を吐く。

「……プロヒーローの活動には興味あります。なので、是非ともよろしく願います」

百は少し考えて、その後まっすぐにヴァルキリを見つめてから頭を下げる。

それにヴァルキリは大きく頷き、刃羅を見る。

「其方はどうする？」

「どうするも何も拙者は百の決定に従うと決めているのでな」

「……そうか。……まあ、その意識を変えるのも我らの役目か」

ヴァルキリは少し唸るが、小さくため息を吐いて頷く。

その後、契約書にサインをしてもらい、正式にインターンが決定し

た。

「……では、もう1つの話題の方に行かせてもらおう」

「私達は外しますか？」

「構いませぬよ。……彼女の事は我より貴女の方が知っているだろうしな」

少し緊張した声でヴァルキリが刃羅に顔を向ける。

流女将が退室を申し出るが、ヴァルキリは問題ないと首を横に振り、少し自虐的に呟く。

それに流女将と百は困ったように少し眉尻を下げるが、ヴァルキリはそれには気づかなかつた。

「我の本名は器変うつわがえ 璃剣りけん。其方の父であるマイスタード、器変だいいき 大規だいいきのほどこだ」

「……器変？」

「乱刀は母の姓じゃの」

ヴァルキリの名乗りとマイスタードの本名に首を傾げる百。

それに刃羅が理由を説明する。しかし、それに流女将が首を傾げる。

「……つまり結婚していなかったと？」

「戸籍上はね〜」

「……しかし、保護された時には……」

「仕込んでたに決まってるよねえ。知り合いに頼んで警察に潜り込ませてたのさあ。雄英にい行きやすいようにねえ」

「そういうことですか……」

「なんと……」

保護された時に話した女性警察官は、ドクトラに依頼して忍ばせた者だった。そこで情報を入れ替えさせたのだ。

その事実流女将と百は頭を抱えた。

「……だから……誰も其方を見つけられなかったのか……」

「そうやるな。家もお母んの名義で借りとったしな。施設に入ったんも両親が失踪したと思われたからや」

「……何も……知ろうとしなかった」

「そうだろうとも。父は親族から縁を切られていたようだからね。貴女もそうだったのだろうか？」

「……」

刃羅は淡々と話す。

それにヴァルキリは言葉に詰まりながら、兜を俯かせる。

「……訳が分からなかった。ヒーローになる前から怪我をしても、嫌味を言われていても、ずっと笑っていた。ヒーローになってからもそれは変わらない。しかしチームアップとかで会う度に顔色も悪く、痩せていく。なのに笑って動き続けるマイスタードが怖かった。しかも収入は全て寄付。何がしたいのか……我らには理解できなかったのだ」

「……」

「マイスタードが死んだ後、遺品整理を手伝うことになった。その時、親戚内で他にヒーローだったのは我だけだったからな。しかし……何も無いに等しかった。あったのはボロボロの軽ワゴンだけ。それが全てだった。余計に訳が分からなくなった」

「……たったそれだけ？」

ヴァルキリの独白に近い話に、百は啞然とする。

「そうだ。10年以上ヒーローをしていて、その結末が軽ワゴン1台だった。その事実には困惑しながらも片づけしようと思えば、子供達に石を投げられた」

「え？」

「……」

「子供達はこう言った。『僕達のヒーローの家を襲うな』と。我は理由を説明した。『マイスタードは死んでしまった。だから遺品を整理しに来た』と。もしたら、また石を投げられた。『やっぱりヒーローは、マイスタードを見捨てた。帰れ、この贖物達め』と言われた」

ヒーローになって感謝ばかりされてきたヴァルキリにとって、それは初めて向けられた悪意無き敵意だった。

「そして、マイスタードについて調べた。寄付先も、寄付を匿名でしていたことも、そしてその子供達はその寄付先の施設の子供達だったこ

とも。解決した事件の内容もヴィラン退治よりも人命救助ばかりだった。その子供達は全員、マイスタードによつて救われていた。マイスタードは隠していたつもりだったようだが、その施設や周囲の住民達は全て知っていた。マイスタードの努力や功績も……我々、他のヒーローから馬鹿にされていることも」

ヴァルキリの話に、百と流女将は病院で刃羅が話していた言葉を思い出していた。

「我は……ヒーローとは何か分からなくなった。どう考えても我よりマイスタードの方がヒーローだった。子供達が描いたのであろうロボロの軽ワゴンのあちこちに描かれていたマイスタードの似顔絵が、とてつもなく輝いて見えた。公安委員会から知らされるヒーロービルボードチャートの内容や報酬に、何の魅力も感じなくなった。……ずっと忘れられない光景がある。マイスタードの軽ワゴンの運転席のドアに描かれていた似顔絵だ。それだけ上からフィルターを張って、汚れも丁寧に磨かれていた。マイスタードの死後、子供達もその似顔絵だけは毎日磨いていたそうだ。『マイスタードが毎日、優しい笑顔で磨いていたから』だそうだ。今なら分かる。……あれは……其方が描いたのだろうか？」

「……ええ。5歳くらいだったかしらね。頑張ってる父への御褒美とか言つて、描いてたわ」

「ご褒美……。ああ……。そうか。マイスタードにとって、その似顔絵を見るのがヒーローとしての報酬だったのか……」

ヴァルキリは兜の目元を手で押さえて俯く。

この5年間、考え続けた答えをようやく知ることが出来たヴァルキリ。それは自分ではどうやっても手に入らない報酬だった。

「……その軽ワゴンは今もその施設にある。どうする？」

「いらないのだよ。渡した御褒美が返ってきて喜ぶとでも？」

「……そうだな。……そして5年後、其方の存在が知らされた。マイスタードに娘がいた事、しかもヒーロー殺しに攫われて……。いや、ヒーロー殺しの元にいた事は、余りにも衝撃だった。会いたかったが、子供達の『ヒーローは見捨てた』という言葉を思い出して、どん

な顔をして会えばいいか分からなかった。そして体育祭の話だ。母親の話聞いて、マイスタードが何故一人で戦い続けたのかを理解した。そして、この前の神野区でのオールマイトの姿を見て、それがマイスタードと被った。其方達に起きた事を聞いて、ようやく覚悟が決まった。其方に会い、其方がヒーローになる手伝いをしよう」と……

「我はヒーローを名乗る資格はないと思っている。だから、せめて本当のヒーローになりえる其方の手伝いをさせてほしい」

ヴァルキリは刃羅に頭を下げる。

それを刃羅はしばらく黙って見続ける。

流女将と百は固唾を飲んで、2人を見守る。

「……私はヒーローを信じていない。なれるとも思っていない。私はただマイスタードをヒーローにしたいだけだ」

「……」

「貴女がわたくしをヒーローにしたいなら、勝手にすればよろしいかと。わたくしにそう思わせられると思うならば、ですが」

「……努力させてもらう」

「期待はあしないよお。まあ、せめて百ちゃんはあ失望させないでねえ」

「もちろんだ」

「じゃあ、今日はもう帰るわ。もう用はないでしょ？」

話が終わったと判断した刃羅は椅子から立ち上がる。

それにヴァルキリは少しソワソワして、伺う様に刃羅に声を掛ける。

「……食事でも、と思っていたのだが……」

「そんな仲ではないのです。私は貴女と家族ではないのです」

「……」

バツサリと切り捨てられたヴァルキリは明らかにガツクリと肩を落とす。

そこに流女将と百が助け舟を出す。

「明日からのこともありますし、食事しながらでもいいのでは？ 刃羅

さんの学校や寮での様子も聞きたいですし」

「そうですね。乱刀さん。これからご指導して頂くのですから。交流するのは良い事だと思いますよ」

「明日でもかまへんやろ」

「……」

更にガツクリするヴァルキリ。

それに流女将は少し悩んで、唐突にヴァルキリの兜に手を掛ける。

「仲良くしたいなら、ちゃんと顔を合わせましょうね」

「え!?ちよつ……!」

慌てるヴァルキリを無視して、兜外す流女将。

兜の下から現れたのは、黒髪をシニヨンに纏めた鋭い瞳の美女。

目元がどこか刃羅に似ていると思つた百。

「はい。改めてご挨拶なさい」

流女将は微笑みながら首を傾げる。

それにヴァルキリは先ほどの喋り方からは想像できないほどオロオロしている。

そして刃羅と目が合う。

「……」

「……」

「……ひう」

「ほえ?」

30秒ほど見つめ合うと、突如ヴァルキリの目尻に涙が溜まる。

それにポカンとする刃羅と百。

そして、

「う……うう……うあ……ん!!」

「ホワイ!」

「ええ!」

「はあ……駄目でしたか」

突如、子供のよう到大泣きを始めたヴァルキリ。先ほどまでの雰囲気と、顔つきからは想像できないほどの泣きっぷりだ。

刃羅と百は目を見開いて驚き、流女将はため息を吐く。

「うあ〜くん!!(´▽`)べんなざい〜!!何もできなぐで〜!!」

「……これは?」

「この子は兜を脱ぐと、弱気になってしまふのですよ。まあ、こっちが素ですけど。いい子なんですが……マイスタード関連になると、どうもよく泣くようになってしまつて……」

「うあ〜くん!!」

「……こいつと、そしてあの変態と一緒にインターンするのか?百」

「……乱刀さんも加わるとなると……ちよつと……」

「同類にされた!?びえ〜くん!!」

「うあ〜くん!!ながせてごめんなざい〜!」

「……ああ」

「頑張ってください。ファイト!」

「……」

もはや姉妹とも呼べそうな泣き方をする刃羅とヴァルキリに、頭を抱える百。

流女将は他人事のように百を励ましてくる。

(……早まったかもしれません……)

早くも後悔を感じ始めた百なのであった。

#52 初日

あの後もヴァルキリと刃羅の人格変化に、振り回されながらもなんとか無事に乗り越えた百。

そして帰寮する前に流れ女将が、

「あまり間を開けたくないので、さっそく明日から始めましょうね」

「承知した。待っているぞー!」

「……めんどく」

「よろしくお願いします」

ということ、翌日。

今日も流女将の迎えで、ヴァルキリの事務所に向かう。

到着して事務所に入り、コスチュームに着替えて、昨日の会議室に入るとそこには、

「ああ!!なんて素晴らしいコスチュームなんだ!!体のラインがはつきりとしていて、脚のむっちり感が何とも言えないじゃないか!!八百万さんは素肌で、乱刀さんがタイツで相対的なのが尚いい!!何よりもその豊満な胸!!ああ、今すぐ埋まりたい!いや埋まらせてもらおう!!」

好女が目を見開いて興奮し、鼻息荒くダイブしてきた。

それに刃羅が鉄鞭を素早く振り、好女の首に絡ませて、引っ張り絞める。

「くびくび!」

「ふん!」

刃羅は両手で柄を握って好女を振り回し、ヴァルキリに向かって投げ飛ばす。

ヴァルキリは飛んできた好女の顔を裏拳で殴り、横に吹き飛ばして壁に叩きつける。

「ぶべ!」

「少しは自重しろ愚か者が。いきなり先輩としての威厳を汚すな」

「もう燃え尽きとるでな」

「そうか。ならば仕方がない」

「……どこからツツコめばいいのでしょうか……」

好女、刃羅、ヴァルキリの言動に頭を抱える百。

そこに近づく人影。

「全てに対応していたら、貴女が壊れちゃうわよ。適当にほつときなさい。あ、エクレーヌさんにもセクハラされたら言っただけ」

「おいおい」

「……事実です」

「まあ、アラジンにもやらかしてるしな」

「何にも言えないですよね」

エクレーヌ事務所の一同だった。

流女将も手で顔を覆っているが、特に口出しをしなかった。

「変態2人とか大丈夫なのですか？」

「乱刀さんは黙っててください」

「……むう」

「酷いじゃないか。優しく受け止めてほしかったものだね」

百にピシヤリと注意されて、顔を顰めて押し黙る刃羅。

そこに好女がケロリと起き上がり、肩を竦める。

ちなみに好女のコスチュームは水色の騎士服を思わせるもので、黒いヴェネチアンマスクに肩、肘、膝、胸に鎧を思わせるプロテクター、そして赤いマントを身に着けている。

全くダメージを受けていない様子に百は目を見開く。

その様子を見て、ヴァルキリが説明を行う。

「変衝……ヒーロー名『オトメキシ』の『個性』は《衝撃変化》。自分の体にかかる、または放つ衝撃を増幅・反射・消失することが出来る。先ほどの攻撃や壁に当たるくらいではダメージなど一切ない」

「オトメキシ……」

刃羅は好女の『個性』への話よりも、ヒーロー名の方が気になったようだ。

呆れの視線で好女を見るが、好女はその瞬間バツ！と両腕を広げて、刃羅の視線を受け止めるようなりアクションをする。

「奴の事は適当で構わん。さて、アラジン、クリエティ。今日はパトロールがメインだ。最近、この周囲もヴィラングループの小競り合いが増加していてな。パトロールの重要性が高くなっている。午前と夕方以降の2回行う」

「はい」

「お前達2人は我と行動してもらおう。午前は流女将が、夕方はエクレーヌが護衛に就く。オトメキシも共に行動してもらおうが、余計なこととはするな。帰らせるぞ」

「流石に場は弁えますよ」

「期待しないでおく」

「手厳しいな!!」

ヴァルキリと好女のやり取りに不安しか覚えないう刃羅と百。

そしてさっそくヴァルキリ、好女、刃羅、百、流女将で外に出る。エクレヌ達や他のサイドキック達は別グループで行動している。

ガシャ！ガシャ！ガシャ！

街中を鎧騎士が金属音を響かせて闊歩する。

その後ろを刃羅達が歩く。

「……威圧感が物凄いのである」

「確かにパトロールとしてはこれ以上ないコスチュームですね。なのに兜を脱ぐと、あんな風になるなんて……」

百は少し悲しそうにヴァルキリの後姿を見ながら、昨日の泣いている様子を思い出していた。

ちなみにあの後、食事をする事になり、ヴァルキリはコスチュームを脱いだ私服で中華店に行った。そこでは物凄く嬉しそうにニコニコしながら、刃羅が幸せそうにラーメンを食べている姿を眺めていた。

少女のように泣き、喜ぶ姿と、今の鎧を纏っている厳格な姿とのギャップがまだ受け入れられない百だった。

「気にしたってしょうがねえべき」

「らん……アラジンに言われても説得力皆無ですわ」

「アイヤ!?!」

「一番変わったるのがアラジンですからね」

流女将も苦笑して、百の言葉に同意する。

そこに好女が刃羅達に声を掛ける。

「私も君達の体育祭の話聞かせてもらったよ。まさかアラジンとヴァルキリが親戚だったのは驚いたよ。体育祭の後、妙にヴァルキリが君を気にしていたのは知ってたけどね。林間合宿のニュースの時は、今にも飛び出しそうだったよ」

好女は肩を竦めながら、ヴァルキリを手で示す。

話はヴァルキリにも聞こえていたようで、刃羅の反応が気になるのか、どこかソワソワしているように見える。

それに刃羅は呆れた顔で見つめて、特に反応は示さなかった。

ヴァルキリは明らかにガツクリと落ち込むが、そこに子供達が駆け寄ってきて、シャキン！と姿勢を正して対応する。

「子供や若者には人気がありますからね。コスチュームや『個性』もあって」

「まあ、ヒーロー向きの『個性』だよな」

「確かヴァルキリの『個性』は……」

「……《劍製》じゃの」

流女将はヴァルキリと子供達をニコニコと見守りながら話し、好女もそれに頷く。

ヴァルキリの『個性』に首を傾げる百に、刃羅が渋々それに答える。

ヴァルキリの《劍製》は触れたモノから『剣の刃』を作り出す。生物には効かないが、風や炎などでも作り出すことが出来る。そして腰に吊られている柄に『剣の刃』を装着することで、武器として振るうことも出来る。

まさしく騎士を象徴する『個性』である。

そのため、子供や若い男性からの支持率が高いのである。

その時、

「ぎゃあ!？」

「ひったくりよー!!」

『!!』

悲鳴と女性の呼び声に目を鋭くして、声がした方向を見る刃羅達。反対車線の歩道に倒れている女性があり、その先には鞆を持って走り出す4人の男達がいた。

それを見た瞬間、刃羅が道路に飛び出す。

「っ!?待てー!」

「アラジンー!」

ヴァルキリや好女が声を掛けるが、刃羅はなんと通行する車の上を飛び跳ねて、一気に反対車線に移動して男達を追いかける。

「何て動きを!」

好女が目を見開いて驚く。ヴァルキリは既に走り出しており、それに好女や百達も慌てて走り出す。

男達は突如道路を飛び越えてきた刃羅に驚く。

「な、なんだあ!」

「ヒーローか!」

「マジかよ!」

「くっそー!この野郎!」

男の1人が足を止めて、ポケットからナイフを取り出して構える。

刃羅は2本の鉄鞭を振るい、1本はナイフを持つ手を叩いてナイフを落とさせ、もう1本は鞆を持っている男の首に鞭を巻きつける。

「だっ!」

「うえ!」

そして一気に引っ張り、鞆を持っている男を引き倒す。

「ぐう!」

「ちつくしよーぶーおっ!」

刃羅はその隙に男達に迫り、ナイフを拾おうとしゃがんだ男の顎に蹴りを叩き込む。続いて男を蹴った足に刃鱗を展開し、地面に落ちていたナイフの刃を踏み折る。蹴られた男は仰向けに倒れて、そのまま起き上がらなかった。

刃羅は次に引き倒した男の腹に、鞭を持ったまま右拳を叩き込み、鞆を回収する。そして左手指2本をレイピアに変えて、男の顔の上に切っ先を向ける。

「ひい!？」

「大人しくしとくのである」

「そいつらを放せ!」

「後ろを見てから言うのである」

「え?」

残った仲間の男の1人が腕を棘に変えて、飛び掛かろうとするが、刃羅の言葉に男達は後ろを向く。

そこには走り迫る鎧騎士がいた。

「ヴァア!？」

「ヴァルキリい!？」

「大人しくせよ!抵抗は罪を重くするぞ!」

ヴァルキリの姿に慌てて、逃げ道を探そうとする男達。

「ど、どうする!？」

「逃げるしかねえだろ!!」

「逃がしませんわ!」

「うわあ!？」

百が腕を振って、網を創造して男達に飛ばす。男達は網に絡まり、地面に倒れる。もがけばもがくほど網が絡まっていき、ヴァルキリ達に抑え込まれる。

刃羅は鞆を被害者の元に運ぶ。

「怪我はないアルか?」

「ありがとうございます!はい。大丈夫です」

「良かったのであります。では、気を付けるのであります」

「はい!本当にありがとうございます!」

刃羅はペッコペッコと頭を下げる女性に、ひらひらと手を振りながら背を向けて、ヴァルキリ達の元に歩み寄る。

すると、野次馬の中から「あ!」と声上がる。

「あの子! 雄英の子だ!」

「え!?!...あ!?!あっちの子も体育祭中継で見たことあるぞ!」

「あの子、ウワバミとCM出てた子じゃん」

「ヴァルキリのサイドキックになったの!?!」

「え!?まだ1年生でしょ!?すごい!!」

「頑張れよ!!」

一気に周囲に広まり、刃羅と百の事が知られていく。それに刃羅と百はむず痒い思いをする。

「やはり雄英は凄いですね」

「今年は色々あったかなあ」

「アラジン。見事の一言ではあるが、せめて一言言ってくれ。サポーターも出来ん」

「善処しますよって」

ヴァルキリの言葉に肩を竦める刃羅。

それにヴァルキリは少し唸るが、迅速さが重要だったのも事実なので、それ以上何も言わなかった。

その後、警察に引き渡して、パトロールを再開する。以降は特に問題もなく、午前のパトロールを終える。

事務所に帰り、昼食となった。

刃羅は出前のラーメン。百も出前の天ざる蕎麦を選んだ。

百はこれが初めての出前であり、物凄く興味津々であった。

「……これが出前ですか」

「ズズ……ンマンマ……百って卒業したらどうする気なのだ?」

「事務所を設立するつもりですが……流石に1年目では早い気もしてきています」

「ズズ……ンマンマ……働き始めたら、出前とか当たり前ちやうのん?」

刃羅はラーメンをすすりながら、流女将やエクレーヌに目を向ける。

それに同じく出前麺を食べていた流女将達が、少し思い出すように少し上を見ながら答える。

「事務所の方針によりますねえ。私は出前も取りますが、ヒーローによって料理人を雇う者もいますよ。雄英のランチラッシュのような料理好きのサイドキックもいますからね」

「弁当だったり、外食も多いね。パトロール中に食べさせて頂く事も

多いしね」

「助かりますよね。申し訳ないですけど」

「まあ、人気があるっていうか支持されてるヒーローだからこそだけどな」

「私達はエクレーヌさんのおこぼれみたいなものだからね」

「……ありがたい」

その言葉に刃羅達は頷いて、刃羅は百を見る。

「ズズ……ンマンマ……ならあ百ちゃんの実家があ用意しそうだねえ」

「そこまでは……」

「ズズ……ンマンマ……入寮時の段ボールピラミッドを思い出しなはれ」

「う……」

刃羅はジト目で百を見つめながら麺をすすする。それに百は何も反論出来ずに顔を赤くする。

その内容に流女将達が首を傾げる。

刃羅は麺をすすりながら、入寮日の事を話す。

「……お金持ちは凄いわね」

「サイドキックになったら、事務所乗っ取りそうだな」

「……お金は怖い」

内容にローテリア達は呆れるしかなかった。

それに流女将やエクレーヌは苦笑するが、特に何も言わなかった。

しかし、そこに好女がぶっ込んでくる。

「乱刀さんはどうするんだい？君の実力ならサイドキックも引手数多だろうし、自分の事務所を出しても成功しそうだけど」

百やローテリア、ミラミラは顔や体が強張るのを感じる。

しかし、刃羅は何でもないように答える。

「自分の事務所になんざ興味ねえな。適当にサイドキックでもするだらうよ」

「ふむ。もったいなくも感じるねえ。私の事務所でもいいかい!？」
「死ね」

「これ以上ない断り方だね！」

好女の勧誘を切り捨てる刃羅。

それに百達は小さくホツとするが、同時に少し悲しくもなる。

今の刃羅の言葉は、ヒーローとして活動する気がないという意味でもあるからだ。事情を知らない者が聞けば、ただ欲がない、または甘く考えているだけのどちらかに捉えられるだろう。

しかし、百達からすれば違う意味となる。

「……ふむ。やはり何かきっかけというか、今までの価値観を変える出来事がないと厳しそうですね」

「しかし……それほどの出来事となると、間違いなく大事になるでしょうね。前回ののように裏で動く、というわけにはいかないでしょう」

「確かに。……ヴァルキリでも厳しいかな」

「やはり遅かったということでしょう。両親の死から、ここまで時間が経っていると親戚であろうと難しいでしょうね」

エクレーヌと流女将は刃羅を見ながら、小声で会話する。

刃羅を受け入れる事が出来ると分かった時のヴァルキリの様子を思い出すと、どうしても2人の中を取り持ちたいと思ってしまう。

それだけ刃羅の事が判明するまでのヴァルキリは、常にピリピリしていた。兜を脱いでも眉間に皺が寄っていて、笑顔などほとんど見なかった。

「まあ、もうしばらく様子を見ましよう」

「そうですね」

流女将の言葉にエクレーヌが頷く。

まずは刃羅がステインと決別すること。それが大事であると認識する2人だった。

1時間ほどすると、ヴァルキリが戻ってくる。

夕方までは事務所待機だった。

「流女将、エクレーヌ。少しいいだろうか？」

ヴァルキリに呼ばれて、流女将とエクレーヌはヴァルキリの執務室に連れていかれる。

「で?どうしたんだい?」

「先ほどサー・ナイトアイからチームアップの要請があった。死穢八齋會という指定敵団体の調査と検挙だそうだ」

「ふむ。……それだけなら行けそうだが」

「他に何かあるのですね?」

流女将の言葉にヴァルキリが頷く。

「……敵連合との接触が確認されている。決裂したらしいがな」

「……それは」

「……難しいところだね」

「話を聞いている限りでは、もう敵連合がアラジンを標的する可能性は低いと考えている。ステインが脱走し、オール・フォー・ワンと敵対した以上、ここで仲間にする理由はないだろう」

「そうだね」

ヴァルキリの推測にエクレーヌが同意する。

しかし流女将が眉間に皺を寄せて、問題点を上げる。

「しかし、決裂したことで逆に闘争が起こる可能性もある、ということですか」

「それがナイトアイの作戦をきっかけにされる可能性があるということ?」

「もちろんナイトアイの作戦次第ではあるだろうがな。林間合宿、U SJ事件を考えると馬鹿に出来ん」

「……確かに」

林間合宿の場所をどうやって突き止めたかも未だに不明であり、U SJにもどうやって時間を突き止めたのかも判明していない。

黒霧の存在により、どのタイミングでも襲撃が可能なため、一度でも接触が確認されている以上リスクがある。

「……今、一番注意すべきはステインとその仲間です。あまり危険から離しても、刃羅さんの意識を変えることは出来ません」

「……そうだが……」

「イレイザーヘッドに相談するのもありなのは?」

「それはナイトアイの作戦を聞いてからでもいいでしょう。オールマ

イトの元サイドキックだった彼とは交流もありますが、無用意な作戦を立てる人ではないですからね。刃羅さんの実力や判断力は意外と重宝されるかもしれません」

「……我々がしっかり守ればいい、か」

「そういうことです。それに……刃羅さんが参加するならば、もれなく私達も付いてきますよ?」

流女将の言葉にエクレーヌが頷き、ヴァルキリは腕を組んで唸る。

とりあえずヴァルキリは流女将の言葉通り、ナイトアイの作戦を聞いてから判断しようと決めて、しばし保留とした。

その後は通常通りのインターン通り、事務作業や活動における細かい作業について教えていく。

そして、夕暮れになり、再びパトロールに出動する。

今度は流女将の代わりにエクレーヌが護衛に就く。

「夜はやはり人目に付きにくくなる。それはヴィラン同士でも同じだ」

「厄介なことに、一番捕らえるべき連中はそういう諍いを隠れ蓑にするのさ。どうしたって私達ヒーローはまずは目に映る犯罪を収めないといけないからね。そこを利用してしまおう」

「ヒーロー飽和社会。それは必ずしも社会全てに目と手が届くというわけではない。……だからこそステインや敵連合のような者達が生まれるのだろくな。有象無象。それは残念ながら事実かもしれない」

ヴァルキリは己をヒーローとは思っていない。

なので、刃羅ほどではないが、ステインの主張にも同意する思いもあるのだ。

だからこそ、今はがむしゃらに手を伸ばす。そう決めたのである。

その時、少し先のビルで爆発が起こる。

「っ!?行くぞー!」

刃羅達は走り出す。

すると、ビルからゴロツキ風の男達とスーツを着たヤクザ風の男達が飛び出してくる。

「分かりやすい奴らじゃのー!」

「エクレーヌは反対側に出て、連中が逃げ出さないように！オトメキンは反対車線側！クリエティはここから！連中を逃がすな！」

「了解！」

「イエツサー！」

「はい！」

ヴァルキリの指示に3人はすぐさま動く。

そしてヴァルキリは刃羅に顔を向ける。

「我らはあるの中に飛び込む！行けるな!？」

「問題ない」

「行くぞ！」

ヴァルキリは柄の1つを掴み、柄を振る。すると風が渦巻き、剣を形成する。それを振り下ろし、鎌鼬のように斬撃を飛ばしてヴィラン集団の近くに当たる。

それに集団もヴァルキリ達に気づく。

「げ!?!もう来やがった!！」

「しかもヴァルキリかよ!?!」

刃羅は左手で鉄鞭を掴み、ゴロツキ風の男達に向かって振る。

「あつちはあつしが受け持つよい!！」

「無理はするなよ!！」

「無茶を言うでねえだ」

刃羅はスピードを上げて、ゴロツキ達に飛び掛かる。男達は6人いた。

「ああん!?!ガキじゃねえか! 舐めやがってえ!! やつちまえ!！」

真ん中にいたサングラスをかけているゴロツキが頭のように、周囲に指示を出す。

それにすぐさま反応して、腕を大砲に変えたり、ナイフや銃を構える男達。

すると、六本腕の巨漢の男が飛び出してくる。

刃羅は鞭を戻して、そのまま走り迫る。

「このガキがあ!！」

「ボキヤブラリーないでござるな!！」

掴みかかってきた六本腕に、刃羅は一気に懐に飛び込んで鳩尾に右肘を叩き込む。

「ぐえい!」

「はあ!!」

くの字に体を曲げて、口から胃液を吐き出す男の腕を、刃羅はすかさず抱えて背負い投げる。

背中から叩きつけられた男は仰向けに倒れる。刃羅は投げた勢いを利用して飛び上がり、空中で前転して、両足を揃えて再び男の鳩尾に踏み込む。

「ぐぼおあ!」

男は再び胃液を吐き出す。

刃羅はすぐさま駆け出して、残ったゴロツキ達に迫る。

「撃てえ!!」

サングラスの男が指示を出し、大砲や銃を発砲する。

「アラジン!」

スーツ連中と戦っていたヴァルキリが発砲音に振り返る。

好女や野次馬も慌て、中には撃たれる姿を思い浮かべて目を瞑る者もいる。

ギヤイン!ギイン!カアン!ギン!

刃羅が両腕を高速で振ると、大砲の玉が2つに割れ、銃弾が弾かれたように地面に叩きつけられる。

「は?」

「下らん。たかが大砲と銃弾如きで、余がやられるものか」

ズシャ!ズシャ!と刃羅は荒刃刃鬼を展開して、右腕をロングソード、左手指をナイフに変えて、男達を見据える。

刃羅はニイイイと口を吊り上げる。

「好きにだけ撃つがよい。全て斬り落とす!!」

「ひい!」

刃羅の形相にゴロツキ達はビビッて後ずさりながら銃を構える。

直後、両腕を鎖鎌に変えて飛ばし、2つの銃を破壊する。すかさず駆け出して、腕を戻しながら大砲の男に迫る。

「く、来るなあー！」

大砲を構えて叫ぶ。

刃羅は右腕をパルチザンに変えて、大砲を弾いて肩に突き刺す。

「ぎゃああー！」

腕を戻して、男の腹に蹴りを叩き込む。男はくの字に吹き飛んで地面を転がり倒れる。

そして残りの男達も殴り倒す。

残ったのはサングラスの男となった。

ヴァルキリの方も残り1人だった。

「なんと苛烈な……」

「あの変態獣の時とはまた違うね」

ヴァルキリと好女は刃羅の戦いに呆れるやら感心するやらであった。

サングラスの男は歯軋りをして、刃羅を睨む。

「こ、このガキがあ……ぶっ潰したるわあ!!」

男は叫ぶと、全身がロボットのような姿に変わる。

それに刃羅は少しだけ目を見開く。

「ほう。面白い『個性』ではないか」

「余裕かゴラア!!」

「余裕に決まっている。撃て、クリエティ」

ドガン!!

男が右腕を刃羅に向けるが、刃羅は涼しい顔で立っている。

直後、爆発音が響き、男はそれに目を向けると、目の前に大砲の玉が迫っていた。

「は……ぶおっ!!」

男は一瞬唾然として、装甲を凹まして砲弾に吹き飛ばされる。

ヴァルキリや好女、野次馬達が目を向けると、そこには大砲の横に立つ百がいた。

刃羅は不敵に笑って、百に目を向ける。

「良きサポートであったぞ。我が参謀」

「あくまで念のためでしたが……」

「問題なからうよ。さて、この層共の拘束は任せるぞ」

「はい！」

刃羅は振り返り、ヴァルキリが相手をしていた連中の残りに目を向ける。

残っているのは顔に傷がある坊主のスーツ男で、完全に腰が引けている。

荒刃刃鬼を解除した刃羅は、ヴァルキリの横に歩み寄る。ヴァルキリは左手に風の剣、右手にコンクリートの剣を携えていた。

「で？どうするの？」

「……うむ。もはや勝敗は決まっている！大人しくせよ！」

「うるせええ!!ここまでされて引き下されるかよ!!」

男はポケットから注射器を取り出して、自分の首に突き刺す。

プシュ!と音がした直後、男の様子が変化する。

「グガオオオオ!!」

「あれは!?!」

「ブースト薬なのです!!離れるのです!!」

「エクレーヌ!!オトメキシ!!避難範囲を広げろ！」

男は目を血走らせて叫ぶ。

その様子を百が目を見開く。

刃羅とヴァルキリがすぐさま声を上げて、指示を出しながら後ろに下がる。

直後に男の周囲の地面が盛り上がり、槍のように尖って刃羅達に襲い掛かる。

「地面操作系『個性』か！」

「妾が斬り込みます!!続きなさいませ!!」

「アラジン!?!」

刃羅が飛び出して、独楽のように高速で回転しながら突き進む。それにヴァルキリが慌てながらも背後に就く。

土の槍は刃羅に襲い掛かるも、突き刺さる前に碎かれる。ヴァルキリにも襲い掛かるが、風の剣や腕の盾で防ぐ。

「来んじやねえええ!!」

男は錯乱したように叫びながら、刃羅の目の地面を壁のように盛り上げる。

「っーアラジン!!」

「問題ありませんわ!!」

刃羅はヴァルキリの声に応えながら両腕を上げて、直角に壁に突き刺さる。

「エリセ・ランサ!!」

そして刃羅は土の壁を掘り進んで、突き破る。

男は目を見開いて固まる。

回転を止めた刃羅は素早く男の足元に飛び込んで、真上に向かって後ろ回し蹴りを放ち、男の顎を蹴り上げる。

男は仰け反って、僅かに宙に浮く。

「ぐおっ！」

「頼むで。ヴァルキリ」

刃羅が開けた穴からヴァルキリが、両手の剣を振り上げて飛び出てくる。

「本当に!!厄介な子だ!!」

そして男の両肩に剣を打ち付けて、男を地面に叩きつける。

そこに更に刃羅が払い蹴りを振り抜き、男はビルの壁にまで吹き飛んで壁にぶつかり、気を失い白目になってうつ伏せに倒れる。

男が気絶したのを確認したヴァルキリは、男達を一か所に集めて、百に縄や手錠を作らせて捕縛する。

「やれやれ。初日から大活躍だね。アラジン、クリエティ」

「先輩として鼻が高いね」

「あらっ?らんと……アラジン?どうしました?」

エクレールと好女が男達の監視を務める。

百も同じく監視をしていたが、刃羅が地面にしゃがんでいるのを見つけて近づき、声を掛ける。

「確かあ……この辺に叩きつけたはず……あつたあ」

刃羅は地面からあるものを見つけて、拾い上げる。それを百も覗き込む。

それは小さな針が付いた筒のようなものだった。筒は割れており、中身は空だった。

「これは……?」

「奴らがショットしてバレットの1つデースー!」

「よく見えてましたわね」

「はつきりとは見えてねえ。けど、形が違って見えてな。やっぱ、あれじゃ割れちまつてるか」

「どうした?」

刃羅が舌打ちすると、ヴァルキリが近づいてきた。

刃羅はヴァルキリに渡して、説明する。

「まだあるかもしれんな。奴らの拳銃にも残っているかもしれない」

「ほな、そこは任せますよって」

「もちろんだ。丁度警官も来たから、お前達はエクレーン達と事務所に戻ってくれ。流女将も戻ったら、今日は解散だ。次はクリエイティに連絡する」

「分かりました」

「へ〜い」

「2人とも。今日は素晴らしい動きだった。またよろしく頼む」

ヴァルキリの言葉に2人は頷いて、男達を警察に引き渡しているエクレーンに駆け寄っていく。

それを見送ったヴァルキリは色々と思いが頭に過ぎるが、今はこの弾丸を警察に知らせることを優先した。

その後、ヴァルキリも事務所に戻り、全員で報告書を書き上げる。

再び出前で晩御飯を食べて、刃羅達は寮に戻る。

こうして刃羅達のインターン初日は終了した。

#53 会合

インターン初回を終えて、翌日。

梅雨達も昨日帰ってきており、本日はA組全員揃っていた。

そして教室に入ると、

「刃羅！ヤオモモ！2人ともニュースに出てたよ！」

「梅雨ちゃん、麗日あすごいよー!!名前出てる!!」

「切島あ!!ネットニュースに、ヒーロー名!載ってるぞスゲエ!!」

耳郎が刃羅と百に、芦戸が梅雨と麗日に、上鳴が切島にスマホのネットニュースを見せつける。

そこには、

『衝撃デビュー!!アラジン&クリエティ!! インターン初日から敵団体を2人で易々と鎮圧!!』

『リユーキユウ事務所に新たな相棒!! お手柄!大事件も速やかに鎮圧!実力は本物!』

『新米サイドキック!レッドライオット爆誕!! 初日から市民を背負い、単独敵を鎮圧!!』

と記されていた。

それを他の者達も盛り上がり、その後ろでは爆豪が歯軋りをして悔しがっていた。

「ああ……野次馬が多かったしのお」

「それに乱刀さんはかなり暴れましたものね」

「どこから撮ったのかしら?」

「うへあく!本当だあ!嬉しい!」

「なんか恥ずいな」

刃羅はうんざりとし、百はその理由に呆れる。梅雨は現場を思い出して、どこから撮影されていたのか考え、麗日が喜んでいる。切島も頬を掻いて、恥ずかしがる。

その後は普通に授業を受ける。

数日は特に連絡もなく、通常通りに過ごしていた。

数日後の夜。

いつも通り1階のソファに女子達で集まっていると、百のスマホが鳴る。

「あら？乱刀さん、ヴァルキリからです」

「ズズ〜……ンマンマ……ほえ？」

梅雨の横でカップ麺を食べていた刃羅は、きよとんとして顔を向ける。

それに梅雨達も百に目を向ける。

百は内容を読んで、刃羅に顔を向ける。

「明日、朝に流女将が迎えに来てくださるそうですわ。コスチュームはいらないそうです」

「ズズ〜……ンマンマ……はあ？」

「ケロ？お茶子ちゃん。私達も明日じゃなかったかしら？」

「え？……あ？ホントだ!？」

百の言葉に刃羅は訝しみ、梅雨もそれに首を傾げて麗日に声を掛ける。麗日は携帯を開いて、その内容に驚く。

その事に芦戸達も首を傾げる。

「どういうこと？4人とも同じってこと？」

「緑谷さんと切島さんも同様のようです。麗日さん達も流女将が車に乗せてくれるそうですわ」

「6人も？」

「どうしたんだろ？」

「とりあえずデクくんにメールしとくー！」

「ケロ。じゃあ私は切島ちゃんにしておくわ」

何やら通常のインターンとは違う流れに、芦戸達も変にドキドキしてきてしまう。

その後、緑谷と切島も1階に降りてくる。

「連絡ありがとう」

「サンキュな！」

「ううん。大丈夫！」

「けど、なんだろうな？」

「うん……ナイトアイの事務所に集まってくることだから、ナイトアイ

が関係してるんだろうけど……」

「ケロ？ そう言えばリユーキュウも、ナイトアイのチームアップ要請があるって言ってたわ」

緑谷と梅雨の言葉に、切島と百が眉を顰める。

「つてことは、俺達もか？ けど、ファットガムは何にも言っていなかったな」

「ヴァルキリもですね」

「……ナイトアイは何を調べとるんか緑谷は知つとるんか？」

刃羅が緑谷に目を向けて尋ねる。

「え？ う、うん。死穢八斎會っていう指定敵団体を調査してたけど……」

「指定敵団体だべか……。それ関係で何かしら一気に動く必要性が出たつちゆうことだべな」

「なんだろうね？」

「まあ、明日になれば分かりますよって」

「それもそうだな」

「じゃあ、今日は早めに休みましょう」

「そうだね！」

「葉隠は関係ないでしょ」

「皆の邪魔をしないことも大事だよ！」

「確かにな！」

結論はもちろん出るわけもなく、とりあえず明日に備えて休むことにした刃羅達だった。

翌朝、刃羅達は制服で流女将が用意した車に乗って、ナイトアイの事務所に向かう。

「流女将は今日、何するかをご存知ですか？」

「いえ、私もまだ詳しくは聞いておりません。あくまでも私は刃羅さんの護衛ですしね。まあ、話し合いには参加しますが」

「なるほど」

「気になんなあ」

「ふわあ〜」

「刃羅ちゃんは相変わらずね」

「おかげで落ち着くよ」

「ですわね」

40分ほど車に揺られて、ビルの前で車が止まる。

車を降りると、ビルの前にビッグ4の姿があった。

「お！緑谷くん！車かよー！ズリーー！」

「わ」

「……」

「ああ！乙女がこんなにも！」

「す、すいません！けど、これには色々ありまして……！」

「おはようございます!!」

「ふわあ〜」

「刃羅ちゃん、しっかりと頂戴」

ビッグ4と共にビルに入り、上階の会議室に足を踏み入れる。

そこには多くのヒーロー達が顔を揃えていた。

その中には相澤やグラントリノもいた。

「グラントリノに相澤先生……!?!」

「おお！坊主じゃねえか。それに……」

グラントリノは緑谷を見て笑みを浮かべて、そして刃羅に目を移す。

刃羅はその視線に特に反応せずに、気だるげに立っている。

「あ、グラントリノは乱刀さんのこと……」

「まあ、簡単にな。安心しな。話す気はない」

「ありがとうございます」

そこにガシャガシャと音を響かせて、ヴァルキリとエクレーヌが刃羅に近づく。

「おはよう。アラジン、クリエティ」

「おはようございますわ」

「ども」

「すまないな。突然の連絡となった」

「いえ、大丈夫です」

「それにしても何なのだ？これは。リユーキユウにファットガムを始め、トップからマイナーまでヒーローをこんなにも。しかも地域もバラバラではないか」

「すぐに話があるよ」

刃羅は会議室の面々を見渡して、ヴァルキリに尋ねる。

それにはエクレーヌが答え、それと同時に眼鏡をかけたスーツの男が会議室に現れる。

サー・ナイトアイ。

オールマイトの元サイドキックで、今回の発起人である。

「お待たせしました。それでは始めましょう」

その言葉にゾロゾロとテーブルに座っていく。

刃羅達はインター先の合わせて分かれて座る。

刃羅達はナイトアイの正面に座る。左手には相澤とグラントリノ、右手にはリユーキユウ、ねじれ、梅雨に麗日が座る。

そして会議が始まる。

きっかけはある強盗団の事故だった。その強盗団は現金を奪って、逃走中に死穢八齋會と接触。車は炎上などしていたのに負傷者は0。強盗団の怪我がきれいに治っており、逮捕も出来たことで警察は問題視しなかったが、現金が消えていることが発覚した。

それによりナイトアイ達は調査を開始。すると死穢八齋會が金と他の指定敵団体を集めてたり、会合する姿が目撃されていた。

なんと敵連合との接触も確認されている。しかし、どうやら決裂したようで衝突があったことが確認されている。

そのためグラントリノが招集されたそうだ。

「さらに八齋會は認可されていない薬をシノギの1つにしていたことがあります。それ故にファットガムに協力を要請しました」

その言葉と同時にファットガムが立ち上がる。

「どーも！ファットガムです！よろしくねー！」

「丸くてかわいい！」

「お、アメちゃんいるか？」

ファットガムの自己紹介に、梅雨と麗日が感想を言う。それにファットガムがポケットから飴玉を取り出した。

「で、俺は昔はそういうんをゴリゴリ、ぶっ潰しとりました！それで先日のレットドライオットのデビュー戦!!今まで見たことのない種類の薬が環に打ち込まれた!!」

その言葉と同時にファットガムは飴玉を握り潰す。

『個性』を壊す【薬】

その言葉にざわつく出席者達。

刃羅は目を鋭くして、ヴァルキリに目を向ける。

「……先日、捕まえた連中のあの弾丸は、それかいな？」

「……ああ」

ヴァルキリは刃羅の言葉に頷く。

撃たれた環は翌朝には回復したそうで、それに周囲は少しホツとする。

「回復すんなら安心だな。致命傷にならねえ」

褐色肌のドレッドヘアのヒーロー、ロックロックが声を上げる。

それに周囲も頷いていると、

「どこが安心なんじゃ」

「ああ？」

「ら、乱刀さん……!？」

刃羅の声が響き、ヒーロー達が刃羅に注目する。

百は慌てるが、刃羅は変わらずに腕を組んで呆れたように、声を上げたロックロックを見ていた。

「なんだと？実際回復してるんだ。問題ねえだろうが」

「それを八斎會が使っているならば、な」

「なあ？」

「分からないのかね？一晩とはいえ『個性』を壊す薬が入った弾丸を、そこらへんのチンピラや敵グループが所持しているのだよ。製造元はすでに量産できる体制にある。つまり……八斎會では完全に破壊する薬が出来ていてもおかしくはない」

『っ!？』

刃羅の言葉にほとんどのヒーローが目を見開く。もちろん緑谷達も。

ナイトアイとファットガムは刃羅の言葉に頷いて、話を進める。

「そういうこっちゃ。そして、その事件で切島君が身を挺して弾いたおかげで、中身が入った1発が手に入ったんや!」

「俺が!」

ファットガムの言葉に切島が驚く。

ただどういふことかはよく分かってはいない。

「そうや!!お手柄やで!けど……その中身はむっちゃ気色悪いもんやった」

ファットガムは誇らしく頷くが、すぐに顔を真顔にして周囲を見渡す。

そして次の言葉で全員の背筋に怖気が走る。

「人の細胞や血が入った」

『!』

「えええ……!」

「別世界のお話のよう……」

「そんな……!」

そこにリューキュウが声を上げる。

「つまり……その効果は人由来……『個性』ってこと?」

「そうだとして、それが八斎會が元であるという根拠は?」

ヴァルキリも声を上げる。

それにファットガムが話を続ける。

「残念ながら、切島君が捕らえた男のは八斎會が捌いた証拠はないけど、その中間売買組織の1つと八斎會は交流があった」

「少し根拠には弱いのでは?」

流女将も流石に眉を顰める。

それにナイトアイも頷いて、説明を引き継ぐ。

「先日リューキュウ、そしてヴァルキリ達が対峙した敵グループの抗争。その片方のグループの元締めが、それぞれ交流がある中間売買組織だった」

「最近多発している組織的犯行の多くは、八斎會に繋げようと思えば繋げるのか」

「けど、まだこじつけだねえ。疑惑の範囲を抜け出さないよ」

ヒーローの一人の言葉に、エクレーヌが証拠不十分だと異議を出す。

それに数名が同意するように頷く。

「若頭、治崎の『個性』は《オーバーホール》。対象の分解と修復が可能です。分解……一度『壊し』『治す』力。それに『個性』を破壊する弾」

ナイトアイは隣のミリオと緑谷に目を向ける。

2人は顔を真っ青にして、顔を俯かせている。

「治崎には娘がいる。出生届もなく詳細は不明ですが、この2人が遭遇した時には手足に夥しく包帯が巻かれていたそうです」

その言葉に、刃羅から一瞬殺気が噴き出す。

それに全員がバツ！と顔を向けるが、刃羅は顔を俯かせて黙っていた。

「アラジン……」

「だ、大丈夫ですか？」

「……確証はあるんだろうなあ？ナイトアイ。ああ？」

「お、おい。どうしたんだよ……!?!」

ヴアルキリと百が声を掛けるが、刃羅はそれを無視してナイトアイに話しかける。

その様子に切島も慌てるが、他の者達もナイトアイに顔を向ける。

「答えよ。その娘の体が弾丸の材料であるという確証があつて、ここに集めたのだろう!?!」

『!?!』

刃羅の怒りの言葉に、梅雨、麗日、切島もようやく理解をした。

百は刃羅と同じく気づいたが、流石に問い詰める勇氣は出なかった。信じたくなかったからだ。

「……確証はない」

「……じゃあ、どうするのだ?」

ナイトアイの言葉にヴァルキリが声を上げる。

「実際に売買しているのかも分かりません。しかし、先ほど言った通り、この動きが完全に『個性』を壊すモノの完成だとしたら？悪事のアイデアはいくらでも湧いて出る。しかし……少しでも疑いがあるなら、逆にここで動かなければ、それこそ手遅れになる」

ナイトアイの言葉にロックロックが、緑谷達を見て舌打ちする。

「こいつらが保護しておけば一発解決だったんじゃないの？」

「それは私のミスだ。2人を責めないで頂きたい。その時はまだ娘の存在すらも知らなかった。それでも2人はその娘を救おうと行動したのです」

ナイトアイのフォローに緑谷とミリオは立ち上がる。

「今度こそ必ずエリちゃんを……保護する!!」

「それが私達の目的になります」

2人の力強い言葉にナイトアイが頷きながら、今回の作戦の目的を宣言する。

それに誰も異論を唱えることはない。

「ケツ、ガキがイキるのもいいけどよ。推測通りならその娘は隠しておきたかった核なんだろ？それがどういうわけか出て、ヒーローに目撃されたわけだ」

ロックロックが僅かに顔を顰めながら、問題点を上げる。

「素直に本拠地に置いとくか？俺なら置かない。どこにいるのか確定してんのか？」

「確かに。そこは怎うなの？ナイトアイ」

リユークユウも同意して、ナイトアイに尋ねる。

するとナイトアイの後ろのモニターに映された地図にマーカーが出現する。

「八齋會と接点のある組織・グループ、および八齋會の持つ土地。可能な限り洗い出し、リストアップしました！皆さんには各自その箇所を探って頂き、拠点となりえるポイントを探って頂きたい!!」

ナイトアイの言葉に、数名のヒーローが納得したように頷く。

彼らはリストアップされた土地に詳しいヒーローだった。

「オールマイトの元サイドキックのわりに随分慎重やな!!回りにくいわ!!こうしてる間にもエリちゃん言う子、泣いてるかもしれないよ!!」

「我々はオールマイトではない。だからこそ分析と予測を重ね、助けられる可能性を100%に近づけなければ」

ファットガムが怒鳴るが、ナイトアイは冷静に反論する。

そこに相澤が手を上げる。

「どういう性能が存じませんが、サー・ナイトアイ。未来を《予知》できるなら俺達の行く末を見ればいいじゃないですか?このままでは少々……合理性に欠ける」

「それは……できない」

「?」

ナイトアイの言葉に全員が首を捻る。

「私の予知性能ですが、一度発動すると24時間のインターバルを要する。つまり1日1時間1人しか見ることが出来ない」

ナイトアイの『個性』《予知》はフラッシュバックのように一コマ一コマは脳裏に映される。発動してから1時間、相手の生涯を記録したフィルムのようなものが見られる。

ただし、そのフィルムは対象となった者の行動と周辺状況しか映さない。

その言葉に相澤は更に首を傾げる。

「いや、それでも十分色々分かるでしょう。出来ないとはどういうことなんですか?」

その言葉にナイトアイは少し黙り込んで、手で眼鏡を覆う。

「例えば、その人物に近い将来。死。ただ無慈悲な死が待っていたら、どうします?」

ナイトアイは思い詰めたように言葉を捻り出す。

その言葉にヒーロー達は訝しむ。

(……死が待っているならあ回避できるようにいすればいいよねえ? ……ん?あれえ?じゃあ、なんでえオールマイトはあ引退することになったのお?神野の事件もお防げたよねえ……まさかあ……)

刃羅はナイトアイの《予知》における最悪の欠点に気づいてしまう。そこにロックロックが声を上げる。

「はあ!? 死だつて情報だろう!?! そうならねえ為の対策が講じられるぜ!?!」

「占いとは違う。回避できる確証はない!」

ロックロックの言葉を強く否定するナイトアイの言葉に、刃羅は自分の推測が事実であると理解する。

「ナイトアイ! よく分かんねえな! いいぜ! 俺を見てやろ! いくらでも見てやるよ!」

ガアン!!

ロックロックが更に強気に言葉を発した直後、会議室に音が響く。全員が目を向けると刃羅が机に拳を叩きつけて、机を凹ませていた。

「っ! またお前かよ!?!?!」

「いい加減、黙れ」

「ああ? んだとお?」

「今のナイトアイの言葉で何も気づかぬ愚か者がイキるな!!!」

刃羅がロックロックに向かって怒鳴る。

その気迫に全員が目を見開いて固まる。

ロックロックは顔を顰める。

「……………てめえは分かったのかよ……………?」

「ナイトアイは誰のサイドキックか知っておるか?」

「オールマイトだろ? 馬鹿にすんのも……………!?!」

「じゃあ、そのオールマイトは、何故引退するほどの怪我をしたのよ?

《予知》が出来る相棒がいたのに」

『!?!』

刃羅の言葉に再びロックロックは目を見開いて固まる。

刃羅は顔を顰めたまま、ナイトアイに目を向ける。

「今まで死を見た者は、どんな策を講じても必ず死んだ。違うか? それで、その中にオールマイトがいたのだろうか?」

「……」

「お前がサイドキックをやめたのは、怪我をして、死を知り、神野のことも知ったからではないか？ オールマイトを引き留めたのだろうか？ しかし、やはりオールマイトは止まらなかつた」

「……」

ナイトアイは苦し気に顔を顰めて俯く。

その様子に全員が刃羅の言葉が正しいと理解する。

「そうなると下手に《予知》をして、失敗や死の未来を見るのは出来る限り避けたいのであるな？ 何故なら、ここににいる者達は《予知》されること前提の未来を歩むことになるからである。君はその未来を見る。その未来が失敗と死だったら？ 作戦そのものが破綻する可能性が出るのであるな」

「……その通りだ」

ナイトアイは絞り出すように、刃羅の言葉を肯定する。

「何度も何度も試した。しかし、結局何も変わらなかつた。変わっても長くて数分。フィルムが追加されただけで、帳尻合わせのように元の流れに戻る。分岐したことは……ない」

「……そんな……!?!」

ナイトアイの言葉に緑谷は何やら絶望的な表情を浮かべる。

刃羅はその様子に、緑谷もオールマイトの死が《予知》されていることを知っているのだろうと推測する。

「私は思った。『もしかしたら私が見ることで未来が確定するのではないか？』と。だから私は必要最低限しか使わないことに決めた」

ナイトアイの推測を否定出来る者は誰もいない。

死が訪れると分かっており、それを阻止するために全力で動いても、結局死んでしまう。

その絶望は計り知れない。

「理由は理解したわ。その懸念も十分に考えるべきもの。未だに否定することが出来ないなら、確かに不用意に《予知》は私達に使うべきではないわ」

「……そやな」

リユーキュウが流れを戻すように声を上げる。ファットガムも頷いて、椅子に座る。

「……アラジン。お前も座れ」

「……」

ヴァルキリの呼びかけに、刃羅は大人しく座る。

「とりあえず、やりましょう。最重要なのは『困っている女の子がいる』ってこと。それが判明している以上、ヒーローとして動かないという選択肢はないわ」

リユーキュウの言葉に、顔を強張らせながらも頷く一同。

その後、資料が配られて一時解散となる。

刃羅や緑谷達は1階のテーブルがあるスペースに集まっていた。

そして、そこで緑谷とミリオから少女との遭遇した時の話を聞く。話を聞いた切島や麗日は、その時の緑谷達の悔しさを想像して、顔を顰める。

刃羅は椅子に腕を組んで目を瞑っている。

その様子を梅雨と百は心配そうに見つめている。

そこにエレベーターから相澤、流女将、エクレーヌが現れる。

「……通夜でもしてんのか」

「まあ、緑谷君達は仕方がないでしょう」

「あそこで悔しがらないヒーローはいないだろうね」

「先生！」

「あ、学外ではイレイザーヘッドで通せ」

緑谷達の所にゆつくりと近づく相澤達。

「まあ、しかし……今日は君達のインターン中止を提言するつもりだったんだがなあ……」

『!!』

相澤の言葉に切島達は目を見開く。

切島が慌てて立ち上がる。

「ええ!?今更何で!!」

「連合が関わってくる可能性がある」と聞かされたら。そうなる話が
変わってくる」

相澤の言葉に悔し気に顔を顰める緑谷。

その様子に相澤は後頭部を掻きながら、話を続ける。

「ただなあ……緑谷、乱刀。お前達はまだ俺の信頼を取り戻せてないんだよなあ」

「っー」

「……」

緑谷はハッ!とし、刃羅は僅かに目を開いて相澤を見る。

切島も入寮時の相澤の言葉を思い出す。

梅雨や百は刃羅の首にあるチョーカーを見る。

「けど……ここで止めたらお前達はまた飛び出してしまうと、俺は確信してしまった」

相澤は緑谷と刃羅を見る。

「俺達が見ておく。するなら正規の活動をしよう。緑谷、乱刀」

「そうですね」

「そのための私達だからね」

流女将とエクレーヌも相澤の言葉に頷く。

相澤は緑谷の頭にポン!と手を置く。

「気休めを言う。掴み損ねたその手は、エリちゃんにとって必ずしも絶望だったとは限らない。前を向いて行こう」

「……はい!!」

相澤の言葉に緑谷は力強く頷く。

その様子を見て、環もミリオに声を掛ける。

「ミリオ……顔を上げてくれ」

「ねえ、私知ってるの。ねえ、通形。後悔して落ち込んでてもね、仕方がないんだよ!知ってた!」

「悪いが私は獣を慰める趣味はないよ。取り戻したいなら、ちゃんと自分でやるんだね」

「……ああ!!」

環達の言葉にミリオも頷いて顔を上げる。

「……とは言ってもだ」

「？」

「プロと同等か、それ以上の実力を持つビッグ4と……乱刀はともかく、緑谷やお前達の役割は薄いと思う。八百万、蛙吹、麗日、切島、お前達は自分の意志でここに居るわけじゃない。どうしたい？」

相澤の言葉に麗日が立ち上がる。

「先つ……イレイザーヘッド！あんな話を聞かされて、やつぱやめとしましよとはいきません……！」

「イレイザーがダメと言わないなら……お手伝いさせてほしいわ。小さな女の子を傷つけるなんて許せないもの。それに……刃羅ちゃんを放っておくのも出来ないわ」

「その通りです！助けを求める声に応える！それこそがヒーローですわ！貸せる力がある以上、貸さないわけにはいきません！それに私は乱刀さんの監督役です！乱刀さんが行くのに、私が行かないわけにはいきません！」

「俺らの力が少しでもその子の為になんのなら!!やるぜ!!イレイザーヘッド!!」

「分かっているなら良い。……乱刀、お前もいいな？」

相澤は切島達の言葉に頷いて、刃羅に目を向ける。

刃羅は俯いたまま、声を上げる。

「聞くまでもないでしょう？イレイザーヘッド。助けを求めることすら諦めかけている少女を目の前に、私が我慢出来ると思ってるの？」

「……」

「刃羅ちゃん……」

「もし私を止める気なら、その瞬間私はこのムカつく発信機を斬り落として、治崎を殺しに行くわ」

ゾワァ！と再び刃羅から殺気が噴き出す。

『っ……っ！』

「上の連中に伝えときなさい。不甲斐ない結果を出そうものなら、私は容赦なく治崎を殺す。敵連合や逮捕なんて知ったことじゃないわ」

ギロリと鋭い視線を相澤に向ける刃羅。

それに相澤は顔を顰めるが、止めようもない状況であることにため息を吐く。

そこにヴァルキリ、リューキユウ、ファットガムが顔を出す。

「……なんや随分と殺気立つとるな」

「……アラジン」

「……確かに今回の話は、あの子には荷が重いかしら」

相澤は3人に目を向ける。

「とりあえず、1年生も作戦に参加します。もちろんあくまでもエリちゃん救出が目的で、それ以上は手を出させません」

「了解や」

「うむ」

「分かってるわ」

「基本的にはインターンの事務所で動きます。流女将とエクレーヌは引き続き、乱刀をお願いします。敵連合は来なくても、他の連中が来るかもしれないので」

「はい」

「もちろん」

「それについては心配せんでよろしおす」

「なに？」

刃羅の言葉に相澤達は訝しむ。

刃羅は百に手を差し出す。

「スマホ、貸してほしいのです」

「え？」

刃羅の言葉に、百は戸惑い相澤に目を向ける。

相澤は少し考え込んで、小さく頷く。

それを確認した百は、スマホを取り出して刃羅に手渡す。

受け取った刃羅はスマホを操作すると、それをテーブルの上に置く。

プルルルル！プルルルル！

「電話？しかもスピーカー？」

「しばらく黙ってるや」

「え？」

『ハイ。ドナタ様デシヨウカ？』

「「!?」」」

切島が首を傾げると、刃羅が指示を出す、それに周囲が首を傾げた直後、スマホから変声機を通した声が響く。

それに相澤達は目を見開くが、刃羅はそれを無視して通話を始める。

「この前はいきなりやってくれたでありますな」

『……刃羅サンデスカ?』

「そうやで」

『……何用デ?オ支払い頂ケルノデ?』

「もうそれはいいよ。お師匠にでも頼まれたんでしょ?私を雄英にく戻しやすいようにって〜とこかな〜?」

『……ヨク分カリマシタネ』

会話の内容に目を見開く相澤達。

「じゃあ、もう私に手を出す気はないわね?」

『ソウデスネ。当分ハ静観スル予定デシタ。ヴァルキリノ所ニ行カレテイルヨウデスシ』

「まあ。ところで死穢八斎會の情報はないかのう?ちよつとその辺でひと悶着ありそうでの」

『……八斎會デスカ』

「テメエとは交流ねえだろ?けど、情報くらいは集めてんだろ?『個性』を壊す薬とかよ」

『エエ。アレハ少々厄介デスカラネ。確カニアノ薬ハ八斎會ガ出所ノヨウデス』

「中身は?治崎の娘だべか?」

『娘?血縁関係マデハ知りマセンガ、少女ヲ利用シテイルノハ摺ンデイマス。緑谷君デシタカ?彼ガ接触シタノモ知ツテイマス』

「その後お、逃げたとかあ知らない?」

『……多分逃ゲテハイナイデショウ。本拠地ノ地下ニ隠シ施設ガアリマス。マダソコニイルハズデス』

ドクトラの情報に頷く刃羅。

「おおきに。近々暴れるさかい。駒がおるなら逃がしや」

『分カリマシタ』

「で！気づいてるだろうけど、この会話聞かれてるから！この番号消しといてねー！じゃー！」

『……ハア。仕返シニシテハ悪質デスヨ。デハ、頑張ツテクダサイ』
ブツツ！ツー！ツー！

通話が終わり、刃羅はスマホを手にとって、番号を消去して百に返す。

「センキュー」

「……今のは誰ですか？」

「知り合アル。情報通だし、武器も扱てるからネ。お得意さんアル」
刃羅のあつけらかなとした態度に、百は啞然とするしかなかった。

刃羅は相澤達に顔を向ける。

「ほれ、何をしとるんじゃ？早うナイトアイに伝えに行かぬか。それとも警戒態勢はいらんじゃろ？狙われることはないと分かったしの」

「……お前な……」

「なんか聞いとる話と違わへんか？」

パタパタと手を振る刃羅に、相澤は手で顔を覆い、流女将とエクレーヌも頭を抱える。

それにファットガムが首を傾げ、ミリオ達やリューキュウも頷くが、相澤達は何も言えなかった。

エクレーヌは盛大にため息を吐いて、相澤達に顔を向ける。

「はあく……とりあえず、ナイトアイ達に伝えてくるよ。重要な情報なのは間違いないしね」

「すまない」

「お願いします」

「アラジンについては任せるよ。違う問題が発生したようだしね」

エクレーヌは苦笑しながら、エレベーターに向かう。

それを見送ったりリューキュウは、相澤達に顔を向ける。

「説明はしてもらえらわよね？流石に今の電話は学生だからと見逃せるものではないわよ」

「……」

「あつしが話すかよい？」

「刃羅ちゃんは黙ってて」

相澤が顔を顰め、どう話すべきか考えていると、刃羅が声を上げる。それに梅雨が真顔で押さえつけるが、刃羅は肩を竦めるだけだった。

「私の事だろうか？我が話すのが筋だ。別に問題視されるなら、ここから去るだけだ」

「刃羅ちゃん!!」

「乱刀さん!!」

梅雨と百が叫びながら立ち上がる。

その様子にリユーキュウ達はかなり厄介事のようにだと察する。

「どうするのだ？イレイザーヘッド。我はアラジンの力は借りるべきだと思うが？」

「ヴァルキリ……」

「ここでアラジンが離脱すると、それこそ敵が増えるぞ。情報源はともかく、今の情報が重要であるのは疑いようがない」

ヴァルキリの言葉に相澤は盛大に顔を顰めて唸る。

「とりあえず話聞かせんかい？切島君は知つとるんか？」

「え!?!い、いや……そのお……」

ファットガムは眉を顰めながら、切島に詰め寄る。

切島は冷や汗を流して、しどろもどろになる。

相澤はため息を吐いて、リユーキュウ達に顔を向ける。

「他言無用でお願いします」

そして相澤は刃羅の事を説明する。

両親の事、オール・フォー・ワンの事、ステインとの関係と神野区以降の事。

その話を聞いたリユーキュウ達は目を見開いて、刃羅を見る。

「……それは一概に問題とは言えないわねえ」

「せやな」

「問題はステインとの関係よね」

「アラジンは雄英に入り、仮免を取得出来ている。我らとて時には命を奪ってしまうこともあるし、救えない命もある。悪の元にいたから悪であると決めつけることは出来ぬ。それではヴィランの子供は永遠に救われぬではないか。その者達を見捨ててヒーローなど名乗れるものか」

「ヴァルキリ……」

ヴァルキリは腕を組んで、力強く語る。

リユーキユウはヴァルキリやエクレーヌとは年齢が近いので、交流が多かった。なのでヴァルキリが苦悩していたことも知っていた。

刃羅は肩を竦める。

「問題にしたけりやすければいい。俺たちは別にヒーローでなくてもいい。ヴィランと呼びたけりや呼べ。糾弾される覚悟なんざとつくに出来てつかんな」

刃羅の迷いが無い瞳に、緑谷達は改めて刃羅の覚悟の強さを思い知る。

「エリって子は間違いなく、私以上の苦しみを味わっている。それを救うためなら、血を浴びることも流すことも厭わないわ。だから……絶対に救ける」

自分に誓うように言葉を紡ぐ刃羅に、緑谷達も力強く頷く。

こうして刃羅達はエリ救出に向けて、準備を始めるのだった。

#54 突撃

刃羅からの情報提供を受けて、ナイトアイは最終確認に入った。本当にまだいるのかという確証がなかったからである。

更によえば、刃羅の情報源も問題だったため、むしろ調査内容は増えたと言っている。

かなり貴重な情報ではあったが。

そして、相澤やヴァルキリから聞いた刃羅の詳細についても頭を悩ませていた。

ステインの弟子であり、未だ刃羅はその思想に傾倒している。だがヒーローへの想いも人一倍強く、決して悪ではない。

しかし、だからこそ必要以上の覚悟を備えている。

弱き命を救うためならば、悪の命を奪う覚悟。

それは今のヒーロー社会としては、とても危うい覚悟である。

しかし、もう刃羅本人は降りる気はないという。

ヴァルキリや流女将達が監視するとは言いが、話を聞いている限りでは抑えきれぬかどうかは怪しい。

「……しかし、あの推察力と判断力は捨てがたい。実力はミリオに劣らず、経験はミリオに勝る。緑谷は言わずもがな」

少なくとも現段階では裏切る心配はない。

しかし、そう思っているとしても、やはり不安ではある。

「それを言ったら、まずは高校生を連れていくのを止めるべきか……」
ナイトアイはミリオと緑谷を連れていく気である時点で、刃羅は駄目など言えるわけがない。

そう考えて、思考を切り替えるのだった。

「サー。失礼します！」

サイドキックのバブルガールが報告書を纏めて、部屋に入ってきた。

「報告を」

「はい！各地の調査ではやはり連中は大きな動きは見せていません。確認されている構成員は本拠地にて活動を続けています。ただ、治崎

達の姿までは確認出来ていません。例の娘と思われる少女もです」

「……やはり隙は減ったか」

僅かに眉間に皺を寄せる。

「……外出した構成員はいるか？デパートやスーパーなどに」

「え？あ、はい！……構成員の1人がデパートに入ったそうです」

バブルガールがスマホを確認しながら報告し、それを聞いたナイトアイは椅子から立ち上がる。

「行くぞ」

「はい！」

バブルガールは理由も聞かずに頷いて、ナイトアイに続く。

作戦決行への準備は着実に進んでいたのであった。

懐理の居場所が確定するまで、刃羅達はいつも通りの学校生活を過ごすことになった。

ただし、インターンについては口外禁止となった。

もちろん、刃羅がもう襲撃される心配がなくなったことも。

ちなみに刃羅の警戒態勢は結局解除されることはなかった。

「なんでやねん！」

「襲撃の恐れは無くなったが、お前が逃げ出す可能性は一切消えていない。むしろ高まっただろうが。外せるわけねえだろ」

「シーーーーット!!」

「ということ、蛙吹、八百万。引き続き頼むぞ」

「はい」

ということである。

なので、刃羅達は今もヒーロー基礎学の訓練中だった。

作戦に向けて気合が入っているのか、緑谷や切島達は普段以上に訓練に臨んでいた。

「なんかインターン組の動きがキレてる」

「外で何か掴みやがったなあ!!オイコラ、言いやがれ！」

爆豪が悔し気に叫ぶが、もちろん言えるわけもない。

切島達の様子を刃羅は呆れ気味に眺めていた。

「……気合を入れるのは構わんがのう。その前に体を壊しても知らんぞい」

「刃羅ちゃんはいつの間にやら冷めてるね!？」

「あれだけ先生達に言い放ったのに……」

麗日と緑谷は刃羅の雰囲気困惑していた。

刃羅は肩を竦めて、気だるげに答える。

「あまり気合を入れ続けてもお本番まで保たないからねえ。あくまで体を鈍らせずう壊さない範囲でやらないとねえ」

「ケロ。それもそうね」

「確かに下手に体を痛めては足手まといになるだけですわね」

刃羅の言葉に梅雨と百は納得するように頷く。

「まあ、どうせ緑谷や切島は動かなければ落ち着かんのだろうがな」

「……うん。やっぱりね……」

どうしても緑谷は懐理やオールマイトの予知について気になってしまう。

それを少しでも振り払いたかった。

刃羅は少しだけ目を鋭くして、緑谷の頭をスパァン!と叩く。

「イタイツ!？」

「……後悔を引きずる暇があるなら、絶対に助けられるように備えることに集中なさい。今回は林間合宿のように相手はそう簡単に逃げるわけではないし、神野区のように『平和の象徴』は来ないのよ。分かっているの?」

「っ!!」

「あんたがあの子の『平和の象徴』になるの。あんたが憧れてるヒーローは、こういう時どういう顔をしてたか思い出しなさい」

刃羅の言葉に緑谷は呆然としていたが、すぐにオールマイトの笑顔とある言葉を思い出す。

『私が笑うのは人々を安心させるためだけではなく、ヒーローの重圧、そして内から湧く恐怖から己を欺くためさ』

それが『平和の象徴』としての在り方。

緑谷が憧れた最高のヒーロー。

「……うんー」

緑谷は歪な笑みを浮かべて頷いた。

それに刃羅は小さく頷く。

刃羅の言葉と緑谷の表情に梅雨達も改めて覚悟を決める。

その後も表情や雰囲気はまだ固いが、いつも通りに過ごそうとする緑谷達。

飯田や轟、芦戸達もその雰囲気を感じ取り、出来る限りいつも通りに接し、されど少しでも元気になれるようにしてくれた。

仲間の温かい思いに感謝しながら過ごして、2日。

その深夜に緑谷達インターン組の携帯に連絡が入る。

刃羅達は1階に集まり、顔を見合わせる。

「来たか!？」

「うん……!」

「ケロ」

「……いよいよ、ですわね」

決行日が遂に決まった。

調査の結果、治崎と懐理は本拠地の地下にいる事が判明した。

更にはナイトアイの《予知》により、懐理がいる部屋までの経路も判明した。

そして、当日早朝。

刃羅達はコスチュームに着替えて、警察署前に集まっていた。

「経路が判明しているとはいえ、『個性』を駆使されれば搜索は難航する。そこで分かる範囲だが八斎會の登録『個性』をリストアップしておいた。頭に入れといてくれ!」

強面スーツの刑事がヒーローにリストを配る。

刃羅と百は流女将と共にリストを見る。

「……屋内となると厄介な『個性』が多いでござるな」

「そうですわね」

「アラジン、クリエティ」

ヴァルキリが近づいてきて、2人に声を掛ける。

「お前達は我と流女将と動く。エクレーヌ達は状況に合わせて警察への援護に回る」

「了解だべ」

「はい」

「オトメキシ。後輩を頼むぞ」

「私の方が足を引っ張りそうですがね」

好女はヴァルキリの言葉に苦笑する。

少し離れたところでは少し興奮気味の切島が緑谷に声を掛けていた。

「プロ、皆落ち着いてんな。慣れかな？」

「皆……グラントリノは？」

緑谷は周囲を見渡す。しかし、この前までいたグラントリノの姿が見えなかった。

それにナイトアイが答える。

「あの人は来れなくなったそうだ。敵連合の方で動きがあつたらしい」

「そうですか……」

「八齋會と敵連合、一気に捕まったりしてな！」

「それだ。っし……！」

切島の励ますような言葉に緑谷も笑みを浮かべて頷き、気合を入れ直す。

そこに相澤が近づいてくる。

「おい」

「あいつレイザーヘッド！」

相澤と呼びそうになって、無理矢理言い直す緑谷。

「俺はナイトアイ事務所と動く。意味分かるな？」

「はい……！」

ヴァルキリと刃羅のように、相澤が緑谷の監督役になる。

その意味に気づいて緑谷は頷く。

そして、刑事がヒーロー達に向かって声を掛ける。

「ヒーロー。多少手荒になっても構わない。少しでも怪しい素振りや反抗の意志見えたら、すぐに対応を頼む。相手は仮にも今日まで生き延びた極道者。くれぐれも気を緩めずに各員の仕事を全うしてほしい！それでは、出動!!」

刑事の号令と共に警察官達やヒーロー達がそれぞれのバスに乗り込み、移動を開始する。

と言っても移動は30分もかからず、八斎會の事務所兼邸宅に到着する。

速やかに展開して、和風の門の前に整列する。

「緑谷君！いいよいよだね……!」

「はい……!」

ミリオと緑谷が両手を握り締めて、門の向こうの建物を睨みつける。

刑事が令状を手にして、ヒーロー達に向く。

「令状読み上げたらダーツと行くんで！速やかにお願いします」

「ケツ。しつこいな。信頼されてねえのか」

「そういう意味やないやろ。いじわるやな」

ロックロックが不満そうに愚痴り、ファットガムが注意する。

そして、刑事が門横のチャイムへと歩み寄ろうとする。

「……待てや、ポリ公」

そこに刃羅が声を上げて、歩き出す。

「ら、アラジン……!?!」

「アラジン、どうした?」

百とヴァルキリが呼びかける。他の者達も訝しむように刃羅に目を向けて、刑事も足を止める。

「なんだ?あまり、ここでもたつくわけにはいかん」

「貴様が先ほど言っていた怪しい素振りというのは、門の向こうで拳を構えている輩にも適応するのか?」

「!?!」

刃羅は門を鋭く見つめたまま、刑事に訊ねる。

その内容に全員が目を見開き、刑事は素早く門から下がる。

それと同時に刃羅が両腕を太刀に変えて、高速で両腕を振って門を細々に斬り落とす。

「ええ？いきなり門を壊すとかあ何なんですかあ？」

斬り落とされた門の奥にいたのは、拳を構えていた仮面を被った大男。

大男もまさかの行動に驚いて固まっていた。

刃羅は腕を戻して、ニイイイと笑みを浮かべる。

「戦闘態勢を確認やよつて。つまり反抗の意志アリ、やねえ」

「暴論にも程があるでしょう!!」

リユーキュウが怒鳴りながら駆け出す。

大男もすぐに復帰して刃羅に向かって殴りかかる。

「子供が何なんだよお！」

「アラジン!!」

ヴァルキリも走り出し、他のヒーロー達も動き出す。

刃羅は迫る拳をヒラリと回転しながら紙一重で躲し、大男の足元に潜り込む。そして両腕をロングソードに変えて大男の両脚を斬りつける。

「イッタア!」

「脚の腱を斬った。これでいくら活力を吸おうと、すぐには歩けんだろう」

刃羅は背中に回り、腕を戻しながら言い放つ。

大男は振り返ろうとしたが、その前に目の前に巨大な影が出現し、それに腕を掴まれる。

「っ!」

「全く……。とりあえず、ここに人員を割くのは違うでしょう。彼はリユーキュウ事務所で対処します。皆は引き続き仕事を」

大男の腕を掴んでいたのは、竜の姿になったリユーキュウだった。リユーキュウは大男の腕を引いて、地面に押し倒す。

「はいー今のうちにー!」

その言葉と同時にナイトアイやファットガムが飛び込む。

梅雨、麗日、ねじれはリユーキュウのサポートとなる。

「刃羅ちゃん！あまり無茶した駄目よ！」

「デクくん！皆！気を付けてね！」

「無茶言うんじゃねえべさ」

「無茶ではない！」

「イツダア!？」

梅雨と麗日が刃羅や緑谷達に叫び、それに刃羅が呆れながら先に進もうとすると、ヴァルキリが拳骨を叩き込む。

手甲での拳骨はかなりのダメージで、ゴガアン！と鈍い音が響いた。

「お前はまだ仮免であろう！待ち構えているなら我らに任せんか!!」

「だったら、まず自分達で殺気に気づきやがれってんだゴラア!!」

「気づいたなら全員に伝えぬか!!」

「ケンカしている場合ではありません！」

言い合いをする刃羅とヴァルキリを、百が叫んで制止する。

それに呆れながらファットガムやロックロック達は敷地内に入っていく。

すると、早速構成員が出てきて、道を塞ぐように立ち塞がる。

「おおい！なんじゃテメエら！」

「勝手に上がり込んでんじゃねえぞ！」

「警察とヒーローだ!!違法薬物製造・販売の容疑で捜索令状が出ている!!」

「こてこての人だ。すげえ！」

切島が何やら変なところで感動している。

「知らんわあ!!」

構成員の男が腕を振るうと、すぐ横の樹に生えている葉が飛び出して警察に襲い掛かる。

それをヒーローの1人が全て叩き落としながら押さえ込む。

「つと！大人しくして!!」

「でけえ奴といい、怖くねえのかよ?」

ロックロックがまさかの抵抗に理解不能とばかりに叫ぶ。

それに緑谷や切島、百も内心同意する。

「アホか。極道やぞ？警察とドンパチする覚悟なんぞ盃交わした時に出来とるに決まっとるやろ。やから、ここまで生き残ってるんや」

刃羅が呆れながら言う。

「覚悟しときなよ。ここに居るのはくそこらへんのくヴィランとは違つて、自分の利益を度外視してもく向かってくる連中さ」

緑谷達はゴクリと息を呑む。

しかし、だからこそ刃羅は違和感を持つ。

「けど、治崎がそこまで忠義を捧げる奴には思えないのです……」

「治崎は若頭だ。ここに居るほとんどの組長に盃を捧げたはずだ」

「……となると、あの大男は治崎の側近なのかね？」

「ああ、治崎の側近はマスクを身に着けているとの情報がある。恐らくは構成員は組長への忠義と、治崎への恐怖があるのだろう」

ナイトアイの言葉に刃羅は納得する。

その周囲ではファットガムが呆れ、相澤、流女将はため息を吐いた。

「あの嬢ちゃん。俺らより極道理解してへんか？」

「……はあ」

「それと先ほどの戦いで、かなり違和感を植え付けたんじゃないかい？まあ、前の会合でも浮いていたけど」

エクレーヌが苦笑しながら、問題点を伝える。

殺気を察知して、一切躊躇することのない攻撃。そして、今の会話。とても仮免を取得したばかりの高校1年生とは思えないことばかりである。

「これはステインに攫われていた最中に、奴に無理矢理教えられたことであるな」

それに刃羅が取って付けたような言い訳をする。

真相を知っている百達や相澤達は呆れるが、警官やロックロックなどには説得力があった。

「そういや、お前は攫われてたんだったな」

「イエス！スリーイヤーズも一緒にいれば嫌でも覚えるデース！」

「喋り方が落ち着かねえな！」

「それは儂に言われてものう」

刃羅は肩を竦めて、スピードを上げる。

その先からは構成員達が玄関や窓から溢れるように飛び出してきていた。

まさしく刃羅の言葉を肯定するかのよう。

「その心意気や良し。……されど」

刃羅は目を鋭くして両手に鉄鞭を握って振るう。

先頭にいた構成員2人の足を払う様に鉄鞭が叩きつけられて、地面に転がる。

「ぎゃああああ!?!」

「うおおお!?!」

目の前で転んだ仲間を避け切れずに、踏んだり足を引っかけて転ぶ者達。さらに避けようとしてバランスを崩したところに後ろから突っ込んできた仲間を押されて、また折り重なるように倒れていく。「こちらも時間が惜しいでな。百! 網で寝ておる奴らを押さえるのじゃ!」

「は、はい!」

刃羅は転ばした連中を踏んで飛び越えて、百に指示を出す。

百はすぐに右腕から網を《創造》して、倒れている者達を拘束する。

刃羅は両足をコルセルカに変えて、玄関の上の壁に突き刺して固定する。

「更にはか弱い娘を救わねばならん。故に我も容赦は出来ん!」

鉄鞭を連続で振るい、構成員達を打ち倒していく。

さらにヴァルキリも柄を地面に着けて、土の大剣を作り出す。

「道を開けよ!! 打ちどころが悪くても謝らぬぞ!」

ヴァルキリは大剣を振り上げて、地面に叩きつける。

構成員達は慌てて横に跳んで躲す。

その隙を百が再び網で捕らえ、エクレーヌやフィクスマンが押さえ込む。

「数が少し多いね。ここは私達が受け持つよ!」

「頼んだ!」

エクレーヌがナイトアイに叫んで、道を塞ごうとする構成員に光弾

を放って道を作る。

ヴァルキリが大剣を突き構えで玄関に飛び掛かり、刃羅が壁から下りて両腕をトウ・ハンド・ソードに変える。

そして2人同時に扉を叩き斬る。

扉を斬り飛ばした刃羅とヴァルキリはそのまま中に飛び込む。

「む。中は空か」

「で？どこが地下への入り口アルか？」

ヴァルキリは土の大剣を解除して周囲を満たす。

刃羅も腕を戻して、続いて入ってきたナイトアイ達に顔を向けて尋ねる。

すると、相澤の捕縛布が飛んできて刃羅を縛り付ける。

「ぐべっ!？」

「気持ちには分かるが、先行し過ぎだ。いい加減にしとけ」

刃羅は斬って逃げようとするが、相澤に封じられていた。

「ムツキー!!マジキモイ!視姦ヒゲ!セクハラ親父!イシヤリヨー寄こせー!」

「アラジン!やめてください!」

「……アラジン?いい加減になさいね?」

「ひい!？」

「……視姦ヒゲ」

「ドンマイやな。これを機に見た目に気い使いや」

刃羅はバタバタと暴れながら相澤を罵倒する。

百が顔を真っ赤にして止めかかり、さらに流女将が凄みのある笑みで詰め寄ることで刃羅は顔を引きつかせて震えて大人しくなる。

相澤は地味にダメージを受けて、ファットガムがフォローのようでもフォローじゃない声かけをする。

「本当にあいつは何なんだ……」

「緑谷君。彼女は一体どれくらい性格変わるんだい?」

「いやあ……僕にももう何個あるのか……」

「武器の数だけ変わるんすよ。最近は2つ同時に使う時でも、また変わるから……」

「……なんて話にくい子なんだ」

「何言ってるんだ、ノミ。ミステリアスなところが素晴らしいし、君より凄まじく話しやすいよ」

「酷い……」

ロツクロツクが呆れて見つめており、ミリオが緑谷に質問するが緑谷も首を捻ることしか出来ない。

それに切島も小さくため息を吐きながら答えて、天喰がフードを深く被って言うと、好女がさかさず貶す。

それを横目にナイトアイが掛け軸が飾られている壁に向かう。

「ここだ」

そして花瓶が置いてある床の板敷を順番に押していく。

「これを順番に押すことで、隠し通路が開く」

ナイトアイが押し終わると壁から音がし始める。

「忍者屋敷かっつての」

「見てなければ分かんない。まだ姿を見せていない『個性』に気を付けましょう」

「……側近1人だけしか、まだ出てないでござるな」

「今頃地下で隠蔽や逃げる準備だろうな」

「自分に責任押し付けて逃げようなんて漢らしくねえ!!」

バブルガールが呆れ、センチコイルが周囲を警戒する。

開いていく壁を見ながら、解放された刃羅も目を鋭くし、相澤も頷く。

それに切島が拳を握り締めて叫び、ファットガムも頷いている。

「女の子の体を材料にしている時点で、漢と呼ぶのは疑問であるな」

「そうだな。もはや人間ということすら疑問でもある」

「ヴァルキリ。気持ちは分かれますが」

刃羅は切島の言葉に首を傾げ、ヴァルキリも同意しながら更に苛烈な事を言っつて、流女将がすぐさま咎める。内心では同意するが。

百は刃羅の腕を掴んで、飛び出さないように警戒している。

「しかし、先ほどの数を見る限りだと、地下にはそこまで人はいないはずだ」

刑事が表で暴れていた人数を思い出ながら告げる。

表にいた人数だけでもリストの7割くらいの人数がいた。

そして、通路が開ききろうとした時、

「っ！来はんで！」

刃羅が殺気を感じて叫ぶ。

それにセンチコイルが素早く構える。

「なんじゃああおどれらああ!!!」

中から3人の構成員が飛び出してきた。

センチコイルが両腕を伸ばして2人拘束する。

「1人頼む！」

その声にバブルガールが動き、残った1人を素早く押さえ込む。

「疾え！」

「追ってこないよう大人しくさせます！先行ってください！」

切島や百があまりにも無駄がない動きに目を見開く。バブルガールは床に押さえ付けながらナイトアイに先に行くように促す。

「もうすぐだ！急ぐぞ！」

ナイトアイが先行して階段を駆け下りる。

猛スピードで地下通路を進むが、何故か行き止まりに突き当たった。

「行き止まり!？」

「道合ってんだよな!？」

「説明しろ、ナイトアイ」

「俺が見てきます！」

刑事とロックロックがナイトアイに叫ぶ。そこにミリオが声を上げて、ヘルメットを脱ぎ捨てて壁をすり抜けていく。

ミリオのコスチュームはヘルメット以外は、ミリオの毛髪から作られている特別製なので脱げることはない。

ミリオはすぐに戻ってきた。

「壁で塞いであるだけです！ただ、かなり厚い壁です！」

ミリオの報告にヴァルキリとファットガムが構える。

「ふむ。随分と」

「小細工を……！」

2人が壁を壊そうとすると、それより先に緑谷と切島が飛び出す。

「来られたら困るって言ってるようなもんだ！」

「そだな！妨害出来てるつもりならめでてーな！」

そして、緑谷が蹴りを、切島が硬化した拳を叩き込む。

壁は容易く砕かれ、大きな穴が空く。

「流石ですわ！」

「っ!?!なんかいる！」

百が笑みを浮かべて切島達を称える。

その時、刃羅が上から視線を感じて叫ぶ。

それに全員がすぐに構える。

すると、床や壁がうねり出して、道を変えていく。

八齋會がいよいよ本腰を上げて、襲い掛かってきたのだった。